

ああ神様、お願いします

猫毛布

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様から銀髪オツドアイでニコポ、ナデポを授かった厨二的主人公：
：ではなくて、『分割思考』という厨二感溢れる能力を半分無理やり
付加された元変態紳士な主人公がリリカルな世界へと転生させられる！

ついでに銀髪オツドアイの厨二的転生主人公も転生するよ！

※この小説には上記のような厨二成分が多量に含まれております。
ご注意ください

アンチ・ヘイトは多分ありなのでタグ付けしてます。

なおこの小説は同タイトルにて@ノベルス様とフォレスト自己サイトにて投稿させていただいております。

蛇足ですが⇒小説ID：13205

にちよつとしたモノを書かせていただきました。

目次

00	神様に許される三つ程の願い事	1
無印期		
01	口からでた虚	3
02	タイプY	10
03	眼鏡男子と車椅子少女	19
04	肉体言語でのお話はやめましょう	26
05	当方はそのようなサービスを提供してません	35
06	名状したくないナニか	41
07	魔法少女！マジカル☆ヤガミン！	48
08	大言壮語を吐き捨てる化け物	56
09	枯渴世界を潤すらしい【嬉しい】という感情	61
10	人型触手系主人公（笑）	68
11	雑魚のクセに生意気だ	77
12	御高説には感動しましたよ	81
13	イヤーシマツタナー	87
**	※オレとなのはと管理局と	96
**	考えない自称化け物と自称英雄	112
A's期		
01	下駄箱にラブレター、果たし状、本人	116
02	プレゼントに生首四つ程いかが？	122
03	八神さんの谷間より深い反省	129
04	清濁を飲み込んでこそその美少女	135
05	さあ服を探そう	141

06	『本中毒者』の称号	146
07	暑い夏にエターナルフォースブリザード	150
08	はやて様マジ堕天使	157
09	優秀な研究員の手紙	164
10	騎士の行動、友人の行動	169
11	副委員長教室、はっじまーるよー!	174
12	触手少年! ミラクルユウちゃん!	180
13	黙つとれド阿呆	185
14	ゲエツ! 烈火の将!?	191
**	閑話・名前がまだない猫: 否、狸	197
15	早急で性急に性的要求を請求しよう	201
16	本日の営業は終了致しました	207
17	猫耳一号二号	213
18	吸血鬼の恋物語	220
19	勘違い主人公はお帰りください	228
20	お胸が大きいですねシグナムさん	235
21	公僕は嫌だねえ	241
22	落とし物は首ですか?	246
23	虚空の騎士()	255
24	俺の席ねえーから!!	261
25	御伽噺の王子様	267
26	発育不足さね、6年後出直しな!	273
27	食事は盛大に下品に音を立てて	281
28	殴り殺しても罪に問われない筈だ	288
29	「またね」と「さよなら」	293

30 巨に浪漫、貧に夢、尻に魅力 | 300

31 不善で洒落てさえない友人 | 309

32 あなたの命、私にちようだい？ | 317

33 望みを叶える魔道書、願いを守る化け物 | 326

34 私が許す | 332

35 時は19XX年！核の炎が… | 339

36 ベット内容は命と世界 | 346

37 ただいま戻りました。我が君 | 355

38 ハッピーエンドだ、ざまあみろ | 360

もし物語

IF 騙り | 364

Informal Farce. | 397

空白期くユウ編

01 ハートディスクドライブ | 415

02 殺気を隠してモノを言いな、坊や | 422

03 ジーザス：天使が悪魔に | 428

04 俺は魔法使いだ | 434

05 速攻魔法！スケープゴート!! | 439

06 要件は、短く、簡潔に、だ | 447

07 ありがとう、不運に見舞われる | 455

08 素晴らしいぞ!! | 464

09 嘘らしいぞ!! | 470

10 お、おからね! | 475

11 夕君だから仕方ない | 483

12 大切に思う大人の言葉を聴きなさい | 491

13	本当に、幸せだ	502
14	虚ろな戈を持って、遊ぶのさ	508
15	黙ってます！キリッ	515
16	化け物からの賛辞で悪いがね	525
17	私は独りでいい	536
18	吸血姫の物語	542
19	美味しそう	556
20	至極鬱陶しいね	563
21	大きな気持ちと小さな野望	568
22	やっぱり夏は冷やし素麺	575
23	『名も知れぬ研究者』の課題	580
24	運が悪い、いや、良かったのか？	587
25	英雄様よおおおおお!!	594
26	私に、数秒間を、命をください	600
27	我の名を叫んで喰われる!!	609
28	戯言にも及ばん!!	616
29	ふむ、僥倖	623
30	罪を背負う	630
31	ああ神様、お願いします	636
32	裏ログ	644
**	私と彼とアレ	649
**	罪人二人と三味線一個	653
空白期く夕編#ユウ編19話から分岐		
01	ボケを善処しよう	657
02	心配してやってるのに!!	664

03	兎は餅でも搗いてろよ	669
04	滑稽だな、まったく	676
05	女兒三日会わざれば	684
06	人間の俺、道具の彼女	690
07	失礼な。俺は変態だ	698
08	オレは悪くないッ!	705
09	君に価値は無いがね	715
10	相手の心を想う	722
11	いい夜を	729
12	中々にカナカナ	736
13	愛の告白は勘弁な	744
14	殺しアイ	753
15	殺す為の一手	761
16	オレがオレになる為に	768
17	白と銀と魔導士と英雄と	775
18	殺す為に生かし、生きる為に壊れる	785
19	クマズキン	793
20	大嫌い	802
21	許された言葉はイエスカハイ	818
22	元英雄と元犠牲と元毛布	828

00 神様に許される三つ程の願い事

「はろー、はろー、はろー。」

聞こえているようで何よりだ。

おーけー、お前らの口は文句を言うためにあるんじゃない。

俺を敬い、祈る為にあるんだ。あんだーすたん？

仕方ないから自己紹介でもしてやろう。

お前らを殺した、神様だ。泣いて喜べ。

口汚い祈りは止めろ、もつと慈しみと愛を込めて祈りな。信じる者も信じてない者もクソも似たり寄ったりだがね。

ようやく黙ったか。話を進めてやろう。

暇潰しって知ってるか？人間の人生を眺めるなんて最高だと思わないか？

そういう訳だ。お前らにはちよつとしたゲームをしてもらう。

そう、ゲーム。

安心しろ、殺し合いは先日見飽きたところだ。今回は、普通の人生をみたい。多少オカシイところはあるだろうが、お前らにはそれだけで分だ。

ああ？ニコポ？ナデポ？おーけーおーけー、お前には転生容姿とそれらを着けてやろう

ん、お前は要らんのか。つまらんんな。分割思考でもぶちこんでやるよ。二人も同じ存在はいらんから普通容姿な。

騒ぐなよ、迷わせた子羊ども。ルールの説明もしてやるよ。なんて優しいんだ、と泣きながら祈れよ。

お前らには今からとある世界で生きてもらう。何をしてくれても構わない。

殺人暴行善行悪行偽善なんでもいい。しかしながら、お前らにそんな力はない。もちろん、当たり前だ。

そんなお前らに【三つ願いを叶える能力】を授けよう。感謝しろ。

ランプの精でも魔剣でもなく、神様が叶える三つの願いだ。さつきのは謂わば証明だ。

願う方は簡単だ。

ただ願えばいい。ただし、心からの願いだ。

口先だけの願いなんざ叶えれば非常につまらんからな。

タブーを一つ。願いを増やすのは不可能だ。あとは黒表紙のノー

トじゃないんだから、即死系の願いは厳禁な。

これじゃあ二つか。まあいい。

それでは行ってこい。

そこがお前らの現実だ」

無印期

01 口からでた虚

— 母さんッ！

— いいね！お前は私達の代わりに生きてくれ！

— 母さん！

— 母さん！

目が醒める。

— あの夢だ。

— 未だに引きずってるのか？

— トラウマだから仕方ないだろう

— ここは…学校か。

カット。

— そう学校だ。小学校。

気分は最低だが、頭は相変わらず最高の状態で動いている。

眼鏡を外して目頭を軽くマッサージする。

重さが取れた辺りで眼鏡を戻し前を向く。

小学生にしてはレベルの高い黒板の内容。

それにスラスラと内容を継ぎ足す教師。

授業中に寝たか。しかも夢の内容があれか。

「死にたくなるな」

ボソリと呟いた言葉。誰にも聞こえる訳がない言葉。

枕にしていた左手が少し痺れていた。

「よおーなのはー！」

昼休みになり、わざわざ隣の隣の更に階段を跨いで隣の教室から

やって来たのは銀髪のやたらと目立つ男。

—騒がしい男。他人をまるで既に自分の物の様に扱う。

—主観だけで言うなよ。

—客観でもその通りだ。

—Q. ならばどうする？

—アンサー。図書館に逃げよう。

—否、戦略的撤退

—否、図書館に前進

カット。

ただの敗走でしかない。

「御影君」

「……………なに？」

甘んじて敗走の味を楽しんでいたが、声を掛けられて振り返る。

—笑顔でも添えてな

カット。

そこに居たのは紫色の髪の女の子、月村だった。

—すずかタン！

—春だ！屋上で弁当だ！

—幼女が相手なんて…うっ……………ふう

カット、カット。

「カット」

「え？」

「…いや…で、何か用？」

「借りてた本を返そうと思ったんだけど」

「あ……俺の机の中にでもぶちこんどいてくれ。出来るな？ プツ

シーキヤット」

「ふふ、了解しましたわ、御主人様」

—そう言ってお互いに軽く笑う。

演技掛かった軽口ももうすぐ二桁目になろうとしている。

最初こそは見事にスベっていたが、四回を越えた辺りから彼女も乗り気だ。

— すすかタン可愛いよすすかタン

— 成長すれば美人なんだ今から睡付けとこう

— 馬鹿！ 幼女最強だろ！

— 光源氏計画を始めよう

— ———— それだ！

「カット」

「お前！ 俺のすすかになんの用だ！」

手前のモノじゃないよ。俺のモノでもない。モノですらない。

— 死にな餓鬼

— 今すぐ消えろよ餓鬼

— おいおい餓鬼で思考を回すなよ

— ショタが可愛いのは認める

— ———— え？

四番、カット。

「……別に」

「ハッ！ 根暗野郎め！ さっさと消えな！」

「……ああ」

面倒事になる前に退散しよう。

月村を向けば申し訳なさそうな顔をしている。

— ほら！ 笑顔だ！ 今すぐにニッコリ笑え！

カット。キャラじゃないのさ残念。

図書館で昼休みを過ごし、授業開始ギリギリに教室に戻って席に座る。

机を探れば可愛い猫の贈り物がある筈だ。

— 持ち主は俺だから送り物という表現は微妙

— 微妙なのは今さらだ

— なんせプツシーキャットとか言うもの

— 小説の引用だろ？ もちろんすすかタンも

―その内官能小説をこつそり
カット。カット、カット。

落ち着け思考。貸すにしても俺が持つてる事が問題になる。

―否、文章を読む為

―否、思考を巡らす為

―否、すずかタンが真つ赤になりながら読む為

―応、すずかタン可愛すぎる

―すずかタン蕩れゝ

―つまり、帰宅途中に官能小説を買うという事で可決か？

――― 応

否。カットカットカットカットカットカットカット。

第一、貸した後の言葉遊びに困る。今の関係を…

「……………ん？」

本がない。

月村の方を向けば本当に申し訳なさそうにしている。

―事件か!?

―事件だ!

―被害者は!?

―レインボーブリッジ封鎖出来ません!

―犯人はヤスだ!

―ギルティ!ギルティ!

カット。封鎖するな。

ともかく、教師がいるから月村も動けない。

―あれだな。コレをネタにすずかタンを…

―鬼畜乙

―ねえわ、それは絶対ないわ

―…………ごめんなさい

月村に事情を聞かない事にはなんとも言えないさ。

勉強に集中しよう。

―じゃ、じゃあ、あれだ!こうすずかタンの家に行こう

―なぜ?

―家族の人に向かって言ってるんだ
―何を？

―『娘さんが本を無くしたので娘さんを貰いますね^^』

カット！

「ごめんなさい」

「……事情を知らんから謝られてもわからんのだが……」

「なによアンタ！ すぐかがこうやって謝ってるんだから許しなさいよ
！」

―リアルツンデレとは

―ぬかしおるわ

―しかも話を聴きませんのよ、皆様

―ギルティ

―ギルティ

―脱がせ

ギルティ。

「あー、バニングスさん？ でよかったか？」

「アンタ！ クラス全員の名前ぐらい覚えなさいよ！」

「……これは失礼致しました。 貴女のように常に学年一位で高尚な頭脳は持ち合わせておりませんので。 ワタクシめが覚えている名前は比較的近くにいる人間だけ故に許して下さいませ」

―もつと煽ろうぜ！

―話がややこしくなるだろ

―ツンデレが出てきたからすすかタンがオロオロしてるぞ！

―煽れ！ 今すぐ煽れ！

―いつそ扇ごうぜ！ スカートが捲れる程に！

カット。

「ふんっ、まあいいわ。 それですすかを許すの？ 許さないの？」

「内容にも寄るけど…：そうだな、実は親の仇とかだったら許せないかな」

「は？」

「ああ、例えばの話でリアリティーのない戯れ言。嘘。口から出た虚ろ」

「アンタってヤツは…：…！」

「アリサちゃんいいよ、大丈夫だから」

「でも！こいつは根暗で今みたいに人をバカに」

「うん、大丈夫。だから、ね？」

「…：さすががそう言うならいいわ」

アデウツンデレ。

―ツンデレ面倒

―ツンだけだからな

―フツ、ツンデレなど煩惱を捨てれば

―煩惱の塊から煩惱を捨てたら何になるんだ？

― “ の塊 ”

―まさに器だな

―どうせその器に煩惱がインするんだろ

「で、謝られる要因は…：まあ分かるけど」

―実はあなたの事が嫌いな。もう近寄らないで

―月村の手にはバラバラにされた本が…：！

…：…：…。

―ごめん、俺

―泣くなよ俺

「実は、あの本なんだけどね」

「…：…：だよな。そっちだよな」

「え？他にも何かあった？」

「いや…：ない。あるわけがない。で、本がどうかした？」

「皇君が…：持って行っちゃった」

スメラギ君？スメラギ？あああの餓鬼か。

歪んでる恋愛小説をアイツが…：…？表紙と題名は普通な小説だか

らか。

―お、すずか！その本おもしろそうだな！

―え、うん。ちよつとクセが強いけど面白かったよ？

―じゃあ貸してくれ！

―え？でもこれは―

―ありがとよ！さあ飯にしようぜ！

だろうなあ。許すも何も、悪くさえもない。

「……………いいさ。数日したらアイツから返しにくるだろう」

「だと……………いいんだけど」

「……………どうにかなるさ。どうにもならないバニングスをどうにかしてくれ」

「え？」

ずっとこつちを睨んでるんだ。いつかアレは視線で人を殺せるね。

―ついでに隣の高町なのはも中々の睨みだ

―周りの女子もな

―男子は男子ですずかタンと話しててにらんてるし

―女子達はあれか、あのイケメン餓鬼がいいのか

―至極どうでもいい理由で殺されそうだ。

―至極どうでもいい理由で地獄にいい訳か

カット。

月村が苦笑しながら、小さく「ごめんね」と呟いた。

02 タイプY

やや雲の残る空。その雲が夕日色に染められる。

―二次元平面図。地球を円として周りに空気膜Aが存在する

―円から離れた場所に光源を配置

―円上に観測点を配置

―光源から観測点までに空気膜Aが存在し、屈折、反射

―プリズムを仮定として置く

―入射角により色が変わる反射光

カット。

―今日は買いすぎた

―官能小説エ：

―諦めろ

―一週間の食材購入、レシピはノートへ

カット。

―取り扱いには慣れろ

―できる限り使うな

―使うときは見られるな

―体を鍛え、使うことの無いようにしろ

―思考を止めるな

「ん……………」

目の前には青い石。宝石のようだが、少し違う。

―魔力反応だ

―似たようなモノか？

―触れるな。厄介事だ

―触れろ。厄介物だ

利害。

―厄介事に巻き込まれずに済む

―腕の治療に貢献できる可能性

―去る勇気

―進む勇氣

―退屈な日常が繰り返される

―慌ただしいであろう非日常が舞い降りる

―持つて帰るか。

―袋を右手で全て持ち、左手で宝石をつまみあげる。

―魔力反応…、似てるけど、決定的に欠けている。これでは止まらない。
い。

―解析完了

―吸収準備中

―無くなれば、どうでもよくなるか。

「……………は？」

―自宅であるマンションの前に思わず立ち尽くしてしまう。

―解析

―なんせ、マンションを覆う様に結界が張られているのだから。

―解析完了

―結界破壊準備

―否、通り抜けよう

―破壊準備中止

―侵略開始

―侵略完了

―みよ、我が軍は圧倒的ではないか

―認証コード追加

―結界を修復

―逆探知

―術者発見出来ず

―類似魔力発見

―……………！タイプY！幼女です！

―よろしいならば戦争だ！

―エスケープされる前にキャッチしろ！
カッタ。

ため息を吐いてから結界を素通りする。
あくまで普通に、相手からは此方の魔力反応も知られないように。

「……なぜこうなった」

「ごめんなさい、アナタに危害を加える気はありません」

―お嬢ちゃん、是非別のモノを銜えてほしいね

「カッタ」

「え？」

「…いや。この黄色く光る鎌を早く退けてくれ、逃げないし、君の話も聴こう。とにかく早急に、素早く、この鎌を収める事を願うよ」

「アルフ」

「はいよ」

―喋るオレンジ狼に金髪幼女か

―ツンデレとは違い扱いやすそうだ

俺の足下に魔法陣が出現し、そこから鎖が幾本も伸びて体を縛り上げる。

―訂正。この年齢でSMとは扱い憎そうだ

カッタ。

「アナタの持つジュエルシードを渡して下さい」

「ジュエル……？」

「青い菱形の宝石だよ」

―左ポケットのあれだ

「…強盗にしては随分と杜撰だな」

「持つてるのは分かっています。私達に渡して下さい」

―どこにあるかは分かってないのか

―俺が持つてる事は判明している

アレを使うか？

―否、生命の危機ではない

—使うなら渡してしまえ

「もし、あるとして。君達に渡して俺は安全に解放されるか？」

「保証します」

—解析開始

「……そうか。実はこのズボンの内股部分に内ポケットがあつてだな」

「それがどうか…あんだ、まさか！」

「まあそのまさかの訳だ

—解析完了

—侵略開始

—ということズボンを脱ぐからベルトだけ外してくれ。さすがに君のような美少女に股座を漁られるのは…

—最高だな！

君は嫌だろう？もつとも、俺のジョニーに触れたければ是非とも、壊れ物のように」

「わかりましたから！」

美少女が近付き、こちらのズボンのベルトに手をかける。

—倒錯的だ！

—馬鹿！俺も同じ年齢だ！

—精神的にはお兄ちゃんだぜ！

—侵略完了

—魔力逆循環

淡いオレンジの光が更に赤みを増して橙が朱に変わる。それに気付いた少女が後ろに下がろうとするが、甘い。

「フエイト！」

「…狼、動くな、喋るな。違えればこの少女を殺す」

—あまり吼えてくれるな。弱く見えるぜ

カット。

「何が、目的？」

「目的？そうだな、君をこのまま縛り上げて四肢を壊死させるのは非

常に面白そうだ」

「——クッ」

「が、まずは、そうだな。飯でも食おう」

「へ？」

「は？」

腹が減っては対談も出来ない。

—先にトイレに行こう

—下着も持つてな

—ズボンに滲み出なくてよかったな

不幸中の幸い…とはまた違うか。

「うむ、我ながら美味く出来た」

—レンゲで炒飯を掬いながら咀嚼する。

—鎖解いて大丈夫なのか？

—問題ない

—元々お互い争う気がないからな

「……………」

「確かに美味しいねえ！」

—狼は美人さんに変身しました。

—獣耳とは…やりおるわ

—尻尾をモフモフしたいお

—金髪少女は睨んでるぜ

—料理をな

「毒なんて入ってないから食べれば？」

「別にお腹が空いてる訳じゃ」

—きゆるるるく……

—おいおい、可愛らしい恐竜さんでもいるのかい？

—金髪少女は真っ赤だぞ！

—あれじゃね？催したんじゃね？

—金髪少女の黄金水とは…

—カット

カット!

「…ほら、あーん」

レンゲにご飯を掬い少女の口の前に持っていく。

—あーんって…俺、あーんって

カット。

少女は口を開いてレンゲを口に含む。

目を少し見開いて、ムグムグとレンゲごと咀嚼する。

—レンゲになりたい!

カット。

レンゲを引き抜き、あとは自分で食べなさいと自分の食事を再開。

—レンゲが少女の唾液でテラテラだよ!

カット。

—間接キスじゃないか!

カット。

—向こうは気づいてないけどな

……カット。

「で、なんでこいつが欲しいんだ?」

「……………」

「アンタ!どこから出してんだい!」

「左ポケットに決まってるんだろ。内股内部にポケットとか普通に考えてないだろ」

—愚息入れにもなりやしない

カット。

「なっ!騙したのかい?!」

「騙したなんて人間きの悪い…ただ嘘を吐いただけさ」

「どっちも同じです!」

—美少女と美女に怒られるなんて役得だ

「とにかく、何故譲らなければならぬんだ？理由を言ってくれ」
「それは…」

口ごもる少女。隣にいる狼耳の美女は今にも噛みついて来そうだ。

―可哀想だから渡そうぜ

―可愛いから渡そうぜ！

―渡したらもう会えなくなるぞ

―厄介事に巻き込まれないならそれも良し

―幼女と厄介事…どちらを取れと言うんだ！

―願いたい事しようぜ！

―それだ！

カット。

―問題はこの幼女と関わって得か損か

―未来的には得だろう

―何故？

―見てみるよ、美人だ

―現在では損だろう

―何故？

―思い出せよ、黄色の鎌

「わかった、何も聞かずにコレは渡そう」

「あ、ありがとうございます！」

「ただし、条件が幾つかある」

「……………」

―脱がそうぜ！

カット

「一つ、夕飯はここで食べることに」

「へ？」

「二つ、別に敬語じゃなくていい」

「あ…うん」

「三つ、自己紹介をしよう」

見事にポカンとなった彼女達。

―定期的に会う約束

—付き合う人間を逃がさないようにするにはまず胃袋を掴めつてね

—胃袋を掴む…

—男の場合ならた m

カット。

「俺の名前は御影 夕。多少魔法もかじってる、普通の子供だ」

魔法を使える一般人って一般人なのだろうか？

—冤罪の罪人も罪人なのだから

—人生を過ごす化物も化物なのだから

—問題はない

「それは普通っていうのかい？」

「アンタのご主人様も魔法を知る普通の少女だろ？なら、俺だって普通だ」

狼耳女の言い分を華麗に見苦しい言い訳で返す。

—普通の定義がわからんから異常も普通

—どうも、異常者ですキリッ

—病院に行きましょうね

—逝つてらっしゃい

「私はフェイト・テストロッサ…こっちは使い魔のアルフ」

「よろしく。テストロッサ、アルフ」

「うん」

ジュエルシードを手渡しして、この日は終わり。

—渡して逃げられる選択肢忘れてね？

あ……。

—せんせー、バカがいまーす

—こら、人に向かってバカって言ったらダメだろ。その人が自分がバカな事を理解したらどうするんだ！

—うるさいバカ

—ここまで全部自演

—自演乙

カットカットカットカットカットカットカットカットカット
トカット!

03 眼鏡男子と車椅子少女

—あの日からテストタロツサはちゃんと我が家で夕食を共にしている

—いい娘だな

—ああいい娘だ

—料理に惚れ薬が入ってるとも知らずに！

—嘘乙

「は……は……」

今現在やや息が切れてるのは絶賛ランニング中だからだ。

—しかしながら惚れ薬とは何なのだろうか？

—ちよつとした興奮剤では？

—今の嘘なら

—薬入り料理を食べる

—少し興奮する

—一緒に食べてる人、もしくは料理に不思議な思い入れ

—普通の料理を食べても何も感じない

—もしかしてあの人は私にとって特別な人では？

—パプロフの犬か

—夕食だけなのも理解させる為か！

—あざとい、あざといぞ！オレエエエエエ！！

カット。

惚れ薬とか、ねえわ。ねえよ俺。

立ち止まって、少しでも休憩。その場に眼鏡を置く。

—鼓動やや低下、安定

—無駄を省け

—四肢に魔力循環

—安定

—増加

—痛覚の信号により脳負荷上昇、切断

―増加

目をゆっくり開いて、脱力。前に倒れる勢いに乗り地面を右脚で蹴る。

―景色がずれる。

左脚が接地し勢いを殺さず、右脚を蹴りあげる。振り子のように右脚が上がるが遅い。

―やはり体勢に難あり

―蹴りではなく拳では？

―タイミングを掴めない

―眼にも魔力を循環させよう

―負荷ワロタ―眼に魔力を通した所で動体視力に上下はない

―ならば脳を強化しよう

―おいおい、我らがいるではないか

―めんどくせー

―やはり誰かに師事した方がいいか

―だが異端を育てる人間がいるか？

―もう少し頑張ってみるか。

―魔力循環遅滞

―傷口修復

―力不足

―これでは護れない

―誰をだよ

―護れなかった人たち

―痛覚を復元

「ツテエ……」

身体より頭が痛い。第一身体強化でさえ自己流。無駄がありすぎる。

―無駄ばかり

―余剰魔力が傷口から漏れ出る程に無駄

―傷の原因の一つがソレ

―シャワー浴びたい
―ソバットにすればあの速度で迫る弾丸にでも成れる
―距離感を掴めないならヒップアタックだな
―さりたい、女の子にさりたい
カット。

『……す、て』

―幻聴だ
―シヨタボイスが聞こえた
―嫌な予感がする
―何をする気だ？
既に予想は出来ているだろう？

華麗にスルーだ。
―当たり前だな
―当然だ
面倒事を迎えるなど愚者だ。
―愚者乙
―いいおるわ
―少女が持つてくる面倒事は歓迎
カット。

「……………またか、車椅子少女」
「またや。眼鏡男子」

暇なので出向いた図書館で車椅子に座った少女に捕まった。彼女の
名前は車椅子少女。くるまい スシメ。彼女

きつとそんな名前。

「アホか」

「黙れスシメ。上から本落とすぞスシメ」

「誰がスシメや！なんやアンタはカガミダンゴって名前なんか?!」

「キサマ、なぜ我が名前を……?!」

『館内ではお静かにお願いします』

— すいません。

— 二人で謝り、本を取りに行く。

「で、今日も高い本が取れないのか文学少女」

「そういうことや、頼むで文学男子」

「どちらかと言えば理系なんだけどな」

「そうなん？」

「言ってしまうばどちらにでもなるさ。箱の中の猫みたいに」

— 首を傾げた文学少女に数冊の本を渡して椅子に座る。

— 半々で生死する猫の話

— 所詮は空想実験

— 確認すれば事象の確定

— 確認しなければ事象は常に動き続ける

「つまり確認してしまったからお前はもうスシメだ」

「誰がスシメやねん！」

『館内では』

「すいません。ホンマにごめんなさい」

「怒られてやがる」

— 鼻で軽く笑ってやれば、怒って声をだそうとして、止めて百面相したあとに此方を睨む文学少女。

— ゴまあ

— ツツコミは弄ると面白いな

「で、カガミダンゴさんは何しにきたん？」

「スシメを弄りに」

「ーっ、…そ、そつかあ。うん、ちよつと出よか？」

「怒るなよ文学少女。言葉遊びだろ？」

「粹すぎて、行き過ぎやね」

「遺棄でもすればいいさ。それこそ息をするように」

「微妙」

—ダメ出し食らってやがる！

—下手糞め

—糞め

—流れる

—こんな話流そうぜ

—糞だけにな

「で、自称理系男子は何読んでるの？」

「基礎量子力学くイエローモンキーでも理解できる量子力学！これで貴方もニガーから卒業く」

「アホオオオオオ!!なんてモン読んでるんや！タイトル自体アウトや!!」

「黒に限りなく近い白だよ。グレーだよ。セフトセフト」

「黒に限りなく近い黒や！ブラックや！アウト過ぎるわドアホ！」

『館内ではお静か』

「知るか！この図書館なんやねん！むしろよく出版できたな！それ！」

「まだ書き上げてないから出版はちよつと…」「自作かい！あ？アンタはなんてモノ書いとるんや！世界中の非差別団体を敵にして何をしとるんや！」

「執筆作業」

「！ー、ー………はあ」

何度か口を【あー】だか【うー】だか【いー】だかの形に変えたあと積もった息を吐いて文学少女は落ち着いた。

こっちはこっちで司書さんに軽く頭を下げて対応している。

「……もうええわ」

「ありがとうございますあ」

「漫才かい……」

ツツコミにキレが無くなったな。

― 疲れたんだろ

― あの程度で疲れるとは……この先やっていけるか不安だな

― 疲労困憊

― 不安昏倒

「で、足の調子は？」

「相変わらずやわ」

「そうか。困った事があるなら言えよ？」

「おおきに。今のところ大丈夫やから」

「今ならお前のお休みからおはようまでをサポート出来る」

「仕事せい」

「寝顔の観察」

「……………」

「冗談だから、その持ち上げた本を下ろしてくれ。司書さん睨んでるから」

またも溜め息を吐きながら本を机の上に置く。短気だな。

「こんな美少女いじめて楽しいんか？」

「至極楽しい。ところで、聞き間違いではなければ美少女って言った

？美少女だろ？」

「ああ美少女や」

「そうか美少女か」

「……………」

「……………ぐめんなさい」

「よろしい」

― 美少女怖い

― 美少女に睨まれるとか

― ビシヨウジョ の にらみつける▽

― ユウ の ナニかががくつときがった▽

「別段、御影君に構われるから今のままでも構わんけどなあ」

「…お前ってバカだったんだな八神…」

「なんやて…?」

「ゆーあーバカ」

「余計イラつくなあ…」

だって仕方がないだろ。

俺がお前の何かが変わった所で嫌う訳がない。

「足が治ってもいじり倒してやるよ」

「なんか違う!」

「司書さんすいません。もう叫ばないから。角が出てるよ司書さん

!」

それが何故かと問われれば、

— ツツコミがないとボケは寂しいだろ?

— 初めての友人だからな

— 美少女だからだよ

— なんてだろうな

さあ?

本心はひた隠しにするべきだ。

カット。

04 肉体言語でのお話はやめましょう

「……………」

「……………ぐめんなさい」

テスタロツサが俺の前で軽く頭を下げている。

理由？どうやら今日の夕飯は要らないんだってさ。

—最近の楽しみが！

—今日こそ惚れ薬を…

カツト

「…………理由はわかったが…別に謝る必要はないぞ?」

「え?」

「事前に言ってくればそれでいい。体調が悪いならそれなりのモノを作ってもやる」

「う、うん」

「至れり尽くせりだねえ」

「至る前に尽くすのが俺だ…それとアルフ」

アルフの耳に寄りなるべく音量を下げて呟く。

「お前の主人はどうせ無理するだろうから、止めろ…とは言えないが、何かあったかぐらいは言ってくれ」

「…はいよ」

性格上何か無理をする。律儀と言うか真面目過ぎるといっうか…。

—改善したいな

—無理だろう

—それこそ死んでも直らない

カツト

「ま、気をつけてな」

「うん、いつてきます」

「いつてらっしゃい。無事を祈るよ」

ゴールデンウィークは暇になりました。

起床
読書
就寝
以上。

ゴールデンウィーク終了。

外？朝と夜の日課以外出てません。騒がしいし、何より眠かった。家にある本も読んでなかったし、非常に有意義だった。自堕落でもあつたけど。

「……………ただいま」

「おお、おかえり…顔色悪いな、大丈夫か？」

「大丈夫、心配しないで」

「はいはい。夕飯まで時間があるから、ソファで横になってな」

元々そのつもりだったのか、テストタロッサはフラフラとソファに向かい倒れるように横になった。

「ふむ……………どういこうった」

「アイツが…アイツが…!!」

「どうどう。落ち着け狼。左の棚にジャーキーが入ってるから」

何故か怒ってるアルフを宥めながらテストタロッサに布団を掛けてやる。

―寝顔可愛すぎるよオオオオオオオオ!!

―ブチュツといこうぜ!

―ガンガンいこうぜ!

―アルフの位置は!?

―ジャーキーを探していてこつちを見ていない

―気配遮断の結界展開!

―妨害されました!

―クソツツ!誰だ!

カット。俺以外に誰がいるんだよ俺…。

「どうかしたのかい?」

「……別に。それにこつちが聞きたい」

テスタロツサを精神的に追い込みだなんて、余程の事だ。

「アルフの言うアイツ……ってのは？」

「……フェイトの母親さ」

「母親……」

虐待でも受けてるのかね。

—可愛いから？

—鏡よ鏡よってか？

—リアル白雪姫かよ

—死姦も辞さない

—視姦で我慢しとけ

カット。

「あれか、ジュエルシードだっけ？を集める理由もソコにあるのか」

「詳しいことは私もフェイトも知らないよ」

「そうか……」

—さすがに魔法関係は調べようがない

—ならばフェイトタンを助ける為にはどうすればいい？

—ジュエルシードを集める？

—力不足だ

—母親に直訴する？

—場所不明

—あちらにもソレに足る理由があるだろう

—三流小説みたいに【悪】を行う悪の機関なら潰してしまえばいい

のに

—そうではないから困る

結論的に俺はテスタロツサに対して何も出来ない。夕飯を作って、彼女を心配することしか出来ない。

—煩わしい

—歯痒い

「なあ、アルフ」

「ん？」

「もしも、お前が主人を守れなくて、どうにか助けてほしい時はさ、祈ってほしいんだ」

「祈る？」

「神様…は止めとけ。あれは、絶対に止めとけ」

「じゃあ、何に祈れってのさ」

「あれだ、化け物にでも祈ってくれ」

「は？」

「化け物は助けるよ。大切な存在と大切な存在の大切な存在を」

「なんだってんだ？」

「心の片隅にでも置いといてくれ」

これは保険。

誰に対してでもない、誰かの保険。

「さ、今日の夕飯を作りますか。リクエストは？」

「肉！」

「鯖でも焼くか。今日安かったし」

「決まってるなら聞かないでおくれ！」

狼なのに「キシヤー」と猫のように怒るアルフに苦笑しながら鯖を冷凍庫から取り出した。



「アンタね！いい加減にしなさいよ！」

「アリサちゃん…」

バニングスの声が教室に響く。

叫んだ相手は親友である筈の高町。高町が最近上の空だった事が理由だろう。

完全に他人である俺が気付いたんだ、バニングスや月村はもっと深い部分でわかっている筈だ。

関係など一切ないけど。

—ツンデレ煩い

—さつさとテレ期来いよ

—来ても他人にはツン状態だ

—永遠にツンでいい

カット。

「落ち着けよアリサ」

「アンタは黙ってなさい！これは私達の問題よ！」

「なのはが危険なら俺が守るし。大丈夫さ」

「アンタ…なのはが何を隠してるか知ってるのね！」

「え、あ、えつと…」

「…………もういいわ。じゃあね」

「アリサちゃん！ごめんね、なのはちゃん、皇君！」

なんで会話に入ろうとしたんだスメラギ君よ…。

—バカだ

—言い淀む位なら喋んな

—あらかじめ嘘ぐらい用意してろって

「ん、バニングスと月村がいないな」

「バニングスさんが体調不良で月村さんが付き添いで保健室に行きました」

「そうか、なら授業を始めるぞ」

「お、月村！」

「御影君…」

授業を軽やかに抜け出し二人の搜索。

口裏を合わせたかった…というのが一番の理由だが

「…どう？」

「うん…今すぐは無理だと思う」

「だろうな…」

火に油を注いだバカもいたし。

「バニングスさんは体調不良で月村はその付き添い。二人は保健室へ」

「わかった。そういう事にしとく」

苦笑して了承された。

バニングスは月村に任せればどうにかなるか。

―問題は高町

―スメラギ君に任せれば？

―アレはアレでツンデレが怒った理由を正しく理解してないだろ

―馬鹿だもんな

―バニングスに余計な勘違いをさせた訳だし

―あー面倒だ

―面倒だ

「あー、高町さん。少しいいか？」

「………なに？」

暗い。話しかけ辛い。

―もうスメラギ君に任せりゃいいんじゃない？

―それで友人関係が終わればソレだけの関係ってことで

―アフターケアをなんで俺がしてんのさ

―あーやだやだ

―これをしないとすずかタンが泣くからなあ

―はあそれも嫌だけど

「面倒だな」

「なら構わないで」

「……こつちの話だ。高町さんを面倒だとは言っていない」

「早く用件を言ってよ。あんまりいい気分じゃないの」

―嫌われすぎだろ

―なにかしたっけ？

―すずかタンに近づいたぐらいだけ

—スメラギ君に何か吹き込まれてるのか
—至極どうでもいい

「なら用件だけ。さっさと仲直りしろ」

「貴方には関係ない……!」

「関係ないさ。関係なんてあつて堪るか」

「じゃあ……!」

「クラスの空気がギスギスし過ぎて周りが煩いんだよ」

「……え?」

「やれ『頼む』だとか、やれ『さすが眼鏡』だとか、『委員長命令だ』とか、『副委員長フアイト』だとか!お前らが仲直りしない限りずっと言われるんだ!関係なんてあつて堪るか!あつたらもつと言われる事必須だよ!ちくしょー!」

もうやだこのクラス…。

なんで俺も副委員長とか面倒な仕事を…。

—寝てたら決まってた

—ああいう決め事になると眠くなるよな

—席替えとかな

—ワクワクドキドキなんてなかった

カット。

「えつと……ごめんなさい?」

「……事の顛末を教えろ」

「……はい」

まとめると

詳しくは言えないけど秘密があつて、一人で解決するから大丈夫だよ。でバニングスが怒る。更にスメラギ君が介入してワァ。

「…………わァ」

「…………ふざけてるなら帰っていい?」

俺もさっさと帰りたい。

「あれだ、バニングスさんにはソレを言ったか?」

「…言えるわけないよ」

「なんでさ」

「その…危険な事だから」

「危険な事だから言えないのか？巻き込まない為に？」

馬鹿らしい。馬鹿みたいだ。

「馬鹿だな」

「は？」

「例え話をしよう」

高町さんの友人…まあバニングスさんに秘密がある。もちろん、何かを考えてる事は高町さんもわかってる。見てわかる程度に悩んでるのだから。

さてさて、当然のように高町さんはバニングスさんに悩みを打ち明けてほしい。しかしながらバニングスさんの悩みは危険が伴う。

ソレを知っても、君はバニングスさんに話を聞くなかな？」

「……………それでも聞きたいよ。危険が及ぶなら、それをはぐらかしてでも、アリサちゃんの悩みを聞きたい」

たつぷりと悩んでから高町は口を開いた。

輝かしい目をしていて、うん。夢と希望に溢れる子供はいいねえ。

さて、更に問いかけよう。

「話はここで終わらない。そんな秘密をもったバニングスさん。言える訳がない。もちろん、親友と言っても過言ではない高町さんにさえ言えない事だ。」

『心配するなよ。俺がアリサを守るから』

そう俺が言ったら？」

「とりあえず、御影君を叩くかな」

「肉体言語でのお話はやめてくれ。」

さて、バニングスさんは高町さんに話を打ち明けた。それはもうはぐらかしながら、危険が及ばないように。それでハッピーエンドだ」

「うん……………あれ？」

そうこれには穴がある。

「殴られた俺のフォローは請け負ってないんだ。まあ正確にはスメラギ君だがな」

それに関してはホントにどうでもいい。

アイツが嫌われようが死のうが、好かれようが生きようが知ったことじゃない。

「そんな感じで、君はどこへ向かうか決めたか？」

「……うん。とにかくアリサちゃんに謝ってくる」

「よろしい。俺の仕事はここまでだ。義務も免除された訳だ。先にもいったように君との関係など一切ない」

さあ帰ろう。

—フェイトタンが待つてるよ！

—今日の夕飯は何にしようか？

「その、ありがとう」

「俺は少しだけ高町さんと喋っただけだよ。あとは君が勝手に助かるだけだ」

俺は道を少しだけ明るくしただけ。

正しいか正しくないかは分からない道を点しただけ。

歩くかどうかは高町が決める事さ。

05 当方はそのようなサービスを提供してません

高町が何やら長期に渡り休みを取っている。体調不良などではないらしい。

—噂ではスメラギ君も休みらしいな

—噂にしては声高々と女子達が騒いでたがな

—ただしイケメンに限られるってか

「別に気にしてなんか無いわよ…」

そんなバニングスの呟きも噂になる程度に彼女が有名だという事を知ったある日。

「ん？フェイトは？」

「あ、えっと、フェイトは今ちよつと出掛けててね」

「……………夕飯前にか？」

「あ、ああ！大事な用事があつて…」

このワンコは嘘が下手だ。

元来嘘を吐けるような性格にでもないだろう。

「そうか…そういえばアルフ」

「な、なんだい？」

「お前さんは嘘を吐くと耳がパタパタ動くんだが、知ってたか？」

「な!?!なんだつて!」

—本気にしやがった

—このままいじり倒そうぜ

カット。フェイトが気になる。

「嘘だ。でフェイトはどうした？はつきり言わないとお前が嘘を吐いている時に動く場所を触れ回るぞ」

「そんな所はない!」

「え…？気付いてないのか？いや、気付かない方がいいかもな」

慌ただしく体を確認するアルフ。もちろんこれも嘘なのだけど、言わない方が面白そうだ。

―体を捻った時のオツパイがいいね

―いいねボタンはきつと丘の上にあるはずだ！
カット。落ち着け、落ち着くんだ。

「で、肝心のフェイトは？」

「呼んだかな？」

「フェイト！」

我が家の玄関を開けたフェイト。

―あれ？顔が赤くね？

―ククク、惚れ葉がついに

―顔赤いし息も荒いし…

―つまり

―発情期か！

「触るぞ？」

「あ、」

了解を得ずに彼女の額に右手を当てる。

少し熱いな…。

「ユウの手…冷たくて気持ちいい…」

「右手なら後で貸してやるから、横になつてろ」

「うん…ごめんなさい」

「なんでだよ」

「心配…かけたから」

「気になるなら寝て、さっさと治せ」

「うん…ごめんな、」

気が抜けたように膝から崩れるフェイトを抱える。

―いい臭いがする

―弱ってる娘を見るとこうムラムラしないか？

―しねえよ

―真面目に看病するぞ

「アルフ。フェイトをそこにあるソファで寝かせといてくれ」

「あいよ…心配かけてわるいね」

「主従揃って『ごめんなさい』か」

「え？」

「こつちからありがとうつて言いたいんだけどな」

ボソリと呟きながらフェイトをアルフに渡す。呟きが聞こえてたか聞こえてないかわからないがとりあえず布団を取りに行こう。

—さよなら甘い臭い

—布団に残り香が付きますように

—汗かかせるし：うむ

—看病の礼という事で

カット。当方はそのようなサービスを提供してません。



頭がポーツとする。

あれ？私：寝たのかな？

布団がある。熱い：でも体を動かすのも億劫だ。

熱い。

まるで温かい泥に浸かっているような：浸かった事はないけど。

「起きたか？」

ユウの声が聞こえる。

聞こえた方に顔を少しだけずらしてみる。

「ああ、そつちに行くから。変な体勢になるんじゃないよ」

ため息が聞こえた。

また心配を掛けてしまった。

でも、ごめんなさいって言うて怒るし。

「フェイト、少し触るぞ」

こちらにやって来たユウの冷たい手が額に置かれる。気持ちいい。

「ふむ、寝たら結構下がったな。正確な体温は解らんが」

「手、キモチイ」

置かれた手を掴み、頬に当てる。

ヒンヤリした手が私の体温を少しだけ奪っていく。

「食欲はあるか？」

「…少しだけ」

「ならよかったお粥持ってくるから」

あ、手が離れていく。

キッチンへ消えていくユウは視界の中に入らなかったので瞼を閉じる。

—アルフ

—起きたのかい？

—うん。えっと、まだ調子は悪いけどすぐに戻るね？

—今日はもう休もうよ

—ダメ。母さんが待つてる

—一方的に念話を切断して呼吸を調える。

「大丈夫。いける」

「何が『いける』だバカ娘」

「あ、ユウ…もう大丈夫だから」

「ほう、お前は心配をかけて悪いと思いつつも更に心配をかけるの？」

小さなお鍋を机に置きながら少し怒ったように言うユウ。

だって急がないと。

「集めるにしても体調が悪ければ効率も下がる。何より、風邪のお前を外に出そうとは思わない」

「でも」

「心配をかけられたくないなら、黙って看病されてろ」

立ち上がるうとしていた私の上半身が軽く押され、またソファアの上に戻る。

「お前の母が何を思ってるかなんてわかったモノじゃないが、少なくともお前を想ってるのは確かなんだ」

「……………うん」

「わかったならいい。自分で食べれるか？」

「大丈夫…だと思おう」

レンゲでお粥を掬い、口に運ぼうとする。

こういう動作をしてようやく理解した。私は弱ってる。

「無理そうなら手伝うぞ」

「ごめんなさい」

「またごめんなさいか。罪を謝らずに感謝してくれ」

「……えっと」

「お前が甘えてきた所で疲れないし、むしろ頼ったり甘えてくれた方が嬉しいってこと」

そうなのだろうか？

本当に？私は彼に甘えていいのだろうか？

「……ホントに？」

「嘘だと思うならお願いしてみな？」

「……お粥が、食べたい」

「レンゲ貸して、少しずつ食べような」

彼は少しだけ苦笑をして私からレンゲを貰い、少しだけ掬ったお粥を口元へ持ってきた。

「ほら、アーン」

「ア……ン」

うつすらと塩味があり、薄いかなと思うけど美味しい。

「ゆっくりでいいからな」

「うん……ありがとう」

「こちらこそありがとう」

自然と漏れた言葉に少しだけ戸惑ったが、体の熱さとは別に胸がポカポカと温かくなってきた。

レンゲが何度か私の口と鍋を行き来した後、お腹が満たされたせいか先程までなかった眠気が私を襲う。

「眠いのか？」

「……うん」

「寝てもいいぞ、というか寝なさい」

頭を撫でられて、気持ちがいい。

私が横になるとその手は離れてしまった。

「……………」

「……………あー、フェイトさん？」

「……………いっっちゃやだ」

「……………」

咄嗟にでた言葉にユウは何かを耐えるように私の目を反らし、何度か深呼吸をして私に向きなおした。

「どこにもいかない。ここにいますよ」

「……………うん。うん」

床に座って、顔を私と同じ高さにしたユウ。顔は嬉しそうに笑っていて、私も少しだけ嬉しくなる。

「手を握るだけでいいか？膝枕とか添い寝とか」

「大丈夫…ずっと握ってて」

「…極めて了解」

冷たかった手が少しだけ暖かくなった気がした。その分私が涼しくなったのかもしれない。

今寝れば、きっといい夢が見れそうだ。

06 名状したくないナニか

無事に、且つ勝手に仲直りした仲良し三人組。

もちろん、勝手に仲直りしたので俺周辺での俺の評価は変化なし。

―変わるわけがない

当然である。変わった事はスメラギ君の評価が大変な事になってる。

何が大変って。

「仲直りしてよかった！俺も助言した甲斐があったぜ！」

キヤースメラギクスステキー

―軽い気持ちで死にたくなる…

―落ち着け！まだお前のライフはゼロじゃない

―ピピピピピピピピ

―もうすぐゼロだよ

カット。もうゼロだよ。

「すずか！この本面白かったぜ！」

「あ、うん」

「メイドは許せないけどな」

「え？」

え？

オイオイ。あれはメイドがヤンデレなのがいいんだろ？主が好きすぎて政略結婚を阻止する為にお嬢様を殺したのは確かに間違いかも知れないが、メイドを許せないとか…。

―お嬢様は青年に恋してたツンデレだったしな

―わからんでもないが、メイドは悪じゃない

―メイドたん可愛いよメイドたん

「ま、俺がもつと面白くしといたから！」

―ハッピーエンド至上主義か？

―メイドは心を抑え主人に仕え、主人はお嬢様と婚約？

―嫌な予感しかないんだ

―奇遇だな

—いい予感がしないなんて中々ないよな

「う、うん…」

—すごいよ！すずかタンが少し震えてるよ！

—もうあれだね！本の表紙からヤられたのかな？

—嫌だよ！想像したくないよ！

—落ち着け俺！まだそう決まった訳じゃない！

—月村がこちらを向く。物凄く申し訳なさそうに向く。

—アウトだ！

—まだ二次創作で新しい冊子ならよかった！

—いい予感はしなかったんだから！諦めはついてるよ！

—………更に最悪を考えよう

—メイドの名前をすずかタンに

—主の名前をスメラギ君に

—お嬢様の名前はツンデレとか

—各々書き換えられてるとしたら

—さすがにねえよ

—それだけでも労力だ

—数ページがまるでのり付けされたようにパリパリとか

—………いや、ないよ

—ないよな？ないって言ってくれよ！

カット。想像するだけで怖い。

申し訳なさそうな月村に溜め息で返して、仕方ない、と視線を送る。

ついでに今返さなくていいよ！と念を送ってみる。

「えつと……御影君…」

「……」

念は通じなかったようだ。

—申し訳なさそうでもすずかタン可愛いよ！

—ペロペロしたいお！

—くんかくんかしたい！

—諸君、落ち着きたまえ………うつ………ふう

カットカットカットカット。

「は？なんでそいつにその本を渡すんだよ！」

「…正確には返すだ」

「ウツセエ！根暗野郎は黙ってる！」

「……御影君」

「…気にしてない。確かに返してもらった」

さてきて。

……………。

—名状しがたい何か

—言葉に、出来ない

—ら—ら—ら、らら—ら—

—適当にページを開こう。

『ライト様…』

『止めろ、止めるんだすずか。僕にはなのはが』

僕の胸にすずかがすぎる。重くはない。まるで真綿が乗っているかのように軽く、そして温かい。

『存じております。しかし、それでも』

『すずか…』

『ライトさま……』

—こう、ここまで自信に溢れた修正液での訂正だと……うん。

—ギルティ

—落ち着きたまえ…すべて音読してからでも罪を決めるのは遅くない

—これを音読…？

途中で吹くわ。その案は止めよう。

「返せよ！根暗野郎！」

「……返せよ、って俺の所有物を返せと言われても」

「ウルセエ！左手に包帯なんてしやがって！中二病かよ！」

「…小さいころの火傷を隠して何が悪い？」

「ハあ？どうせ何もないんだろ!?!」

—スメラギ君の腕が左手に迫り、包帯にかする。

？」

何これ。すぐく面倒なんですが。

周り？女子連中は気持ち悪いものを見る目で見てるし男子達は…
さっきの戦闘紛いで目を輝かせてる。

月村は、口を手で覆って驚いてる。

—だよな—

—腕にアザがある人間なんてそんなに居ないわな

—ああ面倒だ。面倒だ

「もういい。包帯を早く返せ」

「は？何言ってるんだよ」

いや、お前が何を言ってる。

—せんせー馬鹿がいるよ—

—理解させてやれ。指して、言ってるやれ、馬鹿って

—せんせー、人を指しちゃいけないんだよ—

—そうだな。じゃあ中指を立てて言ってるやれ

—もしくはピースを逆にして言ってるやれ

カット。カット

「もういい。保健室に行く」

「逃げんのかよ」

「……ああ」

もう何もかもが面倒だ。

さっさと保健室に行つて帰ろう。

「なんで来るかな」

「だって、元は私のせいだし…」

「月村は悪くないだろ」

溜め息を吐いてから包帯を巻き直す。

何度も巻いているから片手でも慣れたモノだ。

「そのアザ…」

「昔の火傷だ」

「……………痛いのか？」

「今は痛くない」

「ホントにゴメンね」

「何がだよ…まったく」

見せたくなかったのは自分を理解したくなかったから。
包帯を巻き終えて、沈黙が保健室を占領する。

—フラグだぞ！

—選択肢だそうぜ！

—抱きつく

—キスする

—ゴールイン

—さあ！好きなものを選びな！

カット。自責点もビツクリだよ。

「ゴメンね」

「何がだよ…」

「本…ちゃんと弁償するから」

「必要ない」

「でも」

—なら君のバージョンを貰おうか

「なら君のオススメの本を貸してくれ」

「え？」

「それでチャラだ」

—何冊か言っていないところが外道だね！

—すずかタンから本を借りたことはなかったもんな

—一方通行だった

—ロリコンだった

カットカット。

「いいよ！次はオススメの小説を持ってくるね！どんなのがいいか

なあ」

「そうだな、愛と勇気だけが友達で餡が詰まった憎いアン畜生が主人公な児童書でも俺は構わないかな」

「……じゃあそうするね」

「嘘だ。止めてくれ。冗談だ」

「ふふふ、わかってるよ」

暗かった顔から一点、笑顔が戻った月村と三十分程笑い合う事になる。

授業を無断でサボった俺に対し、キツチリと言いつきをして抜け出した月村。

無論怒られるのは俺だけになるのだが、この時点では知るよしもない。

07 魔法少女！マジカル☆ヤガミン！

「よう文学少女」

「ああ理系男子。ええところに来た、狙ったなら私の王子様になってほしいわ」

「生憎、貴女の下へ駆ける白馬は道路交通法、貴女を守る白刃は銃刀法、格好は個人的に嫌いな故、勘弁して下さい」

「そこまで嫌なんかい！」

「はい」

「即答ありがとう、足刀でも食らわせたろうか」

「車椅子少女の足刀って」

—あれか、座りながらちよこちよこ蹴ってくるのか！

—膝さえ動けば出来るしな

—ポカポカ叩かれるぐらいに楽しみだ

近づいてきた八神が横を向く。そのままハンドルを左右対称に回す。

左手は前に、右手は後ろに。かなりのスピードに乗って足を置く部分が俺の足を狙う。

「とうっ！」

「脛っ！」

いつもの座席に座り、涙目で脛を擦る。

いつそ折れてるんじゃないやね？折れたんじゃないやね？

「慰謝料を請求する」

「私の精神的苦痛に比べれば大したことないって」

—結構楽しみながら相手してるクセに

—それが勘違いだったって？

—ちよつと絶望してくる

「そうか、なんかごめんなさい」

「いや本気にされても困るんやけど」

「頭の中でずつと八神さんをバカだバカだと罵つてた事がバレてるとは知らずに……ごめんなさい」

「おら、そこで誠心誠意を表す土下座しよか？鉄板はないから楽勝やろ」

「その年齢で焼き土下座強要とか……お兄さん将来が不安で仕方ないんだが」

「お兄さんが嫁にもらつてくれるんやろ？」

「ないわ」

「じゃあお兄さんが嫁やね」

— やったねコウ君！家族が

— おいやめろ！

— 家族が増えても面倒なだけさ

カット。

— 少しだけ嫌な事を思い出した。

— 家族だとか、親だとか。

— 全面的に思考した俺が悪いんだけどな

— カット。至極どうでもいい。

— バレないように少しだけ息を吐いて、椅子に深く座る。

「で、今日は何しに来たん？いつもなら本とかあるやろ？」

「………あ」

「なんや忘れて来たんか」

— 本気で呆れたような視線が此方に向く。

— 本はあるよ

— 本の形をした何か、だけどな

— 周りにも本はあるんだけどな

— 図書館だからな。

「オススメの本とか持ってきてもらおうと思ったけど……大丈夫か？」

「正常だ。洗浄されても清浄にはなれないと自負はしてるけど」

「変な自負はせんでええけど、戦場にでも行けば戦士にでもなれるんちやう？」

「戦士の後も戦史になれるし戦死も夢じゃないな」

―言葉遊びと言うか

―語呂遊びだな

カット。会話を楽しもう。

「ところで、王子様」

「残念、貴女の王子様は公僕の方々に捕まりました」

「…ちなみに罪状は？」

「このご時世に南瓜パンツにマントをしてて、職務質問を受けたところで抜剣。ちなみに模造刀。警棒で胴一閃された後捕縛されました」

「弱い！いや、警察の方が強いんか…余計なことしおって」

「王子様の所持品からは何故か白く汚れた幼女の写真や明らかに成人男性のモノではないだろう下着が発見されました」

「警察いい仕事した！さすがや！」

「王子様は

『私を倒しても第二、第三の御蛆様が』

と言っており、現在捜索中だ」

「完全に悪役やね、御蛆様」

姫を助ける為に頑張る王子様なんて絶対に変な趣味を持つてるに決まってる。

―死姦嗜好とか

―勘違いとかな

―声と髪フェチもいたな

―是非とも一緒にされたくない

―向こうも願いだらうさ

カットカットカット。

「で、話を戻すが何か用か？文系少女」

「ああそうそう。今日は暇か？」

「急に忙しくなった」

「暇か。ちよつと本を借りすぎてなあ」

見たくなかった隣の座席をチラリと見れば、数冊…と言わずに十冊近く並べられた本の山。

―よく図書館側も貸したな…

―結構な頻度で利用してるだろうし

―それに今日は館長さんか

―なんか納得した

少しだけ顔が引きつるような気がした。

「顔が引きつってるで」

気のせいじゃなかったようだ。

図書館から結構な距離を歩いて到着したのは姫様がお住まいの離宮である。

―平凡な一軒家

―地下室とかあるんじゃない？

―そういった用具とか

カット。至って平凡だろう。

「誰も居らんから上がった」

「なんだ一人暮らしだったのか」

―こんな一軒家に？

―えらく金持ちだな

―あれだろ、誘われてるんだよ

―今日、私一人なの

カットカットカットカット。

車椅子のタイヤを雑巾で拭い、彼女を後ろから押してやる。

「なんやすまんなあ」

「おばあちゃんそれは言わない約束だよ」

「なんやウザいなあ」

「それも言わない約束だ」

前からため息が聞こえたが気にしない。

玄関を抜けて、キッチンへ。整理されてて非常に使いやすいそうさ。

「ほな本はその辺に置いてな」

「あいよ」

テーブルの上に不自然に膨れ上がった手提げ袋が置かれる。手提げ袋は限界を越えている。

俺：もう、ゴールしていいよね。と言わんばかりの手提げ袋である。

—ゴールしてるけどな

—人生…というか手提げ袋生のゴールじゃね？

—はやてに直されそうだな

手提げ袋の戦いはまだ始まったばかりだ！

「その左手、普通に力仕事も出来るんやね」

「ん？いつも使ってるだろ。本読む時とか」

「まあそうやねんけどさ。結構な重さの手提げ袋を持ち上げられると違和感が凄い」

「まあ怪我してる訳じゃないからな」

「そうなんか」

「そうなんです」

左腕を肘から指先まで隠すように巻かれた包帯に注視する八神。

何か思い付いたように顔を上げて口を開く。

「実はその左手に世界を壊せるほどの生物が封印されてる…とか？」

「惜しい！」

「なんや全く違っ…：…なんやて?!」

「嘘だよ。信じるなよ」

ドウドウ。落ち着け。

髪の毛を逆立てていいのは金髪かとある映画監督の作る映画のキャラクターだけで十分だ。

「そういうえば、御影君は結構いろんな本を読んどったよな？」

「神話関係と物理学書。あとは各種小説程度だぞ？」

「本の虫やなあ」

「失礼な。紙を食べる虫と同じにしないでくれ」

「なら、本中毒者」

「褒めるなよ」

まったく誉めてないねんけどなあ、なんて呟きは無視しよう。

—なんせわかっているからな

「で？」

「ああそうそう。この本やねんけど」

八神が持つて来たのは黒い表紙に金の十字架が描かれた…という
か埋められた本。ちなみに鍵付き。

「……なんだ黒い方の魔術に関心があつたのか」

「魔法少女！マジカル☆ヤガミン！」

「……………」

「私が悪かったからそんな目で私を見んといて。ホンマにごめんなさい」

—可愛いから何も言わなかっただけなんだけどな

—変身シーンは規制対象ですか？

—お供のペットに変態はいかがですか？

—タラバだ！フーツハツハツハツハツ！

カット。

本を掴んでくるりと回してみる。裏側にも何もなし。

—微量ながら魔力反応あり

—解析

—解析魔法弾かれました

—鍵での結界と本自体の結界が面倒だな

—いつそ引きちぎるか？

—否、危険過ぎる

—様子見だな

—マジカル☆ヤガミンが危険じゃね？

—これ自体に危険があるかはわからない

「八神、この本どうしたんだ？」

「ん〜私もよくわからんねんけど、足長オジサンからの贈り物って言

えばいいんかな？」

「足長オジサン？また人間らしからぬ存在と交友関係をお持ちで」

「何でリアルに足がやたらと長いオツサンを想像してるか知らんけど、それほど愉快的な交友関係は残念ながらないわ。」

一応、私にこの家と更には食費やらなんやらを提供してくれてる人なんやけど」

―その足長オジサンとやらがこの本を？

―魔導士なら八神の自衛力を高めるため

―もしくは厄介払い

―一般人なら普通に譲渡が考えられるんだけど

―内包された魔力自体は弱い

―大丈夫か？はやてに危険は及ばないか？

その時は、その時だ。

「さっぱりわからん」

「私としては、この中から私を守る騎士とか王子様とか、或いはこの本に導かれて悪を倒すとかそんな事を願ってるねんけど」

「どれもねえよ。マジカル☆ヤガミンの方が確率としては上だ」

「その時は、サポートしてな」

「……………微力を最大限に尽くすさ」

その答えに八神は少しだけ停止して満足したように頷いた。

夕方も少しだけ過ぎてご飯時。

八神宅から出て急いで帰る時にソレを聴いてしまった。

【どうか、フェイトを】

よく知っている声が脳内に響く。彼女が願ったのは主の守護。

―よく出来た願いだ

―叶えたのは全知全能を謳う神様だからな

―厄介な能力だけだな

―相応の力を得たがな

―俺自身には不相応な力さ

人通りの少ない路地へ入って壁に左手を当てる。

―転移位置確定

―魔力循環

―開放

壁に少しヒビが入り、赤黒い縦に長い楕円が出来上がる。

楕円の中は朱色に染まり、楕円の縁は鼓動するようにビクンビクンと蠢いている。

「相変わらず、グロいなあ」

呆れたように呟いてから深呼吸をする。

二度目ながらこの中に入るのは緊張…というか怖いものだから仕方ない。一度目は無我夢中だったし。

―さて向かおう

―帰れば夕飯を用意しなくてはいけない

―これだから関わりは嫌いだ

―自分が望んだクセに

―自分から突っ込んだクセに

カット。

等身大程ある朱色の円の中へとゆっくり足を踏み入れた。

「あー、今晚はマダム。生憎と招待状が届かなくてね。無断で失礼した事を詫びさせていただくよ」

そんな俺の言葉がかなり広い城内に響いた。

08 大言壮語を吐き捨てる化け物

―前回のあらすじ！

―世界を救うために戦うマジカル☆ヤガミン！

―しかし、悪の居城にパートナーであるミー君が捕まってしまった

！

―どうしようミー君がいないと、私戦えないよ！

―果たしてミー君はどうなってしまうのか！

―次回！新パートナー!?黒くて固くて太いアレ！

―完！

―あらすじで終わったよ

―なんという

カット。現実逃避はやめよう。

目の前にいるのは胸元の開いた黒髪の女性。葡萄色の紅が薄く塗られている。

―不健康そうに見えるのは病的に白い肌のせいか

―はたまた口紅のせいか

―どこか疲れてるところじゃね？

「あなた…何？」

「一応人型なんだから、何者？とか誰？とかの方がいいんだけど？」

スーツを着た時計ウサギでも色で輪切りされた猫でもトランプの兵隊にでも見えるのか？」

「いいから答えなさい！」

叫びと同時に腕が振るわれる。

―左から鞭

―捕獲可能

左腕で鞭を抑え、絡め取る。

「まったく、危ないな」

「左腕がそんなモノに侵された人間なんて、誰じゃなくて、何で十分よ」

「至極真つ当な答えをどうも、マダム」

普通の人間なら鞭を掴む事は可能だが、絡め取るまでは無理だ。

「ではお望み通り自己紹介を。私、御覧の通り左腕が触手で侵された、カテゴリー【化け物】でございます。ここへはとある事情で参上したしだいにございます」

右手を腹部にあて深々と礼をする。

左腕では赤黒い触手達が鞭に絡み、蠢いている。

—我ながら気持ち悪い

カツト。

「……その化け物が、ここに何用かしら？」

「ここにいるだろう金髪の娘を助けに」

「フェイトをどうするつもり?!」

「名前をご存知でしたか。話は早い」

鞭を伝い触手達が女性を縛り上げる。

—こう！グルグル巻きじゃなくて各所を強調してるのが最高だね

！

—まだ力はそんなに入れてないけどな

—広域魔法で本体叩かれたらアウトだし、サクサク脅しますよ

「フェイトはどこだ？」

「あの娘は私の娘よ？渡すわけないじゃない」

「なんだ、評判の悪い母親だったか。尚更力を込めなくなったよ」

「評判が、悪いですって？」

「ああ」

なんか落ち込みだしたんだけど。

—こう暗い空気が彼女を覆ってるんだけど。

—聞いてた人物像と違うんだけど？

「えつと…」

「いいわよ…どうせ当たりがキツかったのは理解してるし…私をわかってくれるのはアリシアだけなのよ、そうよ、そうに違いない」

—独り言をある程度終わったのか、持ち直したように此方を睨み付ける。

—なんかボソボソ言ってたけど触手に感覚あるから全部聞こえてるっていう

—もうなんか怖い

—非常に幸せな感触は楽しめてるからいいか

—女体って、不思議と気持ちいいよな

「あー…大丈夫か？」

「あなた…あの娘とどんな関係？場合によつては殺すわ」

「ただの夕食を共にした程度の仲だ」

—故に大切…とは言えないが

—さすがに何日も繰り返し返してれば大切とも言えるか

—惚れ薬でも盛られてたか？

カツト。

—そんな事あり得るわけがない。

—断定とか

—愚策だ

「あの娘が望むならそれもいいわ」

「…えらくすぐに了承したな」

「当然でしょ？フェイトは良くも悪くも、私の娘よ」

左腕の触手を収めて、左手の甲には触手の元とは思えない赤い円形の宝石が埋まっている。

—直径が精々2cm程度の起伏がない宝石。

—質量保存とか余裕で無視だ

—使うほどにアザが腕を侵食する

—おー、怖い怖い

「ここにフェイトが居るわ」

「そうかい」

ガチャリと扉を開けば、鎖に腕を絡められながら力なく横たわる金

髪少女がいる。

—なんかフェイトに縛られたのを思い出した

—納得のSM

—プレイ中だったのか
カット。

「起きなさい、フェイト」

「……はい、母さん」

「迎えが来たわ」

「迎え……?」

身体をゆっくり起こし少し首を動かしてから、扉前にいる俺を見つけた様だ。

「……ユウ?」

「迎えに来てみたぞ、アリス」

「……?」

「気になるな。で迎えに来たぞ。帰って夕飯を食べよう」

フェイトの視線は母に向き、もう一度俺に向く。

申し訳なさそうな顔で声を出す。

「ダメだよ……私が居なきや、母さんが一人になるよ……」

本当に申し訳なさそうに俯くフェイト。その横でドヤツと言いつうな程満足している母さえ居なければ連れ去ったかも知れない。

「いい娘ね……フェイト」

「………まあそれなら構わないか」

—構わないのか?

—本当にそれでいいのか?

—願いは達成された…

—とでも思っているのか?

「二応、俺も伊達か酔狂でここにいるからな」

フェイトへと足を進める。足音が全く鳴らないのは靴底がゴム製だからだ。

触れも出来ない距離で止まる。というか、母の視線がキツくなったから止まるしかなかった。

深呼吸をして気持ち落ち着ける。

―騎士の如く誠実に

―神のように尊大に

―劇的に言葉を紡ぐ

「お前の為なら母を殺そう。お前の為なら全てを灰塵に変えよう。お前が願うなら全てを叶えよう。お前を全てから守ろう。」

敵が言葉であれ、悪意であれ、業火であれ、人であれ、神であれ。

大切な存在よ何を望む？」

俺は言葉を吐いた。

あの時に俺が願ったように、その願いに彼女の願いが引つ掛かるように。

「……………私は、」

やや間があつて彼女は口を開いた。

悲しいまでに傷付いた彼女の願いを、化け物は呆れながら聴き、頷いた。

たぶん物凄く嫌な顔をしてたと思う。

09 枯渴世界を潤すらしい【嬉しい】という感情

不本意だ。

―それが願いだ

―それこそ願い下げだ

―叶える為だ

「それほど嫌ならどこかへ消えればいいわ」

「消えたら、フェイトにとって大切なアンタが一人になるだろ」

「フェイトにとってだなんて、照れるわ」

「その照れ具合が四割程フェイトに伝われば、たぶん俺はここに来れなかったんだろうよ」

「それでもその五割は伝えてるつもりよ」

「二割伝えても、二厘しか伝わってないだろうけどな」

「そう……………」

隣にいるプレシアも少しだけ落ち込む。

この場にフェイトは居らず、いるのはプレシアと俺だけになる。

―人妻だ！

―セクシーだ！

―優しく奪ってもらおうぜ！

カット。

フェイトの願いは自分を守ってもらう事じゃなくて、自分の大切な者を守ってもらう事だった。

―暗に戦力外通告

カット。

「アナタのソレ…ロストログアね」

「……………知ってるのか？」

「伝承と名前だけよ。私が探してた物の一つ」

俺の左手に埋まった宝石を眺めながらプレシアは残念そうに口を開いていく。

「……………適合者がいるなら、もういいわ」

「自己完結しやがった」

「アナタに教える義理がないじゃない」

「そうだけど。流れは明らかに説明をする筈だろ？」

「流れとは断ち切るモノよ」

そう言つて宙に浮かせたジュエルシードを眺めて、少しにやつく。

—このオバサン怖いよ

—どうせフェイトを思い出してゐるんだろ

—しかし、なぜジュエルシードを？

—綺麗だから？

—他にもあつただろうに

—求めたのはジュエルシードだけじゃなくてコレもだろ？

「なんでそんな欠片を集めてるんだ？」

「……聴きたいかしら？」

「…是非」

「そうね…アナタがフェイトに永遠に近付かない事を誓えば、まあ教えてあげるか考えてみるわ」

「対価がすごい割にアンタは全く教える気がないんだな」

「意味がないわ。それに、フェイトの近くに触手の自称【化け物】がいるなんて最悪じゃない」

なんでこんなに棘があるんだか。

—当然過ぎて考えたくない

—正論過ぎて反論できない

化け物は肩身が狭い。別に胸を張りながら生きる気もしないが。

「私にはもう1人、娘がいるのよ」

「…語り出したよ」

「そう本当に目にいれても痛くないって理解できるぐらい可愛い娘よ。アナタにも見せたいけどあの娘が汚れるから、見ないでちょうだい」

「そして俺の悪口にシフトしやがった」

「アリシアがいるからフェイトが生まれた。アリシアがいたならフェイトは生まれなかった」

「……………死んだのか？」

「…その為のジュエルシードよ」

「蘇生なんざ止めとけ。全く違う存在になる」

「知ってるわ。アリシアとフェイトのいい部分は違うもの」

そう言ってプレシアはジュエルシードを杖の中に入れる。

顔は何を考えているかわからない。何かを考えてる顔を見分ける事なんて出来ないけど。

「フェイトは…私の為に生きすぎなのよ」

「……母親的には嬉しいだろ？」

「嬉しいわ。それはもうその嬉しさをエネルギーに変換すれば枯渴世界を潤せる程に嬉しいわ」

彼女の感情があれば、世界に戦争も起きなさそうだ。

—争いの種が殆ど無くなるからな

—確実に争いは起こるけどな

—今の比じゃないエネルギーを用いた争いだけだ

「でも、親としては自分の為に生きてほしい」

「………そうかい」

カット。カット。

カット。

無駄な事を考える前に思考を放棄する。

—諦めろよ

—もう遅いんだから

—お前はお前で

—彼女は彼女で

—フェイトはフェイトで

—プレシアはプレシアだ

—全て違うのだから

カット。

「だからこそ…いえ、しかし私はやり過ぎてしまった」

「…まあ確かに、あの年齢の娘にSM的体験はトラウマに」

「殺すわよ」

「口を閉じてます」

肩を竦めて、口を閉じる。

プレシアは立ち上がり、杖をゆつくりと降り下ろし床に着ける。付けた場所から波紋が広がり、そこにフェイトが映し出された。

白い服を着た、魔力光が桜色の少女と戦っている。

「こんなに頑張ってる……どうかしたかしら？ 私のフェイトが可愛すぎて絶句してるの？ 無理もないわね」

「親バカの極みだな」

「失礼ね。引きちぎるわよ」

「失礼しました、マダム」

金髪のフェイトは鎌を降りながら戦う。

栗色の髪をした少女は杖を構えて戦う。

—高町なのはだ

—映像がフェイト主体でそんなに見えなかったが

—間違いなく高町なのはだ

—なぜアレが魔導士に？

—相談事の危険な事って

カット。

考えたくないどころか知りたくなかった。

「この戦い。フェイトが負けるわ」

「なんで分かるんだ？」

「私がフェイトを追い込んだ後なのよ？ 精神的に余裕のないフェイトが不利に決まってるじゃない」

「オイオイ…それでいいのか」

「いいのよ。それがあの娘の未来を護るなら」

「……アンタはどうなる？ アンタがいなかったらフェイトは悲しむぞ？」

「私はもう先も長くない」

「歳か」

「焼き殺すわ」

「確定は怖いよ」

バチバチと電気の走る杖を此方に向けてきたので両手を上げて降参する。

―簡易的なスタンガンだな

―人を焼き殺すほどの電圧は簡易とは言えない

―R服の二人組は超人だな

―百万ボルトを空中で食らってるもんな

―電気の逃げ場エ…

「それに管理局の船を攻撃した時点で既に負けてるのよ」

「…：…は？」

「管理局の船を攻撃したわ」

「…：マジで？」

「マジよ。フェイトを助ける為にヤっちゃったわ…：フェイトにもちよつとしたお仕置きをしたけど」

「行き過ぎた愛情表現は止めとけて」

「過去の事よ」

「未来の事もな」

しかし管理局が関わってたのか。

―腐った林檎がまだ樹にぶら下がってたのか

―誰も喰わないし

―落ちなかつたんだろ

―異臭が喰う虫を叩き落としてたしな

どうしたものか。俺の存在を अच्छは知らないだろうか…。

「非常に気に食わないけれど、あの子は管理局に保護してもらうわ。非常に、非常に気に食わないけど」

「そんなに歯を食い縛るなよ、美人な顔が怖い」

「私の気持ちなんて貴方には想像出来ないでしょうね」

「わかりたくない。アンタの気持ちはアンタのモノだろ？それも背負う気はないよ」

もう俺の背中は満員なのだから。

―カット

―カット

カッツ。

「私の罪は私が背負うわ。私の業があの子に降りかからない準備もした」

「それが、その書類か」

「私の研究成果と失敗と原因になった会話の映像よ」

空中に現れた平面に映し出された文字。

それはエネルギーに関する彼女のレポート。そして、管理局による汚職の映像。

「わざわざこんな管理外惑星まで来ている船よ…乗っているのはお人好しか仕事熱心な尊敬すべき馬鹿よ」

「侮蔑すべきテンサイ様は映像みたいに楽をするからな」

「嫌な世の中ね」

「まったくもってその通りだ」

溜め息すら吐く気になれない。

「後は私とフェイトの関係を親子から他人にするわ」

「ものスゴく怖い顔になってるぞ。もしくは泣きそうな顔」

「心証がいい方がそれはもう最高なんでしょうけど。その為にフェイトに嫌われると思うと…死にたくなるわ」

「目が死んでるな」

想像してしまったのか、黒い髪が真っ白に見える程落ち込んでいく。

黒い髪が真っ白になっているのに黒い影を背負うとはなかなかだ。

「…………アナタは私が死のうとすればどうする?」

「今現在なら止める。全力をもって、それこそ四肢を縛り、口に触手でも突っ込んで自殺を妨害する程度に止める」

「…………厄介な化け物ね」

「厄介な願いをしてしまったのさ」

フェイトの心や未来を守るなら、俺はそこまでしてしまいうだろう。

—守るなんて願うから

—不特定多数じゃないだけマシだ

―ある意味不特定多数だ

―特定した少数の為の願い

「大切なモノが守れる力を欲したのは今でも馬鹿だと思ってるよ」

「底抜けの馬鹿ね」

「性格がいいんだ」

「単なるお人好しじゃない」

「化け物だから、普通が好きなんだよ」

苦笑して映像を見れば、床には桜色しか映っていなかった。

「帰りたくなった」

「奇遇ね。私は帰したくなくなったわ」

そんな事をいいながら大切な存在の大切な人は自身の可愛い娘に向けて雷という愛を落とした。

10 人型触手系主人公（笑）

「アナタには囿になって貰うわ」

「化け物だからか」

「漢字は苦手なのよ」

管理局の人間達がここへと来る間にそんな軽口を叩く。

― 苦手だといいつつ答えてくれるプレシア様カッケー

― 脚気だったのか

― 足を隠してる訳はむくんでるから？

カット。

「私が非道に成れば成る程、フェイトの心証は良くなるわ」

「こんなガキを素体にこんな化け物を作り上げるなんて…なんて非道」

「全てはアルハザードへ行くためよ…！そしてアリシアを…！！」

「そんな感じか」

「こんな感じよ」

― 本当に大丈夫だろうか？

― 母の望みがフェイトの望みならば、正しい

― 善し悪しがあるろうが

― 心は死ぬが未来は守れる

― 未来を殺し心を守るか？

― 生きれば心は治るだろうか？

― 生きてて心は直ってないけどな

カット。

「ん…アルハザード？」

「知らないの？」

「魔法の知識はあっても、魔法界の知識はないんだよ」

「難儀ね」

「そんな無知なガキに教えはしないのか」

「しないわ。自分で調べなさい」

「はいはい」

― 複数の転移確認

― せめて上着は脱ごうぜ

― 下は普通のシャツだもんな

「何をしてるの？」

「来る連中の仲間におそらく同じ学校の人間がいるんだよ」

「……ああ、あの白い子ね」

「クラスに化け物が居たら、常に警戒するだろ？」

「それが触手の塊なら精神的外傷になってもおかしくないわね」

「そういう事だから顔を隠せる何かない？」

「焼く？」

「それも一つの案だな」

いつそ触手でカバーしようか。

― 馬鹿だ

― 展開拡げたら侵食早まるぞ

― それもまたいいかもな

― いつそ素で出てソックリさんとか？

― 会わないのが一番いいんだけど

それは無理だ。 匣をする以上、確実に接触する。

「あの子は通して構わないわ」

「それは有難いけど……いいのか？」

「次元震を起こして情報を送った段階で私の勝ちよ」

「足止めが俺の役割か……死ねるな」

「ダメよ。アナタが死んだらフェイトが悲しむわよ」

「アンタが死んでもフェイトは泣くさ」

「その為に、壊すのよ」

― まるで自暴自棄

― 慈母？ 自棄

フェイトを悲しませない為にフェイトの心を殺す。 なかなか、なかなかだ。

「いたぞー！」

「子供……」

眼鏡は外して置こう。たぶんバレないだろう。

—人間は特徴的なモノに目がいくからな

—例えば眼鏡

—例えば包帯

—例えば触手

ここで捕まれば、フェイトにも罪が及ぶ……それも母と同じ程度に。

—プレシアが思案した結果だ

—フェイトの未来を守る為だ

「プレシア・テスタロッサ、武装を解除して投降しろ！」

「言われてますよ」

「面倒だわ、無視しましょう」

局員達を鼻で軽く笑いながら深く椅子にもたれ掛かるプレシア。

—本当に色っぽいな

—セクシーな服着てるからとかじゃないよな

—フェイトの未来もこんなものになるのか

—楽しみだ

—こう、鞭を使って女王様とお呼び！的なの？

—でも見た限りフェイトってMじゃね？

—痛い、でも感じちゃう！ビクンビクン

—イタイ

カット。イタイイタイいわ。

「あんな所に扉があったのか」

「ええ………さて、始めましょうか」

「御命令があればいつでも」

「じゃあ、やりなさい」

小さく喋れば、少し冷めた目で命令された。

左腕を扉の近くにいたる局員に向ける。

甲に埋まった宝石の端から赤黒い触手が勢いよく伸びて局員を掴んだ。

―男など掴んでもつまらん

―捨てろ

―ポイだ

―金魚掬うヤツな

―それはポイだ

―ポイだ！

カット。

そのまま掴んでいるのも嫌なので彼には仲間の所に戻ってもらおう。

「ぐはっ」

「大丈夫か…?!」

「あの部屋に近づかないでもらえるかしら？ 私の可愛い娘がいるのよ」

扉の先にいるのは円柱の硝子管に液体と一緒に入れられたフェイト…いや、アリシアなのだろう。

―瓜二つだ

―目の前に行けば違いもわかるだろうがな

「どうせ見ているのでしよう…フェイト」

―見ているのでしよう、フェイト

「あなたはね、アリシアの代わりなのよ」

―あなたは、アリシアの代わりだったの

「代わりにすらならなかって出来損ない」

―代わりになれなかった、私の娘

「人間ですらない、出来損ないの人形」

―愛しいもう一人の、人形のように可愛い娘

「もう要らないわ。必要がない。私の言うことを全う出来ない人形は必要ないわ」

―もう私から離れなさい。貴女が汚名を被る必要はないわ

「さようなら、人形ですらないフェイト」

―さようなら、私の最愛の娘

「お客様にはお帰り頂くわ」

「御意に」

短く返事をして一步前に。

局員達は勇ましくも杖を此方に向けている。しかしながら、残念だ。

目に見える触手だけが展開していると考えてる時点で負けである。

彼らの足元から生える赤黒い触手。身体を縛り上げ、更に足元に転移魔法陣を形成していく。

―地球のどこかへいつてらっしやいな

―アディオス

―アデュー

―さようなら

―バイバイ

「さて、時間稼ぎは任せるわ」

「なら、この兜を借りるぞ」

「お好きに」

兜の目を隠す部分だけをもぎ取り、触手で整えて、耳に掛ければほら簡易仮面の完成。

―仮面バツターにこういう奴いたよな

―平成バツターだな

―しかも主人公じゃなくてサブな

カット。

宝石に触手を戻す。先ほどの転移陣を敷くお陰で脚を伝ってしまったわけだが、仕方ないだろう。

―第一目的はフェイトの未来

―その為に計画に乗ったのだ

―使うべくして使った能力だ

カット。ならば自己弁護は止めるべきだ。

「知識がないのに【アンヘル】は使いこなせるのね」

「unhell? 非地獄?」

「いいわ、気にしないで。かなり揺れるから気をつけて行きなさい」
「へいへい」

ヒラヒラと手を降って螺旋階段へ向かう。

吹き抜けとなつているここは城の外壁をぶち破らない限り確実に通るらしい。

—さつきから起こつてる振動が次元震によるものなのか

—はたまた戦闘によるものなのか

後者なら絶望してもいいな。

—絶望なんてもう出来ないだろ?

—望みが絶たれる事などもうないのだから

カットカットカットカットカットカットカットカットカットカット。

どうもここに来てから思考が暗い。

—母と子を見るから

—やはり関わつたのが間違いだった

—否、間違いなどはない

—人生の間違ひは未来的正解だ

カット。過去の間違ひは一つだけだ。

「そうは思わないかね。管理局?」

「さつきの子供…!?!」

「気をつけるなのは…こいつは俺がやる!」

「ライト君…嫌! 私と一緒に戦うよ!」

「なのは…!」

—一気に死にたくなつた。

—お、おつちけ、おつちけんだ俺

—俺よ落ち着け

—素数を数えるんだ!

—1、4、6、8、9、10

—畜生! 全部素数じゃないじゃないか!

—あれ？1つて自分でしか割り切れないから素数じゃねえの？

—1は除くんだよ

—1があるならすべての整数は割り切れるさ
どうしてここにスメラギ君がいるのかね。

転生主人公は転生主人公らしく主人公勢に媚び売ればいいモノを
…。

—主人公が高町なのはなんじゃね？

—…………おう

—納得の媚び

—主人公なんていなかった

主人公なんていて堪るか。

「笑いも出ない感動的な喜劇をどうも」

「ハッ！感動的なら通せよ！」

「白い方だけでしたら、城主に呼ばれているので構いませんよ」
「え？」

「しかしながら、残念な事に貴方を通す訳には行きませんで」

スメラギ君の方を向きいい放つ。口元をニヤケさせて挑発する。

「……………なのは、行け」

「でもー！」

「お前が止めなきや！フェイトも、アリシアも、プレシアも、みんな傷
付くんだ！」

—知ったような口を…

「…うん、私行くよ…この城を止める」

「ご英断を感謝致します」

道を開けて高町だけを通す。

スメラギは浮いたままこちらを向いている。

—武器は剣

—輝かしい、装飾の美しい白刃の剣

—両刃だ

—さながらロングソードか

高町を見送り、スメラギ君に向けて頭を下げる。

「見送り感謝いたしましたよう」

「別に、すぐに追い付くさ」

「果たしてそれはどうでしょうか」

首を傾たむけてニコリと笑ってやる。

「生憎と人ではないので、少しばかりは苦勞するかと」

左腕と左足が触手に包まれる。

—やはり侵食されていた

—まあ仕方ない

—目的を果たそう

「原作より堕ちたのか…プレシア」

—魔力循環

「何を存じてるかはわかりませんが、

—痛覚遮断

—増加

城主を馬鹿にする事は許しませんよ……

—身体強化

—増加

……：餓鬼が」

魔力で補った肉体で地を蹴り、スメラギ君に近付き左足で蹴りを放つ。

慌てた様子で剣を使い防御したが、甘い。

蹴り足は触手の塊だぞ？

「チッ！」

剣が絡め取られ、自分の身体が触手に触れる前に剣を手放した。

使う気はないので、捨てる。

「なんだ、使わないのか？」

「確定している勝利に乗せは卑怯でしょう？」

「確かに、俺の勝利は揺るがないがな！」

もうコイツ落として、帰りたい。

—落ち着けて

—帰って本を読みたい

— 面白いえばコイツに本を

「失礼、私情で申し訳ありませんが非常に貴方を倒したくなりました」

「何言ってるんだよ!」

「言葉も解しませんか。まるで獣ですね」

「化け物が何いってやがる!」

「バケモノにケモノ扱いされる貴方に何を言っても無駄ですか」

— はやてなら上手く返してくれそうだ

— 非情に倒したいなら誌上にでも載るやろね

— いない人間を考えたところで意味はないさ

「俺が勝つさ!俺を誰だと思ってるんだ?」

— 転生主人公

「俺は皇 光…世界を救う為に力を得た英雄なんだからな!」

「……………うわぁ」

— おい!素が出てるぞ!

— これをマトモに言えるだなんてスゴいな

— スゴいよスメラギ君!

— 俺に出来ない事を平然とやってのけるソコに痺れる憧れない!

「ではこちらも…」

アルハザードへの鍵のコピー、そのプロトタイプ人型触手系、
名称【アンヘル】です」

11 雑魚のクセに生意気だ

「人型触手系「アンヘル」だあ？」

「ええ城主がそう呼んでいたのよ」

「……チツ、やっぱりバグか」

「虫程度と同じにされると頭に来ますね」

触手を伸ばしスメラギ君を攻め立てる。

―スファイア多重展開

―防御結界準備完了

スメラギ君が虚空から剣を取りだし、迫る触手を切り落としていく。

―意味はない

―痛みもない

―虚空から剣？ 剣製でも得たか？

―ならば剣を捨てた事は正解だ

―収束砲安定

―バインド準備完了

―転移魔法確認

―チエツク

―チエツク

「雑種がああああああ！」

「プロトタイプ故純血種な訳がない」

触手の勢いを強めてスメラギ君を壁に押し付ける。

―あの物量を剣で防いでいた事は評価

―評価したところでマイナス面である事は変わらない

カット。

触手を押し込み更に圧力をかける。

―殺そう

―接近してきてるな

―殺したところで悲しむのはコイツに惚れてる奴だけだ

―魔力弾展開

―チエツク

―速いな…

「ウオオオオオ！」

「な、なに―」

少し力を弱めた触手からスメラギ君が脱出する。

―迫っていた魔力弾を寸で回避されたか

―スフィア展開

―遊び心は忘れずに

―さて兎戯を終わりに近づけよう

―劇にはちょうどいい配役とセリフだ

「貴方にはそんな力残ってなかった筈…どうして」

「ハッ！俺がテメエみたいな化け物に負けるわけがネエよ！」

「しかし…まだ甘いですね！」

「なっ!？」

―チエーンバインド発動

―捕獲

鎖に四肢を縛られたスメラギ君は此方を睨み吠える。

「離しやがれ！クソツ！」

「まだ時間はあるな…」

「なに言ってやがる！」

「ジャラジャラとウルサイですね。少しはお黙り下さい」

―収束砲解放

朱色の光の奔流がスメラギ君を飲み込む

―たーまやー

―かーぎやー

―そろそろ来るぞ

「ツぎけんな！俺がここで気絶したら何も助けられないじゃねえか
！」

「貴方如きが何を助けると言うのです」

「全部だよ！プレシアも、アリシアも、フェイトも！俺が救、」

「ふざけるなよ」

—魔力弾総射

「お前に何がわかる…娘を救うために自分を犠牲にしている彼女の気持ちの何を知り得る？」

「それでも…！フェイトだって娘だ！アイツだって生きてるんだ！認めさせてやる！俺が、ここで救って！家族を助けてやるんだ！」

そういう事を言ってる訳じゃない。

—仕方がない

—助ける為に壊したのに

—魔力弾接近

—防御結界展開

黄色い魔力弾が結界に当たり弾ける。

ようやく来たと言うか。来てしまったと言うべきか。

「フェイト…！大丈夫なのか？」

「うん。バルディツシュも頑張ってくれた。行けるよ」

「どうして来たのか、非常に聞きたいね」

「私は…：母さんと話したいから」

「それを彼女が望んで無くて？」

「うん…だから、通してほしい」

フェイトは此方を真つ直ぐ見る。

—照れるなあ

—フェイトを守るなら戦うしかない

—フェイトを守るのにフェイトと戦うのか

「私としては城主の願いが一番君を守れると思いますが」

「それでも…私は…母さんに会いたい。会って伝えたい！」

「…：…はあ…：…」

…：…もう一度問おうか。お前を守る為に…お前の願いはなんだ？

どうすればお前を守る？フェイト…：…お前が言うなら、俺は全てを守ってやる」

「私は…拒絶されても、母さんに会いたい…でも母さんは…」

「考え過ぎるなよ。素直に言ってみな」

「私は母さんと：アリシアと一緒に幸せになりたい：例えこの命が作り物だったとしても」

最初からそう言っただらばよかったのだ。

—無理だと思おう方がおかしい

—願いは聴いたぞ

—大切なモノだ

触手を戻し、展開していた魔方陣を全て霧散させる。

「それが願いだというなら、叶えましょう」

「ありがとう。ユウ」

「…？ユウ？」

「あれのコピーです。私の名称はアンヘルです」

「なら、ありがとう。アンヘル」

惚けたように言えば、明らかに気づいて苦笑しているフェイト。その隣にいるスメラギ君は名前の違いに首を傾げていた。

「さて、では行きましょうか。揺れが激しくなって来ましたから、急ぎましょう」

「うん」

「お前が仕切るんじやねえよ！」

「五月蠅いですねえ。雑魚のクセに生意気ですよ。鶴嘴でも用意しましょうか？」

「ハッ！あれが本気だと思ちなよ！」

「ならそういう事にしておきましょう」

「ところでフェイト様」

「どうしたの？」

「城主の研究資料がどこにあるか知ってます？」

12 御高説には感動しましたよ

「世界は、いつだって…こんなはずじゃないことばかりだよ！
ずっと昔から、いつだって、誰だってそうなんだ！

こんな筈じゃない現実に立ち向かうか、逃げるかは、個人の自由だ
！

でも自分の勝手な悲しみに無関係の人間を巻き込める権利は、どこ
の誰にもありはしない！」

「それを管理局が言うか」

「え？」

「何でもないですよ」

つい口に出してしまった言葉がフェイトに聞こえたらしい。軽く首
を振りながら地面にゆっくりと降り立つ。

「……………時間稼ぎも出来ないのかしら？」

「ええ、願いを叶えるのに邪魔な命令なんて聞く気はありませんから」

「そう…で、人形さんは何をしに来たのかしら？」

「フェイトは人形なんかじゃねえ！れっきとした人間だ！」

すぐくこちらを睨むプレシアな視線から目を逸らす。

—止めろって？無理だよ

—こいつを止めるなら核稼働の機動戦士でも持つてこないと

—もしくはピンナップ

「貴女に伝えたい事があって来ました

私は…アリシア・テストアロツサじゃありません。アリシアの代わり
には慣れない人形かも知れません。

でも私、フェイト・テストアロツサは間違いなく、貴女の娘です」
プレシアが少しだけ笑う。

それが後悔からきてるのか、それとも別の所からきてるかは、

——聴いたかしら？あれだけ拒絶したのにこの娘はやっぱり私の
娘ね。最高よ。エクセレント、もう死んでもいいかもしれない。今死
ねば幸せかもしれないわ

そんな念話が来てるのでスゴく解ってたりする。

―何、この親バカ

―極まった結果至ったんだろ

「プレシア・テストアロッサ！俺ならアリシアを生き返らせる事は可能だ！」

「…本当に？」

「ああ！だから、早くこの次元震を止めろ！もうアルハザードへ行く必要などないのだから！」

「根拠はあるのかしら？」

「俺のレアスキルの中にそういう薬があるはずだ！だから大丈夫！」

「そう………なら無理ね」

「何でだよ！止めるくらい大丈夫だろ!？」

だからプレシア、そのコイツどうにかしてくれって目はやめてくれ。

―出来るなら俺も止めたい

―根拠も証拠も不確定で何を言い出すんだか

―話がずれてるし

「はあ……もうこの次元震は止められないわ。管理局のお姉さんに聴いて見なさいな」

「本当かよ！クソツッ！」

「…私は行くとするわ、アルハザードへ……！」

プレシアの足場が崩れ落ちる。

重力に従いプレシアの体がカラフルな空間へと落ちる。

「【天の鎖】！」

スメラギ君の言葉と同時に虚空から鎖が顕れ、アリシアの入った円柱を縛り上げる。

そう、それだけを縛り上げた。

―走れ！

「おい！君！」

後方から聞こえた管理局員の言葉を置き去りに、触手を展開する。

―探知魔法発動

―拒絶された!?

―触手なら間に合う

穴を覗けばまだ姿の見えるプレシア。触手を伸ばしプレシアを捕獲する。

「止めなさい、私は死ぬのよ」

知ったことじゃない。

まだ生きれて、守らなくてはいけない命を殺す気はない。

―プレシアと触手の重さで身体が持っていられるぞ

触手を右腕に這わせ、伸ばす。支柱の一本をがんじ絡めにしてなんとか保つ。

「アナタはわかっていたでしょう?」

生憎と願いは変わったんだよ。

アンタと一緒に：母と姉と自分が幸せに成りたいって！

だから、暴れるのは止めてくれ。

「……………馬鹿ね」

そいつは悪かったな親バカ。

「アナタのお陰で計画が全部泡になったわ」

「粟なら沢山あった方がいいだろう?」

「残念ながら、手は濡れてないのよ」

「母さん!」

フェイトは母に抱き着き、その存在を確かめる。

母であるプレシアは固まってるが、幸せそうで何よりだ。

「なんでプレシアを助けた?お前を作った人間だからか?」

「……………さて、早く脱出をしましょう」

「おい!聞けよ!」

「なぜプレシアを助けなかったのですか?」

「…何言ってるんだ?」

あの鎖ならば一本でも人を救えた筈である。複数出しながらもプレシアに向かなかつたのは……………そういう事だろう。

―意思に従うならば

—いや、どうでもいい
カッタ。どうでもいい。

「…プレシア、少し失礼しますね」
「なによ…」

「睨まないで下さい。ちょっとした診察ですよ」

プレシアの鎖骨近くに触れて、触手を少し展開する。

—娘との幸せな時間を邪魔したからといって睨むなよ

—顔が完全に弛んでるぞ

—こう…もうすこし下に触手を動かせば

—解析完了

—微量の薬品反応と重度の肺結腫及び他臓器への転移確認

—よく生きていられた状態か

触手を戻しながら溜め息を吐いてみる。

「一応、管理局に頼んで医者に診られてくださいね」

「……」

「いいですね？」

「なんで私が……」

「母さん……」

「すぐに行きましょう」

変わり身早いな、おい。

「あと研究資料は何処にありますか？」

「……私のデバイスの中と部屋にあるわ」

「御意に」

全員とは別方向を向き、足に魔力を込める。

—素直に教えてくれるって事は期待されてるのかな？

—三度も触手プレイをした訳だしな

—二度目に至っては包み込んだしな！

カッタカッタ。

「ユ、アンヘル！」

「私はここで死にます。こんな化け物が世に出てもいいことなどない
でしよっ？」

「行くわよ、フエイト」

「母さん、でも！」

「大丈夫よ。アレは何があっても約束を守ってしまいう馬鹿よ」

そう言っつて無理やりフエイトを連れて歩き始めたプレシア。ありがたやありがたや。

—実際はプレシアが抱えられてるから何とも

—まあプレシアには伝わってるしいいか

「では、管理局の方…どうかお願い致しますね。私がこの崩落を抑えてますので」

「……ああ。すまない」

「おいクロノ！急げ！」

「直ぐに行く！……あの三人の事は任せてくれ。絶対に悪いようにはしない」

「それは感謝します……ああそれと」

「なんだ？」

「先程の御高説には感動いたしました。是非そのまま成長して下さい」

黒いチビツ子はばつが悪そうな顔をして踵を返した。

—ごまあ

カット。

「さて、頑張りますか」

到着したのは装飾の少ない部屋。強いてあげるならば壁や床が崩落している程度か。

—始めよう

—迅速に確実に、完璧に終わらせればいい

—解析開始

足元に現れた朱色の魔方陣から同色の糸が何本も伸びる。

―日記

―研究資料

―計画書、プロジェクト『F. a. t. e』

―エネルギー循環理論

―大型エネルギー炉開発

……

……

……

……

、

「………きて、逃げるか」

もう立ってるだけ…というか上にぶら下がっているのが限界なので、壁に転位陣を敷く。

赤黒い触手の縁に朱色の魔力光の行き先は海鳴市の自宅。

「これだけ資料があれば、いけるさ」

そう自分に言い聞かせて魔方陣の中へ飛び込んだ。

13 イヤーシマツタナー

「やっぱり右手まで延びてるか…」

右手を伸ばせば、肩から肘に伸びるように薄い痣が延びている。

―仕方ないといえれば仕方ないのだろう

―自業自得だ

―失敗、再度検証

―薬物消化完了

どうしたものか…。包帯を巻くべきなのだろうが、長袖なら隠せるか…5月半ばだぞ…今から暑くなるって言うのに長袖か。

―変化系の公式でも改悪するか

―公式展開

―失敗、再度検証

―約一年後完治予定

―向こうの医療がどれだけ進んでるかわからないけど此方よりはいいだろう

―失敗、再度検証

―擬装魔法プロトタイプ発動

目の前にあつた湯飲みの柄が変わる。数秒後割れた。

―成功

―成功じゃねえよ

―安全ですらない

―失敗、再度検証

―失敗、再度検証

この早さだとたぶん、管理局が帰る前に終わりそうにないな。

―全てを捨て置こう

―1ヶ月もあればいける

―ならば全てをソレに向けよう

―守る為なら仕方なさそうだ。

自室に入り、扉を閉める。周りには本が大量につまれたベッドに横になる。

解析魔法展開。

―失敗、再度検証

―失敗、再度検証

―失敗、再度検証

―失敗

―失敗

―失敗

―失敗



「ここが、あの馬鹿の部屋？」

「うん…本当にいるの？」

「居なかったら殺すわ」

「折檻を知る側としては、アイツに同情するよ」

「あはは…」

アルフの言葉に苦笑する。

あの子…なのはとの戦いも終わってリンディ提督に少しだけ外出の許可をしてもらった。

母さんは一応犯罪者なのでサーチャーも付いているが、気にはならない。

母さんの体調は悪い。お医者さん曰く、もう長くないらしい。

その事を聞いても母さんは顔を歪める事さえしなかった。わかっていたのだろう。

そんな母さんの願いで外出し、今現在ユウの部屋の前にいるのだけだ。

ユウはあの崩落で死んだ筈だ。少なからず逃げれるとは思えない。

「さあ入るわよ」

母さんが躊躇なくインターホンを押し暫し待つ。

押す。

待つ。

押す。

打打打打打打打打打打打打打打打打。

「母さん!？」

「……出ないわね。入れということかしら」

「なかなかの傍若無人ぶりだねえ」

「これでもフェイトやアナタにとって暴君だったのよ」

ガチャガチャと扉を弄り、鍵が閉まっていたのか舌打ちをする。

母さんが、普通に怖い。

「だ、大丈夫だよ。ここに鍵が入ってるから……」

「開けなさい……いえ、アナタがなぜこの部屋の鍵の場所を？」

「え？ユウが『夕飯より先に来たらここに鍵を置いとくから勝手に』って」

「あの子、人の娘に勝手に手を出して……挙げ句に私を殺すですって？

ああ思い出すと苛苛するってこの事なんでしょうね。あの時は計画の手前抑えたけど今はもう抑えなくていいのよね」

「か、母さん落ち着いて」

「今までが嘘みたいだよ……」

今鍵を開けると死ぬかもしれない。私やアルフじゃなくてユウが。

「フェイト、開けなさい」

「はい………あ」

今までの癖とは怖いモノだ。

母さんに命令されたら逆らえない。逆らう気も起きない。

イヤーシマッタナー。

少なからず、生きていれば私もランサーを撃ち込む程度はしてもいいと思う。

勝手に助けて、勝手に守る宣言をし、勝手に死ににいったのだ。

「フエ、フエイト?」

「ぎ、入ろう。アルフ」

「あ、ああ……生きててもアイツ死ぬんじゃないかなあ……」

相変わらずモノの少ない部屋。私の部屋に比べれば間取りも広くない。

「…アレは?」

「えつと…靴はあつたけど………」

「寝てるんじゃないかい?」

「なら寝室ね」

ガチャガチャと扉を開けて確認していく母さん。

そういえば私も彼の寝室には入ったことはない。入りたいとかそんなモノじゃなくて、風邪を引いた時にソファで寝かされてた事にそこはかとなく不満があつたり……なかつたり。

あの時は満足したけど今思えば中々に扱いが悪かつたと思う。

「フエイト、ここだけ開かないわ」

「それは引き戸だよ母さん」

「試したのよ。当然でしょう?」

苦笑しながら言えば、母さんは直ぐに私から視線を逸らせて引き戸を開けた。

開けた端から漏れる朱色は確かに彼の魔力光だった。

やはり生きていた。よかつた。よかつた…。

そんな事を思つて覗いて見ればソコは異の空間だった。

本が部屋の壁に積まれ、床にもところ狭しと乱雑に積まれている。そんな本の塔達にに囲まれたベッドで眠る彼の下に魔方陣が敷かれ、そこから同色の帯が本に伸びていた。その帯がついた本の数は精々片手で数えられる程度だが、問題は他にある。

その魔方陣が彼を中心に球を描くように多重展開されているのだ。片手で数えれた本は既に数えるのさえ億劫になる数になり、帯も同じ数であり、淡い光が互いに強め合い部屋から光が溢れていた。

「……化け物ね」

母さんの溜め息混じりの言葉が嫌に耳に残った。

「……………」

そこから数分してから展開していた魔方陣が消えてバサバサと本が落ちて音を鳴らす。

「ユウ！」

「!?、——、……」

驚いたように目を見開いて、ユウは此方を見てから口をパクパクと動かす。

微かに聞こえる掠れた声。それに眉を寄せてユウは立ち上がりキッチンへ向かった。

「ああ、起きたのかい」

「…、……………」

「なんだって?」

キッチンにいたアルフを退かしてグラスに水を注ぎ一息に飲み込む。

これほど水道水を美味しそうに飲まれるのは後にも先にもあまり見なさそうだ。

数える限り六杯程飲んだユウはようやく口を開いた。

「なんているんだよ」

至極尤もな言葉だった。

「あー、つまり俺の生存確認か」

「自惚れないで、死亡確認よ」

「はいはい。残念ながら生きてたよ」

先ほどまで布団に横になっていたからか、アクビを噛み殺して眠そうに目を細めてコーヒーを飲み込んでいくユウ。

「でも心配したよ?」

「それは……まあ悪かったよ」

「娘に色目を使わないでくれるかしら」

「色眼鏡で見てるアンタに言われたくねえよ」

溜め息を吐いた後にユウは真剣な顔つきになる。

「アンタの身体は治せるよ、プレシア」

「……………そう」

「ホントに!?!」

「一応。理論上はな」

苦笑しながらユウは答えた。

「それで、アリシアはどうなるの?」

「いける。ベルトを着けて変身!と言えば変身も出来る機能付きだ」

「磨り潰すわよ」

「グチャグチャにされるのは勘弁」

ユウは少しだけ溜め息を吐いて部屋から紙束を持ってきた。

「これは?」

「俺の実験結果な」

「は?」

「そういう装置は見当たらないけど?」

「当たり前だろ。アンタの装置を使えば出来る実験だからな」

ユウはコツコツと自分の頭をつつく。

「1ミクロまで精巧な誤差まででた資料が何年分もあったんだ。それを元に思考実験してやればいい。失敗すれば検証し、間違いを訂正し、再思考すればいい」

言うのは簡単だ。

考えて、どうなるかを演算、さらにそこから先を予測し、更にそれ続ける。

たったそれだけの事なのだ。

それを…無限に近い可能性の中、ユウは欲しい結論を拾い上げてきた。

「……………確かに私の実験器具ね」

「一応犯罪っぽいモノもあるから、前まで合法だったモノの代用品も書き上げてる。」

蘇らせること自体違法っぽいけど、アリシアが本体は死体だから治癒だとしても言えば法は抜け出せるさ」

ユウは笑ってそう言う。この結果が出るまで何度演算したのだろうか…………。

いや、ユウが起きてから今までの間で演算などしていなかった。何時したのだ？

「随分と思考実験を繰り返したのね」

「まあ最低限生存する事だけの行動だけして、意識と思考を全部実験に持っていったからなあ…………といっても精々55万回程度だ。運はよかったよ」

「は?」

「だってアレだぜ? 無限に近い数を漁る予定が55万で終わったんだぜ? 運はいいだろ」

「そういう事じゃなくて…………アナタ、ホントにバカね」

「誉め言葉として受けとるよマダム」

コーヒーを飲み干したユウはやっぱり苦笑をしていた。

「ところで、ユウのその腕は…」

「ああ触手か」

左手に巻いていた包帯を外し、痛々しい痣と甲に埋まる紅の宝石。少しだけ疑問だったユウの左手の包帯。

「母さんがしたの?」

「それがあるならアナタを危険な目を遇わせずに済んだわ」

「だとき。これはお前に会う前から俺にあるんだ」

「よかった…母さんがした訳じゃないんだね」

「おい疑われてたぞ」

「黙りなさい、吊るすわよ」

おー怖い怖い、と笑いながら言う彼は本当に楽しそうだ。母さんも少しだけ楽しそうに言葉を放ち、ユウのレポートに目を落とした。

「この名前は『アンヘル』。一応ロストロギアらしくて、伝承では人を喰らう化け物だったそうだ…次元震も多発させてたらしいな」

「へえ…だからアンヘルだったんだね」

「まああの時点では俺にとって触手は触手でしかなかったんだがな」

「ライトを圧倒してた時はびっくりしたけどね」

「あの戦いは勝つ気が無かったからな…時間を稼いでれば俺の勝ちだったのさ」

つまり、ユウにはまだ余力があったのか。

アレだけされて無傷だったライトもだけど、ユウも中々に化け物染みてる……

いや、ユウは自称化け物だったか。

「フェイト。アレはダメよ。母さんアレだけは許さないわ」

「大丈夫だよ。ライトにそんな感情持てないよ…良くて友達かな」

私の心が壊れかけた時に慰めてくれた事には感謝してるけど、本質的に助けてくれたのはやはりユウなのだから。

「ありがとう」

「……………」

「ユウのお陰で、私の全部は守られたよ。未来も心も、家族も」

「…………」

「…………ユウ?」

いつもなら軽口の一つでも飛んで来そうなのだが、隣にいるユウを見ようとすれば、此方に凭れてきた。

「ふえあ!?ユウ!?!」

「寝てるだけよ、あの時からさつきまでずっと思考実験を繰り返して眠ってもないんでしょ」

「……………そうなんだ」

ユウには何の得もない。本当に私を助ける為だけに無理をし続け

た結果。

私の膝を枕にしているユウの頭に手をおいて撫でる。
ありがたいの意味を精一杯込めながら。

「フエイト、頭を撫でるのは止めなさい。凄く、至極、非常に非情に
なってソレを壊しそうだよ」
「母さん…落ち着いてよ…」

*** ※オレとなのはと管理局と

オレには人に言えない秘密がたくさんある。

その一つが転生者であること。

オレはここに生まれているが、アニメの登場人物ではない。

この世界……『リリカルなのは』の中の人物ではない。

オレ以外にも転生者はいるようだが、ソイツが主人公…なのはやその仲間、アリサやすすかに近づく前にオレはその毒牙から守ってやらなくてはならない。

同じ転生者として、先にハーレムを作らなくてはならない。

その為にニコポとナデポを得たのだ。

やはり得てしまったからには、目指すしかないだろう、ハーレムを！

まずは力が欲しい。

しかし、どこからどこまでをあの胡散臭い神様が叶えてくれるのだろうか？

「神様！オレは『魔導士ランクSSS』を願うぜ！」

感じたのは、何かが満たされる感覚。

咄嗟にそれが魔力だと感じたのは、やはりSSSの力だろうか。

当然のように叶ったソレにテンションが上がった。

これで彼女達を助けることが出来る。

原作を否定できるのだ。

「フフ…アハハハハハハハハハハハハハハハ！いいぞ！計画は出来た！全てを救おうじゃないか！そして全てをオレの手の中にいれてやろうじゃないか！」

笑ってしまう。目的が完成したのだ。

それはもう、幸せな幸せな未来だ。

その為にさらに力が必要だ。何者にも負けることのない、全てを灰塵に帰せる程の力を！

「神様！更に願うぜ！第五次聖杯戦争での黄金のサーヴァント、ギルガメッシュが持つ【王の財宝】とその中身を！」

もう一度、オレは満たされた感覚を得て笑いを堪えることは出来なかった。

「さて……能力をわからないまま使うのは愚か者だ」

オレは勘で魔方陣を展開する。思考してたのは悪しくない星。さすがSSSといったところだろう。魔方陣の先には少し荒廃した場所に繋がった。

空を飛びながら地を見渡せば、荒れくれ達が殴りあい、子供が怪しい白衣に連れていかれ、少女が大人に拐われている。

「気持ち悪い……」

自分が望んできた場所だが、あまり居たくはない。殺すことでしか救えないだろう。

「恨むなら……ソイツらを恨んでくれよ……」

転移の基準となったのは『悪人』というくり。つまりそういった奴らがいたのが悪い。

これは仕方ないことだ。悪を滅ぼす為の……謂わばコロニーを落とす的モノだ。

「それでは悪人の皆様……いや、こう言った方がいいな」

虚空から現れた、空を多い尽くすまでの剣や槍や斧槍、斧、刀。

全ては殺す武器であり、生かす武器など入ってはいない。

手を水平に、空を撫でるように動かす。

「散れ、雑種ども」

その鋒は地面に向けて、いや悪に向けて速射されていく。

心が晴れる訳もないし、晴れると表現するほど雲ってさえもない。

あるのはただの虚無感と少しの興奮。

「これが、殺人か…虚しいな」

それだけを呟いて口角が上がったオレは海鳴市にある自宅へと戻った。

「よう、オレと遊ぼうぜ！」

「……………え？」

公園で栗色の少女を見つけたのはちょうどあの日から三日後だった。

ニコツと笑いかけてやれば、少し顔を背けられた。恥ずかしがりやがって。

「でも、あなたの事知らない」

「オレの名前は皇 光。光りって書いてライトって読むんだ。珍しいだろ？」

笑いながら隣に座る。実に自然だ。

「お前の名前は？」

「私は…なのは、高町なのは」

なのはキター！よっしゃ！この時点のなのはに会えた！

まあ会いに来たんだけど…これどこから先なのはに組する人間と関わりになれるし！なのはとも仲良く出来る！ヒヤッホー！オレって天才的だわ。

「これで知り合いだろ？遊ぼうぜ、なのは！」

「うん…ライト君」

「ライト君！」

「お、来たな。それじゃあ一緒に学校に行こうぜ」

「うん！」

頭を撫でてから一緒に歩く。

ニコポもナデポもヤバイな…精神的にキテるところに決めれば一発じゃないか。

やはり最高の能力だ。願ってよかった二つとも。

「お、二人とも来たな」

「おはよう、すずかちゃん、アリサちゃん」

「おはよう、スメラギ君、なのはちゃん」

「またアンタはなのはに構って…」

「なんだ羨ましいか？」

「誰が!? バカじゃないの?」

照れるな照れるな。撫でてやろう。

撫でれば落ち着いてきたのか、数秒して顔を赤くして撫でてた手を弾かれた。

「な、な、な、」

「な?」

「撫でるな!」

「照れるなよ」

「照れてない!」

「落ち着いてよアリサちゃん」

「すずかのいう通りだ。すずかは偉いな」

撫でようと手を伸ばしたら避けられた。
なぜ?

「え、あ、ごめんね。髪を触られるのちよつとだけ嫌なの」

「それなら仕方ないか」

バレたかと思った。

確かにすずかはアリサと違ってあんまり接してなかったし…これを機に落としていくか。

「よお!なのは!」

「あ、ライト君！」

オレの声に反応してなのはが此方を向く。

まるで向日葵のような笑顔だ。もちろん太陽オレで。

「あんた、また来たのね……」

「当たり前だろ？可愛いお前の為さ」

「はいはい」

少し赤くなつて顔を逸らしたアリサ。順調だな。さて、とさすがは。

「あ、スメラギ君」

「よ！………ん？その本……」

「あ、知ってるの？」

「いや……でも面白そうだな」

「うん面白かったよ。メイドさんの気持ちさがスゴく複雑で、でも真つ直ぐでとつてもいい小説だったかな」

「マジか！貸してくれよ！」

「え……？でも」

「アンタ！勝手にすずかの物を取らないの！」

「アリサちゃん、それ私の物じゃなくて……」「んじゃ借りるわ！ありがとうすずか！」

「あ、………うん」

ヒヤッホー！物を借りれたぜ。信頼の証？これって信頼の証ですよね？

帰り道、いつものように三人と帰る道。

相変わらず普通の日だった……強いてあげる事と云えばすずかが体育の時間に凄まじいプレイをしたらしい。

こいつらと同じクラスの奴ら全員死ねばいいのに。

『「たすーて」』

声が聞こえて、少しキョロキョロとする。

「なあなんか聞こえなかったか？」

「幻聴なんじゃないの？」

「あ、私も聞こえた」

「じゃあ幻聴じゃないのね」

アリサが考えてる間にガサガサと林に突っ込む。たぶんこっちの方にいたような…。

「居た…なのは！こつちだ！」

「ライト君、え？この子…怪我してる！」

「ホント？ちよつと鮫島を呼ぶわ」

『「たすけー」』

「大丈夫さ。お前は助かるよ」

そういう流れなんだから当然だ。

その後ユーノを助け、なのはは魔法少女になった。

この辺りオレは関与していない。なのはに魔法は危険だと解らせる為だ。もしオレの今までの関与でなのはが魔法を使うことを止めるなら、それはそれでいいのかも知れない。

オレがジュエルシードを集めて、フェイトとバトル。楽勝で勝ち、プレシアの元へ向かう。プレシアに「王の財宝」の中にある若返りの薬を飲ませて、たぶんあるだろう復活薬的何かをアリシアに飲ませればハッピーエンドだ。

うん。やっぱりハッピーエンドが一番いい。そしてオレがハーレムならそれで最高だ。

フェイトは心が壊された時に撫でればいいし、アルフはフェイトを落としてからでも問題はない。

魔導士ランクSSSの俺を管理局が放って置くわけもないし、この事件が終了したら二重生活か…なかなか楽しそうだ。

「実はオレも魔導士だったのさー」

「な、なんだってー」

「あんたね！いい加減にしなさいよ！」

「アリサちゃん……」

ジュエルシード集めを手伝っていたら、喧嘩が始まったか。でも安心してほしい、なのはにはオレがついているのだから。

「なのはは何があってもオレが守るから大丈夫だって！」

「……アンタ、知ってるのね」

「あ、いや、」

しまった、魔法の事は言えないんだった。

アリサに睨まれながら視線を泳がせる。

「まあいいわ……勝手にすれば？」

「アリサちゃん！ごめんね、私見てくるから」

そう言いながら二人は教室から出ていった。むうしまったな。明日謝るか。

「アリサ、昨日は悪かった！」

「はあ……なんでアンタなのかしら」

「はい？」

「いえ、何でもないわ……で何を謝ってるの？」

「ほら……やっぱり怒らせたのは不味かったし……オレはいいんだけどなのはは許してほしいんだ」

そう言えばアリサは溜め息を吐いてオレを見た。

「なんか……霧が晴れた気がするわ」

「は？」

「いいわ。なのはは許す……アンタは……そうね、保留よ」

「そうか、ならよかった！」

「精々私の評価を下げないように頑張りなさい」

「大丈夫さ。だってオレなんだぜ？」
ニコポとナデポさえ使えばいくらでも大丈夫さ！

「だああーさっぱりメイドが理解出来ねえ！」

なんなのこのメイド!?

主が大切ならずつと側で仕えればいいじゃないか！お嬢様を殺す意味はないだろ！

お嬢様はツンデレの可愛い人だったし！主人公の幸せを考えるなら、政略結婚の方がよかつただろ！

あれだ、この場面をこうした方が…

いや、この感情はおかしいから…

むむ、名前を変えてやれば…

「出来た！よし、明日すずかに返して真のハッピーエンドを見せてやろう！」

その日は随分とよく眠れた。

「すずか！これ返すぜ！」

「あ……………う、うん…」

すずかは本の表紙を見て固まる。それもそうだ、より素晴らしい題名に変わってるのだから。

「えつと……………」

すずかがチラリと視線を外す。その先に居たのは黒髪で瓶の底みたいな眼鏡をした根暗野郎。今時売ってるのかあの眼鏡。

その根暗野郎もすずかを見て軽く溜め息を吐いている。

すずかは根暗野郎に近づき、本を渡す。

そう、俺の最高傑作を渡したのだ！読まずに！

「返せよ！根暗野郎！」

「……返せよ、と言っても俺のなんだが」

「ウツセエ！左腕に包帯とか中二病かよ」

「…昔の火傷に包帯を巻いて何が悪い？」

違う！絶対にこいつは邪気眼的な中二病だ。オレにはわかる。

だから、早く完治させてやろう。

「ハあ？嘘だろ！そんな事したって誰も構っちゃくれねえよ！」

オレは右手を出して根暗野郎の左手にある本を取ろうとする。避

けられた。

さらに左手を出すのが避けられた。

クソが！中二病の癖に……！

そうだ！こいつが学校にこれないようになれば、すずかに一番近い

男はオレになる筈だ！

「シネエエエエ」

魔力によつて強化された右手がやつの左腕に巻かれた包帯を掴む。

取った！

「取った！」

取られた包帯を睨みながら、根暗野郎は必死に左腕を隠す。その腕

には痣が点々と浮き出ている。

「気持ち悪い」

「……気持ちいいものなら隠しはしないさ」

「どーせ、それもインクなんだろう？」

さすがオレ、完璧な推理である。

根暗野郎は溜め息を吐いて扉に向かう。

「逃げんのかよ！」

「……ああ」

「これだから中二病は……」

「スメラギ君…やりすぎじゃない？」

「荒療治だけどあれが一番いいんだよ」

「……………そう、私見てくるから。アリサちゃん、先生に伝えといて

ね」

「うん、わかった」

「すぐかはそう言って教室から走って行った。なんでだよ。」

「マイナス五点」

「は？」

「因みにだいぶアンタって事を考慮した点数だから」

「まったくもって意味わかんねえ……。」

「ライト君…どうしたの？」

「いや、大丈夫だ。気にするな」

「そっか…そうだよ。ライト君が間違えうわけないよね」

「当たり前前だろ？オレは強いんだからな」

「僕は時空管理局の者だ。二人とも来てもらおうか」

「フエイト逃走。」

「俺となのはとユーノは連行。」

「実は魔導士の三人には手伝ってほしいのよ」

「オレは手伝うよ」

「なら私も手伝う！」

「なのは、危険なんだからちゃんと考えろって」

「わかってるよ。でもライト君が守ってくれるんでしょ？」

「まあ…そうだけど」

「なら大丈夫だよ」

「なら手伝うという事でいいのね？」

「はい！」

「リンディさん」

「何かしら、ライト君」

「予想なんだけど、たぶんプレシアからの攻撃が来ると思う」
「プレシア……？」

「あ、えっと、フェイト……あの金髪の娘の母親なんだけど」
先にあの攻撃さえ防げば、プレシアの罪は軽くなる筈だ。

「だから、なるべく気をつけてほしいんだ」

「………わかったわ。なんとか頑張りましょう」

「ありがとう！リンディさん！」

「ライト君、私……あの子に勝てるかな」

「勝てるさ。大丈夫……お前は絶対に勝てるよ」

「そうだよね……ライト君が言うんだから、大丈夫だよね……」

『人形ですらないあなたは、もういらないわ』

「フェイトは人形なんかじゃないぞ！こいつはれっきとした人間だ
！」

「人間……そうだ………うん、そうだよね……ユウ」

「フェイト、お前を否定する人間にちよつと説教してくるよ」

フェイトの頭を撫でて、俺は庭園へと向かった。

「スメラギ君か！助かった！」

「クロノ！退きな！」

虚空から剣を顕す。

そしてソレは何かに弾かれたように敵に迫る。

「相変わらず、便利なレアスキルだな」

「その為に願ったんだからな」

「が、その技はもう使用しないでくれよ？」

「は？なんで？」

「犯人を殺してどうなる」

溜め息混じりに言われた。

クソツ。まあ剣一本でも強いからいいか。

「ライト君！」

「ああ、なのは。早く行こう」

「うん！」

手を繋いで空を駆ける。遠い敵はなのはが、近い敵はオレが倒していく。

吹き抜けの螺旋階段を飛び抜け、一番上にいたのは赤黒い甲冑の仮面を被った少年。

原作には現れることのなかった…オレが現れた事によるバグ。

「そうは思いませんか、管理局」

「なのは…こいつは俺がやる」

オレが戦わなければいけないのだ。転生主人公として。

「なのはは先に行け。お前がかなきやみんな傷つくんだ！」

「…うん！わかったよ」

「お見送りに感謝いたしましょう」

「直ぐに追い付くさ」

「果たしてどうでしょう。生憎と…」

仮面少年の左腕と左足に赤黒い触手が生える。

ニヤリと口角が上がり上がった触手人間は嗤らいながら

「人とは違うもので」

そう言った。

オレがいたから、こいつはバグとして存在する筈だ。

つまりプレシアが作った失敗作であり、ある意味の成功とも言える。こんな子供に埋め込むのはやはりおかしいが…。

「原作より堕ちたか…プレシア」

「あなたが城主の何を存じてるかは知りませんが…：…：餓鬼が」

触手少年が突然接近してきてオレを構えていた剣ごと蹴る。

ウジュリと滑った音がして気がついた。

触手がオレの剣に張っている。

僅かな舌打ちと一緒に剣を手放し距離をとる。

クロノに剣射さえ封印されていなければこんな奴…。

「私情で申し訳ありませんが、非常に非情にあなたを倒したくなりま
した」

「何言ってるんだよ！」

「言葉も解さない獣でしたか」

「ウルセエよ！化け物め！」

「その化け物に獣扱いとは……」

あきれたように頭を振る触手少年。

しかしながらオレが負ける訳がない

「オレは負けない！…俺が誰か知ってるのかよ！」

オレが負ければ誰が世界を救うというんだ。

誰がなのはを守るといふ。

誰が悪夢を消すというんだ。

「オレは皇 光…世界を救うために力を得た英雄なんだからな！」

「オレが守らないとダメなんだ！フェイトも、アリシアも、プレシアも
！みんな助けるんだ」

「お前に愛する娘を拒絶してまで守ると決めた彼女の何がわかる？」

アリシアは死んでるから拒絶もされる。それでも

「フェイトを人形扱いする意味はねえんだよ！アイツは生きてるんだ
から！」

だからこそオレは戦うのだ。

「わかりました。フェイトが望むなら城主の場所に行きましょう」

「ありがとう、ユウ」

「ユウ？」

「あれのコピーです。私はアンヘルですよ」

「ならありがとう、アンヘル」

苦笑するフェイトと無表情を貫くアンヘルがやけに仲良さげにみえた。

まあフェイトは既にオレのモノだけだな。

「オレならアリシアを救える」

「本当かしら？」

「オレのレアスキル内にそういった薬がある筈だ」

若返りの薬があるのだから、蘇生薬もあるだろう。

「……無理ね」

「なんでだよ！次元震を止めるぐらいいけるだろう？」

「……管理局のお姉さんに聴いてみなさい」

——リンデイさん！

——無理ね。崩落は止められないわ

「クソッ！」

「じゃあ、私は行くわ……さよなら、フェイト」

プレシアの足元が崩れてアリシアと共に落ちていく。

救える命が……救えなくなる！

【天の鎖】！

虚空から伸びた鎖が円柱の硝子管を捕らえた。

これでアリシアは助かった。

「おい！君！」

クロノの声が響く。

オレの後ろにいた筈のアンヘルがプレシアの落ちた穴の縁で左手を解放する。

そのまま右手も解放して虚数空間から触手を抜けば、触手に絡まれたプレシアが引き上げられていた。

「母さん！」

「……………」

全くもってわからない。どうして助けたのだろうか。自分を作ったからだろうか、こいつはこいつで酷い目にあっている筈だ。

「どうしてプレシアを助けたんだ？」

「なぜプレシアを助けなかったんですか？」

それは…【天の鎖】がアリシアだけを掴んだからである。あとは虚数空間に鎖を入れて消えないか不安だったのだ。諦めるしかなかった。

「くそっ崩落が酷くなってきたな！クロノ！急げ！」

「ああ……………」

アンヘルと話していたクロノが此方に走ってきた。

「アンヘルは？」

「この崩落を抑えて…死ぬそうだ」

「そうか…化け物の癖に人間臭いな」

「いいじゃないか。それが彼だよ」

「なんでフェイト達に会えないんだよ！」

「彼女達は精神的に不安定なのよ…わかりなさい」

リンデイさんに言われながら落ち着く。

クソッ、心配なのに…！

「リンデイさん、オレ管理局に入るよ」

「……………確かに、貴方のようなレアスキルを持った人間は歓迎だけれど……」

「囑託魔導士ならこの世界から転移をしながらどうにかなると思うんだ」

「そう……………わかったわ。親御さんにはちゃんと伝えなさい」

「普通の親だから……まあ驚くだろうな……………」

そしてオレは管理局との繋がりを持つことになる。

*** 考えない自称化け物と自称英雄

今現在まで出てきた主人公二人の設定

自称化け物の考えない思考チート

名前――

御影 夕

なまえ――

みかげ ゆう

年齢――

9歳

性別――

男

容姿――

黒髪に黒目の平凡容姿に瓶底眼鏡を着用

能力――

分割思考

ロストロギア所有者

願い――

1, 大切なモノを守りたい

2, ―――

3, ―――

備考――

神様に殺された転生主人公。

触手に侵された自分を化け物と称する少年。触手であるロストロギア【アンヘル】に侵されたのは幼少の頃。【アンヘル】に関しては後述。

会話が上手く、どちらかという聞き上手。ただ基本は相手に皮肉を言うことにしている。

願い【大切なモノを守りたい】によって【アンヘル】を神様によって埋め込まれた。

面倒な事を避ける傾向にあり、他人と接する時は一通り考えてから

行動する。

対して、接したきた相手とは面倒でも尽くすタイプでもある。

女の子と会話をしていると、思考のどこかで必ずセクハラをしている変態。治す気はない。

ロストロギア【アンヘル】

みんな大好き触手。

性質を言うならば、暴食と畜蔵。魔力を喰らって、溜め込んでいる。触手自体を使うことで宿主に侵食していくが、総量でいう少量の魔力を使うだけならば問題なし。

分割思考

一つの思考で複数考えるマルチタスクとは違い、複数の思考を所有する能力。

物語序盤では複数の思考を並列化せずに普通に回転させていた。

複数の魔法行使が可能で、主人公はその演算を一人で1からやっていることになる。

願い【大切なモノを守りたい】

主人公最初の願い。曖昧な願いで幅が広い。主人公が「守る」と決めたモノに対して有効に働くが、最低でも主人公が「大切」と思っている事が最低条件。主人公が「守れない」と思考した瞬間にソレは永遠に守れなくなる意外とリスクな願い。

自称英雄の思考しないチート

名前一

皇 光

なまえ一

すめらぎ らいと

年齢一

9 歳

性別 —

男

容姿 —

銀髪でオッドアイのイケメン

能力 —

ニコポナデポ

宝具【王の財宝】

魔導士ランク —

SSS

願い —

1, 魔導士ランクSSSの実力

2, 第五聖杯戦争時のギルガメッシュが所有する【王の財宝】

3,

備考 —

転生主人公。原作知識あり。

転生した主人公なので世界は自分の思い通りにいくと思ってる素晴らしい頭脳の持ち主。二つの願いを行使し、自分で戦える能力を得た。

悪人達を成敗する事により、力を確信している。

ニコポナデポの能力者で女の子には常に笑顔を振り撒いている。

原作主人公である高町なのはとは幼なじみである。

【ニコポナデポ】

笑顔と撫でる。二つの行為どちらかで好意を抱かれる能力。この作品では直ぐに効くモノではなく、ジワジワと汚染されていく形の能力にあたる。

長時間彼と共にいると笑顔で汚染されていく。

嫌悪感を抱いている相手程効きづらいが、撫でられながら笑顔を見せられているだけで好意的な感情が芽生える。

ある意味催眠術。効果はほぼ永続的だが、何かしら劇的な事がある
と一時的に素に戻る。

【王の財宝】

ギルガメッシュが生前集めた宝を納めた宝物庫に繋がる門。設定
上、持ち主の財により姿を変えるが彼は願いによりそのデメリットを
消した。

詳しくは型月様の wiki 参照。

これにて設定まとめ終了

A's 期

01 下駄箱にラブレター、果たし状、本人

「つまり…私の家に来てからその後、教えてくれた電話にも出えへんかったのは、未知との遭遇をしてたからやと?」

「わたくし、嘘など一切ついておりませぬ!だから、なにとぞ、なにとぞ命だけは…!」

「ならん!お前は打ち首じゃ!」

「ヒエエエ」

「なんや、安心したわ」

「奇遇だな、俺もだ」

あれから数日。俺の生活に大きな変化はない。

—フェイトが来る前と一緒だ

—ただ学校にいつて

—帰りに図書館により

—自宅までに買い物して帰る

—暇な日常だ

非常に素晴らしい日常だ。

「で、ホンマに大丈夫なんか?」

「何がだよ。ボケの切れが悪いつてか?」

「ボケにキレなんて求めだしたら漫才はその場逃れの笑いになるやろ」

—同意見だ

—キレるのはツツコミだけでいい

—キレられるのは困るがな

カット。

「そういうんやなくて、包帯の話」

「……よく見てるな」

「相方が見られへん漫才師なんてテレビの前にお客さんだけやろ

？」

「客を漫才師と同列で扱うなよ」

「笑いを取るといふ行為においてはライバルであり敵やけどなあ」
過激な発言ですこと。

—どうすればいい？

—もうバラしたらいいんじゃない？

—なぜバラすし

カット。

「まあ言いたくないならいいわ」

「言いたくなれば言うよ」

「ほな、そういうことで納得したろ」

「感謝の極み」

「私の為にもっと感謝を鍛えればええよ」

「あざーっす」

「軽いっ！極めた結果軽くなるんか！」

感謝はカンストして最初の方に戻りました。

—ステータスが一周回って0とか勘弁

—カンストしてるなら0にさえならないけどな

カットカット。

「で、6月に入ってから2日。お前からの留守電を聞いて来たんだけど？」

「実は……、あれや」

「アレか…」

「なんやわかったんか!？」

「まったく…俺とお前の仲だろ。大丈夫覚えてるよ」

「そっかあ、うんそうやんな。私と御影君の仲やもんなあ」

「そうさお前が、」

「私の誕生日は覚えてて当然やんなあ」

「……………」

誕生日？誰が？いつ？

—誕生日

—はやてが

—……いつ?

—やばい!ヤバイぞ!

—偵察兵!今すぐに状況を知らせろ!

—対象、魔法少女マジカルヤガミンの誕生日が近いです!

—いつだ!

—わかりません!

—バカ野郎!すぐに調べんか!

「……なんやえらいビックリしてるなあ」

「そんな訳ないだろ?目が白黒なのもいつも通りさ」

「なら、私の誕生日がいつか……言えるよね?」

—思考を回転させろ!

—5日だ!

—なぜ?

—いつかって言ってたじゃないか!

—カット

—探せ……!

—電話横のカレンダーの5日に丸がしてあります!

—これは確定的だな!

「5日だろ?大丈夫、わかってるさ」

「……なるほど、メツチャ視野は広いねんな」

「は?」

「御影君、カレンダーの丸を見て判断したやろ?」

「何を言ってるんだか」

「あれフェイクやで」

「なんだと!?!わざわざそんなモノまで準備するか!?!」

「フェイク言うても、診察日やから丸してただけやし……で、弁明は

「?」

「この度は大変申し訳ございませんでした。よければワタクシめにあ

なた様の……生誕した日を教えていただければ……」

「仰々しすぎひん?」

「わるい、誕生日教えてくれ」

「その方がやっぱりええよ」

クスクス笑いながらはやては赤ペンを握り、俺の右手をとる。
キュキュツと軽い音がなり、俺の手に「6/4」と書かれた。

「二分の三」

「やなくて私の誕生日な」

「あと2日かよ…」

「教えよう思っても御影君は電話にでんし…」

「留守電にでも入れればよかつただろ」

「ほら、こういうのって直接伝えたくならへん？」

「わからなくもないが…あれだろ、下駄箱にラブレターじゃなくて果たし状どころか本人がいる的なの」

「ごめん、それはまったくわからんわ」

当たり前だ。俺にもわからん。

—どうせ黒髪のポニテ巨乳が日本刀持ってたんだろ

—胴着つてこう…非常にいい形してるよな

—袴しかりな

—剣道、弓道は本当に最高だ

—さすが俺だなよくわかつてる

—当たり前だろ俺

カット。

「それなら…そうだな、ここに来て料理でも作ってもいいか？それなりに上手いつもりだけど？」

「ホンマか！いやあ楽しみになつて来たわあ」

「安心しろ。最近、暗黒物質の作り方を覚えたところだ」

「どこに安心できる要素があるんやろ…あれか？NASAに捕縛される姿がサプライズなんか？」

「グレイもびつくりだな」

—大人に連れられたガキか

—見方によれば誘拐だよな

—ちやんと力を抜いて引き摺られるよ

—足が磨り減り過ぎて無くなりそうだ

「で、ホンマは何やと思ってたん？」

「あー…怒らない？」

「怒らんよ。第一、一回家に來た人間が私の誕生日を知ってること自体がおかしいと思ってたんやし。御影君との会話で誕生日は一切言うてないし」

「それ俺にとって絶望的じゃね？」

「でも応えてくれるんやろ？」

「そうだけど…なんか釈然としないというか」

「で、何やと思ったん？」

「…あの本達の返却だと思っただよ…」

手提げ袋のライフをことごとく減らし続けた、あの本達。

—はやてだけだと返すのに苦労するしな

—車椅子は大変だな

「ああ、ソレやったんか」

「そうソレ」

「つまり、今日呼んだ理由やね」

—え？

—落ち着け、落ち着くん

「返却は今日やから呼んだんよ」

「あー…わかったがわからん」

「何が？」

「…一重に言えば乙女心？」

「そんな男がわかった所で仮初めでしかないからわからんでええよ」

「そうだな。山の天気を予想する方がまだ簡単らしいし」

そう思いながら、俺は手提げ袋のライフを減らしていく。

—もう止めて！

—離せ！

—もう手提げ袋のライフは0なのよ！

—A I B O おおおおお！

—なぜロボットの話になったんだろう
カットカット。

「そういうえば、誕生日プレゼントとか至極面倒且つ鬱陶しいモノは必要か？」

「その言い方で頼むとは言われへんねんけど？」

「日数を考えたら、面倒になった。サプライズとかなかった」

「サプライズは……まあ考え方によっては鬱陶しいだけやからなあ」

じゃあ無しの方でいこう。

—二日で俺が用意できるモノなんて少ないしな

—乙女心は雨ではないようで

—雨でも地は固まらないし

—地面は火山灰で出来ていた

カット。

四日はついでに本を数冊持っていこう。

それなら乙女心も大丈夫だと思う……たぶん。

02 プレゼントに生首四つ程いかが？

相変わらず続いているランニングと軽い想像による理想の予備動作が皆無の瞬時的移動訓練。

- ―向いてる方向以外に移動出来れば
- ―その先は連続的な移動
- ―普通に走りながらの別方向への急加速
- ―直線距離の延長
- ―やる事が大量にあるようで何よりだ
- ―身体強化魔法も安定してきた
- ―やはりオツパイを触るために柔術にすべきだ
- ―体内の攻撃は疲れるさ
- ―サブミッションでの寝技とか
- ―相手を無力化するのには使えそうだが
- ―魔導士なら気絶させるか思考を停止させるしかない
- ―首折ればいいじゃない
- ―オツパイには夢と浪漫が詰まってるんだ！
- ―チツパイは希望と夢を抱いてるんだ！
- ―痛感を復元、鈍化
- ―疑似回復魔法を展開
- ―いつそ中国系拳法でも
- ―避け中心、一撃無力化を狙うなら混ぜるしかない
- ―島津の剣も魅力的だな
- ―あのなだらかな流線型を見てみる！水の抵抗を一切感じないんだぞ！
- ―愚かだな俺…全てを包み込むオツパイこそ正義だ！
- ―やはり解り合えないんだな…
- ―仕方ないさ…
- ―疑似回復魔法行使完了
- ―魔力還元を考えると効率的か
- ―痛感通常

—さあ殺し合おう、俺よ！
カット。

身体強化による筋肉断裂さえ抑えれば、この魔法も随分と効率的になるんだけど。

—疑似回復魔法と同時使用なら今現在が優秀

—構築式も簡単

—但し脳処理の強化もしなければ画像処理が追い付かない

—考えものだな

運動が止まった体から汗が溢れる。

今日は帰ろう。明日は八神の誕生日だ。

—はやてがまた一つ老いるのか

—成長するのさ

—胸の成長はしなさそうだけどな

6月4日。だいたい昼ちよつと後。

八神宅へ到着。

—留守電では早く来いと言われたが

—さあ食材の準備は出来たか？

—作る料理の選択は？

—盛り付けの仕方は？

—ケーキの準備は？

—安心しろ、全て完全に完璧に完了している

—むしろ多すぎるな

—はやての困った顔を拝めるのか

—よろしい、ならば戦争だっ！

ピンポンと間抜けなチャイムが鳴る。

—勿論、押したのは俺なのだが

—当然、出てくるのははやての筈だ

ガチャリ、そんな音が鳴って現れたのは濃い桃色の髪に黒い服。

- ― 誰だこいつは
- ― はやては？
- ― 危険と判断
- ― 解析魔法展開
- ― 八神はやて生存確認
- ― 防音認識阻害結界展開
- ― 痛感遮断
- ― スフィア展開
- ― 身体強化及び回復魔法行使開始
- ― 魔力反応5
- ― 内一つは八神はやて

「っ!？」

桃色が剣を取りだし構える。

― 魔力弾射出

同時に荷物を捨てるように置き、駆ける。

― 魔力弾防御確認

― バインド準備完了

桃色の肩を手で払い、奥へ向かう。

「クソツバインドか!? ヴィーター!」

廊下を抜けてキッチンに入れば同じく黒服の三人と八神。

― 褐色が気付いたぞ

― 先に無力化しろ

― スフィア

― はやてに当たるぞ!

― バインドを

「ウオオオオ!」

「チッ!」

褐色の男からの拳を回避する。

― 赤髪から魔力反応増幅

― 廊下から桃色接敵

― 金髪がはやてを押さえている

―金髪は攻撃に参加しないのか

―往け！守れなくなるぞ！

―後悔はもう沢山だ！

足に力を入れて自分の斜め前に瞬間的移動を行使する。

―こちらを確認しているのは褐色

―廊下からの視野で桃色のみ

窓の棧を足場にはやてに向け移動する。

―バインド行使

―金髪捕獲完了

―触れて常に魔力を流せ

―はやて救出完了

「お前！主をどうする気だよ！」

「俺が聞きたい。お前らなんだよ…はやてに何用だ？」

「貴様、どういう心算だ」

「動くなよ。うっかりバインドが滑って仲間が死ぬぞ？」

睨み合い、ピリピリとした空気が空間を制圧する。

「……………あー、なんや……………ええかな？」

そんなピリピリした空間ではやてはようやく口を開き、手を上げた。



「あー……………なんだ…つまり、コイツらは件の本から現れたと？」

「イエス。なんや私を主と勘違いしてるみたいでなあ」

粗方の説明が終わって、数秒後に御影君は口を開いた。正しく理解していたようや。

「主。貴女は主の他の何者でもない」

「ウルセエなロリータ。卵アイスを口に突っ込むぞ」

「ア、ア？」

「おいおい、勝手に動くなよ。うっかり手が滑りそうになる」

「卑怯者め……」

「卑怯上等。誰かを守れるなら罵詈雑言も食ってやるさ」

「喧嘩、やめー!」

私は声を上げて制止させる。

それで二人とも黙ってくれるから楽で助かるねんけど。なんで喧嘩するかな。

御影君が焦ってる感じも気になるし。一向にこっち向かんし、むしろ御影君が家に突入してきたスピードがおかしかったし、とにかく何もかもが知ってる御影君ではない。

「御影君、ちよい落ち着き…なんやいつもの感じじゃないで?」

「俺はいつも通りさ。いつも通りに息をして、いつも通りに歩き、いつも通りにコイツらを捕縛し無力化した。オカシイ点なんて家の前に置いてきた割れた四個の卵ぐらいだ」

「ああ…もう…なんでそうなるかな」

頭をグシャグシャと搔いて考える。

相変わらず思考回路が凄まじい事になってる御影君を見つめて考える。

あれか、普通に聞けばいいんか。

「わかった…:御影君は何をしたいの?」

「コイツら消したい」

「なんで?」

「はやてを守る為に決まってるだろ」

「我らが主を危険に晒すと言うのか!」

「現時点で危険と判断した結果だ桃色刀剣女。手前に意見する資格は与えてねえよ」

……、なんや、あれ? 空気が殺伐としすぎてヘリウムぐらい軽く流されてるけど、今普通に告白されてなかった? 誰が? 私が。

「顔が赤いな…風邪か?」

「ちやうから、後ろに目でもついとんのか?」

「付いてても髪が邪魔で見えねえよ」

落ち着け、落ち着くんや私。こんな反応してる人間が告白とかする

と思うか？しかも相手は御影君やねんで？

確実に答えはノーや。

落ち着くにはどうするんやっただけ？手のひらに人？ラマーズ法？あかん、顔が熱い、耳たぶを触ろう。

一通りボケると落ち着いた。うん。落ち着いた事にしとく。

「あー、とりあえず……ゆ、夕君は私に言うことあるやろ？」

「…………お邪魔します、誕生日おめでとう、プレゼントに生首四つ程いかが？」

「……生首四つよりいつもの夕君が欲しいね」

「ゴイツらに危険が無ければ、直ぐにでもいつもと一緒な俺とお前になるさ」

「…………ハア。わかった。今のままやからややこしいねんな」

早朝からずつと言われてきた事を認めるか、生首を四つプレゼントに貰うかなら断然前者の方がいい。

「私の従者やねんから、私に危険な筈ないやろ？」

「……本当に？絶対？嘘なら針千本は止めるけど夕飯がハンバーグになるぞ？」

「ホンマやから。何ならここで誓わせよか？」

私の前で私を守るように立っていた夕君から覗くようにしてシグナムと名乗っていた女性に声をかける。

「シグナムさん」

「敬称も敬語もいりません、主」

「さよか……なら」

シグナム、守護騎士達よ。

私に誓え。信仰すべき私に誓え。

私に危害を加えるな、私に危険を与えるな。

当然ながら、誓えるな？」

「ハッ！」

「あと私の家族になって下さい」

「ハッ！……………え？」

返事はしたということ、これにて騎士の誓いは完了した。

「という事やから、私の家族がメンチカツになられると困るねんけど？」

「……わかった。わかったよ」

夕君はかなり呆れたように肩を竦めて、私の後ろにいるシャマルを解放した。

その瞬間に夕君に光の帯が巻き付き、シグナムの剣が首筋に当たり、ヴィータのハンマーが構えられた。

「おいおい、バインドと得物のヤバい方がこっちに向いてるぜ？」

「シグナム。剣を収め、ヴィータも、ザフィーラもな」

「しかし、」

「気にするなよはやて。コイツらにとっては当然の行動だ。むしろ安心しろ」

「……夕君に危険はないよ。剣をおろしてくれるよな？」

「……確証は？」

「腕の一本でもやろうか？足でもいいし、いつそ殺してくれても構わんよ」

シグナムと夕君の視線が合う。

シグナムは溜め息を吐いてから剣を下げた。それを切っ掛けにヴィータもハンマーを下げて、夕君に巻かれてた帯も消える。

「貴様……」

「ご理解感謝」

「夕君も冗談が過ぎるって！ほな、ご飯食べよか！夕君作ってくれるんやろ？」

「……任せろ。ハンバーグもメンチカツもソーセイジもないけどな」

そう言いながら、夕君は玄関へとテクテク歩いて行った。

話を無理矢理止めさせた私も浮いているが、夕君の後ろ姿を見つめて眉間に皺を寄せているシグナムもなかなか浮いていた。

割れてしまった卵はオムライスにでも使おうかな。

—本当に彼らは安全なのか？

—あの本から出てきたんだぞ？

—少なからず魔法関係に巻き込まれるぞ？

カット。

あれでもはやての家族なんだ。

—口だけでは？

カット。今現在までを思い返せ。

—はやての誕生日に彼等は現れた

—彼等のはやてを主という

—…：電話が来たのは早朝だったな

—という事は

「俺の早計愚策？うわあ、うわあ……」

料理中にも関わらず頭を抱えて悶絶する。

—普通に考えればわかる事

—やりやがったぞこいつ

—やーいバーカ

—これだから焦った馬鹿は

—ワロス

—ざまあ

カットカットカットカットカットカットカットカットカットカット
トカットカットカットカットカット。

なんで自分の思考に追い詰められなくちゃいけない…。

ヤバい、なんか思い出してきたら恥ずかしくなってきた。

—はやての事を呼び捨てにしてるしな

—そこまで余裕なかったのかよ

カットカット。

思い出させるな。なかった。うん、何もかもはなかった事にしよう、うん。

―現実逃避乙

―誇れない誇りは埃と同等

―三点

―五点満点中だろ

―え？

カツト！

「えー、この度は大変ご迷惑をお掛け致しました。少しばかり焦った結果がアレです。普通に考えれば全くあんな行動を取らずに済んだのが判明しまして、ワタクシ非常に反省しております」

しつかりと頭を下げて、というか土下座する。

「……………」

「みんなもそんな目で彼を見んといたって。反省してんねんし」

「もう八神さんの谷間より深く反省しております」

「…シグナム。但し峰でな」

「ハツ」

「痛い！」

―あれか、自分には谷間がないから反省してないと

―桃色も桃色だ

―躊躇なさすがだろ

カツト。

「まあええわ。とりあえずご飯にしようか」

「誠心誠意、真心を込めて作らさせて頂きました」

「……二人やったらどうするつもりやったん？この量」

「タツパーは持参した」

「持って帰る気やったんか」

無駄は省かなければならないだろう。当然だ。

―当然に決まってる

―はやてを困らせるなどあり得ない

―いざとなれば一人でも食べれたさ

「そういえば、八神」

「……ん？どないしたん、夕君」

「…どうしてそんなに不機嫌なんですか？」

「今しがた、凄く納得のいかん事が起こったから」

―嫌い料理が入ってたとか

―でも重ならないように結構種類を用意した訳だし

―あれか？はやての事を八神で呼んだからか？

―自惚れんなよ

―自壊しろ

「まったく思い付かないんだけど」

「……………まあ、夕君やもんなあ…：なんと云えばいいんやろ。私本人から言うんもなかなかに恥ずかしいモノなんや」

―あれか、実は生理か

―小学三年つて初潮とかきたっけ？

カツト。口に出せる訳がない。

「気づかんならええよ、でどないかしたん？」

「いやさ、こう無言で食べられてると作った側として緊張するということか」

「わからんでもないよわからんでもないけど」

「と言うことだ、主の願いなんだから感情ぐらい表に出せよカラフル四人組」

「ぶっ壊してやろうか」

「第一声がそれかよロリータ」

「ヴィータ。こんなんでも私の友人やねんから、半分くらい壊す程度にししいな？」

「壊す事に異存はないんですね、八神さん」

「やっぱり壊れてええかもな……」

「ロリータ、ハンマーの先が尖ってるぜ？そんなモノ当たったらどうなるか解るだろ？人なら死ぬな、確実だ」

「主の為だ。壊れる友人」

「ヘルプ！八神さん！このロリータマジだよ！」

「ヴィータ」

「……………」

おー怖い。人なら死ねた。

―誕生日パーティーの装飾が赤になるところだったな

―しかしながら誰も喋らないな

―感情に乏しいな

―しかしながら、デカイ

―ないすオツパイ

カット。

「八神、結構真面目な話をするぞ」

「風邪でも引いたんか？横になる？」

「真面目な話をさせてくださいお願いします」

「しやあないね。言うてみ？」

「八神があの本の契約者だとすると、魔法関係の厄介事に巻き込まれると思う。それでもお前はコイツらの主でいるか？」

ただでさえ封印されていた本だ。

何かあってもおかしくない。考えれる未来など那由多以上にある。

「あの本はなんなの？」

「俺はわからん。そいつらに聞いてくれ」

「あれは闇の書と言って…主の願いを叶える本だ」

「その為には魔力を蒐集し、ページを埋めなければならないの」

「その魔力を集めるために私達は作られた」

「主に従順で」

「主を守り」

「主の敵を倒し」

「主の為に魔力を蒐集する騎士」

「剣の騎士シグナム」

「鉄槌の騎士ヴィータ」

「湖の騎士シヤマル」

「盾の守護獣ザフィーラ」

「よろしくね!」

「……なあ、真面目な話するんやなかったん?」

「いや、なんか耐えれなかった。反省してるからこの件に関してのツツコミは勘弁してくれ」

なんで言ったのだろう。

―その場のノリで言うから

―だって話を聞く限り嫌な予感しかしないし

―嫌な予感は大抵当たるしな

―まあ嫌な予想を数千以上考えれば当たるよな

―下手な鉄砲数打ちやあたる

カット。

「なるほど、つまりあれか?その魔力さえ集めたら私の願いがなんでも叶う訳か」

「はい、その通りです」

「魔力を集めるにはどうしたらええの?自然界から搾取するとか?」

「いえ、他者のリンカーコアから直接奪います」

「りんかーこあ?」

「魔法使いが魔力を溜め込んどるところって考えればいい」

「……それが無くなった人はどうなるの?」

「生物は少なからず魔力を消費して生きている、つてのが通説だから魔力がなくなりや死ぬんじゃね?」

「なら蒐集は禁止で」

「は?」

「他人に迷惑掛けてまで叶えたい願いもないし。第一、私の願いは既に叶ってる訳やし」

はやてはそう言いながら俺が作った料理を食べ始めた。

―あれ?話が終わった

―いや、あれ?

「八神、結局俺の質問に答えてない」

「その程度の危険度で家族を捨てる選択肢は私にはあらへんよ」

「そうか。ならいい、そういう感じだ四人組。飯食おうぜ」

思いつきり首を傾げる四人組を見ながら、我ながら上手く出来たと
思う料理に舌鼓を打つことにした。

04 清濁を飲み込んでこそその美少女

「洗うの手伝うわ」

「おいおい主役なんだからノンビリしてろよ」

「来賓やねんから、此方の言うこと聞いたら？」

「いまソレを言うのか」

「こっちのが落ち着くんよ」

カチャカチャと食器が洗われる音とリビングでテレビの音が聞こえる。

「ありがとうな」

「なにが？」

「…なんでもないよ」

「変な八神だな」

「変な夕君に言われたらオシマイやね」

クスクス笑いながら八神は食器の泡を流していく。

—感謝される事なんかしたか？

—まったく

—普通に動いた結果だ

「そういえば、八神」

「ん？」

「明日は診察だろ？アイツらどうする気だ？担当医への言い訳もだし、連れて行くにしてもあの格好はアウトだ」

「……………」

八神の笑顔が固まった。

—あ、こいつ考えてなかったな

—水流しっぱなしだぞ

—止めた

「どどどどどないしょ」

「落ち着け、何処かの死神とは言えない死神漫画みたいな効果音がお前の口から出てる」

「ほら、家族って言えば！あかん！私の両親居らんこと石田先生知っ

てるし!?突然現れた家族なんて怪しいだけや!」

思いつきりヘッドバッドよろしく頭を上下する八神をスルーしながら食器を洗っていく。

「しかもあの服装やろ!?ヤバイヤバイヤバイ!留守番させようにもこの先絶対気付いてまう!落ち着け!落ち着くんや私!解決策を見出だすんや!」

「ほら八神、これでも飲んで落ち着けて」

「さつすが夕君やね!このお酢の酸っぱい感じがいい案を浮かばせるかド阿呆!ぶっ飛ばすぞ!」

「お、おう…」

「大体なあ!こんな状況で夕君がボケるからあかんねん!ていうかなんやねん!ホンマにヘタレてんちやうぞ!私の期待を返せ!今すぐ返せ!」

「なんか、ありがとう」

「なんで感謝した!普通に謝れや!なんや私が悪いんか!?私が悪かったんか!」

錯乱しすぎて結構なキレ具合だ。

—ツツコミもいい感じだな

—ボケには反応するんだな

—そこは、ほら、関西弁の力じゃね?

「……なんやろ一通り夕君に当たったらスッキリしたような気がする」

「それは良かった。紅茶でも煎れよう、ケーキは作ってきたし」

「それはどうも……スッキリしたのはしたけど、変な疑問というか凝りというか」

「清濁を飲み込んでこそその美少女だ。ほらイツキ、イツキ」

「……よし、全部夕君の所為にしよ。てか、夕君が原因やし」

「それは…酷くないか？」

「普通やから大丈夫」

なら大丈夫なのか。

―別段俺の所為でも構わないし

―はやてが元気ならいいか

カット。

「で、実際どうするんだ？」

「服を買いに行こうにもサイズとかわからんし…」

「主、我らにそこまで気を使う必要は」

「家族に気を使う必要がないわけないやろ」

「……………」

八神の一言に黙るシグナム。

―しかしながらいいオツパイだ

―ないすオツパイ

―あれだな、是非に触りたい

―しかし触れば確実に首が飛ぶ

―比喻表現じゃなくてな

―体が軽い、こんな気持ちは初めて！

カット。

―服がなければ買いに行けばいいじゃない

―だからサイズがわからんと

―いや、目視出来る限りなら楽勝なんだけど

―あれか、こう…どうにか合法且つ自然な流れで

―……………おーけー、この作戦ならいける

―……………これは、なんとというか

―出来るのか？

―可能だ

―流石、人間の原動力はやはりコレだな

―では、作戦を開始しよう

「服を買いに行くならどうにでもなるぞ」

「は？どうやって」

「四人の内一人を連れて行けばいいだろ」

「それでも、この服装やで？連れていけるか？」

「その辺りは俺に案あり」

「……ふむ、」

「詳しくは言えないけど、普通の方法だ」

「……大丈夫なんか？」

「その辺りは今から検証するし。誰にも危険は及ばないさ」

「なら、任せよか」

「御意に。ちよつと部屋借りるぞ」

空いている部屋に入り、扉を閉じようとする。

「覗いたらアカンの？」

「鶴も覗かれたら恥ずかしかがって逃げただろ？」

そして、扉は完全に閉められた。



扉が完全にしまつてから数分後。

「うむ、我ながらいい出来だと思ふんだが」

夕君は赤黒いスーツを持って現れた。

色は……まあいい。実際にありそうやし、そこまで目立つ色でもない。

「どっから取り出したんや……というか、いい出来つて」

「いつつ、あ、まじかる」

「なんでもアリなんか？」

「お前も魔法少女マジカル☆ヤガミンに成長したんだから、これぐらいで驚くなよ」

「皮肉少年シニカル◇ユウリンのクセに生意気やなあ」

シニカルに笑いながらユウリンはそのスーツをシグナムに渡した。

「とりあえず、見た目が一番似合いそうだから着てくれ」

「……………何故私が」

「シグナム。君は主に恥をかかせたいのか？」

「なに？」

「君達が世間一般でいう普通の服を着なければ、君達の主は恥をかくことになる。まあ君達が世間一般に出なければ話は別になるんだが、それでは主を守れなくなり蒐集という任務が禁止されている君達は必要なくなる…さあ、主を護りたければ服を買いにいこうぞ」

相変わらず、こういう口上を恥もなく躊躇もなくポロポロと出てくるもんやなあ。

シグナムは少しだけ顔を渋らせて夕君からスーツを引たくるよ
うに奪う。夕君は痛かったのか少しだけ顔をしかめた。

「主の為だ」

「それでいい」

「こういうの似合うんやなあ」

「俺の思った以上で何よりだ」

「……………」

少し赤の混じった黒のスーツはシグナムによって見事に着こなされて
いた。

どこか映画に出てくるボディガードのようで非常にカッコいい。

「さて、じゃあ俺とシグナムは買い物に出るから」

「私は連れて行かんの？」

「お前が移動すると他の三人も移動するだろ」

呆れたように夕君は言い、シグナムは更に眉間に皺を寄せた。

「ヴェータ、シャマル、ザフィーラ。主を頼む」

「ああ、任せろ」

「安心してください」

「必ず守る」

「危険なんざ全く無いんだけどな」

「最初の人間の出会いが貴様で無ければコレほど警戒もしなかつた
さ」

「そいつは失礼」

謝る気など全くないだろう声が夕君の口からスラリと出ていった。

「ああ、お金渡しとこか」

「大丈夫、俺が払うし」

「いや、結構な金額なるで？」

「サプライズついでのプレゼントだ」

そう言いながら夕君は笑った。なんとと言うか、珍しく表情がコロコロ
口変わってるなあ。

「ついでに色々と実験出来た礼も含めてるから気にするな」

「なら、そういう事で納得しよか」

「どうも」

「……………なんか隠してる？」

「隠れてる事は沢山あるさ」

はぐらかされたけど、まあ夕君やし。

危険はないって言うてたから大丈夫やろ。うん。

05 さあ服を探そう

無言の空間を歩いていく。

歩く度に感じる柔らかさをなるべく顔に出さないように楽しむ。勿論、この柔らかさを提供しているシグナムはこの事に一切気づいていない。

気付いているならば、俺の首と体は七夕の来ない織姫と彦星の如く永遠の別れを告げているはずだ。

おそらく彦星が乙女座辺りと浮気をしてしまったのが原因だろう。

いや、そんなことはどうでもいい。

「確か服屋は三階にあった筈だ」

「ああ」

やって来たのは近所にあるショッピングセンター。別段更に近い商店街でもよかったのだが、はやてを喜ばす為、を理由に此方まで来させたのだ。

歩けば皮膚が布地に触れて、擦れる。その感覚にゾクゾクしながら階段を一段一段登っていく。

悟られた瞬間に全てが終わるなど、非常に緊張する状況で俺は明らかに別の感情を得ていた。

甘美…いや愉悦…。

いつそ悦楽と言ってしまったっても過言ではない感覚にハマりそうになる事、約一時間程度。

今の今まで全く、一切操作していない触手に漸く違和感を感じた。堪えれなくなつて操作しようと思えば、まるで動かないのだ。

しかしながら感覚は共有できている。

—やはり確認は必要だったか

分割思考の一つが俺を叱咤する。

だが改善点など腐るほどある方がいい。幾度となく新しい感覚を樂しめるのだ。断然そちらの方がいいに決まっている。

しかしながら階段の昇降運動というのは実にいい。

解析魔法をふんだんに行使した戦闘がまさかこんな副産物を産み

出したなど、誰が思おうか。

「さあ、服を探そう。好みのモノがあれば言ってくれ、試着室に案内する」

「すまないな」

「なに、気にしてくれるな」

こちらは既に報酬を得ている。

階段の昇り運動のおかげで、やや上にずり上がっているパンツスーツ。勿論の事ながらベルトはあるので腰から上に上がる事などない。

その皺寄せ部分は、各自想像して頂きたい。

例えば変態と罵られようが、気にせずに妄想して頂きたい。

「お前はあれほど主になぜ尽くす？」

「…尽くしてる訳じゃないさ。…あれか願望を叶える時に八神に俺がツマラン事を吹き込むか不安なのか」

「…ああ。私はそんな経験を知っている」

「そりやあご立派な体験談だことで」

こりやあご立派な胸部だ。

ここだけ少し余裕を持たしてよかったと、今更ながらに再確認した。柔らかさもさることながら、凝りが布地に触れる事もいやはや、なんとも言えない。

「少なくとも俺はしないさ」

「なぜそう言い切れる？」

「俺は叶えられる願いが、必ずしも完璧に叶わない事を知ってるからな」

「は？」

「お、これとか似合いそうだな。着てみるよ」

試着室にシグナムを押し込み深呼吸する。

危なかった。会話内容もさることながら、分離した触手の限界が近そうだ。

やはり改善すべきだ。いや、いつそ下着としてプレゼントして連れ回すか？途中で下着がなくなる訳だが…保留。

スルリスルリと服が脱げていく。いやはや残念ながら時間切れら

しい。

「つまり、お前は主に手を出さないということか？」

「それは、わからんさ」

あ、触手が消えた。

そう感じると同時に首を捕まれ、更衣室に引き込まれた。鏡に叩きつけられ、首を締め付けられ、剣を突きつけられる。

そしてそんなギリギリの状態であろうと、俺の分割思考は冷静に、そしてじっくりと、更にいうなら噛み締めるように

―ナイスオツパイ

そう俺に囁いた。

首を絞められ、剣を突きつけられた俺。

下半身のショーツだけのシグナム。

場所は更衣室。

俺の状態がまともなら非常に歓迎すべき状況だ。

プルプルと揺れる肌色の果実を視界の端にしっかりと収めながらシグナムを見る。

「あの時の瞳は偽りか！」

「大声だすなよ…瞳で嘘を吐けるなら一人前だな」

「はぐらかすな」

「第一証明出来ないだろう。お前が俺を信用するなんて」

「…誓え」

「何を、誰にさ」

今ならお前のオツパイに誓えるわ。

もうなんていうか、幸せ空間が広がってる。

「主に危害は加えないと…主を助けると」

「それは無理だ」

キツと視線が強くなり、刃が薄く俺の頬を切った。

同時にややズリ落ちた俺の視界いっぱいにおツパイが広がった。

オツパイが、視界に。

「お前は私に…あの優しい主の大切な友人を斬れというのか…」

「例え腕一本飛ばされたところで、俺は誓えないさ」

「何故だ!？」

「お前の理由を主に押し付けんなよ」

むう、素晴らしいオツパイだ。

こう下からタプタプしたい。

「それに、それは騎士の誓いだ。卑怯な俺が誓ったところで空論でしかない」

「なら、どうやってお前が安全だと、納得すればいい……」

「納得などするな。お前は俺を信用するな。信用など、思考の停止と同義だ」

「……………」

「常に警戒し、八神にとって危険なら、躊躇うな」

俺はもうすこしこのオツパイに躊躇いを持つべきなのか。もうタプタプしても怒られないんじゃないだろうか。

「……………お前はそれでいいのか?」

「お前自身が言っただろ。俺は彼女の願いを叶える本でも、主を敵から守る騎士でも、八神を支える家族ですらないんだ」

「……………」

「俺ははやてと楽しむことを考える友人なんだからな」

もう少し、もう少し屈んでもらえると非常にベストなバストが拝見出来るのだが、否、俺がずり落ちれば。

おう……………エクセレント。素晴らしい。絶景だ。

「……………お前が主はやてに危害を加えるなら、素っ首落とす」

「それでいい。それでこそだ剣の騎士殿」

「ああ…では、私の代わりに他の三人の分も選んできてくれ、友人殿」
「極めて了解」

試着室から出てようやく深呼吸をする。

鼻腔の奥に残る甘い香りを肺一杯にしながら、ふと後悔する。

久しく分割思考なしで会話をしてしまった。考えなしが口を開くとやはり纏まらない。

溜め息を吐いて先程から暴走気味の思考を遮断する。あれが口に出ていたなら、俺はフィギュアよろしく着脱式の体になっていたろう。

カット。

06 『本中毒者』の称号

長かった様な6月4日も終わり数週間。

小学生には夏休みというものがあり、ソレに入る前に担当教師が通知簿を付けなくてはならない。

「じゃあ、テスト返すぞ」

その昔は怖かった通知簿を付ける為に非常に簡単な方法がある。

生徒の成績が出るテストだ。

—この時期になると一気にくるな

—仕方ないさ、教師も困ってるんだから

—しかしながら嫌になる

当然の如く、マトモに考えればこのレベルのテストなら満点を取れる。少なからず応用問題がないからだ。

「御影」

「…はい」

受け取ったテストを素早く折り、溜め息を吐かないように席に座る。

—予定通りの点数だ

—うむ、実に素晴らしい

—別にこの点数に意味など無いけどな

—普通より出来るけど満点でもない

—点数配分考えて問題を解くのが楽しい

—間違った答えを考えるほうが楽しい

カット。あんまり先生を困らせないようにしよう。

「御影君」

「……………月村か」

昼休みに相変わらず図書室に入り浸ってる俺の前に、珍しくトリオ

…いやカルテットじゃない月村が座った。

—どうした？

—いや、椅子の材質の復元というか擬態カッタカッタカッタ。

「これ、言つてた本」

「……ああ、あれか。お菓子の家の主を竈に落とす双子の話か」

「うーん。どちらかと言えば、拾った子供がお姫様だった羊飼いのお話の方が近いかな」

「喜劇か」

「…よくわかるね」

「つい最近に友人から『本中毒者』の称号を与えられたよ」

肩を竦めながら言えばクスクス笑われた。

—こういう笑いが似合うね

—お嬢様らしいからか

—あれか、オゼウサマなのか

—瀟洒で完璧なメイドもどうぞ

—ただし忠誠心は鼻から出る

「私はわからないけどそんなに読んでるの？」

「さてね。一日一冊を消費する程度には読み続けてるよ」

「十分なんじゃないかな」

「重文はまだ読んでない」

「いつか見に行きたいね」

「所詮人間が決めたくくりだけだな」

「人が作ったんだもん、人の価値観でいいんじゃないかな？」

「……そうか」

「そうだよ、きつと」

そう言つて月村との会話が途切れる。

—この娘もなかなか頭が回るなあ

—こっちは分割思考の一つを会話に向けてるといふのに

—むう…椅子の材質を知る為に解析魔法を

カッタ。

「そういえば、テストどうだった？」

「よく言えば普通、悪く言えば普通」

「普通に言えば？」

「平均点の多少上」

少なくとも月村以上であるわけがなく、トリオ程平均点をあげてる訳でもない。

「えっと、じゃあ」

「ん？」

「教えてあ」「おおすずか！ここに居たのか」

扉を思いつきり音を立てて開けたスメラギ君。

「いやあすずかタン可愛いな」

「椅子になりたい」

「すずかタンの座っている椅子になりたい」

「この変態！」

「ハッハッ、お前に言われたくないわ」

開いていた本を閉じ、席から立ち上がる。

「月村、明後日には返す」

「あ、うん」

返却の日取りを決めて図書室から出ていく。

転生主人公の隣を華麗に素通りして教室へ向かう。

「カット」

「カット」

「カット」

カット。思考を割く事も煩わしい。

海外郵便で送られてきた手紙。差出人はプレシア・テストタロッサ。
「今って裁判してるんじゃないかなかったっけ？」

―待った!

―意義あり!

―現実ではあり得ないらしいな

『裁判で頑張ってるフェイトを眺めてたらいつの間にか初公判が終わってたわ』

もう本当にこの親はこれでいいのだろうか。

―不安すぎる

―いや、流石に冗談って書いてあるよ

―冗談にしては随分とまた

三枚程続く娘自慢を流し読みして、非常に疲れた後の四枚目。

『また研究職に戻れそう。もちろん罪を償う為のモノだが、気にせず
にアリシアを治療する事にする』

「……………それでいいのか?」

俺個人としては構わないのだが、少しばかり管理局が心配になってきた。

07 暑い夏にエターナルフォースブリザード

夏休み半ば。

まるで使命のように騒がしく鳴く蝉と人を蒸し殺そうとしてるんじゃないかと錯覚する程に地球を熱する太陽。

―熱された地面から立ち上る熱でスカート捲りは出来るのか？

―熱気球を考えれば出来ない事はない

―空気は流動してるし無理じゃないか？

―暑い

―暑いと言うから暑いのだ

―心頭を滅却すれば、火もまた涼し

―火だるまにでもなれば涼しくなるさ

カット。冷たくなる。

これだけ暑い外を早足で歩きようやく図書館に着く。

扉を開けば、先ほどの世界とは別の世界のように冷たい空気が体を包んだ。

―ここが異世界か

―エターナルフォース：ブリザアアアアアアド！

―え？

カット。何もなかった。

「む、来たか」

「来てやったぞ」

柱に凭れるようにして待っていたのは烈火の将。

―この暑い時期にまた熱い称号を関するヤツに…

「はやては？」

「向こうにシャマルと共にいる」

「そうか、で要件は？」

珍しく八神家から連絡が来たと思えば、家主である八神では無くてシグナムからの電話だったのだ。

―あれだろ？裸を見られたから責任トレヨ的な？

―裸程度で何を言ってるんだか

—フツ、あんなデカイ脂肪の塊なんぞに興味すらないわ
—イヤーまったくくだわ

—全然見てナイシ

—でもさ、よく考えろ

—何をだよ

—あなたと合体したい的な事を言われればどうするよ

—即決即断即答ではやてに報告だな

—『オツパイもらいますね!』

「おまえと戦いたい」

「カット」

「む……?」

「え?……あー、ちよつとタイム、思考を纏めさせてくれ」

えつと、うん。戦いたい?誰と?誰が?

—俺とシグナムが?

—なんでさ

—あなたと合体したい

—あなたと合戦したい

—惜しかったな

カット。意味は百八十度以上違う。

「……えーと、なんで?」

「お前に負けていては、主はやてを守れないだろう」

「いや、お前は既に八神にとって大切な存在であってだな」

「安心しろ。胸を壊すつもりでいく」

「そこは借りろよ!お前の武器で胸を壊されたら死ぬんだけど!?!刺さるんですけど!?!貫かれるんですけど!?!」

思わず荒げてしまった声に気付き、口を抑える。

—落ち着けよ

—ほらヒツヒツフー

—ヒツヒツフー

—フツハーッ!

「あれか、初対面のアレなのか」

「そうだ」

「アレは奇襲だったのと、ちよつとしたズルだよ。今現在でお前と戦っても負けるね」

「……ダメか？」

「なんでそんなに残念そうなんだよ」

「主の為に剣を振るわなくなつてどうも鈍つたような気がするんだ。斬らせろ」

「オイ。前半を大きく覆す本音が漏れたぞ…もつと、こうオブラートか何かに包め」

「なら、そうだな………お前の血が見たい」

「………わかつた。お前の頭がハッピー過ぎるのが悪いんだ」

「確かに今は幸せだが」

「脳内にお花畑よろしく首塚でも並んでるのかね、お前は」

「なんや、夕君来てたんか」

シャマルに車椅子を押されながら登場した八神。

後ろにいるシャマルは今回の話を知っていたのか苦笑している。

「八神からも何か言ってくれ」

「なんやどないかしたんか？」

「シグナムの脳内にお花畑が広がってるのさ」

「………それは、また」

「主はやて、そいつは私のちぶ」

「ヨシー！シグナムサン！キミノネガイタシカニキイタヨ！」

シグナムの口を塞ぎ、片言ながら口を開く。

「チクシヨウ！バレてやがった！」

「あれか！あれはこの為の伏線だったの!？」

「あの時点で計画練つてたのか！」

「シット！素敵服の開発を急がねば！」

カットカットカット。落ち着きたまへ。まだそうと決まった訳ではない。

―ヒツヒツフ―

―ヒツヒツフ―

―ヒツヒツフ―

―こんな事なら触ればよかつたな！

―さわった瞬間に生首一つ出来てたんじゃね？

―とにかく、問題は今だ

―そう今なんだ

―このシグナムの口を押さえている左手の事だな！

―ウツ！オレノ左手ニ封印サレタ触手ガ！

カッタカッタカッタカッタカッタカッタカッタ。もう少し落ち着
け、マジで。

「感謝するぞ」

「……………是非とも忘れてくれ」

「なんや、どないしたんや？」

「八神は気にするな。お前には無いものだ」

「……………あれ？関係ないって言われたんよな？なんやろ馬鹿にされたよ
うな気がするんやけど？」

「大丈夫だ、問題ない」

お前にも未来はあるさ。

「で、わざわざ管理外惑星に連れて来られた訳だな」

俺はため息を吐きたい気持ちに精一杯抑えたのだが、出てしまう。

―帰りたいよ！

騎士の鎧…というより服に似た鎧を着たシグナムは剣を構える。

―変身シーンとかなかった

―裸とか一切なかった

カッタ。

「安心しろ。痛みを感じる前に……………止めるさ」

「間が開きすぎだ」

「止めるように努力する」

「確定させろ」

「止めない」

「否定された!？」

もうやだよこの騎士。相手をデュラハンにする気しかないよ。

―痛覚遮断

―身体強化及び治癒魔法行使

―格上相手だ

―死にはしないだろうが油断するな

「では、行くぞ」

「あい、」

口を開いた瞬間にその口に鋒が飛んでくれば、誰もが驚くと思う。俺もその一人だったらしい。

必死で横に転がり、次の攻撃がこないか確認してから漸く恐れながら口を開く。

「殺す気かつ!」

「ああ」

「否定してくれよ!」

「一度負けた相手に手加減など出来んさ!」

「うおっ!」

シグナムが剣を振るえば、横から鋒が俺を狙う。

―鋒が横から来たぞ!?

―∴連結刃か!

―吼えろ!猿!

―中範囲解析魔法構築、行使

―周辺情報整理

―左から側頭部に向け鋒接近

―距離をとるか?

―取ったところでジリ貧だ

―痛覚は切ってるんだ、突っ込め!

―いぎ、オツパイを触りに！

左からきた鋒を前屈みで避け、目の前を通り過ぎていく刃達を見送る。足に力を込めて、魔力を詰め込み、魔力を破裂させ強制的に前へのバクトルを増加させ刃の網を抜ける。

「レヴァンティーン！」

「魔剣かよー！」

炎の魔剣を冠する剣が左上から迫る。

―回避不可

―防御不可

―ならば止めればいい

シグナムの前で踏み込み、足を軸に反転し剣を持つ右腕を右手で掴む。

が、

「ウオオオオオ！」

止まらない！

―左腕で右腕を支えろ！

―体を後ろに倒せ！

―僅かに遅らせれるならば前へずらして投げろ

―一本背負いの要領だ

―そう！オツパイが背中に付くようにな！

「ウアアアアアア」

シグナムを中空に飛ばし、体勢を立て直す。

―おうけー、感覚は覚えた

―うむ、敢えて言おう柔らかかった！

―シグナム中空にて停止

―飛行魔法か

―スカートでない事が悔やまれる

―まあ今も非常に目のやり場が困るのだが

「ふむ…準備運動はこの程度で十分だろう」

「はっ！」

今までが準備運動？

—今からは？

—悪いな…今からが本気だ！

「では、本気でいくぞ！」

直進してきたシグナム。

当たり前のように【目】が追い付くはずもなく、腹部と宣言通り胸部を刻まれて俺の意識は落ちる事になる。

「だから言っただろ」

「……すまない」

「びっくりしたわ。突然シグナムから慌てて呼び出されるもの」

「……すまない」

シヤマルの回復魔法に包まれながら愚痴を垂れる。シグナムもシグナムで少し落ち込んでいる。

—むう回復魔法はこういう式なのか

—やはり我流で組み上げると乱雑になるからな

—非常に助かる

「えっと、タくん？回復魔法が変な形になるから解析魔法を上乗せしないだね」

「あ、うん。ごめん」

「ああ、大丈夫なんだけどね。うん…」

「魔法で思い出したが、何故魔法を使わなかった？」

「身体強化は使ってたけど？」

「魔力弾は使ってなかっただろう」

「あー……純粹に身体の動かし方を知りたかっただけなんだ」

「……ふむ、ならそういう事にしておこう」

そういう事にしておいてくれ。

08 はやて様マジ墮天使

「夏祭り？」

「そう、夏祭りや」

「……あれか、車椅子少女からの改名か」

「そのネタまだ引つ張るん？」

「なんか、ごめんなさい」

非常に涼しい図書館にて八神が一枚のチラシを机に叩きつけた。

—司書さん睨んでるんだからやめろって

—今日は館長さんもいるから大丈夫さ

—あ、司書さん逃げた

—館長さん落ち込んでるし

「去年は一人で行っても寂しかったから行かんかったけど、今年は違うでー！」

「…珍しくもないが、熱いな」

「夏と言えば海と水着と祭や！」

「お前の頭の中では海と水着は一緒の区分じゃないのか」

「ということ、空けといてな」

「残念ながら俺の夏は氷菓子と素麺と冷房機ですでに満喫してるんだ」

「……なんや、あかんの？」

「……近頃お前があざとく見えるよ。とりあえず、その上目遣いを教えたのは誰だ？お兄さんに言ってみな？どうせシヤマルだろ？シヤマルだな？」

—いいぞもつとヤれ！

—シヤマルを探せ！

—探して縛り上げようぜ

—軽いSMも辞さない

「守護騎士連中と行けばいいだろう…」

「……夕君は来てくれへんの？」

「上目遣いをやめろ。そういうのは必殺技として封印するときなさい」

「今こそ必殺技を使う時や」

「確殺出来ない相手に必殺技はやめなさい」

—もう夏祭りいこうぜ！

—浴衣はやて見ようぜ！

—浴衣の守護騎士連中見ようぜ！

カット。



「いや、うん、結果はわかってたんだけど、こうなんて言うか納得出来ない部分が大半なんだ。この気持ちをどこにぶつけなければいいのだろうか、なあシヤマル」

「え？私は何もしてないじゃないですよ。ただコウすれば意中の男性を」

「引っ付くな、暑い」

シヤマルが夕君に抱きつき、胸を彼の頭に押し付ける。

夕君はホントに暑いのかそう言っただけで眉間を寄せているがシヤマルを退かそうとはしない。こう、なんというか、モヤモヤしたモノが。

「シヤアマアルウ？」

「はやてちゃん大丈夫ですよ。夕くんは私に興味なさそうですし」

「なんや…夕君…その…男色の人やったんか」

「カット。いや、なんでそうなった」

「シヤマルって女の私から見ても、ええ体してるやん？ソレに興味ないって事は…良くて幼女嗜好？」

「ねえよ。おいロリータ、そこはかたなく俺から離れるんじゃないやねえよ」

「少なくとも、テメエなんか趣味じゃねえよ」

「お前なんかの趣味にされたかねえよ。ロリババアめ」

「今お前は私に喧嘩を売ったのか？高価買い取りしてやろうか？」

「おいおい、この程度の挑発に乗るなよ。長年生きている意味がさっぱり出てないぞっ。」

「OKエ…テメエは今ここで潰す」

「ハッ！クレーマーは早々にお帰り頂くよ」

「二人ともやめやあ。殴るで？」

「よし、ロリータ。あつちに金魚掬いがあるぞ」

闇の書を持ち上げてニッコリしてやれば、夕君は視線を逸らしてあからさまに会話を交える。

「ヴィータな。間違えんなよカス」

「二文字で間違えてるお前の方が問題だろ、せめて一文字でも合わせな」

「行くぞ、シニカル◇ユウリン」

「ごめん、それは止めて。謝るからそれは止めてくれ」

「どうしたユウリン？落ち着けよユウリン」

「オウケイ、お前が俺を怒らせた事は理解した。貴様にトラウマでも埋め込んで」

「夕君？」

「そんな事できるわけない」

「お前、弱いなあ」

「お前さん達の主が強すぎるんだよ」

夕君はそう言って軽く笑った。

「なんやろ、釈然とせえへんというか…とりあえず、夕君を闇の書で殴っておこう。」

「うむ、これだけ取れば元は取れただろう」

「お前…容赦ないな」

「容赦して得するなら容赦するさ」

ビニール袋に大量のぬいぐるみやお菓子を詰め込んだ夕君。その後ろには凄く啞然としている射的のオジサン。

「えつと」

「イイタイミングだ八神。ぬいぐるみをプレゼントしてやろう」

「ありがとう…やけど、多いわ!」

「反省はしてない」

まるで悪魔のように含み笑いをしている眼鏡。今、コイツが悪魔だと言われたら信じてしまいそうさ。

むしろ彼は悪魔だ。

「さて、と。今なら生物以外なんでも取ってあげましょう、姫様」

悪魔は仰々しく、且つ紳士的に、言ってしまうえば劇のように頭を下げた。

悪い気せん所が甘いんやろうか…。というか、なんやろ…こういう好意の安売りを彼は常にしてそうで不安になる。安売りというかバーゲンセールというかもう押し売り? いや押し売りというほど無理矢理ではない。

とりあえず、今彼が手に持っている巨大なぬいぐるみをもらおう。

「浴衣の人がやっぱり多いなあ」

「仕方ないだろ、暑いし、祭りだし」

「…：やっぱり私達も浴衣の方がよかつた?」

「…：…：シグナムやシャマルは和服が似合わなさそうさ。対してお前やヴィータは似合いそうだな」

「…：それって誉めてるんよね?」

「トウゼンダロ?」

肩を竦めてみせる夕君。どこか納得がいかないのは夕君だからだろうか。

「ホンマに誉めてる?」

「はやてちゃんチョコカワイイ」

「まあ許したろ」

「はやてちゃんマジ天使」

「言い過ぎると露骨やで?」

「…：…：?あれか、文字通りの意味か」

「骨が見えるまで殴ったるか？」

「はやて様マジ墮天使」

「どうやら彼の中で私は墮ちてしまったらしい。」

「しかし、あいつら遅いな」

「そ、そうやねー…」

心の奥底でシャマルグツジョブと何度か唱えて、相変わらずな夕君を見る。

とてつもなく平凡な顔に眼鏡を掛けた、極一般的な彼。

朝早くに電話して、なるべく早く着て来れと頼めば彼は本当に早く来てくれた。あの日の料理を思い返せば、お昼時には少し重いレシピだったような気もする。

家に到着すれば、本当に心配したのだろう。シグナムを抜け、リビングまで走り抜け、シャマルを捕縛して私の前に立った。

少なからずあの時点で彼は凄く格好よくて、騎士よりも騎士らしかった。少しばかり怖かったのも事実だが。

『はやてを守る為に決まってるだろ』

相変わらず鮮明な音声私の脳内に響く。

ダメだ、アカン完全に病気や。落ち着け、落ち着くんや八神はやて。

「どうした八神、突然顔を赤くして……林檎飴の着色料でも被ったのか？」

「……………」

「どうした？」

本当に、私の初恋と呼べるモノがこんな奴であっていいのだろうか。

初恋なんて、なかった。ある筈がない。私の初恋がこんなにイミフな筈がない。

「……むう、時間には間に合いそうにないな」

「何が？」

「おいおい、祭りと言えれば必要だろ？」

「あー花火かあ……」

「そういう事」

うーん、今から移動したとしてもいい場所は取られへんやろうし。もうここでゆつくり見ればええかなあ。

「車椅子は…まあザツフィーが見つかるからどうにかなるだろ」

「は？、ウヒャア」

「遅れながら、失礼姫様」

「ビツクリするから先に言おな!？」

「へいへい」

咄嗟に横抱きにされた。私が彼の首もとに腕を回したのは突然すぎたからだ。仕方ない。

「軽いな…ちゃんと食べるよ」

「うっさいなあ。女の子の体重を責めんといてくれる?」

「あー…まるで天使の羽のように軽いです姫様」

「ありがとう」

「どうも納得いかん」

夕君は溜め息を一つ吐いて上を見る。

「少し、跳ぶぞ」

「口も目も閉じとるよ」

腕に力を入れて離れないようにする。

少しだけ、フワリと浮遊感を味わい、振動を夕君の身体から感じる。

何処かに着地したようだ。

「もういいぞ」

「……こんな場所乗ってええの?」

「家の上に餓鬼二人乗って怒るような神様なんかいたら人間なんてこの世にいないさ」

「極論やね」

「曲解してるだけさ」

瓦の上に腰を下ろし、のんびりと空を見上げる。お互いの距離は微妙に遠い。

「………なあ夕君」

「なんだよ八神」

「あの、えー…手え繋がへん?」

「は？」

「いや、ほら、私が落ちるかも知れんやん!? こう命綱的な!？」

「何慌てるんだよ……」

「あー……うん、ちよつと落ち着いた」

何を言つてたんやろか。

こう……いい雰囲気に乗まれた結果に空回りなんて。いや、うん思い出したくない。よし記憶は削除した。何もなかった!

「ウヒャアイツ」

「だんだんと面白い声が出るな……こう毛むくじやらの鳥のような玩具を彷彿とさせる」

「いや、なんで、手を握ってらっしやるんでおじやる?」

「落ち着け、デンプはここにいない。お前が握つてろと言つたんだろ
うが」

「いやそうやけど……そうなんやけど、こう……」

「(こ)う?」

「……まあええわ」

もうなんというかこの人に雰囲気とか言つた所で多分知りながら無視するだろう。諦めよう。

少しだけ熱くなった顔は彼に見られる前に花火の光で隠されたらしい。

「たーまやー、かーぎやー」

彼のやる気無さげな声が花火の音に容易く消されるのは、彼が私の気持ちを知らない事のように当たり前だった。

09 優秀な研究員の手紙

『アリシアとフェイトが可愛すぎて私が死にそうなんだけどどうすればいい？死んでいい？でも死んだら悲しむわね。私チョー頑張る。フェイトが嘱託試験に合格して、私も管理局の研究員として名を置くことで裁判がトントン拍子に進んでるわ。』

しかしながら、嘱託試験で頑張ってたフェイト超カワユス。それを私の横で応援してたアリシアも可愛かった。もう羞恥心も地位も名誉も捨て去ってビデオを録りたいぐらい可愛かった。

アースラ：私が攻撃した管理局の船も実は防御されてたみたいで、なかなかこの艦での私の扱いはいい。ここの提督はまだ話のわかる人間だ。フェイトとアリシアの可愛さ自慢をしたら息子自慢をされた。同時に理解したのは、ハラオウン提督は親バカだということね。

アリシアは非常に元気だ。寸分違わぬアリシアだ。アリシア以外の何者でもない。アリシア可愛いよアリシア。

フェイトも可愛いよフェイト。

もう二人一緒に寝てるのを見るだけでその日の疲れがブツ飛ぶわ。翼を授けてどこかへいくわ。

追伸

エネルギー循環機構の論文を送るからレポート書いて提出しろ。

あと白髪の異色目の男がウザい。フェイトとアリシアにちよっかにかけて超ウザい。どうにかしてくれ

』

要約するとこんな感じの手紙が着てかなり気分が落下した。ここまで気分を落とす手紙があつていいのだろうか。

—きつと無い方がいい

—むしろ無かった

—そしてレポート書いて提出しろって

—大学の教授かね、あの人は
大学の教授もまだ優しいさ。
手紙とは別の封筒を開けて、数枚の紙を取り出す。
—魔力を循環させてその循環した力でエネルギーを生み出すのか
—更にそのエネルギーを使ってさらに循環させる
—ある種の無限機構か：
—最初の魔力は微量だが：
—循環した余剰エネルギーは霧散するのか？
—こういう事考えてるから次元震起こしたんじゃない？
カット。さてくそ真面目に考えようか。

◆◆
『拝啓、バカ親へ。』

こっちは冷房機器のない部屋で蒸されているのに、牢獄にいる筈の
アンタが俺より涼しい思いをしていると考えると幾度も世界を壊す
力が湧いてきそうです。

ぶっ殺すぞ、

いい加減に書くのも面倒になったけど書かしてもらうが、フエイト
とアリシアが可愛いのは理解したから、もう観察記を送らないで下さ
い。スゴクイライラします。というか、もうそろそろ四回目になるん
だから、三回目の正直とか仏の顔もとか言うだろ？やめろ。

論文について纏めたレポートを送る。研究の足しにでもして貰え
るならありがたい。ただ、途中式をわざと間違えて送るな。鬱陶し
い。

P. S.

アレは知らん。自分で排除しろ。排除してくれ。是非に頼む。
』

要約するとこんな手紙が返ってきた。

もちろん、実際はかなり丁寧な書き方で書かれていたが、内容はこ
んな感じだった。更に言えば『ぶっ殺すぞ』のところはオブラートに

さえ包めてなかった。

「あれ？お母さん、また手紙？」

「ええ。とつても優秀な研究員からの嫌味つたらしい素敵な手紙よ」

「へえ。でもそのユウシユーナケンキュウインさんが私の治療法を確立したんでしょ？」

「ある意味ではそうね」

金髪のツインテールを揺らし手紙を見たそうに上目遣いになるアリシア。このことは手紙に書くとしよう。

「お母さんのケンキュウは難しいけど、みんなを幸せにするんでしょ？」

「ええ、そうね」

「ならそれを手伝ってるユウシユーナケンキュウインさんもみんなの幸せを願ってるんだね！」

「……………そうね」

アリシアの当然の問いに私は即答出来なかった。

アレと以前の私はよく似ている。目的の為には手段も外聞も関係ない所などソツクリだ。

私が課題を送りつけているのも、彼に感謝してるからこそ…アレが少なからず他人の為になる事をしている、そんな言い訳の為だ。

「ただいま」

「あ！おかえりなさい、フェイト！」

「ただいま、アリシア」

「おかえり、フェイト」

「ただいま、母さん」

今しがた帰ってきたこの子の為ならアレはきつと何でもする。

単身で悪名高い母を倒しに来たり、虚数空間という絶望の中に自身を危険にさらして私を…フェイトにとつて大切な母を助けたり、三日間飲まず食わずでフェイトの姉を助ける為の空想実験を繰り返す程度は確実にする。実際にやっている。

「フェイト、ユウシユーナケンキュウインさんから手紙が来たよ！」

「優秀な？……………ああユウの事だね」

「違うよ？ユウシユーナケンキユーインさんだよ」

「フェイト、彼は一応自分を秘匿したいのよ」

「あ、なるほど。優秀な研究員さんはなんて？」

「読む？」

「うん」

手紙を渡して私はレポートに目を通していく。目を通して：溜め息。

やはり彼の頭の理論面はかなり昔で止まっている。長つたらしい式も公式を使えば短くなるし、そうなる事も証明されている。

「惜しいわ…非常に惜しい」

今の彼に知識を叩き込めば、確実に有能な人間になる。

彼自身は恐らく望まないだろうが、是非とも彼の意見を逐一聞きながら、論議したい。きつと素晴らしく価値のある議論になるだろう。議題はフェイトの事とか。ああフェイト可愛い。頑張って日本語を読もうとしてるフェイト可愛い。わざわざ難しく言い回した日本の手紙を書いてくれる彼に感謝しよう。このフェイトは独り占めだけど。

「……………」

ああフェイトの頭から煙が出たのが見えるわ。許容範囲をオーバーしたのね。黒い煙がプスプス上がってる様も可愛い、フェイト可愛い。でも読めないのはいただけない。しかしながら読めるようになればこのフェイトは見れない。

「フェイト、貸して。私ならたぶん読めるよ」

「ごめん、アリシア」

「フェイトは囑託魔導士で忙しいからね。私は今のところ暇だし」

にへら、と笑うアリシア。事実娘は生活に支障がない程度にリハビリも完了しているし、暇潰しなのか最近は言葉の勉強や私の研究論文を眺めていたりしている。

早く外に出したいのだけれど、外に出したら出したであの白髪がウザい。

「えつと…拝啓、素晴らしき娘を持ち、とてつもなく頭がハッピーなバ

カへ」

「ダメよ、人の手紙を音読なんて。彼が可哀想だわ」

危ない。天使には少しこの文は早い。

なんて手紙を送りつけてくれるんだ。

「そういえば、フェイト。今日も何かされたのかしら？」

「？」

「あの異色目男よ」

「ああライトだね。普通に話してただけだよ。私より忙しいみたいだし」

「そういえば、最近会ってないなあ」

「アリシア、あんなのに会わなくていいのよ？」

「お母さんはあの人を嫌いななの？」

「嫌いじゃないわ。大嫌いよ」

もう本当に娘に手を出すなど…いや、娘が認めたなら、そうアレだ最低でも私の研究を理解して娘の為なら世界を壊す程度してくれる男なら、まあ認める努力でもしよう。

……………、前提条件は人間であることだ。

10 騎士の行動、友人の行動

「……」

「……………」

話があると言われ、無理矢理に部屋に侵入してきた四人。

― 守護騎士勢揃いで

― 深夜なのはどうしてだ？

― 深夜にしか出来ない話なのか？

― ……おいおい、ザフィーラまでいるのは趣味じゃねえよ

― アゝー！

カット。

「茶はいるか？」

「あ、お構い無く」

冷蔵庫から取り出したペットボトルを直す。

リビングに四人を通して、向かい合うように座る。

― むう、全員が騎士甲冑か

― ザツフィーのはもう甲冑とはいえなくね？

― ロリータも一緒だろ

「さて、こんな深夜に何用だ」

「……………主はやての症状が変わった」

「……………つまり、どういうことだ」

「…あの時に守ると誓った我らが、主を侵している」

「……………」

― カット

― カット

「闇の書があることではやてちゃんの足の麻痺が徐々に上にながって
るの」

「このままじゃはやてが…」

「すまん……我らの責任だ」

「カット」

「……？」

「カットカットカットカットカットカットカットカットカット」

一度深呼吸する。

—カット

—カット

—こいつらがいるからはやてが、死ぬ？

—カット

—カット

考えるな。可能性を捨てるな。

「……………その闇の書が完成すればはやてはどうなる？」

「おそらくだが…助かる」

「アレが闇の書による症状ならば少なからず止まる」

「なら…やることは決まったな」

「……………お前を巻き込む気はないぞ」

「なんだ？手前らはココに自身の不義理を許してもらいに来たのか？

なら死ぬ今死ぬすぐ死んではやてを解放しろクソども。手前らが

死んだ所ではやては治らんだろうがその辺りは俺がどうにかする。

どうにかしてやる。

手前らは何をしにここに来た？少なからず俺にこの話をすればり

ンカーコアから魔力を得れると思ったからだろう？予想は的中して

るさ」

「……………スマン」

「謝んなよ。テメエは騎士としての行動をした。俺は友人としての行

動をするだけだ」

目の前の四人を殺してはやてが守られるなら、そうする。選択肢な

どない。

—しかし、それは否だ

—殺したところで意味はない

—落ち着け

—はやては助かる

—助からないなどあり得ない
そうあり得る訳がない。

「適当にサクサク抜き取ってくれ」

「お前、バカだろ」

「ロリータに言われたかねえよ」

「死ぬんだぞ?!リンカーコアが抜き取られたら、お前は死んじゃうんだぞ!」

「そうだな。ふむ、辞世の句でも読んだ方が…」

「ちげえよ!そういう事じゃねえよ!バカ!」

グイータの頭に手を置き、溜め息を吐く。

—優しいガキだ

—はやての周りにいないといけない奴だ

—さすがはやての家族だ

「俺が死んだ所ではやてにはお前らがいる。俺の命がはやての足しになるなら、随分と価値のある命さ」

「……………やつぱり、バカだ」

「バカなのは承知さ」

ぐしゃぐしゃと髪を撫でてやれば手を叩かれた。すごい痛い。

「安心しろ、リンカーコアから魔力を蒐集するだけだ。死にはしない」

「マジか、それは良かった」

「ただし、しばらく眠る事に」

「いや、魔力を奪われるだけなら大丈夫だ。すぐに起きるさ」

「…………その左腕ね?」

「気付いてたのか?」

「あなたを治療したのは誰とってるの?」

—これは失礼

—まあ本質は知らないだろうし

—シグナムにバレてなければ大丈夫

「湖の騎士様には頭が上がらないね」

「その魔力の塊から最初は貰おうと思ったんだけど」

「無理だった?」

「ええ、闇の書が拒絶して」

「なら仕方ないさ。さあ、サクサクと開始しよう」

闇の書と呼ばれた本が目の前に開かれる。

―無地だ

―無字だ

―魔力によって文字が書かれるのか

―炙り出しの文字のようだ

「蒐集」

『蒐集』

力が抜けていく。

魔力が抜けていく。

落ちる

落ちる

落ち

落

「……………あ」

「あ、起きたのね」

「…今しがたな。何日寝てた？」

「時間にして18時間、完全には回復してないからまだ安静にしてね」

「他は？」

「シグナム達はリンカーコアを集めに行ったわ。私は広域探索とアナタを看護」

布団を退けて、関節を確認する。

―正常

―魔力循環に不備あり

—アンヘルから魔力を譲渡

「布団：てことは部屋に入ったのか」

「ええ。あんな所でよく寝れるわね」

「片付けは？」

「そんなに余裕はないわ」

「なら良かった」

—魔力循環完了

—不備なし

「よし、じゃあ俺も行くかね」

「許しません。タくんはちよつとした病人なんですからね！」

「大丈夫、治ったさ」

—長距離転移陣展開

—リンカーコアの抽出技術はどうにかなる

—アンヘルに食べられないか不安だ

「治ったって…そんな訳ないでしょう」

「あるんだって。とにかく、シヤマルははやてを頼む。俺もなるべくバれないように立ち回るし…ああと栄養剤とか準備出来るなら準備しといて」

「……………無茶したらはやてちゃんが怒りますよ？」

「はやての死が回避出来るなら、それもまた構わないさ」

11 副委員長教室、はっじまーるよー！

「助けて副委員長！」

「帰る」

「ちよ、頼むって！今回の宿題難しいんだって！」

「アレを難しいと言うなら、教科書とにらめっこでもしとけ」

「頼むって！一生のお願い！」

「お前は何回来世に迷惑をかけるつもりだよ」

鞆を席に置いて座る。

—すでに放課後で帰る生徒もいるというのに

—まったく

「お副委員長教室やるのか、タイム俺も参加する」

「私の席もあるよね？」

わらわらと集まる生徒を鬱陶しく思いながら、筆記用具とノートを取り出す。

—ああ鬱陶しい

—いい鬱陶しい

—うう鬱陶しい

—ええ鬱陶しい

—ビイヤアアウマ、イ、イイイ

カット。

「何がわからない？」

「全部」

「帰るわ」

「落ち着けて、マジだから！」

「お前は冗談と書いてマジと読むんだな？絶対にそうだろ？」

「本気と書いてマジと読む」

「おいおい副委員長、そんな事も知らないのかよ」

「やっぱ帰るわ」

「マジでごめんって、謝るから、ごめんって」

まったく、こいつらは何がしたいんだ。

—理解したくない

—子供特有だからな

「で、今回の宿題だが……5、98、45。」

「ちよつと待つて！」

「なんだよ」

「どうして解答だけなのよ！」

「解答さえあれば式は導けるだろ。頑張れ」

「あなたの感覚で教えないで」

「俺の感覚で教えられたくなかつたら、他に頼め。俺は別の人間の感覚なんてわからないぞ」

「ここまでテンプレ」

「苦勞。さてわからないところを明確にしよう。

—まったく子供はこれだから楽しい

—すぐに伸びるしな

—すぐに落ちもするけどな

カット。

「こんなモノか？」

「さすが副委員長。頼りになるわ」

「手紙として出す気か」

「意味が解らないよ」

—僕と契約して、

—カット

カット。

「それじゃ俺は帰るぞ」

「サンキュー、解らないトコでたらまた頼むわ」

「是非とも先生の話をよく聞きなさい」

「ハイ先生」

誰が先生だ。誰が。

「御影君」

「……月村か。帰ってなかったのか？」

「うん、本を貸したくて待ってた」

別に普通に貸してくれればいいものを。

―机に置いとくとか

―休憩時間に渡すとか

―勉強に食い込んでとか

「御影君って頭よかつたんだね」

「……聞き方によつては結構失礼な事言ってるぞ」

「御影君ならわかるからいいよ」

「…他はわからんذار」

「今喋ってるのは御影君でしょ？」

それはそうだ。

―一本取られたな

―ついでに座布団でもプレゼントするか？

―すずかさんの座布団になりたい

―素足とスベスベな肌が

カット。

「この前…言い損なつた言葉を言わなくてよかったよ」

「この前……？」

「思い出さなくていいよ。忘れてるなら、うん」

「？」

この前…月村と話したのは結構限られてるから思いだそうと思えばすぐに思い出せそうだけど。

―小説引用？

―図書室？

―世間話？

思い付かない。ならいいか。

「で、これが本なんだけど」

「…伝記？」

「この前の図書室でこういう本も読んでたのを見たから」

「よく見てるな」

「えへへ……あ、それでね、この本なんだけど、ゆっくり読んでほしいんだ」

「ゆっくり？あれか、一分一文字ペースとか？」

「そういう事じゃなくて……ちゃんと読んでほしいの」

「本を読むのにちゃんともちゃんこもないだろ、おーけー睨むな。頼むから睨まないでくれ」

「感想も聞くからね？」

「おーけー、大丈夫だ。御注文通りゆっくり読むさ」

その後再三注意を促した月村は重ねて注意をしながら帰路についた。

—なんだったんだ？

—わからん

—俺はすずかじゃないし

—今すずかたんに成れるなら

カット！その思考ダメ！絶対！

「……………、ザファイーラか」

「起こしたか？」

「いや、少し考えてた」

「…何を？」

「はやてを完全に救う方法」

パンパンと砂を叩き落として立ち上がり、後ろにいるであろう青い

獣に応答する。

ポケットに入った錠剤を取り出して噛み砕く。

— 原生生物沈黙

— リンカーコア露出

「いい方法は思い付いたか？」

「いんや。情報が少なくてなんとも言えん。闇の書本体に解析魔法を掛けたらどうにかなるかもだが」

左手を本に伸ばせば、ふわりと遠ざかる。

— 本に拒絶されるなんて

— 本中毒者としては嘆かわしいな

噛み砕いた錠剤を喉に通して、再度ポケットを漁る。

「ん…シヤマルに栄養剤が切れたって言っといてくれ」

「またか…消費が早くないか？」

「気のせいさ。用法用量は守ってるつもりだ」

「……嘘だな」

「本当さ。俺が算出した結果の用法用量だ」

— 間違ってる訳がない

溜め込んだ数個のリンカーコアを闇の書が蒐集し、一段落。

「今ので何頁だ？」

「……8 ページだ」

「先は長いなあ。もう一踏ん張りしますか」

「少しは休め」

「休んでるさ」

「……主が悲しむ」

「悲しむはやても永遠に見られなくなるぞ」

「…無理はするな」

「させたくなけりや、シヤマルに伝言よろしく」

新しく転移陣を敷く。赤黒い縁に淀んだ黒の中身。

「んじや、リンカーコア溜めたらまた呼ぶわ」

「おい！」

ザフィーラの声など聞かずにズブリツと転移陣に入り、新しい世界

へ移動する。

「おーけー、ムカデもどきども。手前らの天敵が来てやったぞ。その命、はやての為に使われろ！」

黒い魔力弾と同色のバインドが彼らを覆い、そして…

「…半分は食べる……アンヘル」

赤黒い触手が彼らの半数を消滅させた。

12 触手少年！ミラクルユウちゃん！

久しく帰ってきた家の郵便受けがパンクしてた。

何を言ってるかさっぱりわからないと思うが、俺にもさっぱりわからない。

ただ言えることは新聞でパンクしたんじゃないやなくてエアメールでパンクしたって事だ。

「……………つまり、どう反応すればいいんだ？」

— 嘆けばいいさ

— 絶望した！理不尽な郵便屋に絶望した！

— 新聞もしっかり刺さってるっていうのに

— まったく、どうにもならなかったのか

溜め息を隠さずに、落ちてしまっている手紙を拾いもう一度溜め息を吐く。

鍵を刺して回す…………。

「……………う？」

鍵が開いている。

空き巣だろうか。別段盗まれて困るようなモノは本ぐらいしかないんだけど。

— テレビもねえ！

— パソコンもねえ！

— 携帯電話すらねえ！

ガチャリと扉を開ければ

「おかえりなさい」

……………。

バタン。

え？つまり、なにもなかった。

うん。あるわけがない。

— さてとリンカーコア集めに行こうか

— いやあ、今日は凄く集まりそうだ

—金髪天使が二匹いたぞ

—もう瓜二つどころの話じゃねえよ

「なんで閉めるの?」

「信じられない事にフェイトが分身した……あれか、単細胞生物だったか」

「フェイト…単細胞だったの?」

「違うよ!?アリスアも話をややこしくしないで!」

「まあ落ち着きなよフェイト」

「そうさ、とりあえず家に入れてくれ」

「あ、うん。ごめんね」

「さあ入ってよ」

「なんで私たちの家じゃないのにアリスアが先導してるの?」

その辺りは気にしない。

—しかしながら似てる

—瞳の色が違う程度?

—性格は結構違うみたいだけど

「殺風景な部屋だな」

「言われてるよフェイト」

「あ、ごめん……ってココはユウの家だからね!?私に言われてもどうしようもないよ!」

「…なかなか面白いな」

「私の妹だもん、当たり前よ」

「否定してよ!妹が弄られてるんだから助けようよ!」

「……ヤメナサイヨ!」

「ワカッタヤメルヨ!」

「……………」

「わかった。マジでやめるから、な?」

「そうよフェイト、落ち着いて、まずは落ち着いてバルを下げて」

黒い鎌を下げたフェイトがブスウとしてるなか、もう一人のフェイト擬きに向く。

「こうして会うのは二度目になるが、初めまして。御影 夕だ」

「こうやって会うのが初めましてなんだから、初めまして。アリシア・テストロツサよ」

「……なんか聴いてた印象と違うんだけど？」

「貴方のレポートは何回か読ませてもらってるから、ちゃんと挨拶しようと思つて」

「無理してるなら止めてくれ」

「うん。じゃあよろしくねユウちゃん」

「……………え？」

「私の方が年上なんだから、ちゃん付けでも構わないよね？」

「……………こう、一応、お前さんの妹の面倒をみてたんだが」

「うん、知ってるよ。ありがとうユウちゃん」

もう、なんとというか、いいわ。

—名前なんてなかった

—あり得る訳なんてなかった

—シニカルユウリンが…

—触手少年！ミラクルユウちゃん！

カット。

「で…なんでいるんだ？」

「えっと、手紙着てる筈なんだけど」

「……………」

冷たい目で見られながら、エメールで一番新しい日付のモノを探して開く。

『しかしながら、私の娘達が天使ならばこの世界が救えると思うの。むしろ救つて当然ね。その為に私は神を殺しにかかるわ。あんな幻想と人間の思考の産物なんて、全て計算で証明してやれば存在否定が』

これじゃなかった。

「詳しい事は言えないんだけど、またこっちで住む事になったんだ」

「フエイトは囑託魔導士として、私は技士見習いとしてだけどね」

「それは、また…」

—管理局が関わってきた？

—さすがにやり過ぎたか

—もう少し慎重に動くしかないか

—闇の書と決まった訳じゃない

—しかし管理局が近くにるのは確かだ

「面倒そうな事に巻き込まれてそうだなあ」

「でも、アリシアがいるし」

「なのはちゃんやライト君も居るからね」

「……そいつは、そうかい」

「ウン。好きな事してる時にちよっかい掛けて来ることを除いたらいい子なんだけどねえ」

「あはは……ライトは仕方ないよ。この前なんて仕事ギリギリ…というか遅刻してリンデイさんに怒られそうになってたし」

親バカ二号に怒られそうって…。

—聞いてた限りは優しそうな人間だったけど？

—仕事面では厳しいのか

「で、お母さんから伝言なんだけど」

「口を開かずに今すぐ自宅に帰りなさいな」

「レポート提出遅れてるんだけど嘗めてんの？だつてさ」

「ハイ、すぐに送らせていただきます」

クスクスと苦笑する二人の声が暗い影を背負った俺の耳にやけに残った。

「……………ん」

「起きたか」

「ああ、蒐集は？」

「今終わった。シヤマルから伝言だ」

「どうせ、無茶するんじゃないやありませんってやつだろ？」

「…最近いつ休んだ？」

「今しがた休んでただろ」

「…それも数分だろう、いざとなれば俺が捕縛魔術を掛けてでも休ませる」

「すぐに解くさ」

バキバキとなる関節の音を聞きながら呼吸を深くする。

「そういえば管理局の連中と戦ったか？」

「…いや…どうかしたのか？」

「管理局がこっちに来てるから注意しておけ」

「…忠告感謝しよう」

「出来るならば、戦うな」

「……………我らは負けないさ」

「それは信じてるが、関わらない方が得さ」

そう言いながら、錠剤を二つほど口の中に放りこんだ。

13 黙つとれド阿呆

誰か詳しいことを知る人間がいるならば是非私に教えてほしい。
もう自分ではなんやよく分からん事になってるんや。

どうして、夕君の膝の上に私が居るの？

膝枕とかじゃなくて、後ろから抱き締められてる訳なんやけど、今
一どころの話じゃなくて、もうなんて言うか、さっぱりわからん。

「はやては守るよ」

そんな言葉が耳朶を叩き、抱き締める力が強くなる。

すごく安心するんやけど、やっぱりこう物足りない感があるわけ
で。

ソレに察したのか、夕君の顔が私に近づいてくる。

私は緊張しながら、自分の緊張を解くために軽口を準備する。

「もしかして、夢なんちゃう?」

「セエエエエエかいいいいいいいいー!」

「……………」

目が覚めた。二重の意味で目が覚めてしまった。

当然のように私は横になって寝てる訳で、

隣には夕君どころか誰も居らん訳で、

こう、なんとさえばいいのだろうか……、

「……………うあああああうううう……………」

珍しく、朝一番の言葉が寝惚けた「おはよう」などではなく、もう
なんとも言えない恥ずかしさで飾られた唸り声だった事は誰も知ら
んでいいと思う。

妙に甲高い声だった夢の中のアイツがケタケタ嗤らっているような気がしてそれもまた私を唸らせる原因になった。

「夢とは人間の深層心理、あるいは心の記憶によって成り立っている。つまり、夢というのは少なからず現実であり、少しばかり自分が想像した映像であり感覚だ。強い印象があればソレに従い脳が処理を開始する。その断片を無理矢理物語のように纏めたモノが夢だ」

「……随分と真面目に応えてくれるんやね」

「だって真面目に答えないとお前が怒るだろ」

「まあそやけど……こう、ちよつとは冗談を混ぜて欲しかったというか」

「夢なんて妄想だ」

「また実も蓋もない……」

「巳が二つもあれば再生の象徴さ」

確かに夢ってなんや、とは聞いたけどどこまで真面目に応えられるとは思わへんかった。いや、冗談十割の返答も聴いたけど。

そんな軽口を叩いていた彼はヘラリと笑い、持ってきていた本に眼を落としている。なんでも、なかなか考えさせられる本だそうで一文一文を噛み締めて読んでるらしい。

「……………、夢なんてなかった。うん、今日は夢を見る事もなく起きた。深い眠りやった。」

「……………病気みたいやなあ」

「治療が必要なら応相談」

「結構です。というか処方箋もないやろし、セクハラされそうやし?」

「失礼だな。脚を撫で回すだけだ」

「ダウト!」

視線は本から動いてないのに、夕君はしっかりと応答する。

「……ちよつと本取りに行つてくるわ」

「付き添いは？」

「大丈夫、必要なら呼ぶわ」

「はいはい」

手をヒラヒラと振つて再度本に没頭するコイツ。もう少し構つてくれてもいいんじゃないか？なんというか、最近冷たいような気がするし。

いや、そもそも夕君に好意を抱いてるのは私であつて、夕君が私に好意……は抱いているだろうが、なんだろうか、こう……

「だあーむしゃくしやするー！」

「大丈夫か？本が取れないんだな」

「は？」

いつの間にか隣にいた少年。銀髪にオツドアイ、あらやだイケメン。

童話から出てきた王子様を絵に書いたような……。

「ほら」

「はあ、どうも」

「気にするなよ！」

とにかく笑顔が素敵ないケメンである事はよくわかった。ただ、なんとというか、笑いすぎ？何がそんなに楽しいのか……。

「図書館はよく利用するんですか？」

「いや、今日はたまたまかな」

「へえ、因みにナツシーに進化するん？」

「？」

「いや、忘れて」

笑顔は素敵だ。顔も十全だといえる。

勿論、コレとアレの顔を並べられて、どちらがカッコいいですか？と問われれば当然のようにコレの方がカッコいい。

「車椅子は辛いだろ？俺が押してやろうか？」

「いや、結構です。付き添いも待ってるんで」

「気にするなよ」

気にするとか、せえへんとかじゃない。必要があるなら頼むし、必要ないから頼まんわけで。

「なら、あの席までお願いします」

「はい、姫様」

かと言っても他人の好意を無駄に断る訳にもいかんし、とりあえず夕君に任そう。こういう人間の対処は得意そうやし。

そして、そういう役者みたいにするんやったら仰々しくやればええのに。変に羞恥心あるから微妙な感じに……。

「車椅子って辛そうだな」

「それでもないです。周りの人も助けてくれるし、家族もいます」

「家族…ねえ」

なんやろ、家族になんかあるのかな？人の家族に訝しげな声を出す程度に思い入れでもあるんか？

他人の家族は興味ないけど、私の家族に文句をいいたいだけならやめてほしい。

「ん…先客？」

「いや、コレが付き添いです」

「……男？」

どこからどう見ても男だ。

彼が女に見えたなら……眼鏡外してカツラを被らせてしつかりと化粧もすれば、可愛くは見えそうだ。いや、どうせ拒否されるんやから、想像だけで抑えとこう。

「夕君？」

「……………」

あれ？反応せえへん。……？

「ユウリーン」

「……………」

「あれ？大丈夫？」

「…ん、はやて、か？」

「なんや、大丈夫か？」

「……大丈夫、…大丈夫。ただ寝てただけだ」
「……ふむ。」

「ああ、すいません。付き添いの気分が」

「なんでテメエがここに居やがる！」

「……ア？」

「すずかと仲良くした後ははやてか!? お前もまさか転生者か!？」

「……なんだ、またお前か」

「こつちの話を聞け！」

「転生者? 意味がわからないけど……」

「嘘じゃないだろうな！」

「とにかく、静かにしてくれ、ここは図書館で今日は司書さんだ」

「チツ……行こうぜはやて」

「いや、なに言うてるん？」

「こんな根暗野郎ほつとけばいいだろ？」

「笑顔が素敵な人。私は付き添いが気分悪いのに放っていくような人間やないんよ……夕君大丈夫か？」

「大丈夫だ」

「ほら、コイツも大丈夫って」

「黙つとれド阿呆。押し売りやったら他掴まえてやつとき」

「つい出てしまった言葉に少しだけ後悔する。もう少し毒を混ぜればよかった。」

微妙にフラついている夕君を支えながら図書館を出る。後ろには笑顔が素敵な人が固まっている。

第一、自分の名前を明かさずに他人を名前で呼ぶとはどういう教育を受けたのだろうか。

「悪い、八神」

「ん、気にせんとき」

「いや、ちよつと、落ちる」

「え、うわ!？」

私に凭れるように倒れた夕君。寝息が聞こえるという事は、眠って

しまったんだろう。

微妙に体が熱い……風邪なのだろうか。えつとこういうときはシヤマル？いやシグナムに連絡して迎えに来てもらった方がいいんやろか。

微妙に寝息が耳に当たってくすぐつたい。落ち着け、彼は病人かも知らんのや。だから自分の欲求の為にシヤマル達を呼ぶんを遅らせるなんて、していい訳があるのか？いや、ない！

「……んう……」

やっぱりもうちよつとだけこの現状を楽しむ事にする。うん、シヤマルを呼ぶんはそれからしよう。夕君が微妙にエロい声を出すのが悪い。夕君悪い、私悪くない。

14 ゲエツ！烈火の将！

目を覚ました。

―思考クリア

―内部解析異常あり

―カット

―アンヘル侵食進行

カット。

「知らない天井…って訳でもないか」

「起きたか」

「ゲエ！烈火の将！」

「元気な所悪いが、首を飛ばすぞ？」

「それは体が軽くなりそうだ」

随分と体が重い。

―首が飛んでつたらその分軽くなる

―脳が意思だとするなら随分軽い体だな

―ピンクの悪魔みたいに一頭身だけだな

―スカッ

カット。

左手を確認すればキツチリと宝石が輝いている。

―意識を失えばやはり効果は消えるか

―魔力を勝手に使う形に変更だな

―擬態魔法行使

「…：…うむ、まあとりあえずはいいか」

「なにがいいか、だ馬鹿者」

「馬鹿はいつもさ、墓は最期にとつてるんだから」

「ザフィーラから聴いていたが、無理をし過ぎるな」

「お前は俺に何も言えないさ」

「ああ、そうだ。お前との誓いで私はお前にとやかく言える立場ではない」

「騎士と友人…：今は味方でも明日の敵の可能性だからな。あの時に

釘を刺しててよかった」

たぶん刺してなかったら、シグナムに強制的に休ませられる。

—オツパイに看病されるなら中々いいけど

—どうせ放置なんだろう？

—オツパイな看護師とかオツパイな女医とか

「よかった、起きたのね…」

「シヤマル先生怖いよ！後ろに影背負ってるよ！」

「黙りなさい」

「ハイ……」

「さて、どこから責めようかしら？」

「貴方が私の制止を振り切り出ていった事から？」

「それとも消費が早い栄養剤の事？」

「それとも貴方が疲労と寝不足、あとは風邪だったのに休まなかった事？」

「私と会うときははやてちゃんと一緒に私の説教を回避してた事？」

「先に言うけれど、全部説教をするつもりだから、今は反省しなくていいわ。今から反省すると貴方の反省で貴方の存在が否定されていくから」

「……………こう、どうにか軽くなりませんか？」

「なりませんっ！」

「……シグナム」

「諦めろ」

「何ふて寝しようとしてのかしら？」

「ほら、うん、病人らしいし」

「起きたら説教が待ってるけど？」

「今から反省する事にします」

「よろしい、では——」

わあ、スゴく耳が痛いよ。

—自覚しながらしてたのにね—

—あはは—お花畑が見えるよ—

—わ—ちようちよさんだ—

—あはははは

—うふふふh

「聴いてますか？聴いてなかったわね。最初から言うわ。貴方はこんな年齢から栄養剤ばかり食べて——」

真面目に聴くことにしよう。

—シヤマル先生怖い

—シヤマル先生怖いよ

カット。また最初からループとか嫌だ。

「深く深く反省致しました。もう海よりも深く海面より高く反省しております」

「……もう無茶しちやダメですよ？はやてちゃんも心配しますし」

「善処するさ」

「直す気はないのね」

「馬鹿は死んでも直らないさ」

十二分に理解してるつもりだ。

—無限ループって怖くね？

—シヤマル先生怖いよ

—幾度の説教を受け

—一度の後悔も無く

—我が体は、無限の反省で

カット。反省しても直せる気はない。

ノックの音が聞こえ扉を向けば、八神家の主がひよっこり顔を覗かせていた。

「えっと、入ってええ？」

「大丈夫ですよ、診察も終わりましたし」

「…診察？いや、診察でした」

「なんやあつたんか？」

「シヤマル先生が実にいやらしい手つきで俺の体を蹂躪した以外は何もなかった」

「そんなことしてません！」

「もうお婿に行けない！責任はとってもらいますからね！」

「シヤマルあかんよ。夕君は私がもらうねんから」

「え？」

「ん？どないかしたん？」

「……いや、なんでもない」

ふむ、いつもの掛け合いとは随分違う感じに取れたけど……。

—勘違い乙

—自惚れ乙

—はいはい現実を見ような—

「冗談はさておき、迷惑かけたようで悪いな」

「別に気にしとらんよ、寝不足やったらしいけど……」

「遅くまで本を読んだら、な」

「な、て：別段無理して会いにこんでもええのに」

「無理ではないからなあ」

「私としては嬉しいけど、やっぱり倒れる程無茶はされたくないよ？」

「次からは倒れないようにするさ」

—倒れると心配もかけるしな

—いやはや、どうしたものか

「なんや、こっちの言うてることを曲解してるなあ」

「極論屋だからな」

「はい、いいえ、以外にも答えはあるよ」

「疑問疑答は楽しみだけで使うものさ」

「自問自答も是非だけならば楽しくないやろ？」

「是が非でも、非が是でも、自問している時点である程度の答えは既に人間持つてるものだ」

「強者の意見やね」

「弱者の決意さ」

八神は溜め息を吐いて、口を開く。

「……聞いててわかったけど、無理は続行するんやね？」

「善処はするさ」

「それは私がどう言った所で直す気はないんやろ？」

「…直る気がしないだけだ」

「うん。わかっとなるよ……私は夕君に何も命令することは出来んし、命令したところで夕君は聴かんやろうし」

「聞きはする」

「その通り動かんやろ？……夕君は何をそんなに焦ってるの？」

「焦ってない」

「焦ってるよ。寝る時間を削ってでもせなアカンことなん？」

「………ああ」

「ホンマに？」

「当たり前だ。しなくちやいけないんだ」

「頑張り屋さんなんやね」

「違う」

「……誰かの為に頑張ってるのに？」

「俺の為に動いてるんだから、単なる馬鹿さ」

「夕君がそういう性格じゃないことは、よう知っとなるよ」

「……笑うなよ」

「笑うよ。夕君と居るときは痛みも感じへん位に笑うよ」

夕君が無理してるのはわかってまうし、それを隠してる夕君にも気づいてた。

夕君が頑張ってるのも、薄々感じてた。

だからな、夕君。頑張るな、とは私は口が裂けても言われへんし言う気もない。ただ一つ言うことを聴かせれるなら、無理せずに私を笑わせて？夕君は騎士でもなくて、私の友人やろ？」

「……なんだろ、はやてにはこの先口喧嘩とかで勝てない気がしてきた」

「今も昔も後も先も、夕君が相手なら絶対に勝てるわ」

ふふん、と鼻を鳴らしたはやてに溜め息。

―ああダメだ

―関わってはいけない

―これ以上はいけない

―気付くな

―カット

―カット

カット。俺には勿体ない気持ちであり、無駄な気持ちだ。持ちようがない。

両腕も背中も、もう空きはないのだから。

＊ ＊ 閑話・名前がまだない猫…否、狸

「ん……」

「あ」

私が取ろうとしていた本が先に取られた。

手を辿れば瓶底眼鏡と少しぼさぼさした黒髪の少年。

「あー……なんだ、車椅子少女。この本が読みたかったのか？」

「…別にいいです」

「そうかい」

なんだろう、私の印象は確かに車椅子少女だが、初対面で言われるのはどうかと思う。

「ふむ……まあいいか」

「戻すんやったら貸してください」

「読まないんだろ？」

「……性格が悪いって言われませんか？」

「少なくとも生まれて今まで性格がいいとは言われなかったよ」

やっぱり、と心の中で納得し少年を見る。

少年は少年で私を見てふと視線を落とした。

「……なにか？」

「童話集……王子様でも求めてるのか？」

「余計なお世話です」

「それは失礼、レディ」

演技掛かった礼をされ余計に頭にくる。

「なんやねん……」

「なんやねんと問われれば、応えてあげるが世の情け」

「情けならいらん」

「では、世の摂理で」

「……ひねくれとるなあ」

「お褒めいただき恐悦至極。では疑問に答えましょう」

ワタクシ、姓を御影、名を夕。以後、見苦しき面体。お見知りおかれまして、恐惶。万端ひきたって宜しくお頼み申します」

「あんなあ、その口上を分かる私もオカシイねんけど。普通は子供に向かつてせえへんよ?」

「マジでか」

「マジや」

御影と名乗った少年は数秒頭を抱えてから、なにか納得したように口を開く。

「…いいか」

「ええんかい!」

「いや、だつて今会話をしてるのは俺とお前で、お前は分かつたんだろ?」

「まあそやけど」

「なら上々にして十全。なんら問題はないさ」

そうなんか? いやそうである訳がない。変に丸め込まれそうや。

「……………」

「……………何か?」

「いや、勝手に名乗った、というか問われたから名乗ったんだが。人の名を尋ねたのだから自身の名を名乗ったらどうだ? あれか、名前はまだない猫なのか」

「八神はやてや。名前はある」

「うん。よろしい」

先ほど戻した本をもう一度本棚から抜いて私の膝に置かれた。

「いらんつて言うたけど?」

「性格悪いから仕方ないだろ?」

「……………まあええわ」

「ならよかった。アツチの方が日当たりいいから移動しようぜ」

「自由やなあ」

「自由は束縛されてる証拠さ」

そう言いながら御影君は私の横を歩いている。車椅子を押すこともせず、先に行くわけもなく。

「押さへんの?」

「?押ししてほしいのか?」

「:別にええけど」

「なら自分で頑張れ。無理なら手伝うさ」

押し付けがましい好意もなく、ただ単にそれが普通のように横にいる御影君。

微妙な距離感を保ち、楽しそうに笑っている。

「何がそんなに面白いん?」

「面白いだろ。相手の言葉に感情をぶつけるんじゃないで、しっかり返ってくるならなおさらだ」

「:そうなんかなあ」

「そうに決まってる」

「:僧に決まってるなんて、随分厳格な人間やねんな」

「早期に決めすぎたか:幻覚な人なんて夢見がちな少女と大きなお友達だけで十分だ」

なるほど、ちよつと楽しいかもしらん。

「と、友人関係になった訳やん」

「まあ確かそんな感じだな」

「そこでさ、一個だけ聴きたいことがあったんよ」
「なんだ?」

「私が本を取りに来た段階で夕君の姿は無かった、つまり夕君は私の後に来たことになる」

「:……ふむ、続けてくれ」

「車椅子の美少女が居るのに、声も掛けずに別の本を取る鬼畜さんやったの?」

「あー……怒らない?」

「もう昔の事やし、怒ってもしやあないやん」
「なら種明かし。」

車椅子に乗る美少女が必死に手を伸ばしてる姿に萌えてました。

取ろうとしてた本はお前が持ってた本から推測して、頼られるまで待ってたけど全くそういう事をしなかったから自分から行ってみた。

最初に『その本取りたかったんですう』みたいな事を言われてたら渡してバイバイしてたかな。まあ見事に求めなかったけど…それが若干心配になって絡んだ結果だ」

「最後まで聞くとイイハナシダナーやのに最初に残念すぎる事になっただな」

「まあその辺りは気にするな。ところではやて様？」

「なんや？」

「怒らないんじゃないかな？」

「オコツテナイヨー、ナニユツテルーン」

「女神はやて様はそう言いながら憐れな男に裁きの鉄槌を」

—ギヤアアアアアアアアアアアア………

八神家周辺は今日も平和です。

15 早急で性急に性的要求を請求しよう

「なんでオメエがいるんだよ」

「俺が説明してやろうロリータ」

「夕君は今日ここで夕飯食べてくでー」

「つまり……そういう……ぐす」

「泣くなよ。ほら、アイスやるから」

「嬉しくなんか、無いんだからね！」

「キモい」

「うん。ごめん」

ヴィータから未開封のアイスをもらい封をあける。

―アンテ！

―別に俺は君が舐めてるそれでも構わんど

―しかしながらこの寒い時期にアイスか

―炬燵アイスは幸せだろ？

―炬燵蜜柑は至上だ

―コタツの上にある

―言わせねえよ!?!アルミ缶だなんて言わせねえよ!?!

カット。

「夕君は動かんでええからな？」

「……寝起きで頭が働かないからか、エロく聞こえた事は黙っておこ

う」

「口に出てんぞ」

「いやー」

「なんか、おかし……いやいつもか」

「おいロリータ、喧嘩売ってんのか？」

「お前が高価買取してくれるって言っただろ？」

「オウケイ、ロリータ……俺と勝負し」

「ユウクーン、じつとしとってって言うたよね？」

「イエスマム！一歩も動いておりません！包丁持ってニッコリは勘弁

！」

「相変わらずだなあ」

「前より弱くなってるよ」

呆れたヴィータを見ながら、思わず苦笑する。

―ああ弱い

―はやてに對して弱い

―好意に弱い

―弱い

―弱い

カット。

「……闇の書の進行が思ったより早え」

「……そうか。一個人から二度の蒐集が出来ないとか、上品だなあ」

「上品でもリンカーコアしか食べない悪食だけだな」

「雑食じゃないだけまだいいさ」

「拒食でもねえーしな……お前はもう頑張るなよ」

「ああ無理無理。お兄さんハッスルしちゃうから」

「オイ……」

「ユウークーン？」

「いやあ、そろそろ休みたいと思ってたんだよー。ヤッペーツチョー

ヤスマミテー」

「うわあ」

「そんな顔すんなよ。泣きたくなる」

―泣いてもいいのよ！

―ほら、俺の胸を貸してやるよ

―いや、シグナムの胸借りにいこうぜ

―もしくはシヤマル？

―或いはザツフィー？

―え？

―え？

カットカットカット。

「むう…さすがに負けるか」

「そら、夕君より下手やったら落ち込むんやけど？」

「いや、俺も中々に料理はうまい方なんだから落ち込むなよ」

「そういう意味やないんよ」

「どういう意味なんだよ」

「そういう意味や」

「どういう意味なんだよ。」

「そういう意味さ」

「どういう意味だ」

「そういう意図さ」

「いとおかし」

「たいへん趣があります」

「カット。ないよ。」

「しかし、ザファイラってその形態で食べてるのか」

「なんやそっちの方が楽らしいよ」

「…ほら、ワンコ。俺のおかずをやろう」

「噛み千切る」

「落ちてげザッファイ、魚やるから」

きっちり魚を銜えながら、渋々自分の碗の前で伏せをするザッ
ファイ。

「犬可愛いなあ」

「中身はお兄さんだけだな」

「褐色でムキムキだもんな」

「主、倒してしまって構わんのだろう？」

「あちやー」

「カット。」

「ごちそうさまでした」

「お粗末様です……なんや全然食べてないやん。やっぱり体調悪いの？」

「元々胃が小さいんだよ」

「ふーん……」

「ごめん」

「いや、ええよ。私も出しすぎやったかもしらんし」

「美味しかったし、楽しかった」

「いつでもどうぞ。事前に連絡さえされてたら大丈夫やから」

「あいよ」

「えっと……シグナム送ってあげてくれる？」

「いや、別に大丈夫だけど？」

「病人は人に好意に甘えとけばええねんって。ほな、シグナム頼むな？」

「はい。行くぞ」

「ちよ、ま。はやて迷惑かけて悪かった！ごめ、って謝ってたからテメエ引きずるんじやねえよ！」

「まったく謝りもせずシグナムは俺を引きずって八神家を出た。」

「謝罪ぐらいあつてよくない？」

「オツパイに謝罪を請求しようぜ」

「早急で性急に性的要求を請求しよう」

「いいか、坊主……オツパイには夢が詰まってるんだぜ……!!」

「知ってるか？パフパフという技を！」

「昨晚はオタノシミでしたね！」

「どうしようオツサン！右と左どっちを掴まめば

カットカットカットカットカットカットカットカットカットカット
ト。

「ミカゲ」

「ん？」

「主はやての料理は美味かったか？」

「は？美味かったけど」

「なら何故あの量しか食べなかった？」

「言っただろ？胃が小さいんだよ」

八神家から離れた公園でシグナムの問いに応えていく。

—こんな夜中の公園にオツパイつり目の美女と二人きりのシヨタ
か

—お巡りさんこの人です！

—知ってるか…：女の場合は強姦罪には問われず、強制猥褻罪で捕ま
るんだぜ…!!

「我がが初めて会った時の昼食をあれほど食べながら、胃が小さい…
？」

「あの時も食べてなかったさ」

「ふぎけるな！」

シグナムに胸ぐらを捕まれる。

—代わりに俺もアクションを…

—ニットでダボつとしてるのに…

—なんとするか

—ありがとうございます！

「警戒対象を見ていないと思ってるのか…？」

「あー…：つまり、はやての飯が不味くて食べてないんじゃないかと
？」

「そうじゃない。主はやての料理は確実に美味だ」

「ならいいじゃねえか」

「…：なら質問だ、ミカゲユウ。貴様、いつから胃に錠剤以外を入れて
ない？」

「……………」

「無言は肯定と取るぞ？」

「…：お前が口出しする義務は」

「ない。あるはずがない。お前と私はどこまで行っても平行線だ」
「なら離せよ」

「だがな、主はやてを悲しませるのは許せる筈がないだろ」

「……オーケー、赤くて片目のないイカしたオツサンみたいに倒れな
いよう善処しよう」

「……………無理はするなよ」

「祝い事がなけりやあ大丈夫さ」

16 本日の営業は終了致しました

「……は？」

「お願い！少し協力してほしいんだ」

「いや、管理局の仕事を協力しても俺に一寸の得もないんだけど？」

寝起きなのかいつものボサボサした髪の毛がさらにボサボサして
いて、アクビを噛み殺す事もなく普通に出しているユウ。

「ダメ？」

「ダメ。ちなみに内容は言うなよ。聞くと強制送還されるから」

「えっと、実は」

「アーアーきこーえなーいー」

耳をしつかりと塞ぎ声を出される。

「第一、プレシアの司法取引で俺には関与できない筈だろ？」

「えっと、それは」

「プレシアさんの取引内容は1日の自由と定期的に送受される手紙が
誰から着てるのかを秘匿、及び差出人に関与しない事になってるわ」
「……………誰？」

「初めまして、御影夕君。私、リンディⅡハラオウン。フェイトさんの
上司にあたります」

「どうも。さようなら」

ユウが自宅の扉を閉めようとする。

咄嗟に足を入れて、ドアノブを引く。

「ちよ、待ってよユウ！」

「残念。本日の営業は終了いたしました。お帰りください。明日から
営業しませんので悪しからず。足どけろ」

「だって足どけたら扉を閉めるでしょ!？」

「扉が開いてたら閉めるだろ。まったくプレシアはどういう教育をし
てるんだ……」

呆れた口調でユウは溜め息を吐く。

扉を引く力は強くないが、少し辛くなってきた。

そんな私の後ろでリンディ提督：リンディさんは溜め息を吐いた。

「……別にアナタがそういう態度を取るなら、こっちも手があるのよ？ アンヘルさん？」

「……」

ユウの力が少し弱まる。

扉が開いきボサボサした髪をカリカリ搔いていたユウは非常に面倒そうに

「面倒だな………入れば？」

訂正、面倒と普通に言っつて私達を部屋の奥に招き入れた。

「で、俺をアンヘルとして逮捕でもする気か？ 管理局」

「それは本当に最後の手段。私としては穏便に済ませたいと思ってるわ」

「どうだか……」

そう言いながら、しっかりとユウはお茶を淹れてリンディさんと私の前に出す。

「砂糖は必要か？ 甘党さん」

「ええ、ありがとう」

「…マジだったのか」

母さんからリンディさんの事を聞いて半信半疑だったのだろう。残念ながら、真実です。

砂糖が入る度にうわあ…と漏れていた声が四回程聞こえた後、リンディさんがお茶を飲んだ瞬間にうわあ、が、うおお…になった。

「これは、なかなかスゴいな」

「あなたも飲むかしら？」

「残念ながら甘い物は苦手なんだ」

「あらそう、残念だわ」

リンディさんはユウに微笑み、ユウもニヘラと笑う。

「敵意のある人間が出すモノを飲むのが悪いよな」

「え？」

「あら、何も入ってはないのでしょう?」「え?」

「さあ自分で入れてたじゃないか」

「砂糖は入れたわ」

「知ってるかい? 砂糖を大量に摂取すると50年後辺りに癌を患う可能性が増えるんだぜ?」

「あらあら気を付けないと」

あはははは

うふふふ

なんだろう、この私の置いていかれてる感じ。

いや、まあ置いてきぼりだけど、たぶん着いていっても追い付けない。
い。

「さて、と。冗談混じりの世間話はこの程度で大丈夫か」

「ええ、そうね」

急に空気が張り詰める。

「取引は内容を聴かずに却下だ」

「あらそう、なら捕まえるしかないのね」

「管理局が俺を? 罪人を管理落ちした世界へ幽閉する程度が限界の管理局か?」

「なんの話?」

「知らないのならいいさ。お帰り願おう」

「ユウの力が必要なんだ」

「他に頼め、他に」

「ならアナタを捕まえ、」

私の横にいたリンデイさんが消える。いや、赤黒い彼の触手によって後ろの壁に叩きつけられていた。

「リンデイさん!」

「大丈夫よ。この映像も」

「サーチャーなら全て解析して、さっきの世間話を話題を変えながら垂れ流してるぞ」

「……聴いてた通り、すごいマルチタスクの数ね」

「……聴いてた?」

「プレシアさんから少しね」

「漏らさないって言ってる人間がどうして漏らすのかねえ……」

確かにユウのマルチタスクの数はスゴい……というか、一般的に言われているマルチタスクでは多分出来ない。

「まあいいや。で、管理局のオバ……あー、お姉様？」

「何かしら？」

「首だけ出てるのに気丈だねえ……取引をしようか」

「お互いにリスクが伴う取引なんて愉快だわ」

「笑つてもいいんですよ？」

「あらあら、そうなの？」

「ええ、取引に笑顔は付き物ですとも」

あはははは

うふふふ

もう私はこの二人に着いていく事を諦めてる。というか、無理。

どうして命を握ってる側と握られてる側でこんな会話が成立してるんだろう。

「一つに付き一つの望みで大丈夫そうですか」

「ええ、無理なモノは無理って言わせてもらうけれど」

「大丈夫、無理なんてない……今回の内容での俺の安全の確保」

「出来るわ。では今回の件を確実に応と」

「応。冗談さ、睨むなよ……ある程度の自由……そうだな、ここの時間でいう午後五時にはこの家に帰りたい」

「出来るし、元からそのつもりよ？」

「……あれ？もしかして無駄な労力割いてる？」

「あら、気付いたのかしら」

「まあいいや。管理局は嫌いだし」

「そう……」

「では、最後に………いや、ふむ……」

「どうか、ン……したのかしら？」

「いやいや、ナンデモナイデス。ハイ」

何故か顔の赤くなつたリンディさんと何故か片言なユウ。

「では、まあ内容を言ってもらいましょうか」

「実は、無げ…やめなさい!」

「え?何もしてませんか?何か?」

「触手を早く!アア…、どけなさい!」

「いや、安全確保は最優先だから、無理だつて」

「…ツ、フェイトさん、説明をお!」

「は、はい!」

何故か痙攣したように動くリンディさんを尻目に、私は今回の事を軽くユウに話した。

「ふむ、闇の書と無限書庫…ねえ」

「ダメ、もういやあ…いきたくないのに…っ!」

えつとリンディさん、どこに行けませんよ?行つてませんよ?

「まあ取引もしたし、仕方ないか」

「ユウ。リンディさん」

「あ、…えつと、大丈夫ですか?なんかスゴい顔が赤いですけど…?」

「大丈夫、大丈夫だから早く、早く!ああ、」

「えつと…アンヘルが粗相してるのかな。アンヘル…戻れ」

ユウがそう言うのと触手は声に反応してユウの左手に戻っていく。

へたりと床に座り込んだリンディさんは息を荒くしていて、今にも倒れそうな程疲れていた。

「リンディさん大丈夫ですか?」

「大丈夫…大丈夫よ。ええ…」

「なんか…アンヘルがスイマセン…まだ俺の意思じゃ上手く動かせなくて」

「いいのよ…ええ…大丈夫だから」

深呼吸を数回して、どうにか呼吸を戻していくリンディさん。

「少しぐらい休んで大丈夫ですよ？お茶を淹れます」

「あ、ありがとう」

「いえ、よくはわかりませんがアンヘルが悪いんだったら俺の責任ですから」

ユウはテクテクと少しだけ機嫌よさそうなお茶を淹れに行った。

「えっと、じゃあ取引は成立ということ」

「ええ。明日は空いてるかしら？」

「大丈夫です」

「ならフェイトさんに迎えにきてもらうから、フェイトさんもいいですね？」

「あ、はい」

お茶を飲んで落ち着いたので、リンディさんはいつものようにテキパキと指示を飛ばして席を立った。

「では、指示はまた明日に」

「了解です」

「じゃあ、ユウまた明日ね」

「ああ、また明日な」

そうして私とリンディさんはユウの部屋から出ていった。

少ししてから、何かの叫びが聞こえたような気がしたけどたぶん気のせいだろう。

17 猫耳一号二号

「……ここが無限書庫か」

「うん」

円柱の内部に入ったようで、その壁は本棚で天井が見えない。

—素晴らしい空間だ

—ここで邪魔さえ入らなければ実に有意義な時間が過ぎせそうだ

「で…調べるのは、確か」

「闇の書。ベルカに関連してらしいんだけど」

「了解」

「あ、あと昼にもう一人くるんだ」

「邪魔にならなきゃどうでもいいさ」

それに何らかの手掛かりは掴めるかもしれない。

—解析魔法行使

—解析魔法行使

—お前はベルカの歴史

—お前は闇の書が関わった事件を

—お前はロストログア関係を

—お前は対処方法を

—俺は春画を探す

「やっぱり、スゴいね」

「何がだよ」

「ユウの魔法展開だよ…大規模な解析魔法と小さいものが、五つ？あとは普通に喋れてるし」

「魔力はかなり少ないんだけどな」

アンヘルからの魔力を少しずつ自分に合うように転換してやっとなんだ。

—春画が全く見つからないんだが

—探せよ！もっと探せば見つかるよ！

—どうせあるよ！

「ああ、先に注意しとくが解析帯に触れるなよ。此方に入ってくる情報
報が混同する」

「うん。後から来る人にも伝えとくね」

「よろしく……じゃあ、少し真面目にやりますか……！」

瞼を閉じて、深呼吸する。片足を軽く上げて踵で地面を叩く。

―春画が見つからない

―解析魔法行使

―解析魔法行使

―解析魔法行使

―行使

―行使

|

|

|

|

|

|

「ユウ！」

「……………ん」

「魔力光が……………」

瞼を開ければ、フェイトと明るい茶髪のシヨタ、さらに猫耳二人。
ついでに展開してた魔方陣が濁った黒になっている。

―アンヘルからの魔力供給増大

―転換量を上回った

―解析魔法遮断

―情報は手に入ったし

「ふう……………」

「大丈夫!？」

「大丈夫大丈夫。少し休めば元に戻るし…で、そちらさんが言った？」

「あ、どうも。ユーノIIスクライアです」

「あー…なんだ、ファミリーネームは後に回した方が？」

「えっと、普通で大丈夫です」

「なら、初めまして、スクライア。御影 夕でありんす。良しなに」

「よろしくお願いします」

「花魁言葉は苦手だからツツコミなくて喜ぶべきか、はたまたツツコミがない所を悲しめばいいのか…」

伸ばされた手を握り、軽い握手を交わす。

スクライアは首を傾げて何を言ってるかわからなさそうだ。

「私達は」

「あんたらはいいよ。聴いても覚える気がない。管理局員で一纏めにさせてもらうよ」

「なっ!？」

「もしくは猫耳さん一号二号」

「ユウ、駄目だよ」

「駄目じゃないさ。向こうはさっきのスクライアとの自己紹介で名前は知っている。俺は覚える気はない。つまり自己紹介された所で徒労だ。むしろ自己紹介分のエネルギーが確保されたんだ、感謝しろよ管理局」

「管理局になにか恨みでもあるの?」

「管理局になにも感謝してないのさ」

ニャーニャー五月蠅いな。

—子猫が戯れてるなら可愛らしいんだがね

—残念対象は猫耳の美少女だ

—あれ?普通に可愛くね?

カット。管理局で無ければよかったのに。

「はー、器用だなあ」

「解析魔法を多段展開してマトモに会話できる君には言われたくないよ」

「魔法一つでそれだけの本が読めたら、器用の内さ」

「そう…なのかな」

「そうさ」

俺は解析魔法があったから読書魔法なんて開発出来なかった。

—いやはや、器用な頭だ

—柔らかい頭を持つ人間はいいねえ

「あ！ユウちゃんだ！」

「アリシア、ユウの邪魔しちゃダメだよ」

「今は何もしてないけどな」

「大丈夫だって」

「いや、ユウ…仕事してよ」

「スクライア、言われてるぞ」

「僕に振らないでよっ！」

「だ、そうだフェイト」

「もう…あれ？私が言ったのってユウだよね？」

「まあ今は休憩中だ」

いやはや、中々に楽しいな。

—弄りがいのある二人だ

—反応がいいよな

「で、どうしたアリシア」

「お母さんからの論文とあと私が書いたデバイス理論」

「……デバイス？」

「え？」

「えっと、バルディツシュとか…計算代行って言えばわかりやすいのかな？…もしくは魔法使いの杖？」

「あー、なるほど。わかった」

「……えっと、つまりミカゲはデバイス無しであんな数の解析魔法を行使してたの……？」

「計算機なんてなかった……というかスクライア、お前も似たような」

「全然違うよ！」

「まあ落ち着けスクライア。ここから右に四列上に九段いった棚の左から二番目の本を調べて落ち着け」

—春画だよ！

—しかしながらデバイスねえ

—こんなのがあったのか

—杖は精々魔法行使を楽にするだけだと思ってたのに

「そんな感じだからデバイス理論に関しては詳しくないぞ」

「大丈夫だよ。ユウちゃんを信じてるから」

「信じるなよ……」

「いや、まあ期待されてるならやっちゃおうよ？お兄さん頑張っちゃおうよ？」

「基礎理論は……」

「ここは無限書庫だよ？管理世界がすべて収まったと言っても過言ではないんだよ？」

「……探せと？」

「うんっ！」

ものスゴくいい笑顔で言われたよ。

—諦めろよ

—あー頑張りますよ、頑張りますよ

—御代は君の身体をペロペ

—カット

—十年後辺りに、君の身体を撫で回したい

—プレシアに殺されそうだ

—というか、ドSだなあ

—あれだろ？国外でいうSなんだろ？

カット。

さて魔力も少し回復できたし。プレシアの魔力転換を適当に改変すれば中々効率はよさそうだ。

「あー…フレームがこれだともたないだろ」

「でもこれじゃないと、カートリッジをロードした時の魔力に耐えれないよ」

「いや、カートリッジのロード…まあベルカの技術だけど、方法は幾らでもあるさ。余剰魔力を熱に変換して出せばある程度は大丈夫だ」
「でも、硬い方がよくない？」

「硬すぎるんだよ。あと重い」

「うーん…」

「別段固定砲台ならこのフレームでも大丈夫だろうが、近接職ならメンテ屋が発狂するぞ」

「…：わかったもう少し考える」

「ああ。理論の方は訂正したのと、余剰魔力を熱変換…もしくは空中に散布出来るような理論書いといたから確認しとけよ」

「ありがとう！流石ユウちゃん！」

「あとお前らの母親にも伝えてくれ。論文に煩惱が垣間見える止めてくれて」

論文には関与してないけど、ちよくちよく二人娘の自慢が混じるのはどうかと思う。

—娘が愛らし過ぎて理論が出来た

—なにそれ怖い

「さて、俺も仕事しようかね」

「頼むよ」

「スクライア、ようやく読み終わったか。トイレに行かなくて大丈夫かい？」

「読んでない! どうしてあんな本を」

「いや、右から二番目の本は古代ベルカの戦乱を纏めたモノだった筈だが…」

「……………右?」

「……………右。間違えて別の本を取ったんじゃないか?」

「……………なんか、ごめん」

「なに、気にするなって。間違いは誰にでもあるさ。さあ仕事しよう」
「うん」

いやあ…バレないものだなあ。

—さつき真面目な話をしてるのもあるんじゃないか

—いやはや…まったく

—シヨタが真っ赤だよ!

—誰か! この中にゲフンなお姉様はいらっしゃいませんか!

カット。そんなモノいたとしても、確実にこんな所にはいないだろうさ。

18 吸血鬼の恋物語

「では、みなさん。気を付けて帰るように

あ、御影君少しいいですか?」

「……何か?」

「実は明日、転校生が来るんですが……」

—転校生?

—この時期に?

「机が足りないんですよ。手伝ってくれませんか?」

「……なんで俺?」

「だって、副委員長ですよね?」

「いや、その副委員長の役職も強制的に決められたわけで」

「そうですね、御影君が寝てたから推薦で決まりましたから」

—あー、先生の笑顔が怖いよ

—まだ寝てたこと根にもってるのか

—もしくは違うこと?」

—テストを真面目に受けてないとか

—わざわざ解答用紙に落書きしたり

カット。

身に覚えが有りすぎてなんとも言えない。

「では、お願いしますね?」

「…手伝って、てことは先生も」

「手伝いたいのは山々なんです、いまから会議が入ってます」

「……机の場所が」

「用具室にあります」

「……他に誰か、」

周りを見渡せば、逸らされる視線。

—見てみるよ、これが虐めなんだぜ!

—子供は素直だなあ

—まあ嫌われるように動いてるから仕方ないか

ため息と苦笑を内心で漏らしながら、先生に向く。

「ひとつでいいんですよね？」

「はい！ありがとうございますー！」

「なるべく頑張りますけど、会議が終わったら来てくださいね？」

「もちろんじゃないですか！」

疲れた。

―強化魔法解除

―腕の包帯を取った子供にさせる仕事じゃないよな

―うっすら痣は残してるから、知ってるとは思っただけどなあ

―教師のパシリが多い

―教師と生徒に板挟みは勘弁だぞ

まっただ。だ。

「あ、御影君」

「……月村か。こんな放課後までどうしたんだ？」

「え、あ、……えへへ、忘れ物しちゃって」

「そうか……」

「御影君は？」

「見てわかるだろ？ 用具室から机を運べとのボスからの指令でね。礼もなく隷属してる訳だ」

「お疲れ様」

肩を竦めれば苦笑して労りの言葉を貰った。

―いやはや、いい子だな

―まっただ、ペロペロしたい

―テヘペロしてほしい

カット。ああ、落ち着け思考。嗜好に偏りすぎだ。

「そ、そういうえば、本は読んだかな？」

「ゆっくり読ませてもらったよ。そろそろラストかな」

「そっか…」

「しかしながら、月村から吸血鬼モノの小説を借りるとは思わなんだ」
「そう、かな？私だって色々読んでるんだよ？」

「悪いとは言っていないさ。少しだけ意外だった」

それも吸血鬼と人間の恋を綴った、そんな物語。

壊れそうなほど繊細な人間の女性と、そんな女性に恋してしまった
吸血鬼の男。

ありふれた恋物語かと思っただけど、これがなかなか面白い。吸血鬼
の男が人間の感性で喋っていないから面白いのだろう。

彼曰く、夜には夜の世界があり、これは其処での常識。だそうで。

「今のところ面白いよ。まだ全部読んでないけどな」

「そっか、よかった…」

「そんなに気負って本を貸すことはないぞ？俺も月村の趣味に合わな
さそうなモノを幾つか貸した筈だし」

「あ、えっと、そういうことじゃないんだけど」

「？」

じゃあどうということなんだよ。

— やっぱり女心はわからない

— 分かったところでそれは違うものの可能性もあるがな

— 男がわかる女心など、半分もないさ

— 多くの言葉を言っても、語るのは少量だもんな
分かれというほうが無理である。

「で、さ…主人公の男の人に関しては何か…ない？」

「天然…というか常識離れしてるよな。仕方ないけど」

「え？」

「いや、吸血鬼の男の印象だろ？」

— だって、最初の冒頭が

『君に恋してしまったんだが、僕はどうすればいいのだろうか』
って人間の女に言うんだぜ…。

— 策略ならすごいけど

— 女から『すいません、とりあえず帰ってください』で帰っちゃっ

たからな

どこか抜けてるんだよな。

「最後まで読んでないって…どこまで読んだの？」

「あー…アトガキ読んでない」

「それ全部読んでるって言うんだよ？」

「何を言うか。アトガキに楽しいことを書く人もいるだろ」

「そうだけど…吸血鬼と人間の恋だよ？」

「現実の問題を持ってきたとしても些細なことだろ」

「…そうかな？」

「たしかに男は石柱を破壊できる力も、恐ろしいまでの美貌も、血を吸うという異端でもあるけど。人型である限り、意思もあるんだから普通の恋愛と変わらんさ」

「…：…そっか、そうだよね。うん」

「急にニヤニヤしてどうしたんだ？」

「え、うん。大丈夫なんでもないよ。ふふ」

ほんとに何があっただんだか。

—意見が合っただけじゃないか？

—いや、他に意見が合つてるときはここまでニヤけてなかつただろ

—なんでだ？

—すずかタンが可愛い

—すずかタン可愛いよ！

カット。どうして思考がどこかへ行ってしまった。

「じゃあ、俺は先生に報告して帰るんだが」

「あ、うん」

「迎えとかは来ないのか？」

「え？」

「いつもならバニングスの迎えの車で帰ってたど記憶しているが？」

「うん。アリサちゃんは今日習い事で、わたしが先に帰って、って」

「そっか…：…ふむ」

外を見ればやや夕焼けに空が染まっている。

—一人で帰すつもりか？

―位置的には逆だしな

―変態さんがいるかもしれないぞ？

―ああ、俺のこ

カットカットカットツ！

「送ろうか？」

「え？」

「あー、冗談だ。戯言だ」

「ほんとに？ほんとに送ってくれるの？」

「まあ、言っても一緒にバスに乗って月村の家まで送る程度だ」

「うん！あ、えつと迷惑じゃない？」

「むしろ俺が言いたいんだが？」

「私は全然！むしろ…」

「最後の方が聞こえなかったが？」

「気にしないでいいよ！えつと、じゃあ先生のところに行こうか」

なんとというか、慌ただしいな。

―パタパタ動くすずかタン可愛いよ

―ちよつと頬つぺが赤いのもかわいいね！

―こういう変態がいるから一人で帰せない訳だ

―ぐへへ

カット。

さあ先生に報告に行こう。



「すごい、謝りっぷりだった」

「うん…小学生にあれだけ頭を下げる先生も珍しいよね」

「ちゃんと責任をもった人だからなあ…本当に悪いと思ったことにはガキも子供も大人も老人も老害も関係ないさ」

「あはは…」

隣で自分だけ納得したように頷かれ、私は乾いた笑いしか出せない。

さも当たり前のように吐かれた毒にどう対処していいかわからないのもあるけど、隣に黒いボサボサした髪のが居るからでもある。

当然のように自然と口から出たらしい「送ろうか？」という発言に内心かなり嬉しく少しはしゃいでしまった。彼の性格上、そういう子供っぽい行動は嫌いなはずだ。落ち着くんだ、私。

冗談を吐く彼と出会ったのは、本当に奇跡だったと思う。もしくは神様の悪戯とでも言っていていいかもしれない。ここまで勿体ぶる回想だけで実際の話、図書室で彼に会っただけである事は私と彼だけの秘密だ。

出会いは劇的でもなく、本当に普通に図書室に行くとき彼がいただけだ。まあその御影君が問題だったのだけど。御影君はそこにいて、居なかったのだ。

存在自体は其処にあっただけど、どこか儂くて、希薄で、それでいて透明だった。思わず漏れた声で一気に色付いた彼もまた印象的だった。

「どうかしたか？そんなに人の顔を見て…あれか目を見れば気持ちが変わる能力の持ち主だったか」

「そんな異能はもってないよ…」

「ふむ…じゃあ俺の顔に何か付いてるのか？装飾は眼鏡と鼻と口とか眉毛とか目程度しか付けない主義なんだが、流行は何かを外すべきなのかね」

「それも違うよ」

「むう…」

まるで悩んだかのように唸る彼。

当たり前前の事を捻る物言いは既に慣れてしまった。最初に聞いたときは随分と悩んで普通に返答してしまった。その時の彼の顔は普段より普通らしくて、余計に悩むことになったのだけだ。

「まあいいか」

「いいの？」

「考える事をやめたわけじゃなく、別のことを考えることにしたんだ」

「別のこと？」

「別の事。そうだな…幸福の見分け方とか」

「見分け方？探し方とかじゃなくて？」

「人は常に幸福を望むが、その幸福が幸福であるか見分けることはできなない」

「えっと…、ルソーだっけ？」

「その歳で読むものじゃないぞ月村」

「なら御影君もだね」

「ご尤もだ」

こういつた知識も意外にあるらしい。偶に挟まれる言葉に反応すると彼は嬉しそうに笑う。その顔が見たくて、難しい思想書に手を出し始めたのは私だけの秘密だ。

彼は何も言わないが、どこか無理をしているのだろう。それが精神的か肉体的かはわからないけど…たぶん無理をしている。

私にも言えない……なんて軽く自画自賛という過大評価をしている。しかし、こういうやり取りが始まって数ヶ月も経つのだ。いや、これを言えば彼は「友人とワインは古いほうがいいだろう」とか言われそうだし…。いや、むしろ友達として見られてるの？

「はあ…」

「今度は落ち込み出したな…大丈夫か？」

「大丈夫、大丈夫だけど」

「どうした、本当に」

「うん…えっと、変な事聞いていい？」

「おう、友人よ。悩みを打ち明けなさい。その悩みに万全にて十全で解決してやろう」

解決してしまった。

いや、まだ最初の疑問がある。

「無理してない？」

「可愛い女の子と帰るのに無理などはないさ義理も霧もないいい天気

なことだし」

「言えない?」

「何を?」

「……言ってくれるまで待ったほうがいいのかな」

「何を言われてるかさっぱりわからんが、言えることならすぐにも言うよ」

「なら……待ってる」

「思い出したら言うよ」

結局こうやってはぐらかされるのだ。

分かっていた結果だけど。目の当たりにされるとなんというか。

溜め息をバレないように吐いてから前を見ればどうやら門が近くなってきたらしい。

「えっと、じゃあ私の家ここだから」

「……え?」

「アハハ……」

自分の隣にある外壁を指さして首を傾げる彼。

そんな彼に思わず乾いた笑いしか出せない私。

そして当然ながら動きもなく表情もない外壁。

「本当にお嬢様だったのか……」

「そんなことないよ。アリサちゃんの方がすごいんだよ?」

「庶民たる俺にすれば高いレベルの争いすぎて両方一緒だよ」

そんな彼のわざとらしい溜め息がやけに印象に残った。

19 勘違い主人公はお帰りください

世の中には信じたくないことが多数あり、その信じたくないことを眼前に突きつけられると人間はそっぽ向く。

—今の俺みたいにな

—おいおい、入学するならもう少し早く出来ただろ…

—あれか、罨だったのさ！みたいな

カット。

「では二人とも自己紹介を」

「アリシア⇨テストタロッサです！よろしくね！」

「フェイト⇨テストタロッサです…よろしくお願いします」

元氣よく挨拶したアリシアと緊張しているフェイト。

そんなフェイトはとある方向に微笑んでいた。

—向きの高町か

—いやはや仲がいいねえ

—百合ん百合んしてるのか

—あれだろ、こう二人でスールとか決めてだな

—お姉様！

—カット。どつちがどつちだよ！ハッキリしろ

カット。そうじゃないだろ。

内心溜め息を吐いて気がついた。

アリシアの視線がこつちを向いている。そして

ニコッ

—うわあ満面の笑みで手を振られたよ

—反応した方がいいのだろうか？

—あれだろ反応したら高町に絡まれるんだろ？

—オメエ何処のシマのもんじや、わしゃあこちら一帯を占めとる高

町いうもんじやきに…手え出したらただや置かへんで？

—キヤータカマチサンコワイ

よし、スールしよう。

―ヘタレめ

―ヘタレ乙

カットカット。

「やつほ、やっぱりユウちゃんだったね」

「……アリシアエ」

最初の授業が見事に彼女達への質問責めになってしまい、先ほどまで隣にいるアリシアはその中心に居たのだが……。

「え、副委員長と知り合いなの？」

「まさか。勘違いとかじゃないの？」

その輪が俺に向かうのだけは止めてくれ。

―面倒だ

―アリシアたん可愛いよ！

―あれだろ？十年ぐらいいしたらペロペロする約束がだंनाカット。そんなモノなかった。

「ユウちゃんを間違える訳ないじゃない。ね、フェイト」

「うん。ユウはユウだし」

あれか、普段弄ってる仕返しなのか？

少なからずフェイトは俺がアンヘルだと知ってるんだろ？

―バレたら高町に粛清される

―私、ナノハ・タカマチが粛清しようというのだ！

―若さゆえの過ちだな

―エゴだよ！それは！

―この地球資源を守るために、省エネルギーにしましょう

―エコだよ、それは…

「…御影君？」

「……………あー、なんだ、とにかく落ち着け、落ち着くんだ月村。目が笑ってない、故に怖い」

「じゃあ教えてくれるよね？」

「何をだよ」

「この二人との関係」

「…教えられる時になったら、」

「今すぐに、教えてくれるよね？……ね？」

「アイコピー」

あははー群がつてた子供達も怖がつてるんだから、止めてくれ。

—なんでここまで怖いんだか

—よくわからないねえ

—あれだろ？ずずかタンが実は俺の事好きとか？

—ねえよ

—勘違い主人公はお帰りください

—現実をご覧なさいな

「二人とは…少し前に町の案内をした程度だ」

「ホント？本当にホント？」

「俺が月村含むクラスメイトに嘘をつくと思うか？」

「……そうだよね、うん。ごめんね？」

「ユウちゃんわかったよ。そういう事で話を進めるね！」

「御影君？」

—アリシアエ…

—ああ絶対楽しんでるんだろうなあ

—というかスゴい笑顔が輝いてるよ

—月村は笑顔が固まつてるけどな

「その後に夕飯を一緒に食べた程度だ。それ以上は何もないよ」

「……」

「嘘じゃないよ…嘘なら舌を噛みきってやるさ」

「閻魔様も困っちゃうよ……」

そう言つて苦笑する月村。どうやら納得したらしい。

—というより諦め？

—諦めてくれるならありがたいさ

—自分の為にもずずかタンの為にも何も言えない

「いいかしら？」

「騒がせたな。すまないバニングスさん」

「別にいいわよ……なんでアンタが謝ってるんだか」
「君の仕事を奪ったかと思ってるね。よければ俺の仕事を奪ってほしい
が」

「いやよ。私はアンタ程ひねくれてないもの」

「ひねくれるだけの簡単なお仕事です」

「そんな仕事願い下げだわ」

「尤もである。」

「ツンデレがややデレ入ってきたか」

「ツンデレはもうツンだけでいいよ」

「デレだけとか勘弁してほしい」

「デレだけでいいのはヤンデレだけです」

「フエイト！アリシア！」

「さて、図書室へ行こう。」

「リンカーコアも集めないよ」

「早退してもいいんじゃないか？」

「いや、日常を生きなくては」

「ユウちゃん。学校案内してよ」

「……」

「おーい、ユウちゃん？」

「なんで俺に言うかな」

「ユウちゃんに案内された方が楽しそうだからね！」

「にはー、と笑うアリシアは本当に楽しそうだ。」

「いや、可愛いんだけどさ」

「可愛いならいいじゃない」

「まあイケメンがこっちを睨んでなければな」

「お前！アリシアを離せよ！」

「どの事だが？」

「え？嫌だよ」

「らしい」

「……テメエー！ふざけんなツ！」

誰かどうにかしてくれ。

―助けてプレシア様

―プレシア様が見てる

―見ない

「ライト、止めてよ」

「フェイト！いいのかよ!?!」

「何か悪いの？」

「だって！……いや、なんでもない」

「ならいいよね？行こうかユウ」

フェイトに腕を捕まれて教室を出される。

―俺の意思は？

―お前の意思など美少女の前では無意味

―圧倒的！圧倒的無意味！

―ザワ……ザワ……

カット。

「あー、お前さんらはカルテットと一緒に学校を回るものだと思ったよ」

「なのはちゃんやすすちちゃんやアリサちゃんは可愛いからいいんだけどね」

「母さんからライトに必要以上に関わってるなって言われてて」

二人して顔を見合わせながら苦笑してる。

―なるほど納得

―こいつら本当に似てるなあ

―双子より似てる二人

「しかしなんで俺かね」

「さつき言ったよ？ユウちゃんなら面白そうだから」

「なのはとライトを除くと知り合いはユウしかないし」
「そいつは恐悦至極」

ああ消去法の結果か。

「本当に仲が悪いね」

「誰と誰が？」

「ユウちゃんとライト君」

「ユウが嫌われてるのは、なんとなくわかるけど」

「おい。それを本人の前で言うのか？」

「だって自覚してるでしょ？」

「自覚してないわけではないことない筈がない」

「つまり自覚してるね」

むう、ノータイムでの切り返しか。

―フェイトたんも慣れたモノだね

―フェイトはワシが育てた

―プレシア様にぶっ殺されそうだ

「ユウはどうしてライトが嫌いなの？」

「嫌いではないさ。それさえも考えてない」

「意識するのも嫌なんだ」

さあどうだろうか。

―そうだろう

―別に嫌いじゃないけどな

―好き嫌いでは言えない関係

「で、アリシア」

「ん？」

「解ってたとは思うけど俺が魔法関係者だって言うなよ」

「なんで？普通に優秀じゃない」

「面倒が増える」

「好きでしょ？面倒」

「嫌いだよ、面倒」

「ねえユウ！ここは？」

「平和だ」

「平和だね」

「え？何が？」

ささてきて、案内を再開することにしよう。

―ああフェイト可愛いよフェイト

―プレシア様の電波受信した

―否、プレシア様に電波発信した

―次の宛先へのメッセージはエラーのため送信できませんでした

―宛先を再確認してからもう一回送りなさい、坊や

―あれ？届いてない？

カット。

- ―魔道書、夜天の書の情報
- ―古代ベルカにて作成
- ―蒐集をして頁を増やす
- ―総ページ数は666頁
- ―守護騎士プログラム【ヴォルケンリッター】
- ―剣、鉄槌、湖、盾
- ―保有している情報の限り、夜天の書が完成しだい持ち主は死亡済み

- ―夜天のプログラムが欲しい
- ―夜天に解析をかければ…
- ―無理やり捕まえて、バラすか
- ―11年前、行方知れずだった夜天の確保
- ―護送中に夜天が暴走
- ―恐らく夜天の防御プログラムが発動したのだろう

「……はあ」

「どうしたの？」

「喋りかけるな猫耳二号…いや一号？どっちでもいいその口を閉じて回れ右だ。それも出来ない駄猫ならその辺で這いつくばって爪でも研いでろ」

「もうその悪態にも慣れたよ。あと民間協力者だからって、管理局にそういう口を叩くのはどうかと思うよ？」

「ご忠告感謝。そんな猫耳に言ってやろう、知ったことか」

テクテクと歩きながら本に解析の帯を伸ばしていく。

- ―古代ベルカでは…
- ―ミッドチルダの完成には管理局の…
- ―元管理世界、通称ロストナンバーでは…
- ―ベルカと現ミッドとの戦争は…
- ―ロストロギアとは…

「しっかし、すごいねえ」

「……」

「ねえ、なんでそんなに管理局を恨んでるか知らないけどさ」

「……」

「君ならきつと管理局でも上手く生きていけるよ」

「……」

「そんな窮屈な生き方じゃ、肩もこつちやうでしょ？ほら、お父様はかなりお偉い様だから」

「オイ…誰が喋れって言った？」

スファイア展開。

—おいおい、落ち着けよ

—オーライ、まずはこのクズ猫に魔力弾をありつたけぶち込んでからな

—管理局に入れだど？

—あんなことを軽々する管理局に？

—必要もないことだったのに？

—カット

—カット

—カット

—カット

—スファイア解除

—深呼吸しろよ

「……頼むから、喋ってくれなな」

「……はいはい。わかったよ」

「すまない。悪いとは一欠片も思えないがね」

「…ずいぶん深いなあ」

「深くはないさ。濃いんだ、それこそ星一つ程度な」

カット。

「あ、ミカゲ来てたんだ」

「スクライアか…いいところに来たな」

「え？」

「はい」

「これは…夜天の書？」

「簡単にここで得た情報をまとめた」

まあある程度は抜いたけどな。

―管理局にやれる情報なんて、上辺だけのものだけだな

―尤も、ここで情報を集めればどうとでもなるだろうが

さてさて、残念な事に情報は奥底へと隠れてしまった。いやはや、

何故だろうか。

「よお、ザツファイー。ご機嫌よう」

「ああ、少しは休んだか？」

「お前がくる五分ほどな…なんだ今日は珍しくシグナムも一緒か」

「……………」

「どうした？そんなに口を開けて…俺の逸物でもぶっこんで」

「黙れ」

「ヤー。仕方ねえな、僭越ながらよく喋る口でね」

「そして、なんだその背丈は」

「擬態魔法がイイように働いてくれてな。リーチも伸びるし元の俺だと分からんだろう？」

今の格好は褐色の肌に短く乱雑に切られた朱髪。あとはザツファイーと似たような服…袖付き着用で完成。

―うむ、御影タとは何だったのか

—背格好もザツファイヤーより細いくて少し低い程度だ

「なぜ今更…」

「管理局とは戦っただろ？」

「……ああ」

「あれらの手伝いをさせられてる身分でね」

「ッ!？」

「剣を向けるんじゃないよりリッター」

両手を軽くあげて肩を竦める。

「腐ったクソ共に軽々しく主の情報渡すとも？」

「……ああ、お前はそういうヤツだったな」

「そういうヤツなんだよ。とにかく今回集めたモノな」

「……すまない」

「頭を下げるなリッター。好きでしてることさ」

リンカーコアを渡して、少しだけ背骨を伸ばす。

パキパキと音がなり疲労が溜まっていたらしい事をようやく気づく。

—この体でも鳴るんだな

—一応擬態してても自分の体ってことか

ポケットから錠剤を取り出し、口に放り込む。

「……」

「何？」

「……いや……お前は休んでいろ。あとの蒐集は私がする」

「あー、ここらのムカデさんは面倒だぞ。それこそ耐久力がオカシイ」

「……ヴィータから聞いた」

「そうかい。なら俺はテキストに休ませてもらおうかね」

「そうしろ…主が悲しむことの無いようにな」

「ハッハ、それは困る…」

砂をゆつくり踏みしめて足を進める。

用事を思い出して足を止める。

「そうだ。お前らの事…少し見ていいか？」

「はっ」

「どういうことだ?」

「いや、夜天は俺に触れられたくないらしいからな。リッターも一応この本の一部だろう? 解析魔法で調べればある程度の糸口見つかるかも…程度だ。いやなら構わんよ」

「いや、好きにしろ」

—好きに…だと…!?

「カット。なら失礼」

シグナムの腕を掴む。

—おい!よく考えろよ!

—腕じゃない!胸だろ!

—乳房をムンズってするのが一番いいだろ!

—ほら、適当な理由を付けて揉もうぜ!

—あれだ、心臓に近いほうが的

—解析開始

—あああ…

—神よ…無慈悲だ…

—解析完了

カット。ザツフィーも同じようにして解析を進める。

「ふむ…」

「何か分かったか?」

「その…お胸が大きいですね」

「ツ……」

「失敬。剣を下げてくれ、他意はない」

ザツフィーの事を言ったつもりだったんだけどな。

—イヤハヤ、カンチガイトハ

—マツタク、ケシカラン

—けしからんおっぱいだ

—ナイス、オツパイ

—しかしながら、表情が表に出てきたな

いいことさ。

「では、俺はちよつと休むわ」

「ああ、すぐにどこかへ行け。私のレヴァンティンの届かないところへな」

「連結刃にしたら結構リーチあるだろ…」

まったくもって無茶な条件だ。

21 公僕は嫌だねえ

―シグナムの解析結果

―ザフィーラの解析結果

―どちらもそれほど差がないということは他の二人も似たようなものか

―夜天本体を解析しないことには答えは出せないか

―一致しているところから逆算して一部の解析は？

―可能だが、確実でない

―やはり夜天の書を壊すのが一番早いか

―しかし、夜天の防衛機能が暴発すれば？

―カット

―夜天の意思があるならば

―二人の付近に転移確認

―転移数2

―カット。

―瞼をあげる。どうやら結構休んでしまったらしい。

―首をバキバキと鳴らして息を吐く。

「おう…眼福」

―シグナムさん、触手で縛られる趣味があるなら言ってくれればいいのに

―私を触手で縛れる者はおらんのか

―ここにいますぞ！

―カット。

―助けたほうがいいか。

―そして、俺の触手で縛ればいい

―お巡りさん、こいつです

―こいつお巡りさんです

―公僕はお帰りください。

―まあ死ぬことはないだろうが…

―転移の内一つから魔力反応

あ…、なんだ。

目の前を覆い尽くすまでの黄色い雷。それは剣となってムカデモ
ドキに刺さっていく。

—まづくないか？

—いや、擬態魔法も行使してるし

—リンカーコアが採取できなくなる

それは面倒だ。

—痛覚遮断

—強化魔法行使

足に力を入れて、地面を蹴る。

何度か足を付きながら連続して直進する。

—到着

—リンカーコア抽出

—抽出完了

—あ、

—どうした

—レヴァンティンの範囲内だ！

—俺死ぬんじゃね？

たぶん、きつと。ほら不可抗力だし。

別に下から上を眺めてシグナムさんの絶対領域を覗きたかった訳
じゃないし。

—アウト

—黒に限りなく近い黒だ

—応、あれは…黒だ！

やめてくれ。



『フェイトちゃん！助けてどうするの!?捕まえるんだよ!』

「あ…ごめんなさい」

つい、助けてしまった。

捕まえるとかそれ以前に助けないという思考で埋めつくされていた。

「礼は言わんぞ、テスタロッサ」

「お邪魔でしたか…?」

「蒐集対象を潰されてしまった」

「まあ、悪い人の邪魔が私の仕事ですし」

「これだから公僕は嫌になるねえ」

「え?」

突然聞こえた声は先ほど倒した原生生物の上に胡座で座っていて。

声の持ち主はニヤニヤと笑っている。

「そんな公僕を裏切るのがオレッツチの役目だからねえ」

「なんだ、起きてたのか」

「オイオイ、そりゃあねえぜ姉御。さすがに有れだけデカイ目覚まし時計が鳴りゃあオレッツチだって起きるさ」

シグナムと仲良さげに喋る褐色の肌で軽薄そうな男。

そんな男はこつちを向き、ニッコリと笑顔を作る。

「グーテンモルゲン、お嬢ちゃん。オレッツチの名前はセネター。気軽にセネツチとでも言ってくれば嬉しいよ」

「セネター…少し黙れ」

「姉御は怖いねえ。お嬢ちゃんどうにかしてくれないかい?」

「え、えーと……」

セネターは楽しそうに笑い、シグナムは疲れたのように溜め息を吐き出す。

「さって、姉御。リンカーコアは抽出しといたぜ」

「ッ!」

サンダーブレイドを掻い潜って、瀕死状態から抽出したというの

か。

雷を避け、一瞬で…。

「警戒が増したねえ、お嬢ちゃん…：…ベッドでの運動を申し込もうと思っただけど時すでに遅し、ってことか」

「セネター…」

「トウト ミア ライト。睨むなよ。漏れちまう」

「セネター！」

「アーハイハイ、黙りますよー黙ればいいんでしょ」

ブツブツと何かを愚痴りながらセネターは原生生物から降りて、この場から離れようとする。

『フェイトちゃん！』

「待ってください…えつとセネツチ？」

「ブハッ」

吹かれた。

言つてた本人に吹かれた。吹き出された。

しかも、爆笑されてる。腹を抱えて笑うを体現しているセネターに少し怒りを覚えた。

「バルディツシュ」

—Thunder Smasher

「うへい。危険だねえ」

「え？」

セネターの顔が逆向きで映る。そして腕が上に吊られていく…いや、違う！バルディツシュがもっていかれている！

「まったく、危険なものばかり持って！お嬢ちゃんはこんな鎌じゃなくて花籠かもしくはマッチでも売ってればいいんじゃないか？」

「離せ！」

「おー怖い怖い」

バルディツシュを引けば容易く持っていた手を離すセネター。

まるで楽しむように、そしてコチラを馬鹿にするように啜う。

「そのくらいにしろ」

「ヤー…姉御が言うなら黙ってるよ」

「ならば最初からそうしてくれ」

「最初からするならするわけねえべ」

そしてまた一人ケタケタと嗤う。ああ、頭が痛い。

「すまん、テストロッサ」

「……いえ」

「姉御が謝ってんだから許してやれよ!!」

「……」

「トウト ミア ライト、静かにしてる、睨むな」

両手をあげて降参の意を示したセネターはまた嗤い、すこし遠くに転移…いや、あれは移動か。速い。

「お前の方が私より速いのだ…逃げられないなら戦うしかないな」

「でも、セネターの方が速そうですけど……」

「……アレは特殊だ。それだけに特化しているだけだ」

まるで苦虫を噛み潰したようにシグナムはセネターを横目で見て、溜め息を吐く。

とうの本人は胡座をかいて欠伸をしている。

「あずけた勝負の決着は、今しばらく先にしたいが、そうはいかんだらう?」

「はい。そのつもりで来ました」

意識を集中させる。

ここにいるのは私とシグナムだけ。

息を吸い。

一度溜めて、吐く。

瞼を上げて、そこにいるのは打ち倒すものだ。

そこにいるのは倒すべき敵だ。

そして、越えなければならぬ壁だ。

「行きます」

「ああ…来い!!」

22 落とし物は首ですか？

フェイトが地を蹴り、同時にシグナムも地を蹴る。構えられたバルディッシュとレヴァンティンが接触し、大きく音を鳴らす。

二人が交差して、着地と同時にフェイトが消えた。

―助け？

―この二人の戦いに水をさせと？

―無理無理

―速すぎワロタ

―この戦いに入ったら俺細切れにされるんじゃない？

―むしろ入ってもいいことはないよ

―大切な二人を守れない

―フェイトは捕縛目的

―シグナムは逃走目的

―どちらかが相手を殺そうとしたり残りそうな傷が出来そうなら細切れになりにいっくさ

シグナムの後ろから現れたフェイトはバルディッシュを振り下ろす。

しかし、シグナムは察知したようで鞘に収めたレヴァンティンで防ぐ。

―防いだああああ!!

―いやあ、いい守備を見せますねえ

―しかし攻めも負けてません

―…シグナム受けか

―強気受け…だと…!?

―お姉様!

―ああやめろテストアロツサ! 私たちの関係を考えてろ!

―関係ない! 私はお姉様を…

カット。プレシア様が見てるの公開など有り得ない。

―プレシア様が見てるならシグナムが電撃喰らいそうだ

―それは…それで

―痛い！でも、この電流がビクンビクン

―ビクンビクンしてるシグナム、興味あります

カットカットカット。

レヴァンティンから空葉莢が飛び出し、シグナムが振るえばそれに従い伸びる刀身。

小さな砂丘を喰らいながら進む刃達。通った所には大きく土煙が立ち上っている。

―連結刃エ：

―あ、内蔵ポロリを思い出してしまった

―嫌な…事件だったね

フェイトもしっかりと避けているようだ。さすがに速いなあ。

―直線なら俺の方が速い

―フェイトは柔軟に曲がれるだろ

―敵に向かって最短を最速で進む俺と

―敵の視界から消えて接近するフェイト

―後者のほうがいいんだらうけど

―俺には無理だからな

思わず溜め息。もう少し柔軟に生きれたなら、俺は違ったのだろうか。

―愚問

―ああ愚かしい

―違う訳がない

―違う訳がない

―俺は幾千の可能性があろうとその結果は必ず今に帰結する

―俺の選択肢では絶対に

カットカット。

フェイトを中心に渦を描く連結刃。その刃の群れからフェイトは金色の刃を構える。そして、放った。

それと同時に渦の上から鋒が迫り巨大な土埃が立ち上った。

放たれた弧を描く刃は回転しながらシグナムに迫るが当然のよう

に回避。

―回避？

―魔力刃接近！

―あ、これ俺も狙ってたのか！

―そーなのか！

―やばくね？

―ヤバイ

―魔力刃到着までの秒数5

―アンヘル起動

―空間解析起動

―4

―アンヘルで手袋を作成

―完了まで1秒

―3

―解析情報を更新

―魔力刃の角度計測

―手袋完成

―アンヘルと手袋を遮断

―2

―情報更新

―計測角度から着地点予測

―予測完了

―1

―左手にて防御

―バチツ、と音がして金色の刃が左手に掴まれる。

―電気属性もついてたのだろうか、少しだけ手が痺れている。

―この現実をぶち壊す！

―カット

―手袋の操作不可

―むう、やっぱり切り離れたアンヘルは動かせないのだろうか

―感覚共有は切ってるけど…

—こう僅かに動かせれば希望が湧くのだけど

—あれか、アンヘルを切り離す前に予め術式で命令を仕込んでい
ば…

—わざわざそこまでするのか

—労力など、浪費してこそその人生だ

—カット。そんな人生いやだ。

—アンヘルでブラを作るのならば、ある程度の硬質化ができなくて
は

—ふむ、ブラワイヤーだな

—バイバ！ソレはしらなかつたヨ！

—ワイール！さあ実験だ

—戦闘など思考の果てで観戦だ！

—危険になればどうにかするさ

「むう…この程度か」

—硬質化の術式は不安定だ

—ソフトワイヤーと言えば…騙せる!!

—おいおい、まずはどう装着させるかだ
カット。

手に持った赤黒い150cm程の棒。

—転移反応

—二人は気づいてない

—強化魔法行使

—距離算出

—投擲角度、及び速度決定

—二人の気を逸らすだけでいい

—敵意接近

—ブラワイヤーの術式完成

—よくやった

カット。

魔力を棒に付与して投擲する。

同時に地を蹴り、フェイトに接近する害に向かう。

「槍!？」

「セネター!？」

― 害意が手を伸ばしたぞ

― 位置を入れ替えろ

― フェイトを守れ

「フェイトオオオ!!」

「え?」

フェイトの肩を掴み横にずらす。目の前には仮面を被った男。

男の左手が俺を貫き、視界がブレる。

「残念、姉御たちは戦闘中でねエ!!」

「……お前でも構わんのだぞ?」

「ツ、アアアアアアアアアアアアアアアア!!」

強化魔法込みでの痛みが俺の思考を阻害する。

痛い!

― カット!

痛い!

― カット!

痛い!

― カット!

― カット!!

男の左腕を左手で掴み、噛ってやる。

「捕まえ、たぜ……糞が!!」

「ツ!?!……化け物め」

「化物上等……!!」

左腕を引き抜き、顔面に向けて蹴りを放つ。

避けられた。

― スフィア展開

― 魔法弾射出

― 空間解析開始

―身体解析開始

―身体に傷は無し

―リンカーコアに異常

―これ以上の魔法行使は危険

知ったことか。

「…まあいい。あちらの蒐集は完了した」

「逃げれると思うなよ、糞め」

「逃げれるさ」

―バインド展開

―捕縛

「シグナム!!」

「ああ!」

「甘い…」

ベキンと音がしてバインドが崩される。

―崩された

―順当な解除ではなく力業

―仮面が接近

―向きは俺でなくフェイトか!?

「避ける!!」

「ツ!」

咄嗟に叫んだ言葉は聞こえたらしくフェイトは空中に移動する。
が、仮面の男の方が速い。

「遅い」

「ツザケンナ!!」

高速移動したフェイトの前に立つ。

―スファイア展開

―フェイトに魔力弾を

―勢いだけでダメージのないモノで押し出せ

「言っただろう…お前でもいいと」

「残念ながら、お前の目標が蒐集なら俺は既に出来損ないさ」

「そうか……なら逝け」

「ッ、ゴハッ」

男に再度貫かれる。

溢れ出した血が口から吐き出された。

―胸部損傷

―右肺欠損

―呼吸困難

―治癒魔法展開

―治癒不可

―治癒魔法解析

男の腕を掴み力を加える。

「ただで、帰すかよオオオアアアアアアアアアア」

「ッ、」

仮面の男の腕を折った。

―治癒結界解析完了、式変換

―より上位へ

―損傷を治せる魔法に

男に腕を振られ、砂に叩きつけられる。

「……無様だな」

「ウツセエ……クソめ……」

治癒魔法で断続的に繰り返される回復。

回復した端から拒絶反応食らって面倒だ。

―男が転移魔法使用

―転移魔法解析

―解析不可、時間が足りない

深呼吸をしようとして、血を吐く。

―バカめ

―欠損治癒魔法プロトタイプ行使

―一時的に回復確認

よくやく深呼吸が出来る。

「ふー…いやあ危なかった」

「危なかった、ではない！馬鹿か！お前は!!」

「怒鳴るなよ、姉御。傷が痛い」

「、すまん」

「えつと……」

「あー、わりいなお嬢ちゃん。水を差しちまった」

「いえ……」

「ま、助けたんだから何も言わずに帰らせてくれ」

「……えつと…ダメみたいです」

「はあ……管理局のクソどもめ」

— 欠損治癒難有

— 再度変換

— アンヘルから魔力譲渡

「なら、いい。帰らせてもらおうさ」

「え？」

無理やり足を動かしてフェイトの目の前に立つ。

— ちっさいなあ

— こうペロペロしたくなるよな

— 落ち着け、俺はロリコンじゃない

— ペドフェリアでもないよ！

— フェイトにバインド行使

「バインド!?!」

「……少し、眠ってもらおうか」

「え？」

フェイトの額に指を乗せる。

— 脳解析

— セロトニン増加命令

— セロトニン増加確認

「あ……」

「セネター何をした…」

「少しだけ眠らせただけさ。後遺症もない」

「……そうか」

「グーテ ナハト、お嬢ちゃん。結界は張つといてやるよ」
バインドを消して凭れてくるフェイト。

—もう少し成長したら非常に気持ちいいのだろう

—否！今でもかなりイイ!!

—ヒヤツハ!! スンベスベダヨオオオオオオオ

—いいのかいこんなに露出した格好で

—お兄さんはロリでもホイホイ食べ、

カツトカツトカツト。

治癒結界と守護結界を張つてようやく一息。

「さて、姉御帰ろうか」

「……」

「姉御？」

「お前は……いや、なんでもない」

「なんだってんだ。煮え切らないな」

「最初からそうしていれば戦わずともすんだだろう？」

「アツハツハツ。戦いたくてウズウズしてた姉御の言葉とは思えない

ねえ!! ウヒヤイツ！今首を落としそうだったんですけど!？」

「…惜しかったな」

「落としモノは見つけやすすぎるモノだよ!! 一生探せなくなるよ!!」

溜め息を吐かれながらシグナムの敷いた転移陣で帰宅することになるのだが……その間の交渉事は当然のように俺の土下座尽くめなので語ることもないだろう。

／

23 虚空の騎士○

「ミカゲ！」

「…なんだ、居たのかスクライア」

「今来たところなんだけど…：守護騎士の五人目が出たよ」

読んでいた本をパタリと閉じて本棚に直す。

—見るからに落ち込んでいるシヨタ

—これだからシヨタは…

「そうか」

「そうかって…：君の予測が当たってたんだよ!？」

「…あれも文献から引つ張り出してきたものだ。俺の予測と言うわけじゃないさ」

「それでもすごいよ！この量の本から正確に情報を読み取ってそれを纏めるだなんて！」

「興奮するな」

傷が痛む。

—欠損60%修復

—日常生活に支障なし

—一日作業でこれか

—もう少し効率を考えるべきか

—魔法も使用できないしな

興奮して寄ってくるスクライアを抑えて腕を突き出して離す。

「剣、鉄槌、盾、湖、そして虚空。君が書いていた通り現れたよ」

「そいつは、残念なことだ」

「彼と戦闘したフェイトは医務室で休んでるらしいし」

「…：そうか」

「心配？」

「心を切り売りする程度にな」

—フェイトは無事だったか

—しかしながら、虚空（笑）

—在って無いモノ

—少し考えればいいものを

—移動主体の騎馬みたいな存在だからな

—虚空（笑）

—コクウ（笑）

—コクウサ！

—乳はお帰りください

カット。

「お見舞いに行く？」

「いや：遠慮しよう。あまり関わりたくない」

「そっか……」

「……管理局の人間に何か言われたか？」

「ウツ：えーつと……」

わかりやすいなあ。

—シヨタは何をしても可愛いな！

—シヨタ可愛いよシヨタ

—あれだ、もうペットにして飼おう

—子供はペットにできません

カット。カット！

「もしかして：わかりやすい？」

「かなりな。そうだな……：喻えてほしいか？」

「いや、いいです……」

「それは残念だ」

新しい本を取り出して、空中回廊に腰掛けて開く。

「どうして管理局を恨むんだい？」

「恨んでないかないさ。感謝してないだけさ」

「それは前も聞いたけど……：ミカゲって管理世界出身？もしかして管

理局と関わってたとか？それとも実は、」

「質問が過ぎるな、スクライア。その質問に答えて俺に得はあるのか

？否だ。一切ない。わかったら口を噤んで本を開き、新しい情報を得

ろ」

「……うん……」

—やばい、少し落ち込んでるシヨタが可愛いおおおおお
—うへへこれはヤバイですワ

—破壊力が…!!

—可愛いは正義!

—可愛いは兵器!

—見ろ!人がゴミのようだ!!
カット。

「あー…もう。ひとつだけ答えてやる。それで許せ」

「ホントに!?えーつと、じゃあ、」

「ごー、よーん」

「え!?時間制限アリなの!?」

「さーん、いーち、」

「2がなくなってる!?えつと、じゃ、じゃあ管理世界の出身なの?」

「残念、俺は管理世界の出身ではありません」

「そうなんだ…:…なら、その魔法は?」

「そうだな…ふむ、昔隣に不思議な片目のジジイが住んでいてな。ユ
グドラシルがどうか、片目を代償に知識を得ただとか言っていたジ
ジイなんだが」

「それ地球の神話に出てくる神様だよ!?!」

「おう、意外に博識だな。うむ、お兄さん嬉しいぞ」

「お兄さんって…一緒ぐらいの年齢でしょ?」

「ああそうだな。さあ仕事に取り掛かろう」

「うん…:…。あれ?もしかしてはぐらかされた?」

今更気付いたか。お兄さんは悲しいよ。

「これで満足かい、猫耳管理局員」

「…:…本当に管理局には」

「クドイ、くどいよ管理局員。例えお前らが俺の命を助けようが、金塊
の山を持ってこようが、俺は属するつもりはない」

「決意が硬いわね」

「柔らかい決意など、捨てた方がいい」
前とは違う猫耳だったか。

—ああくどい

—クドイ

—わふー!!

カッツカッツ。



「どうしてだろう……」

目が覚めた私は自分の相棒を撫でる。

リニスが作ってくれて、アリスアがアレンジを加えた、とても大切な相棒。

インテリジエントデバイスであるバルディッシュユがセネターに掴まれた事を思い出す。

掴まれて、持って行かれそうになった。

しかし、バルディッシュユは行動を起こさなかった。私が反応しなかったから？ たぶん、違う。

「バルディッシュユ……」

「フェイトちゃん……」

「なのは!?!動いちやダメだよ!?!」

私と違ってリンカーコアを痛めてるんだから!

私は、セネターが叫んで気がついた。セネターが?なぜ?

「大丈夫だよ……、ライト君にも無理するなーって言われちゃったけど」

「もう……本当にダメだよ……」

「にやはは……わかってる。わかっているんだけどね……」

なのはの顔に影が差す。

リンカーコアから魔力を取られたことじゃなくて、ライトが怪我を

したからだ。

怪我、といつても件のセネターみたいに貫かれたワケでもなく、収束魔法にやられたらしい。

「ライト君、私のせいで落とされちゃった……」

「なのはの所為じゃないよ……」

「ううん……ライト君が私に守護魔法を分けてなかったら落ちてたのは私だけだったし、あの仮面の人も」

「なのは！」

「……ごめん、ごめんね」

泣きそうな声で謝るのは。

そんななのはの手を握り締める。握りしめて、安心するように頭を撫でてあげる。

「ライトは大丈夫だよ」

「本当に？本当？もし、ライト君がいなくなっちゃったら、私、ワタシ」

「なのは。大丈夫だよ、大丈夫」

胸になのはを抱きかかえ、ポンポンと背中を叩いてあげる。一定のテンポで優しく。

「ライトがなのはを置いてどこかに行くと思う？」

「……ううん」

「なら、ライトを信じよう。大丈夫だよ。なのはが泣いてたら彼が悲しむよ」

「うん……うん」

「私たちはまだ、弱いよ。何も助けられないかもしれないし、救えないかもしれない」

「……、うん。まだ弱いよ……」

「強くなろう」

「強く、なろう」

私たちの小さな誓いは誰かを助ける為にした、私たちの為の誓い。

こんな誓いを聞いたら彼は何と言うのだろう……。

不毛だと言われそう。

そんな彼に言ってやろう、お互い様です、って。

そんな苦笑をなのはにひた隠しにして、私はなのはを布団に引き入れ、ぬくもりを感じながら寝るとしよう。

反省も後悔もした。次は、負けないし、助ける側になる為に。

24 俺の席ねえーから!!

「人間の脳には使われていない66%があるらしいな。まあフェイトなら33%の使っている脳内で楽勝さ」

「そうだねー」

「うう…」

「イヤーサスガフェイトダワー、コレデ日本語モ完璧ダワー」

「ソウダネー」

「うわあー!!」

―ついに突っ伏したか

―まったくこれだからゆとりは

―ゆとりっぽい人生は歩んでないけどな！

カット。

放課後の教室で美少女と勉強会。

教える人、俺。

教えられる人、美少女（妹）。

弄る人、美少女（姉）。

その他、美少女の友人美少女三人。あと一名。

―ワオツ、カラフルじゃないか

―金三人に茶色と紫と黒か

―もう少し明色がだな

―銀とか？

―アーヒツヨウダローナー

「おい！フェイトを虐めんなよ！」

「あー、悪かったな。じゃあこの勉強会はお前らでしてくれ。俺は帰るわ」

「ちよつと待ちなさいよ！」

「離せ、いや、離してくださいバニングスさん」

「あんたが先生に頼まれたんでしょ！」

「テストタロツサ妹の勉強だけな。お前らは別だ」

国語の成績が著しくないフェイトの対応として、なぜか俺に役割が

回ってきた。

ツンデレは成績トップだし、フェイトとも仲がいいし、俺いらなくね？ いらんやいな？

「ダメだ。俺の必要性がまったく見当たらん。自宅で本を読んでる方がまだ生産的だ」

「何も生産してないじゃない」

「知識から何かを生成出来る可能性を増加させるために本を読むのさ、ご理解？」

「いちいちウザったいわね」

「それは恐悦至極」

「おい、アリサに手を」

「御影君？」

「おーけー、睨んでくれるな月村。俺の血液が凍る」

「……それはそれで、おいしそう」

なぜ美味しそうと食べ物の話に？

—あれか、すずかタンに食べられるのか

—カニバリズムの性癖でもあったのか

—おいおい性癖って決め付けるなよ

—でもすずかタンに指先からゆっくりと食まれるのは、なかなか

—ロリコン乙

—同い年だから問題など、なかった！

—今のうちに色々仕込むべきなのか？

—いや、未来なんてないんだし誰かの為に仕込むとか勘弁だわ

「おい！俺を無視するなよ！」

「…あー、なんでお前が居るんだ？」

「俺も成績優秀者だからな！前のテストでは満点だったぜ！」

「スゴイ、オレトカイラネージャン」

「そうだ！お前なんていらんやいな！だから帰れよ！！」

「ということだ、帰る」

「はいはい、席に着きなさい」

「俺の席ねえーから！」

「立って、挨拶したのだから、次は着席でしょ？」

ツンデレに無理やり座らせられた。まあ、いいんだけどさ。

—はあ

—へア！

—一人用のポッドでも探すか

グシャってされそうさ。

「で、フェイトはどこがわからないんだ？」

「えっと…どうしてこんな問題が出てるのかなあ、と」

「それは…あれだ」

「なに？」

「そういうモノなんだ！」

「…うわあ」

思わず漏れてしまった声。俺じゃなくて、アリシアから。

俺も漏れそうだったけど我慢した。思わずアレと仲がいいらしい

高町に向くと苦笑してるし。

—あれかフェイトは日本語不全とかじゃなくて、考えすぎなのか

—当然の疑問だよな

—既に死去した人間の気持ちなんぞ、文面から読み取れだなんてな

かなかオカシナ話だからなあ

「そのあたりはどうなのよ、御影先生？」

「俺より優秀なバイリンガルガールに聞いてください」

「その人間があなたの意見を聞きたいのよ。言え」

「強制ですね、わかります」

溜め息を一つだけ、わざとらしく吐いた後にフェイトに向く。

「実際、その類の問題文は【筆者の心境を答えよ】だが、答えは多岐に渡る。数学みたいに答えが一つじゃないんだ。つまり正解はない」

「じゃあ問題を出す意味ないよ？」

「読書感想文と一緒に。本を読み、思ったことを書く。その行動は子供の読解力、文章作成力、あとは想像力を高める。これを宿題、もしくはテストとして出しているのは【強制されている】事が大切だからであり、自主的に出来る人間からはかなり違和感を感じるんだよ」

「えっと、つまり?」

「テストでいい点取りたきや、難しいこと考えずに波線の前後を読み。問題の意図が知りたきや問題製作者に、本の内容が知りたきや図書館に。なぜ【強制されてる】かが気になったのなら大人の日本人を観察しろ」

「わかったような、わからないような」

「フェイトが疑問に思ってることは大人になれば理解するさ。まあ日本人のいい部分と悪い部分だからな」

「いい部分?悪い部分?」

「伝統を重んじる、相手任せな、自主性の欠けた、スバラシイ大人だ」
そんな人間に育って欲しくはないので、わざとらしく悪く言ったわけだが、どう転ぶかはわからない。どうでもいいか。

椅子に深く座り話は終わりました、と言わんばかりに本を取り出す。

「うーん：ユウが言う感じの大人にはなりたくないかな」

「フェイト、たぶん成れないだろうから大丈夫よ」

「そうなの?」

「うん。もしなりそうなら、私とお母さんが止めるから」

「それは、無理そうだ」

金髪二人はクスクス笑い、机に向かう。

—ああ、面倒な演説だ

—ああ銀色の視線がうぜえ

—金髪しまいがイチャイチャしてるよ!

—成長しても仲良さそうだな

—成長したら、肉体的にはプレシア様の血族だからだな

—あれか、マシユマロが四つになるのか!

—おいおい見ろよ：圧倒的だろ

—これは早急に作成を急がねば

—赤黒い色だけでどれほどデザインに凝れるかが、勝負!

—上下セットでショーツも作成するか

カット。

「図書館なら、私よく行くよ？」

「そうなんだ。今度連れて行ってよ！」

「うん、図書館で出来た友達も紹介するね」

「へー読書仲間か…いいね！」

「どつてもいい子だよ。…今は入院しちやってるけど」

「…そっか…どこが悪いの？」

「足が悪いらしくて…でもどつても元気な子だよ」

「図書館で、足が悪くて、元気な子？」

「でも入院はしてないだろ？」

「最近会ってないからわからんがな」

「—シグナム達からは『元気』と伝えられてるからなあ」

「あ、これがその子なんだけどね」

「—ッ」

見せられた画面に写るのは、今しがた想像していた彼女で。

その顔はいつもの笑顔で。

「どうかしたの？ユウちゃん」

「いや、俺もいい加減携帯電話を持とうか考えてた」

「まだ持つてなかったの？」

「連絡取る人間はいないからなあ」

「私たちがいるよ」

「お前らは勝手に来るだろ」

「入院？」

「落ち着け、まだソウ決まったわけじゃない」

「まだ解決策が見当たらないのに」

「今度一緒にお見舞いに行こうか」

「賛成—」

「じゃあそんな風にメールしとくね」

「管理局にもバレル」

「—コレは、ヤバイ」

「管理局の対応はどうなる？」

「—夜天を、壊すだろう」

—ならば、はやては？

—はやてはどうなる？

—それは、

「カット」

「え？」

「……用事を思い出した、悪い」

「え、あ……うん」

「国語に関しては、また教える」

「いいよ、大丈夫。みんな居るし」

「そうか。なら全員、気をつけて帰るように」

本をカバンに突っ込み、カバンを持ち上げて早足になる。

教室を出て、少し廊下を歩いた所で走り出す。

—痛覚遮断

—魔力循環

—感知妨害魔法行使

—周辺解析魔法行使

—周辺に熱源無し

—駆ける

誰もいないことを確認して、爆発的に加速する。

頭の中に湧いて出る予想を常に潰しながら。

25 御伽噺の王子様

「よお、はやて。ごきげんよう」

「ん、なんや遅かったなあ」

ベッドに座っている彼女は微笑み、俺は表情を奥に押し込める。

「みんな大げさなんよ。ただちよつと転んだだけやっていうのに」

「みんなお前が心配なんだよ」

「夕君も心配してくれるんやろ?」

「アツハツハ、長期休みを先に体験しているお前を心配なんてするか」

「ハツハツ、最低やね」

「お褒めいただき感謝感激」

「患者観劇なんて、趣味悪いわあ」

近くにあつた椅子を寄せて座る。

彼女は苦笑して、俺の頬を抓る。

「痛いんだが?」

「ならいい加減笑つたら? ずーつと悲しそうな顔してるよ?」

近くにある鏡を確認しても無表情な顔しか見えないのだけど?

「ほら」

どうやら謀られたらしい。

— どうしてこんな娘が犠牲となるのか

— 救う術を演算しろ

— そして彼女が望み、彼女に幸福に恵まれる未来を

「そんな悲しそうな顔せんでええよ。死ぬわけやなし」

「そう、だな……」

「なんや、私が信じられへんの?」

「病人の言うことなんて一々信じれないさ」

「じゃあ、指切りでもしよか」

素早く俺の左手の小指を絡め取り見えるように持ち上げられる。

「そうやなあ…来年のお祭りにみんなで行こか」

「あの夏祭りか」

「うん。絶対に、一緒に行くよ」

「ああ……絶対にに行けるさ。みんなで」

「約束は守らなあかんで？」

「絶対に守るよ。お前は来年までに完治して、夏祭りにいく。守るよ、その約束」

「ん、じゃあゆーびきーりげんまーん、うーそついたら針千本のーます
！」

「指切った」

はやてはにっこり笑って指を離す。

咄嗟に離れた手を取ってしまい、少しだけ気まづくなる

――解析魔法展開

――対象、八神はやて

「どないしたん？」

「いや、えつと」

「案外子供らしいところもあるんやね」

「うっさい、バカ」

――解析完了

手を離して、少しだけ熱い顔を背ける。

クスクス笑っているはやてに少しだけ満足しながら、夕日だった事を嬉しく思った。

――なるほど、以前よりバストサイズが

――カット

笑っていた彼女の声が消えて、夕日を眺める。

「ホンマはさ、ちよつとだけ痛いんよ？」

「……」

「ちよつと、うん。ちよつとだけやねんけどさ」

「そつか……」

「なんやねん、その微妙な反応は」

「俺には解らんからな」

「私の気持ち的理解されたら、恥ずかしくて死ねるわ」

「どつちなんだよ」

「どつちもなんよ」

溜め息を吐かれた。

はやてはずつと夕日を見ている。眩しいのか、目が少しだけ潤んでいる。

「もつと、楽しみたかったなあ」

「楽しめるさ」

俺は立ち上がって、はやての頭に手を置く。

「俺が、お前を守るよ。どんな運命からも、どんな悲しみからも、どんな苦境からも、守るさ」

「……なんや、それ。御伽噺の王子様かい」

「お前を守るなら、騎士でも王子でも、友人でも、なんでもいいさ」
「……それはえつと、あれか、私にも心の準備というものがあってやな、そういう段階に至るにはまだ私は少しばかり早いと思うんよしかしながら夕君がのぞむならバツチ来いといえますかムツハーキタコレといえますかブツ壊れといえますかというか私がブツ壊れてる？ハハハ何を言ってるんだねワトソン君私は常に正常だ正常にて異常だ既に何を言ってるかわからない誰か私を止めて今すぐトメテエ!!」

「お、おう」

思い切って叩いてみた。

それはもうベチンと音が鳴ると思うほど力を入れて頭を叩いた。

「お、おーお……」

数秒ほど頭を抑えて唸るような声を出したあと涙目で俺を睨む。

「あんな思いつきり叩かんでもええやろ！」

「昭和のテレビみたいに治ればいいかなと」

「アホかあ！そんなんで病気とか精神病が治るなら医者いらすや！」

「ほら、はやて！オマエハキツトタテルヨ」

「ワーホンマヤー。鼻にストローブツ刺して脳ミソ吸うたろか？」

「そういうプレイは勘弁してください」

「よし殺す」

「ヒイ！私には四人の妻と一人の息子が」

「おい！数が逆やろ！それが正しいとしたらそいつは殺す、今から殺

す」

「四つ息子が付いてるとか、スキュラもびつくりだよ」

「もうええわ!」

「ありがとうございます」

一段落。

ゼエハアと肩で息をしているはやての背中を摩りながら呼吸を促す。

—どうしてこうなった

—どうしてもこうなった

「ホンマに……なんで病院で疲れなあかんねん」

「リハビリとか?」

「残念今治療中や」

「そいつはお大事に」

「それはどうも!」

フィツと窓を向き、頬を膨らませる彼女に再度苦笑する。

—さあ約束は守らねばならない

—八神はやての家族を守ろう

—八神はやてを守ろう

—家族全員で、夏祭りに行かせる為に

—約束を、守ろう

—その為なら目の前の障壁など、全て砕こう

—さあ、約束を守ろう

「……」

「よお、騎士共」

「……気づいてしまったか」

「ついさっきな。まあ大して怒ってねえよ」

スルっとシグナムたちの間を通り抜けようとすれば捕まれる。

「おい、ヘタレ」

「後ろ二文字の母音しかあってねえよ。携帯ゲームめ」

「お前、何をする気だ？」

「ワンコは黙ってな。おーけー？」

「無理は許しませんよ？」

「ジュンサーさんでも連れて来いよ、ジョーイさんを攻略するためのダメジムリーダーはいないんだから」

「……」

「あと、離せよ。痛い」

「…ミカゲ、死ぬなよ」

「……知ったことか」

掴んでいる手が放される。

掴まれていたところを何度かさすって、守るべき騎士共に頭を下げる。

「お前らはたぶん帰る事になると思う」

「ああ……そうか」

「なるべくは善処するし、どうせすぐに家長から呼び出されるさ」

「おい！何のはなジヴェ」

「ハイ、ヴィータちゃんは黙ってましようねー」

「んー！んー！！」

「すまない」

「謝るなよ、友人殿。私たちを無駄にではなく、主のために殺してくれるのだ。これほどうれしい事はないさ」

「それでも、一度でもアイツの家族を消してしまうんだ。許されるのならこの頭をいくらでも下げるさ」

「頭を下げられた程度の価値、か」

「全て終わったたら、俺の首を落とせ」

「……本気か？」

「冗談でこんなことを言う趣味はない」

「シグナム……」

「安心しろ。お前の首にもそれほど価値はない」

「だろうな。どうすればいい？」

「全て終わったたら、私と全力で戦え」

「……は？」

「それが条件だ。なお場所、時間、規定は全て私が決める。異論は？」

「……それは、また、お高いことで」

「だろう？」

ククツと口角を上げる俺たちにザツファイの溜め息が響く。

「生きろよ、ミカゲ」

「さてね、試合をしたくない一心で逝くかもな」

「契約不履行ならば黄泉の国にでも殺しに行く」

「おつかねえなあ」

—黄泉の国があるのならば、そこは俺にとって…

—楽園でもねえよ

—どの世界も既に変わらないさ

—俺が俺である限り

—俺が、全ての荷を降ろさない限り

カッタカッタカッタカッタ

黄泉などあるわけがない。知っているだろう。

理想を捨てろ。

或るのは全て現実からの分岐路だ。

その先にある、彼女にとっての至高を、俺はただ目指せばいい。
簡単なことだ。

26 発育不足さね、6年後出直しな!

「―ああ、そうそう。御影君なんですけど、すこし事情で休むそうですへ?」

思わず間拔けた声が出てしまった。

周りを目だけで見て、誰も私に気づいてないことを安堵してからまた視線を移動させる。

空席のソコ。

「先生、事情って…病気とかですか?」

「いえ、御影君の家庭事情だそうです」

「そう…ですか」

すずかが心配そうに顔を歪める。

少しだけ、情報を整理しよう。

まず、ユウは病気じゃない。

休む理由は「家庭事情」だ。

一見問題なんてないんだけど、少しだけ疑問が残る。

私はあの部屋で彼の家族を見ただろうか?

私はあの部屋で彼以外の誰かを見ただろうか?

答えは、否だ。

「フエイトちゃん?」

「あ、うん。どうかした?なのは」

「ううん。なんかボーツとしてたから」

「…ゴメンネ」

「大丈夫だよ!」

なのはの頭を撫でながら、ユウがどうして休んだのか考える。

どう考えても『面倒だから』かまた誰かの為に無理をしてるしか思いつかない。二択にしては、随分と差がある。

「よし…行こう」
「え？」

少しポカンとするのはを撫でて、私は決意する。

どうせ考えててもこれ以上ナニかが出てくるわけがない。それに
出てきたとしても答えはでないのだ。

それなら本人に直接聞くほうがいい。本当に家庭事情ならそれは
それで、愚痴を聞く程度なら私にもできるはずだ。

「大丈夫…だよね？」

一度不安になると次から次に不安要素が溢れ出てくる。

誰か、ほかの人を連れて行こうにも何故か嫌われてるユウだし、あ
と魔法関係だったら困る。

つまり、一人で行かなくてはならない。アリシアは…だめだ、今日
はお仕事だ。

私も仕事らしい仕事があるが、呼ばれたら行くしかないのだけど、
ユウが心配だ。

ユウ、だから心配なんだろう。

「ごめんね、フェイトちゃん」

「いえ、大丈夫です」

時間と場所が変わり、今の私はアースラにいる。どうやら、守護騎
士が頻繁に出ているらしい。

呼ばれたことに異議はない。仕事だと割り切ってるから。

お見舞いに行けなかったことに、申し訳なさ半分と安堵半分なのは
心の内にしまっておこう。

「なののはは?」

「今ライト君と別行動中」

「そう、ですか」

「安心しなよ、私がいるよ!」

「そうだね、アルフ」

動物形態のアルフの頭を撫でて、転移台に乗る。

深呼吸をして、徐々に一般の日常から魔導士の日常へとシフトする。

「——行けます」

「おっけー!じゃあよろしくね!」

「行くよ、アルフ」

「はいよ!」

光に包まれて、視界が変わる。

「荒れ果てた、大地。」

所々に亀裂が入り、植物すらも生えていない。

「酷い臭いだ」

「臭い……?」

「あんまり表現したくない臭いだね。地面に染み込んでるよ……」

アルフからひたすらに嫌悪の感情が流れてくる。

私には何も臭わないが、狼素体のアルフだから感じるのだろう。

「さっさと仕事を終わらせよ、フェイト」

「うん、行こうか」

任務はこの世界を見て廻る事と、守護騎士を発見したら捕縛すること。

はやく廻って、アルフを休ませたい。

もしくは、守護騎士の誰かを捕まえればいいのか。

「グーテンタッグ、お嬢ちゃん。久しいねえ」

「セネター……」

「おお、覚えてもらえてたか。いやあ恋だね、それは。是非ともオレツチと今夜どうだい？」

「あなたに、聞きたいことがありました」

「んー、ベッドの上のことなら今日辺りに教えれるんだけど？」

「フェイト、ダメだこいつ早く何とかしないと」

「黙りなペット。残念ながら獣姦に興味はねえんだよ。犬耳と犬尻尾生やして美女になってから出直しな」

「うっさいね、セクハラ男。ぶちのめすよ？」

「残念ながら美少女と美女以外に殴られる趣味は持ち合わせてねえんです」

「ここは、あれだろうか。美少女と美女には殴られる趣味を持つてるのかと聞いただすべきなのだろうか。」

「いや、完全に話がのまれてる。落ち着け、落ち着いて対処すれば私にだって色々聞けるはずだ。」

「セネター」

「告白だな、あれだ、会った時から一目惚れでしたってヤツだ。心の裸より全裸を所望するがね」

「どうして、私を助けたの？」

「美少女を助けることに意味を求めるのか？」

「私があそこで倒れてたら、リンカーコアから魔力も得れた。あなた達守護騎士の主も喜んだ筈だ」

「……」

「私の名前を叫んでまで助けた。私の名前をどこで知った？結果的に私には借りが一つ出来た」

「その借りでエツチなことは、できますか？」

「答えて、セネター」

「少しだけ顔を下に向けるセネター。」

「セネターに対する私の疑問はここまでだ。」

「それらに答える義務がオレツチにあるのかい？」

「それなら、無理に聞くしかないね」

「やる気だねえ。ヤル気ならバッチコイなんだけど」

「アンタはどこかでセクハラしないと生きてけないのかい？」

「失礼な狼だ。オレッチがセクハラをしてる訳じゃない。セクハラがオレッチから溢れ出てるのさ！」

「より最悪だね！アンタ！」

非常に面倒そうに頭を振るセネター。

下げていた顔を上げて、もう一度溜め息を吐かれる。

「まあ、別にフェイトが夜の相手をしてくれるっていうのなら、オレッチは捕まっても構わないんだけどねえ」

「夜の…相手？」

「フェイト、ダメだよ」

夜の相手とは、何なのだろうか。

お話とか？会話相手が欲しいのだろうか。確かに捕まっている間というのは非常に暇なのだけど。

「私が、相手になれば捕まってくれるんですね」

「…あー、ちゃんと理解してんのかい？」

「お話相手ぐらいなら、あとは本を読んだり、出来ます」

「根本から！違う!!」

四つん這いになり地面に拳を叩きつけるセネター。

私の隣ではそのセネターを見て腹を抱えて爆笑しているアルフ。

そしてキョトンとしている私。

なんだろう、すつごく混沌としている。

「残念だったねえ！」

「ちくしょおおおおお!!誤算すぎるぜえ!!お嬢ちゃん！まさかこんな秘策があるなんてなあ!!」

「え、えつと…マイッタカー」

「ああ！オレッチの負けだ！それじゃあな!!」

踵を返して歩きだそうとするセネター。

咄嗟にアルフに念話を飛ばす。アルフも分かっていたようで、セネターに手を向ける。

セネターの手と足が橙色のリングで縛られる。

「おいおい、ここは逃がしてくれるところだろう、お嬢ちゃん」
「逃しません」

「どうか、どうして普通に逃げる気なんだか」

「流れるにはそういうノリだったのさー!」

ケタケタ笑い出すセネター。

実際、彼を捕縛できたのでよしとしよう。

—エイミイさん、セネターを捕縛しました

—ご苦労さま、フェイトちゃん。スグに転送するね

—お願いします

通信も終わり、あとは転送されるのを待つだけだ。

待つ、だけなのだけど。

「いやあ、まったく。可愛い女の子を口説いてる時ぐらい出てこなくていいのにねえ」

「え?」

「フェイト!!」

地面から這い出てきた、異形。

ワーム、というべき生物なのか。足がなく、全身が土で汚れていて、先端に大きな口がある。口の中には無数の小さな牙があり、それが何重にもある。

どうしてここまで詳しく見えているのだろうか。私の目の前にその口があるからだろう。

咄嗟にバルディッシュに命令を送る。

しかし、いつもの声は聞こえない。

なぜ?なぜ?なぜ?

「あー、もう」

次に聞こえたのは面倒そうなセネターの声。私の襟首を掴み跳んでいる。

「しまったなあ、バルディッシュの制止はもう少し考えたほうが良かったか」

「えっ？」

「ミッド式…というかミッド式のデバイスにベルカのシステムを導入すると一定周波数の魔力で制止させることが可能なのだよ、お嬢ちゃん」

私を地面におろして、左肩をグルリと回す。

一定周波数の魔力？ デバイスの制止？ この技術は最近できたものじゃ？

「天才すべてが表に出ると思うんじゃないよ。過去にそういう技術はあったさ。今に伝わってないだけで、オレッツチ達は常にそういった偏屈共と戦わないといけないかったし」

「フェイト！ 大丈夫かい!？」

「あ、うん」

「ま、お嬢ちゃんはそこで寝ときな。あとはオレッツチがやるから」
セネターがテクテクと歩き出す。

チラリと見えたその顔は口角が釣り上がり、まるで今からすることが楽しそうに。

「クヒツ…さあ出ておいでミミズくうん。出ないと、臓物引きずり出すぞー」

本当に楽しそうに左手を地面に押し当てて、歌いだす。

「あー…ブラープマール」

そう、小さく聞こえたセネターの声。

地面から生えてきたのは赤黒い棒。細い棒がいくつも地面から生える。

ソレ等が伸びていくと、地面が不自然に盛り上がり、先ほどのワイムが串刺しにされていた。

「祈ることはしねえぜ？ 我らが主の為に、食われちまいな」

そう淡々と呟くセネターは先程までの軽い雰囲気など一切なく、冷たい印象しかない。

まるで作業のようにリンカーコアを取り出して、左手で握るセネターはこちらに笑顔で振り返り、頭を下げる。

「オレッツチを捕まえようとするなら美女を連れてこりゃア一発さ。お

嬢ちゃんはまだまだ発育不足さね、6年後に出直しな！」

「……………は？」

ケタケタまた笑い出すセネターとイライラする私。

どこまでもイライラさせることに定評があるらしい。

次はバンドもする暇なく、セネターは彼方へと走り去ってしまった。

「…………………………」

「あー、フエイト？」

「ナニカナ、アルフ」

「いや、なんでもないよ。うん、なんでもない」

「アハハハ、ソウカー、ハツイクブソクカー、ソウカー」

アースラに戻ろうとするには、もう少し時間がかかりそうだ。

27 食事は盛大に下品に音を立てて

非常に、非常に困ったことになった。

—まさかフェイトが釣れるとは

—実験中に誰かしらが来ると予想していた

—アンヘルと触手から出来たものが接触していれば、操作可能

—ブラープマール○

—ブラープマール！

—墓標○

カット。セネターだから仕方ない。

アレは俺じゃない、俺じゃないんだ!!

—リンカーコアから奪った魔力の3割をアンヘルに寄与

—願いのブーストでワームは楽勝だが

—釣れたのがフェイトだからな

—いやはや、人生とはままならんな。

—まったくだ

—待った熊だ

—死んだフリだ！

—実際は意味ないんだけどな

というより、危険だろ。新鮮な肉が目の前に横たわってるんだから。

で、すっかり思考がどこかへと旅立ってしまったが。非常に困っているのだ。

—目の前を確認してみよう

—金色がいるな

—それもひたすらに落ち込んでるな

「あゝー」

「こつちが言いたい」

もう女の子として出している声なのだろうか。

というか、美少女がこんな声出してるなんて想像したくない。

—安心しろ、想像しなくても前に居るんだ

カット！見たくないって言ってるんだろ。

「ユウちゃん…どうしよ」

「何が」

「バルが…というかデバイスに穴があったよお…」

「穴？つまり、ボロボロになったのか」

「ハードじゃなくて、ソフトの方だけとお。うわあーあー」

あれか、俺の所為か。

バルデイツシュの穴は俺が意図して作ったモノだから、大丈夫なんだけど。

—理論の途中であたかも必要であるようにぶち込んだからだろ

—実際使えたしな

—あの時点でデバイスの修理なんざ用途はわかるし

—確認も取れてたしな

つまりは、俺の所為だ。

「あれか？一定のある周波数を送るとデバイスが制止するってヤツか」

「知ってるの!？」

「急に飛び上がるな。鬱陶しい」

「…ごめん」

またスグにペタリと机に突っ伏するアリシアに溜め息を吐きながら嘘の説明をする。

「一応理論を組んだのは俺だ。そのまま使われているのなら、ある程度の事は予想出来る」

「いや、普通できないよ」

「それは普通がおかしいだけだ」

「ユウちゃんの普通がオカシイ」

「さて、話は終わったようだ」

「ゴメン！謝るから！説明してよ!!」

「これでも一応学校は休んでる身なんだがな」

「家庭事情…だっけ？」

「…ああ」

「まあムリそうならさすがに帰るよ」

「親は遠い所にいるからな。生活費が足らん」

「ソツチかあ」

「クソ共も日払いじゃないし、こっちの通貨で支払われるか知らんし」
「それは、その…ごめん」

色々考えていくと本当に困ったことになってる。

管理局から金を貰うことも若干の抵抗はある。貰えるものは毒と厄介事以外貰う主義だが。

「倍プツシユだ！」

「筆取るだけ、筆取る!!」

「引き分けにしねえか…?」

「カット。何かが違う。」

「理論の説明は飛ばすが、というかちゃんと俺の出した理論のチエツクはしたのか？」

「軽くだけ。というか、あんな理論を一から作り上げてるユウちゃん
が改めて怖く感じるよ」

「マルチタスクありやあ出来んだろ」

「マルチタスクであること出来るんだったら、もっこの世界は知
的になってるだろうね」

「まあ思考の回しすぎで世界の終わりを見て、そのまま終わりを壊す
為に終わりをもたらすナニか以上の兵器を生み出して、その兵器以上
の兵器を生み出すんだろうがな」

「何それこわい」

「穴倉に住んでる、偉大な先人たちの話しさ」

手近にあった紙にカリカリと前の理論を書いていく。

理論、と言ってもベルカとミッドの魔法式を解法して、それを纏め
て一つの式にするものなのだが。

「こんなもんか」

「……」

「どうした？」

「いや、うん。ちょっと待ってね。大丈夫、うん。ユウちゃんだから仕

方ない、仕方ないんだよ」

「何か凄く失礼な事を言われてる気がする」

「大丈夫続けて」

「これがインテリジエント…バルディッシュのソフトに入る訳だ」

新しく紙を取り、そこにバルディッシュのソフトを書いていく。もちろん一部だけだが。

「ツツコマない。私は教えられる身なんだから、大丈夫。うん、コレはできなくて当然だ、理解することだけ考えるんだ」

「話を進めるぞ」

「はい先生！」

「誰が先生か。インテリジエントに含まれる、所謂【考える】といった機能だが、その公式と俺の理論上の公式が誤作動の原因だ」

「……つまり、直せない？」

【思考】がなけりや、問題ない」

それは、インテリジエンスとしてどうかと思うが。

—考えなけりや単なる道具だ

—考えたところで道具さ

「もしくは、理論の組み直しだな」

「そこは、ほら、ユウちゃんが」

「やらんぞ。さすがに」

「だよー」

どうして自分の不利になるような事を自分の時間を使ってやらなくてはならんのだ。

「ま、この辺りの理論をもう一回考え直したら多分大丈夫だろ」

「ホントに!？」

「知らん。あとは自分でやってくれ」

「分かった!!ありがとう!ユウちゃん」

—ツンデレ乙

—はいはいツンデレツンデレ

—べ、別にアリシアの為じゃないんだからね!!

カットカットカットカット!!

―誰が、化け物だというのだろう

―誰を、化け物といっているつもりだろう

―誰が、誰に、誰を、

これほど震えている餌は初めてだ。もしかすると新しい餌なのかもしれない。

―それは残念だ

―ああ、残念だ

―いや、残念だ

「仲間の仇イイ!!」

「ケヒツ、仇ダツてエ?」

餌が何を言っているのだろう。

ああ、さすが餌だ。こちらの意図を理解できてないんだ。

「残念だねえ。そのイラナイ正義感なんて捨てちまえよ」

「ウオオオオオオオオオ!!」

「……残念だねえ」

迫る魔力弾。

誘導弾ではないので、横に大きく移動する。

餌が数発の魔力弾を待機させているのを確認。

―残念だ

―ああ残念だ

リンカーコアを一つ逃してしまう、ああ残念だ。

「な、ギヤ、ア、ア、ア、アアアアアアアア」

地面に咀嚼されるように、ゆっくりと落ちていく餌。

バリユゴリユと食事の音が聞こえる。

「や、やめろ! やめてく、レ、エ、」

「残念だ。俺にはどうしようもないさ」

「うぞだろオオオオ」

「こんな魔力、正確には外に常駐する魔力の塊に反応するワームなんて、俺にはどうしようもないさ」

必死で抑える啞いと響く絶叫、そしてバリボリと鳴る楽器とグチャグチャとはしたくない食事音。

「フフ、ヒヒ…」

「ツ!!!」

忘れない用に、魔力弾を二つの餌の上に置いておく。

俺は殺してないさ。もちろん、ただの攻撃。

あちらにしても防御可能だし、まさか俺も死ぬなんて思っていない。

「ヒヒフフフフフ」

「……………」

「クキヤケケケケケケケケケケケ」

堪えられなくなつた噛いが辺りを埋め尽くし、それと交わるようにまたグチャグチャとダラシのない食事音が鳴り始めた。

28 殴り殺しても罪に問われない筈だ

―今俺が所持しているリンカーコアに含まれる魔力と俺が以前渡していたリンカーコアの魔力を比較

―比較後、この魔力で夜天の書のページが埋まるかを算出

―騎士達を吸い取った結果ほど、埋まらない

―が、覚醒にまではギリギリ届きそうだ

カット。

―夜天の書のシステム予想

―詳しくは不明

―夜天の書に乗っ取り、はやてを夜天から解放する

―夜天を、俺と一緒に壊す

―夜天の自壊機能と再生及び転生機能の予想

―いざとなれば【願い】がある

そう、俺には奥の手がある。

喩え、どれほど酷い過程であろうと、結果が必ず出る手があるのだ。

「あんまり使いたく無いけどなあ」

思わず漏れた言葉はワームの唸り声と一緒に掻き消えていった。

この世界には運がいい人間と悪い人間と、あとは運がいいのに気づかない人間がいる。

俺は恐らく運がいい人間だ。そう自負しているし、信じてもいる。

故に、俺の行動は日常会話も含めてほぼ計算によって成り立ち、無駄というムダを省いた結果と言ってもいい。

ただし、そこに誰かの感情が入ることによって、俺の計算は早々に、いとも容易く、淡々と崩れる。

まあ崩される計算をするのは日常会話、というか日常では常に別の

事に思考を飛ばしているので計算などほとんどしてないし、楽しければいいという思考が勝っているのだ。

長々と話したが、俺は運がいいほうだと思う。

だから何かあったとしても、それはきつと俺にとってプラスになる様に世界が動くはずだ。動いてくれ、頼むから。

もう運が悪いのは嫌なんだ。あれだろ、実はドッキリでしたー、みたいなノリが今一番来て欲しい。

「現実逃避はやめよ、御影君」

「すずかちゃんと知り合いやったんかあ」

「はやてちゃんと知り合いだったんだね。付き合いの長い私に黙ってるなんて、ヒドイネー」

「ホンマ、夕君ひどいわー。私らが知り合ってなかったら紹介してたんやろー?」

「……」

「……」

どうしてこの二人は笑顔で睨み合いという器用な事をしてるんでしょうか。

—実は俺様の事が好きなんじゃないか?

—ねえよ

—あるとするなら、お互いを紹介させなかったから?

—もう知り合ってる、挽回は、無理だ!

—八神家に招待もされたらしいし

つまりだ。

「意味がわからん」

「夕君……いや、まあ夕君やかからなあ」

「御影君って意外と鈍感なのかな?」

「誰が鈍感だ。一応他人の事に関しては機敏だぞ」

「……つまり自分には鈍感やねんな」

「御影君らしいと言えば、それまでなんだけど」

「はあ……」

「はあ……」

「二人してため息吐くなよ。そしてバニングスさんもなぜ睨む」

「現地妻と妻が会ってしまった夫を見た気がして」

「オイ。ガキの言葉じゃねえぞ」

溜め息を吐いて、もう一度周りを確認する。

この病室にいるのは、はやて、月村、バニングス、フェイト、高町、そしてアレ。さらに言うなら、騎士達もいる。

おかげで殺伐とした空気がこの部屋に充満してるわけだ。殺伐とした空気の原因は騎士達とフェイト、高町。そして何故か俺を敵視してるバカ一名。

俺はこの空気に関与してない。してないっただらしてない。

「ユウってこの人達と知り合いだったの？」

「ん、ああはやてと知り合ってたから紹介されたけど？」

あたかも何も知らない風を装う。

当然の如く、俺は騎士たちが騎士であり、フェイトたちの敵というのは知っている。

しかし、その事実をフェイトは知らないし、高町に至っては俺が魔法関係者だということすら知らない。

ここで問題になるはずの俺が騎士と仲良くしている事なのだが、管理局の記録上、俺はシグナム達を騎士だと判断出来ない。

なんせ無限書庫で漁った情報はほぼ文面だ。彼女達の容姿に関する記述もあつたが、モノによりバラバラだった。つまるところ、断定には至れない。

彼女達の戦闘映像もあつたが、俺はそれを一切見ていない。

「……そっか」

そしてここには月村、バニングスといった魔法を知らない人間がいる。フェイトは俺を追求できない。

会話から察してくれたシグナム達も俺の言動に合わせてくれるはずだ。

俺は黒に限りなく近い白になる。もったも、実質は真っ黒どころの話ではないのだが。

「どうかしたの？フェイトちゃん」

「大丈夫だよ、なのは」

「どうやら、この問題は後で問いたただすことで納得したようだ。」

「フエイトたんから、尋問だど!？」

「つまり、両手縛られて、目隠しされて!？」

「おいおい、お前ら何考えてるんだ、猿轡を忘れてるぞ！」

「カット。お前ら、一体どうしたいんだ。」

「……お前がバグだったのか」

「は？」

「前々からおかしいとは思ってたが」

「いや、何の話だよ」

「気づいてないのか。なるほど、そういう設定なのか」

「おい、誰か説明してくれ。比較的マジで。」

「いや、意味はわかるよ。おそらくで予想も成り立つ。」

「この世界に原作というものがあるとして」

「その原作でここに俺が存在していない」

「よって転生者であるこの物体αが何かを言い出してる」

「ぐらいか。それにしても、一般人がいる中でよく言える…。」

「まあいい。バグとしてだがお前も生きてるんだ」

「なあ誰か早く止めて、彼を止めてあげて」

「病人に何させるきなんよ」

「あはは…」

「いつものことですよ」

「ほか二名と騎士達は牽制中。」

「おい、誰かマジで頼むわ」

「ヘルプ!!」

「スタツプー!!」

「安心しろ、お前は生きてていいんだ」

「肩ぼんやめろ。そして微笑むな、気持ち悪い。」

「殴っていい?今殴り殺しても罪に問われない気がするんだ」

「止めとき、拳を痛める」

「ここは病院だ」

「病室が汚れちゃうよ」

「それは勘弁してほしいなあ」

「あんたら、ライトの心配とかはしないのね」

「親友をこんな風に言われて、まだ抑えてる方やけど？」

「ま、そっか」

月村はニコニコしてるし。

—自分でいつときながら、この二人こええなあ

—あんまり敵に回したくない

—すずかタンがなんでか微妙に安堵してるよ！

—ツンデレもだいぶノリが分かってきたなあ

「じゃあ、そろそろお暇するよ」

「んー、また来いな」

「出来ることならお見舞いは嫌なんだけどな」

「仙豆さえあつたらなあ」

「カレントウを登れというのか」

「え？カレントウって食べ物じゃないの？」

「黒くて固いやつな。長けりやア」

「オイ」

「おーけー、バニングスさん謝る。謝るから殴る体制を解くんだ」

【？】を浮かべるフェイトと高町さんに顔を真っ赤にしたバニングスさん。カラ笑いをする月村とはやて。

シグナムは相変わらずキツつい顔をしていたが、今見たら顔を下に向けて肩を小刻みに揺らしていた。

29 「またね」と「さよなら」

「御影君」

「なんだ？」

「もしかして怒ってる？」

「……というか、ようやく冷静になったというか」

「ホントに嫌いなのね」

「嫌いで済むなら、俺が改善するさ」

「はあ、と一っだけ溜め息を吐いた御影君は眉間を指でムニムニとマッサージしている。

「なのはちゃん達がどうしてか忘れ物を取りに行ってから数秒後、一気に雰囲気が変わった御影君。

「お人好しね」

「月村だろ」

「アンタもよ」

頭に思いつき【?】を浮かべている御影君に苦笑する。

「彼は自分で気付いていないのだが、心底お人好しだ。というより、彼に嫌われている皇君がすごいのだろうか。」

「嫌いどころの話じゃないから、今は仲が悪いけど。もしも彼が御影君に嫌われているのなら、恐らくスグに改善されるはずだ。御影君が合わせるだろう。」

「ダメだよ、アリサちゃん。気づいてないんだから」

「早く気付かせとかなないと、コイツとんでもない失敗するわよ」

「うーん、多分大丈夫じゃないかな」

「……その根拠がさっぱりわからないわ」

「こっちは何の話かさっぱりなワケなんだが」

「アンタって馬鹿よね」

「バニングスさんと比べられると、困る」

「本当に困ったように肩を竦める彼と思わずため息を吐いてしまったアリサちゃん。私はその様子に苦笑しているわけだけだ。」

「ホントに、コレのどこがいいんだか」

「イイ所もいっぱいあるんだよ?」

「あーはいはい。ノロケは勘弁して」

「ア、アリサちゃん!? ノロケじゃないよ!!」

思わず叫んでしまう。ノロケじゃない。惚気てなんかない。

そう、第一彼には名前前で呼び合うはやてちゃんがいるわけで、でもそのはやてちゃんは『親友』と言っていて、まだチャンスはあるわけ
で。

「落ち着きなさい」

「……はい」

「?」

アリサちゃんの声で落ち着いて、バレてないか確認するために御影君の方を向けば首を傾げていた。

本当に鈍感だ。今は鈍感さに感謝しよう。

「さて、二人は今から習い事だろ? 急がなくていいのか?」

「と言っても、迎えの車で行くんだけどね」

「その車が見えたから言った訳だよ」

御影君の言うとおりアリサちゃんのお迎えの車が見える。

これに乗ってしまえば、御影君と少しの間お別れなのだ。いつもの事ながら、少し嫌になる。

「じゃあね、副委員長」

「おうさ、成績優秀者」

当然の様に別れを告げるアリサちゃん。

私も言わなくてはいけないのだ。また、また会うために。

「またね、御影君」

寂しさを隠していつもの様に笑んで、私は御影君に手を振る。

御影君は少しだけ困った様に手を振り返して

「さよなら、月村」

そう言った。

私とアリサちゃんは車に乗って、御影君はそれを見送ったの
だけ
ど。

「どうしたの?」

そんなアリサちゃんの声に、私は自分の中の疑問も含めて答えた。

「御影君。何かおかしかった……」

「そう？いつも通りじゃない？」

「違うの、なんて言えばいいんだろう」

上手く言葉にできない。出来たとしても、あまり言いたくない。

まるで小説に出てくる死を覚悟した誰かのようだ。なんて恥ずかしくて言えないし、彼が死ぬなんて、あんまり想像したくない。



二人が乗る車が見えなくなる程度まで見て、少し後悔する。

「もう少しいつも通りには出来なかったか？」

「否だ」

「次があるなら、全て切り落としてからだな」

「応」

深呼吸して思考を入れ替える。

「空間解析開始」

「人はいない」

「痛覚遮断」

「身体強化魔法行使」

「変身魔法行使、モデルへセネター」

「コキリ、と首を回して息を吐く。」

「さあって、ご主人様の為に今日も頑張るツスよ!!」

ビルの上まで跳躍して、騎士達が居るであろう方を向く。

連続で移動し続ければスグにつくだろう。

「しかし、バカにバレそうだ」

「バレたところで、バカ相手だ」

「否、問題はフェイトにもバレるということだ」

「公開セクハラができなくなる」

「つまり、下着制作を急がなくてはいけないわけだ」

カット。今も後もどうでもいい。

騎士達が戦うビルが見える。

手前で止まっているのには理由がある。

「お互い、駆り出されて大変ツスね」

「……」

「いやあ、返事して貰えないと辛いんすけど？」

「セネター、いや…お前は」

「落ち着けよ、双子」

「……なるほど、情報の改ざんから全てお前の手の上だったというところか」

「そこまで解つてても俺の協力を止めなかったのは、情報提供力を信じてか？ざまあみろ」

「目の前に腹を貫いた人間が居ても手を出せない気分は最悪だったろう？」

「趣味悪いな。まあ、仕返しはさせて貰うさ」

アンヘルに右手を当て、赤黒い繊維で出来た手袋を身につける。

構えもなく、スグに動ける状態になる。

「先に言うけど、夜天の主はやらせない」

「お前に止めれると？」

「止めるさ。止めないとダメなんだ」

「なら、こんなところで何をしている。知っているんだらう？」

「ッ、」

跳躍して、仮面の男の肩を踏み台にさらに跳躍する。

目指すのは騎士達の戦うビル。

そこにいるのは先ほど蹴った筈の仮面の男。

バインドが高町にかけられる。

―間に合うか

―否、間に合わせる

左手の甲から赤黒い棒を取り出し、仮面に向かって投擲する。完全に後ろからの不意打ち。

しかし、彼はいとも容易く止める。

「チッ!!」

「まだ、甘いな」

背後から聞こえた声にゾクリとする。

―空間解析にエラー―

―隠蔽魔法が使われてる

カット。スグに否定式を代入。

目だけで仮面の男を確認して、腕を振るう。

当然、そんな力のない攻撃が当たるわけもなく。掴まれた腕をキメる訳でもなく投げられた。

「ガッ」

「セネターー!」

受身さえも取れずに屋上に叩きつけられた。

肺から空気が強制的に出される。

―空間解析再行使

―騎士達は、いない?

―ヴィータだけがまだ残ってる

―バカもバインドにかかってやがる

「二人!?!クッ」

「ちようどいい。セネター、お前の正体を暴いてやろう」

仮面の男の片方はカードを取り出し、俺にバインドをかける。

―バインドを解析

―解析完了

―魔力逆循環

「遅いな」

新たにバインドが掛けられる。

―バインドを再度解析

―強化否定式?

「これが、虚空の正体だ」

蒼い粒子が俺から剥がれていく。

—強化魔法強制解除

—エラーエラーエラー

カット。

「ユ……ウ……」

「どうして、御影君が…」

「チツ、やっぱりバグか」

言葉が出ない。出す気がない。

「お前は、既に蒐集されたのだったな」

「用済みなら離せよ、速攻で噛み付いてやっからよ」

ガチンと歯を鳴らして意味の無い威嚇をする。

—魔法行使不可

—バインド解析完了

—逆循環開始

「まだお前には価値がある」

「ウオオオオオオアアアアアアアアアアア」

空を飛んできたザフィーラが拳を仮面の男に叩きつける。

が、シールドで防がれた。

「そうか、もう一匹いたな」

「ザフィーラ!!」

「奪え……」

夜天の書が光、ザフィーラのリンカーコアが露出された。

—逆循環完了

—身体強化行使

ベキンとバインドを破り、跳躍。

「ウオオオオオオオオオオ!!」

「黙って、倒れている」

容易く腕を絡め取られ、ビルにまた叩きつけられる。

「ウガア、ア、アア、ア」

「ザフィーラ!!」

「黙ってる」

「アッ、アッ、アッ、アッ、アッ、アッ」
「ユウ！」

電気をまとったバインドが俺を縛り付ける。

—クソ！フェイトにして欲しかった！！

—軽度の火傷確認

—治癒開始

「闇の書の主よ、目覚めの時だ」

「いいや、因縁の終焉の時だ」

仮面の男は高町とフェイトに変わる。

これは、些かまずいかもしれない。

30 巨に浪漫、貧に夢、尻に魅力

目の前に現れた魔法陣。

―解析

―転移魔法陣

現れたのは

「え？……なのはちゃん？フェイトちゃん……？」

絶対に守らないといけない人。

―カット

―治癒完了

―新規バインドにての拘束を確認

―バインド解除

―解除コードにエラー、追加バインド確認

―解除コードに反応するバインドかよ

―縛られる趣味はないっての

「はやてー！」

喉が震えて、かすれた声が出る。しかし彼女は振り返らない。

コレは、本格的にマズイ。

―否だ

「君は病気なんだよ。闇の書の呪いっていう」

「もうね、治らないんだ」

―否

「闇の書が完成しても治らない」

―否

「君が救われることはないんだ」

―否

―こんなバインド、解除しなくても

―痛覚は切ってるんだ

いけー！

「はやてエエエ!!」

「ゆ、夕……くん……」

ブチブチと帯と何かが切れる音が鳴って、ようやくはやての前に立
てる。

—両腕一部の運動機能低下

—治療開始

—治療停止

—空間解析を密に

「はやてが救われない？それは誰が決めたんだよ」

「運命」

「あーそうかい！運命が自分で切り開くモノとかカツコイイことは言
えないさ、言う気もないし、運命は常に訪れるものだ」

「なら、早くそこをどきなよ」

「退くかよ。俺は、これを運命だとは言わない。はやては治るし、騎士
達も帰ってくる」

「御伽噺だね」

「御伽噺でも、それを願ってるんだよ」

今のところバインドの因子はない。

後ろにいるはやては本当に転移をされただけで、まだ何もされてな
い。

「ここまで来ると自分の計画はほぼ潰されている。

「ゆ、夕……くん」

「はやて、すぐに助ける。そこでじつとしてろ」

「でも怪我、腕から血が」

「あー、そのあたりでコケちまったんだ」

—酷いイイワケ

—イイワケないよ

—空間解析持続

—回復魔法行使

—転移魔法解析

逆に利用してやるよ。

「そ、そんな、こけただけで、アホやろ！」

「うつせえバカ」

「バカってなんやねん！こっちはな！アンタの事を心配して言うてんねんぞ!!」

「茶番は、やめろ」

「ッ」

視界がブレる。同時に床がものすごく近い。

ヤバイ。処理が、止まってる。それを自覚した瞬間頭に痛みが走り、腕に鈍痛が居座る。

「夕君!? フェイトちゃん！何しとんねん！」

「君が居るから彼はこうなったんだ」

「え……」

「はやて！聞くな!!」

「少し、黙ろうか」

「——ッ！」

突然痺れと鋭い痛みが身体を縛ったがなんとか声を出さずに済んだ。

「夕君！」

「君がいるから、彼は怪我をする」

「君が生きているから、彼は無茶をする」

「君は、生きてちやいけななんだ」

「誰からも生きて欲しいなんて望まれてない」

「この世界から消えてなくなればいい」

「いやや……」

「君は、彼からも世界からも、誰からも」

「望まれないんだよ」

「君が居るから、彼も死んじゃうね」

「いやや、やめて……」

ダメだ、脳が元に戻らない。復旧が間に合わない。

視界に僅かに映るフェイトではないフェイトが光るカードを向ける。

「君のせいだよ」

「ねえはやてちゃん」

—オツパイがおつきくなってるよ!

—シグナム達のデータから夜天の自衛プログラムと断定

—アレに触れだって!?ウツヒャー!!役得じゃねえか!

—公開セクハラキマシタワ

—オツパイよりも太ももだな!

「また、すべてが終わってしまった。いったい幾度、こんな悲しみを繰り返せばいい」

「はやてちゃん!」

「我は闇の書……我が力の全ては」

夜天が手を上にかざす。顕れたのは、黒色の球体。

—おい、誰かアレに突っ込めよ

—冗談、今度こそズタズタにされちまう

—魔力球じゃなくて中で微妙な魔力渦発生してる

—ベルカの術式も詳しく調べとけはよかった

—戦うなんて考えてなかったからな!

「これは、ヤバイ」

「空間攻撃……」

「高町に連絡、すぐに退避もしくは防御出来るようにしとけ」

「ユウ?」

「早くしろ」

ヤバイ。こんな街中で空間攻撃とか、死ぬる。

—はやてはどう思うだろうか

—はやての意思はあるのだろうか

—はやてが望んでいるのなら

カットカットカットカット。

「主の願い、そのままに———デアボリック・エミッション」

球体が空に浮かび、徐々に魔力の安定が綻び始める。

—左手だけで防げるか?

—否

—退避は?

—速度にもよるが、範囲指定不明により危険

―防御魔法は

―期待するのがオカシイ

「さっさと退避が勝ちか」

「え？」

「高町には……アレがついてるか」

解析魔法で判断すれば、既に剣を盾にして構えているバカが高町をかばっている。

アレは、任せよう。

―痛覚遮断

―強化開始

―スフィアを退避起動に点在準備

「フエイト、すまん」

「え？」

フエイトを抱えて、足場になっているスフィアを向けて地面を蹴る。

スフィアを起動させ、魔力弾を踏みつけ、その推力に加えてさらに加速する。

―お姫様抱っことか

―こう……もう少し抱え方があっただろ

―オツパイが成長してたなら俵担ぎでとかおんぶとかでオツパイの感触がだな

―夜天魔力接近

―右足の損傷甚大

―もたせろ

―今は割ける魔力も思考も無い

―だから、オツパイにはロマンが詰まってるんだよ！

―ハッ！チツパイは男の夢を育てるんだぜ！

―割ける思考はない！

―魔力量から範囲を予測

―安全圏までおよそ四歩

―おいおい、お前ら、お尻っていう魅力を知らんのか

◆◆
「ギリギリだな……クソめ」

ビルの影に走り込んだユウは疲れたように座り込む。

「ありがとう、ユウ」

「はいよ。あとその露出の多い服をやめろ。痛み以外で血が出る」

「血？……ッ」

ユウの右足から出る夥しい量の血液。うつ血したように濁る足。

「ごめん」

「さっき聞いた。気にするな、大した傷じゃない」

「でもー」

「それよりも、高町達の無事を確認……と言っても状況的に見れば、敵みたいな俺に持ってかれてるお前の方が心配されてるだろうが」

右足に左手を添えて、再度ため息を吐き出したユウ。

そう、彼はセネターであつてつい先程まで敵だった。そして今はいつものユウだ。

私たちに情報を与え、助けてくれた、ユウだ。

「ユウ……聞きたい事があるんだ」

「……だろうな」

「ユウは、敵？」

バルディツシユを握り直して、少しだけ緊張する。

アリシアが新しく組んだ理論を取り込んだらしい相棒は、もう彼には止められない筈。
セネターである、彼に。

「ミカタだよ」

「それは、誰の？」

「俺は、俺以外の、味方だ」

ユウは至って真剣にそんな事を吐き捨てた。
その顔は冗談をいうセネターにもいつものユウでもなくて。
どこことなく、私を助けたときのあの顔を思い出した。つまり、それは無茶をして

『フェイト！』

考えていたことが大きな声でかき消される。

頭の中に響いた声に少しだけため息を吐いて、反応する。

『ライト。無事？』

『こっちは無傷だ。確かバグ……セネターに連れられてただろ！』

『うん。こっちも大丈夫……セネター、ユウが守ってくれたから』

『チツ……無事ならいい』

舌打ち？ユウに守られた事がそんなに嫌だったのだろうか。

チラリとユウを見れば、面倒そうに闇の書の方を見ている。

『とにかく一度合流しよう、対策を立てないと』

『ああ！アルフたちももうすぐ来るからな』

『そうなの？』

『さ、さつき連絡があつたんだよ！』

アルフから？私には全く連絡が来ていないのに？どうしてライトにだけ？

「ユウ」

「ん……」

「一度なのは達と合流して」

「俺は一人で」

「——合流して、対策を立てるよ」

「あー、分かった、わかったよ。頼むからバルディツシュを下ろしてくれ」

バルディツシュの刃を消して溜め息を吐く。

こういう時、彼は無茶をするのは目に見えていて、それも母さんから色々と言われていた。

自分では否定するクセに、母さんはユウの事を好きなのだろう。たぶん言ったら真つ向から否定されそうだけど。

「よし、じゃあ行こう」

「足は？」

「直した。まあ俄修理というか、もう無理だったからな」

「ムリ？」

「そ。故に人は化け物にまた一步近づいたとき」

「何、それ」

「偽共も言ってただろう？御伽噺の一節さ」

相変わらず飄々としたユウはコンコンとつま先で地面を叩いて大丈夫な事を示す。

「どう対処するかねえ」

そんなユウの疲れたような言葉が、ビルに溶け込んだ。

31 不善で洒落てさえない友人

「ユウ!」

「よう、久しぶりだなアルフ」

「ミカゲ……」

「そう訝しげな表情をするなスクライア、今は敵じゃない」

非常に不本意ながらな、そう付け加えたユウに呆れる。

「どうやら飛べないらしいユウは赤黒い棒をビルに刺して私達と同じ高度にいる。」

「で、コイツ本当に大丈夫なのか?」

「さてね、一応お前さんには負けない程度には強いさ」

「ハツ、じゃあ試してやろうか?」

「ライト君、今は闇の書さんだよ!」

「ユウも、今は味方なんですよ?」

舌打ちをしたライトに比べ、ユウは本当に面倒そうに溜め息を吐いた。

ユウが左手の指を弾き、同時に朱色の壁が私達を囲む。

「え!」

「テメエ!何をしやがった!」

「煩い、ちよつと黙ってる……結界系か、探知機能付きとか是非学びたいわ」

「ユウ、どういうことだい?」

「結界が張られた、それも探知機能付き。だからデコイを数個とこの隠蔽をした」

満足か?というように自身の魔法陣に触れて瞼を閉じる彼。

「こういつた時に彼はとても冷静だ。不思議なぐらい、冷静だ。」

それに相変わらずオカシナ数の魔法展開をしている。普通じゃ出来ないからね、ソレ。

「ここからどうしよう」

「今、クロノが解決法を探してる。援護も向かってるんだけど、まだ時間だ」

「それまで、私たちがなんとかするしかないかな？」

「クロノがデュランダルを持ってくるまで、頑張るしかないな」

「デュランダル？」

「あ、えっと」

「おい、話は終わったか？一応言うが、無駄話に付き合える程俺の魔力はないんだぞ」

ライトの言葉を遮り、ユウが苛々したように声を出した。

実際多重展開をしているユウの魔力消費はかなり多い事になる。

しかし、私は知っている。まだ朱色の魔力光であり、その先の黒い魔力光になるまで、ユウは余裕があるのだと。

「そうだね、早く決めよう」

でも、あの魔力はダメだ。ユウに必ず悪影響を及ぼす。こんな綺麗な魔力のユウがあんな黒色を出せるわけがない。つまり、どこか別の場所から使用しているのだ。ユウのことだから、それこそ命を燃やしているのかもしれない。

何故かホツとしているライトを横目で見ながら、私たちは簡単に作戦を立てる。

「そういえば御影君は何が出来るの？」

「セネターに出来ることは粗方。でもあんまり俺を戦力に入れてくれるな」

「役たたずなんだろ」

「……これだけ魔力消費してる人間に戦力になれるか考えてくれ」

「ハッ！オレなら出来るぜ」

「アアソウデスネー、スゴイネー」

「ようやくわかったのかよ！」

ああ、もうなんだらうこの空気ってどうしてこんなに混沌としてるんだらう。

「なのはとフェイトと俺は闇の書に攻撃、ユーノとアルフは牽制をしてくれ」

「うん、それでいいんじゃないかな？」

「あと、俺の行動なんだけど」

「戦力外は黙ってる」

「……それでいい。俺が何をしでかそうと気にするな」

え？

それはつまり、どういうことなのだろう。

「俺がお前らの攻撃の射線上に立ってたとしても、気にするな」

「ダメだよ！御影君何考えてるの!!」

「一番安全且生存率の高い攻略法。別に餃子みたいなことはしない
さ」

「どうしてココでギョウザの話が出てきたの!？」

「まあとにかく、俺はお前らの敵ではないけどアイツの味方だ」

「……邪魔するの?」

「邪魔するつもりなら、さっさとこの結界解いてるさ」

なのはの問いに呆れ気味に答えたユウ。

今は、敵じゃない。それは、先に進むとどちらかがわからなくなる。

「ま、いいんじゃないやね?」

「ライト君!？」

「何かあったら、俺がこいつを止める。それで大丈夫だろ?」

ニコツと笑いまるで問題が無いように話を進めようとするライト。

ユウの方を見れば少しだけ驚いたような顔をして、溜め息を吐いた。

「決まったか?なら俺が囿になるから任せたぞ?」

「ちよ、！ユウ!!」

「ここの壁は保つようにしてるし、あとは勝手にしてくれ」

ユウが壁に触れると歪な形の円が出来、赤黒い空間が先に広がっている。

その中に何の躊躇もなくユウは飛び込んで、そして、円が収縮するように消えた。

「いっちゃった……」

「またあんな危険な事を……」

◆◆
「よお、はやて。随分成長したじゃねえか」

「……」

「無視か。まあどうでもいいけどよ」

どうせコイツは八神はやてでさえないのだから。

—身体は八神はやてだ

—精神だけどこかに眠っている

—はやての魔力反応と同じだ

—つまり、はやては

—童話の世界というわけだ

こっちは時間を稼ぐ為のデコイだったのに。

「まったく、完全に瀟洒な従者だってお嬢様を救う事もなかったってのに、不善で洒落てさえない俺がお姫様を救うってか？」

冗談はやめてくれ。

—夜天へのアクセス経路不明

—本、もしくは本体に触れる必要あり

—つまりオツパイに触ればいいわけだ

—必要なことだ、仕方ない

—常にかけている身体強化と解析魔法。

処理はなんとか追いついているし、魔力の余剰もある。

尤も、コレは先のわからない事象のために保険としてとっておいたほうがいい。

「主の願い……ツキビトよ。お前もそれを願うのだろうか？」

「その付き人つてのが俺なら、そうだろうよ」

「ならなぜ私の邪魔をする」

「……残念ながら、アイツが、はやてが俺に願ったことは全人類消去でも世界の破壊でもましてやギャルのパンティでもないんでな」

グツと拳を作り、夜天を見上げる。

—もう少しで、もう少しでパンティが見れる!!

—ギャ、ギャルのパンティおくれ!!

―目標、対象に接触

―及び微細解析

―その時点でのシステム解析と改変可能を予測

―末端思考にて予測を繰り返し返り管理局どもより先に八神はやての救出

―出来るならば【擬似夜天の書】の作成にて事件解決

無理やりだが、プランの修正も可能か。

「主は、それでも絶望した」

「望みを絶つて、オマエを望んだのか」

「全ては主の為。私は、全てを破壊しよう」

危険思想だことで。

―スフィア展開

―擬似的な足場作成完了

―三次元での移動可能

「ま、俺はオマエからはやてを奪うよ」

「……」

「残念な事に、アイツには来年の夏祭りに行ってもらわなきゃならぬ
いんでね！」

地面を蹴り空中へ跳躍する。

―足元に魔力弾展開

出来た弾をさらに蹴り、夜天に直進する。

―夜天の周囲に魔力壁生成反応

―展開術式解析不可

触れればいいんだろうが。

「リヤア！」

左拳で魔力壁を殴る。

―アンヘルでの吸収開始

―魔力反応減少、破壊可能域

バリリン、とガラスが砕けた音が鳴り魔力の破片が飛び散る。

―破片より魔力反応

―接触可能領域に侵入

― 破片の術式変換確認
― 接触を危険と判断

「穿て、ブラッティダガー」

― 反応7

― 回避不可、防御推奨

― 接触不可、右手を防御に

― 左手にて刃を一つ破壊

― 同時に右足に魔力弾生成、空間より脱出

― 刃残り6、追尾確認

― 防御可能域

― 防御術式展開

― 術式前方に破裂型の魔法弾生成

「うわっぶ、煙多い」

― 刃の誘爆確認

衝撃に押されて空中から地面に向かう。

― 身体と地面の距離、角度、体制確認

― 補正完了

― 初めての作成にしてはうまくいった

ガリガリと音をたててようやく止まる。

飛翔魔法が無いと、本当に辛い。

― 夜天より魔力反応

― 魔法式展開ミッド式

― おいおい、相手はベルカの魔道書だぜ？

― 蒐集対象が顕著に出てくるなよ

「コレは、まずいんでね？」

「碎けろ」

― 魔力収縮

― おいおい、直射型かと思ったら圧縮かよ

― 回避可能

― 防御可能

― 魔力消費比較

回避か。

―接近する魔力反応あり

―速度判別、フェイト・テスタロッサと判断

え？

―フェイトたんキタアアアアア

―お、落ち着け落ち着くんただダダダ d d d

―フェイトより防御魔法展開確認

―あ、これヤバイ

―身代わりに入ろうとしてる？

「ユウウウウウウウウウウウウウウウウ」

「マジか。コレは酷い」

―夜天から魔法弾射出

―速度計測

―フェイトの方が早く着くな

―あー、コレはあれか守って貰う方が楽なのか？

―楽なんだろうなあ

「あー、嫌になってきた」

飛び出してきたフェイトをどけて、左手で防ぐ。

―解析、術式破壊効果あり

―なにこれ怖い

甲に埋まっているアンヘルが鈍く光り魔力の束が徐々に収縮していく。

―回復おいしいです

―魔力還元開始

「ユウー危険だよー」

「お前の方が危険だつて。ハア……」

どうやらデコイとして出てきたのに無駄になったらしい。

―不意打ちとか出来る人間じゃないのかねえ

―ヒロイズムにでもおかさされてるのか

―英雄的行動を強いられるんだ！

―まあ実際一人の方が動きやすいとかなんとか

「私達も、一緒に戦うよ」

「だから、ちやっかり戦力に加えるなって」

「あれだけ色々してて戦力に加えるなって……」

「あれだけ色々して戦力に加えるだなんて……」

端から見るといじめ以外の何モノでもないよ。

将来ヒロイズムよりサディズムに目覚めるんじゃないよ？ コイツ。

32 あなたの命、私にちようだい？

「ウオオオオオ！」

「セアッ！」

あー。

—おいおい空気読めよ

—見てみるよアレらを

—見てるからこそだろ

—剣と鎌と魔力拳の応酬だぜ？

—アレに入れたってか

まだ中距離から隙を見て接触する方がいいわ。というか、マトモに考えてあんなの入れない。

「御影君、行くよ！」

「へいさー」

もう本当に、英雄思考つてのは嫌になる。

—スフィア展開

—魔力弾精製

—解析帯精製

—まあ解析できるかは微妙だけど

—無いよりマシか

—解析帯発射

—解析開始

「……砕け」

バインド破壊か。むう、こういう破壊の仕方が一般的なのか。

—解析不全

—微量な解析結果を計測

—微細予測

—初期予測値よりズレあり

—誤差の範囲内

—修正、再度予測開始

「シューット！」

「行け」

スファイアから展開した魔力弾を全て夜天に向ける。

―夜天より防壁確認

―動きは止められた

―しかし、刃が来る可能性が捨てられない

というか、向かい左右の視界がまぶしすぎる。金色と桜色が眩しい。

桜色に関してはもうそれって少女の魔法じゃなくね？デカくね？

「刃以て、血に染めよ」

「またかよ、まったく」

フエイトに向かって魔力を放る。

―魔法展開、簡易防壁

―位置特定用の簡易サーチャーもつけとくか

―迷子とか怖い

―どこに居ても連携とか取れるし

―連携なんて初共闘でないだろ

―私メリー、今迷子なの……

夜天の周りに刃が発生する。滞空するのに跳ねなくてはいけない俺にとつては至極避けづらい。

「穿て、ブラッティダガー」

「なのはー！」

迫る刃を魔力弾で落とし、ついでにフエイトに迫っていたモノも幾つか落とした。

『ありがとう、ユウ』

『気にすんな、ついでだ』

―はいはいツンデレ乙

―ここでツンデレとかねえわ

―べ、別にオマエのために落とすたワケじゃないんだからな！

―その防壁もサーチャーつけるついでなんだからな！

―普通にストーカーしようと思っただけなんだからな！

夜天が手を上に掲げる。

―選手宣誓でもしようつてののか？

「咎人達に、滅びの光よ」

桜色の魔法陣が展開され、空中に散布されていた魔力が吸い寄せられるように集まっていく。

―魔力の吸い寄せられ方は遅いけど

―魔法陣解析

―おうふ、コレは落ちるわ

―今なら接触出来るんじゃない？

―距離と集束率計測

―触れた瞬間に落ちるわ

―解析しても生きてなかったら救えないし

―却下、退避する

『ユウ！逃げて！』

『言われずとも逃げてる』

『はや!?!』

正直、魔力弾を足で弾き移動する簡単なお仕事である。

―なお足の損傷に関して当方では一切責任を負いません

―ブラックだな

―ブラックどころの話じゃねえよ

―転移でもいいんだけど

―アレは消費魔力が多いから却下

『どれだけ離れればいいんだよ』

『できるなら、本当に遠くに』

『ナニソレコワイ。発案者の顔を見てみたいわ』

『……ごめんなさい』

以外に近くに発案者いたよ。いや、世界は狭いな。

―悪魔だろ

―フェイトにとってトラウマだろうけどな

―一回これで落とされてたか？

―コレかどうかは知らないけどな

『おい！なのはを泣かすなよ！』

『なんだ、高町泣いてたのか』

『な、泣いてなんかないもん!』

『だそうだ、俺は泣かしてない』

『ウツセエ! オレのなのはに手を出してみろ! 絶対に殺すからな!』

あーはいはい。

— 一々煩いガキだな

— ガキだからうるさいんだろ?

— 念話を遮断

— サーチャーから考えればあいつは傍にいないのか

— どういう逃げ方をしたのか

— 高町と一緒に刃くらってなかったけ?

— あー、空間解析をあつちに向けてなかった

— サーチャー、動作停止

は? 機能自体は動いてるな。

— つまりフェイトの移動が止まった?

— 逃げろと言つてた本人が?

『おーい、その距離でいいなら俺はもう逃げ』

『ユウ! 一般人が近くに居るんだ!』

本当に? とは聴かなかつた。

— サーチャーより場所特定

— 一定空間を解析

— 半径100M圏内を解析

— 生体反応あり

『おいおい、面倒な人間だな。放置して逃げろよ』

『ダメだよ! 早く見つけないと!』

『見つけてどうするんだ? 死んでも運が悪かつただけだ』

『そんな言い方……』

『それが現実つてもものだ。高町、12時方向にいるぞ』

生体反応が動いている。

こんな意味のわからない状況で動くアグレッシブな人間なら空に浮かぶ桜色の光から逃走するだろ。

―巻き込まれても単なる事故だ

―運が悪かったな、人間

―いやあ運が悪いと気付いてよかったじゃないか

―君には運を見抜ける才能があるよ

―程度の事をいつてさよならするべきだ。

『すずか、アリサ……』

……。

―サーチャーより場所再度特定

―集束砲撃着弾確認

「厄介な能力だな！畜生め」

我ながら嫌になってくる。

―転移陣展開

―サーチャーと空間接合

走っていた勢いのまま赤黒い転移陣に突っ込む。

「御影君!？」

「防御展開はそのまましとけ」

高町の後ろにいるフェイトと目が合い、驚かれた。さらにその後ろにはバニングスと月村を確認。どうやらまだ無事なようだ。

―集束砲撃解析

―四人抱えて安全領域に離脱

―不可

―転移魔法行使

―時間不足

―左手による防御

―面積不足

―アンヘルの展開を選択

「あんまり、見てくれるなよ」

迫る桜色の方を向き、左手に埋まる赤い石に少しでも触れる。

もし意思があるのなら、どうか俺と一緒に耐えてほしい。どうか後ろにいる大切な人達を守るだけの盾を、壁を。

「アンヘル」

まるで声に応えるように、赤い石が少しだけ光った気がした。

グジュルと赤い石から赤黒い触手が生える。

左腕を飲み込み、地面を穿ち、体を飲み込み、壁を作り上げた。

―対魔力性能は上々

―吸収効率上昇

―集束砲撃着弾

―吸収開始

「ユウ！」

煩い。早く転移準備しろ。

「御影君!!」

うるさい、吸収率が下がってるんだ。

数十秒ほどに渡る余波を耐えて、ようやくアンヘルをしまう。

―内部に損害なし

―結果は上々か

左手に僅かに残る触手、それも意識して直し、ようやく息を吐く。

―魔力を吸収した端から防壁に使うとか

―本当に恐ろしい魔法だことで

途端に何かがこみ上げてくる。咄嗟に手で口を覆う。

「ゲホッ、ゲウエエ……」

「御影君!?!」

近づいてきた月村を左手を向ける事により制止させる。

ベチャベチャと地面を汚していく真っ赤な何か。生ぬるいソレが手で覆い切れずに地面に落ちていく。

「血……!?!」

「ちよつと!?!すずか!」

「御影君……」

左手がソッと掴まれる。咄嗟に振り払おうとしたが、強い力で掴まれている。

「ゲホッ、おい、血がつくから離しなさい」

「やだよ……」

「あー、ケホッ、もう……」

何度か咳き込んで、血がもう吐き出されないことを確認して、唾液を吐き捨てて、口を乱暴に拭う。

「俺は大丈夫だから」

「大丈夫じゃないよ……」

「大丈夫だって。そんなに不安そうな顔をしないでくれ」

「うん……」

「あと左手を離してくれると嬉しい」

「それは、ダメ」

おいおい、左手にアンヘルが戻ったところは見えてただろ。

—怖いもの知らずだな

—怖いもの見たさかもよ

—つ、つまり触手で襲っても

カット。

「ごめんな」

「……どうして謝るの？」

「気持ち悪いもの見ただろ？俺はさ……化け物なんだよ」

言い逃れができずに、結局言ってしまう。

掴まれている手がさらに強く握られる。化け物の証である手が、月村に握られる。

月村に目を向ければ、視線が合う。

「——ねえ、化け物さん。あなたの命は価値があるのよ」

「——ないさ。私は誰にも必要とされず、蔑まれ、嫌われた、化け物だ」

「——なら、その命、私にちようだい。あなたと一緒に居たい、私にちようだい？」

「——物好きな少女。君にこの命をやるのはもう少しあとのようだ」

「や、——約束よ、化け物さん」

「あー、もう演技も必要ないさ。転移させるから、そこでジツとしけよ？」

「え、あ、うん。……ねえ、ゆ…御影君」

「ん？」

「またね？」

「……ああ、またな」

転移陣に月村を押し、息を吐く。

―境界内を確認

―反応なし

―安全圏まで転移したか

―管理局に感謝とかしたくないけどな

「あー、なんでお前らは赤くなってるんだよ」

「え、いや、だって」

「い、今のって、こ、告白だよね!？」

「は?…:…あー、言われてみればそうだったな」

「え?気づいてなかったの?」

「いや、まともに考えて月村が俺に告白をするか?無いだろ」

「……」

「……」

「アレはいつもの小説引用さ。まあ微妙に違っていたりしたけど、その延長であり、俺にとっては転移の為の時間稼ぎで、月村にとっては…緊張をほぐす何かだろ」

「なんだろう、すつごくすずかちゃん可哀想」

「なんだろう、どことなく安心したような」

「え?」

「え、えつと。ほら、すずか達も安全なところにいったし」

どうして俺は睨まれないといけないのだろうか。全く身に覚えがないことで睨まれてる気がする。

―セクハラ思考がバレたか?

―なん…だと…!?

―すずかタンの話からだろ?

—あ、あれか引用元を言っていないからか
カット。それならば、また今度本を貸そうではないか。

33 望みを叶える魔道書、願いを守る化け物

「なのは！無事か！」

「ライト君!!怪我してるよ!!」

「スターライト・ブレイカーを間近で防御してたからな」

それは、またご苦労なことで。

—魔力還元

—先ほどの砲撃魔法の魔力残量はほぼ消失

—全部防御に回したからな

—吸った先から防御魔力に還元ってどれだけ面倒なんだ

—絶対戦いたくないな

「ま、オレは戦えるけどな！」

ああ、張り合ってるのか。なんというか子供らしい。

—あいつからすればバグとの張り合いだからか

—同じだなんて思いたくもないけどな

—まるで夢みたいだわ

—悪夢だ、悪夢

—ところがどっこい夢じゃありません！

「で、これからどうするんだ？」

「クロノが解決策を持ってこつちに來てるみたい」

「ヤー。じゃあとりあえずはもう少し時間稼ぎだな」

「それと投降と停止を呼びかけないと」

思わず顔をしかめてしまう。

—それで夜天が止まるか？

—否

—アレは目的を達成するまで止まらない

カット。それでも、止めるんだ。

「我が主はこの世界が…自分を愛するものを奪った世界が悪い夢であってほしいと願った」

「非常に残念だが、これが現実だ」

「故に、主には穏やかな夢の内で永久の眠りを」

穏やかな夢の中のはやては、幸せなのだろうか。幸せならば、俺の目的は本当にはやての為になるのだろうか？

―カット

―カット

いや、俺ははやてに願われたのだ。ならば、俺はそれを守ればいい。たとえ、それがはやてにとつて、悪夢を見るときでも。

「そして、愛する騎士と人を奪う者には闇を…」

「闇の書さん！」

「…お前も、私をそう呼ぶのだな」

―術式解析

―召喚魔法？

「くるぞー！」

バカが剣を構え、地面に向く。

―空間解析に反応

―【ムカデ】か！

近くにいたフェイトの腕を掴み、ビルに跳ぶ。

コンクリートに亀裂を走らせながら、【ムカデ】の触手が伸びる。

「よりによってムカデさんか」

「ユウ、ありがとう」

「勧告を続けてくれ。守れる程度に魔力はあるさ」

「うん」

ビルの屋上にフェイトを降ろして、床に手をつける。

―結界魔法展開準備

―触手の接近を確認

―スフィア展開

―速度の速い弾を精製

「撃て」

朱色の弾達が触手に向かい動きを止めていく。

―弾幕継続

―結界魔法準備完了

―これでフェイトたんは逃げきれない

―ハアハア：おじさんと二人ツキリダヨ

―おつつけ、まずは心をほぐすことからだな

―お前が落ち着け

「それでも、私は、主の願いを叶えるだけだ」

「そんな願いを叶えて！はやてが喜ぶのかよ!!」

「心を閉ざして、何も考えずに主の願いを叶えるための道具でいて、あなたはそれでいいの!？」

「おうふ…」

「ユウ？」

「いや、なんでもないさ」

それでいい。彼女は魔道書なのだから。

意思があっても、彼女は主を思う道具なのだから。

―なら自分は？

―カット

俺もこれでいい。

彼女の、彼ら達の願いを叶える為に生きて、それでいい。

言葉は偽るために。

心はあの時に置き去りに。

体はその時の為に。

「ユウ！」

「…ああ、すまない」

思考に浸りすぎた。

―フェイトさんの不安顔ペロペロ

―うへへ、もう本当にペロペロしていいんじゃない？

―コレは、あれだ、そう仕方がないんだ！

―カット

―先にはやてを

「私は道具だ。悲しみなど…：…ない」

「そんな言葉を…：そんな悲しい顔で言っただって。誰が信じるもんか
！」

「あなたにも心があるんだよ！」

「オレがお前も！はやても救ってやるから！もうやめろよ！」

「いいぞ、もつとや、ごめんホントごめん刺さってる！バルディツシュ刺さってる！」

「ユウは少し黙ってようか？」

両手を上げて降参の意を示す。

どうも、自分が責められてるようで。

―置き換えるなよ

―主を守る崇高な魔道書と

―望みを守る低俗な化け物を

第一、俺は管理局の味方になったわけではない。

今でさえ夜天が武装放棄したならばはやてを連れ去る算段をして
いる訳だし。

―空間に歪み発生

―解析エラー

―空間を自身及び夜天周辺に切り替え

大地が揺れ、火柱が地面を突き破り天に伸びる。

―セカイノオワリってこんなモノか？

―なんか随分とドラマ的だことで

「早いな。もう崩壊が始まったか」

「幾度となく世界を繰り返したからこそその言葉だな」

「私も時期意識を無くす。そうなればすぐに暴走が始まる」

それが俺のタイムリミットか。

―暴走プログラムの書き換え前に暴走が始まるのはヤバイ

―行動中のプログラム改変はムリだと思っし

―それまでにどうにか

「意識のある内に、主の願いを叶えたい」

夜天の本が光り、俺たちの周りに赤いクナイ型の刃が出現する。

―防御可能

―回避可能

―しかし結界内に出現か

―確かに簡易結界だが、いやはや構成が甘い

「スファイア展開」

刃に向けて地面から朱色の魔法弾が飛ぶ。

当たったことは視認できたが、当たると同時に爆発して煙い。

「ゲホッ、前が見えね」

「この…」

「おおフェイトさんや、頼むから俺をこの空間から」

「駄々っ子!!」

ええ…。

—フェイトから魔力反応増幅

「言うことを、聞けええええええ！」

—フェイト解析空間より離脱

—おいおい対象を追うように設定してんだぞ

—ストーカーもびつくりだな

—夜天より蒐集反応

「フェイト！やめろお!!」

バカの声が聞こえたがそんな事もどうでもいい。

—蒐集機能により夜天の動作停止

—接触可能と判断

—フェイト・テスタロッサより先に

—脚部に魔力蓄積

—魔力暴発危険域にて安定

—意識の薄い下からの奇襲を選択

—ルート確認

—ビルの端を蹴り地面に鋭角に向かい跳ぶ。

—体制保持

—左足から朱色の魔力が溢れて漏れる。

—距離300

—勢いを殺す事なく直進。

—距離100

—フェイト・テスタロッサ、夜天の解析空間に侵入

—垂直に、夜天とフェイトの間に割り込むように足に溜め込んだ魔力

を暴発させ、垂直に翔ぶ。

—距離3

「お前も、我が内で眠るといい」

「ハハッ！いいね！是非とも寝心地のいい夢を所望してやるよ!!」

「ッ！」

「ハアアアアアアアアアア!!」

バルディツシュと俺の左手が夜天の防壁に阻まれる。

—接触失敗

—蒐集開始確認

—このまま吸われてやるよ

「フェイトちゃん!!」

「フェイトオオ！」

「ツチ、クソめ!!」

剣を振りかぶったバカがこっちに直行してくるのが見えた。

—スフィア展開

—ここでアレに来られると面倒だ

—こうなったら保険は多い方がいい

—魔法弾射出

「ッ！テメェ!!」

「……」

自分の身体から朱色の粒子が発生する。フェイトからは黄色の粒子。

—一度分解して取り込もうってか？

—再構築とかも出来るのかね

—ふむ、なかなか素晴らしい機構だ

「ユウウ！」

「フェイト。お前も守るよ…絶対に」

そして俺の意識は途絶えた。

34 私が許す

目が覚めた。

というよりも、突然意識が戻ったと言ったほうがいいかもしれない。

「ふあ…」

「え？」

私の隣で寝ていたアリシアが目を覚まし、寝ぼけた目をこする。

「ここは、庭園？」

「おはよー、ふえいろー」

「うん、おはよう。アリシア」

「まだねむいー」

布団から顔を出した小さいアルフ。

そんなアルフを撫でて、扉の開く音に反応する。

「フェイト、アリシア、アルフ、朝ですよ」

「リニ、ス？」

「どうかしましたか？」

私の声にリニスは首を傾げて不思議そうにする。

「どうして、リニスが？」

「それにアルフも、これは、何？」

「夢…？」

「怖い夢でもみたんですか？」

「だいじょうぶ？」

「怖い、夢」

「どこまでが夢？どこからが夢？これは、現実？」

「母さん…」

「あら、どうしたのフェイト」

「どうやら怖い夢を見てしまったみたいで」

「あら…大丈夫なの？」

優しい母さん。

居なくなったりニス。

アリシア、アルフ。

とても幸せ、幸せで、暖かい。

「プレシア。少しは抱きしめるとかしてやれよ」

「え？」

聞こえた低い声。聞きなれない声にそちらを向けば黒髪で縁のない眼鏡をした青年。

そんな青年は私を優しく抱きしめて、なれたようにポンポンと背中を叩いてくれる。暖かい。

「もう怖くないさ。何かあったらお兄ちゃんが守ってやるから」

「お兄…ちゃん…？」

「私のフェイトを離してちょうだい」

「イヤだね。フェイトの為に在る俺に対しての死刑宣告はやめてくれ」

「死ねば？」

「ひどくないか？」

「えっと…ごめんなさい、誰？」

思わず出た言葉に青年はびっくりしたように顔をキョトンとさせ、母さんの方を向いた。

「え？何、これ、ドッキリ？」

「残念。現実十割のマジよ」

「あー、わかった。アリシアと一緒に謀ってるんだな？」

「え？ユウちゃん何言ってるの？」

「つまり、本気なのか。ヘコムわ…」

「ゆう、だいじょうぶ？」

「アルフ、いつもの事ですよー」

「そっか！だいじょうぶだ！」

「リニスさんひどくない？俺の扱い酷くない？」

ユウ：？これが、ユウなのだろうか。確かにどこことなく印象は残っている。

少しだけ長くなった髪を後ろで結わえ、ボサボサとした髪を被せれば：確かにユウだ。

「ユウ？」

「おうさ、どうしたフェイト」

彼がユウだ。

でも、どうして彼が？

「で、昨日から研究は進んだのかしら？」

「泊まり込みで仕上げろって無茶言われたからな。なんとかあったけど」

「そう、ならいいわ」

そうか、研究の手伝いをしていたのか。

それならば、納得できる。

「ユウ！」

「うわっぷ」

「あー！ずるいー！」

とにかく今は、珍しくいる彼に甘えるとしよう。



眠い。

眠い。

「うん…」

薄く開いた瞼から、女の人が見える。

銀髪で赤い瞳の、女の人。

「そのままお休みを、我が主」

主。そう呼ばれることに違和感が一切感じない。

寝ぼけた思考でも、どうやら自分はシグナム達のご主人様としての

意識があるらしい。

「そのまま目を閉じて、心静かに夢を見てください」

夢。とても穏やかな心地。

まるでこの世界から争いがなくなってるような。

「あなたの望みは全て私が叶えます」

望み、そう望みだ。

目の前で消えてしまったヴィータやそして、夕君。

どうしようもなく無力な私は、この世界から目を背けた。

背けて、どうしたんやろう。

『守るよ、その約束』

そういった彼はもういない。

ならば、こんな世界…こんな人生なんて。

『誰が鈍感だ。他人に関しては機敏だぞ』

『アツハツハツ、長期休みを先に体験しているお前を心配なんてするか』

『いいタイミングだ、八神。ぬいぐるみをプレゼントしよう』

『はやて様マジ墮天使』

『あー、なんだ車椅子少女。この本が読みたかったのか？』

『はやてを守る為に決まってるだろ』

そうだ。私は、彼に守られた。

そして、そんな私は彼に守られた人生を捨てて、夢に逃げようとしている。

「それだけは、アカンやろ」

「主？」

健康な身体も、愛すべき家族達も、夢であつては意味がない。

夢に逃げて、彼が出てきたとしても、それは彼ではない。

『セエエエエカイイイイイイイ』

甲高い声が何故か頭に響いたが、そんな事なかった。

そんな彼に馬鹿にされるような人が彼に好かれるはずがない。

「私、こんな望んでないよ。あなたも一緒やろ？」

「私の心は騎士達と深くリンクしています。騎士たちと同じように私もアナタを愛おしく感じます。だからこそ、あなたを殺してしまう自分自身が許せない」

「覚醒した時に今までの事、少しわかったよ」

無茶をしていた騎士も。この子の事も。そして騎士と一緒に無茶をしていた彼の事も。

だからこそ、私は

「私が許す」

「……」

「前の事も、体の事も、今の事も、私が許すよ」

「それでも、私は」

「大丈夫。私があなたに名前をあげる。もう闇の書とか、呪いの魔導書とか呼ばせへん。私が呼ばせへん」

「ムリです。止められません」

「なんや、まだ不安なんか？大丈夫。私が約束する」

暴走しそうな事も、世界が壊されそうな事も、全部、全部止める。

「絶対に守るよ、その約束。守らな夕君に針千本飲ませなあかんし」

そんな事、もう出来ないのだから。



「ほら、フェイト。お兄様と呼んでくれ」

「……」

何度目かになる彼の要望を否定する。

彼は非常に落ち込むのだけど、でもすぐに和やか笑う。

「アンヘルは……」

「ああ、アレはもうないさ。俺は至って健康体なのだ！」

「そっ、か」

ダメだ。これ以上はダメだ。

彼はユウでないのだから、もう甘えられない。

「いいぞ、そのまま否定し続ける」

「うん…」

彼はユウじやなくても、やっぱりユウだ。

だからこそ、私を迷わず助けてくれる。私を守ってくれる。

間違いが起るのなら、事前に注意を促す。

「ここが夢だと気付いたのはいい点だ。あとはお前が思えばいい」

「どうして、私を助けるの？」

「ん？」

「アナタは私がいなくなったら」

「おーっと、お嬢ちゃん。そいつは言っちゃあいけねえぜ」

「……」

「この夢で幸せでもそれは夢でしかない。はやてを助きたい俺ツチ

としては早々に現実に帰ってもらわないと困るんだよ」

「そっか」

「ま、お嬢ちゃんを守るって言ったからな。故に俺はユウとしてお前

さんを守るさ」

「うん。ありがとう」

「やめてくれ。現実の俺なら照れて適当に言い逃れしてるさ」

「このユウは現実のユウよりも正直に言ってくれろ。」

「それも夢だからなのだろう。」

「フェイト、俺がこういうのもオカシイんだけどさ」

「ん？」

「ユウを頼むよ」

「大丈夫。私も守るよ、約束する」

「そいつは重畳」

口角を上げて笑う彼。

そんな彼を見て私の意識がフワリと浮いた。



エラーが発生しました。
夜天プログラムの異常発生。
エラーを直します。
エラー削除。
自己防衛機能低下。
プログラムの書き換え確認。
受諾。
管理者名・八神はやて
命令を受諾。
管理者コードを発行します。
管理者コードの所持には名前を明記する必要があります。
コード所持・御影夕
エラー発生しました。
再度明記してください。
コード所持・ユウ
エラー発生しました。
再度入力してください。
コード所持・ユウIIエンブレイ
所持者確認しました。
コード所持者より命令受諾。
ログを消去します。

…

35 時は19XX年！核の炎が…

「なんや（こ）おおおおおおおおお」

「どうやら私はタイムスリップでもしてしまったらしい。

荒野とボロボロの家達。

そう、これはあれだ、夢だ。

「あー、リインフォースどういうこと？」

『すいません、主。ツキビトが私に侵入してしまい、ココの管理権を奪われました』

「ええよええよ。つまり夕君が悪い…って生きとったんか」

つまり、結構恥ずかしい思考をしていたのか。

思いつきり頭を抱えたい衝動を抑えて、足元で倒れている金髪の女の子に声をかける。

「起きてやあ、フェイトちゃん」

「う…はやて…闇の書!？」

「はい深呼吸」

「え、あ、うん」

目の前でスーハーと深呼吸をするフェイトちゃんと眺める。

ああ、なんやろう。和む。

「落ち着いた？」

「うん。ここは…」

「一応、夜天の書の中になるんやけど」

「だけど？」

「ココの管理者権限が夕君に取られてるらしいんよ」

「…ああ、ユウだもんね」

そう夕君なのだ。

どこか二人で納得しながら、周りをもう一度見る。

「ここが、ユウの夢…」

「なんや荒野の七人みたいやなあ」

「え？なにそれ？」

「簡単にいえば西部劇みたいな夢やなあ」

思わず溜め息を吐く。こっちは車椅子でパジャマだというのに。
テンガロンハットよりもナイトキャップの方が似合う格好なのに。
「外ではなのはちゃんとのあのバカが頑張ってるから急ぐ」
「うん」

町の中はある程度賑わっている。
賑わっているのだが、

「*****!!*****!*****!!」

「!!*****!!——!*****!!」

「なんか、すごいね」

「どんな夢やねん」

これならまだ宇宙人がいるほうがいい。

殴り合いをする人間とそれを見て賭け事をする大人達。

全員が酒を持っていて、さらに共通することに下品に全員ゲラゲラ笑っている。

もうなんていうか、最悪だ。

「お嬢ちゃん達、どうせなら賭けないかい？」

「おいおい、ロリコンはお帰りくださいな」

「そんな事いいながらテメエなんてこの前——」

「いいんだよ俺は。ペドフェリアを自称してる」

「誰か！こいつを捕まえて!!」

「まあまあ。お嬢ちゃん、ペロペロさせてください」

「コイツもだ!!」

最悪だ。

「ねえ」

「え？」

後ろを振り向けば白髪と白い瞳、そして白い肌と一色に染められた
女の子が立っていた。

白いワンピースが風に吹かれていて、彼女も随分とここでは浮いて

いる。

「夜天の主と、いつかの魔導士だね」

「…君は？」

「私なんていいよ。お兄ちゃんを迎えにきたんでしょ？」

「お兄ちゃん？」

「ユウIIエンプ：じやなかった、ミカゲユウおにいちゃん」

白い女の子はにっこり笑い、駆け出す。

数メートル進み、ふと足を止めてコチラを振り向く。

「私だね！案内してあげる！」

フェイトちゃんと顔を見合わせて、疑いよりも先にその女の子を追いかけてしまった。

「ただいま、エンプテイさん」

「おかえり。遅かったな。迷子にでもなってたのか？」

「ちよつとね」

「ふむ、まあココらの情報は全て私が管理しているから何があったのかはわかるがね」

「ぶー、酷いよ。エンプテイさん」

緑の髪を床まで垂らした女性は近くにあったカップに口をつけ、少し飲んでからこちらに視線を向ける。

「おや、アレの友達か」

「えつと」

「随分と可愛らしい友人じゃないか。私があと数年若かったら攫っていたかもしれないね」

「え、あ」

「冗談はよそう。ウチの子を連れていくんだろ？」

女性はフイツと扉に視線をやる。

「アレは随分と好かれてるようだね」

「大切な友達ですから」

「そうかい。それは嬉しいね」

女性はクツクツと楽しそうに笑う。

「私が言っちゃいけないことなんだけどね」

「？」

「あの子を頼むよ」

「ハイ」

「もちろんです」

私たちはドアノブに手を添えて、捻る。

「わたしからもお願い。お兄ちゃんを助けてあげてね」

そんな女の子の声はやけに遠く聞こえた。

扉を開けて、まず見えたのは銀色。

「はやて！」

「大丈夫、大丈夫や……」

後ろには既に扉はなくて、あるのは剣だけ。

そして、その剣だけではなく、雨のように剣や、槍や、斧や、殺傷能力を隠すことのない武器が降り注ぐ。

「夢……」

「これが、ユウの」

「リテイク」

前の方から声が聞こえ、そしてその声は聴き馴染みのある声だった。

「ユウー！」

「夕君！」

ただ空を見つめる彼に声を掛ける。そしてそれは聞こえていない

らしい。

武器の振る空を武器を足場に駆け上がり、そして、貫かれて落ちる。

「リテイク」

落ちてきた夕君が立ち上り、また空を見つめる。

何度となく繰り返し返されている行動のように慣れたように、彼はただ愚直に空を目指す。

「なんだ、もう来たのか」

「!?」

後ろから声かして思わずビクツとしてしまう。

そこに居たのはボサボサの髪をして、瓶底のような眼鏡をした、彼。

「出迎えご苦労、やへんの、ひはいひはい」

「びつくりしたやろおおおお」

「ほっへあ、ほっへはひひへう」

「ちぎったる！もう餅のように伸びるこの頬をちぎったる!!」

「はやて、落ち着きなよ」

フェイトちゃんに言われてようやく夕君の頬つぺを放す。本当に痛かったようで、彼は何度か頬を撫でて息を吐いた。

「全く、人が空気をわざわざ変えようって思ってた行為を」

「それなら十分や」

「で、アレはなに?」

「自殺特攻パート…なんだっけか、まあ単位が漢字三文字であることは覚えてるんだけど」

「いや、なんでそんな事してるんさ」

「あー話せば長くなる…といってもここなら外の時間を気にしなくていいわけだけど」

「で。」

「時は19XX年！核の炎が、まじごめん真面目に話すからそんな目で俺を見ないで」

フェイトちゃんと目を合わせて、同時に溜め息。しかしながら、これでも夕君なのだ。

「真面目に話すとすると、どこから説明すればいいのか」

「あの武器の雨は、なに？」

「それからなら随分楽だ。アレは俺がいた町を襲った災厄。実際あれで町は壊滅状態に近くなっただし」

「壊滅って…」

「あー、そうそう。話の流れで言うが、俺は地球出身じゃないから」

「は？つまり、宇宙人ってこと？」

「まあ覚えておいてくれ。んでこれが終わったら自分で調べなさい。この辺鄙な世界が俺の故郷」

「ここが…」

「まあ今は生き物もほとんどいない世界になっちゃったけどな」

夕君が苦笑する。

故郷が潰れるというのはどれほど怖いのだろうか。私には想像もつかない。

それに夕君は親を失ったのだろう。この災厄で。

「で、俺の本名、というか本当の名前は御影夕じゃないんだけど、それはいいや」

「いや、アカンやろ」

「いいんだよ。言っちゃうとまた面倒なんだ。今のままでいいさ」

「それで？」

「まあそこからの説明は大きく端折るんだけどさ」

「おい」

「仕方ないだろ。お前らが子供すぎて悪影響なんだから」

「夕君も一緒に歳やろ？」

「むしろさらに幼い時にそんなショッキングな事があったわけだけだな」

夕君は溜め息を吐いて、頭を振る。

「さて、そろそろ頃合かな」

「え？」

「夜天の書の暴走プログラムの書き換えの話」

「そんな事してたんか!!」

「まあ時間は掛かったけどな。はやてへの悪影響になりそうな部分は粗方消したし、管理局が目を付けそうな転生機能もはやての魔力反応がなくなると同時に誤作動を起こすようにした」

『それでも、私は…』

「安心しな、夜天の。さてはやて、ここで一つ問いかけてやろう。新しく出来た家族は大切か？」

「そんな当たり前の事聞きなや」

「ということだ。俺ははやてとその家族を来年の夏祭りに行かせないといけないんでね」

夕君は面倒そうに、でも少しだけ笑ってこう続ける。

「なに、安心しろ。お前の元のプログラムなんて断片化されてただけだ。それならソレを紡いで直せばいい。絶望なんてするんじゃないやねえよ。まだ絶望には程遠いさ」

36 ベット内容は命と世界

「さて、フェイト。お前は先に外に出てもらおうか」
「…うん」

「俺とはやては最後の詰めに入る…といっても、はやては夜天に命令するだけなんだけどな」

「何したらええの?」

「今発動してる自己防衛プログラムの遅延、あとは俺がどうにかするさ」

―断片データ取得

―解析

―守護騎士プログラムから解析したデータと一致

―詳細解析開始

「外にいる…スクライアかもしくは管理局に説明しといてくれ。『暴走するまで放置してろ』って」

それまでに手を出されるとエラーが出て辛い。

―断片データ取得

―解析

―先ほどのプログラムと照合、一致

―管理者コード認識

―対象、フェイト・テスタロッサを夜天から解放

『コード取得者からの命令受諾します』

「んじゃ、よろしく」

ベルカの魔法陣がゆっくりと回転し、フェイトを包み込み消える。

「ホンマに魔法使いやってんや」

「今更だな」

―プログラム解析

―あー、足りない、データが足りない

―いっそ新しく組む方が楽か?

「リンカーコア送還、破損修復」

「守護騎士プログラム、修復…出現はさっきのビルあたりだな。座標

も残ってる」

「なら、お願い」

「ヤー、夜天の姫」

― 守護騎士プログラム行使

― 夜天の姫からの命令だ、さあ起きろ騎士ども

― 断片データ取得

― 解析

― 一致

― 結合

「これで、私がココで出来ることは、オシマイ」

「よくやった。あとは任せてお前も外に出とけ」

「管理者権限の一部をコード所持者に譲渡」

『譲渡、確認しました』

「そこまではいらねえよ」

「ソレなかったら、夕君出られへんやろ？」

出るつもりがなかった。とは口が裂けても言えない。

― ここでプログラムをいじり続けなくてはいけない

― 暴走プログラムの書き換えも完了していない

― 断片データ取得

― 解析、一致

― 結合

「あかんで、帰ってこな」

「…夜天の、姫に杖を」

『コード所持者からの命令受諾』

「ちよい待ちいやー！」

「どうどう。俺もすぐに出るさ」

はやての足元に魔法陣が出来上がり、そして消える。

― これでよかったのだろうか

― 悪いわけがない

― 言い訳もない

「さつてと、どうすつかな」

『ツキビト、頼みがある』

「んー？」

『私がおし消える道を選べば…主は助かるのだろうか』

「さてね。それは知らんし、お前が消えるっていう選択肢はお前が選ぶものじゃねえよ」

『……』

「さっき自分で言ってたろ？お前は道具だ。道具なんだからご主人様の命令を聞いて考えろ」

世話のやける道具だ。

—まだ信じていないのか

—暴走プログラム発動までの時間が迫ってきたぞ

—いつそ魔力をぶち込んで機能停止に追い込むか？

—危険すぎるわ

「まあ、データの復元は出てからでも可能か」

『ツキビト、すまない』

「気にするなよ。約束は絶対に守る」

『…ありがとう』

「おうさ」

ベルカの転移魔法、いや召喚魔法なんて絶対にもう信じない。絶対だ！

「ぬおおおおおおおおおおおお!？」

水面に向かって垂直に落ちていく。

マズイ、このスピードで水にぶつかったら、確実にアイツと会話できなくなる状態になる。

—空間解析開始

—速度判定、死亡確率上昇中

—飛行魔法

―エラー、術式崩壊

―痛覚遮断

―身体強化

―体勢を立て直せ！

―スファイア展開

―魔法弾射出

―腹部に着弾確認

―体勢保持

―魔力弾を足元に精製

「ユウ、大丈夫？」

「おお……あー、もう少し早く来て欲しかった」

「その、ごめん」

「いや、まあいいさ」

襟首をフェイトに掴まれ、体勢を立て直して作った魔力玉に乗る。

―いやはや

―夜天の暴走プログラム発動予定まで5分

―上空に生体反応確認

―高町なのは、バカ、管理局員、八神はやて、ヴォルケンリッター

―うむ、騎士プログラムはうまくできたな

上空に魔力玉を精製していき、跳んで渡る。

「君が、セネターだったのか」

「ん？初対面なはずだけど？」

「いや、そうか、それならいい。クロノ・ハラオウンだ」

「御影タダ。夜天の暴走プログラムの説明がしたいんだけど、いいか？」

「おい！こいつは敵だぞッ！」

「敵であれ、味方であれ、彼自身が死ぬ危険に晒されているんだ。情報は信じるに容易い」

「ツチ」

視線で軽く礼を伝えて、暴走プログラムの説明をする。

―不本意ながら、俺だけの力では面倒が増える

—元々多人数でどうにかする問題だしな

—アンヘルを展開すれば、飲み込めるが

—暴走プログラムを止めれるかは不明だからな

「手短かに。暴走プログラムには物理と魔力の複合四層防壁になってい
る」

「ハッ！そんなことオレが知ってるよッ！」

「なら話は早いな。その後、より強固な物理魔力複合防壁が展開され
る」

「なんだとツ!?そんな事あるわけないだろ!!」

「既存プログラムになかったんでな。俺が追加した」

「テメエ！やっぱり敵かッ！」

「やめろ、ライト。話を続けてくれ」

「防壁の効果が文字通り複合防壁、あの恐ろしい桜色砲単体で破るのは無理だ」

「スターライトブレイカーでも…」

「でも破る方法はあるんやろ？」

「ヤー。なければ別の方法をとったさ」

「それは確実か？」

「予測ではな。実際はやってみないことにはわからない」

「そうか…」

「信じれないか？」

「…いや、君を信じてみよう」

「それは、また酔狂な事で」

溜め息を吐いて、ハラオウンを見る。

目に疑いの色はないが、信じているワケでもないだろう。

—まったく、真っ直ぐだなあ

「プランを確認しよう。まず最初の四層の防壁は元のプラン通り僕ら
がどうにかする。最後の複合防壁はミカゲに任せ」

「オレも最後に回る」

「ライト君？」

「こいつだけじゃ信用できねえ。オレも最後に回ってやる」

「そうか…ならライトとミカゲが複合防壁を破り、一斉砲撃にてコアを露出。その後ユーノ達の強制転移魔法でアルカンシエルの射線上に…」

「ベツトは命と世界で、全員成功するほうか。賭けにもならねえな」
「なら夕君は失敗する方に賭けたら？」

「冗談。終わった世界で誰もいないなら勝ちでも負けさ」

ともあれ、ギャンブル性が高いのも事実だ。

いざとなれば、俺がどうにかするしかない。

—成功率演算

—八割程度か

—全員の実力はある程度把握してるが

—最後の防壁破りがなあ

「なんだよ、こっち見るんじやねえよ!!」

「ハア…」

こんな事で成功するのだろうか。

—大丈夫だろう

—実際は俺一人でもうにかできる問題だ

—それが二人になったところで結果はあまり変わらんさ

—マイナス作用さえなけりやあな

「オイ」

「よお、ロリータ。調子はどうだい？」

「…どうせまた無茶したんだろ」

「こんなの無茶にはいらんさ。悪かったな、お前らを守れなかった」

「先に謝んなよ…バカ」

「私たちはお前に感謝しきれないようだな」

「おいおい、シグナムまでそんな調子かよ、やめてくれ」

「照れるなよ」

「うっせえ！ワンコ！」

「照れ隠しとわかると、中々に面白く見えるな」

「だあ！ちくしょう！防壁破る準備してくる！お前ら来んなよ！」

「照れてるわね」

「ユウって照れ隠しがへタだったんだね」

「御影君、そんなに照れなくても」

「もうやだ！こんな職場もうやめてやる!!」

結局俺はクスクス笑われながら、海面まで逃げたのであった。

—やーい、お前んち、オーツバケヤーツシキ—

—やーい！ロリにいじめられてやんの—

—ロリにいじめられると聞いて

—おまわりさんこいつです

「さてと、っと」

設定した複合防壁を破るための準備をする。

—魔力弾足元に維持

—体勢維持確認

—アンヘル展開

「うむ、上々」

アンヘルを制御して左手から棒を伸ばす。

そのまま左肩を前にするように体を捻り、右肩に棒を置く。

—保険として取っていたリンカーコアから魔力吸収

—その魔力を全て予定消費魔力に追加

—概念を込める為に詠唱を

「Enda sudri, landi brenna . . .」

—南の果て、灼熱の地

桜色の魔法と巨大な鎚が暴走プログラムの防壁を破る。

—アンヘルに魔力追加

—硬度強化

「Giants verjendur Musuperu brenna, allt . . .」

—ムスペルの守り手、全てを焼く巨人

—ずしりと肩に負担が掛かる。

—柄、精製完了

―刃に移行

金色の刃と桃色の矢が二枚目の防壁を破る。

「Haldid sverdinu Mimagau eldigo
solarljosi . . .」

―手に持つは炎、陽光と見紛う剣

―硬化

―刃に炎熱魔法を付与

―予定リンカーコア、残り僅か

白色の光が刺さり、凍結魔法が海を凍らせる。

「Kemur herognu, allt sem egb
orda . . .」

―いまここに姿を顕し、全てを喰らえ

―刃への魔力供給開始

―炎熱魔法起動

―リンカーコアの残量なし

―計算通りだ

「Farmskra, sverd Surt!」

―顕現せよ、スルトの剣!

完成すると同時に魔力が消えていく感覚がする。

―燃費悪すぎる

―予備リンカーコア使って尚キツイとか

―対象、距離100

―なに、一歩さ

魔力を足に込め、足場の魔力弾を踏み潰す。

魔力弾は破裂し、同時に俺の速度に上乘せされる。

―対象、距離25

―振れば当たるさ

―さあ、燃やし尽くそう

「ウオオオオ!!」

捻っていた体を戻し、左手に握られている剣が海を焼き、暴走プロ
グラムの防壁に当たる。

—魔力追加

—防壁破壊域

「砕けろ！」

バリリン、と割れた音を聞いて、あとはアイツらがどうにかしてくれるだろう。と考えてしまった。

安心したのと、魔力消費で意識が……

どうにもならないようなら……起こし……て……。

37 ただいま戻りました。我が君

「……」

私は隣にいたフェイトちゃんと一緒に固まっていた。救出されてから約七時間、この医務室を占領していた人間が消えたからである。

確かに、この艦長さんから『いい加減に寝なさい』と言われて眠っていた。そこまでは、居たはずだ。

そして、ここに来る前にフェイトちゃんに確認したところ、『映像で確認したけど、まだ起きない…』と少し悲しそうな顔で言われた約五分前。

医務室で眠っていた彼が、消えた。

「……ハッ！夢か！」

「はやて、落ち着いて。残念だけど、100%現実だから」

「……いつそ夢であって欲しいんやけど…」

「私も、そう思う」

「はあ」

「はあ」

お互いの溜め息が医務室に広がったところで、ようやく冷静になって考える。

一応、保護観察状態である自分とほぼ同じ状態、というか海に浮かんで私達の一斉砲撃の余波でボロボロになり私より酷い状態の彼はどうしたのか。

『二人ともごめん！すぐに技術室に向かってくれろ!?!』

「エイミィ?！」

「技術室?！」

『そこに彼が居るから止めてあげて!!』というか、こっちの制止を全く聞かないんだよ!!』

「…すぐ行きます」

『よろしくね!』

「はあ…病み上がりの体ってわかってるんか?」

「はやてもだけどね」

「しー。今は夕君の話や」

車椅子を押してくれるフェイトちゃんと苦笑しながら、車椅子は技術室に向かう。

自動で開く扉を開くとそこには宙に浮くディスプレイが所狭しと並んでいた。

「アリシア、そのデータ、もう一回チェック頼む」

「いいけど、あんまり無茶してると私がフェイトに怒られるんだよ」

「あー、ドンマイ」

「アツハツハツ、この作業が終わったら、私ユウちゃんを殴るんだ」

「なんだ作業を増やしてほしいのか、」

「ホントにごめんなさい。これ以上はムリだよ」

金髪で白衣を着た少女と黒髪で白いポンチヨを着せられた少年がそのディスプレイを見つめて手元のキーボードを叩いていく。

「ちよ、ちよっと夕君なにしてんねん！病み上がりやろ！」

「はやて、フェイトおはよう」

「あ、おはよう。ユウ」

「ってそこやないやろ!!フェイトちゃんも何をのんきに挨拶なんかしてるんや!」

「一日の始まりに挨拶は基本だろ。全くこれだから最近の子供は」

「アンタも最近の子供やろ!!」

「え、つと。とりあえずはやて落ち着いて」

周りを確認すると白い目でコチラを見ている白衣の人たちとクロノ君。そして苦笑するリインフォース。

リインフォース？

「え?なんで?」

「いやあここまで機材が揃ってるとやれることが違うね。お兄さん少し頑張っちゃったよ」

「これで少しって言うなら全力になった時には地球破壊爆弾でも作れそうだね」

「21世紀の技術を今ここに！なんてね」

「とりあえず四次元ポケットを準備しないと」

「確か四次元軸は『時間』だったか？軸になるんだったら戻れる前提だから、先にタイムマシンか」

「いつそ別の軸でも…あ、ダメだ、時間を停止させてないと物が腐る」

「ならまずはタイムマシンからだな」

「ちよつとまてえええい!!」

思わず声を出してしまった。

発言的にアウトとかそんなのじゃなくて、話の脱線の仕方がオカシイ。

「んで、あたかも私がオカシイみたいな目でこっち見んな!!脱線した話の時はディスプレイ見てたクセに!!」

「病み上がりだから、ほら、はやて、あなた疲れてるのよ」

「なんやねん！あれか、そのまま適当に言い逃れするつもりか!?ふぎけんなー!」

「で、やってることだけど」

「話に戻った!?このタイミングで!」

「リインフォース？まあ夜天の調整と騎士プログラムの改正か」

騎士プログラムの改正…。

「やらんとは思うけど、シグナム達をどうするつもりやねん」

「違う違う。どうにかするのは【夜天の】の方だよ」

夕君は苦笑して、またディスプレイに顔を向ける。

「騎士プログラムは、烈火の将、風の癒し手、紅の鉄騎、蒼き獣の四つのプログラムによって構成されている。もちろん四人の中のプログラムは一切いじってないけど…。さつきヴィータとシヤマルの解析をして一致するプログラムがあったから、ソレを元に【夜天の】に新規プログラムを作成、あとは融合機能を維持、蒐集機能や魔力は主に譲渡する形で話をついた。今は断片データから得た過去の夜天プログラムを復元、修正、新規プログラムとの齟齬を計算中だ」

「……ごめん、もうちよつと簡単に頼んでええか？」

「…毒蛇だった闇の書が魔法使いの手によって姫の握る剣に、姫を守る盾に、姫を救う騎士となりましたとき、っつと」

叩く手が止まり、リインフォースが少し発光する。淡い朱色の光に包まれたあと、光が収まり、リインフォースの瞼が上がる。

「新しい体はどうだ？」

「ええ、以前とかなり変わりましたが…昔と殆んど変わらない、いえ、昔よりも調子がいいんでしよう」

「そいつは良かった。アリシアもご苦労様、助かったよ」

「あー。こつちもいー経験になったよおーおー…これでユウちゃん
の作業量こなそうとすると何日かかるのさー」

「ざつと能力見てたけど、アリシアだけなら大体二ヶ月徹夜続けて誤
差とエラー大量にあるけど8割完成でぶち込める程度か」

「ひよーかがきついー」

「まあ助かったさ」

「主」

「あ、うん」

「私はあなたを数年蝕みました。それは私にとって仕方がないこと
も、事実です」

「…うん」

「あなたの大切な人を傷つけ、そして世界を壊そうとしました」

「……」

「そんな、私を」

「ちよい待ち」

「……」

リインフォースの言葉を遮り、溜め息を吐く。

どうして私の周りにいる、というか私の騎士はここまで責任感が強
すぎるのだろうか。

「まあ、色々あったよ。あったけど、今はまず言わなあかん事があるん
や」

「……」

「おかえり、ラインフォース」

「……ハイ、ただいま戻りました、我が君」

私がギュツと抱きしめてやると、ラインフォースの顔を当ててる辺りが少し濡れて、暖かい。

とりあえず、また夕君に借りができたらしい。尤も彼はコレを貸しだとも思っていないのだろうけど、貸しは貸しだ。

「さて、ミカゲ。もういいだろう」

「ああ、これで重畳にて十全。悪いな、無茶を頼んだ」

「いや、危険性を考えれば君の意見を通すのが一番だった。貸しーだ」

「おいおい、危険を取り除いてやったのに借りーかよ」

「君が頼んだからな。どうせ僕から頼まなくてはいけないことだったが、貸しは貸しだ」

「まあここまで連れてこさせたのもあるからいいんだけどな」

夕君とクロノ君が話をしている、クロノ君が夕君の手を引いて扉を出ようとする。

「ちよ、夕君をどうするん!?!」

「コレは起きてすぐにここに来たんだ。状況報告も聞きたいこともある。ついでにメデイカルチェックもまだだ」

「いやん、管理局に犯される!!」

「連れてって」

「ああ」

「おい、お前らその反応は普通に傷つ」

夕君が引きづられ、言葉の途中で扉が閉まった。どうせロクな事も吐いてないので、まあいいとしよう。

38 ハッピーエンドだ、ざまあみろ

「メデイカルチェックはいらないぞ」

「……」

「残念ながら、至って健康、というか傷なんて一切ないさ」

「……君は自分の状態を知らないのか？」

「……知ってるからこそ、チェックを受けれないのさ」

「知っていて、何故そんな平気で居れる!!」

「怒鳴るなって、ドラミみたいな声になるぞ」

「……すまない」

隣に歩くハラオウンは少しだけ頭を振り落ち着く。

—ああ、全くどれだけ真っ直ぐなのだろう

—敵を信じ、敵に礼を言い

—本当に管理局なのか？

—いつそ管理局なんてやめちまえばいいのに

カット。そもいかないだろ。

「君は初対面と言ったが、僕が君と会うのはあの戦いで二度目だ」

「……さて、どこで会ったか皆目見当もつかないな」

「僕の意見は素晴らしいのだろ？」

「……アレは、皮肉さ」

「知ってるさ。僕は全部引っ括めて、彼の言葉を飲み込んだよ」

「……まあなんのこともかさっぱりわからないけどな」

「そうか。僕の勘違いだったようだ」

お互いニヤリと笑ってから吹き出す。

クスクスと笑う少年二人は、端から見てて気持ち悪いどころの話ではないだろう。

「で、君には幾つか聞かなくてはいけないことがある……と言っても状況聞くのみで済む」

「ん？管理局の邪魔はしたが？」

「その分は情報提供で補ってるだろう。事実、君が善意でしていた情報提供の御蔭で事務処理の内容が簡潔に済んでる」

「お役所仕事は辛いねえ」

「そうでもないさ」

「セネターとしての活動は？」

「粗方洗ったが、大半は原生生物に関して。コレも君は想定して動いたんだろうが、その世界の悪影響になる生物を狙っていたんだろ？」

「さてね。運がよかったのさ、次からは無理だな」

「そうか。なら今度から賭けは君がベットした所に賭けるのはやめるよ」

「そうしてくれ。後で折半しよう」

「それは断る」

「残念だ」

実際歩きながらの日常会話に等しい取り調べ。

—情報は無限書庫にあったし、特定の原生生物を狙うのは容易い

—はやての罪が軽くなると思ってたが

—あとははやてとコイツの手腕によるさ

—はやても総合的にみれば被害者だからなあ

「あと、」

「ん？」

「母さんが君を怖がってる、というか君を見るとどこかオカシクなるんだが、覚えは？」

「……残念ながら。少し威嚇した覚えしかない」

「ならそれなんだろう。少しは加減してくれ」

「次から優しくするさ」

そうして、俺とハラオウンは医務室に入り、ここから記録込みの公的な取り調べが始まる。

「あー、肩凝るなあ」

「記録が終わってすぐそれか」

「当たり前前だろ。第一管理局の記録に残される事自体不本意だつての」

「そうか。リーゼロッテに聞いてたが管理局嫌いだったな」

「リーゼロッテ？誰それ」

「無限書庫で会っていたらしいが」

「無限書庫：ユーノとアリシア、フェイト：あー、猫耳管理局員か」

「随分な覚え方だな」

「アイツらなんてそれで十分だ。」

「嫌い、つてワケでもないんだけどな。好きじゃないのさ」

「：理由を聞いても？」

「やめとけ、俺のエゴで俺の想いだ」

「……そう、か」

これだけでも眉間に皺を寄せてしまう彼は、やはり人間として出来ているのだろう。

—頭も回るしな

—人の心配もできる

—全ての管理局員がコイツならば

カット。さすがに怖いな。

「そういうえば、仮面の男はここに捕まってるのか？」

「：いや、彼らは首謀者と一緒に別の場所にいるよ」

「首謀者ねえ：まあいいけど」

「どうした？」

「いや、少しだけ言いたい事があつたんだけど、いないならいいか」

「良ければ伝えとくが？」

「助かるけど、本当に他愛もない言葉だぞ？」

「伝言板に書いて伝えられるなら、聞かないさ」

「なら、一つだけ。」

残念ながら彼女の御伽噺はハッピーエンドで終了だ。ざまあみろ」

もし物語

I F 騙り

目が覚めてしまった。
別に覚めてほしくなかった訳ではない。

ただ現状をあんまり理解したくないんだ。

―パフパフって知ってるか？

―……あれだろ、こう、ロマン溢れる2つの柔らかい物体でフニフニと顔を責めるっていう

―そうだ

―しかしながら、今の俺の現状は妬ましい

―いや素晴らしい

―昨晩は唐突に甘えだした彼女に驚いたが

―いやはや、奉仕する側は相変わらず楽しいね

目の前にはきめ細かい白い肌。そして僅かに流れてきた金髪。

感触は非常に柔らかい肉感と、頭に掛かる寝息。

―実に素晴らしい

―素晴らしい

―しかしながら許せない

あとは抱き枕よろしく抱かれてる俺。

―今日はエリオとキャロが来るんじゃないの？

―さすがに両方全裸はガキ共にトラウマというか変な常識という

か

―わかった。触手で服を作れば解決じゃないか？

―さすが俺だな！

―イヤッホイ！

―時間制限なし、行動自由な触手服

―赤黒いけど……ふむ

―裸Yシャツとか乙だと思う！

―ウサギさんルックでいいんじゃない？

―バアアアニイイイイ！

―ダメだ、ミンチになってやがる。

―カッツ。子供に普通と思われる服装な

―だから裸Yシャツで

―あとは、シヨーツさえあればまあ

―…エリキヤロ来るまでに時間はまだある

―今を存分に楽しもう

―まずは深呼吸をしてだな

カッツ。

とりあえず、フェイトにYシャツだけ着せて置こう。

「…………ふあ」

「おはよう、フェイト。寝起きで頭がさっぱり回らないことは理解しているが、是非とも朝食を作るために解放してほしい」

「…………おはよう、ユウ…………」

「ああ、おはよう。だから放してくれ」

「…………ヤア…抱き心地があ…」

「オイ、寝るなよ。フェイトさん？フェイト？マジで？流石に腕が痺れてきたんだけど？」

「……………」

―目標、沈黙

―いま、気のせいかチビだから抱き心地がいいみたいな事を言われた気がするんだ

―長年一緒にいるけど、何気無く虐められてる気がするんだ

―身長高いしな

カッツ。俺だつて低い訳じゃない。ギリギリ平均越えてないだけだし。

―見栄乙

―鯖読むなつて

―四捨五入したら平均以下だろ

―チビ乙

カットカットカットカット。



「ごめんね?」

「……」

そろそろ二桁に到達しようとしている謝罪がスルーされた。

無表情で調理しているユウは一切こつちを向かない。

普段は私より大人な態度とか考えなのに、こういう所は子供っぽい。

「いまガキっぽいとか思っただろ。悪かったな身長低くて。俺だって身長は高い方がいいよ。ああそうさ高い方がいい。なんで二十歳を過ぎた男が高い棚が届かなくて台を使わにやあなんのだ、しかも嫁の方が背が高いだなんて……あらこんな所に包丁が」

「死んじやダメだよ!」

「玉ねぎ切るだけだし……身長の事で悩んでなんかないし」

無表情からシヨンボリに変わったユウ。

平均的な容姿で、意識はしてないのだろうけど、一々行動が可愛らしい。普段とのギャップがすごい。

「……で、さつきからずつと見てるだけなんだけど、何か言ったら?」

「ユウ可愛いよユウ」

「そういうのは女の子に言おうな。二十歳過ぎた男に言うことじゃないぞ?」

「でもユウは可愛いよ?」

「……あー、これだから天然は」

「天然じゃないよ!」

「ならわざとなのか。悪女め」

「……………うん、ユウが手に入るなら悪女でも天然でもいいかな」
「プレシアはどういう教育したんだ……………まったく」

シヨンボリした顔が呆れた顔になっている。少しばかり顔が赤くなっているのは照れてるのだろうか。

ユウがこういうのに弱い事は知っている。

ユウ自身も弱い事を知ってるから、こういう言葉を信じさせるまでに本当に時間が掛かった。

ユウは極端だ。

甘い言葉が弱いと知れば、自身に向けられる甘い言葉を全て否定してしまう。

そのくせ、自分が大切と思った存在にはとことん甘い。

自分を犠牲にして全く知らない場所に転位したり。

拐われた私を助けにきたり。

睡眠時間を削り、全てに気付かれずはやての為に動いたり。

……………。

「ねえユウ」

「ん？」

「もし私が出治の病に犯されたら」

途端に私が着ていたYシャツが蠢く。

ピツタリと体に張り付き、まるで脈動する様に……………。

「ユウ！なんなの!？」

「……………なんだ、健康体じゃないか」

「いや、そうだけどき！シャツが!?!もしかしてアンヘルなの!?!アンヘルで作ったの!?!」

「……………さて味噌汁でも作るか」

「聞いてよ！ねえ！」

「害意はないよ。あくまでも触覚と味覚だけ俺とリンクしてるだけだ」

「そっか、なら……………良くない！良いところなんてなかった！」

「せっかく靴下まで履かせてやったのになんて言われようだ」

「靴下!?!これまで!?!」

「そっちは味覚だけをだな…、おーけー、涙目も麗しき我が姫よ。怒りを収めるついでにランサーも納めてくれ」

両手を上げて降参したようにヘラリと笑う。しかしながら、彼は今の時点でも私の…えっと。

「着替えてくるー!」

「そろそろ飯できるから早くなー」

「まるで実行犯とは思えない!」



「で、俺は今日の予定を詳しく聞いてない訳だが?」

「あれ? 昨日言わなかったっけ?」

「昨日お前の口から聞いた言葉は、おはよう、いつてきます、ただいま、お弁当美味しかったよ、内容は言えないような職場の愚痴、愛してる、あとはアアとかイイとかイクとか単なる音ぐらいだな」

「……………」

さっきの仕返しだ。

—ああ真っ赤になってるフェイトさんペロペロ

—靴下は言わなくてよかったんじゃね?

カット。言っでなかつたショートも替えられたんだから、関係ないさ。

「今日はルーテシアの所で訓練なんだ」

「……ああそんな時期なのか」

「そんな時期なんです。エリオもキャロも向こうで合流するらしいから、私達はなのは達と一緒に移動かな」

「なるほど……私達?」

「私と君」

「You and me?」

「YES」

「タマネギ先生……はいいか」

「情熱的な愛でもいいかが？」

「既に貰ってるさ」

「もつと、ほしくない？」

その言葉が至極色っぽい。艶っぽい。いつそ何もかも捨てて彼女に堕ちたくなる程に。

—エロエロだなあ

—発情期なんじゃね？

—小悪魔…というか、蛇みたいだ

「……お前さんは途端に俺を墮落させようとするね」

「……いけない？」

「フェイトが誘ったなら、赤い果実を食べるよ」

「？林檎なら向こうで食べれるよ？」

「……天然め」

「え？」

さてさて落ち着いたことだしサクサク移動しよう。

—どうせ彼女に堕ちきってるから堕ちれないさ

—依存してるなあ

—自覚してても離れられないからもう遅いさ

—溺れている

カット。

フェイトで溺死出来るのなら、それはそれで幸せさ。

「よう、過信王。今日は休みか」

「よう、化け物。毎日休みのお前が羨ましい」

「フリーランスも辛いぞ？」

「古狸どもと腹の探り合いとか、ストレスがマツハ」

「腹を探り合うとか、なかなか高度なプレイだことで」

「チゲエよ。馬鹿」

「煩いよ。クズ」

「俺じゃない。俺は悪くない！先生が、先生がやれって！」

「こんなのが俺と同じ存在だなんて！クズが！」

「一人で車のキーをチャリチャリと遊びながら空港へ向かう。」

「……アンヘルの調子は？」

「上々。なんなら殺してやろうか？」

「勘弁しろ。俺はまだ死ねないんだ」

「お前がその内不老不死を願いそうで怖い」

「子供の頃なら願ってたかもなあ……今は流石に」

「俺は世界を照らす英雄なんだぜワライ」

「ちよつと死んでくるわ」

「落ち着け、楽しい会話を楽しもうぜ」

「離せ！」

「もうやめて！スメラギのライフはもうゼロよ！」

「相棒オオオオオ！」

「やっぱり早い内に性格直してよかった。」

「あの性格のままここまで来てたら凄いやけどな」

「こいつも凄いやけども凄いやけども」

「……これでも管理局の英雄なんだぜ……！」

「そういえばフェイトから参加者を聴いてないんだけど」

「去年来てた……ってお前も去年は居なかったらしいな」

「むしろ手前様と組織潰しの真っ最中でしたか？」

「悪かった。許せよ」

「悪いとわかるなら、しっかり料金払え」

「フェイトが休みになつてただろ？」

「あれか」

「まあ有休の消化も兼ねて休ませた」

「……あれ？どう考えても管理局は損してないよな？結局フェイトは家で事務仕事してたし」

碧銀と呼べる髪の少女が結構な速さで突撃してきた。ついでに右拳もこちらに迫ってる。

―解析魔法は起動してるんだ

―敵対勢力？

―まあチビツ子連中の仲間だろう

右拳を内に流し、足を掛ける。

そのまま右腕を掴み捻る。

バランスを崩して倒れ込もうとしているので、右腕を背中に回してキメれば完成。

「あー、少女？唐突に攻撃したということは敵対してると思っても？排除して構わんのだな？とりあえずこの右腕は要らんのだろう？」

「クツ……！離せ化け物め！」

「オイオイ、穏やかじゃないねえ。初対面の人間に化け物扱いされたのは初めてだ」

「夕さん！止めてよ！」

「ようヴィヴィオ。おつきくなつたな。オジサンとしてはもう少し成長した方が」

「……………ユウ？」

「オーケー、睨むな。放すし口も閉じてるよ。これでいいだろ」

パツと手を離せば、碧銀から距離を取られた。まあ仕方ないよな。

―幼女には嫌われるなあ

―幼女と言うか、なんというか

「アインハルトも、初対面の人に化け物はダメだよ」

「…………初対面と言うわけでは、ないです」

「ユウ！この娘に何をしたの!？」

「お前は夫を信じると言うことをしないのか？酷く傷つくんだが？」
「いえ、この方とは初対面なんですが…………」

碧銀は俺の左手を見る。

―擬態魔法は掛けてるんだがねえ

―感覚で分かるのか？

―出身が同じとか？

―実は幼女は不老不死でした的な？

「……貴方は辛くありませんか？」

「……」

「私はソレをよく知ってます。ソレに憑かれた人間の事も」「ツライと思った事は沢山あるよ」

「なら」

「でもね、少女。俺はコレと共に在ることを望んだんだ」

「……………なぜ、と聴くのは野暮なのでしょうね」

少女はようやく落ち着く。

―いやはや、怖い怖い

―アンヘルに何かされたのかな

―それも昔々に

「申し遅れました、アインハルト・ストラトスです」

「ご丁寧にも、ユウ・M・テスタロッサです……」

「御影君が珍しく普通だ」

「おい、高町。俺が普通でなかった事があつたか？」

「うん。闇の書の時も普段も」

「それはきつと普通が間違ってるね」

きつとそうに違いはない。

―俺にしては普通だったのだから普通だ

―普通だ

―普通が異常ならそれは知らないさ

カット。

「で、そっちは…あれか、噂のコロナちゃんトリオちゃんか」

「知ってるのか？」

「ヴィヴィオからの写真を見せたがる母親が居るからな」

チラリとフェイトを見ると、ドヤアと既に主張してる胸をさらに主張する。

―段々と母親に似てきたなあ

―まあ可愛いからいいんだけどさ

カッ。ツ。

「俺の事は気軽にユウさんでもミカゲさんでもユウリンでも適当に呼んでくれ」

「わかりました！ユウリン！」

「ごめん、ユウリンは無しの方向で」

「エリキャロ久しぶり」

「あ、ユウさん！久しぶりです！」

「お久しぶりです！」

「エリオは身長伸びたなあ：縮めばいいのに」

「ユウさん!？」

「キャロは可愛くなったなあ。うんうんオジサン嬉しいんだけど君たちの母親が僕を殺すように睨んでるんだ、ヘルプ」

「ユウさんは一度フェイトさんに殺されればいいと思います」

「なんか願われたから、殺していいよ？フェイト」

「軽いよ！ユウは軽すぎるよ!？」

「ユウさんごめんなさい！冗談ですから！」

あれか、フェイトに罪を被せる訳にはいかないもんな。うん。

「ちよつと向こうの林で逝ってきます」

「林に行くことはいいいけど林で逝っちゃダメだよ！」

「じゃあどこで死ねばいいのさ」

「死なないでよ」

「いや、うん。それはそれで難しいかな：不老不死薬でも作ろうか」

「そういう意味じゃないです！」

じゃあどういう意味なんだか。

— アンデッドにでもなれってか？

— フェイト死姦フェチだったの？

「ユウさん」

「どうしたエリオ。俺は自殺方法を考えるので手一杯なんだが」

「ユウさんが死んだらフェイトさんが泣きます」

「……………マジで？」

「マジです」

フェイトを見たら首が千切れんばかりに頷いてる。

「じゃあ死ぬのはやめる」

「軽いな、おい」

「フェイトの涙程度重ければ、十分価値ある命さ」

1日目の訓練なんてなかった。俺はずっと家事してました。

なんか女風呂で色々あったらしいけど、突撃しようとしたらエリオに止められた。

「で、二日目の昼なんだがね」

「じゃあヨロシクね！」

「過信王の妻が至極可愛い」

「頼んだよ！」

「化け物の妻が至極綺麗だ」

「うむ、流石だ」

「さて、じゃあ仕事でもしようか」

「俺達は戦闘訓練未参加だからなあ」

「参加したらコロシアイに発展しそうだ」

「本気でしたら星ごとだもんなあ」

「オジサン、そんな体力もうないよ」

「俺もさ」

では仕事を始めよう。

—広域解析展開

—情報リンク

—リンク対象スメラギ・ライト

「どうだ？」

「大丈夫だ。破損部も解る……俺仕事しなくてよくね？」

「何を言うか、お前だけ休暇など許して堪るか。働け英雄」

「厳しい化け物だ」

「……あれだいつそ更地にしてしまえば」

「成る程、俺が剣射で砕いて」

「俺が食べればあら綺麗」

『ユーウー？／ライトクーン？』

「やつべ、女神が見えた」

「奇遇だな。突然女神が現れて仕事が始まるわー」

「ハハハースメラギ君。仕事で汗を流すのはキモチイイネー」

「ホントダワー、キモチヨスギルワー」

どうやらお互いに自分の女神にはとことん弱いらしい。



『アハハハハ』

『タノシーナー』

画面の先で目を虚ろにして働く二人。

本当にタノシソウダナー。

「お二人とも仲がいいんですね」

「え？ライト君と御影君が？」

「……いいの、かな？」

正直わからない。

色々と在りすぎて、ユウがあそこまでライトを認めてる事にあんなり違和感がなかった。

「あ、僕も気になります」

「六課にミカゲさんが遊びに来たときはもう仲良さげに話してましたよ。」

「うーん、昔は仲が悪い所の話じやなかったしねえ」

「え？今はあんなに仲がいいのに、ですか？」

「うん。ユウはライトが嫌いだったから」

「無視は当たり前前だったし」

画面をチラリと確認すれば

『アハハハハ』

『タノシーナー』

と変わらずに言っている二人。作業は捗っている。

「六課の前だったら」

「やっぱりアレかなあ」

「アレ……の後は私達がライトを近付けさせてないんだけど」

「じゃあ、御影君が復活してからだね」

「そうだろうね。もしくはアレの途中とか？」

「えー……ないでしょ」

「ないよねえ」

なのはと二人でアレを思い出して溜め息。

あの時は全てが早計で若かった。

「スゴく気になるんですけど!」

「うーん、子供には見せれない映像だなあ」

「トラウマ確定……というかユウを真っ直ぐ見れなくなるから止めとい

た方がいいよ」

「俺がなんだって?」

「ユウがライトと殺しんんー」

「餓鬼達の前で何を口走ってるんだ」

口を塞がれた。

「お疲れ二人とも」

「え？画面には二人ともまだ働いてますよ?」

「あ、忘れてた」

ユウがそう言うのと画面に少しノイズが走り、画面には綺麗に修繕さ

れた建物が映った。

「あの！ユウさん」

「どうした、リオちゃん」

「昔はライトさんの事が嫌いだったんですよね？」

「うん。今も好き嫌いで言うなら嫌いだね」

「お前、本人を目の前にズバズバ言い過ぎだろ」

「……俺、ライトの事が好きなんだ」

「ノーサンキュウ。性別変えて出直しても同じ答えさ」

「ンー！ンー！」

「あ、悪い」

「ぷはあ……ユウは私のだから渡さないよ！」

「……」

「やったねミカゲ！家族が」

「おいやめろ。あとフェイトの天然発言もな」

え？私は普通だよ。

天然なんかじゃないよ！

「まあフェイトの天然は置いといてだ。あんまり俺と英雄殿の馴れ初めは聴かない方がいいぞ？」

「どうしてですか？」

「どうしてって……なあ」

「言ってもいいんじゃないか？聞きたいらしいし」

「しかしだな英雄……」

「英雄と化け物が戦って、当たり前のように英雄が勝ってしまった話
や」

「おーけー。英雄は一度しか死なないんだ。幾度と死んだお前が凡人である理由を噛み砕いて教えてやるから」

「生きるべきか、死ぬべきか。お前にも教えてやるよ」

「はいはい、二人ともやる気はないのに喧嘩を売るのは止めよう
ねー」

「フツ命拾いしたな化け物。我が女神が居なければお前など塵も残つてないのだからな」

「ハッ、吠えてろ過信王。テメエの女神が可愛くなければ地面の栄養となつてる事を理解しておけ」

「ユウ…？」

自分でもびっくりするぐらい低い声がでた。ユウはまるで錆び付いたロボットみたいに首を動かす。

「しかしながら、我が女神は美しい。美しすぎて全てが眩むね。月も太陽がなければ輝かないのだから、いやはや。して、どうかしたのかい、我が太陽よ」

「もう！調子がいいんだから！」

あからさまに安心したように溜め息を吐くユウの背中をつつき、照れてしまう。

何か、忘れていたような気もするがたぶん些細な事だ。

「フェイトさん……」

「おっと、そんな目で見てやるなチビツ子ども」

「お前……なんか酷いなあ」

「レアスキルが鬼畜なお前にだけは言われたかねえよ」



「して、過信王よ……」

「なんだ、化け物……」

「なぜ我らが戦線に立っているんだ？是非とも説明していただきたいね」

子供達が俺達に戦い挑む

のらりくらり回避してた

女神に頼まれて今に至る

以上」

「三行サンキュウ。泣きたくなくなる程に完璧だ」

―泣くなよ俺

―あと負けたりしたら子供にアレの説明あるから注意な

―トラウマを知りたがるなあ

―解析魔法展開

―相手は……

「おいおい、エリキャロはまだ解るが、英雄の嫁と数の子とティアとスバルが入ってるのは何でだよ」

「ハンデ」

「あー……アレだろ？えつと……ドーナツなモチモチな鬣の獅子だろ？」

「それはポンデだ」

「じゃああれだ、キーパー以外が手を使う」

「ハンド」

「狩り」

「ハント。諦めろ」

「……そうだ、お前が今から剣射したら」

「それも禁止な。今回はレアスキルなし……というか殺す気か？」

「残念、違うナリ」

「それもまた違う。そしてどちらかと言えばお前は眼鏡なんだから相手の方だ」

もうやだこの英雄。

―こうしたのはある意味自分だ

―あの性格だけはどうかしたかったんだ

カット。

「まあルーテシアとかガリユーとかいないからマシなのか？」

「どうにでもなるさ」

「はあ……なら、英雄殿。口上は任せた」

「え？」

「きゃーっ！ライトさまかっこいいー！」

「フツ、ならばしてやろう！」

―相変わらずノリがいいなあこいつ

—扱いやすいというか……
カッタ。

「敵は管理局の白い悪m」

—魔力充填確認

—魔力吸収結界を展開

—スメラギには……いいか

途端に目の前にいた英雄が桜色の奔流に巻き込まれた。

「ライトオオオオオオオオ！」

『さあ戦いは始まっているのよ……遊んであげるわヒモ男』

「長距離砲撃するなら欠片集めでもしてろよ魔女め」

—ベルカステル卿はお帰りください

—さてさて英雄はつと

「おい、どうせ生きてるんだろ。さっさと起きろ」

「なんだか夢を見ていたみたいだ……そう、桜がずっと咲く島の夢なんだが」

「桜色がお前を飲み込んだ以外は夢だ。さらに夢の内容は敢えて聞か
んが、小鳥は俺の嫁、だ」

—観客乱入

—相変わらずスピードが素晴らしい

金色の魔力圧縮刃を左手で掴み、弾く。

「ユウ……浮気？」

「浮気出来る程器用じゃないさ」

「コイツこの前仕事中和ある管理世界の女の子に声掛けてた」

「ハハハ、あれは向こうが誘ってだな」

「ユウ……」

「何で言ったかなあ……」

「俺だけ妻と戦うとか勘弁」

俺も戦いたくはないよ。

—あれだなのはにコイツの女性遍歴語ろうぜ

—ニコポナデポで色々してるもんな！

『あー、ちよつといいかしら?』

「どうしたルーテシア。家族問題になりそうで結構胃がキリキリしてるんだが」

『そういうのは知らないけど。まだ開始もしてないのよ?』

「あ」

フェイトをようやく説得し、向こうのチームに行かせてから溜め息を吐く。

「過去を語るかの戦いがまさか女性関係の追及になるとは思わなんだ」

「ぐまあ」

「因みに負けたらお前のも色々バラすから」

「……え?」

「まずは受付の」

「勝てばいいんだ!」

「わかつてくれたかね」

「ああもちろん!」

画面から覗くルーテシアが可哀想なモノを見るように、ようやく口を開く。

『えーつと…そつちは作戦とかたてなくても?』

「立てても意味ないさ」

「英雄と化け物なんだからな」

「なあ英雄」

「おう化け物」

「相反する存在が作戦を立てて成功するなら、あの対立した家の二人はきつと上手く駆け落ちも出来たさ」

『……あー、まあいいわ』

「向こうの準備は出来てるんだろ?」

「なら始めようぜ！」

『……それじゃあ、試合開始で』

ルーテシアの溜め息混じりな合図とガリユーによる銅鑼の合図が
鳴り響いた。

「さてさて、一応訓練らしいな……。オニーサンのいいところを見せて
やろうかね」

「陸戦は任せたぞ！」

「おい、向こうは陸戦の方が多いいじゃねえか」

「何？飛べるのか？」

「飛来する触手はトラウマになるから飛ばないだけさ」

チクシヨウ！英雄のバーカ！

「先見部隊はやっぱり数の子と野球しようぜ！か……」

「数の子っていうな！私にはノーヴェって」

「あと私も野球しようぜ！って言いませんからね！」

「おいおい、ナカジマなら是非とも言うべきだろ」

——つまり、ランスターは実は偽名か！

——おい磯野、野球しろよ

——なんか違う

「だーっ！避けるな！」

「無茶言うなよ。抉り殺す気か？」

「フェイトさんから抉る許可は得ましたよ？」

……え？つまり

——君なら抉られても生きてるんだろ？話はそこからしようね？

——妻がS過ぎて涙が出た

——嬉し涙乙

—しかしながらいいい乳だ

—うむ

—アレだろ？おっと手が滑って胸に攻撃がーみたいなの

—許可する。やりたまへ

「ふむ、避けてばかりも飽きたし……少し経験でも積ませてやろう」

左手から手袋を作り、両手に着ける。

—簡易防衛兼セクハラ道具ですが、なにか？

—分離機構も出来るんだぜ？

—つまりだ、諸君

移動術で直線上にいたスバルの前に踏み込む。構えていた左腕を右手で払いのけて、左手で掌打する。

—グツジョブ！

—いやあわざとじゃないんだよー

—お腹だから仕方ないよねー

「クソッ！」

「甘い！」

ノーヴェの蹴りを回避して宙にいる彼女の足を左手で掴み投げる。

—うむ

—スベツスベツだね！

—いやあオジサン嬉しいなあ

「ふむ……まあ俺みたいな奴との戦闘も慣れた方がいいのかな」

「え？」

「つまりスピード重視相手ってこと？」

「それならフェイトの方が速いさ。俺が言いたいののはさ……後を考えない快樂殺人者って意味」

「……………」

「死んでもいいと思ってて、火事場泥棒ならぬ、火事場殺人？証拠も残らないし、自分は死ぬかもしれないってスリルを味わえる」

「……そんな人間いるんですか？」

「いないかもな」

「なんだよ……」

「いるかもしれない……悪魔の証明は出来ないのと一緒にさ。

まああれだ。そんな人物を救済現場で見つけたらどうするよ、つて仮定さ」

「ユウさんは違うでしょ？」

「死んでもいい。つて部分是一緒さ……かつこよく言えば刹那主義とでも呼ぼうか。まあこれでも直ってる方なんだけどな」

「……………」

「さてさて、お前らだけに時間は割けないんだ。先に行かせてもらうぞ管理局ども。

「相對するは快樂殺人機……狙うのは常に急所だから、気をつけな」
苦笑から嗤いへ。そして、俺は地を蹴った。

—誰も胸を狙う為の口上だとは思うまい

—適当に楽しんだらバインドでもしよう

カット。バラすなよ。

「ふむ、まあこの程度だな」

「チクシヨー！なんだよこのバインド！」

「俺が作った物理込みの魔力バインドだ。下手に引きちぎるなよ、そこから再生して俺も解くのが面倒だ」

赤黒い物理バインドに捕らわれた二人に別れを告げて俺は次の町へ。

—ビツピ○チュウ！

—ラ○チュウに進化させてボックスだな

—気がつけば炎タイプで溢れてるパーティ

—燃えるぜ！バーニンングッ！

『エリオはバインドで拘束したぞ』

「……場所を確認した。バインドの上掛けしとくわ」

『了か、うわっ！俺まで巻き込むな！』

「スマン。わざとだ他意はない」

『他意はないのか…つまり、悪意しかねえじゃねえか!』

「……さて、じゃあ俺は妻と戦えないからヨロシクな」

『無視するなよ……仕方ない。俺がフェイトのバリアジャケットを破いてやるぜ!』

「ちよつと待つてる俺も参加する」

—むう、やつぱり飛ぶべきなのか

—飛ぶ感覚は解らんからなあ

—触手が飛行するとか

—アレだろ?爆撃のように触手を落としてだな

「む…」

横から飛び出してきた石の巨人を避けて、足に掌打。

魔力を通して、波長を大きくする。

「よつこらせ」

「ええええ…」

声と同時に魔力を増やしてやれば、大きくなりすぎた魔力で石の巨人が崩れる。

「創造魔法か。中々に可能性があるのを習得しているなコロナちゃん」

「えへへ…でも防がれました」

「一応、今日の戦いは見てたからな。事前情報ありきの行動さ、つと」

「完全に死角だったの!?!」

真後ろからの突撃だなんて、いやはや怖い。

—英雄のところろにフェイト接近

—急がねば!

—フェイトのオツパイは俺が守る!

「創造魔法と操作魔法は自分を考えなければ、非常に強くなるよ」

「え?どういう事ですか?」

「それは自分で考えなさい。思考すればそれだけその時に役に立つぞ」

「私にも何かアドバイスを!」

「ごめんね!純粹なインファイター相手のアドバイスはしない事にし

てるんだ」

「えー…」

「だってさ、戦った方が色々と教われるだろ？」

「…ならお手合わせお願いします！」

—元気がいいこつて

—オジサンにはついていけないよ

—フェイトのオツパイが！フェイトのオツパイが！

カット。

幼女との試合とかなかった。

—だって触手で剣を編んでシグシグを真似ただけなもの

—いやはや、やっぱりシグナムは強いなあ

—オツパイでかいしな！

—そうだオツパイと言えばフェイトなんだけど

カット。フェイトはオツパイだけじゃない。オツパイも魅力的なんだ。

「……あー、ベルカ二人組か」

「よろしくお願いします…！」

「夕さん、ご指導よろしくお願いします！」

「ご丁寧にどうも」

わざわざ成長なんかしちやて…。

—うむ、実にいい

—こういう年頃の女の子は素晴らしいね

—やっぱりアンヘルを展開してもいいんじゃないか？

—いや、よく考えろ俺

—やだ、よく考えない俺

「うむ、実に素晴らしい！」

「え？」

「いや、こつちの話だ……さて、俺は嫁を迎えに行かなきゃならんの

だ。通してもらおうぞ?」

「通しません…!」

「行きます!」

「と、油断させるのが俺っていうね」

「バインド!」

「あー、もう!」

「こういった攻撃にも慣れた方がいい。世界には搦め手ばかりの人間もいるんだから…:ちなみに普通ならあと二十秒ぐらいで収束砲撃が飛んでくるから、十秒ぐらいで抜けるよー」

「あー!まっつてよ!」

ハーツハツハツ、捕まえてご覧なサー!」

—背後から狙撃

—回避不可

—アンヘルにて防御可

—右手にて防御可

右手を魔法弾に当てて弾く。

「英雄、狙撃手を確認。向こうへ」

『了解。キャロ撃破。嫁二人から逃走しながら行くぜ』

「フオローに回る」

溜めていた収束砲撃を成長した二人に撃つ。

—警戒!

—アインハルトに反応!

—あ、ヤバイ

横に距離を取り、自分の放った収束砲撃を避ける。

「うへえ、並みの収束砲撃じゃ無理かあ」

「霸王流は、負けません」

「うーん…:バインドも砕かれちゃったし、逃げたいんだけどなあ」

「真面目に戦つてよ!」

「あー、仕方ないなあ。一応フェイト戦とかも見せてから終わらそう

としたけど」

―スファイア展開

―スファイア展開

―スファイア展開

―スファイア展開

―スファイア展開

「生半可な魔力弾が跳ね返されるなら、数で対処致しましょうか」

「……………うわぁ」

「降参も一つの手だよ、霸王さん」

「それでも、負けるわけにはいきません」

「……………死ななければ、目的は達成できるよ」

「死なない為に、勝つんです」

「……………危険思考だ。一度、完敗を味わって、またいつか挑戦したまえ」

さて、徹底して潰そうか。

―魔力弾展開

―魔力弾展開

―全ての魔力式をバインド弾へと変換

―放て

放て。

「はい合流」

「よう、遅かったな」

「歩いてくればこんなモノだろ？」

どうやら磯野も潰しているらしい。

―大人の対戦ならもういいんじゃないやね？

―ほら女性関係追及されるぐらいだろ？

―というか願いで逆補正掛かってるんだから、戦うのが至極ツライ

—しかも勝つても損がないだけって

「あれか、得する為に条件を追加すればいいのか」

「え？」

「最近、新薬を作ったところなんだよ。勿論人体に害はないし副作用もない……飲んだ人間に猫耳猫尻尾を付ける薬と犬耳犬尻尾（垂れ耳フサフサ尻尾）を付ける薬だ。

これを二人に飲んでもらう」

「聴いてないよ!?!」

「何を当たり前前の事を言ってるんだ高町。今言っただからそうに決まってるだろ」

「なのは、勝てばいいのだよ」

「……大丈夫だよなのは!」

「フェイトちゃん……!」

「犬耳でも猫耳でもなのはは可愛いよ!」

「……」

「え?なんで落ち込んでるの!?!」

「えっと、高町……なんかごめん」

「大丈夫、御影君の所為じゃないって知ってるんだけど……知ってるんだけど!」

高町なのははご立腹なようです。

—猫耳だ!

—犬耳だろ!

—おいおい、態々犬耳が垂れてるのは何故だと思おう?少し考えればわかるだろう?

—猫こそ至高だろ

—猫なんざ常に発情期じゃねえか

—発情期フェイトか

—ウツ……ふう、落ち着きたまへ諸君

—まあ勝つてから考えよう

—犬耳一択

―猫耳一択

「えつと、ギャラリーも待ってるし始めてもいいか？」

「大丈夫だろ」

「……」

「なのは、頑張ろうよ」

「フェイトちゃん…その発言がさつききたら良かったのに」

「え？え？」



「始まりますね！」

「はい…」

古代ベルカの化け物、アンヘル。

私はアレをよく知っている。何が在ったのか、何故在るのか。

「お、ヴィヴィオ達もユウにやられたか」

「アレは相変わらず酷いですよ…」

「かなり加減して撃ってるけどね」

「え？」

自分を覆う半球でも加減？

「どういう事ですか？」

「えつと、確認出来たのはスバルとノーヴェを縛った物理バインドの
継続、リアルタイム更新する広域解析魔法、遠距離からエリオを縛つ
たチェーンバインドに、二人との戦闘……」

「??」

「相変わらず化け物染みてるなあ」

「というか、あの人自分で自他共に認める化け物って公言してなかつ
た？」

スバルさんとティアナさんが呆れたように溜め息を吐く。

「えつと…」

「さつき言ったこと一人でやってるのよ」

「……………は？」

「まあ詳しい事は本人から聞けばいいわ。たぶん普通に普通の事をしたように教えてくれるから。今は観戦しましょう」

『さて、と。では犬耳か猫耳か先にどちらかを落とす方が先に決める方向で』

『了解。なのはに猫耳を付けるのは……俺だ！』

『嬉しいのか嬉しくないか分からないよ!?!』

こんな人が？

朱色のスファイアが展開される。

単発だったので当たり前のようにフェイトさんに回避される。

回避したそこに更に魔力弾が展開されていて、それを避けた先に魔力弾が置いてあり、

『ハッハッハッ！犬耳とは中々乙じやわい！』

『欲望が駄々漏れだよ!?!』

フェイトさんが高速で接近すれば、魔力刃を掴み、バインドが展開される。

『チエック！』

『甘いよ！ユウ！』

『甘いのはどっちだろうな！』

バインドが破られ、ミカゲさんが魔力刃に斬られる。斬られたのだが。

『すでに勝ちが決まったのだよ！フェイト！』

『幻影!?二重バインド!?!』

そして展開されたスファイア。

全てがフェイトさんを包むように球体を描いている。

「あ、」

「え？」

途端に聞こえたスバルさんの漏れた声。別の画面になるソレを見れば

『な、くそー！バインドか！』

『ちようど御影君と一直線だからね……スターライト……』

『御影、悪い……誘われたんだ』

『気にするなよ……全身で止めれば俺まで届かん』

『え？』

『ブレイカアアアアアアア!!』

画面が桜色に染まった……。

なんというか……

「うわあ」

「これは酷い」

「相変わらずライトさんは最後が甘いというか」

「まあそこがいいんでしょ」

「なのはさんに怒られるわよ？」

『フェイトだけでも!』

『ユウ！助けて!』

『チクシヨウ！俺の馬鹿！ニ、ヤアアアアア、アア、アアア』

今しがたミカゲさんも桜色に巻き込まれた。というか、突っ込んでいった。

「ユウさんはフェイトさんに甘いから」

「甘いというか、完全に騎士というか……」

乾いた笑いが空間を占領した。



「負けた……猫耳が……」

「犬耳エ……」

「そんなに好きなら、飲もうか？」

「フェイトさんマジ天使！」

「フェイトちゃん、御影君が飲めば自分が犬耳でフサフサで最高だと思おうよ」

「オットテガスベッター」

「うお、んぐ……あ」

ユウが自分の魔力色に発光して、光が止んでいたのは、犬耳を生やしたユウちゃんだった。

「……………あれ？フェイトがまた高くなってる……声が高い……………」

あれだ！身長がまた伸びるよ！やったねユウ君！つてうおい！ちっさくなんてるんですけど!?!身長は!?!」

「ささ、ライト君も」

「飲まねえよ？」

「えー……じゃあ女性関係を」

「イツキ飲みさせていただきまーす！」

あーもう、ユウ可愛いよユウ。

ヴィヴィオと同じ身長ぐらいだし……私達があつた頃かな？

垂れた黒い犬耳にボサボサ頭。お尻にはフサフサの尻尾がついている訳で。

「ユウ。是非、この薬を定期的に飲まない？週三ぐらいの割合で」

「随分気に入ったな、オイ。ヤダよ」

「えー……じゃあ女性関係を」

「俺はフェイト以外愛したつもりはない」

うん。子供でもユウはユウだった。

とりあえず抱き締めよう。

意外に軽いなあ。膝に置いて抱き締めるとこう安心する。

なのはを見れば顔が弛みきつてるなのはと猫耳が生えた昔のライトがなのはの膝の上にいた。

「なあ御影」

「なんだスメラギ」

「猫耳生やすだけじゃなかったのか？」

「男女で効果が違うのは確認してなかった。たぶん男性の魔力質に反応して、薬が対応しやすい姿まで戻したり、進めたりするんだろ。」

禁則事項だが：二十歳過ぎの男二人に猫耳犬耳つけるならシヨタに付けてフェイトさんに甘えられたい、と電波がだな

「メメター！」

何か言ってるようだけど、ユウ可愛いよユウ。

クンカクンカしてもほんのり甘い汗の匂いしかしないよ。尻尾がパタパタ動いてるのもいいね。ヤバい、これはヤバい。

ふへへへ…。

「ユウ。週一でもいいから」

「ダメだって言ったよな？言った筈だよな？」

「で、二人の馴れ初めは聞いていいんですか？」

「あー、まあ約束だしな」

「ちよつとした…とは言えないんだけど、二人でかなり激しい試合をしたんだ」

犬耳ユウと猫耳ライトが試合…。

ああダメだ内容は知ってる筈なのに萌える。

泣いたら私を頼っていいんだよ？お姉さんが優しく慰めてあげるよ？

ふへへえ…

「なあ、誰か俺をこの変態から解放してくれ。身体まさぐられてるん

「だけど？・ねえ！誰か助けてよ！」

「ダメだよユウ。ユウは私のモノなんだから、ね？」

「耳元で囁かないでくださいー、甘噛しないでくださいー、マジで誰か助けてー！」

「フェイトさんが幸せそうで何よりです」

「なのはさんが幸せそうで何よりです」

「もうヤダこの空間！」

「ねえ、ユウ……その、月一で我慢するから」

「カット！」

Informal Farce.

目が覚めたのは、早朝。

チラリと時計を見ればまだ起きなくてもいい時間で、すこしだけ安堵する。

しっかりと背中に回された腕を感じながら視線を下にずらす。

そこには愛しい人が俺の胸で寝ている。

寝顔を見られたくないだとかで、胸に顔を押し付けることが癖付いたらしい。

俺がそんな事したら怒るくせに、自分に甘いやつめ。

「いや、俺が甘いのか」

少しだけ笑って、ようやく何かがオカシイ事に気づく。

―何がオカシイ？

必死に否定する頭を無理やり否定して、オカシナ点を上げていく。

―はやてが俺のオツパイを枕にしていること？

―俺の声が僅かに高くなってること？

―俺の肌が褐色になってること？

カット。全部だ。

解析してもおかしな所さえない。まるで最初からそうだった様に、俺が女であることを示してくる。

こんな事で起こすのは忍びないが、これは異常事態である。

「はやて、起きてくれ」

「うへへー、にくまんー」

「おい、タヌキ。起きてることはわかったからさっさと起きろ」

「もう、ええ夢見てたのに…」

「安心しろ。俺は今が夢であって欲しい」

「……」

はやては今しがた使っていた枕を凝視して、固まる。

そして、震える手で枕をさわ、いや揉んでいく。

「ほお、なるほど、これは、ふむ」

「ん、…いや、あの、はッはやてさ、ん？」

「ん？ああ大丈夫気にせんといて」

「気にする、なつて：ア、ちよ、本当にやめて」

「良いではないかー良いではないかー」

「ちよ、下に手をまわ、おい、ア、だからダメだつて!!」

「これがええんやろ！これが！ええんやろ!!」

俺の中で何かが切れる音がした。

ーしよ、しよj

「カット！」

「え？」

布団から脱出して、右手でシーツを手繰り寄せ体に巻く。

自分で胸を押し付けてるから、こう：やりきれない感が。

「なんや、アレーつてのを楽しみたいんか？」

「じ、実家に帰らせていただきます!!」

こんな意味のわからないことを言つて部屋から逃げていった俺は

罪はないと思う。



「で、シグナムの所に行つてきたんか」

「ああ：マジでどうなつてんだか：」

ようやく落ち着いたらしい赤髪で褐色の女性は溜め息を吐いた。

寝ぼけたシグナムから斬られかけるといふ事故を起こして彼女は

ようやく落ち着いたらしい。

「身に覚えは？」

「ない。少なからず俺を女にして得をするような人間はいない。殺さ

れても文句を言える立場じゃないがね」

「つまり、愉快犯やろなあ」

「だろいな」

「あ、ブラジャーつけたるか？」

「いや、べ、別にいいです」

「まあそう言わんと」

「…エッチなこと、しない？」

「…今のでわからんようになった」

「よし、お前ちよつと正座しとけ」

トラウマになつていのか、少し涙目でそんなコトを言われたら我慢できるモノもできなくなる。

おとなしくベッドの上で正座してブラジャーをつけるために上半身を倒す女性を見る。

重力に釣られて下に向くオツパイ。シグナムよりも小ぶりで、しかし私よりも大きい。

寝起きでもしつかりわかる吸い付くような肌とか、いい匂いとか、もうあれだ

「安眠枕！」

「おい、何を言っている」

「いや、気にせんというて」

「？」

だから小首を傾げるその動作をやめて。

ともあれ片手で器用にブラジャーをして、少し疲れたように息を吐く彼女。

凝視していた事に気づかれたのか彼女がこつちを睨む。

「…えっち」

「うん、夕君つてき。どこかその姿になつて遊んでるフシがあるよね？別に気にせえへんどころかバツチ来いやねんけどさ」

「なんだ、俺の性格は知ってるだろ。自分を使った楽しみは存分に、だ」

「そうやったね」

ショーツとブラジャーだけした褐色の女性が腰に手を当て溜め息を吐く。

その片方の腕、左腕の姿はない。

私、いや私達の罪の形がそこにあるのだけど、夕君はそんな事を全く気にしていない。

「服はどうするか」

「タンスの奥に確かメイド服があつてやな」

「冥土にお送りいたしましょうか、ご主人様？」

「メイドに送られるなら、ちよつと考える」

「落ち着け、ご主人。俺が騎士連中に殺されちまう」

「じゃあ、一緒に落ちよか」

「落ちたあとは蜘蛛の糸でも探すか」

「いや、コキュートスを越えたその先を目指そか」

「なんなら山頂まで目指すべきか」

淡々と喋りながらも夕君の裸はシャツによって隠されていく。非常に残念だ。

しかしながら、男だったころよりも身長や肩幅が小さくなったのか、すこし大きめのYシャツで股下10cm程度隠れていて、それはもう本当にありがとうございます。

「目が怖いぞはやて」

「気にせんといて、うーん、もうちよつと、いやしかしコレはこれだけにエロスが」

「どうして神様の名前が出てきた」

溜め息を吐いて、男物のスーツを着用する。

少しだけ余裕のあるスーツパンツにカッターシャツ。赤髪が背中まで垂らした褐色の女性は本当にかっこよかった。

いや、これは女にしたかいがあつたというものだ。うん。

「で、はやて」

「んー？」

「気づいてると思つて言わなかったが、思考が半分程声に出てるぞ」

「……あー、うん。かっこいいよ夕君」

「そいつはどうも、愉快犯さん」

ニツコリと笑顔の彼女の後ろに修羅だとか鬼だとか、とにかく良くないものが見えた。

私に靈感のようなモノはないのに、なるほど、これは怖い。



「おい、アリシア」

「……誰？」

「お前の薬でこんな姿になった犠牲者だよ」

「あー、婦女暴行を働いて私の薬の実験台になって今は娼館で働いてる」

「そんなコトしてたのか」

「嘘に決まってるじゃない。人体実験をするにしても、色々面倒なのは知ってるでしょ？」

「知ってるが、いや、まあいい」

「で、どうしたの？ユウちゃん」

少しコーヒーをこぼしたららしい白衣を翻し、薬の製作者だろう人物は口を開いた。

「この薬はなんだよ。解析してもエラー吐き出すし」

「うん、実験は成功だね」

「おい、人体実験の色々はどうした」

「しつかりと許可とってるわよ、失礼ね」

見せられた許可書には管理局のお偉い様の名前が書かれていた。

—妻子持ちめ

—次会ったらエイミーにあることないこと吹き込んだくか

「で、薬の効果は？」

「外部の魔法出力の断絶が主な効力だね」

「解析魔法が自分にしかかけれないのはソレか」

「私としては魔法を内部展開出来るユウちゃんがおかしいと思う」

「思考できれば簡単だろう」

「……まあいいや。ユウちゃんがおかしいのはいつものだし」

どこか呆れたように椅子に座って、近くにあるディスプレイを俺に見せてくる。

—薬の効力か

―目的は犯罪者の魔法阻止か

―捕縛したあとの薬だな

しかしながら、それなら女体化とかいらなくないか？

「というか、女体化の効力が、ない」

「あたりまえじゃない。コレは製品用だよ？」

「……あれ？俺に飲ませたのは？」

「これにユウちゃんの魔力波長に合わせて効力が出るようにしました」

「ワースゴーイ」

「ちよ、ギブ！ギブ！絞まってる！あ、でもオツパイが当たってちよつと気持ちいい」

「よし、そのまま昇天させてやろう」

「焦点が合わなくなってきた」

適度なところで離し、溜め息を吐く。

―どうして周りに変態しかいないのだろう

―類は友を呼ぶと言ってたな

カット。それだと俺が変態みたいじゃないか。

「ハルバード、彼の解析をお願い」

『m o f o ?』

「あー、違う、彼女よ」

『y e p d i v a』

「随分失礼なデバイスだことで」

「あら、作ったのはユウちゃんでしょ？」

「ソウデゴザイマシタ、女王様」

遊び心だけで作成された研究用のデバイスが俺を解析していく。

―まったく、遊び心も程ほどに

―もう遅いけどな

―遅すぎてハエが止まりそうだ

―青いハリネズミはお帰りください

カット。

「あー…解析の速度って上がらないのか？」

「これでもかなり早いんだけど…まあユウちゃん相手だし、薬の効果もあるし」

「Hurry the f*ck up…」

『Shut the f*ck up』

「ここで汚い言葉を吐かないでもらえるかな、カスども。掃除するわよ。」

「まずその珈琲付きの白衣から掃除しとけ」

「save it perv」

両手をあげて降参を示しとく。

笑いながら言葉を吐き捨てるアリシアが怖い。

—まったく、どんな教育してんだか

—ある意味、親に似たのか

カット。それ以上は雷のオシオキが降ってくる。



「という感じで、俺に異常はなかった」

「ん。ならよかったわ」

「まるで実行犯の態度じゃないな」

「アリシアちゃん所に行かせるまでが計画やからかなあ」

「記録を取られたのはそれが原因か」

どうせ分かっていたのだろうが、どうやら嵌ってくれたらしい。

肩をわざとらしく竦めているのがその証拠だ。

「おはよおございますう」

「ツヴァイ、眠いなら寝てても大丈夫ですよ」

「お仕事がんばりますう」

「おはようさん、アインス、ツヴァイ」

「なんだ、二人とも遅い出勤だな」

「…主、この方は？」

「ひどいな、夜天の」

「ああ、ユウか」

「ユ一君は女の人だったんですか!？」

「いや、男なんだが、あー説明が面倒だ」

小さなツヴアイを手に乗せて少しだけ微笑む彼女を見ながら、書類を整理していく。

残念な事に、私は仕事 중이다。もちろん彼女も勤務中なのだけど…。

「なあ、夕君。手伝ってくれへん?」

「自分で仕事も出来ない人と結婚した覚えはないわよ?」

「ぶー。いけず」

「なんとでも」

と、言いつつも仕事の何割か片付けてくれている我が旦那…いや、今は嫁。さすがツンデレ。

「祝福コンビも来たし、俺は教導の方に回るぞ」

「はいよー。こっちも終わったら覗きに行くから」

「まあ今の俺だと、アッチの仕事は出来ないから助言だけの参加になるけどな」

「そんなコト言うて。アリシアちゃんから色々借りてきてるんやろ?」

「護身用に、な」

ニヤリと笑った彼女を見送って、私はまた書類とにらめっこをする。

さっさと終わらせれば、きっと彼女が褒めてくれるはずだ。うん、

早く、そして正確に。

「主、サインを間違えてます」

「おうふ」



「お疲れ、皆の衆」

「…………え?」

「なのはさんお知り合いですか？」

「…えつと、すいません。どちら様ですか？」

「あー、なのは。コイツは…セネターだ」

「セネ、つて御かふぐ」

「ヤー。お黙りお嬢ちゃん。私の名前を間違えないで、わかった？」

頷いたことを確認して、高町の口を解放する。

高町は何度か俺の顔を触って幻影かどうかの確認をして、ムンズと胸を揉む。

「…本物…だと…」

「おい、ふざけんな」

「あ、ごめん。しないといけない気がして…」

「おっぱい魔人二号め」

「ライダーみたいに言うんじゃねえよ、ロリータ」

「えつと…セネターさん？」

「ヤー。どうかしたかいお嬢ちゃん。私に聞きたい事があるならベツドの上で聞こう。まあ声を出すのは君になるけどね」

「なツ!？」

「ティアナさんどういことですか？」

「子供は気にしなくていいことよ！」

「ティア、顔真っ赤だよ？」

「うっさい！スバルは黙ってなさい」

「これだから処女は困るねえ」

「あんまりそう言うこと言ってるど旦那様とかフェイトちゃんに怒られるよ？」

「じゃあこのくらいにしておこう」

高町と苦笑して、ヴィータからため息が聞こえる。

—まったくこれだから生娘は

—スバルがわからんとは、いかに？

—いかか？かに？

—たこにも

カツト。

「で、何しにきたんだよ」

「見学と助言」

「馬鹿か。今のお前は魔法使えないだろ…」

「内部発生魔法は使えるんだよ。身体強化は出来る…というか見学でなんでそこまで言われなきゃならん」

「お前がただで見学できると思ってることにびっくりだ」

「……え？マジで？」

「まあ私達だけだと思いが偏るからねえ。いい刺激になると思うよ」

「教官。私、武器とかデバイスとか持ってきてません」

「冗談はいいよ。腰に銃差して何を言ってるんだか」

「服で隠れてるのに何故バレたし」

「ホントに隠してたんだ。はやてちゃんの言ってた通りだね」

「……ちなみになんて？」

「テキトーにカマ掛ければ勝手に吐いてくれる。だって」

随分な言い草だ。

——ハマってる人間には反論できないけどな

——いやはや、スツカリハマってる

「ほら、まあこの子達が戦うかどうかとか」

「大丈夫だって。この人に一発でも有効打を入れたら今日は休みでいいよ」

「やります！」

「元気だねえ…はあ」

「ざまあみろ」

「朝起こしたことまだ根に持ってるのか？」

「お前にわかるか？意味不明な女が裸にシーツだけで部屋に突撃してきて泣いてるんだぜ？それにシグナムが警戒しすぎてずっとピリピリしてるんだ。私の胃はキリキリしてるっての」

「なんか、ごめんなさい」

「いや、いい。こういう時、お前が悪くないのは知ってる」

呆れてように、同情したようにお互い溜め息を吐く。

腰から銃を引き抜いて、動作の確認をする。

―弾は魔力

―おい、アンタはなくていいのか

―安心しろ。無限バンダナだ

カット。

「さすが、アリシア。いい趣味してる」

「えっと、御影君？銃を持ってうっとりしていると危ない人みたいだよ？」

「銃を持つてる人に危なくない人なんているのか？初耳だ」

「私は危なくありません！」

「……あ、そう……ふーん」

「なんですか!!何か!」

「いえいえ、何もありませんよお嬢さん。ではルール説明」

「このバカに一発でも当てれば今日の教導訓練はオフ。事務仕事もこのバカがやってくれる。以上」

「よろしくね、御影君」

「え、なんなの？お前らの分まで俺がやるの？」

「うん、当たり前じゃない」

「何言ってるんだよ」

「……まあ全部スメラギにでも振るか」

「やめてよ!?!」

銃をクルクルと回しながらなるべくテクテク歩く。

―空間解析不可

―銃の弾は無限だが、リロードがなあ

―ふむ、視認と強化だけでどこまでいけるのか

―戦闘要員ではないっての



「あー、やっぱ始まってるなあ」

「まあユウですから」

隣にいるアインスの声に思わず苦笑して、前にいるのはちやんに

手を上げて挨拶をしとく。

「お疲れ様、はやてちゃん」

「んーお疲れ様。どない？」

「今のところ動きはないね。慎重だからね御影君」

「普段は常に安全確認出来るもんなあ」

「でも驚いたよ。ホントに女の人になってるんだもん」

「フッフ、すごいやろ？」

画面を見ながらニヤける。

片腕の女性は欠伸をして、器用にシリンダーの中に弾を詰めていく。

「どうしてこんなことしたの？」

「んー…夕君って私達が危険な目にあつてたらどこからか情報を集めて自分で危険処理するやん」

「うん。私にはライト君が居るけど…」

「特に私の場合は事件に直面せずに勝手に終わってる事があるんよ。

で、アンヘルを切り落としてから、特に変わったことがないんやけど」

「それならよくない？」

「んー、なんか嫌な予感がしてなあ。夕君の魔法が急に使われへんようになるとか」

「…あのAMFの中で魔法を使う人間が？」

確かにそうなのだけど、アレは私たちのように高圧縮した魔力や打ち込むわけではなく、散布していた魔力を蒐集して暴発させているだけらしい。もしくは自身の中で構築式を立てて放出しているそうさ。

「うん…まあ外れたらいい勘やねんけど」

「変に厄介事に巻き込まれるからねー」

「今も知らず知らずに囲まれてるしなー」

「両チームわかってないってどういうことなんだろうねー」

アハハハハ、ウッフッフ。

乾いた笑いが空間に満たされて、なぜか夕君がビクツとして周りを確認していた。

「お、ついに夕君が動いたね」

「まあ拳銃一丁だけだからね。迎え撃つにしても危険だし。複数人相手だとね」

「そんな夕君は見えやすい位置で乱射してるけどね」

「……」

なのはちゃんの目が怖い。

何が怖いかというと、本当に怖いとしか思えない。夕君ごめん。たぶん説教コースは免れへんわ。



「ふむ」

6 発打ち切った後に銃身を折り空になった薬莢が飛び出し、新しい薬莢を地面に撒く。

—右手一本ではリロードも心もとないな

—まったくだ

—……今なら夢のおっぱいリロードが!!

—ちくしょう!なんてこった!

—パンナコッタ!

カットカットカット。

「お、最初はエリオか」

「お願いします!!」

「つと、あぶね」

突撃してくるエリオを横に回避して、空を見上げる。

—魔法弾確認

—おー怖い怖い

—脳処理強化

—反応速度上昇

全てがゆっくりに感じる。

その中で俺だけがスムーズに動く。もちろん速く動くことは不可能だが、今はこれでいい。

―魔力弾、数3

―エリオの切り返し接近

―角度計算

―計算完了

地面にある8つの薬莢を蹴り、壁に当てる。

クルクルと回転する薬莢が壁に反射してこちらに戻ってくる。宙に浮く薬莢のタイミングを合わせ6つ程シリンダーにすべり込ませる。

―二つは上に弾けたな

―弾だけにな

―まあいいさ

銃身を戻し、ハンマーを引く。

エリオの槍、ストラダーの先に当たるように狙いを定める。

―発射角計算

―反射角計算

―計算完了

トリガーを引き、反動で銃身が上に跳ね上がる。同時に次の為にハンマーを引く。

―魔力弾3発、射線上に

―狙え

―BANG!

一つ。

―バン

二つ。

―ドン

三つ。

―フリードリツヒ確認

―撃て

「え?」

「ふむ、残念だったな、少年」

槍が跳ね上がり両手が上がってるエリオの腹部に膝を入れて、跳ば

「キャラの強化魔法はいい線いってるよ。バックからの牽制も頭に入れてれば結構頼もしくなる」

「はい」

「スバルは……うん」

「なんなんですか!!」

「いや、ほら、俺と根本的に戦い方違うし。アドバイスできるような事もなくてな」

「そんなあ……」

「まあ詳しくはお前さんらの教官に聞きなさい」

後ろにいた高町を指差し、にっこりと笑う。

冷や汗を垂らす隊員達。

——いやーこれは相当怒ってるね

——おー怖い怖い

「じゃあ、まずは御影君から」

「そうそう、俺から……俺?」

「ウン。チョットムコウデオハナシシヨウカ」

「ヤダー、ハヤテタスケテヨ」

「夕君、浮気はあかんよー」

「ちよ、マジで? マジでこのまま説教ルート? え? これってアレだよな俺の役目じゃなくてユーノとかスメラギとかの役目だよな?」

「レイジング・ハート」

『all right』

「よくねえよ!?! よくなんてないんだからね!!」



「ふむ、随分疲れてるなあ」

「お前も高町の説教喰らうか? 至近距離で溜まる収束砲撃が目焼きついて離れないぞ?」

完全にダウンしてるようで、部屋の机に顎を乗せてゾンビのように
声を出す夕君。

オツパイが机と夕君の間で!!

「その中に入りたい」

「もうお前隠す気ないだろ」

「テヘツ！」

「あーはいはい」

「つれへんなあ」

「釣れてるけどな」

「釣ったのは最初だけやって」

「そうかい」

後ろから夕君の体に押し掛かり、抱きつく。

むう…このままおっぱいを効率良く且気持ちよく揉むためにはど
うすればいいのだろう。

そうだ、腕を回そう。

「はやて」

「んー？」

「俺の心配はいらないよ」

「……そっか」

どうやら全部バレていたらしい。

女の人に変えたのもカモフラージュだったが、彼にとって無意味な
モノだったのか。

「いや、最初はオツパイ揉むのだけが目当てだと思ってた」

「失礼な」

「そうだよな、オツパイを揉むのも目的だもんな」

「そうやで。見くびってもらったら困るわ」

「もう本当になんでこんな人を好きになっただらろ」

「離れる気なくせによう言うわ」

私自身、彼を放す気は無い。

放せる気がしない。

「まあ、離れられないさ」

「ふむ、一応理由を聞いたか」

「俺がこんな姿になろうが、俺だと一発でわかったのははやてだけだからな」

「……いや、犯人やし」

「残念、アリシアもある程度の探りをいれてきた」

「……………ホンマに、夕君って卑怯よね」

「お前に言われたくないよ」

お互いクスクス笑って、私は抱きつく力を強める。

私はこの人から離れられないらしい。

「あの、はやてさん？」

「んー？」

「いい加減オツパイ揉むのやめてください」

「私は健全なバストアップをやな」

「今は女でも明日には男だよ!!」

空白期くユウ編

01 ハートデイスクドライブ

「で、私たちは招待されてるわけなんや」

「まあそうだな」

「私はともかく、夕君は正体がバレたわけやん」

「まあそうだな」

「……帰るか」

「それには大いに賛成だ」

はやての車椅子と一緒にクルリと反転して、一步目を踏み出す。

背中には海鳴市にある喫茶店兼洋菓子店。通称翠屋。

—今ならここがパンデモニウムだと言われても疑わないね

—あの、初めてだから…

—初めてだからなんだよ！優しくしろってか？

—おいおい、ハラオウンにも言われただろ

カット。そういうことじゃない。

「さて、帰って寝よう」

「んー、私の家で料理作ってソレでゆっくり過ごすって手もあるなあ」

「ならそれでいこう。今月は厳しいんだ」

「ナニユウテルンサー、ハヤク翠屋ニハイルデー」

突然カタコトで喋りだすはやて。

—前には誰もいないな

—そうだな

—コイツの危険察知能力があれば今回の事件も引き起こさなかつただろうに

—あつたからこそその事件だ

—そういえば、そうだった。既に起こってしまったんだ。

「裏切ったな…はやて」

「今ならコキュートスにでもぶち込まれるかもね」

「御影君どうして後ろを向いてるの？ 入る店はこつちだよ？」

「あー、月村。上手い言いわ、冗談を探しとくから十秒ほど目を閉じてくれないか?」

「アホやなあ、夕君。そんな事言うてしまったら逃げるんバレるやろ?」

「いいよ」

「ほら、すずかちゃんも…も?」

「じゃあ、閉じるね。…いーち、にー」

「コレはチャンスや!逃げるしかない!」

「まあ少し落ち着け、落ち着くんではやて」

「私は至って冷静や、冷静過ぎて自分が怖いね、おー怖い怖い」

「いいか、実際俺よりも頭の回る人間を想像してみろ」

「なにそれ怖い。比較が人らしくないのに、そんな人間おるわけないやろ」

「おい失礼すぎるだろ。その想像した人間は紫色の髪で今日を閉じてるんだ」

「わお、美少女やんか」

「二人とも、わかってると思うんだけど。塞がってるのは目だけなんだよ?」

どうせ逃がす気なんてないクセに。

— 皮肉ぐらい受け取ってくれ

— 服の端をちよこつと掴まれて逃げる男がいるのだろうか

— 居たとしたらソレは人間じゃないね

— 人間以外に服で着飾る生物もないがね

カット。

ともかく、苦笑してる月村に捕まり、俺達は断頭台に登ることになる。

チリン、と扉を開ければこちらを向く瞳が複数。

— 瞳が奇数なら怖いさ

—まあそれはそれだ

元々高町家だと教えられてここにいるが、なんとも、居心地が悪い。
「あー…本日はお招きいただき感謝感激。残念な事に美辞麗句を述べられる程度に歳を重ねてないのでこの程度で帰、失礼、居座らせていただきます」

「ああ、ゆつくりしていくといい」

「なるべくゆつくりなんてしたくないんですけどね」

「その歳で時間に追われてるのかい？」

「この歳で、ではなく。この時は常に疾走してますので」

「ふむ、なるほど」

体格のいい男性が納得したように、しかしどこか考えるように頷く。

—これが高町の父親か？

—また随分と

—しっかし、どうにかならんかね

—カット、意識するんじゃないよ

はやてを放置して適当に窓際の席に移動する。

はやてに向いた視線じゃなかったのか。

—面倒だな

—よかつたというべきか

—いや、悪かつたんだろ

「えっと、既にクリスマスは二日程前になりましたが。みんな揃ったということでのパーティーを開かせてもらいました」

「主催はオレなんだぜ！」

「ということ、主催はライト君。進行は私、高町なのはがやらせてもらいます」

高町は一息吐いて、バニングスさんとすずかの方に向く。

「詳しいことは後で説明するけど、私達は魔法使いです。今まで、隠しててゴメンなさい」

深々と頭を下げる高町。その隣にいるスメラギ君。

—おいおい、そこはお前も頭を下げるべきだろ

―なに感心したようにしてんだよ

―いや、もういい

カット。そうどうでもいいさ。

「いいわよ。ここ二日で色々考えたけど、まだ頭はグチャグチャなの。どうせアンタの事だから私達を心配されるのが気にかかったんでしょ」

「……うん、ごめんなさい」

「いいって言ってるでしょ？私達とアナタの関係には魔法っていう単語は一切関与してないわ。もちろんこれから先もなのはやフェイト、はやてに対しての印象が変わるわけでもない。問題なんて、どこにもないわ」

「うん、ありがとう、アリサちゃん！」

「泣くんじやないわよ。司会進行が泣くとパーティーが始めれないでしょ？」

「……うん。じゃあ、グラスを持ってください……遅くなりましたが、クリスマスパーティを始めます！乾杯！」

「乾杯!!」

複数の声が重なり、グラスの打ち合う音が聞こえる。

―これは飲み干して地面に叩きつけるべきか

―そんな映画、子供が知るわけないだろ

―はやてなら知ってそうだな

カット。知っててどうするんだ。

「御影君」

「ん？どうした、高町」

「ありがとう」

「……いや、悪い。何に対してか思い出せないんだが」

「えーつと。はやてちゃんの為に色々してくれた事とか」

「それは感謝されることじゃねえよ。俺がしたいようにしただけさ」

「気取るんじやねえよ」

「……はあ」

「なんで溜め息を吐くんだよ！」

いや、鬱陶しいのが来たと思って。

—おいおい、口に出すなよ？

—面倒が増えるな

—なら小手も増やすべきか

カット。ガッツポーズでもするべきかな。

「第一、オレはお前が寝てる間必死で仕事してたんだぜ！」

「それはご苦労様」

「それにオレはスターライトブレイカーを間近でガードしてたんだ！

それでお前よりも働いてるんだ！」

「それはご苦労様」

「ハッ！分かりやっアいいんだよ！」

「それはご苦労様、おっと。ならよかった」

少し睨んで来る高町から視線を外して、窓の外を見ながらグラスを傾ける。

—酒でも飲みたい気分だ

—未成年の身体つてのは厄介だ

—体は子供、煩惱は大人

—そうだ、いつそあれだ脳内麻薬でも分泌すれば

—ドーパミンでも垂れ流すか？

—酩酊にならない程度にな



「御影君、ちよつといいかな」

「んー？月村か」

御影君をもっと知りたくて、もつと私を知って欲しくて。私は親友に背中を押されて御影君に声をかける。

外の見える席に座っている御影君がこっちを向く。

少しだけ、目がトロンとしていて。顔も少し赤い。

「うん。…少し顔が赤いけど、どうかしたの？」

「いんや、気にせんでくれ。少し気が緩んでるだけだ」

こういう雰囲気慣れていないのだろうか、喋り方も随分と違う。違うというか、雰囲気が柔らかい。

いつもが冷たい、というのは可笑しいのだろうか、いつもある壁が今は無い気がする。

「……そっか。左手の包帯、アレが原因だったんだね」

「あー。もしかして真面目な話か」

「…ホントに大丈夫？」

思わず出てしまった言葉に御影君はクスクス笑いながら答えていく。

「大丈夫さ。うん。あー、いや、なれない事はしないほうがイイべきだと今思い知らされてる」

「お水もらってこようか？」

「頼めるのなら、いや、ちよつと待って」

「え？」

咄嗟に手が掴まれる。

もちろん、掴んだ人は御影君で、掴まれた人は私なんだけど。

「もう少しだけ、話相手になってくれ」

「あ、うん」

こういうどこか弱々しい御影君は初めてだ。それも演技もないのだろう。

演技をするときは私のわかる範囲でしてくれるし、つまり、素なのだろう。

御影君の向かいの席に座りながらついでに思考する。

そういえば、学校以外の御影君は守ってくれた時を除くと初めてだ。こんなに気の抜けた御影君を見ていていいのだろうか。心にハードディスクがあるのなら、今を映像化して残しておきたい。残念な事に私の記憶容量をどれだけ使うかわからないが、私は今この時を忘れることはないだろう。

「いいかい、お嬢ちゃん。あんな危険な事に首を突っ込むのも巻き込まれるのも今回が最後にしときなさい」

「御影君？」

「今回は本当に運が良かっただけさね。次、巻き込まれる時は運が悪いかもしれない」

「……」

「いいね？お嬢ちゃん。おじさんとの約束だ」

「それでも、危険に巻き込まれたら、御影君が守ってくれるんでしょ？」

色々と言いたいこともあるけれど、それだけが口から出た。

御影君はまたクスクス笑って、ゆつくりと口を開く。

「お嬢ちゃんがこんなバケモノに守られたいなら、俺はどんな状態でも行くさ」

「うん、知ってる」

「ならいいさ。英雄にでも守られる方がお姫様らしいのにな。酔狂なこつて」

「お姫様には憧れてるけど。バケモノに守られるお姫様が居ても、いいんじゃないかな」

「そういうもんかい」

「そういうモノだよ」

少し何か考える様に目の辺りに手を置き、上を見上げる御影君。

「あー……はあ。ゴメン。やっぱ帰るわ」

「ホントに大丈夫？送ろうか？」

「…送り狼は勘弁してくれ」

「送り狼？」

「知らないならいいさ。付き添いはいらんよ。見送りもな。コツソリ出て行って、鈴に送り出されるさ」

そう言っ御影君は立ち上がり、こつそりと扉を開けて素早く出ていく。

閉じた扉がチリン、と彼を見送った。

02 殺気を隠してモノを言いな、坊や

酔ったのは、いつぶりだろうか。

—この世界での記憶はないよ

—前よりも後であることは確かだ

—バカ野郎どもに飲まされたっけか

カット。思い出したところで俺の体調が戻るわけでない。

自販機で水を購入して、ベンチに座る。

ありきたりな表現だが、空が遠い。雲ひとつ無い空だから余計にソレを感じてしまう。

こんなに綺麗なら、ここまで綺麗なら、俺ぐらいの汚れも存在していいだろう。

「いや、どうだろうか…」

「君、ちよつといいか？」

「……」

首を上から前に戻し声の主を見る。

見た目で判断するなら好青年だ。まるで好青年を絵に描いたような人物だろう。

「確か、高町さんの家で見えた顔だ」

「高町 恭也だ」

「自己紹介どうも、ワタクシ、御影 夕といたしますです」

「……君は、ナニだ？」

「……」

意識をようやく彼に向ける。

—殺す気の相手に意識を向けることの疲れること

—腕に棒を仕込んでる人間だぜ？

—キヤーオマワリサンタスケテー

「で、高町さんのお兄さんが俺に何かようですか？」

「さっきの質問に答えろ」

「さもなくば、その隠した棒で殴りますか、そうですか」

「……」

「その距離で必殺できないでしょう。どれ、もう少し近くに来ても」
「…御神を舐めるな」

「どうせ殴る覚悟もない人間が、吐くんじゃねえよ」

彼の姿が消えて、目の前に木刀だろう影が振り下ろされる。

―回避可能

―どうせ回避可能域での攻撃だ、メンドクさい

ピタリと頭の直上で止められ、高町兄の目を見る。

―ふむ、本気だったか

―はてさて、何か気に障ることもしたかね

「なのはにこれ以上近づくな」

「……は？」

「……返事は？」

「それ以前に、理由を言ってください。まあなんとなく解りますがね」
「君には悪いモノが憑いている。ソレに、なのはにはアイツがいるんだ」

「なら忠告する意味はないでしょ？アレに何かしらの不安でも？」

「アイツは俺に誓ったんだ、なのはを守ると。真っ直ぐした瞳だな」

「そうですかソーデスカ」

ああクツソ面倒だ。

―アンヘルに反応できてるだけならよかったのに

―ああシスコンめ

―シスターコンプレックスめ

―牧師にでもなるべきだな

―撲師にならなれそうだ

―カエデ物語にでもお帰りください

「もういいですか？面倒すぎるんですけど」

「なのはにもう近づかないか？」

「彼女に近づいたことは今まで一度程度ですよ。それも義務的なモノだ。それ以外に彼女に近づく意味がなかったのだから」

「アイツは可愛いぞ」

「あなたの思考が妹依存だということを理解した」

理解したから帰りたい。

―帰って寝たい

―酔ってるからな

―歩行に問題はないけどな

「じゃあ、帰ります」

「……ライトは君みたいに弱くはなかったよ」

「そうですか。貶して戦いに持ち込まないでください、賭けてイイ物もないんですよ」

「……ライトはノってきたけどな」

殺気を隠してからモノをいいな、坊や。



「あれ？夕君は？」

「えっと、体調が悪いんだって」

「……ふーん。ちようどええわ」

隣にいたすずかちゃんの手を掴み、近くの席に座らせる。

向こうの方でバカがバカ騒ぎしてるけど、喧騒としてバックグラウンドとしては優秀だ。

「すずかちゃん」

「なに？」

「夕君の事、好きやろ？」

「っ、けほ……けほ……え、え？」

「うん、ごめん。まさかそこまで驚かれるとは思わなかった」

とりあえず口を隠しているすずかちゃんにお手拭きを渡す。

「いやあ、一緒の人間を見てる人間として牽制とかしとかなアカンかなあとか思ってたんだけど」

「はやてちゃんも……だよな」

「うん。私は夕君の事が好き」

「私も、御影君のことが好き」

お互いに相手の気持ちを知ったところで、何も変わらない。それ

は彼女も知ってることだろう。

「守る、とか言われたらそれは嬉しいやん」

「確かに、シレっとしながら守って、当然の様にしてるもんね」

「姿形じゃなくて、性格よな」

「頭もいいよね」

「シグナム：あー、例え自分にとって危険でも守る為ならどんな事もするんやで?」

「でも、弱った御影君も可愛くてよかったよ」

「ええなあ。実は顔が可愛かったりって知ってた?」

「ホントに?」

「ホンマホンマ。眼鏡外してちゃんとした格好したら、アレは伸びるね」

「王子様みたいだね」

「彼に言うてみ、爆笑するで」

「そうだね」

お互いクスクス笑いながら共通の話題で花を咲かす。

私達は夕君の事が好き。好き、なのだが。

「問題は本人やからなあ」

「私告白したのにスルーだったからね」

「うわあ：私なんて告白紛いされて、名前呼びから苗字呼びに戻ってんぞ?」

「御影君酷いね」

「やろ?」

本人は私達の気持ちに気づいてない。

つまりだ、ココで小競り合いして相手を蹴落とした所で得はない。城を攻める前に野垂れ死にするのはお互い本望では無い。

ならば城を落としてから、話を纏めてしまえばいい。

「ほな、共同戦線ということだ」

「うん。御影君が私達を意識し始めた辺りから競えばいいよ」

「どちらかが夕君に好かれても、もう片方はソレを応援する」

「……寝取りとかは……」

「なしやる。随分な事考えるんやね」

「えへへ」

可愛く笑って話を流そうとしてるが、目が冗談でないことを語っていた。

「まあ夕君が二人とも選んだらソレはそれでええねんけど」

「英雄色を好む、って言うしね」

「英雄みたいな存在じゃないけどなあ」

「それでも、私達にとっての彼なら、それでいいよ」

「そやね」

今はそれでいい。

ここから先、何があっても私と彼女の関係は彼を求め続ける限り変わらないだろう。

「：ほな、サクツとパーティーから抜けてお見舞いでも行こか」

「うん。あ：」

「どないしたん？」

「はやてちゃんは、御影君の家知ってるの？」

「：：：すずかちゃんは？」

「知らないよ：」

「なんや、最初から計画破綻かいな」

「二人ともユウ知らない？」

「体調が悪いらしくて帰ったよ」

「体調が：まだ戻ってないのかな：：：ちよつと見てこようかな」

その言葉に反応した私とすずかちゃんの行動は早かった。

というよりほぼ同時に手を伸ばし、フェイトちゃんの腕を掴んだ。

「フェイトちゃん、夕君の家知ってるん？」

「え、あ、うん。何度も行ってるし：」

「：：：」

「コレは、危ないんやない？」

「ーそういえばフェイトちゃんが転校した時に言ってたような

「ーあれや、二人して争ってて漁夫の利される所やったんか

「ーダークホース現る、だね

「まあ何はともあれ、一番警戒せなあかんやろね

ここまでアイコンタクト。もちろん、正常に通じあつてるかは定かではないが、領いたのは同時なのできつと通じてるだろう。

「私達も行きたいんやけど」

「別に大丈夫だと思うけど…」

「よかった、じゃあ行こうか」

「え、ちよつと待って、なのは！ちよつとユウのお見舞いに行ってくるね！」

「オイ！フエイト待てよ！」

「ごめんねライト！行ってくる！」

「さー、フエイトちゃん行こか」

「あ、ちよつと転げるから、ってなんで車椅子なのにそんなスピード出せるの!?!」

「これが、マジカルや」

「思いつきりフィジカルだよ!!」

なるべくバカに引き止められないように、私達は彼の城を目指す事になる。

チリン、と私達をベルが見送った。

03 ジーザス…天使が悪魔に

「ココが…夕君の…」

「うん。と言っても普通のマンションだけだね」

フェイトちゃんに先導されてやってきたのは本当にごく普通のマンション。

あれだけ特殊な人間がこれほど普通の建物に住んでいるとは、なんとも。

「ユウの部屋は6階の端にあるんだ」

「あー、エレベーターとかは？」

「もちろんあるよ」

本当に見知った道を歩くように案内をするフェイトちゃん。

「はやてちゃん…」

「うん、思ったより状況がまずいかも知らん」

「どうしようか」

「どうしようもないやろ」

「どうしたの？二人とも」

「なんでもないよー」

「？」

本当に、唯一の救いは彼女が天然だという点だけか。それもかなりの。

私がいるので否応なしに、エレベーターという選択肢が選ばれる訳だが、この密閉空間に耐えられるのだろうか。

目の前で扉の開く個室が、まるで死刑判決の決まった裁判所みたいだ。

「よし、行こか」

「うん」

「どうしてエレベーターに乗るだけなのに、そこまで意気込んでるの？」

「そういう気分なんよ」

「そうなの？」

そうなんです。

「そういえば、御影君の部屋に行ったことあるって聞いてたけど」

「ウン、アルフ…えーつと、さっきのオレンジの髪の女の人、覚えてる？」

「覚えてるよ」

「アルフさんと一緒に住んでたの？」

「母さんが…あー、えーつと」

「言いにくいことなら今度でもええよ」

「ごめん。…で、アルフと暮らしてる時はココに住んでたから」

「…ええ？」

「ちよつと待つてな。ということとは夕君とはお隣さんで知り合ったとかそういう劇的且ものすごく惹かれるようなシチュエーションやったとか」

「お隣さんどころか、階数も違うかったよ」

「…それでも御影君と知り合えたんだ」

「私が押しかけちゃったから」

「押しかけた？」

「うん、その時に私が集めてた物をユウが持つててね」

「ほう」

「で、武器を突きつけて『出してください』って」

「…」

「…」

「え？なんでそんな目で見るの？」

「いや、なんやろ、今フェイトちゃんを見る目が物凄ー変わった気がする」

「え？え？」

「ま、まあそれで御影君は？」

「確か、『渡してもいいが、交換条件が三つほど。夕飯を一緒に食べること、敬語じゃなくていい、あとは自己紹介をしよう』みたいな事を

「言われ」

「：私が夕君やったら、さっさと渡してさよならやなあ」

「そうだね。普通はそうするよ」

「ユウはまるつきり逆だったけどね。名も知らない襲撃者二人にご飯を振舞ったり」

「え？話から察するに、自己紹介の前だよね？」

「うん。ユウの炒飯食べた後に自己紹介したから：ユウの炒飯美味しかったなあ…」

「まあ夕君、料理上手いなあ」

「そうなの？」

「何回かウチで作ってもらったけど、動きが効率的というか、慣れてるんよね」

「料理してるところまでは見てないけど、ユウの料理が美味しいのは確かだよ」

「そっか：私だけ食べてないんだ」

「だ、大丈夫だよ！ユウなら頼めば作ってくれるから」

「そうやって！大丈夫やって！」

「まあとにかく、問題のユウが体調不良なんだけどね」

「あー、そやった。夕君の家行けるって思ってなんにも用意してない…」

「翠屋から直接来たもんね：ケーキでも買ってきたら良かった」

「三人で溜め息を吐いてエレベーターから降りる。」

「どうしようもなく、長いエレベーターだったと思う。階を五つ上がるのにあれだけの時間が掛かるものなのか。」

「一番端っこだっけ？」

「うん」

「ちよつとワクワクしてきたんやけど」

「なんにもないよ。寝室が本で埋められてるぐらいかなあ」

本当にこの金髪は知ってて私達を嘲笑ってるのではないか？

いや、落ち着け、落ち着くんだ八神はやて。こんな天使のように笑顔の似合う少女がそんな事をするのだろうか？

答えは、否だ。否だと信じている。

「ここやね」

「チャイム押そうか」

「というか、エアメールが辺りに散らばってるんやけど？」

「本当に申し訳ないです」

「知ってるの？」

「……母さんです」

「……………」

「私を可哀想なモノを見る目で見ないで！」

「いや、苦勞してんねんなあ」

「わ、私達にとって普通の母だよ！優しいし、綺麗だし！確かにちよつとオカシイ所があるかもしれないけど……」

「まあ、落ち着き、落ち着いてチャイムを押すんやフェイトちゃん」

「……うん」

ああ、ちよつと泣いてるフェイトちゃん可愛いわあ。

おっと、少し思考がおかしくなった。

何度チャイムを鳴らしても出てくる気配はない。寝てしまってるのだろうか。

「うーん。寝てるなら迷惑になるかなあ」

「また今度にする？」

「いや、看病をしたっていう心優しい私の心がやなあ」

「本心は？」

「弱ってる夕君が見たい」

「じゃあ、入ろうか」

「え？」

「え？」

ふとフェイトちゃんを見ると、ドアノブに何かを差し込んで回している。

ガチャ、と何かが開く音がして、フェイトちゃんの手がドアノブから離れる。

「え……っと」

「え？」

「なんでフェイトちゃんが鍵を持ってるん？」

「え？ユウから貰ったんだけど」

「タイム」

「？」

やっぱり、この子は私達を嘲笑ってるんじゃないのか？

天使のように見えて、実は小悪魔的な娘なのではないか？

いや、落ち着け。八神はやて。たかが自宅の鍵を渡されていた程度だ。そう、たかがそれだけなのだ。

では、自問自答をしよう。答えは出ている。

彼女は、天使のように笑う彼女がそんな、私達を嘲ることをするのだろうか。答えは、否だ。そう、否なのだ。

「勝手に入っついていいって言われてたから」

「オオ、ジーザス…天使が悪魔に変わってしまった」

「え？」

「ゴメンね、フェイトちゃん。私たちの邪魔になるから…」

「え？え？なんでそんなに光の無い目をしてるの？」

「まあ安心し。夕君には私達から伝えとくから」

「え？なんで？何が？」

「ごめんね。ごめんねフェイトちゃん。でも、フェイトちゃんが悪いんだよ？シカタナイヨネ？」

「おい、生娘共。人の部屋の前で何してやがる」

スーパーにでも寄っていたのか、ビニール袋からネギを飛び出させている夕君が呆れた顔で声をかけるまで私たちはその存在に気づいていなかった。

残念な事に、罪人の刑罰は少しばかり見送りになったことを夕君と

罪人は知るよしもない。

04 俺は魔法使いだ

「まったく、人の見舞いに来て迷惑を掛けるとは…」

「ごめんなさい」

「俺は構わんが、近所迷惑だ。はしやぐな、騒ぐな、身を弁えろ。わかった人間から部屋に入れ」

「はさみ」か！」

「はやて、入ってよし」

「え？そういうことだったの？」

「言葉遊びだよ。とにかく近所迷惑だ。全員部屋に入ってくれ」

肩を竦めて三人娘を部屋に招く。

「ククク、ここが魔窟とは知らずに…」

「いいのかい？ホイホイ着いてきて

「まったく、無用心だな

カット。無用心なのは俺もさ。

「おじやまします」

「邪魔をするなら帰ってくれ」

「あ…見舞いします」

「そういうことじゃねえよ」

「え、帰ったほうがいいの？」

「フェイトちゃん、大丈夫だと思うよ？」

ちよつと落ち込んだ顔になってるフェイトに溜め息を吐いて冷蔵庫の近くに袋を置く。

「フェイトたんぺろぺろ

「フーフ、こんな時の為にここにはサーチャーが張り巡らせてあるのだ!!」

「な、なんだってー!?!」

「360。全てから！来客を観察するためにな!!」

「まあ人が来ないとかでこの前撤去したけどな

「泣いた、全俺が泣いた

残念、撤去したのも俺だ。

「で、体調不良って聞いたけど?」

「いいか悪いか、どちらかと言えば絶不調だ」

「寝てなくていいの?」

「生憎、一人暮らしでね。自分で動かないと栄養も取れないのさ」

「?…学校を休んでたのって家庭事情じゃなかったっけ?」

月村からの言葉に思わずキョトンとしてしまう。

—珍しいな

—ふむ、意識でも変化したのか

—イイ傾向だと思いたいね

「あ、えっと。その」

「いや、いいさ。どうせいつかは言うんだ。残念な事に月末だけだな」

「五日に言うにしても結構近いけどなあ」

「まったくだ」

冷蔵庫の中に食材を入れてお茶を取り出す。

人数分のグラスを持って三人の前に置いて、ようやく一息。

「まあそれほど隠す物でもないし、俺の生い立ちなんてどうでもいいんだけど」

「それでも聞くよ」

「うん」

「私たちが聞きたいんだ」

「ふむ…どこから説明しようか」

自分の生い立ちを思い出して、なるべく話せそうな内容を選んでいく。

—無いよ!

—無いな!

—よかった…いや、悪かったのか



「そうだな、とりあえず。遅くなったが、俺は魔法使いだ」
「うん」

「そんなん知ってるよ」

「月村に言ってるんだ魔法少女共」

「あはは…」

「さてきて、どこから話すべきか。俺に親がない理由なんて在り来たりだからなあ」

「え？」

「親が…いない？」

思わず言葉につまる。御影君を悩んだように顎に手を置いて唸る。

ああ、踏み込んだ事を聞いてしまったかもしれない。

知りたいからといって、迷惑に…彼に嫌われるのは嫌だ。

「、ごめんなさい」

「何がだ？」

「嫌な事思い出させたと思って」

「そんな事を気にするのならまだ雲の行き先でも考える方が有意義だ」

カラカラ笑いながら御影君はお茶を飲み干す。

空っぽになったグラスが机に置かれて、御影君は口を開く。

「俺は親に捨てられてるんだ」

私以外に息を飲む音が聞こえた。二つ程。

「結構小さい時…確か生まれてから、多分五ヶ月程度だったかな。ゴミ捨て場にポイだ。今思うと中々にシャレがきいてる」

「なんでそんな笑って喋ってんねん!!」

「笑い事だからな」

「そんなん…」

「まあ落ち着け、ステイ、はやて」

御影君はいつもの調子で喋る。

顔は少し笑っていて、貼り付けているのか、それとも本当に笑っているのか。

私にはわからない。

「そこからは、まあ生きるために必死で……んー、この辺りは省く。教育に悪いわ」

「…どんな事、いや、なんか想像ついた」

「なら問題なし」

「えっと、いい?」

「どぞー」

フェイトちゃんがおずおずと手を上げて、それに対して御影君が気の抜けた返事をする。

「ユウの夢に出てきた女の人は?」

「女…?」

「緑髪で、眼鏡の」

「あー、アレか…アレはちよつと説明が面倒なんだが、簡単に言えば俺の師匠だな」

「魔法の?」

「イエス。天才と言われた人間だそうだ。本人は自分の事を一つの事しか出来ない無能様と言ってたがね」

そんな師匠を思い出したのか、御影君はクスクスと楽しそうに笑う。

笑い方が柔らかい。さっきの親の話をしてる時よりも。

「大切な人なんだね」

「そう、大切だった。大切なモノだった」

「……」

「まあ紆余曲折、山ナシ、谷ナシ、楽ナシな〔やたら〕な人生を送って今に至る」

過去形、という事は。その魔法の師匠さん、御影君にとって大切な人はもういない。

少しだけ、悲しそうな顔をして、すぐにいつもの調子に戻す御影君。本当は悲しいのだろう。それでも、隠している。私たちが居るから。

まあコレも全部私の考えた事で御影君がどう思ってるかわからないけど。

「ふむ、少し口が軽かったな。ツマらん人生を話してしまった」

「いや…ありがとう」

「感謝なんてするなよ、恥ずかしい」

「ありがとう」

「あー、もう、やめてくれ」

手をパタパタと振ってこれ以上言葉を言わせない。

少し顔が赤い、本当に口が軽かったと自覚したのだろう。可愛い

「さてさて、会話は最初に、本当の最初に戻ろうか」

「【はさみ】の話？」

「いや、ご飯な話だ。今日は一人鍋のつもりだったんだが、食べていくか？」

そんな御影君の質問に否と答える人間は居なかった。

05 速攻魔法！スケープゴート！！

「あ……」

喉が痛い。頭が痛い。

―二日酔いの症状だ

―人間の思い込みの力か

―いやはや、すごいものだ

とにかく、水がほしい。

グラスに水を注いで、一気に飲み干す。

時計を確認すれば、いつもの時間だ。

―日常だな

―ああ、日常だ

―もう一杯水を飲んでから出よう

そうだな。そうしよう。

この朝に走るといふ行為も何年も続けていればそれなりの距離になる。

最初は家の周りだけ。次は少し遠くになり。そして今は瞬間的な移動も含めた鍛錬となっている。

―寒いな

―冬だからな

―ああ、もうすぐ新年か

―ハッピーニューイヤ―

―アンハッピーニューイヤ―

―迎えてしまう

カット。至極、どうでもいい。

「なるほど、ここを走っていたのか」

「……確か、高町さんの」

立っていた人に声をかけられ、止まる。

—あの兄の親か

—ふむ、どうするべきか

「高町 士郎だ」

「御影 夕です」

「ああ。一緒に走ってもいいかい？」

「まあ、構いませんが…」

「ありがとう」

止まっていた足を動かし、いつもより少しだけゆっくりのペースで走る。

—ガキがランニングする速さじゃないんだけどな

—成人男性程度のスピードだから普通だろ

「恭也が悪いことをしたね」

「…いえ」

「あの子はまだ不器用なんだ、許してやってほしい」

「許すも何も、当然の行動でしょう」

「そう言ってくれると助かるよ」

ハツハツハツ、と軽快に笑う男性。

—苦手だな

—態度はマシだが、兄と変わらん

—あの子供に、この親あり

カット。判断は早いさ。

「僕はね、この年になって色んな人を見てきた」

「……」

「もちろん、これでも危ない橋も渡ってるんだよ？」

「…それがどうかしましたか？」

「君の目は、その危ない橋で何度か見かけた」

「……黒目なんて幾人も居るでしょ」

「そうじゃない。どういえば言いか……君にはやろうとしている事がある……違うかい？」

「……気のせいでしょう」

「……やはり、苦手だ。」

やはり、苦手だ。

—人の心に容易く踏み込んでくる

—ああ、面倒だ

「復讐は何も生まないぞ」

「…復讐だなんて、そんな人生は歩んでませんよ」

「そうかい？ 僕には中々の修羅場をくぐり抜けた人間に見えたが」

「それこそ気のせいです。僕は一般的な人生を悠々と歩いている、単なる子供です」

「……ふむ」

男性の走るスピードが上がり、容易く抜かれた。

—身体強化

—痛覚遮断

—おいおい、マジかよ

左足を軸に振り向く。浮いた右足が遠心力を加えて走っていた俺に迫る。

—回避可能

—回避ルート判断

—坊やと違って当てる気かよ

地面に着いた足で後ろに跳んでも避けられない。後ろに退路がないのなら、踏み出せばいい。

左手を迫る右足に添えて、少しだけ前に跳ぶ。

加えられた遠心力が体を加速させ、縮めた腕を伸ばし射程から完全に逃げる。

—眼鏡を掠った

—目測を見誤った

—受身体勢

—眼鏡が飛んでいったな

—メガネが無ければ即死だった

「単なる子供なら、今のはしゃがんでたよ」

「……探りで殺す気か」

「とんでもない。普通の子供だったらしっかりと直前で止めるさ」

「……アンタは、苦手だ」

「嫌われる事をした自覚はあるよ」

「……構うな」

「それは断らせてもらう」

「……」

「さつきも言ったが、僕は色々な人を見てきた」

「たいした人生だ、人間なんざ有色なんだ。色は様々さ」

「復讐は何も生まないぞ」

「……」

「やめておけ。達成して、君はどうする」

「……アンタは、間違ってる」

「そうかい？我ながらいい推理だと思ったんだが」

「俺は復讐と縁遠い人間だ……常に予習しているだけさ」

「……フフ、アハハハハ。なるほど、そうか、そうか。フフ」

こちらに手を伸ばし、膝をついていた俺を起こす。

「悪いことをしたね」

「……いえ」

「ふむ、眼鏡は僕が新しく買っておこう」

「いや、度数とかもあるんで」

「片方は割れていないだろう？これで作ってもらうさ」

「あー……互いに度数が違うんで」

「なら今すぐに知り合いのしている眼科に行こうか」

「もう、いいです。その両方その度数で」

ダメだ、やっぱりこの人は苦手だ。

――全敗だ

――勝ちなんて元からなかったのさ

――つまり負けもないのだ

――勝負ではない不精なのさ

カッタカッタ。

「で、お前は何用だ？ハラオウン」

「朝早くにスマナイ、少しいいかい？」

「ランニングの後だから、まあ構わないが：何故俺の部屋を知っている」

「フェイトから聞いた」

「あいつは歩く電波塔か何かか？」

行く先々で俺の所在を発信しているのではないか？

― 一応管理局お断りなただけだな

― 拒否登録するべきだ

― 残念な事に電波塔が独自で電波発信してやがる

「とにかく入ってくれ。話はシャワーの後でいいか？」

「もちろんだ」

「朝食をとりながらでも？」

「もちろんだ」

「一緒に入るか？」

「も、げふんげふん何を言ってるんだ!!」

「冗談だ。落ち着けよ天才殿」

「タチの悪い冗談だ」

「ネコが良い冗談でも困るさ」

いつでもユーモアを忘れてはならない。

― 朝早くからお盛んですね

― 近所迷惑も考えてくれ

― まあ隣は今空部屋なんだけどな

― エアメールが間違えて投函されてたんだっけか

― そのあと謎の停電やらがあつたそうなの

― おー怖い怖い

カット。ご近所さんは何も悪くないさ。

「で、話つてのは？」

「君に少し聞きたい事があつてな」

「俺に？」

「無限書庫での書類書き換えの件だ」

「……一応全て直した筈だが」

「そこだよ、ミカゲ」

「どこだよ、少年。」

「君の能力に管理局が目をつけた」

「難癖をつけられた方がまだマシだったな」

「ご尤もだ」

「……詳細を聞いておこう」

「不明の民間協力者を探し出そうとする動きがある」

「新年を迎えそうなのに、ご苦労なこつて」

「こちらではそうでも、ミッドでは違うんだよ」

「なるほど。で、その民間協力者の所在を知ってるのは？」

「ボクと母さん……艦長だけだ。今はね」

それは、中々に悪いことをしている。

——いつそ投降するか？

——バカ乙

——投身でもしてろ

カット。

「実際、協力者を隠し通すには少し面倒が生じていてね」

「……：そういうえば、どこぞの考古学者紛いの少年が無限書庫にいたな」

「彼をスケープゴートにする気か」

「司書ということで雇っていればいいだろ。アイツの検索能力も素晴

らしいモノだ」

実際、検索能力だけでいうなら俺より優れている訳だし。

——スクライアは犠牲となったのだ

「将来的に見ればそうだろうが……」

「アレも二つ返事で快諾するさ」

「…もし彼が断つたら？」

「断る理由が見つからない」

「君の能力を彼は知ってるだろう」

「アイツはなかなか頭も回る人間で且俺の管理局嫌いも知ってる。尚且つ、無限書庫司書だなんて適役、逃すわけないさ」

「…まあそうなればいいが」

「そうなることを願うよ」

尤も、そうならなくても、俺が管理局に入ることはないだろう。

—あんなところに誰が入るか

—クソめ

まっただくだ。

「あともう一つ」

「まだあるのかよ」

「気を抜いて聞いてほしい。コレは僕の仮説だ」

「聞こうか」

「上から送られてきたとある民間協力者の改竄データの確認をしていたんだが、おかしなモノを見つけてね」

「それはまた甘そうだ」

「いや、随分と苦い物だったよ」

「……」

「改竄のほとんどは夜天の書に関するモノだったんだが、他にもあつてね。ベルカとミッドの術式混合説について、ロストログアに関して、そして犯罪者リストだ」

「で？」

「このリストが中々の苦さでね。内容は『管理局に害を及ぼす人間』のリストだった。それも改竄されていたんだ。もちろん改竄されていた、という事実だけで、どこが改竄されているかは不明だ」

「それで、お前さんの仮説は？」

「もしかすると民間協力者はこのリストに載っていたかもしれない」

「……」

「……」

「ふむ、なかなか面白い仮説だ」

「だろう？」

「だがね、仮説だ」

「そうだ。これは仮説の域をでない、謂わば僕の考え出した幻だ」

「：俺は少しお前が好きになってきたかもしれん」

「よしてくれ。男色の趣味はない」

「そういうことじゃねえよ」

その仮説は大きく間違えている。

—ミカゲ ユウという存在はリストに載っていない

—以前ですら載っていないかった

—民間協力者が書き換えたのはその部分ではない

—尤も、彼が書き換えたのは管理局への牽制

—ものの見事に素通りだけどな

いやはや、ままならん。

「じゃあ、これで僕は帰るよ」

「ああ、次来るときはクロノ・ハラオウンとして来てくれ。もてなす」

「そうしよう。君と仕事の話をすると肩がこる」

「年か、早いな」

「四年後、君もこうなるのさ」

それは怖い。

—早すぎるよ

—早いな

—男児、三日会わざれば刮目せよ

—老人になつてるのさ

カット。浦島じゃないんだからそれはないさ。

06 要件は、短く、簡潔に、だ

「……」

「おはよう、御影君」

「おはようさん、夕君」

チャイムがうるさくて扉を開くと、はやてとすすかが目の前にいた。

が、残念ながら、非常に残念な事に昨日は遅くまで走り込んでたのだ。朝の高町父の襲撃も含めて、ストレスの解消もあつたのだ。

そして地面に散らばっていたエアメールの内容を読んで、懇切丁寧に苦情の手紙とレポートを書いてようやく眠ったのは空が少し明るくなってからだ。

つまりだ、午前十時に鳴るチャイムの音に俺が何を思うか。

答えは簡単だ。

「あー、えっと、怒つとる？」

「わかるか？ 隠す気はなかったんだが、これほど早くバレるとは思わなかった。 帰れ」

「ちよい待ち!!」

「待った、よし、扉の間にある足をどけるんだ。 鉄と肉のサンドイッチなんざ食えたもんじゃない」

「御影君が閉めなきや大丈夫だよ!!」

「ああ、そうだな、もういい。 面倒だ」

扉を閉めようとしていた腕を離し部屋にフラフラと戻る。

— 眠い

— これはあれだ、寝ながらどうにか出来るさ

— 睡眠学習というなの勉強法があつてだな

— 優秀であるツンデレにでも囁かれるのか？

— ウザったいだけだな

カット。

「で、何用だ。 こっちは寝起きで若干どころか至極イライラしてるんだ」

「あ、だから眼鏡をしてないんだ」

「あー、まあそれはどうでもいい」

「夕君は今日が何日かわかってる？」

「こっちは棒があれば百万円でも取れそうならぐらいイラつきを抑えてるんだ。要件は、短く、簡潔に、だ。わかったらさっさと要件を言うんだ、おーけー?」

「大晦日に何を言うてるんや」

「……ああ、もうそんな日か」

カレンダーを変えないといけない。

—今年も無駄に年を越すな

—蕎麦は…いいか

—いまから準備するのもな

「で、それがどうかしたか？」

「うわあ…」

「ダメだよ、はやてちゃん。ハッキリ言わないとわからないのは知ってるでしょ?」

「そうやった」

「お前から一応言うが、そういうことは目の前に対象がない時に話さない」

「コレは失念しとった。今度からそうするわ」

「その発言もだ」

ニヤリと笑うはやてを見る限りまたやりそうだ。

—すずかタンが怖いお

—この怖いのがイイ!

—おまわりさんコイツです

—コイツもです

カットカットカット。

「今日の夜に初詣に行くことになってね。そのお誘い」

「……それは、昼に誘うとか出来なかったのか?」

「昼だと夕君が居らんような気がしてなあ」

「それは多分間違いだ。恐らく居留守を行使してる」

「そういうのを来る人間の目の前で言うのもどうかと思うで？」

「なら次は言わずにするさ」

「それはそれで…」

夜からか、今から寝るにしても面倒だな。

— 珈琲をいれよう

— カプチーノでも淹れられるようになれば遊び心がだな

— 初詣ということはだ

— 着物か!!

— も、もちろん下は履いて、

カットカット!!

「くあ…」

「あーなんかホンマにごめん」

「今度からメールとかで確認できればいいんだけど」

「残念ながら、携帯電話は持ち合わせてないのさ」

「そっか…じゃ、じゃあ電話番号でも」

「…なんだ、やけに積極的じゃないか。少し前からエラく変わったな」

「え、あ、」

「ソツチの方がいいから戻す必要はない。尤も戻したいなら強制はしないがね」

「その、ありがとう」

「どういたしまして。全く、どうして礼を言われるかね」

口に入る苦い珈琲が眠気を飛ばしてくれる。

— ちよつと顔を赤くしてるすずかタンかわゆす!

「ん、どうした? そんなに見て」

「なんにもないよ…」

「珈琲がそんなに飲みたいのか?」

「…:…:はあ」

「何故溜め息を吐いたし」

「まあええわ。慣れる事にする」

「あはは…」

本当にさっぱりなんだが。

―つまりだ、お前が悪い

―お、オイラは悪くないでゲソ

―嘘だタコ!

―タコの足はタコなのにイカはゲソと言われるっていう

―食べる主体の違いさ

「ホンマにゴメンなさい」

「……」

「何はやてに謝らせてんだよ!!」

「ホンマに、ちよつとアンタは黙つとこか」

「ま、まあ落ち着いてよ。はやてちゃん」

「何、アンタ。誘われたのはいいけどメンバーの確認しなかったの?」

「本当に、寝起きだからと油断した」

「底抜けのバカね」

「底が抜けてれば努力という水も落ちるさ」

「秀才にさええなれなさそうね」

「器は上等なんだけどな」

互いに溜め息を吐いて、チラリとスメラギ君を見る。

「あ?なんだよ」

「いや、いいわ」

「本当に、至極、どうでもいい」

もう一度だけ溜め息を吐いて、空を見上げる。

―やや暗いな

―全く、面倒にならなきやいいが

―そ、それよりすずかタンとフェイトたんが着物でござるよ

―保存だ!保存すべきだ!

―解析班はよ!!

―解析班、やられました!!

―メデイイイイイイイイイイイイイイイイック!!

カット。

「ユウ、どうかな？」

「似合ってる。特に髪を上げてるのがいいな」

「えへへ」

「み、御影君！私はどうかな？」

「……ふむ、どうにかボキヤブラリーを尽くして褒めようと思ったが、言葉が出ないな」

「それは捉え方によったら馬鹿にしてるんだよ？」

「お前は正しく理解出来るだろ？」

「うん！」

寒いから少し赤くなった顔で笑う月村から視線を外す。

さて、世辞らしいことは言い尽くした。

―世辞ではないけどな

―いやあ、紫髪なのに似合ってるなあ

―本当に解析しちやダメなのだろうか

―否！解析すべきだ

―メデイイイイイイイイイイイイック!!

―ヤツは犠牲となったのだ

「で、私服組は俺とアリシア、はやてだけか」

「私は車椅子やしなあ」

「私なんて出る二時間前まで仕事してたんだよ？というか知らされたのがその時点なんだけど？」

「お疲れ、どんまい！」

「殴りたくなつた」

「残念ながらクーリングオフは対応しておりません」

両手を上げて降参を示す。笑顔で拳を握る彼女に勝てるわけがない。

「しかし、フェイトまで着物か」

「えへへ。母さんが送ってくれたんだ」

「……アリシアの分は？」

「あつただけけど、着付けが面倒でやめたわ」
「プレシアさまあ」

「ちなみに母さんがフェイトの動画が欲しいとかで、全部撮ってるわ」
「やっべ、プレシア様チョービジン」

「それで大丈夫だと思ってるのもどうかと思うわよ」

何もしないよりはマシさ。

—どう考えても逆効果です

—本当にありがとうございます

「で、これからのプランは？」

「出店とかもあるから、食べ歩きしながら新年を迎える感じで」

「このあたりはオレとなのはが詳しいからな！案内するぜ！」

「なら頼むわ」

「はあ、まったく…」

保護者の気持ちが変わった気がする。

—頭痛薬がほしい

—優しさ半分で出来てるモノだな

—いっそ薬品十割でできてる方が嬉しいがね



着物姿を褒められてしまった。

しかもだ、差をつけられていると思っていたフェイトちゃんよりも
だ。

「ふふふふ……」

「バニングスさん助けてくれ、月村が怖い」

「自分で蒔いた種よ」

「コホン、」

危ない。危なく御影君に危ない人物扱いされるところだった。

深く呼吸して、思考を切り替える。

「ホント、すずかもアリサもフェイトも着物がよく似合ってるな！」

「私に似合わない物があると思うの？」

「ふむ……なるほど、それはまだ園児服が似合うと自負してるのか」
「ぶ、ぶちのめすわよ!!」

「おっと、やめてくれ」

常にニコニコしているライト君とアリサちゃん、そして御影君が楽しそうに会話をする。

「私も着物着ればなあ」

「これから先、幾らでも着れるさ」

「着たらオレに見せてくれよな!」

「あー、はいはい」

苦笑して迫るライト君をいなすはやてちゃん。

しかし、どうしてだろう。どこかに違和感を感じた。

「どないかしたん? すぐかちやん」

「……ううん。なんでもないよ」

「そっか、ほら皇君、さっさと次の案内せんかい」

「任せろ!」

そう、ちよつとした違和感なんて、きつと気のせいだ。

仲がイイことは、とてもイイ事なんだから。

「そういえば、夕君射的うまかったよね?」

「失礼だな。屋台で出るような遊びはある程度得意だ」

「言つたな、オレに勝てると思ってるのかよ!」

「さてね、お前が魔術師並みの力を持って無ければ楽勝さ」

「SSSなめるんじゃねえよ!」

ライト君は射的の屋台に走って向かい、そんなライト君に苦笑と溜め息を吐く御影君。

「月村」

「え? どうかしたの?」

「いやあ、何かほしいモノとかないか? 射的の景品で悪いがね」

「え、取ってくれるの?」

「言われればね」

射的屋の景品を遠目から見っていく。

大きなぬいぐるみ。小さなお菓子達。そして私の目が止まったの

は、朱色の腕時計。

御影君が守ってくれた時に光っていた、あの色。

そんな私の視線が止まってるのを気付いたのか、御影君は景品を見つめる。

「時計か…ふむ」

「よくメガネがないのに見えるね」

「俺の目は見えてるモノだけじゃないのさ」

「？」

「まあいい。約束は守るよ」

「あ、うん。お願いね」

「イエス、マイロード」

当たり前のように腕時計を取って来た御影君と大量にお菓子の詰め込まれた袋を持ったライト君が注目を浴びた事は数分後の事だった。

07 ありがとう、不運に見舞われろ

「しかしながら人が増えてきたな」

「大晦日だからね」

「逸れないようにしろよ!」

「俺としてはお前が一番の不安だ」

「オレは迷わねえよ!」

そういう事じゃないんだけどな。

—まっただ

—離れない事に意味があるというのに

「はあ…で、ホントにそんな安いモノで良かったのか?」

「ウン!えへへ」

「こっちはこっちで意味がわからん」

「アンタって、女心とか一理解出来なさそうよね」

「理解したところで変わるってのはよく知ってるよ」

「あら、よくわかってるじゃない」

「お褒めに預かり恐悦至極にございます、お嬢様」

さつきからチラチラと敵意もない人間が数人こっちを見張ってる

からなあ。

—さすがお嬢様

—どうでもいいがね

—いっそ攫って今月の食費に…

—おいおい、幼女を攫うんだぞ!?

カット、カット。

「お賽銭か…はやてはどうする?」

「んー、行きたいのは山々やねんけど、この人混みやからなあ」

「ということだ、お前さんたちは行ってきなさいな」

「御影君はどうするの?」

「眼鏡が無くて不安なんだ。少し安全な所にいさせてくれ」

「じゃあ、はやての事は任せたぞ!」

「はいはい。全員行ってこい」

溜め息を吐いて、近くの木製のベンチに座る。

―休めるところはいいなあ

―人が居るからいいが、居なけりや寝てたな

「ゴメンな、夕君」

「ん？」

「お賽銭、行きたかったやろ？」

「さつきも言ったが、眼鏡が無いんだよ」

「そっか…うん、ありがとう」

「なんで礼を言われるんだよ」

「さて、なんでやろね」

ふふふ、と笑うはやてを見て、もう一度だけ溜め息を吐く。

―敵意アリ

―対象はツンデレか

近くにある石を拾って、手で弄ぶ。

―空間解析

―敵との間に障害物の無いルートを選択

―人間の移動感覚演算

―予測完了

―3秒後に直線ルート予測

―2、1

曲げた右肘を伸ばし、真横に石を放つ。

「?どないしたん？」

「肘の調子が悪くてな…どうやら大丈夫らしい」

「ふうん…クロノ君が言うのとったけど、あんまり無理したアカンらしいで」

「ハラオウンが…?？」

あいつの心配症も困ったものだな。

―まったく、油断も隙もない

「そういうえば、お賽銭とかで在り来たりな質問をするけど」

「どういう事を願ったか?とかか」

「そうそう。夕君ならどんな事を願うんやろなあって」

「……フフ、アハハハ」

「ど、どないしたん!？」

「いや、悪い悪い……そっかそっか。神社で願うのか」

「コレはとてもいい冗談だ。」

「気づいてないだろうなあ」

「仕方ない、少し手助けしてやるか」

「何故? 何故手助けをする?」

「友人の友人だからだろ?」

ポケットから小銭を出して、場所の確認をする。

「そうだな……こういう願いをするんだろうな」

「はぐらかしてる?」

「いやいや、はぐらかすならもう少し面白い事を言ってるよ」

小銭を一枚放り投げて、今しがたきつと願っているだろうバカに当てる。

「お人好しめ」

「……これだから……」

カット。これが俺なのだから。

「そういうはやては。何を願うんだ?」

「私? 家族も増えたし……今の幸せを末永くかなあ」

「はやてらしい」

「うっさいわ。私は答えたで、次は夕君や」

「そうだな……神様に願うほどでは無いけど、みんなの幸せや健康は願ってるよ」

「なんやそれ」

「ん? どこがおかしいか?」

「リンから記憶をちよつとだけもらったけど、他人の為に尽くしすぎやない?」

「……迷惑か?」

「いや、嬉しいけど」

「ならいいじゃないか」

「私が言いたいことはそこじゃ無くてやな!!」

「おーい、はやてー!!」

「……はあ……まあええわ」

ふむ、諦めたか。

—お人好しもここまでくると狂ってるな

—既に狂ってる人間に何を言うか

—誰の為でもなく自分の為に狂ったバケモノが何を言うか

「おいおい、何そんなに怒ってんだよ」

「怒ってない！イラついとるだけや!!」

「御影君、何かしたの？」

「さてね、身に覚えがない」

「……ふうん」

「あれ？信じられてない？」

「うん」

「御影だし、仕方ないじゃない」

「お前らの中での俺は一体何なんだよ」

「女心のわからない、唐変木、朴念仁」

「本当に失礼だな、バニングスさん」

「お褒め頂き感謝感激雨霰」

むう、コレは酷い扱いだ。

—当然の扱いだな

—まったくだ

—とにかく帯を掴んでアーレーって!!

—落ち着きたまへ

—とりあえずパンツを履いてるか聞いてからだな

カットカットカットカットカット。

「うへへへ」

「えへー」

「おい、こいつらを誰かどうにかしてくれ」

「アンタがどうにかしてるからいいじゃない」

「酔っ払いの相手なんざ、あと十年はしたくないね」

「ユーウー」

「あーはいはい。頼むからへばり付くのは構わんが頼ずりするんじゃないよ」

現在、月村の時計を確認するに二十三時ぐらい。

現状、カオスです。

「クソ、他はどこに行きやがった」

「ライトが案内してやる！とかでどこかに連れて行ったわ。アリシアは眠いって言って帰っちゃったし」

「シット。今ここに居るのは酔っ払い二人と役立たずか!!」

「あら、私もいるわよ?」

「……お、おう」

「役立たずが私とでも言うつもりだったのかしら?」

「そんな事、口を閉じても言いません」

「口を閉じてたら言えないでしょ?」

「開くと言ってしまいますので」

ため息を吐かれた。

——まあこんな会話をしてる中でもじやれて来る二人の対処に追われてるわけだ

——もうアレなんじゃね? 触っても許されるんじゃね?

カット。

「ゆ、ゆう……」

「ん。どうした月村?」

「えへへえ……ふふ」

「甘酒で酔うなよ」

「よつれらいもん!」

「テンプレすぎでございます」

「ホント、モテモテね」

「こんなモチかたなら犬猫にされる方がいい」

両手に花だけど、アルコールといい匂いが混ざってるのはいただけ
ない。

—クンカクンカ

—すーはーすーはー

カット。

「んう…」

「フェイト、眠いのか？」

「ねむう、ないよ？」

「そうかい。なら膝を貸してやるから横になってなさい」

「うん…うん…」

ポテンと横に倒れて、膝に頭を置くフェイト。

何度か位置を直して寝やすい場所を見つけたのか、そこで停止す
る。

—コレは、つまり、あれだろ？

—膝枕なのはいいが

—やる方よりもされる方が好みだ

—まあ何年か経ってからだな

「ゆう、わたしも…」

「残念、膝は一つしか空いてません」

「ぶう…」

「肩は空いてるからそこで我慢だ、オーケー？月村」

「やだ」

「ジーザス。俺に多足生物になれと」

「月村じゃやだ」

「…ああー、すずか？」

「うん、えへへ…肩借りるね」

「あ、ああ…」

あれ？酔ってるよな？

—酔ってる筈だ

—顔は赤いし

―深く考えるのは負けか

肩に頭を置いて、そのまま体重を掛けてくるが…軽いなあ。

「ホント、イライラするぐらいモテモテね」

「ほとんど酔っ払いの対応だけだな」

「…私にはアンタを理解出来ないようだよ」

「天才に理解されない人間とは、誇っていいか？」

「勝手にどうぞ。甘酒をヤケ飲みしたい」

「一応アルコールだから、多量の摂取はおすすめせんぞ」

「ありがとう、不運に見舞われろ」

「ひどくね？」

「さすがの手がちよくちよくと俺の右手を触れていたの、そのまま握る。」

「ふむ、女の子でも手は冷たいのか。」

「…爆ぜろ」

「いや、なんでだよ」

「まあいいわ」

「それならよかった」

左手でフェイトが飲んで余っていた甘酒を取り、紙コップをそのまま煽る。

―間接キスを狙った訳じゃない

―間接キスを狙った訳じゃないぞ

―勿体ないだけだからな

―大事な事なので二回

「ホント…アンタって奴は」

「ん？」

「いや…いいわ。多分気づいてないんだろうし」

「ふむ、悪いところなら直すか」

「悪すぎて治しようがないわ」

「なら残念だ」

もう一度溜め息を吐かれる。

代わりにこちらは甘酒を飲もう。

「で、アンタって好きな人とかいないの？」

「…いきなりだな、バニングスさん」

「ある意味、いきなりでもないんだけどね」

「そうなのか？」

「そうなの。で、どうなの？」

好きな人。大切な人は今ここに複数いるが。

「質問に質問して悪いが」

「どうぞ」

「それは恋愛感情か？」

「もちろん。それ以外に何があるのよ」

「親愛、友愛、まあ色々あるが」

「今聞いているのはlikeでもなくloveよ」

寝ている筈のすずかの頭がピクリと動いた。

—寒いのかね

—ジャケットでも着せとくか

自分の着ていた上着をすずかに着せて、少し肌寒くなったので、暖かい甘酒をもう一度飲む。

「ふむ、ラヴねえ…」

「いないの？…こう…夢にまで出てきそうな人とか」

「それなら居るよ」

「へえ、誰？」

「さてね。俺にはわからないことさ」

「……つまり、知らない人なの？」

「愛してる、って表現もおかしいがね。夢にまで出てくる人はソイツぐらいだ」

「ふうーん……そっか」

甘酒をチビりと呑み、やけに視線を強くするバニングス。

—おー怖いなあ

—まったく最近の子供は…

「もし、その人が今、目の前に現れたらどうする？」

「……そうだな、まずは一声だな」

「なんて？」

「おはよう、こんにちは、こんばんは、さようなら」
「なによ、それ」

「挨拶は大切って事さ」

すずかに握られた手が少しだけ強く握られた。

08 素晴らしいぞ!!

—少年、世界は好きかね

少年と呼ばれた子供は無表情で首を振った。

—そうか、私は世界が大好きだ

声の主は笑ってそう言った。

—世界が好きすぎて、ゴミを撤廃しようと思えば、自身がゴミ扱いだ

声の主の笑い声が部屋の中に響く。

—いいかい、少年。君も私も、家族ではない。ゴミに家族などありはしない

—ならばだ。ゴミを何故拾ったのか？答えは簡単だ

声の主は子供に顔を近づける。

そして囁いた。

—私を利用しろ、少年。私は君を利用する

「——ッ……」

目覚めは最悪の一言だった。

いや、最高に、最悪だ。これ以下などなかった。

積みまれていた本が辺りに散らばり、頭の中では声の主の爆笑が木霊し、そして今の部屋の中にはチャイムが鳴り響いている。

—来客にしては早いな

—まだ走る時間にも成ってない

怠い体を鞭打ち、扉を開く。

「……ミカゲ」

「スクライアか。どうした？こんな早くに」

「助けて!!」

「だが断る」

扉を閉めて、俺は何も見なかった。

―チャイムが連打されとる

―扉を叩くな

一度だけ溜め息を吐いて、もう一度扉を開く。

「ミカゲー！ひどいじゃないか!!」

「こんな時間に来るお前は酷くないのか？」

「……ゴメンなさい」

「よろしい。とにかく部屋に入ってくれ」

どうやら真面目な話らしい。

―まあ予想はつくが

―まったく、面倒だな

―シヨタキタアアアアア!!

―誰かコイツを刻んで

カット。

「で、どうした？」

「……………」

「……………」

顔を洗うとか、色々していて五分程度の待ち時間があつたが…。

―本を熟読してらっしゃる

―部屋から溢れ出たものか

「スクライア！」

「は、はい！」

「よし気づいたな」

「あ、…ゴメン。つい本が面白くて」

「いや、いい」

「本当に本が多いんだね…見たところ伝記や神話が多いけど」

「正しく根源を理解するには必要なモノだ…で、要件は？」

「そうだ!!無限書庫の司書として働かないかって管理局の人から言われて、ソレを伝えに来たんだ！」

「オメデトウ」

「ありがとう、なんて素直に言えると思うかい？」

「思ったさ。今思わなくなったけどな」

—謙虚だな

—浄土真宗の僧か

—頭如だな

カット。

「僕は君の方が適役だと思った。というか、今も思ってる」

「残念ながら。管理局に務めるなんざ悪夢でしか無い」

「クロノに伝えたら、懇切丁寧に説明してくれたよ」

「だろうな」

「そこで僕は思った。この貸しを使って君の助けを借りれるのではないか？」

「だろう……スマン、つまり、えつと？」

「今から、とある管理世界の遺跡探索に行こうと思うんだ」

「すまない、昔膝に受けた矢がな」

「この探索で結果を出せないと僕じゃなく、君が無限書庫の司書になってしまっただけだ」

「何故に？」

「君の能力が優秀過ぎるのが悪い。僕だとある程度の結果を出せないと無理なんだって」

「本当に、管理局なんて潰ればいいのに」

咄嗟に出してしまった言葉は飲み込む気が無くて、続くようにため息が出た。

「というか、俺が手伝ったら意味無いだろ？」

「何を言うんだい。僕が管理局に『助手を一人連れて行ってもいいか？』と聞いたら向こうは『別にいい』と答えたのだから、大丈夫さ」

「えー」

「ソレに、クロノに聞いたけど。まだ管理局は君の存在を知らないんだろ？なら、君を助手に使ったところで管理局には損得はないよ」

「なんか、スクライアが黒い」

「元を正せば君が悪い」

「そうなのだろうか？」

「管理局が悪い」

「そうだ、全部管理局のせいだ」

「これだから管理局は」

「まったくだ。」

「して、少年。本当にここは管理世界なのか？」

「もちろん。僕はそう聞いたけど？」

「ほう…」

広がる砂漠。目の前にある石造りの遺跡。

無限書庫で情報は粗方集めたが…なんだ、ここは。

「情報一致なし」

「あれか、捨て駒程度に考えられたか」

「未開の遺跡の探索」

「死んでも価値なし、生きて情報を持って変えればよし」

「まったくもって、クソめ」

「本当に二人なのか」

「そうだね。サーチャーか何かで見てるんじゃないの？」

「いや、空間解析したがそういう類の反応はない」

「…まあいいや」

「いいのか」

「案外打たれ強いのか。」

「シヨタ可愛いよシヨタ」

「マント羽織ってるし」

「GパンとYシャツの俺の気持ちも考えてほしい」

「普段着乙」

「第一、管理局みたいに都会に毒された人間にこれほど素晴らしい場」

所を荒らされるのは困る」

「…スクライア？」

「ああ！ミカゲならわかると思うがこの遺跡は素晴らしい！」

「お、おう…」

あれ？コイツってこんな性格だっけか？

—少なくとも、今までは違ったな

—今も延々と遺跡に関しての言葉が出てるし

—まるで流れるような演説だ

—流されてるのは俺か

カット。

「—ということだよー！」

「スゲーヤツベーチョーカンドーシタワー」

「さあ行こう！今すぐに！」

もう本当に、大丈夫なのか？

—ある意味大丈夫だ

—末期すぎて手遅れだ

—どちらかと言えば弟の方が

カット。姉弟の話はどうでもいい。

「ふむ…なるほど」

「フッフ、アーツハツハツハツハ!!素晴らしい!素晴らしいぞ、この遺跡は!!」

「スクライア、そこに罠があるぞ」

「甘いよ、ユウ。僕は遺跡を愛している。つまりだ、遺跡に参与する罠もまた愛しているのだよ!!」

「いや、その理論は…罠が作動しない…:…だと」

アンヘルでの解除余裕でした。

—先に進むのはやめて欲しい

—どうしてこうなった

— どうしてもこうなった

— もう諦めろよ

「古代ベルカの遺跡か、なるほど、なるほど」

「で、何かわかったのか？」

「素晴らしいの一言に尽きる」

「もうお前、早く戻れよ」

「そんな君に返そう、慣れろ」

「アイコピー」

壁に手を当てて文字を読むスクライア。

— 真面目な顔なんだけどなあ

— もう慣れた

— 普段はいじられてるクセに

— 動画にしてクロノに見せてやろうか

カット。どうせこれが終われば弄るんだ。

09 嘘らしいぞ!!

「だから、あれほど先に行くなと注意したはずだ」

「面目ない…」

「いや、お前を説教したところで状況は改善されないからいい」
「本当に、申し訳ないです」

スクライアが元に戻った。理由は簡単だ。罫に嵌ったのだ。

—魔法の行使不可

—ふむ、どういうことだ

—そういった場所なんだろう

—対魔力領域、といったところか

—詳しく調べてみないことには対応不可

否定式が組み込まれるのか、はたまた魔力の結合が緩くなるのか。

「少し休んでから進もう」

「うん…それにしても、冷静だね」

「冷静…なんだろうか」

「十分冷静だと思うよ」

それを言えば、スクライアもだろう。

—灯りはユーノきゆんがどうにかしてくれたが

—やはり古代ベルカの文字か

—文字がこれほど普及してたなら学んどくべきか

「君が居るから、僕は冷静でいられる」

「…それは聞き方を変えれば告白みたいになってるぞ」

「なツ!?そ、そんなわけないだろ!第一、僕らは男同士じゃないか!!」

「騒ぐな、無駄な体力を使うんじゃない」

「騒がせてるのは君だろう…」

さてね。身に覚えがない。

—解析魔法も行使できないか

—いっそ魔力量を上げてみるか

—実験楽しいです

「ミカゲ、何してるの?」

「ちよつとした実験だ」

「先に言うけど、遺跡を壊して脱出とかしたら僕は君を殺すかもしれない」

「過激的な発言だこと。単なる解析魔法だ」

　　普段の解析魔法を縮小する。

　　―多対象から単対象へ

　　―魔力消費は変えずに

　　―解析魔法、行使

　　―ベルカの、城だったのか

　　―またややこしい所に来たな

　　―辺りがボロボロな理由がつかんぞ

　　―解析魔法に綻び

　　―魔力結合低下

「なるほど」

「何かわかったの?」

「ここがベルカの城だったてこと」

「そんな事、入った時から気づいてたよ」

「……お前は情報の開示という言葉を知らんのか?」

「ごめん、本当にごめんなさい」

「はあ……あとは魔力の結合が緩くなるな」

「じゃあ魔法は使えないんじゃないの?」

「ちよつとした裏技さ」

　　アンヘルからの魔力供給だなんて言えるわけがない。

　　―シヨタを触手で、こう……

　　―先が困るからやめろ

　　―え?先でシコる?

　　―ホモ以外は帰ってくれないか!

　　カット。ホモが帰れ。

「……どうして司書の話、断ったんだい?」

「……」

「君が管理局嫌いでも、いい話だと思うよ?第一、僕よりも君の方が優

れてるのは明らかだし」

「…スクライア、あまり自分を卑下するな。お前は凄いや」

「君と比べると、そうでもないさ」

「……俺の解析魔法は、取捨選択ができないんだ。お前の読書魔法より性能はいいかもしれんが燃費も悪いし、イラナイ情報まで入ってくる」

「例えば？」

「本の解析をすると、その本に使われた紙の材質、素となる木材、そして繊維情報、インクに使われた成分、量」

「…ナニソレコワイ」

「本の内容なんて、ほんの一部さ」

「…それでも、」

一つだけ、溜め息を吐いてスクライアに向かう。

「一つ、昔話をしよう」

「……」

「一人の子供の話だ。」

その子供は幼い時に産みの親にゴミ捨て場に捨てられ、生きるために盗みを働き、その日生きる為に必死だった。

その日も一欠片のパンを得て、寢座であるゴミ捨て場に戻った。珍しく、その日は追手もなく、言っちゃ何だが楽な仕事だと思った。しかし、ゴミ捨て場で待っていたのは大人共だ。

あの町に一人しかいなかった少年はすぐに噂になり、そして場所がバレていたんだ。少年は逃げた。ある程度の地理は把握していたし、逃げるルートも数個用意されていた。が、少年は意図も容易く捕まり…罰を受けた。

死んだ、と思った。落ちていく意識の中で確かに覚悟した。

その覚悟は無駄に終わることになる。一人の女が、少年を拾ったんだ。詳しくは知らないが、彼女は俺を拾った。

目が覚めた俺は当然の如く警戒していた。彼女から言わせれば『猫の様だ』だったか。とにかく、そんな少年に彼女は言うんだ。

「君は私を利用しろ。私も君を利用する」

ってな。意味の分からない女だったが、少年は彼女に救われたんだ。利用される立場であれな。

そこからの少年の生活は劇的なものだった。料理の出来ない女の代わりに料理をし、言葉を学び、そして一つだけ魔法を学んだ。

その一つは解析魔法で、彼女の使える唯一の魔法だった。

時は経ち、そんな生活にも慣れて、解析魔法で色々な情報を喰らっていた少年は料理を作っていた。

彼女はのんびりと椅子に座りながら本を読んでいたんだ。

そして上を向き、眉間に皺を寄せた。

少年は聞いた。

「何かあったのか？」

彼女は答えた。

「どうやら、管理局のクソ共がゴミ処理をしに来たらしい」

数秒後、家を貫いたのは一本の剣だった。剣は一本から二本に、そして三本になり、斧や槍まで降ってくる。

彼女は俺を守って、剣に貫かれた。滴る血が頬を伝い、少年にそれが現実だと思わせる。

何故？という言葉だけが少年の頭の中に反芻した。何度も、何度も、何度も何度も何度も何度も何度も。

既に解析魔法でわかりきっていた彼女の死期。

何故こんなことに？

この剣は一体？

誰が悪い？

何が悪い？

少年は彼女の言葉を思い出す。

そうだ、管理局が悪いんだ。

そうして少年は管理局を倒すために、旅をするのでした」

「……少年は、彼女を愛してたんだね」

「恩は感じてた。それが愛かなんてもう確かめ様がない」

スクライアはようやくやくと言っていていいほどの溜め息を吐いて、続ける。

「わかった。司書には僕がなろう」

「元からそういう段取りだ」

「……君は、まだ恨んでいるのかい？」

「あ、この話の大半は嘘だからな」

「なんだと!!」

「さて、休みも取れたし、出口に向かおうか」

「ちよつと待って、ユウ!!今の話は君が体験した過去じゃないのか!」

「誰もそんな事言つてませんことよ?」

「チクシヨウ：なんだ、騙されたみたいなのこの感情!!やっぱり君が司書に」

「残念、言質は既に俺の手の中さ」

騙される方が悪いのさ。

— 騙されたのはどちらだろう

— 騙した内容はどちらだろう

カット。はてさて、どちらかが本当なのか？

それとも全て嘘なのだろうか。

10 お、おからね！

―料理は任せたぞ

声の主はそう言う。

誰かは呆れた声で非難する。

―知ってるか？生野菜はおいしい。しかし、調理された方がおいしい

そして声の主は近くにあった本を読み始めた。

誰かは溜息を吐いてキッチンで包丁を握った。

―美味しければ、お前に魔法を教えよう

―ああ、そうだ。遅くなっただが、私は魔法使いなんだ

「ふ、副委員長だアアアアアアアアアア!!」

「キヤアアアアアアアアアアアア」

「……お前らは喜んでるのか、それとも人を鬼か何かだと思ってるのか？」

「冬休みの宿題教えてください!!」

「オイ」

久しく訪れた学校で俺を迎えたのは相変わらずな生徒だった。

―もう本当に、相変わらさずだ

―もう慣れた

―なれていた

「おはよう、ゆう君」

「ん、おはよう。すずか」

「タイム!!」

「つ、つまりどういうことだっばよ!!」

「落ち着け、落ち着いて数を数えるのよ！」

「0、1、10、11、101、110、111」

「モブ郎が壊れたぞ！」

「シツレイナ、オレハ、コワレ、ガガガ」

「モブロオオオウウウ」

「で、冬休みの宿題の答えいうぞー」

「やったね！」

「モブ郎？誰それ？」

「お前らなんかひどくね？」

サクサクいこう。

—宿題に目を通すまではしたし

—あとは頭の中で出来るだろ

—さて、まずはドリルの一番裏を見るだろ？

カット。それは最終手段だ。

「でき、副委員長なんか感じ変わった？」

「変わらん、そこ間違えてるぞ」

「んー、あれだ、メガネが無い！」

「副委員長が副委員長たらしめる重要なモノが!!」

「あれ？前は寝起きでしてなかったんじゃないの？」

「踏み潰して壊れた」

「副委員長が、天然…だと!？」

「今までも散々ツンデレだと思っていた副委員長が、ツンデレに天然という追加属性が」

「そこ、答え違うぞ」

誰がツンデレか。

—最初の一言を二度言っつて、からね!で終わると

—お、おからね!

—なんか違う。

「でも、不便じゃない？」

「見える分には大丈夫だ」

「黒板とか見えなくないの？」

「え？副委員長って黒板見てたの？」

「眺める分には楽しい」

「つまり、見てなかったんだね…」

「すずか、ノートは取ってるんだから気にしちゃいかんよ」

「じゃあ、ノート見せて？」

「はいよ」

机の中に入っているノートを渡す。

—ノートは取ってる

—もちろん中身も書いている

—まあ授業内容を書いているとはいってないけどな!!

—授業内容だと思った!残念、仮定夜天プログラムでした!!

「なに、これ」

「蜘蛛の糸さ。束ねれば飛行機も抑えられるスグレモノさ」

「……あれ?これってエネルギーが足りなくない?」

「……本当に、末恐ろしい」

ノートを取り上げて、そのまま頭を軽く叩く。

—コレを見ただけでそこまで理解出来るって

—あれ?年齢ってなんだっけ?

—体は子供、頭脳は大人

—頭を抑えて軽く頬膨らませてるすずかタンかわゆす

「ゆう君一緒にご飯食べよ?」

「ソイツも一緒かよ」

「安心しろ、スメラギ君。俺はちよつと用事がある」

「用事?」

「一応、休んでた身だからな。教科担当教師から色々と呼び出しがある」

尤も、休んでた理由は家庭事情なので課題を出されて終わりだと思
うが。

—課題なんて余裕すぎる

— すすかタンとお弁当を一緒に惹かれるがね

— スメラギが居るからどうも

— まあ気にはせんがね

「なら仕方ない、かな」

「それなら仕方ない!!」

「なんでアンタはそんなにテンションがあがるのよ…」

こつちに向かつて笑うスメラギ君に苦笑しながら踵を返す。

— ホドホドにな

— ホドは消失しました

— 栄光を掴む者などいないのさ

カット。



「アイツも大変ね」

「御影君、家庭事情で休んでたのにね…」

「オレは休んでも何もなかったがな」

「ほら、ゆう君は普段の成績は普通だから」

自分で言っていて苦笑してしまう。

授業中に彼の姿を眺めていて初めて気付いた。彼は常にノートに向かっている。

何を書いているかは朝に知っただけ、頭に残っている式はまだ解けていない。

かなり、というか本当に恐ろしい程頭の回る彼が補修？滑稽だ。

「で、アリシアは何してるの?」

「んー、ユウちゃんから珍しく課題が出てねー。その解法中」

「アンタもまたオカシナ事を…」

「ふふふー、私はお仕事ですから」

「アリシア、あーん」

「あー……ん」

何枚かの紙を睨みながらフェイトちゃんに餌付けされてるアリシ

アちゃん。

出てきた課題に眉間を寄せてる顔とそんな彼女にご飯をあげてご満悦な顔、両方が見れる。

「課題って?」

「なんかユーノんと一緒にいった遺跡で魔法が使えなかったんだって。『限定的なモノだから』って現象の内容を書かれたレポート渡されたけど……無理だアああああああ」

「アリシア、卵焼きだよ」

「あー……しよっぱい……」

「ゴメン、ちよつと塩が多かったかな?」

「天然な妹がかわいいよおおお、解けないイイイイイ!!ユウちゃん
のバカアアアアア!!卵焼き美味しいいいいい!!」

「なんか、珍しく騒がしいわね」

「魔法が使えない……?いや、でもアレは三期の話だから違うか……」

「ライト君どうかしたの?」

「大丈夫、何でもないぜ、なのは」

何かブツブツと呟いていたライト君もなのはちゃんの一言ですぐに笑顔に戻る。

相変わらずずっと笑顔な人だ。

「そういえば、御影君の腕って大丈夫なの?」

「腕?アイツの腕って痣だらけのアレか?」

「うん。今はどうかかわらないんだけど、痣の原因がアレだったら、よくないんじゃないかな?」

「クロっちは大丈夫だとか言ってたけど?」

「クロ……?」

「クロノだね」

「あー、あの頭の硬そうな子供ね」

「アリサ、子供って言っても私たちより年上だからね?」

「見た目の問題よ、フェイト」

キリッ、とつきそうな程凜々しく言い切った親友に思わず苦笑してしまう。

「というか、アイツの腕ってそんなに深刻なモノを抱えてたのか？」

「えーつとなんて言えばいいんだろ」

「時の庭園で、アンヘルと戦ってたでしょ？」

「……ああ、あのバグか」

「バグ？」

「いや、こつちの話だ。で、アレがどうかしたのか？」

「アレがユ」

「それと同じ物がユウちゃんについてるのよ」

フェイトちゃんの言葉を遮ってアリシアちゃんが呆れた様に声を出した。

ついでに溜め息もついでに出たらしい。

「ソレって…大丈夫なのか？」

「どうだろう、ユウだからなあ」

「御影君ってそんなに無理してるの？そんな風に見えないけど」

「ユウちゃんだからねえ…」

そして二人して溜め息を吐く。やっぱり、私は彼をあまり知らないようだ。

「例えば、どんな事してたの？」

「あー……諭えるなら眠り姫を助けるとか？」

「なんだ、それ？」

「諭えだから仕方ない」

「そ、それはつまり」

キ、キスをしたということなのだろうか!?

そうなのか？そうなのだろうか？まずは眠り姫を思い出すべきだ。

やっぱりキスしてるよ!!え？えっと、眠り姫を助けたということ
は、つまりそう言うことで、ゆう君には既に好きな人がいて、でもは
やてちゃんに告白紛いの事をしてるらしいし、でもでもはやてちゃん
はこのことを知らなくて、いや知ってて言わなかったのか？それはそ
れで困るのだけど、つまり、えっと。

「落ち着きなさい、すずか」

「……ハイ、ごめんなさい」

「えっと、ちなみに眠り姫の起こし方は正規の方法じゃないよ?」

「そ、そうなんだ」

「おやおやあ、どんな事を想像したのかにやあ?」

「な、何も想像なんてしてないよ!? ホントだよ!」

「フフー、怒らないからお姉さんに言ってみようか」

楽しんでる、絶対に楽しんでる。

ニヤニヤというのか、ニンマリというのか、とにかく笑う顔を隠す事もなくアリシアちゃんが迫る。おそらく顔が赤くなってる私には対応が出来ない。

「アリシア、さすがが困ってるよ?」

「フフー、私としてはこの質問をフェイトにもしたいんだけどね」

「?。とにかく、困らせるようならお弁当もう作らないよ?」

「それだけは勘弁して! 私の楽しみが、なくなる!!」

「なんかアンタら姉妹の力関係を垣間見た気がする…」

フェイトちゃんに感謝を伝えて、ようやく息を吐く。

「話は戻るが、アイツに関しては大丈夫だろ。クロノが大丈夫って言ってたんだろ?」

「うん」

「クロノが嘘を吐くなんてことないし。危険ならオレが守るし」

「……どうして危険だなんて言うの?」

「いや、化け物が暴走したら危険だろ?」

「そう……そっか、そうだよね」

それが当然の意見だ。

何度も自分に言い聞かせただろう。今更何を思うんだ。

「どうしたの? すずかちゃん」

「ううん。大丈夫、何でもないよ。なんでも」

「?」

駄目だ、ゆう君みたいに切り替えられない。うまく笑いを貼り付けてる気がしない。

大丈夫、大丈夫だ。ここにいる人は知らない。知らない筈だ。

親友であるアリサちゃんにも言える訳がない。いつかは言おうと

思うけど、まだ勇気がない。
だから、誰も、私を知らない筈なんだ。

11 夕君だから仕方ない

—ふむ、どういうことだ？

声の主は誰かに魔法を教えながら呟いた。

—私が研鑽を積んだ解析魔法をこれほど早く習得するとは

—分割思考？マルチタスクの事か

—空戦魔導士は所持前提の代物だ、おい、何を落ち込んでいる

誰かは頭を抱え、声の主はソレに少し笑う。

—まあいい。複数の同時解析が出来るのならば話は早い

—ここにある本を全て解析しておけ

—あとそうだ、

声の主は部屋から出るのか扉に近づく。

そして何か思い出したように立ち止まり、振り返る。

—今日の夕飯はなんでもイイが、出来ることなら野菜が取れて出汁の美味しい鍋なら私はとても嬉しいよ

—別に鍋にしろと言っている訳ではない。しかし、鍋であつて欲しい。鍋美味しい

「うわ、なんやその紙袋は」

「知りたいか？知りたいのなら是非とも手伝って欲しい」

「いや、いいわ」

「そうかい」

紙袋から課題の一つを取り出しペンを走らせる。

—考えるモノなら余裕なんだが

—量が多いのは流石にな

—右手首が腱鞘炎だなんて

—年齢が年齢なら何を言われるか
カットカット。

「で、今日は『夜天の』も一緒か」

「ええ。少し頼みたい事もありましたし」

「頼み？ 幼女になりたいのなら消費魔力を抑えればいけるぞ」

「それではないです」

「リインから色々教えられてんけどなあ、どうしても魔法が使われへんのよ」

「それはいい事だ。関わらない事はいい事だ」

「出来る事ならば教えて欲しいなあ…とか」

「…誰に？」

「ユー」

「ミー？」

「おーイエス」

「シグナムにでも教えてもらえよ。アイツなら手とり足取り何取り教えてくれるさ」

「ナニとりって…」

「魔力の話だ」

まったく何を勘違いしてるんだか。

—シグナム相手ならナニ取り教えられたい

—おっばいに目が眩んだ結果がコレか

—大丈夫だ、まだ結果は出てない

—むしろ教えられた結果より教えられる過程が大事であってだな
カット。

「別にお前の魔法適正はそれほど低くもないだろうに」

「でも、出来ることならすぐにでも使いたいんよ」

「その心は？」

「歩けたら学校に行ける！」

「…ああ、そうか。今までは通信教育だったのか」

「そう。リハビリもしてるねんけど、やっぱここは魔法の力でドカーンと」

「ドカーンでお前は学校をどうするつもりだ」
「通学する」

「痛烈な登校風景だな。幻想だ」

「その幻想をぶち殺す！」

「お前の幻想がぶち殺されました」

「あ……」

少し落ち込んでから車椅子をキコキコと弄る彼女に溜め息を吐く。

「ほら、夕君教えるの上手そうやし、こう……歩けたらみんなと同じ学校に行けるやん」

「先に言うが、魔法でできるのは補助だけだぞ？全部魔法任せにする
と飛んだ方がいいし、それだと意味もないからな」

「教えてくれんの!?!」

「乗り出すな、こけるぞ？」

「その辺りはリインが抑えてくれてるし、コケても夕君おるし」

「あともう一つ。結構細かい魔法制御になるんだが……」

「心配無用。目の前に居るは誰やと思ってるん？」

「……心肺機能が気がかり過ぎるが……明日の朝、迎えに行くからな」

「了解」

「ああ、『夜天の』」

「どうかしましたか？」

「お前の姫様が怪我しても何も言うなよ？」

「……わかりました」

「ならいいんだが」

はてさて、どうしたものか。



これはキツイ。

「ほら、はやて立て。立って歩け」

「ちよい待って、コレはキツ過ぎるんやない？」

「お前に向かって魔力弾ブチ込んでないだけマシだろ」

「スパルタ!」

車椅子を押されて連れてこられたのは早朝の公園。

まだ寒い時期の地面に私は突っ伏していた。

「お前が歩けない理由その一。足の筋肉量が足りない」

「おお…」

「その二、バランス感覚がない」

「うう…」

「その三、動くというイメージ形成が甘い」

「……」

「そして何よりもお!!」

「もうやめて! 私のライフはもうゼロよ!!」

目の前で立っている彼は言いたい放題である。

ちなみに私の下には三角の魔法陣が展開していて、魔法の補助も受けている。受けているのだが。

「くそお……」

「またブレてるぞ。一度魔力を切って、やり直しだ」

「難しいなあ」

「慣れれば色々出来るんだがな」

苦笑しながら私の脇に腕を回して、膝裏にも腕を入れられて持ち上げられる。

そのまま車椅子にもう一度座らせられて溜め息を吐かれた。

「そういえば、夕君の瞬間移動みたいなモノも同じ魔法なん？」

「似た魔法だ。俺のはミッド式に近いからな」

「近い？」

「……ミッド式の身体強化はどちらかと言うと防御重視の強化…つまり筋力の強化というより反応向上が基礎にあってだな」

「簡単に」

「俺に合わなかったからバラして、新しいのを組み立てた、以上」

「……魔法の事まだ詳しく知らんけど、なんかとんでもない事言われ

「た気がする」

「そうか？」

「そうだろう。」

「今まであったモノをわざわざ分解して、自分の都合のいい式にする。」

「デメリットが多すぎて何とも言えない。」

「俺の魔法は粗方そんなのだぞ？」

「なんかアリシアちゃんの言ってた言葉を思い出したわ」

「アイツ、何言ってるんだ…」

「夕君だから仕方ない」

「酷い言われようだ」

「少し落ち着いた所で意識を集中する。」

「歩く。という動作を思い出してしつかりと意識する。」

「胸に収まる剣十字に命令を送り、身体強化の術式を指定。」

「自分の中にある魔力を少しだけそこに流して、足を地面につける。」

「毎度毎度言ってるんだが、魔力は少しずつ流す感覚だ。塊持ってきてんじやねえよ」

「すいません。本当に申し訳ないです」

「地面の強化とか不思議な事をするとは思わなんだ」

「倒れている私の後ろにあるのは少しへこんだ地面。」

「夕君曰く、結構な魔力を流した結果だそうで、ウィータの撃つ魔力弾一発ではビクともしない代物だそうで。」

「感覚が、感覚がやな」

「覚えろ」

「覚えてる最中やもん」

「なら魔力制御からするか。どうせあまり器用な事は望んでないし」

「悪かったな、不器用で」

「誰も不器用とは言っていないだろ。器用でもない事を出来ない、とは言ったが」

「夕君がいじめる!!」

「はい、じゃあ魔力制御するぞー」

彼は私の話をスッパリと切った。

もうなんていうか、ゴメンなさい。

「まずは魔力弾…は出せるよな?」

「馬鹿にすんな、そのくらい出来るわ」

私と夕君の間に魔法陣を出して、そこから魔力弾を出現させる。

白い光を出すソレに夕君は納得したように頷き

「バカだな」

ダメだしをした。

「魔力を無駄にしすぎだ、馬鹿者」

「これでも結構制限して出してるんやで?」

「もつと制限しろ。眩しい」

夕君の足元から出てきた、朱色の弾が私の白い弾を貫いて、そこに留まる。

同じ術式から出てきているというのに、私が出したモノよりも光が弱い。

「お前が歩くのに必要な魔力はこの程度でいい」

「…:そんな小さくてええの?というかどれだけ制限しろと…」

「俺をスポイトで例えるならお前は消火栓みたいなものだからな」

「あれ?それ無理やない?」

「やれ」

「いや、だから」

「歩きたいんだろ?やれ」

「…:はい」

落ち着け、落ち着いてやれば大丈夫な筈や。

深呼吸して魔力弾を出現させる。瞼を閉じていてもわかるほどに眩しい。

そこから魔力の弁をゆっくりと閉じていく。ゆっくり、ゆっくりと。

そして、瞼では分からない程に光が収まり、ゆっくりと瞼を上げる。

「本当に、向いてないな」

「改めて言わんでも自分で理解してるもん!!」

朱色の弾の横には何もなかった。

「ここまで向いてないとは思わなかった」

「……笑えばええやん」

「アーツハツハツハツハツハツハツ」

「なんてイラつく棒読みな笑い……」

「まあ冗談は炉端に放置しよう」

「草場の影から失敗がチラつくとか勘弁して欲しいけどなあ」

「そんなはやてさんに裏技を紹介してやろう」

「裏技がアルヤテー!？」

「とうか、はやて専用裏技だな」

「あー、うん。なるほど、わかった」

夕君が後ろを向き、そちらを向くと一本の木があった。

その木の端に銀色が見えていて思わず和んでしまった。

「リイン、出てきてええよ」

「主!大丈夫ですか!？」

「うん、たいした怪我はないしなあ」

「とうことで、裏技さんです」

「う、裏技さんです!」

「わざわざノらんでもええんよ?」

顔を真っ赤にしてなかなか可愛いけど。

そんなリインは赤くした顔で夕君を睨んでるけど、夕君はどこ吹く風。

「裏技さん、わかった、睨むなよ『夜天の』」

「さすがの私でも怒りますよ?」

「はいはい。まあ『夜天の』が魔力制御すれば万事解決」

「ああ、なるほど」

「しかし一つ問題。髪色やら瞳の色やらが変わりすぎる」

「おうふ」

まさかの問題に思わず声が出てしまう。

つまり、リインを使って歩けはするけど学校にはいけないと？

「慣れるまでの、まあ松葉杖だと思えばいいさ」

「主の為ならなんでもします」

「なんやろ、めっちゃ勿体ない事をしてるような気がする」

「気のせいだ」

「気のせいですよ」

そうなのだろうか？

二人が言ってるからそうなのだろうが、どことなく勿体ない気がしてならない。

12 大切に思う大人の言葉を聴きなさい

―ふと思うのだよ

―なぜ私が生きているのか

声の主はグラスを傾けて言う。

ほんのりと赤い頬を見ると酔っていたのだろう。

―私は、人に誇れる程の悪人だ

―そして善人、いや偽善者だ

再度グラスを傾けて、空になったグラスに新しい液体を注ぐ。

―我は人の為に在り、人は人の為に在る

―故に我在り、我が価値を見出す

―ふむ、なかなかウマイな

クツクツ笑った彼女の言葉が、飲んでいたアルコールなのか、それとも自分の言葉なのか。

誰かは終ぞ知ることにはなかった。

「やあ、おはよう」

「おはようございます」

あの日から付きまとわれて結局離すのも面倒になったので、同じルートを走っているのだけだ。

―前みたいな事は嫌だぞ

―二の舞は勘弁

―一と二の舞は似てる

捻った名前の方はご遠慮下さい。

「相変わらず距離を置かれてるんだね」

「あなたは自分のした事をしっかりと理解するべきだ」

「理解はしているよ」

「なら尚更質が悪い」

「僕としては馬鹿げた事をしようとしている子供を止めたい一心なんだけどね」

「息の根を止めたいのなら心は必要ないですよ」

淡々といつもの速度で走る。

「これでも結構速いとは思うんだけど」

「追いつくのかよ」

「あーヤダヤダ、若者の人間離れか」

「若者でもないがね」

「……どうしてもやめないのかい？」

「ならば逆に問いまししょうか。貴方の家族を殺します。俺を殺しますか？」

「……」

「俺なら迷わず殺します。ここ7年程は泳がせてますが、絶対に殺します。それこそ1秒でも早く、瞬きをする暇もなく、酸素を血液に溶け込ませる前に」

少しの沈黙。

地面を蹴る音と小鳥の鳴き声だけが鼓膜を揺らす。

「ああそうだ殺さない」と

「殺さなくてはいけない」

「早く、早く」

カット。まだ、まだ殺せない。

「……君は、目の前で人が死ぬ様を見たことはあるか？」

「ありますよ」

「君のやろうとしている事はそういう事だ」

「狂ってる、って言いたいんですか？」

「そうじゃない。どうにかしたいと思ってるんだ。殺すだけが恨みを晴らす方法ではない」

「もう、ダメですよ。俺は殺さない」と

「まだ先は長いんだ。焦って答えを出さなくてもいいんじゃないか？」

「……」

「君はまだ十歳程度だろうか？」

「そうですが……」

「若いよ、充分」

カット、カットカットカット。

—カット

—カット

—カット

—カット

「ああ、そうだ。はい」

「……ああ、眼鏡ですか」

「うん。なのは経由で渡しても良かったんだけど、僕が潰したとは言っていないだろうか？」

「まあ、はい」

「ありがとうございます。桃子さんに聞かれたらどうなったことやら……」

一人で唸っている男を放置してケースを開ける。

そこに会ったのは瓶底では無く、縁のない楕円のシンプルな眼鏡。

「前のデザインの方がよかったかい？」

「いえ、別に……」

「ならよかった」

眼鏡を掛けて周りを確認する。

ぼやけていた視界が鮮明になり、安堵する。

—周辺解析遮断

—視界に頼るのもなんだがね

それが普通なのだから、仕方ない。

「ありがとうございます」

「礼を言われることじゃないよ。元々は僕が悪かったしね」

「そうでした。高町さん経由に礼を言う事にします」

「やめてくれ」

かなり真顔で言われた。なにこれ怖い。

—女性って怖いなあ

—結婚とはほとんど全ての人が歓迎する悪である

目隠しが外されて、視界が鮮明になってしまうのだから。仕方ないや。

「おかえり！副委員長!!」

「おかえり！」

「お前らは、目を見て言ってるのか？それとも眼鏡を見て言ってるのか？」

「眼鏡」

「殴られても文句はないな？」

「先に謝ったら許してくれる？」

「後で誤りだと気付くんだな」

頭に軽く手刀をおろして自分の机に鞆を置く。

「おはよう、ゆう君」

「おはよう、すずか」

ニコニコしているすずかに挨拶をして、少しだけ違和感を感じる。

—ふむ

—コレは、どうしたものか

—ツンデレやスメラギ君がどうにかしてくれるだろう

—この前は普通だったのに

「すずか」

「何？どうかしたの？」

「……いや、今度はどんな本を貸そうか迷っててな」

「どんな本でも大丈夫だよ」

「そうか。なら恋愛小説でも選んでくるか」

「ありがとう、ゆう君」

「……ああ」

恋愛小説なんて持ってないけどな。

―恋してる訳でもなさそうだ
―変に勘ぐりすぎじゃないか？
―違和感は拭えない
―いつそ官能小説をだな
カット。そういう問題ではない。
まあ、バニングスさんあたりがどうかしてくれるか。

「来たわ」

「……帰れと言いたい」

「残念ね。口に出てるわ」

「そうか、ならその通りしてくれ」

「上がるわよ」

「家主より先に上がるとはどういうことか」

学校から早々と帰宅すれば扉の前に長い黒髪の女性がいた。

久しくあつたが、随分と血色が良くなってる。

―健康に気を使うようになったか

―娘が色々言うものな

―娘を愛してやまない親、バカだもんな

「今、何か凄く不快だったわ」

「変な電波でも受信してるんじゃないか？精神病棟にでもぶち込まれてろ」

「アンタに杖をブチ込むわよ」

「やめろ、マジでやめろ」

少しだけ後ろに下がって気を引き締める。

―マジなの？マジなの？

―マジならマジでうれ、げふん

—変態な大変がいるよ!!

カットカットカット。

「なにコレ、随分な内容ね」

「日本小学生の課題なんてそんなものだよ。破ろうとするな」

「こんなモノでアナタの時間が無くなるなんて、愚行ね」

「愚考した所で出てくる答えは一緒の苦行だからな。考えるまでもな
んや」

「本当に、意味がないわね」

「意義もないさ。異議はあるけど」

淡々とお茶を煎れて、プレシアの目の前に置く。

少しだけ口に含んでから、もう一度カップを傾ける。どうやら味は
お気に召したようで。

「で、なんで来たんだ？」

「アナタの観察」

「人をウーパールーパーみたいに…」

「あら、可愛いじゃない。ウーパールーパー」

「可愛いか？アレ」

「もちろん、フェイトとアリシアの方が京倍も可愛いわ」

「テラを軽く超えるのか」

「ヨタまで行きたいわね」

与太話を軽く交えて、お茶を飲むプレシア。

—与太なのだろうか

—マジじゃね？

—寺を超えると与太になるのもおかしいがね

「あの子供に聞いたのだけど」

「あの子供？」

「親バカの息子よ」

「…いや、お前に息子はいないだろ」

「私が親バカだと言いたいのか？私は娘の事が大好きすぎるだけの親
よ」

「世間ではソレを総称してソウ称するんだよ」

「一般の価値観に捕らわれるなんて、科学者としてどうなの？」

「残念、俺は理論方面だからな。常識を捕まえるのが理想なのさ」

「それは実験側の私に喧嘩を売ってるの？」

「売ってない」

「なら撃つわ」

「憂鬱だわ」

「……面白くないわよ」

「その一言で俺が滑ったみたいになってるんだけど？」

「それは残念ね。地面でも凍ってたんじやないかしら」

「滑降させる気か」

「格好の的にする気よ」

つまり、わざとなんですか。そうですか。

——ぎまめ

「子供ってどんな子供だ？」

「黒髪で、背が小さくて、裸眼で、」

「具体的に言ってくれ。例えば管理局に勤めてるとか、アースラに居るとか」

「ムツツリそうだったわ」

「ああ、クロノか」

「ああそういえばそんな名前だったわね」

「で、そのムツツリがなんて言ってたんだ？内容によっては貞操の危機を感じざるをえない」

「アナタ、アンヘルの侵食が進みすぎてるらしいわね」

「……いや、そんな訳ないだろ？」

「言っておくけど、アナタに言われて折れるほど若くもないし、放っておけと言われて引き下がる程どうでも良くないのよ」

「……クロノに何か言われたのか？」

「様子を見て来い、あとはアナタの体のデータを少し、ね」

カバンから取り出されたのは紙束。

——おーおー、コレは酷い

——寝てる間にチェックされてたか

— 『夜天の』の夜の時か

「おいおい、見る限り健康体だろ？データをみる限り傷も一切ないじゃないか」

「私がフェイト達の戦闘を見てないと思うの？」

「……あれ？なんだろう、普通に『テメエは二の次だよ』と言われた感じだ」

「テメエは三の次だ」

「更に増やされた!？」

「冗談は上の方に置いておくけれど」

「ジョウダンだけにな」

「黙りなさい。雷撃で焼き切るわよ」

「マジ勘弁」

「……アナタ、異常なのよ？わかってるの？」

「わかってるさ、わかっていると」

「ちゃんと目を見て言いなさい」

「前は向いてるだろう？」

「ちよくちよく人の胸を見てる人間の言葉じゃないわね
なぜバレたし。」

— おいおい、冤罪だ

— 触れれば冤罪じゃなくなる

— 単なる罪だろ

— 冤が取れるな

「あの白い子、確か……… “なのか” ちゃん」

「なのかなのはなのだ」

「あの子の収束砲撃の余波でも酷い傷の筈よ」

「直撃受けた人間はカスリ傷だったぞ」

「あのガキの話はしないで」

「嫌われてるな」

「嫌いじゃないわよ。羽虫に感情は湧かないだけ。潰すか、無視するか。その二つよ」

「うわあ」

「そんな話どうでもいいわ」

酷い扱いである。

―扱われてさえない

―酷くない扱いだ

カツト、やめてやれ。

「で、例えば、俺がアンヘルに侵食されかけてるとして、どうするんだ？」

「治すわ」

「……やめとけ」

「なぜ？」

「……プレシアとは家族でも何でもないだろ」

「家族だから行動する訳じゃないわよ。恩人だから行動する訳でもない」

「ならなんでだよ」

「それは。………知的探究心よ」

「今俺の中でお前の評価が下がったよ」

「あら、アレだけ嫌がらせをしたのにまだ下がる評価があったのね」

「その言葉で地底までいったわ」

「随分天高く昇っちゃったわ」

「もういいよ…」

「そう。ならちようどいいわね」

何がだよ。まったく。

「私を含めたテスタロッサ家もこのマンションに住むわ」

「……………」

「フェイトがいた部屋に入居するのだけど……あら、そこまで喜ばなくていいじゃない。照れるわ」

「照れるなよ!!え?どうして!?!ミッドでの研究とかは!?!」

「軌道に乗り始めて順風満帆。名無しの研究員の力が特に役にたったわ。私は変わらず管理局への助力はしてるし、アリシア達と住みたいし、フェイト達はいつの間にか学校に行ってるし……制服姿を生で見たいのよ!!アナタにわかる!?!この気持ち!!」

「いや、なんかスイマセン」

「とにかく、これからも課題を出しに様子を見に来るから悪しからず」
「課題メイン!?何!?俺を過労で倒れさせたいの!?怖いんですけど!!」

「安心なさい。アナタの観察がメインで課題がサブよ」

「様子を見に来るのはサブですらないのかよ!!」

「落ち着きなさい、落ち着いて深呼吸よ。面白い」

「今本音がボロつと露見したな…」

「露を見る程寒くないでしょ」

そういう事じゃないんだよ。

「とにかく、少しは自分の体に気を遣いなさい」

「自分に配れる程の気はないのさ」

「なら私に心配されときなさい。子供なんだから、少しは大人の言うことも聴くものよ」

「ご生憎。大人の言うことを信用するなど言い聞かされててね」

「そう、じゃあ言い換えるわ。私の言うことを聴きなさい。アナタの事を大切に思う大人の言葉を聴きなさい」

「……アー」

「次にアナタの口から出てくる言葉がYesかハイか楽しみね」

「ローとでも言いたい気分だ」

「雷で焼き切るわ」

「心配とか大切とかどこに消えた」

「霧散したわ」

「南無三」

「とにかく、わかったわね?分からなければ分からせるまでなのだけ
ど」

「……ちなみにどうするんだ?」

「縛り上げてあなたを飼育するわ」

「フェイトの二の舞は勘弁だわ」

どこからともなく取り出したロープが物凄く怖い。

—むしろノーと言うべきだ

—ノー!!ノー!!

—おいおい、落ち着け、落ち着いてノーと言うんだ
—ノート
—アウト
カットカットカットカット。

13 本当に、幸せだ

―ふむ、管理局の奴らか

声の主は上を向いて呟く。

瞬間に、剣が屋根を突き破り、斧が柱を折り、槍が床を貫いた。

―まったく、クソ共め

声の主は目の前で誰かを庇うように立っていた。

誰かは必死でその行動を止めるも、声の主は軽快に笑う。

―残念ながらやめれないね

―私は悪人だからな。お前のような子供を裏切る事も大切な事さ

声の主は幾本の剣と槍に貫かれ、斧に片腕を切断されて、血濡れの片手を誰かの頬に当てて呟いた。

―私を殺したのは誰だった？

「よお！なのは！今年と同じクラスだな!!」

「やったね、ライト君!!」

「みんなも同じクラスでよかったな!!」

「ええ、そうね」

「おいおい、アリサ嬉しくないのかよ」

「嬉しいわよ。ただ、少しね」

「どうかしたか？バニングスさん」

「別に、なんていうか、何とも言えないわ」

―さすがツンデレさんだ!!

―キヤーツンデレさん!!

デレ期の来ないバニングスさん。

「で、はやてはどうなのよ？」

「一応歩けるようになってる。編入届けとかも出してた、時期もいいから今日から来るんじゃないか？」

「いや、どこのクラスか聴いてるんだけど」

「さてね。運が良ければココのクラスじゃないだろ」

「ご尤もね」

「はア？運が良ければこのクラスになるだろ」

「そうだな、悪かった」

「ええ、悪かったわ」

本当に悪かった。

―言葉の話じゃなくて俺たちの運の話だがね

―本当に悪い

―なんか厄介な人間を固めただけじゃね？

―土0にはなりそうだな

俺もマイナス側だな。

「はーい、席についてくださーい」

担任になるだろう教師が来て、生徒達が自分の席に戻る。

「今日から新しい学年、クラスです。隣に知らない人が沢山いると思います。それはピンチではなくチャンスです。友達を増やし、是非とも楽しい一年にしてください。」

そんな新しく、楽しい一年の為に更に新しい子をこのクラスに入れます。入ってくださいーい」

入ってきたのは、背筋をピツシリと伸ばしてどこかギコチナイ、茶髪の女の子。

黒板に自身の名前を書いて、くるりと振り向く。

目があった。

―やばい笑ってるのがバレる

―落ち着いて対処しろ

他にバレない程度で手を振ってみれば、どこかギコチナイ空気が和らぐ。

「皆さん、はじめまして。八神はやてと言います。今までは事情で学校に通えませんでした。ちよつとづつ、皆に教えて貰おうと思ひます。どうかよろしくおねがひします」

ペコリと頭を下げて、顔を上げて笑顔が見える。

ワーキヤー騒ぐ子供達。

—うっせえな

—おいおい、子供にイラつくなよ

—スメラギも騒いでるのはどういう事だよ

カット。見てて微笑ましいのだからいいじゃないか。

「なるほどなあ、なんか面倒な人と都合のいい人を詰め込まれた感じのクラスやねんなあ」

「そういうこつた。よかつたな面倒側」

「夕君も面倒側やろ？」

「おいおい、俺みたいに教師の言うことをイエスで応える生徒はいねえよ」

「ユダで答えそうやけど？」

「銀貨でもくれればそうするさ」

「誰が磔られるんやろなあ」

「アンタら、食事中の話題じゃないわよ？」

「あはは…」

翠屋にて昼食に誘われたのでのんびりと珈琲を飲む。

—あれを誘われたと言うのだろうか

—感覚的には、おいお前ちよつと来いよみたいな感じだったぞ

カット。そんな事実なかった。

バニングスさんは裏表のない素敵な人です。

「というか、どうしてお前は珈琲しか飲んでないんだよ」

「うまいだろ、珈琲」

「うまいか？珈琲」

「特にココの珈琲は美味しいよ。詳しくはわからんが飲みやすい」

「オレにはイマイチわかんねえよ」

「お前にもいつかわかるさ」

「ゆう君ってよく珈琲飲んでるよね。好きなの？」

「……好き、なんだろうな。うん、好きだ」

「なんで微妙に言い淀むのよ」

「改めて自分の好みを知ったらこんな感じになった。他意はない」

カップに口をつけて、残っていた珈琲を飲み干す。

—随分と影響されている

—まったくだ

—依存だな

—異論はない

カットカットカット。

「というか、アンタら管理局とやらの仕事はないの？」

「今日はお休みな」

「私達は囑託の人間だから、呼ばれないと動けないんだ」

「私は研究員だからねー。今は新しい研究レポート書いてる途中だから」

「ご苦労なことって」

「うん、このレポート内容の大半はユウちゃんが出した内容なんだけ

ど？私は今、とても人を殴りたいわ、殴りたい。眼鏡を掛けて珈琲を

飲んでる奴を至極、殴りたい」

「泣くまで殴られるのは勘弁だ」

「オレも今日は休みだぜ!!」

「ん？確かお前って正規の管理局員だろう」

「リンデイさんに言われてな。少しの間お前のふぐ(ふぐ)」

「ヤダナーライトクンナニツテルノー」

「……まあ、休みならいいか」

お前の、その言葉の後に続く言葉はなんとなくわかる。

―監視、が妥当か

―一応敵だったし

―ロストロギア所持者だからなあ

―というかコイツにそんな事喋って良かったのか？

―ロストロギア持ちだとかは思われてないのか

「ホッ……ライト君何言ってるの……」

「いや、悪い……」

「監視相手に知られるなって言われてたよ？」

「大丈夫だろ。アイツもなんか納得してたし」

「アンタら、なに二人でゴニョゴニョ喋ってるのよ」

「いや！何でもナイゼ!!」

「そ、そうだよ！あ、シュークリーム美味しいんだよ!!」

本当に大丈夫か？管理局。

―気にはせんが、内情がボロボロと出てるぞ

―子供に任せる事じゃないもんなあ

まあ、どうでもいいか。

「……」

帰宅してようやく一人になった。

―最近人の出入りが多かったからな

―まったく、幸せな人生だよ

―シアワセソウダナ

本当に、幸せだ。

「ゲホッ……ゲホッ……ッ、……」

出てきた咳がなかなか止まらず、玄関で座り込む。

止まらない。

止まらない。

止まらない。

夜天の事件の後に度々起こる喘息に似た症状。

体感出来る程、自分に忍び寄るアレ。

「ケヒツ……フフ、アハハ……」

手に付いた液体を見て思わず唾つてしまう。

口を拭い、洗面台に向かい、蛇口を捻る。

流れる透明に混ざる赤を無視して、頭から水を被る。

ダラダラと背中を伝う水も無視して、目の前にいる眼鏡の少年に忠告する。

「時間が無いぞ。ユウ。お前の願いを守らなければ……急げよ、ユウ」

目を瞑り、深呼吸する。

何度も何度も反芻する、あの時の記憶。

どうしても見えない、太陽の前にいた影。

降り注ぐ武器達。

回避方法を選択、選択、選択、選択選択選択選択選択選択選択選択。

「ゲホッ、ゲホッ、ケヒツ、ヒヒ……チクシヨウめ。わかっているよ。わかっているんだ。早く殺さないと、殺さないと。早く殺したいのはわかっているが、少し待ってくれ、少し、ほんの少しだゲホッ、ゲホッ、」
もう一度口を拭って、深呼吸する。

まだだ。

まだ……

14 虚ろな戈を持って、遊ぶのさ

―殺せ

―殺せ

声の主達は言う。

誰かに常に訴えている。

―殺せ

―なぜまだ生かしている

―殺せ

ずっと、ずっと聞こえていた声。

7年間、2556日、61344時間。ずっと聞こえていた声。

男も女も無く、音として、常に聞かされ続けた声。

―殺せ!!

―殺せ!!

―殺せ!!

「……なんだ、ムツツリか」

「お前は僕を怒らせたんだな？もしくは殴られたんだな？」

「やめてくれ」

休みの日に珍しく来たのは黒髪の管理局員。

―どうした局員、暇なのか？

―暇なのはイイ事だ

「で、何用だ？俺も読みかけの本があつて忙しいんだ」

「友人が遊びに来たというのに存外な態度だ」

「ソレを言うか。言ってしまうのか友人」

「言うね、今言わなければいつ言うと言うんだ友人」

「来世にでもとつてな」

扉を開けて、彼を家に招き入れる。

—シヨタキタアアアアアアアアアアア

—これは、つまり、えつと、ハアハア

—落ち着け、まずは縛って吊るして

—アンコウの処理だな

—人にやるには少しマズイな

カット。

「飲み物は珈琲でいいか？」

「出されるのか」

「今ので出す気がなくなった…が、仕方ないので淹れてやろうと思う。
思い知れ」

「おい、ちよつと待て何をやる気だ!!」

「ナンデモナイヨ」

「まあ君が何もしないのはわかってるがね」

「それはドウモ、フヘヘ」

「よし、待て」

「おいおい、流石に杖を取り出すのはどうかと思うぞ」

「友情とは時に苛烈で無ければ成り立たないものさ」

「苛烈とは時に友情がないから成り立つものなのか」

結局何もイタズラ出来ずにカットを渡す。

—どうせするつもりも無かった

—ミルクがウツ

—まじでやめろ

—カット

カット。

「で、管理局の方はどうなんだ？」

「事務仕事だからな。早々に終わらせてきた」

「ほう、それは何故に？」

「君に会いたかった」

「……………」

「いや、なぜ引くんだ？」

「お前って天然だったのか。落ち着いて自分の言った言葉を思い出せ、そして俺に謝れ」

「……………ア、すまない。言い方が悪かった」

「わかってくれるならいい」

落ち着いて椅子に深く腰掛ける。

—告白キタ!!

—シヨタから告白キタ!!

カット。男色の趣味はねえよ。

「俺に用って…？」

「ア…：…なんだ、…」

「エラく言い淀むな。言いにくいことか？」

「言いにくいと言われればそうなんだが。アレだ、なぜ君に言おうとしたか頭の中で思い出しているところだ」

「そこからかよ」

「ああ…」

「俺とお前に接点がありません、多少の信頼関係はある、俺なら絶対に他言しないと思った、俺の持つ知識を使おうとした」

「全部だな」

「全部か」

「強いて言うなら、最後がイラナイ」

「俺的には最後のモノがある方が楽だったな」

溜め息を吐いて、カップに口を付ける。

珈琲の苦味が舌に乗り、香りが口内に溢れる。

「実は、好きな人ができたんだ」

「ブツ」

「おい!!こっちにかかったぞ!!」

「ゲホッ、今のはお前が、いや、悪かった」

洗面台からタオルを取り出してクロノに渡す。

―机が悲惨な状態に!!

―机が珈琲に汚されてる!!

―黒板とチョークみたいにいうんじゃありません

「好きな人ねえ」

「君ならいいアドバイスをくれると思ってね」

「俺よりスメラギ君に聞いたほうがいいだろ、こう言う内容は」

「彼に聞いても具体的なアドバイスは貰えないと思ったんだ」

「俺も似たようなモノだぞ、なんせ動くのはお前だし」

「それは…わかってるさ」

「ふむ、俺も恋愛経験豊富とは言えないのだけどな」

「…それは、僕を馬鹿にしてるのか?」

「どうしてそうなった」

「…：気づいてないのか?」

「俺に好意を寄せて、尚且つまるで恋人の如く振舞ってる人間がいると?…どこにだよ」

「…あれか、君は筋金入りというやつか」

「針金的なモノは入ってるが、筋肉は残念ながら金じゃない」

「あの子らも苦労するな…」

「いや、だから誰だよ」

「それは君が自身で知る内容だ。僕の口からは言えないさ」

「そうかい…まあどうでもいいがね」

珈琲を飲んでると思いつきリジト目で見られて溜め息を吐かれた。

「まあ話を戻そう」

「…：なんだムツツリか」

「どうしてソコまで戻した?やはり殴りたいのか?」

「お前の杖の先は尖ってて痛いんだ、突きつけるな」

「わかった、このまま刺せばいいんだな」

「スイマセン、本当にごめんなさい」

「わかればいい。わかっててワザとなら刺すけどね」

「ワザとに決まってるだろ」

「刺されたいのか?」

「なんだ、指したいのか？盤がないから口頭で言う事になるぞ」

「将棋はまだ覚えてなくてね」

「チェスでも負ける気はしないさ」

「ほお…僕に勝てるだけでも？」

やけにムキになるな。

—子供如きが私に勝つと？

—笑止!!

—片腹が激痛だわ

—盲腸じゃね？

「では先手を貰おう、e4」

「e5」

「d4」

「exd4」

「そうだな、ふむ、ただゲームをするのは面白くない、そうは思わんか？Qxd4」

「何を言い出すんだ、Nc6」

「タダでアドバイスをやるのもなんだから、俺に勝てたらアドバイス、俺に負けたら…そうだな。Qe3」

「僕に何をさせる気だ？Be7」

「そうさな。少し情報の提供をお願いするかな、Bd3」

「Nf6。情報？」

「Qg3。そう情報。無限書庫にも無くてな」

「そんな情報を僕が持つてるとでも思うのか？d5」

「思わん」

「おい」

「戯れ程度だよ、e5。別段急ぎじゃないから、ゆっくり探してくれても構わんよ」

「Ng4、何を探せと言うんだ、君は」

「Nf3。…：管理局に所属するレアスキル所持者、及びその能力」
「……」

「どうした、お前の番だぞ」

「君は、何をする気なんだ？」

「知りたいか？勝てば簡単に教えてやるよ」

「……その賭けに乗らないといえど？」

「別段どうもしないさ。言つたら？戯れだつて」

「遊戯にしても冗談がすぎるぞ」

「虚ろな戈を持って、遊ぶのさ」

「……残念ながら、僕も立場がある」

「そらそうだ。ご尤も」

「すまないな」

「いや、いいさ……大して変わらんよ」

少しだけ眉間を寄せられたが、無言を貫かれた。

―相手の一手を予想

―予想の場から最善手を選択

―次の相手の一手を予想

―予想の場から最善手を選択

―分割思考の使用は計画的に、つてね

「チェックメイト、だな」

「どうして君はノータイムで指してくるんだ!!」

「思考時間なんて普通いらんだろ」

「いるだろ!!普通は!!どういう思考回路してるんだ!!」

「まあ落ち着け、クロリン。僕に勝てると思うなよキリッ」

「この野郎お。これ見よがしに言うなあ、君はあ」

「ハッハッハッ。まだまだ予測が成ってないな」

「こつちもチート持ちだけどなあ。」

―シ―

―チートじゃないもの

―曰く、鍛錬すれば誰でも手に入るらしいし

―空戦魔導士は所持済みなんだろう？

「まあ色恋沙汰に興味は出ないが、アドバイスになるかわからん事を

一つ」

「ん？」

「恋を目で見るとは。アレは心で見るとはらしい」

「……わかつてるさ」

「ならいい。恋人と書いて愚者とも呼べる程度に失恋してこい」

「酷いな、君は」

「酷いよ、俺は」

まあなんにせよ、彼の言葉が真実かは知らない。知りたくもない。

―暇つぶし程度にはなつたさ

―さてさて、誰に恋してるのかね？

―母親じゃね？

―き、近親そ

―言わせねえよ

カット。

どうしようもないさ。どちらにせよ。

*

15 黙ってます！・キリツ

「あ、はやてー！」

「お、こっちやで、フエイトちゃん」

暑い外と打って変わり涼しい図書館の中。

珍しくはやてに呼ばれてこの図書館にきたのだけど、要件を一切聞いていない。

それどころか、何かを言おうとしても言い淀んでる感じだった。

「ごめんなあ、忙しかったやろうけど」

「ううん。大丈夫。書類仕事は全部アリシアが持って行っちゃうから」

「……溺愛されてるんやなあ」

「愛されてる、というより頼ってほしいんだと思うよ？色々あるから」

「そうか。まあ深い所までは聞かんわ」

何故か呆れられたように溜め息を吐かれて、はやての向かいの席に座る。

はやては自身の両サイドにある本の塔を少し横にズラして真剣な顔つきになる。

「実は夕君の事やねんけどな」

「ユウの？」

「ユウの話？」

でも本人はここに居そうにもないし。

「正確には、夕君の夢の話」

「……あんまり詮索しない方がいいんじゃないの？」

「そうは思ってたんだけど……」

「……」

はやての言いたい事もわかる。

というか、この先に出てくるはやての言葉が分かってしまった。

「あれって、」

「はやて、そこから先は言っちゃダメだよ」

「なんでや!! あんな事した人間が！」

『八神ちゃーん、館内では静かにねー』

「館長さんごめん!!」

『んー、司書さん怒っちゃうつと怖いからー』

「その一言が無ければ幸せになれるんやろなあ…」

「出ようか」

「…せやね」

溜め息と一緒に椅子から立ち、ズラしていた塔を持ち上げる。

結構な重さになる筈なのに。

「ちよつと待っててな。貸出届け出してくるから」

「あ、うん」

アレを全部借りるのか。

少しだけ顔が引きつった気がした。

「ん、お待たせ」

「全部借りたの?」

「いや、持っていった本と持っていく途中で見つけた本があつてやな」

「いや、ごめん、聞かなかつたことにする」

「これでも結構少ない方やねんけどなあ」

「…誰と比較してるの?」

「夕君」

「比べちゃダメだよ…」

「いやあ、友達が夕君しか居らんかつたから」

苦笑するはやてを見て、ようやく理解した。

ユウの力になりたいのだけど、本当に真実を彼に告げていいか迷っているのだろう。

事実、私もそうであるように。

「え？迷ってなんかないよ？」

「ええー……」

「言える訳ないやん、あんな事」

喫茶店の席に座り、お互いの飲み物がきた所で話が進む。

私の思い違いだったようだ。

はやては私よりもしつかりしていたのだった。

「アレと仕事我被った時にこれ見よがしに見せられたから……フェイトちゃんに確認しとこうと思ってなあ」

「……じゃ、じゃあ図書館で叫んだ理由は？」

「あんな事した人間が管理局で働いてる理由がわからなくて、頭の中がぐちゃぐちゃになって、咄嗟に声が出た」

「うわー」

「そう言わんといてさ。というかなんで止めたん？」

「一応言うけど、はやての警戒はまだ取れてないんだよ？そんな状態で、彼の事を悪く言うのは心証が悪くなる」

「……止めてくれてありがとう」

「どういたしまして」

ストローで飲み物が吸い上げられ、白かったストローがオレンジ色に染まっていく。

「んで、や」

「うん」

「私なりにアレとの仕事が終わって色々考えた。管理局がどうしてアレを雇ってるか」

「……やっぱり、純粋な力じゃないかな」

「いや、ズバリ裏で色々動いててやな、悪の結社とかが」

「ないよ」

「いや、ほら、悪い魔女とかが」

「ないよ」

「むう……まあ雇われた理由はそれやろね」

背もたれに体重を預け、上を向くはやて。

あ、ここの紅茶美味しい。

「問題は管理局がこの事件を知ってるか、やね」

「あの夢を見てから私なりに調べたけど、ユウの出身は一切わからなかったんだ」

「つまり、事件のことも不明か」

「第一、私が管理局に入る少し前にライトが管理局に入ったから記録がないのもわかるんだけど」

「……夕君の出身がわからんのはオカシイね」

そうなのだ。

ユウは管理局の事を知っていたということは管理世界にいた事は確かだ。

そこで起こった事件、それも世界一つ消える事件を記録していない筈がない。

「まあアレが管理局に勤めてる理由は、それほど重要でない……か？」

「うーん、あとでも考えれるからね」

「うん？でも管理局に入ったのが……えつと？」

「大体一年ぐらい前かな」

「それやったらおかしくない？」

「え？」

「夕君の管理局嫌い」

「……あ」

そうだ。決定的にオカシイのだ。

彼が事件の犯人だとしても、その時彼は幼くて、更にいえば管理局にも勤めていなかった。

「もしくは、彼と同じスキルの人がある一人いるとか？」

「それは……とは言い切れへんけど、おらんと思う」

「居て、それが恐ろしく極悪人とかだったら話は早いんだけどね」

「人を呪わば穴二つ、それでも夕君は救われへん」

「だね……大切な人が殺されて、犯人が目の前に居るんだから」

「私なら、というか私はその時点で世界の破壊を望んじゃった人やねんけどね」

「はやてのアレは……特殊すぎるよ」

周りから色々言われている状態で、自分の責任だと言われて大切な人が殺されたのだ。

絶望もするだろう。

「今のところ救いは夕君が彼の事に気付いてない事だけやなあ」

「気付いたら」

「やめ。気付かせへん、絶対に」

「そう、だね…」

「ともかく、私達が出来る事を探そ」

「二人の戦いなんて、見たくないもんね」

「友人同士の争いを見て楽しめる程狂ってないからね」

「そうだ。私達の出来る事を探そう。」

「まずはユウとライトを知るところからだろう。」

そして、事件の真相を知ること、あとは犯人の捕獲、ユウに謝らせること。

「とにかく、夕君の事やねんけど」

「あ、うん」

「アンヘルって何なの？」

「あー…えっと、詳しいことは私にもわからないんだけど、あ、そうだ」

「ん？先に言うけど夕君に直接聞いたあかんで？」

「わ、わかってるよ!!母さんなら何か知ってるかも知れない」

「フェイトちゃんのお母さん…エアメールの人か」

「不名誉な呼び方が定着してる!?頼むから目の前で絶対に言わないでね!」

「お、おう、そんな真顔で迫らんといて」

本当に怖いんだから。

ともかく母さんの所に移動しよう。

「……フェイトちゃんつてき、あざといとか言われへん？言われてなかったら今言うわ、あざとい!!」

「なんで!？」

「私のセリフ盗られた!？」

「ソコ!?そこなの!？」

「なんで夕君のマンションにフェイトちゃんの家があるんや!!なんでや!!なんでなんや!!」

「は、はやて、ゆらさ、ゆら」

「あ、ごめん。つい。他意はない」

「悪意だけの行動ですか…」

「悪意はない。塩ビ一割や」

「ビニールは感情じゃないよ…九割の感情は何処に？」

少しだけ気分が悪くなった。

前後に何度も揺らされると流石にキツイ。

「でも、フェイトちゃんの戦闘方法って高速で移動するのにあんなんで気持ち悪くなるもんなん？」

「集中してない時にやられると、流石に」

「そんなもんなんかあ」

「だから次からやるときは言ってるね？」

「言えばいいんかい!!」

「あ、いや、あれ？」

今オカシイ事を言ったのだろうか。

ともかくエレベーターで上がり、ユウの部屋を過ぎて私の、今は家族の部屋に。

「ただいまー」

「おかえりなさいフェイト!ああ心配したわ!!1時間置きに連絡しろとあれほど」

「お、お邪魔します」

「…心配するのだから、連絡しなさい。私は研究で忙しいから部屋にいるわね」

「プレシア、もう手遅れだと思っようー」

「黙りなさいバカ犬」

「いひやいいひやい、ほっへがちひれるちひれるから」

「千切れるまで引っ張ってあげるわ。今日のアナタの晩御飯になるのだから」

「あー、わかった。とにかく、take2すればええと思うんよ」

「そうしてくれると助かるわ」

「ええんかい…いや、私が言った事やし」

「えっと、アルフ大丈夫？」

「いひやい…ぐすん」

「何、この子供かわええ」

「ただいまー」

「おかえりなさい、フェイト。そちらはお友達？」

「お邪魔します。八神はやてです」

「私はプレシア・テスタロッサ。八神…そう、あなたが夜天の主ね」

「知ってるんですか!？」

「私も一端の研究者なの。管理局務めのね」

「さつきとは打って変わって、随分知的な会話だねえ」

「……」

「いひやい!!ほっへはしよんなにのひない!!のひないよ!!」

もう私はこの空気に慣れてしまったのでツツコマない。ツツコマない。

「…えっと、ちよつと聞きたい事があるんですけど」

「犬の捌き方?今なら実物があるから容易いわよ」

「ちよつと知りたいかも」

「止めてよ!!そこは止めてよフェイト!!」

「え?アルフは狼でしょ?」

「天然が疎ましい!!」

「可愛いじゃない、さすがフェイト」

「アリシアー!!早く帰ってきて!!ツツコミ不在でここは辛いよー!!」

「えっと、いいですか？」

「ええ。私に答えられる事なら、フェイトの好みからアリシアの弱点まで」

『アンヘル』の事を知りたいんです」

急に母さんの顔が真面目になる。

さつきまでの柔らかく穏やかな空気はなくて、昔のように冷たくて鋭い空気を纏っている。

「ソレを知ってどうするつもり？」

「知って…わかりません。わかりませんが、知らないと知れないんです」

「母さん、お願い」

「…：はあ、いつの間にか女の子ね」

「私は前から女の子だよ？」

「そうね、そうだったわ」

クスリと母さんが踵を返してリビングに向かう。どうやら教えてくれるらしい。

はやてと顔を合わせて、母さんを追って、リビングのソファに座る。

『アンヘル』、出自はアナタの持つ夜天の書と同じベルカで、ソレよりも古いと言われているわ」

「夜天の書よりも…」

「実際は知らないわよ？私は歴史家でも無ければ伝承に興味があるわけでもないから。」

能力は蒐集と貯蓄。そして暴走による破壊ね」

「それって」

「そうね、夜天の書と能力自体は変わらないわ。転生機能があるところなんてそっくり」

「つまり…所有者にも何かしらの影響がある？」

「…：そうね。所有者を食い殺すわ」

息を飲む。

母さんから淡々と出てきたのは私達を驚かすのに十分な破壊力を持っていた。

つまり、死ぬ？ユウが？あのユウが？

「夜天の書みたいにバグがあれば問題なんでしょうが、所有者がアレよ？」

「あ……」

「記録を確認したら60ぐらいまで生きた所有者もいるらしいし」

安堵する。

それならば、大丈夫だ。ユウは死なない。

「その60歳の人間は『アンヘル』をあまり使用しなかったんじゃないですか？」

「……記録には何も載ってないわ」

「そう、ですか」

「勘が良すぎる女は嫌われるわよ？」

「好かれる予定の相手は私よりも鋭い人間なんで」

「そう……あの子もいい友達を持ったわね」

「えっと、どういうこと？」

「フェイト可愛いよフェイト」

「隠す気どこいった？私のホツペの犠牲は!？」

「今日の夕食のお肉、私の分はアルフにあげようかしら」

「黙ってます！」

すごくキリツとして言ったアルフは母さんに抱きついて「はにゃーん」となっている。狼なのに。

そんなアルフを撫でてる母さん。顔が完全に悪人顔なのだけれど、気のせいだ。

「簡単にまとめた資料をあげるわ。ソレを見て、どうするかはアナタが決めなさい」

「……はい」

「私には？」

「私が居るでしょ？ついでにお勉強よ」

「え？え？」

「ほな、フェイトちゃん頑張ってるな？」

「え？」

「フエイトだもんねー」

「わけがわからないよ…」

はやてが帰宅してから鼻歌を奏でるアルフの隣で勉強の疲れで机に倒れるところをアリシアに発見されるまであと四時間程掛かってしまうことを私はまだ知らない。知りたくない。

16 化け物からの賛辞で悪いがね

「おはようございます、我が君」

「おはよう、リイン」

綺麗な銀髪が朝日に照らされてキラキラと光る。

赤い瞳と少し表情が固いが、そんな彼女がエプロンをしているのは一緒にすんで六ヶ月経つが相変わらず見慣れない。

「どうかしましたか?」

「なんでもないよ? さつてと、今日も学校頑張るで!」

「そうですね、相変わらず調整は苦手そうですが」

「リインってちよつとキツイよね」

「主の為に苦言を呈するのも私の務めなので」

「さいで…ありがとう」

相変わらず歩くのに使う魔力の調整が上手く出来ない私。たぶん夕君がしればゲラゲラ笑うだろう。

…：…なんかりアルに想像出来てしまった。

ともかく、最初にある程度調整されていればそこからは歩けるのでリインには毎朝苦勞をかけている訳だ。

一々切ってしまうより、流し続けた方が楽なのだから仕方ない。

最初の方は流し過ぎで倒れたこともあったが、どうやら慣れてきたらしい。

「…：…これで大丈夫です」

「よつしや。ありがとう」

「いえ。ああそうそう、我が君」

「ん?」

「誕生日おめでとうございます」

「…：…ん、ありがとう。リインフォーエス」

「はやて! おはよう!!」

「おはよー、早いなあヴィータ」

「へへへ、はやて！誕生日おめでとう!!」

「ありがとう、ヴェータ」

赤橙の髪を撫でて、思わず頬を緩めてしまう。

「おはようございます、主ははやて」

「おはよう、はやてちゃん」

「おはよう、主」

「おはよお、シグナム、シャマル、ザフィーラ」

ダメだ、緩めてしまった頬に拍車が掛かったように嬉しくなる。

二年より前には想像出来なかった日。

一年前には慌ててわからなかった日。

そして今年から変わることのないだろう日。

「我が君。涙が」

「え？あ……うん」

頬を拭い、笑顔が溢れる。

幸せだ。慌ただしい去年とは違って、心の底から気持ちが溢れ出てくる。

「えっと、はやてちゃん？」

「どないしたん？」

「嬉しがってるところ悪いんだけど」

シャマルが時計を指差す。

時間を確認して、思考が停止する。

長針が、いつも朝に確認する時間から六歩程進んでいる。

つまりだ。

「い、いってきまーす!!」

「気をつけてねー」

本当に、去年からは考えられない日常だ。

「ま、間に合った……」

「お疲れだな。いつも時間ギリギリというわけでは無いだろ」

「夕君、待たせてしまうやろ？」

「待ってる間は舞ってるから大丈夫さ」

「つまり踊ってるんか」

「おいおい、舞を馬鹿にするなよ？アレは無駄を極限まで省いてる動きだぞ？」

呆れたよう肩を竦める眼鏡の彼。

私が歩けるようになったのは彼の御蔭なのだが、歩けるようになった今でも早朝のランニングには参加している。

というか、参加してないと夕君が鬼のように怒るのだ。

一日だけ寝坊してしまったのだが、夕君が私の家に居て清々しい顔でお茶を飲んでいた。その日一日、八神家の面々は真っ青な顔で過ごす事になった。シグナムでさえ青くなっていった。

「どうかしたか？」

「なんでもありません!!サー!!」

「誰が騎士か。名誉を得る程度に働いた覚えもないぞ」

「アレだけ働いて何を言うか」

「残念ながら、名誉を渡してくれる相手がいなくてね」

どうやら軽口は終わりらしく、夕君は踵を返してゆっくりと走り出す。

その隣に並ぶように私も足を動かす。

走ってる間、私は走る事だけに集中している。

これは冬場に夕君に言われた事で、自分がどう走っているかを理解する為なのだ……正直に言おう。無理である。

隣に好きな人が居るだとかでは無く、夕君の求めるレベルが高すぎるのだ。走りながら筋肉の動きや骨の動作範囲を理解しろだの、鼓動を安定させるだの、年齢10になるうら若き少女に求めることではない。

聞いた時は、少しキョトンとして噛み付くように否定した。否定し

た結果、『当然だ、バカかお前は』と言われた。

要はそこまで至れということらしい。尤も彼はそこまでいけると思っていないらしい。私もそう思う。

言うからには、彼はしているのだろうが。いや、これすらも邪念か。ともかく走る事に集中しよう。

「はい、到着」

「はあ：はあ：なんや、今日は微妙に疲れたわ」

「当然だろ。時計を確認してみろ」

「あ？」

「ゴールである公園に立つ時計を確認すればいつもより十分程早い。走っていたコースは一緒だった筈だ。」

「少しスピードは速くしてみた」

「そういうのは、先に、言わんかい」

「言ったら途中からキツくなるだろ、ほらマッサージしてやるから座れ」

「はいよ」

近くのベンチに座り、夕君に足を向ける。

私の前で膝をついて、相変わらずの無表情でふくらはぎを触っている夕君。

別に不満とかそんなモノは一切ないが、もう少し表情があってもいいんじゃないだろうか。仮にもどころか、私は女の子である。

「なんか言うこと無いの？」

「筋肉が固い」

「ちやうやろ」

「むう……前より筋肉が増えたな」

「もうええよ」

「ふむ…直に触りたい」

「チエストオオ!!」

「肩ア!?!」

思わず反射的にかかと落としをしてしまった。

目の前にいる彼は肩を抑えて蹲っている。なんかごめんなさい。

「酷くないか? 酷くね? おそらく求められてたであろう言葉を吐いたらこの仕打ちは酷くね?」

「ええか、夕君。女の子には触れられたくない部分があるんや」

「ああ、そうか女の子だったな」

「ソリヤア!!」

「コメカミツ!?!」

思わず蹴ってしまった。我ながら中々綺麗な軌道で相手のコメカミを捕らえたと思う。ザファイーラに感謝。

「お父さん、お前をこんなヤンチャな娘に育てた覚えはありませんよ!?!」

「ヤムチャな父を持った覚えもなければアンタに育てられた覚えも無いわ!!」

「同い年の娘か。この場合、俺の妻はシグナムかシャマルなるのか」

「ザファイーラもおるよ」

「お母さん、お前をそんな子に育てた覚えはないわよ」

「乗り気やなあ。ザファイーラに言うとかわ」

「ごめんなさい。ホントにごめんなさい。真面目にします」

分かれればいいのだ。

というか、仮定の場合でも妻だとか、嫁だとか言わないでほしい。

まあそんな事、目の前の朴念仁が知るわけがないのだけだ。

「ん?」

「なんでもないよ」

「そうか。ああ、迷惑でなけりや今日の放課後にお前の家に行ってもいいか?」

「別に構わんけど…」

「ふむ、ありがとう。シャマルに頼みたい事もあったしな」

シャマルに用事か。

まあ、朴念仁やから忘れてるんか…それはそれで悲しいなあ。

でも自分で言うのもなんか違うしなあ。仕方ないか。

「はあ…」

「どうしたんだよ、はやて?」

「いや、なんでもないよ」

「そうか、悪いな付き合ってもらって」

「ええよええよ」

隣で歩くのは笑顔なイケメンと栗色の髪の友達。

どうしても面白い物に付き合っしてほしい、ということとで絶賛面白い物に付き合っている。

夕君は夕君で

『そうか。まあ先に行ってる』

と言っつて颯爽と帰りやがるし。ともあれ、私の溜め息は尽きない。

「ごめんね、はやてちゃん」

「ええっつて、別に予定あるわけでもなかったし」

「そっか、ありがとう」

「ところで、何買いにきたん?」

「あ、えーつと、」

「翠屋で新しくケーキを作るらしくて、その買出しなんだ!!」

「ふーん。で、なんでソレをなのはちゃんや無くて光君の口から出てくんの?」

「え、えーつと」

「ら、ライト君は家に入入りしてるからっ」

「……」

怪しい。怪しいを通り越してなんか微笑ましいほどチグハグな怪

しぎだ。

どうして二人が私を連れ出したかは分からないが、まあ今は乗ってやることにしよう。

「で、なんで二人は私に着いてきてんの？」

「いやあ、ほら、はやての家知らなかったなあと思って」

「別に自慢できるような家ではないし、材料ぐらい置いてきたらええのに」

「え、あ、ほら、オレの鍛錬にもなるし」

「…まあええけど」

ともあれ、買い物も終わり私はどこぞの勇者のように後ろに人を連れ家路に着いた。

本当に、疲れた。どうしようもなく、体力をガリガリ削られた。ピコピコと私に文字が出てるならオレンジ色にでもなってるだろう。

「ここがはやての家か」

「普通やろ？中に入っても普通やで？」

「ソウナンダー、ハヤクハイツテミタイナー」

「…なあ二人とも何隠してるん？」

「カクシテナンカナイデ!？」

「ホンマに隠し事下手やなあ」

思わず溜め息を吐いてしまう。ともあれ二人が何か隠していて、それが私の家にあるらしい。

少しだけ考えて自嘲する。私たちの中で私の誕生日を知っているのは夕君だけだし、その夕君は朝会った時点で言わなかったではないか。

第一、去年にサプライズは嫌いと言っていたではないか。

夕君の性格からして、絶対はない。

「まあええわ」

考えるのは扉を開けてからにしよう。

開けて異常なら、そこから考えよう。

私は慣れた手つきでドアノブに手を掛けて扉を開く。

同時に破裂音。

それが連続して舞う煌めく紙吹雪。

『誕生日、おめでとう!!』

何重にも重なる声に唾然とする。

一度考えて捨てた事が目の前にあると結構驚くものだ。

「おめでとう、はやて!!」

「おめでとう、はやてちゃん!!」

後ろから声が掛けられ、流れるように家に押し入れられる。

部屋に入れば、飾り付けられたリビング。

色とりどりの料理。

そして、なぜかメイド服のヴィータとリイン。

え？

思わず一度思考停止してしまった。瞼を閉じて、もう一度開いても、うん。やっぱりヴィータとリイン、さらにはシグナムもメイド服、ザフィーラは執事服を着ている。

『お、おかえりなさいませ。ご主人様』

「お、おう…」

こんな言葉しか出てこないのは仕方ないと思う。朝を思い出してもこんな恥ずかしいことをするような仕草はなかった。

「よう、帰ったか。お帰り」

「た、ただいま」

「二人も時間稼ぎ及び材料調達ご苦労」

「おう！」

「いつバレるかハラハラドキドキだったよ」

「そいつはご苦労さん」

いや、ごめん。バレバレやったで？

でも言わないのが花なのだろう。心の内に閉じ込めておこう。

「あ、はやてちゃんお帰りなさい」

「シヤマルまで…」

「えへへー、似合います?」

「うん、似合つとるよ」

「ありがとうございます。さすが夕君ですよ。はやてちゃんの趣味をわかっているというか」

「夕君が?」

「まあ俺はここまで盛大にするつもりは無かったがね」

「ユウちゃん、それは企画者の言葉じゃないよ」

「発案はコイツだ。俺は料理担当です」

「にやははー、恥ずかしがってる」

「あははー、次の課題覚えとけよー」

「すみませんでした、私が悪かったです」

思わずうわあ、と言いたくなるような現場を見てしまった。

「ほら、はやて。早くこつちに来いって!」

「あ、うん。あれ、夕君は?」

「俺は最後の仕上げがあるからな。先に祝われてな」

ポンと背中を押してくれた夕君。

まあキッチンからリビングは見えるので一緒に楽しむことはできるだろう。

「では、八神ははやての誕生日を祝って、乾杯!!」

「乾杯!!」

「ふう…」

「よう主役」

「やあ助役」

主役が少し席を離れた所で、彼が騒いで盛り上げてくれるので、場は大丈夫だ。

そんな休む私の隣に自然と座るのが彼である。

渡されたオレンジジュースを少し飲む。

「で、夕君が企画したん？」

「夜天たちと俺で祝いたかったんだがね」

「うれしい事にならんけど、前にサプライズは嫌いって言うてなかった？」

「まあな。次を期待されても困るからな」

「それが理由なんか」

「表向きはな。裏は今回でさえも面倒だった。俺の主催ではもうしない」

「酷いなあ」

「個人的には誕生日や祝い事はゆつくりと祝われたい身でね」

思わず苦笑する。

「事は三日前に遡り、俺がうっかり料理雑誌を見ていた事にあたる」

「珍しいなあ、夕君がそんなん読むなんて」

「研鑽は常に積む方なんだ。で、それをフェイトに発見されて……」

まあ紆余曲折あつて今に至る」

「なんや今すごい大事なところが端折られたな」

「勘の鋭いお嬢様が居てね。金髪のお嬢様だ」

「うん、なんか今視線を感じた」

「まあ比較的空気の読める人間だからな。でみんなで祝おうぜー、みたいな事を言い出したバカが居てだな」

「視線は一切感じへんなあ」

「空気を読む以前の人間だからな。で今に至る」

「時間稼ぎとかは？」

「アイツがかつてでた。ついでにケーキの材料も買ってきてもらった」

ああ、なるほど。

テキストに聞かれても言い逃れできる言い訳を用意したわけか。まあ活かされなかったが。

「で、サプライズはプレゼントではなくてな。ほれ」

「へ？」

「メイド服を作るついでに作った」

「…今なんかとんでもない事を聞いたような気がする」

「なに、気のせいだ」

渡されたのは小さなストラップ。

茶色い長方体の真ん中に黄色い十字架。 夜天の書か。

「器用やなあ」

「基本的に暇な人間だからな。それが一番時間かかったわ」

黄色い十字架もしつかりと糸で刺繍されたもので、中に綿でも入ってるのだろうやわらかい本部分。 手の込んだモノ………ん？

「一番って…メイド服とかは？」

「五日で仕上げた」

「なんか、目の前に化け物がおる」

「ハッハッハッ、今更何を言うんだねお嬢さん」

「おーい！はやて、そんなところで何してんだよ!!」

「さてさて、主役は舞台にお上がりを」

「はあ…主役は辛いなあ」

「脇役はケーキの準備でもしてるよ」

「美味しいケーキ待ってるよ」

「御意に」

夕君が立ち上がりキッチンに向かう。

ふと、立ち止まり振り替える。

「そういえば言うのを忘れてた」

「んー？」

「誕生日おめでとう。化け物からの賛辞で悪いがね」

クツクツ笑う彼がキッチンに消えたのを見送り、思う。

あれは、卑怯だ。

赤くなつた顔を冷やすのにまだ外を見ている必要があるようだ。

17 私は独りでいい

暗闇。

月が部屋を照らして、風がカーテンを揺らす。

私が一番嫌いな時間。

私が私だと理解してしまう、最も嫌いな時間。

最も私である時間。私が私故の時間。私を自覚する時間。

叫びたい。泣きたい。

慟哭しても変われない。それは当然の事で、願っても神様は叶えてくれない。

私は化け物で。

誰かは人間で。

私は化け物で。

親友は人間で。

私は他称化け物で。

好きな人は自称化け物で。

彼と違って、私に勇気なんて無くて。

誰かに嫌われたく無くて。

誰にも言えない自分がもつと嫌いになって。

私は、化け物です。

「おはよう、すずか」

「おはよう、アリサちゃん」

新しい学年になり二ヶ月。

長い間一緒にいた親友を騙せる程度に笑顔が上手くなってしまっ

た私。

アリサちゃんも笑顔で何かを喋ってる。

頭の中には一切内容が入ってこなくて、反射で当たり障りのない返答を選んで口から出ている。

これだけ演技が上手くなってしまったのはたぶんゆう君の御蔭だ
と思う。

毎日の様に演技ジミた彼と喋っていたのだ。それに伴い私も演じていたのだから、上手くもなる。

「で、アレとはどうなの？」

「どうって言われても……」

「まあ、それほど急ぐような内容でもないけど、急がないと他に盗られるわよ？」

「……別に、私のモノじゃないし」

「……そっか」

アリサちゃんは少しだけ間を置いてから返事をした。その表情は悲しそうで、私は隠すようにまた笑みを深める。

そんな私を見て、アリサちゃんは優しそうに笑う。

「大丈夫よ、すずかは可愛いもの」

「そんなことないよ」

「……イヤミかしら？」

「そ、そんな事ないよ？」

うまく勘違いをしてくれたらしい。

アリサちゃんは一度溜め息を吐いて、立ち上がる。

「ごめん、ちよっと用事を思い出したわ」

「あ、うん」

「おはよう、バニンギュ」

「ちよっと付き合いなさい」

「首が、首がキュってなってる」

扉が閉められた。他にも何かが始まったような気がするが、きつと気のせいだろう。

学校だから仕方ないのだけれど、今は一人の方がいい。

いや、今も、先も一人で在る事が私なのだろう。なんて、悲劇のヒロイン振るのはやめよう。

私はヒロインですらないのだから。

「じゃあ、すずか、私は帰るわよ？ ホントに大丈夫？」

「うん、先生に言われたお仕事終わらせるだけだから」

「…そっか、ごめんね」

「お仕事だもん。大丈夫だよ」

嘘だ。

本当は仕事なんて任されてない。ただ一人になりたかったのだ。

親友に嘘まで吐いて、一人になる。また一つ嘘を重ねる。

私はどこまで愚かなのだろうか。

化け物らしく振舞うこともできず、人間を演じる事も出来なくなっ
てしまった。

弱い。弱い。弱い。

『化け物が暴走したら危険だろ？』

そうだ。危険なんだ。

化け物は危険。危険だから化け物。

じゃあ自分は？ 自分はどうかのだ？

人と同じ姿で、人と同じ生活をして。しかし人ではなくて化け物
だ。

化け物だから危険？ 私は危険か？

危険だから化け物なのだから、危険なのか。

まるで卵と鶏の話をしているみたいだ。

でも、これだけはハッキリしている。

私が化け物であること。そしてソレを誰かが恐ること。そして誰
もが認めない事。

卵と鶏の話と同じである。もう既に在るのだから根底は覆せない。

コツコツと窓を叩く音が聞こえて外を見れば、水滴が窓に張り付いていた。

雨。

まるで私の心境の様に暗い空。心みたい。なんて。

「傘…忘れちゃったなあ」

口から出た言葉が心境を一切考えない利己的なもので少しだけ笑えた。

これ以上ここに居ても無意味だ。先生が来る可能性もある。

一人で歩く廊下。

私だけの空間。

人間は誰一人いない空間。

下駄箱にも誰もいなくて、扉を開ける音が嫌に響く。

外はザアザアと雨が落ちていて、地面に水たまりを作っていく。

一歩踏み出す。

頭から冷水が流れて、頬を伝い、顎に流れ、落ちる。

瞼に溜まり、頬を伝い、顎に流れ、落ちる。

ダメだ、泣くな。泣いて解決するような問題じゃない。

誰も助けてはくれない。助けなんて求めてない。

私は独りだ。私は化け物だ。

私は、泣いてない。

笑え。笑うんだ。

あの心地よい関係を崩さない為に。私は笑っていないのではなくてはならない。

泣くことは許されない。何故泣かなくてはならない？

化け物は退治されないといけない、これは普通だろうか？

「ツ……ヒウツ……」

私の悩みなんて、とても小さなモノだろう。

私の不幸など、不幸とも呼べないかもしれない。

なら何を泣く必要がある？無い。無いはずだ。泣くことなんてない。

目から溢れ出るこの液体は雨でしかないのだから、私は大丈夫。大丈夫。

ふと、肩を叩く水がなくなる。

上を見れば赤黒い傘。

後ろを振り向きたくはない。

「…誰かに泣かさされたか？」

「ち、違うよ。大丈夫、大丈夫だから」

私に近づいちゃダメ。

私なんかに触っちゃダメ。

「……そうかい」

彼にバレてはいけない。私を知ったら彼はなんて言うのだろう。

嫌われる？いや、嫌われる程度ならまだいい。はやてちゃんにとつて危険と思われたなら、私は殺されるんじゃないだろうか？

「まったく、傘も持たずにこの雨の中立つてるか？普通」

「……ほつといて」

「あのな、」

「私は一人がいい」

「……」

「私は独りでいい」

「バカだろ」

そんな言葉にカツとして振り向くのと同時に腕を振るう。

ベチツと音が鳴り、彼の左手に当たった。

同時に頭の中が冷静になって、何度もごめんなさいが湧いて消える。

「ご、ごめ」

「ようやく振り向いたかバカ娘」

「あ、…」

振るった右手が掴まれてる。

同時に彼の顔を見てしまう。ずぶ濡れで、髪がペしやんこで、酷く情けない顔の彼。

でも瞳だけはずっとコチラを向いていて。それが途方もなく怖くて。

視線を下に背ければ、彼の上靴が泥で汚れていた。

「なんで…」

「助けてって泣いてる友人が居るなら手を伸ばすだろ」

「助けてなんて、言ってるもん……」

「なら今言えばいいさ」

「放して」

「イヤだね」

「…お節介、すぎるよ」

「言われ慣れたさ。久しく聞いて無かったがね」

溜め息混じりに言われた言葉は、どことなく辛そうで、でも私の手を握っていた手はより強く握られていた。

18 吸血姫の物語

誰か、誰か今の状況を説明して欲しい。

出来れば、懇切丁寧に、わかりやすく、そして簡潔に教えて欲しい。チャポンと天井に付着した水分が自分の重さに耐えられずに湯船に落ちて音を鳴らす。

「着替え、置いとくぞ」

「ひゃい!？」

すりガラス越しにゆう君の影が動き、そして消えた。

変な声が出てしまった。お湯のせいで赤くなった顔を湯船に着けてブクブクと言わせる。溶けたい。このまま、溶けたい。

冷静に思い返してみよう。

ずぶ濡れの私と、そんな私に傘を差し出して自分が濡れてしまった本末転倒な彼。

そんな彼が、目の前の私を見て何度か瞬きをしていた事を思い出したが、意味はさっぱりわからない。

その後凄く気まずそうに、

『アー…エー…いや、コレはアレだ、俺の意志なんかない、そう謂わばラッキーさ……みたいなモノなんだ。俺はワルクナイワルクナイ』

と呟いていたが、彼をどれだけ凝視しても私には意図がさっぱりわからなかった。

そこからの彼は珍しく慌てたように周りを何度も見渡し、何処からともなく取り出した赤黒い布を私に掛けて、家に招待された訳だ。さっぱり分からない。

分からないついでに、その時点で思考が完全に停止していた私は彼の言われるがまま、湯船に浸かっている訳だが…浸かってしまったる訳だ。

ようやく思考が落ち着きを取り戻して、私は自分の状況を深く考える事が出来る。

◆◆ 深く考えた結果。

「すすか、風呂入って来いよ」

「え？」

夕がすすかを抱きしめて囁く。

その甘い声に体を硬直させるすすか。

「安心しろ、優しくするから」

◆◆

妄想したところで止まる。

他者からみたらグヘグヘ笑っているだろう。落ち着け私。落ち着

いて、その先をゆつくりと妄想するんだ。

頑張れ、私の脳内。

「すすか？」

「うひゃい!？」

すりガラス越しに聞こえる彼の声。

私のオカシナ返事の後に彼は安心した様に一拍置き。

「起きてたか。あんまり長湯すると逆上せるぞ」

そう言つて影は消えた。

もう一度ブクブクとお湯を鳴らして、私は真っ赤になる。逆上せた

のだ。逆上せたんだ。

何度も言い聞かせて、湯船から出る。

ペタリとタイルに足が付き、体から水が滑り落ちる。

別に今からが成長期なのでそれほど気にはしていないけれど、こういった状況だから、少しでも自分の体を恨んでしまう。

もう少し成長したら、いや、夢物語か。少しでも自嘲してすりガラスを開く。

起動している洗濯機とその隣にあるカゴ。

カゴの中には私の濡れた着替えがあった筈なのだが、今は綺麗に畳まれた赤黒いカッターシャツと男物の灰色のトランクスが置かれている。

……。思わず恥ずかしさが込み上げてきて唸る。なるべく大きな声を出さないように、唸る。

つまり、私の着替えが彼に見られた？ 挙げ句の果てに洗濯されてる

？私に選択権は？ないの？え？ゆう君は淡々と平然と喋ってたけど？え？

一通り、疑問を明後日の方向に全力倒置して私はタオルで体を拭く。

目の前のシャツはつまり、彼が常用するようなシャツであり、トランクスに至ってはもはや何も言わない。

ある意味スゴイのモノが私の目の前に鎮座しているのだ。

本でそれなりの知識もあるし、女の子故に興味もある。しかし、何か越えてはいけない一線を越えてしまいそうだ。

—いいじゃないか、越えてしまえよ

—ダメだろ。そんな事しちゃ

頭の中で天使なゆう君と悪魔なゆう君がせめぎ合う。

我が頭ながらデフォルメされた天使姿と悪魔姿のゆう君を作り上げるとは。

—まあ落ち着け天使。今はチャンスなんだ、わかるか？

—落ち着くのはお前だ、悪魔。そんな事をして意味は無いだろ？

—意味？意味を求めるのか？今、この段階で？

—全ての行動には意味が在る。意味のない行動など存在しないさ

—ならば、行動しない意味を言ってみろ

—今ココで服に顔を押し付けて肺一杯に深呼吸をしなければ俺に変態扱いされなくていいだろう

—天使よ、お前は何を言ってるんだ？

—ごく普通の一般常識だ

—周りを見てみる、天使よ。誰が居る？

—：鏡に映ったはずかだな

—ならば行動した所で、言ってしまうえばトランク스에顔を押し付けた所で俺にバレることはない

—ふむ、そうだな。さすが悪魔だ

—いや、俺も匂いを嗅ぐという思考には至らなんだ

仲良く肩を組んで和解してしまった天使と悪魔を思考の端に追い

やって、私はシャツを両手で大事に掴む。

バクバクなる心臓を精一杯深い呼吸で落ち着ける。

吸って、吐いて、吸って、吐いて。

吸って、吐いて、吸って、吐いて。

吸って、吐いて、吸って、吐いて。

吐いて。

ゆっくりとシャツで鼻を覆う。ゆっくりと吸い込む。

いつものゆう君の匂いが私の中に入り込んで、心が更に脈打つ。

何か、イケナイ事をしている気分になってしまい、思考を戻す。

ゆう君の匂いを充分に堪能できたので、シャツに袖を通し、トランクスを履く。心許ないが、仕方がないだろう。女物のショーツなんて出されたら、それはソレで困る。

洗面所から出て、見たものは、何故かソファでビクビクと悶絶しているゆう君だった。

「ど、どうしたの？」

「いひゃ、なんれも、なんれもない」

何処か呂律の回ってない彼を疑問に思いながら、ソファに座る。

顔が真っ赤な彼は何度かワザとらしく咳き込んで立ち上がる。

「とりあえず、お前の服が乾くまで時間掛かりそうだから、家に連絡だけはいれとけよ？」

「あ、うん……」

そそくさとキッチンに入った彼を見送って、私は机に置かれていた携帯電話を手に取り、自宅に連絡を取る。

『はい、月村です』

「あ、ノエル？私」

『ああ、すぐか様。雨で足止めでしょうか？』

「えっと、その、今友達の家に住んでね」

『ご友人…と申しますと、アリサ様かなのは様なの？』

「いや、えーっと……」

思わず言い淀む。嘘をついてしまうか？いや、それはソレで後が怖

い。

「その、別の友達の家」

『……女のご友人ですか?』

「…男の子です」

『すぐにお迎えに上がります』

「だ、大丈夫だよ!」

『いえ、すぐに行きます。一秒たりともそこに居てはいけません』

「ゆう君はそんな人じゃないよ」

『ダメです。あ、忍様』

『すずか?』

声が変わりお姉ちゃんの声が聞こえる。

『なんかノエルが慌ててたから替わったけど、どうかした?』

「えっと、前に言ってた男の子の家に居てね?」

『…あー、なるほど。わかった。すぐに帰れるの?』

「ずぶ濡れになっちゃって、今着てる服もゆう君が出してくれたものだから、制服が乾くまでは」

『そっか?』

「うん、ごめんね?」

『何を謝ってるのよ。ノエルは私が説得しとくし』

「ありがとう…」

コトリと目の前にカップが置かれた。

カップを掴んでいる手を辿れば当然彼がいるのだけど。

『彼は近くに居る?』

「あ、目の前にいるけど…」

『代わってくれる?』

「え、うん…」

携帯をゆう君に渡し、ゆう君は非常に苦い顔をしながらソレを受け取って耳に当てた。

「お電話代わりました、御影です。」

………はい、私が責任をもってご自宅にお送り致します。

………制服が乾けば、え?………はあ、まあ俺は構いませんが

……はい、わかりました……では、代わります」
ゆう君が携帯を私に渡して盛大に溜め息を吐く。

「どうしたの?」

『アンタ、そこで一晩過ごしなさい』

「え?え?」

『どうせ朝まで雨でしようし、幸い明日は休みだからね』

「え、えつとゆう君の許可とか」

『私が取った』

「うわあ……」

思わず漏れてしまった声。

なんだか、ゆう君ごめんなさい。

『直接彼を見たのは一回程度だけど、まあ妹の話を信じる事にしましよう』

「……うん、私は大丈夫だよ」

『……彼なら、大丈夫よ』

「……」

『じゃあ、また明日ね』

「うん、また明日」

電話が切れて、息を吐く。

目の前ではカップの中に白い液体が入っている。

「ホットミルクです、お嬢様」

「ごめんね、ゆう君」

「いや、構わんよ。こつちとしては家族の公認を得て気が楽になった」

「そ、そっか」

カップに口を付けてホットミルクを飲む。

甘い。

「さて、俺も風呂に」

「だ、ダメだよ!?!」

「ええ……」

「あ、えつと、」

私の入った後に入られるなんて、そんな恥ずかしいこと私に耐えろ

というのか？無理だ。

流石にもう恥ずかしいことの上塗りはやめてほしい。

「まあいいがね…」

「その、ごめんなさい」

「いいさ。髪を乾かすタオル貸して」

「あ、うん」

彼が私の後ろに回って、濡れた髪が降ろされる。

「ふむ、ドライヤーの構成は熱を風で送るのが基本か…」

「え？」

「ああ、気にするな。こんなモノかな」

ゆう君の声の後に少し暖かい風が首を撫でる。

「こういう時、何を話していいかわからんな」

「…うん」

「そうだな…昔、人使いの荒いご隠居がいてな。次々と奉公人を雇うが、三日も経たずに『こう人使いが荒いと辛抱なりかねます』とやめてしまったそうさ。

そんなご隠居の元にも三年程努めた奉公人がいたが、ご隠居が引越す新しい家に妖怪が出るだとかで怖くなってやめてしまった。

引越した最初の晩に一つ目小僧が出てきたが、ご隠居は、皿を洗えだの、布団を敷けだの、散々こき使った。

二日目の晩は大入道が出たので、屋根の手入れをさせた。三日目は女ののつぺらぼうが出て繕いものを。

四日目に何が出るかと待っていると大きな狸が出てきた。

ご隠居が、何だい、今までの妖怪はお前の仕業か？

と問えば、狸は頷く。

更に『何の用だ』と聞けば

『お暇をもらいたい』

『どうして』

『こんな妖怪使いが荒くちや辛抱なりかねます』

と。髪が乾いたな

「落語、だっけ？」

「ホントに何でも知ってるなあ」

「ゆう君の方が何でも知ってるでしょ？」

「知らないことの方が多いよ。俺が知ってるのは知ってることだけだからな」

　　楽しそうに後ろでクスクス笑うゆう君。

　　後ろを振り向けば何も持っていないゆう君が居て、優しい顔をして
いる。

　　もし、私が、私の本当の事を言えば、この顔は一生見られないの
だろうか。

「あんまり考えすぎるなよ」

「え？」

「悩んでます、って思いつきり顔に書かれてるぞ」

「……」

「まあ、大なり小なり、人には悩みがあるし…それは当然か」

「ゆう君にも悩みとか、あるの？」

「聞き方によつては失礼な事だな」

「聞いているのはゆう君だけでしょ？」

「ご尤も。俺にも悩みがあるよ。沢山ね」

「……」

「次はその悩みを聞きたいって顔だな」

　　クスクスとゆう君は笑い、私は顔を俯かせる。

　　どうして彼は私の感情を言い当ててしまうのだろうか。

「悩みには二通りがある。人に言つて解決する悩み、人に言つても進
展のない悩み。それだけだ」

「人に言つて？」

「そう。例えば、そうだな…今日の夕飯は何がいい？」

「え、えつと、なんでもいいよ？」

「了解、適当に作ることにしよう。これが人に言つて解決する悩みだ。
逆に、俺が不治の病である、と他人に伝えたところで進展なんて一切

ない」

「え？」

「後になるが、冗談だぞ」

「そっか、よかった……」

「まあ、似たようなモンだがね」

小さく呟かれた言葉はあまり聞こえなくて、追求も出来なかった。

私が化け物である事は、進展のない悩みである。

なら、私が悩んでいる事はなんだろう。

誰かに私を知ってもらいたい。本当の私を認めて欲しい。認められるかわからないけど。

相変わらずゆう君のご飯は美味しかった。

なんというか、落ち込むほどに、美味しかった。追い打ちのごとく『有り合わせで作った粗末なモノで悪いがね』とか言われたら、落ち込むしかなかった。

「ん、どうした？」

「なんでもないよ……」
「？」

頭の上に『？』でも浮かべている様に首を傾げるゆう君。

今はパタパタと移動して、布団を敷いている。

「ゆう君って一人暮らしだったよね？」

「まあそうだな」

「その布団は？」

「俺のだけど？ああ、最近干したばかりだから清潔と言えば清潔だぞ。二日程前だからどうかは知らんが」

つまり、今日はゆう君に包まれて眠れるのかッ!?いや、そうじゃなかった。

「ゆう君はどこで寝るの？」

「ん？……まあどこでも寝れるだろ」

「考えてなかったんだ」

「布団は一組しか無いからな。まあ、日が昇るまで本でも読んでるさ」
「だ、ダメだよ。ちゃんと寝ないと」

「適当にするさ」

こうなつたゆう君はテコでも動かない。というか、私は動かさせた事がない。

知り合つて長いけど、深く付き合い始めたのは最近だ。

彼を知るには時間はあつたが、機会がなかつた。同時にそれは彼にも言えることだ。

思考に耽つていると、突然の轟音。

耳が痛くなる程の雷音。そして、点滅する電灯。

「あ、」

「む…停電か」

どうやら近くに雷が落ちたらしい。

暗闇の中でゆう君が天井を見上げるのがわかる。

顎に手を当てて何かを考えるようにして、何度か首を振る。

「流星に寝るには早いな…」

「そうだね」

「そうとも。お嬢様。しばし、お待ちを」

ゆう君は立ち上がり、左手を前に出す。

足元から朱色の淡い光が円を描き、彼を照らし出す。

出された左手の掌は上を向いていて、そこに野球ボール程度の淡い朱色の光源が完成した。

「きれい…」

「それはどうも。では、更に感嘆させましょう、つと」

「うわあ……」

彼が光源をチョンツと触れば。ふよふよと漂い、壁に当たると分裂して光源が二つになった。

二つから四つ、四つから八つ。いつの間にか、部屋の中は淡い朱色に染められて、幾つかの淡い球が増えては消え、増えては消えを繰り返す。

返すそんな不思議な空間になっていた。

「魔法みたい…」

「みたい、じゃなくて、魔法そのものだよ」

「そういえば彼は魔法使いだった。」

「凄い。その一言だ。」

そして、同時に思ってしまった。

「どうして、私に優しいの?」

思ってしまった言葉は、口から吐き出され、彼の表情をキョトンとさせるには十分な力を持つていたらしい。

「これだけ凄い事が出来るのに、何故私になんかと一緒にいるのだろう。」

「どうして?どうして私なんかと一緒に居れるの?こんな私なのに」

「どうして、か。考えたこともなかったな」

「考えてよ、今、すぐに考えてよ」

感情が抑えられなくて、段々と口が早くなってきて。

「どうして優しくするの?どうして私なんか優しいの?」

「……」

「応えてよ、答えてよ!!」

「在り来たりな言葉だが、友達だから…いや違うな。どうだろう、人間的にお前は好きだが」

「ツ……でも、」

ダメだ。口に出すな。

やめろ。やめて、やめて。

「私は人間じゃないんだよ?」

言ってしまった言葉は既に取り返しがつかなくて。

頭の中がグチャグチャで、何も考えたくなくて。ボロボロと涙が出て、ソレも情けなくて、嫌われたくなくて、俯いて、息が苦しくて。

「だからどうかしたのか?」

「え?」

「いや、うん?オカシナ事を言ったか?」

「私、人間じゃないんだよ？化け物なんだよ？」

「ああ、そうなのか。うん、そうか。で？」

「……怖くないの？退治しないの？」

「どうしてそういった思考になったかは置いておくが、なかなか目の前で友情が否定されるというのは辛いな」

「友情からの同情なんてイラナイよ」

「そんなモノ、欠片もねえよ。あるのは何でも無い、単なる気持ちだけさ」

「気持ち……？」

「そう、普通の気持ち」

ゆう君は溜め息を吐いて、私の隣に座る。

よつこらせ、とか少し漏らしていたのがゆう君らしい。

「在り来たりな言葉を吐き出せば、俺は人間であるはずかと友情を築いた訳でなく、単なるはずかと友情を築いたつもりでいるんだよ」

「……うん」

「お前はすぐかだろ？いつだつてすぐかだつたら」

「……うん」

「それでいいさ。ソレだけでいい」

「私で、いいの？」

「お前がいい。そうじゃないと困る」

「……どうして？」

「……大切だから、かな」

彼は少し間を空けてそういった。その間の中に何が詰まっているか私には分からない。

でも、それでも、私は、私である。

「大切、と言ってもアレだ、友人としてだな」

「なんで改めて言うの？」

「俺が勘違いしてしまうだろう？」

「……」

ああ、この人は底抜けの唐変木だ。ソレを理解した。今、再度、理解した。

彼は溜め息を吐く私に苦笑して、更に口を開く。

「では、すずか。お前が悩みを打ち明けたから……というのは少し卑怯か……少しだけ、吐き出す事にしよう」

「ゆう君が化け物だつてこと？」

「いや、人を殺した事があるって事」

「え？」

「冗談だ。先に言われるとこういった冗談を言いたくなるだろ？ネタバレは勘弁してくれ」

「あ、うん」

ゆう君はまた苦笑して、灯りである朱い光をトンツと押す。

「お前が暴走してしまうような事があれば……どうするかな」

「そこはハッキリ言つて欲しかったなあ……」

「まあ、どうにかするさ。お前も、お前の大切な人も守れる様に」

「もしも、はやてちゃんに危害を加えたら？」

「加える前に……どうにかするさ」

「どうにかつて？」

「……それは、その時に考えるよ」

自嘲気味にそう応えて彼はフヨフヨ浮いた珠を指で押す。

押された珠は壁に当たり、消える。

「まあ仮定の話はいいさ。過程の話は好きだがね」

「家庭の話は好きかな？」

「どちらかと言えば、嫌いだね」

「そつか、じゃあやめとくね。ああ、そうだゆう君、すつかり言うのを忘れてたんだけど」

私はもう一度、告白をする。

今までの踏ん切りと、これからの一步の為に。そして私を認めてもらう為に。

この人なら、私を認めてくれる。そんな何処からか湧いて出る自信に従つて、私は口を開く。

「私は、化け物です」

「うん。そうか、それで、俺たちの関係に影響があるのか？」

「ゆう君が良ければ、」

「そうかい。なら変わらんよ。お前がそうしたように」

またゆう君は自嘲気味に笑い、少しだけ顔を赤くする。私の顔も少し熱い。たぶんこれは、きつとゆう君の出した光源の所為に決まっている。決まっているんだ。

19 美味しそう

私は、性質上夜目がきく。

散々と偽って、散々と嫌っていた自分。

そんなワタシを今は凄くありがたく思う。

隣のソファでは静かに寝息をたてる黒髪の彼。

寝たふりをして早二時間。彼が眠ったことを確認して体感で三十分程。

布団からゆっくりと這い出て、立ち上がる。

眠る彼を見下ろして、少しだけ口角が上がるのに気付いた。

美味しそう。

思考が徐々に染められていく。

目の前で眠る彼が凄く美味しそうに見える。

警戒心も無く、完全に心を許された私。

美味しそう美味しそう美味しそう美味しそう美味しそう美味し
う美味しそう美味しそう。

頭がクラクラして、息が荒くなっていく。

膝について彼と同じ高さになって、少しだけ触れる。

「ん……」

ピクリと反応した彼を少しの間眺めて、起きない事を確認する。
起きない。

触れた手でゆっくりと肌を触って、首筋を露わにする。

見える首筋。健康的は肌。美味しそう美味しそうおいしそうおい
ししそうおいしそうおいしそうおいしそうおいしそうおい
シソウオイシソウオイシソウオイシソウオイシソウ……

「アー、億劫だ」

「…ごめんね、送ってもらって」

「いや、送ることは別段どうでもいいんだが…お前にはわからん悩みだろう」

「悩みなら聞くよ?」

「言ったところで改善はしないさ。悪い方にしか転がらん」

溜め息を吐いた彼と一緒に帰路を歩く。

幸い、休みということもあり日が昇って少ししてから行動する事になった。

というのも、

「…ふむ、体もやや重いし、何かあったのかね」

「あはは……」

言えない。我慢できずにちよつとだけ血を吸っただなんて言えない。言える訳がない。

御蔭で私は、凄く調子がいい。

「まあ、別に追求することでもないか」

「え?」

「いや、何にせよ、億劫だ」

また溜め息を吐いた彼。そこまで嫌なのだろうか。

「送ってもらってごめんね?」

「先も言ったが、ソコはいいんだ。俺としても送りたい、いや、これはどうでもいい」

「ありがとう」

「気にするな」

恥ずかしそうに手をパタパタする彼はまた溜め息を吐いた。

「なんというか、今の心境は彼女の両親を紹介させられる直前の彼氏だな」

「そ、そんな彼女だなんて」

「? 喩え話だぞ?」

「デスヨネー」

「?…まあともあれ、至極気が張ってるよ」

「私は今凄く気が障ってるよ」

「それはまたご機嫌な事で」

笑うこともなく、二人で溜め息を吐く。

わざとやっってる様にしか思えないが、それはソレでどうなのだろう。

「あ、すずかちゃん!!」

「ファリン、おはよう」

「おはようございます。おかえりなさいませ」

「うん、えっと。この人が」

「ハジメマシテ、ミカゲユウデス。デハ、カエリマス」

踵を返したゆう君の腕を掴む。なるべく力を入れて。

ミシミシと音が鳴ってるが気にしない。というかこの程度の強さで掴まないと逃げるような気がする。

「音、音がヤバイ!!折れてる!絶対に折れてるから!!」

「初めまして、ミカゲ様。ワタシはファリン・K・エーアリヒカイトと申します」

「ツツコンで!?今この状況を見て挨拶するところじゃないのは明白だよな!?!天然!?!天然メイドなのか!!ハハツやったね!?!ご飯がすすイタイタイイタイイタイイタイ!!」

「ゆう君?」

本当に折ってしまおうか……いや、今はやめておこう。こんな事で折っていると、たぶん先には頭蓋骨を、

思考がオカシナ方向にいったので、頭を振りリセットする。落ち着くんだ。

「すずか様、お荷物を」

「大丈夫、私が持つてくから」

「はあ」

「ふふふ」

持つていた紙袋を取ろうとしたファリンの手を避けて、言う。

ファリンは少し首を傾げていたが、この紙袋だけは譲れない。何故か？この中には昨日私が履いていたトランクスがあるのだ。シャツは何故か手に入らなかつたが、これだけは洗って返すと無理を言つて戦利品として取得したのだ。

かなり訝しげにしていたゆう君を制し、私は今、戦利品を自室に持ち帰る途中なのだ。

「では、ワタシが案内をしますね？」

「いや、ご迷惑になるようでしたら、帰りますよ？」

「ゆう君？」

「イヤージツハスゴイタノシミダツタンダナー」

「じゃあファリン、よろしくね」

「はい、任せてください」

胸に拳を置いて意気揚々と返事をするファリンにそこはかたなく不安を感じてしまった。

いや、きつと大丈夫だろう。大丈夫であつてほしい。

自室に紙袋を隠した私は急いでゆう君の待つ部屋に向かう。

扉を開けば、ゆう君がのんびりとティーカップに口を付けていて、その前の席にはお姉ちゃんが満足そうに座っていた。

「あら、さすが。おかえりなさい」

「う、うん。ただいま。お姉ちゃん」

「では、ちゃんと送り届けたということ、帰ります」

「あら、まだ話は終わってないわよ？」

「いや、今日は予定が」

「座りなさい？」

「はい……」

うん。のんびりと、というのは可笑しかった。今見ればティーカップがカタカタ鳴ってる。いったい私のいない数分で何をしたんだお

姉ちゃん。

「で、一晩一緒の家に居たんだし、責任とかはとってくれるんでしょ？」

「アツハツハツ、手も足も出してないのに責任だなんて」

「へー、他は出したんだ」

「何も出てませんとも、ええ、もちろん」

「ふーん」

目が笑ってないお姉ちゃんとティーカップをカタカタ鳴らしているゆう君。

「まあ冗談はさておき」

「冗談の目つきではなかった、なんて言えない」

「ゆう君言ってるよ？」

「ナニモイツテマセン!!」

カップを机に置き、深くソファに座りなおすゆう君。ついでに横が空いたのでソコに私が座る。

別に他意はない。

「で、私たちの事は知ったの？」

「すぐかから聞きました」

「…感想は？」

「正直に言ってしまったら、だからどうした、ですね」

「そっか。すぐかを見る目は正しかったのね」

「そうですね。バニングスさんを友達にしているわけですし」

「……」

淡々と口を開くゆう君。たぶんお姉ちゃんの言ってることは想い人としてなんだけど、ゆう君は的外れに返す。

ゆう君は気づいてないから仕方ないんだけど、この話の流れからどうしてアリサちゃんが出てきたんだろう。

「ふーん、なるほど、なるほど」

「……」

「あんまり話してもない子にこういう事を言いたくはないんだけど。貴方、そうとう損な生き方をしてるわよ？」

「お姉ちゃん!？」

「アハハ、知ってます」

乾いた笑いが隣から聞こえる。隣を見れば真っ直ぐにお姉ちゃんを見ているゆう君が居て、その目は深い色をしていた。深い、深い黒の瞳。

「でも、望まれてやってる事ですから」

「…そっか、ごめんなさい」

「お気になさらずに。さて、では帰ります。長々と失礼しました」

立ち上がり、ペコリと頭を下げた彼は綺麗な足取りで扉に向かう。

ガチャリと開いた扉からゆう君は振り返る事もなくその姿を消した。

怒ったのだろうか。いや、確実に怒ってるだろう。誰だってあんな事言われたら怒る。

「そんなに睨まないでよ、すずか」

「だって…」

「大丈夫よ、あの子怒ってないし」

「本当は怒ってたかもしれないよ?」

「まあ、私の評価が下がった所で大丈夫よ」

「でも、」

「あの子はアナタを一個人として見てるから、大丈夫よ」

少しやわらかくなった笑みを浮かべてお姉ちゃんは私を撫でる。

撫でてから、私に視線を合わせるように膝を着く。

「あの子が好きなのね?」

「…うん」

「そっか。じゃあ、やめろ、だなんて言わないことにするわ」

「え?」

「ああいう子と付き合うのは、骨が折れるわよ」

「どういうこと?」

「…それはアナタが気付くことで、私から言える事じゃないわ。一つだけ言うのなら、あの子と過ごしたいならそれ相応の覚悟が必要、とだけ言っておくわ」

私の覚悟？

私を受け入れる彼の覚悟ではなくて、私が彼を受け入れる覚悟？

「私たちと一緒になのよ、あの子も」

「……人間じゃないの？」

「そういう事じゃないわ。まあゆっくり考えなさい。アナタたちはまだ若いんだから」

そうやって私をやさしく抱き締めてくれたお姉ちゃんは、どこか悲しそうだった。悲しそうで、でもそれが分からなくて。私には頷くことしかできなかった。

20 至極鬱陶しいね

「ふむ……なるほど、ねえ」

空中に浮かぶディスプレイを眺めながら一人愚痴る。ふよふよと漂う朱い珠が照らす部屋で溜め息が漏れる。

「まったく情報がないのか」

—あの日の情報がない

—あの場所の情報がない

—無さすぎる

「開示したくない情報か？まあそりやそうか」

あの中にいた俺だからわかる。アレは管理局にとって汚点だ。汚点を消すために掃除したのか？

—逆に考えろ

—掃除された事を隠してるとすれば？

—掃除したのは誰だ？

「カット。何にせよ、だ」

—掃除屋を探すことはできない

—ならば依頼した場所を叩くしかない

—叩いて埃を出せばいい

—出した埃は掃除をしないと

「まあとんでもない所から埃が溢れ出るかもしれんしな」

思わず苦笑して、否定する。

そんな筈がない。なんせ利点がないのだ。掃除する事に利点があったとしても、アレが管理局に入ったのはフェイトの事件時だ。

—否定

—否定

—もし、なんて無いさ

—あつてほしくない

—ある訳ない

「何にせよ、だな」

自嘲して、朱い珠を握り潰す。

一つ潰れるごとにまた一つ、また一つと連鎖するように潰れていく。

「生存戦略、いや、単なるテロリズムか？」

そして最後の珠が潰れた。



私は、夕君の事が好きです。

好きで、好きでたまらないのに、その想いは小説や物語みたいに上手くいなくて。

でも、それでもやっぱり好きで。

「おはよう、八神^{やがみ}」

「え？」

朝に会った夕君から出てきた言葉は前の様に他人行儀で、もしかしたら聞き間違いだと自分に言い聞かせた。言い聞かせただけ。

「ああ、八神。今日でこのトレーニングも終わりだから」

「つ、つまり新しいトレ」

「いや、ないよ。そんな面倒なこと、俺が付き合う訳ないじゃん」

「……」

前とは違う、一方的な物言い。昨日まではいつも通りだったのに。

どうして？どうして？頭の中が否定する。否定して、疑問が沸く。

「な、なんで、そんないきなり、」

「いきなりなんて事はねえよ。毎回毎回思ってたさ。至極面倒ながら、約束した手前、守らないと後味悪いだろ？以上説明終了」

淡々と言い放つ夕君の言葉。言ってる意味は理解したくない。自分の中で思っていた、このトレーニングが一生続くと。

ずっと一緒だと思っていた。ずっと、ずっと。

「な、え？…：…なんや、」

「泣くなよ、面倒だな」

「あ、ごめん、ごめんナ？」

袖で目を擦って、涙を拭う。それでも溢れ出てくる涙。否定する頭。否定する心。

もしかしたら、なんて頭が思考して、踵を返した夕君の袖を掴む。

「離せよ」

「い、いやや」

冷たい声。まるで私を全否定するような声。止まらない涙と嗚咽を必死で抑えて声を出す。

「好きなんや、なんでや、こんなに好きやのに、なんで、なんで？」

「……はあ」

夕君は袖を掴む私の手を掴んで、ソッと袖を離させる。

掴まれた手を見て、夕君を見る。見てから後悔した。

「だから？その気持ちを言っただけが切り替わるとか思ったの？」

「あ、あ、」

もうその先は言わないでいい。言っただけでほしくない。言われたくない。

「俺は、お前のこと、嫌いだったよ」

「ッ、」

掴まれた手を振りほどき、振りかぶってそのまま横に振る。

バチンツと乾いた音が鳴って、夕君の頬が赤くなる。夕君は無表情でコチラを向いていて、それが途方もなく怖くて。

「ああーそうかい!!なんや、私だけが舞い上がって!!アホらし!!お前なんか、お前なんか!!」

口から言葉が出ない。たった三文字なのに、ソレを拒んでしまう。言ってしまうともう戻らないとそう考えてしまう。

好きな人に気持ちの逆を伝えるというのはこんなに苦しい事なのか、感情に任せても出ない。

下唇を噛み締めて、私は踵を返した。

返して、走った。

皮肉にも、誰かの御蔭で走れる様になったこの足で。



珍しく休んだユウの部屋に行く。

隣にいるのはアリシアとなのはとすずか、アリサの四人。

事の始まりは、目を赤くしたはやてが学校に来ていたからだ。はやては落ち込んで、泣いてて、悲しんでいて。

詳細は聞けなかったが、はやては大丈夫と漏らしていた。大丈夫、大丈夫とまるで自分に言い聞かせる様に。

「ユウ、いる？」

インターホンを鳴らして、呼びかける。

アリサやアリシアははやてを慰めながら、ココに押しかける予定を立てていたらしい。

二人曰く、ユウが悪いそうだけど。ユウがはやてを泣かせる？

「……すまん、返事が遅れた」

インターホンが鳴って少ししてからユウは扉から顔を出した。

頬は赤く腫れていて、それだけしか変わってないというのに、ユウの雰囲気がおかし。

「揃いも揃って何か用かね」

「はやてに何を言ったの？」

「……その話題か」

「あんなにはやてが落ち込むなんて、アンタが関わってるに決まってるじゃない」

「ねえゆう君、はやてちゃんに何をしたの？」

「はやてがお前らに言っただけなら、言えないな」

「アンタね!!はやてが泣いてたのよ!」

「アリサ!!」

首元を掴み上げ、アリサはユウを睨む。

睨まれてるユウは、感情の出ない瞳でアリサを見て、溜め息を吐く。

「離せよ、お前らに関係のない話だ」

「ふざけるな!!アンタはッ!はやての為に命を張ったんじゃないの!?!はやての為に必死に戦ってたんじゃないのッ!?!」

「……」

「アリサちゃん、離してあげてよ」

「なのは……」

「ゆう君、別に内容を聞きたい訳じゃないんだ。どうしてもはやてちゃんを悲しませたか、教えてくれないかな?」

「……はあ、鬱陶しいな」

淡々と漏らしたユウの言葉に呆然とする。

私だけじゃなくて、全員が思考停止する。

「友達ごっこに飽きたんだよ」

「……え?」

「命を掛けた?あの程度、誰でも出来るさ。命を掛けたつもりはない。騎士にでもなればコロリと落ちると思ったが、落なかった。故に捨てた。以上だ。何か質問は?」

「……あんだ、最低ね」

「お褒め頂き恐悦至極。他に何か言う事は?俺は忙しいんだけど?」

「ないわよ!!」

「あ、アリサちゃん!!」

なのははアリサを追いかけて行き、私とすずかは立ち止まって、ユウを見つめる。

ホントに、コレはユウなのだろうか。あのユウなのか?

「ねえ、ユウちゃん」

「なんだよ、アリシア。俺に何か罵りの言葉でもあるのかい?」

「私はね、信じてるよ」

「そうかい、至極鬱陶しいね」

「ありがとう。じゃあ、またね」

アリシアは私とすずかの手を掴んでテクテクと歩き出す。アリシアの顔を見ると、何か苦しそうで。何かを耐えるようだ。

私にはそれが何故かとても羨ましく見えてしまった。

21 大きな気持ちと小さな野望

温かいココアを飲みながらソファに凭^{もた}れる。

ユウが私達を拒絶して数時間。色々と考えてみたけれど、やっぱり分からない。

頭の中にどうして?と何とも浮かび上がって、消える。

「ただいまあ……」

「あ、アリシア。お帰りなさい」

「疲れたア」

アレからすぐに用事が出来たとかで家に居なかったアリシアが帰ってきた。疲れた様子で靴を脱いで、重そうな紙袋を抱えている。

「手伝おうか?」

「んー助かるよオ」

ズシリと重い紙袋を持ち上げてリビングに持っていく。後ろからアリシアが『あ、ー』と自分の肩を叩きながらゆっくりとした足取りで歩いてくる。

「ああ、お母さんなんだけど。今日は本局に捕まってるから遅くなるよ」

「そうなんだ。アルフは?」

「母さんの助手として連れてかれたよ。まったく、本局の人は研究者を知識の便利屋とでも思ってるのかにやア」

「母さんはスゴイから」

「そうなんだけどね。あ、今からお湯沸かすんだけど、何か淹れようか?」

「ココアをお願い」

「はいはい」

キッチンからのアリシアの声に応答して、持っていたココアを飲み干す。インスタントだから仕方がないのだけど、底に甘い部分が溜まっ
ていて、どうも上手く出来てなかったらしい。

「むう」

「カップに恨みでもあるの?」

「底に甘い部分だ」

「ああ：ちゃんと溶かさないとね」

「アリシアこういうの上手いよね？」

「まあ、普段から結構飲んでるから……フェイトだからありえないんだけど、インスタントばかり飲んでるから上手いんだよね、って結構な嫌味だと思う」

「え、そんな事思っていないよ!？」

「知ってるよ。フェイトだもん」

「よかった……あれ？でもなんとなく馬鹿にされたような……」

「気のせいよ」

「気のせいなんだ」

「なら大丈夫……なのかな？」

湯気の昇るカップを傾けて、アリシアは紙袋の中の資料を取り出す。チラリと覗けば空白を見つけたのが難しそうな程詰められた文字文字文字。

ソレを数秒ほど眺めて、次のページを捲るアリシア。

「新しい研究？」

「ううん。ユーノンに無理を言って作ってもらったとあるロストロギアの資料」

「とある？」

「うん、アンヘル」

「ッ……」

彼の左手に埋まった赤い石。その名称であり、私がこのまえ頭に詰め込まれた知識でもある。

応答しながらも紙を眺める目は忙しなく動き、またページが捲られる。

「ねえ、アリシア」

「んー？」

「……ユウはどうしてあんな事を言ったんだろう」

「……」

次のページを捲ろうとしていたアリシアの手が止まる。一度溜め

息を吐かれて、資料が机に置かれた。

「フェイトは、ユウちゃんの事を信じてるの?」

「信じ……信じたい」

信じてる。なんて私には言えない。彼が何を考えて、何を想って行動してるのか、さっぱり分からない。分からないからこそ、以前から嫌われていたなんて事も考えれる。でもソレを必死に否定してる自分がいる。

「ならば、アナタの想像するユウちゃんがもしも、本当に私達を嫌った事を考えて?」

「嫌ってたら……」

嫌ってたら……。他人である私達を命の危険を冒して助けた彼。でも、ソレは私達をコロリと落とす為で。

「ストップストップ。彼の言うことを一から十までそのまま受け取っちゃダメよ」

「そうなの?」

「私が何十時間彼と研究してると思ってるのよ……まあ研究と言っても私が一方的に教えられてるといいうか、教わられてるといいうか……いや、これはどうでもいいか」

「襲われてるって……」

「知識で押しつぶされるって、怖いわよ」

アリシアの目は、真剣だった。真剣すぎて怖い。

「私達は私達が知ってるユウちゃんを信じればいいの。途方もなく頭が回って、馬鹿みたいにお人好しで、勝手に問題を解決しちゃう、そんなユウちゃんを信じればいいの」

お人好しで、頭が良くて、優しいユウ。そんなユウが私達を嫌ったのは、何故?どうして?

嫌うにしても、ユウなら自然消滅するような事も出来ただろう。どうしてソレをしなかった?どうして?

「仮定、ユウちゃんが焦ってるとしたら?」

「焦ってる……?」

「まあ結果から見た仮定だから、信用も試用も思想すらないモノだけ

どね。

彼が焦ってるならある程度の理由は納得出来る。私達を嫌ったのが本心からでは無くて、私達を守る為ならば？焦る程に時間が無くて自然に距離を取る事も出来なかつたら？」

アリシアが仮定を並べる。それは「もしも」の事で、実際の事は分からない。

ユウがわからない。いや、わかったことがあつただろうか？

ない。あるはずがない。私はユウじゃない。私は、ユウでもなければ、母さんでもなく、アリシアですらない。私は私だ。

「…アリシアは、強いね」

「強くなってるじゃないよ。今でさえ不安よ。不安だから、私に出来る事をするの。で、行き着いた先が、コレ」

「…フフ、そっか」

「そうなのです」

アリシアと私は苦笑する。

いつものユウを想像して、イメージを固める。

そうだ、それこそ彼なのだ。ならば、私はソレを信じればいい。彼が嫌っていても、それがなんだと言うんだ。私は私の意思で、彼を思うのだ。

何かがストーンと胸の中に落ちてきた。ソレはゆっくりと私を優しく暖めてくれる。

母さんを想った時とも、アリシアを想う時とも違う、別の感覚。私はこの感情のことをよく知らない。知らないけれど、これはイイ感情だと思う。

「ねえ、アリシア」

「んー？」

「私も手伝っていいかな？」

「いいよー」

私はこの感情を守りたい。守る。

だからこそ、私は近くにあつた資料を手に取り、アリシアと一緒に作業する。

「アリシア、ごめん、ここなんだけど」

「翻訳用のソフトでも作ろうかしら」

「ごめんなさい」

◆◆
「……………はあ」

布団を押しつけてカリカリと頭を搔く。

一日程気落ちして、ソレを取り繕って疲れたのだろう。窓から見える空には月が浮かんでいた。

朝から何度も考えた。考えて、考えて、考えた末に答えはさっぱり出てこなかった。いつそこれが恋愛小説ならば、彼は私を嫌った理由を明確に言ってくれた筈だ。

一方的拒絶がこれほど響くとは思わなかった。それだけ彼を想っていた、と思えば少しは気が晴れる。と無理やり自分を納得させる。

「アホらし、終わった事やん」

終わったのだ。朝のランニングも、彼との関係も、彼への想いも、私の想いも。

なぜ今なんだろう。本当に彼が私を傷つけるつもりなら、もっと効果的な方法があったはずだ。例えば夏祭りとか。

「うわあ…それは嫌やなあ」

ふと想像してしまって、嫌悪する。たぶん、今の状態よりも酷いことになると思う。

ああ、ダメだ。私は、もうダメかも知れない。アレだけ彼に拒絶されたというのに、次には彼の事を考えている。

まだ心のどこかで否定しているのだろう。我が心ながらよく足搔

いている。

—お前の事、嫌いだったよ

「だった、ってなんやねん……バカ」

ぐしやりと髪を掴んで、溜め息を吐く。結果を見てみればなんてことはない。

彼が私を否定して、私が彼を拒絶した。

それだけの事だ。それだけの事なのに、心の中には違和感が溢れて落ちる。

どれだけ悩んでも答えが出ない。出せない。……

「ちやうな…出さへん、か」

思わず苦笑が出てきた。どうせ否定してしまう答えしか出てこないのだ。八方塞がり、というか自分で防いでいるのだから仕方ない。鼠を追い詰めたのは猫じゃなくて鼠自身だったということだ。

こういったバカみたいな事を考えてるのも全部アイツの御蔭で、やっぱり思考の何処かには彼が居座ってる訳で。

「……………ダァーア!!なんや色々考えすぎてわからんようになってきたアツ!!」

グシャグシャと髪を手で乱して、息を吐く。思考を放棄する訳ではない。放棄するほど思考してもない。

要は、私はこの関係においては自分だけしか考えられないのだ。損も得も、全て自分本意でしかない。

ならば、ならばだ。

「こんなん、納得できるかい」

つまりは、そういう事である。

全部彼から聞き出す。私の悪い所とか、嫌いになった所とか、……ああ落ち込んできた。

まあソレも自分なのだ。無理に取り繕う必要なんて無い。悪い部分は即治す。素である自分を好きにさせる。

「ああ、なんや。えらい簡単に答えはでるんや」

ふふふ、と口から漏れた笑い。さっきの苦笑とも違う、口から出てしまった笑い。

言うに易し、行うに難し。相手は彼だ。

自分が思ってる程容易くはない。自分が思ってる以上に傷つくかもしれない。自分が思える範囲ではないかもしれない。

それでも、やるのか？やるしかない。やると決めたのだから。

「夜天の王は、欲張りである。なんて、歴史に書かれてるんかもなあ」
また漏れ出した笑いを抑える意味はない。いや、意味なんていらナイ。欲しいのは、一つだけ、一人だけなのだから。

そんな私の小さな野望を知っているのは、私だけでいい。お月様も見ているだけなのだから、聞きはしていない。

22 やっぱり夏は冷やし素麺

「おはよおさん、っと」

「はやてちゃん！大丈夫なの!？」

「なんや、仰々しいなあ、なのはちゃん。昨日も普通に授業受けてたやろ?」

「そうだけど…」

気まずそうにするのはちゃんの頭を撫でて、微笑む。

私は大丈夫だ。昨日の内に心は決まったのだ。私は、ブレない。

そんな事を思っていると、なのはちゃんの視線が横に動いている事に気付く。そのまま追えば、片手で頬杖をついて外を見ているアリサちゃんがいる。どうしたと言うのか……。

「おはよお、アリサちゃん」

「ア、ア、？」

「お、おお、ごめんなさい」

思わず咄嗟に謝ってしまった。

物凄く、機嫌が悪いです。もう何て言うか、『私、怒ってます』という顔だ。

「あ、ごめん。おはよう、はやて」

「お、おはよお。えっと、何かあったん？」

「何か?何かあったか、ですって?」

あ、コレはダメだ。触らぬ神に祟り無しとか、そんなレベルの神様に触ってしまった。

「何なのよ!!アイツ!」

「ああ、デスヨネー」

なんとなく察してしまった。友達想いだから、彼女はここまで怒ってる。怒ってくれている。

まあ、見る限り本人の怒りも少しは混ざってるとは思うけど。

「あ、おはよ。はやてちゃん」

「おはよお、すずかちゃん。どうにかしてっ…」

「えーっと、ご愁傷様?」

「ちよつとはやて!!聞いているの!!」

「あーはいはい、そやね。やっぱり夏は冷やし素麺が美味しいよね」

「……聞いてなかったのね」

「まあ、夕君の事ってのはなんとなくわかるし」

どうせ私が心配、というか私の状態を見て夕君に問い詰めに行ったのだろう。どう言われたかは知らないけれど。

「私達との関係を『友達ごっこ』の一言で片付けて、追い返されたわ」
「……うわぁ」

「ああ!!今思い出すだけでもイライラする!!なんであんなヤツの事少しでも認めてたのよ!!」

「ああ、イライラしてるんは、夕君にじゃなくて、その夕君を認めた自分にやねんや」

「当たり前よ!!あんな人間に割く心は一切無いわ!!」

散々の言われようである。

私がアツチの立場なら、あんな感じに激昂してたと思うから何も言わないけれど。

きつと彼女に夕君の事を諦めないと言えば、必死で止めてくれるんだろう。その制止の言葉も私は聞かないけど。

「おはよー……」

「うにゆう……」

「フェイトオ……走りながら寝るなんて器用な事習得しちゃダメだよー……」

「起きてうよお……おお……?」

「ダメだ、そろそろ電池が切れるわ……誰か、フェイトを席に連れてつて」

「俺が!」

「おいおい非力なお前が行くよりも俺の方が適材だとは思わんか?」

「お前みたいな暑苦しいやつが行くよりも俺の方が万倍はいいね」

「何を!!」

「アンタ達、二人いるんだから二人で抱えて。落としたり、ね?」

「イエツサツ!!」

妙に息のあつた二人によりフェイトちゃんは自分の机に突っ伏して、腕を枕にすることもなく、眠った。

肩をトントンと叩きながらアリシアちゃんが息を吐く。

「ふう……あ、はやエモンいるじゃない。おはよう」

「うん、ええねんけどそのあだ名やめへん?」

「えつと、じゃあ『はや助』?もしくは『はや太郎』?あとは『はーマン』?」

『はーマン』だね!」

「すずかちゃん!」

「だって、ファンネルだよ!?!不器用デレなんだよ!?!新しい人類なんだよ!?!」

「違う! 圧倒的に何かがちやうよ! すずかちゃん!!」

「あれ? なんか私の思ってた方向に話が進まない…」

何故か興奮するすずかちゃんを押さえつける。アリシアちゃんはそんな私を見ながらどこへ向けてかため息を吐く。手伝ってほしい。

「まあ、ハヤテの元気が出てよかったわ」

「ありがとう。そういえばなんで遅れたん?」

「ちよつと調べ物かなー。フェイトにも付き合わせちゃったし」

「なんや、お疲れやなあ」

「まあ、今は雲でも掴んでる感じだからねー」

欠伸を噛み殺したのか、やや涙目になってるアリシアちゃん。

何を調べてるかは知らないけれど、ここまで疲れている彼女を見るのは始めてかもしれない。

そんな彼女はキョロキョロとして、誰かを探している。

「ユウちゃんは…まだ来てないか」

「また答えでも聞こうとしてんの?」

「あはは、まあ、そんな感じかな」

苦笑するアリシアちゃん。まあ私も人のことを言えないのだけどもあれ、私達の疑問に答えてくれるのは彼しかないのだ。

「ハアツ!」

「え?」

「……むい？」

途端に三方向から声がした。一つは私の前。もう一つはなのはちやんの横にいた光君。そしてもう一つは寝惚けた声をだして瞼を擦っているフェイトちゃんだった。

「え？何かあったん？」

「ゴメン、急がないと…。ほら、フェイト!!行くよツ!!」

「あとごふん…いや、にふんでいいからあ」

「ダメツ！立つ、歩く、走る!!ハリイハリイハリイ!!」

来た時と同じようにフェイトちゃんを引きずるように連れて行くアリシアちゃん。光君は悠々と歩いて扉を出て行った。

「……何があったんや？」

「無限書庫が急に閉鎖状態になったんだって」

「……は？」

「詳しくはまだわからないんだけど……」

「…いや、それって結構大変なことやんね？」

「そうだけど」

「光君はえらいゆつくり行ったなあ」

「ライト君がすることは犯人調査から割り出した人を逮捕する事だから」

それでいいのか？それでいいのか管理局。

いや、確かに魔導士ランクSSSの彼だからこそソレに回したほうが効率がいいのだろう。

局内でオレに勝てる奴はいねえ!!なんて自分で言ってた人間なのだ。まあ子供であることを除けば彼が最強なのだろう。

犯人はご愁傷様としか言いようが無い。

—ア—ア—、テステス。聞こえてるかね八神

授業中に声が響いた。頭の中に直接響いているということとは、今日も休んでしまっている彼の念話なのだろう。

—聞こえとるよ、何？

—そう邪険に扱うなよ。お前が疑問に思ってる事を教えてやるよ

—……ホンマに？

—ホントホント。今日の放課後にア—スラで待ち合わせな

—……なあ夕君

—んじゃよろしく

…無理やり切られた。

昨日は感じる事のなかった違和感。微妙に、違う、そう思ってしまった。

23 『名も知れぬ研究者』の課題

「よつす、ユーノ」

「あ、ライト。それにアリシアと……フェイトは大丈夫なの？」

「大丈夫よ」

「うのお……」

アリシアに連れてこられたフェイトはどことなくボロボロになっていた。

アリシアが引き摺ったからなんだろうけど、姉妹仲が良いようではない。

「まったく、僕が司書になって色々問題が」

「不運だねえ。まあユーノンだし」

「アリシア、ソレはどういうことなんだい？」

「そういうことよ」

「だよね……はあ」

「生きてりやアイイ事もあるさ」

「不運続きだけどね」

「もう、ボクの体力を減らそうとするのはやめて!!」

フェイトを近くの椅子に座らせてアリシアが慌ただしく動く白衣の人たちの所に行く。

「無限書庫が封鎖ってそんなに大事なのか？」

「……ああ、そっか。ライトだった」

「？」

「そうだね。わかりにくい事だと思うけど、一応この無限書庫のセキュリティは本局からの流用なんだ」

「……えつと、どういう事だ？」

「ココをハッキング出来るって事は本局を狙おうと思えば狙えるってコト。いい加減に少しは考えることを覚えなさいよ」

ため息を吐いて空中にディスプレイをいくつも浮かしたアリシアが戻ってきた。

てか、

「ソレってやべえじゃねえか!!」

「ああ、なんだろう。なんでコイツいるんだろ」

「まあまあ。一応上司なんだから」

「直属じゃないけどね。直情だけど」

またため息を吐いて、アリシアはディスプレイに目を向ける。

よくアリシアはやてやバグはよく分からない事を言う。理解するこっちの身にもなってほしい。

「ついでに言えば、もしも今夜天の書みたいな事件が起こっても記録に触れないから対策が練れない」

「そうなのか」

「反応薄いなあ」

「事の重要性を理解してないのよ」

「つまり、オレが解決すればいいんだろ？」

「……まあソウネ。ソウダワー、ヤバイワー」

「アリシア、落ち着きなよ」

そう、オレが全て解決してしまえばそれで一件落着なのだ。第一、オレに勝てるヤツなんている訳が無い。

暴走した夜天のプログラムもオレが止めたようなモノだし。アリシアだってオレのクスリがなければ生きていなかった訳だし。

「うわあ……なにコレ」

「どう?」

「ベルカの公式かしら? いや、違う……ここはミッドに近いし……複合? それにしては形が綺麗すぎる……」

「つまり?」

「一種の芸術ね。個人的には破壊したくないけど……というか、解説するのにやたらと時間があるわ」

「どれくらいかかりそう?」

「今いるメンバー……いえ、私の知るうる本局務めの人間がここに居ても一日は確実に掛かるわね」

「……早い?」

「遅すぎるわよ。普通ここまで大型の壁だと人海戦術でも使えば数時

間でクリアできるわ。でもコレは普通じゃないのよ」

「普通じゃない？」

「どう説明すればいいんだろ……式の一つ一つがやたらと長くてソレ自体に解読が必要だし、ソレも人海戦術でどうにか出来る物じゃないし」

「つまり、オレが破壊すればいいんだな」

「待ちなさい、バカ。そんなコトしたら無限書庫のデータが全部吹っ飛ぶわよ」

「ライト、やめて」

二人に止められてオレは書庫の扉を破壊するのをやめる。

「こういうのは扉を破壊すれば、どうとでもなるもんだ。そうに決まってる。」

「ユウちゃんがいてくれたらなあ」

「ハア？アイツが何したか知ってんのかよ!!」

「ソレを含めても、いる方が万倍マシよ」

「またユウが何かしたの？」

「アイツはなのは達との関係を『ぶっこ』って言ったんだ!!はやても泣かせて!!」

「……ホントに？」

「うん。私もその場に居たし」

「そっか………そうか」

ユーノは顎に手を当てて何かを考える。

あんなヤツ、オレが帰ったら速攻でシメてやる。はやてやなのは泣かせた罪はデカイ。

まあ、アイツが最低な御蔭でオレがはやてを慰める役に収まる訳だ。さらに言ってしまうえばソレを見たアリシアとかフェイトとかヴォルケンリッター達の評価も上がると。

オレが見守るなか、数分の解読作業が続く。

アリシアは解読班に、ユーノは解読班に連れ去られ、オレはフェイトの横に座って解読を待つ。

「ふざけるな!!」

途端に周辺にアリシアの声が響く。撫でてでもさっぱり起きなかったフェイトが飛び起きた程の大声だった。

「どうかしたのか?」

「ふざけないで、ホント……ヤだよ」

「?」

アリシアがペタリと膝を着く。隣からフェイトが来てアリシアの肩を掴む。

「誰か、この状況をオレに教えてくれ」

「スメラギ准空尉。『名も知らぬ研究者』を知ってますか?」

「?なんだソレ」

「研究者達の中で知らない人間がいない程度には有名なのですが……まあ武装隊は知らなくて当然ですね」

「で、その名無しの研究者がどうかしたのか?もしかして、それが犯人とかか?」

「察しがいいですね。その通りです」

「ハア?本局の人間が裏切ったって事か?」

「いえ、厳密に言えば彼、いや彼女かもしれませんが便宜上彼にしましょう。彼は本局には勤めてません。私達に一方的に技術を提供してくれる存在でしたから」

「なんでそんな奴が……」

「それは私達にも分かりかねますが、戯れにしては少し行き過ぎですね」

つまり、そいつが犯人って事か。

研究者たちは揃ってため息を吐いて、ディスプレイを睨みつける。

「じゃあ、そいつを捕まえればイイだけの話じゃねえか」

「いえ、私達は彼の存在を知らないのです」

「は?」

「彼女は居るかもしれない、されど彼はいないかもしれない。最近よく研究者のレポートの端に書かれてたモノです。今回も書かれてますね」

白衣の人間の出したディスプレイには確かにそう書かれている。

「所在を知ってるのはプレシア・テスタロッサのみだったのですが」

「最近は、普通に本局の方にレポートが送られてたわ」

「アリシア」

少しだけ顔が暗いアリシアが呟く。

「つまり、アリシアさんも所在は知らないと?」

「私を知るわけ無いでしょ。顔も見たことない人間の居所なんて知らないわよ」

「お母様は知っておられたようですが」

「もう一度言うわ。私は『名も知らぬ研究者』の顔も存在も知りえない。知ってれば今すぐ連れて来てココで解析させるだけの、技術を搾り取るだけのしてるわよ」

「……ふむ、そうですか。まあともあれ、これの解析に時間が掛かるとお墨付きを頂いたわけです」

「そうね。本局のバカどもにやつかみを受けなくていいわ」

「いやあ、クズ共が聞いてたら罰せられますよ」

「ゴミどもが聞く前に口を慎まないといけないわね」

「そうですね。カス共が吹っ飛んでしまうので口を閉じてみましょう」

白衣の人間とアリシアが妖しく笑う。

そしてお互いにディスプレイを睨んで、更にニヤリと笑う。そしてキーを凄まじいスピードで叩き始めた。

「ああ……またか……」

「アリシアちゃんも室長も相変わらずだ」

「さて、俺らも作業に戻りますか」

『名も知らぬ研究者』の課題に挑戦か」

今までため息を吐いていた研究者達が揃ってキーボードを叩き始めた。

カチャカチャと音が響く中、フェイトが立ち上がる。

「ゴメン、ライト。私、行かなきゃ」

「は? 何処にだよ」

「えっと、どう言えばいいんだろ。ともかく、私にしかできない事だか

ら」

「待て、オレも行く。お前だけを危険な目に合わせたくない」

「……うん。私は大丈夫だから。ライトは指示があるまで待機してほしいんだ。私がやることは軍規違反にあたるし」

「…そういうえば、ここの責任者はオレだったな」

「え、うん。ライトは准空尉だからね」

「では、フェイト嘱託魔導士。キミに暫し時間を与えよう。キミに出来る事をしたまえ。ってな」

「！、ありがとう!!」

走って消えたフェイトを見送り、オレは息を吐いた。

フェイトが何をするのかは知らないけど、こうしておけばフェイトの罰は軽くなるはずだ。まあオレの罰がキツくなるが、特殊なオレを罰せれる程管理局は強くない筈だ。

ついでにフェイトの印象とかも良くなるし。ノーリスクハイリターンだ。

—ライト君、いいかしら？

—リンデイさん？

—無限書庫はアリシアさんに任せて、そこから転移してくれるかしら？

—転移？何かあったんですか？

—複数に結界が張られてて、その場所の調査よ

—…このタイミングで結界って事は

—今回の犯人がいる可能性が高い

—了解しました。調べてきます

—お願いね。なのはさんやはやてさんにも応援呼んでるから

—なのはが着く頃には終わらせてますよ

—期待してるわ

念話が終わり。アリシアに伝えようとしたが、やめた。

「何、この式？…この程度で足止め？ブラフにもなりやしないわ!!私を止めようと言うのならもう少し質のいいモノを置いときなさい!!」

「やりますね、アリシアさん。まあその部分なんて私は既に過ぎてる

のですが」

「アツハツハ、そこ間違ってるわよ室長さん」

「なん……ですって……」

あの空間に入る勇氣はオレにはない。まあどうにかなるだろう。

24 運が悪い、いや、良かったのか？

「ここも、ハズレか」

剣を地面に刺して一息吐く。

今壊した結界で四つ目。渡った世界もそれと同じ数になる。

—エイミイさん、転移は出来る？

—もう終わったの？すぐに準備するね

これで四度目のやり取り。いい加減に疲れてくる。

結界なんて『ゲート・オブ・バビロン王の財宝』で強制的に破壊できるけど、それでもこの短い時間でいくつもの世界を渡るのは疲れる。

「なのは達も一緒か」

早く来ないかなあ、なんて想像して、ため息を吐く。

こんな事件さつきと終わらせてオレはアイツからはやてやすすずかを解放してやらなきゃならないんだから。

—転移準備できたよ

—了解

足元に円形の光が出現してオレを包み込む。眩しきで目を瞑って、次開いた時には場所が変わっていた。

何もない荒野。草一つないとはこの事か。

周りを見渡せど、常に同じ風景。そんな風景の中、一つだけポツンと黒い影が見えた。

—犯人発見しました

—…エ…ライ…

「ん？」

念話の調子が急に悪くなった。どういう事だ？

まあいい。犯人を倒してから連絡をつければいいか。

オレは黒い影に向けて歩き、ぼんやりとしか見えていなかった黒い影が人型であることを確認。

今のオレと同一年程度の子供が空を見上げている。

「……お前が、犯人か？」

「……」

影はくるりとコチラを向き、ため息を吐く。その顔は見覚えがあつて、オレが今一番殴りたい人物であつた。

「なんだ、スメラギか……」

「なんだつてなんだよ!!」

「いや、人生中々考え通りにいかないモノだな」

「いきなりどういう事だ?」

「まあ気にするな。で、なんでこんな場所に?」

「今ちよつとした事件が発生しててな」

「ああ、そうか。お前も管理局員だつたな…運が悪い、いや、良かったのか?」

「ハア? 相変わらず意味分かんねえな…」

相変わらずバグはよく分からない事を言つて溜め息を吐いている。

「で? お前はなんでこんな場所にいるんだよ」

オレがそう聞くと、御影はキョトンとした顔をして、クスクスと笑う。

「まあ、気にするな」

相変わらずな声のトーンでそう言われて少し違和感を感じた。

「この辺りにある結界が、な」

「なるほど、出られなくなつたのか。バカだな」

「ぐうの音も出ないよ」

まったく、こんなバカにはやては泣かさされたのか。いや、今はソレはいい。先に事件を解決しないといけない。

オレはこいつに背を向けて結界に向く。

「何をする気だ? 先に言うが、結構強度が強い結界だぞ?」

「フンツ、お前はオレの力を知らないのか?」

『ゲート・オブ・バビロン王の財宝』を展開して、空に幾つもの剣、斧、槍、杖、様々な武器が結界に向く。

実際結界を破壊するだけだからこんなにいらないが、オレの力を見せてコイツにオレには勝てないってことを教える為にワザと多く出す。

「行け」

腕を軽く振り下ろせば空に滞空していた武器たちが全て結界にブチ当たる。

ドドドドドド、と何かに武器達が当たる音が数秒間響き、バリンツ、と何かが壊れるような音が鳴り、朱色の結界の破片が散った。

「な?」

「……………」

「どうやら驚きで声も出ないようだ。」

「まあオレが最強だから仕方ないか。」

「……ああ、そうか、いや、違うな」

「ア?どうしたんだよ」

「その能力を持つてるのは他にいるのか?」

「ハア!?いるわけねえだろ!!コレはオレだけの能力だ!!」

「そうか、そうなのか……いや、そうだろうな。そんな能力、他にいる筈がないし、アル筈がない」

「ハア?何言ってるんだよ」

「気付いていて、否定して、結局信じれなくて、道化もいいところだな……まったく、死にたくなる」

「ブツブツと何かを言い始めた御影を放置してオレは念話を聞く。」

「エイミイさん、次に」

「ライト君!!」

「おお、なのは。お疲れ」

「ライトくん、その子が犯人だよ!!」

「え?」

「エイミイさんの声が頭に響き、考えが停止する。」

「誰が?コイツが?犯人?何の?今回の事件の?」

「残念だよ、残念だ、いや、残心を断つ為とはいえ、残念だ」

「ホントに、お前が」

「いやはや、ホコリが出てくればホコリもないヤツだったか。ホコリなのに」

「言えよ!!お前が犯人なのか!?!」

「いいえ、私は犯人ではありません。はい、俺が犯人です。まあ問答は」

つまり、アイツはオレに攻撃を与えることができない。そうさ、オレに傷一つ付けれないんだ。

「ハッ!!効かねえ!!」

「ふむ、コレはマズイな…ナイフも魔法も効かないとなると、攻撃の手段がない」

「大人しくオレに倒されて!捕まれ!!」

「この年で前科持ちは勘弁願いたいね!!」

またアイツが腕を振るう。

一閃、二閃、三閃。ナイフの数は増えてもオレには効かない!!
ジワリと痛みが走る。バラバラとナイフが地面に落ちた筈だ。

「慢心は大敵。覚えておけよ、雑魚」

「ガア、ぐ」

腹部に刺さった赤黒いナイフを抜いて地面に捨てる。

雑魚?オレが、雑魚だと?

「誰が雑魚だとおおおおお!!」

「はあ、何度も言つてやらなければならんのか。これだから自覚のない雑魚は困る。いや、魚だからこそ耳を持ち合わせてないのか。コレは失礼した。次からは水を震わせて会話することにしよう」

「ああ、是非そうしてくれ」

『ゲート・オフ・パレロン王の財宝』を開き、数多の武器を召喚する。

全力で、コイツを叩き潰す。絶対にコイツは許さない。

「ハア……雑魚め」

「散れえエエエエ!!雑種がアアアアア!!」

腕を振るい剣を射出する。

全てをアイツに向けて、あいつを殺す為だけに。

数秒間打ち続けた武器の風をやめて、荒くなつた息を整える。

目の前の土煙で見えないが、アイツはこれで死んだだろう。当然だ。あんな人間、死んで当然なんだ。

「ハッハッハッハッハッ!!これで事件解決だぜ!!」

「まったく。これ程簡単に解決できるなら去年に解決していたな」

ゾクリと背筋が凍る。

土埃が晴れて、武器の山を背凭れにアイツが立っている。無傷で、立っている!!

なんでだ!!アレだけ攻撃したのに!!避けれる訳がない!!ありえない!ありえない!!

「どうして、なんでなんだよ!!」

「ふう、愚問他答。答える意味も見当たらん」

「アレだけ攻撃したのに、アレだけ、あんなに」

「簡単な事だ。危険なモノを避ければいい。次に飛来する剣を認識して回避行動をとっていればそれほど難しいことでもないさ」

「ふざけるなア!!」

「至つて真面目なんだがね……まあいいか」

アイツは武器の山から剣を取る。

左手で取ったソレは、黒色の剣で禍々しく赤い線が脈打っている。

「……皮肉だな」

「クソツ!!お前はオレに近づけねえんだぞ!!」

「いや、まあ、皮肉と言ったのはお前では無くて俺にだよ」

するりと剣を構えたアイツ。赤い線が徐々に力強くなっていく。

「妃を殺し娘を攫った不届き者もいないし、俺は王ですらない。お前の担い手は既に死んでいる。俺は既に抜かれた身を収める術を知っている。俺はお前を知っている。俺がお前に合わせよう。俺たちの敵を断て。お前は斬る為にあるのだから」

「何を言ってるんだよ」

「オマジナイさ。本当は対する為に神話を読んだが、まさか自分が使うとはな」

アイツが笑い、それと同じように赤い光が剣から漏れ出す。

まるでアイツに同調するように。まるでアイツが担い手だと言うように。

「な、なんなんだよ!お前は!!」

「そうか、お前に自己紹介するのは初めてか。ハジメマシテ、さようなら。今しがた『小人の遺産』を手にした化け物です」

アイツはそう言ってケタケタと狂ったように嗤う。

嗤い、そして迫ってきた。

一步、二歩、アイツの足が動くのがわかる。三步目、アイツの頭が視界の下に映る。

腹に圧迫感を感じる、それもすぐに無くなり同時に下半身の感触がなくなる。

赤い禍々しい光がオレの視界を包み込み、オレの意識がゆっくりと遠くなる。

ドサリ、と音がなり、その音と一緒にオレの横に土が見える。どうして土が横に見える? どうして?

「クク、ハハッ!! クキヤキヤキヤキヤキヤキヤキヤキヤキヤキヤキヤキヤキヤキヤキヤキヤ!!」

わからない、わからない。わからない。わからない。

わからない。

わからない

わから

∴

25 英雄様よおおおおお!!

「……あ……」

「おや、目覚めたか。おはようスメラギ」
「……………」

ぼやけた視界に黒いアイツが映る。

いつもの様な声で、少しおどけた様な声で。

夢？夢だったのか？さつきまで全部。

オレの声は出ない。いや、喉に違和感がある。

腕も動かせない、足も動かせない。

ぼやけた視界がクリアになっていくにつれて徐々に足と手に痛みが迫る。

「イッ ダイ」

「当然だ、磔にしてるんだからな」

はりつけ？目を横に向ければ腕に刺さる赤黒い棒。そしてオレの腕を伸ばす為縛られた槍。

逆も一緒、こっちも一緒。

肘に一本の棒、そして手に二本、さらにソレらの間に一本、二の腕に三本。

「ふむ、英雄を磔に…か。かの裏切り者はこんな心境だったのだろうか?」

「ぐるってう！でめ、え！ぐうつでる」

「うるせえなあ。家畜ですら黙って殺されるつてのに。人間が叫ぶかね」

なんなんだよ、コイツ！オレがオカシイみたいに！狂ってる！

「まあいいか。さて幾つか質問してやろう。イエスなら瞬きを一回、ノーなら二回。わかったな?」

「ア、ー!!」

「ハア、まったく。家畜以下だな」

手で銃を形作ってオレに、オレの右手に向ける。

咄嗟に指先を追ってオレは右手を見てしまう。

「パンツ」

「アアアアアッ アッ アッ アッ アッ アッ アッ アッ アッ アッ
ッ アッ アッ アッ アッ アッ アッ アッ アッ アッ アッ
痛い！痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
！！
うるせえよ。高々右手が内側から爆発した程度で叫ぶんじゃねえ
よ」

アイツは鬱陶しそうに溜め息を吐いて指を少しだけズラす。
そこには先を向いているのはオレの左手で。

「ヤメッ ロッ」

「なら、質問に答えろ、おーけい？」

「わがっだから」

「パンツ」

オレの左手が熱くなる！

また同じ痛みがオレを襲う！！

「言わなかったか？イエスなら瞬き一回、ノーなら二回。わかったか？」

瞬きを一回する。熱い、手が焼けているように熱い。

左右をチラリと見れば真っ赤に染まった掌だったモノがある。

「よしよし、いい子だ。さて質問だ。今から数年前…七年前だ。お前は
その能力を持っていたか？」

七年前。持っていた。忘れもしない。

オレが能力をもらったのは三歳の時だ。

瞬きを一回する。

同時に目の前から溜め息が聞こえた。

「そうか…そうだよな。ではその能力を別の世界で使ったことは
？」

瞬きを一回。

オレはあの世界で使った。悪人しか居ない世界で使った。

「……まあそうなるよな。ハア、本当に、遠回りした…俺自身の願いが

ほら、這いずって逃げろやア!!」

そしてオレがまた蹴り飛ばされ、地面を這わされる。

同時にまたじんわりと暖かくなり、オレの意識を強制的に引き戻す。

動ける、動ける、動け!!

オレは立ち上がり横に転げる。

オレのさつきいた場所に赤黒い棒が刺さる。

「おお、おお、ようやく動くようになったか!!そうでなくてはツマらんからなあ!!俺を楽しませてくれよオ!!英雄様よおおおお!!」



慌ただしく動くアースラの船員達。問題があつたのは既に数時間前だ。

問題というのが、夕君が事件の犯人であることが判明した事が原因である。

リンデイさんが全員に通達していたらしい、彼が犯人であることを。

そして、犯人が見つかったのが数時間前。ライト君が見つけて、そして結界が張られた。

ソレを見ていた私となのはちゃんは先程から不安に駆られている。

朱い珠達が夕君を囲むように精製されて、そこで映像が途切れた。

「大丈夫……だよね」

「大丈夫……やと思う」

「そうだよね、ライト君だもんね」

「夕君が友達を簡単に捨てれるとは思わんし」

「でも御影君は私達の事を『ごっこ』だって!!」

「…ああ、そうか」

ようやく合点がいった。私達を切り離した理由。

こんな事をするのだから、私達と一緒ににはできない。私達との仲があつてはいけない。彼と敵対しているのは管理局で。私を保護しているのは管理局で、なのはちゃんやフェイトちゃんも管理局勤めだ。仲良くしていたら、私達に被害がでる。

「……アホちやうか…」

結局のところ、彼の心はわからないも彼は誰にも頼ることなく、頼れないから、切り捨てたのだ。

結果的に、それが私達の為になるから。彼は、そうした。当然の様に、また自らを捨てて。

「なのは！はやて!!」

「フェイトちゃん!!ライト君が、ライト君が」

「うん、大丈夫だよ…」

「フェイトちゃんは今の状態を？」

「うん。今まで結界を回って夕を探してたんだけど……間に合わなかったんだね」

「……せやね」

友達を切り捨ててしまった彼。そしてその目の前にいるのは友人でもあり、自身の仇でもあるアイツなのだ。

話し合いで終わる…訳もない。が、夕君が友達を殺すような事も思いたくない。

「結界は…」

「まだみたいやね」

「一定時間で解除パスが変わる結界だからね…」

「クロノ君!!私のスターライト・ブレイカーで!!」

「なのは、君の気持ちもわかるが、アレは強制的に破壊できないんだ」「どういうことや？」

「ユウの性質は知っているだろ？あれには外から掛かる魔力の吸収効果も持つてるんだ。だからこそ僕らからの念話は向こうに届かないし、サーチャーが入る事もできない」

「また厄介なモンを…」

「まっただよ…」

クロノ君と一緒にため息を吐く。

吸収効果を知っても、なのはちゃんはバリアジャケット状態から戻らずに、ソワソワとしている。

フェイトちゃんは目を瞑っている。

数秒してその目がパチリと開き、クロノ君の方に向く。

「アリシアを呼んだよ」

「よくやった…しかし、アリシアは今無限書庫で」

「うん、念話でこっちの状況を言ったら来てくれるって」

「そうか…」

「リアルタイムでユウちゃんが書き換える結界を破ると聞いて!!」

「……来た理由が不純過ぎないか？」

「え、えーつと…アハハ」

自動な筈の扉を自分で開けた目を輝かせたアリシアちゃん。もうなんというか、ワクワクしすぎて遠足前の子供がたぶん、こんな感じだと思う。

「誰か、今の情報をこっちの端末に回して」

「アリシアちゃん…」

「なのは、大丈夫よ。私を誰とってるの？ついさっきから『名も知れた研究者』と呼ばれる様になった存在よ……さあ!!慢心せずに邁進してあげるわ!!」

26 私に、数秒間を、命をください

「おいおい、この程度も避けられないのか!!」

「クソがアツ!!」

迫るナイフを避けて地面を転がる。転がった先に更に銀色の鋒が迫る。

来る事は予想していたので、防壁を張り対応する。

「随分と動きが良くなってきたじゃねえか!!」

「ツ!?!」

肉薄するように御影が接近する。背後に腕を回して剣を取る。

ガチリツと鈍い金属音がして御影の持つナイフがガリガリと剣を滑る。

「いい調子じゃねえか!!英雄様よオ!!」

「ツアツ!!」

「だが、まだ甘い!!」

剣を持つ手が捕まれ引かれる。同時に腕にナイフが走り鋭い痛みが右手を襲う。

痛みで剣を離してしまい、その剣を掴む御影の姿を見たところでオレの意識は闇に落ちていく。

「この程度で俺を殺すだって?」

「……」

「巫山戯るなよ、英雄。俺を殺したいなら学べ。学んで、学んで、俺を殺してみせろ」

ボンヤリとした意識の中、アイツの声が聞こえた。

死と蘇生の感触を同時に味わいながら、オレはゆっくりと意識を落としました。



「アリシアちゃん!?まだなの!?!」

「落ち着いて!なのは」

「だって、ライト君が!!もう何時間も経ってるんだよ!?!」

「ライトがそんなに弱いのか!」

「だって、だって!!御影君は化け物なんだよ!」

「ツ、それでも、ユウはユウだよ…」

少しだけ狂乱しているなのはをどうにか座らせて、退室する。

逃げてしまった。私は個人が言われた訳ではないのに。アリシアを置き去りにして。

「はあ、どない?」

「…相変わらず、かな」

「そうか…:まあしやあない言うたらそれでオシマイなんやけど」

「はやては…:なのはを」

「変わらんよ。なのはちゃんの状態も理解できるし、何より言ってることは正しいし」

「そう…:だよね」

少しだけ安心した。

今のなのははオカシイ。ライトがなのはを庇った時と一緒だ。どこか自分が無くて、まるで柱が無くなってしまったみたいだ。

それでも、なのははなのはなのだ。

「はやては…:落ち着いてるね」

「落ち着いてる様に見える?」

「うん…:いつも通りに見える」

「そっか、ならまだええ方やね」

はやてにグツと手を掴まれる。小刻みに手が揺れて、はやてが震えてる事を理解した。

「私も不安や…:不安やけど、まあ取り繕ってる」

「強いね…:はやては」

「私よりもアリシアちゃんの強いよ…:してる事は好きな人を捕まえるっていう矛盾行為やし」

「好きな人?」

「…え?アリシアちゃんて夕君の事が好きなんやないの?」

「いや、そういう話は全くされないかな…:ユウの事を言っても恨み言ばっかりだし」

「例えば？」

「うーん……『あのクソ眼鏡めえ、こんな課題を二日で纏めろとか鬼か？悪魔か？浄化される』とか言ってたかな」

「…夕君何を出してんや」

「えつと、確か、『固定術式ミッド、ベルカ応用』だった筈…」

「お、おお……ソレって必須なんか？」

「いや、必須どころか必須項目から遠く離れた項目だから」

「そうか、よかった……」

安心したように息を吐いたはやて。

そしてもう一度息を吐いたはやては笑う。

「ごめんな」

「え？」

「うん、フェイトちゃんを使つたわ」

「？」

「いや、まあ気づいてないならそのままでおつて」

はやては手を離してプラプラと手を揺らしている。

少しだけ暖かくなった手を何度か握ったり開いたりを繰り返して、意味を理解する。

理解したところで、私もどうやらはやてを使っていたらしい。お互い様か。

こうやって考えると、ユウはすんなりと私の緊張とか、嫌な事を払拭していた。例え自分が危険でも……。

「すごいなあ」

思わず漏れた言葉にはやてはキョトンとしてクスクスと笑う。

どうやら同じ事を考えてたみたいだ。

「まあ件の人でも助けに行こか」

「捕まえて、色々謝らせないとね」

「うーん、まずは何から謝らせよか」

クスクスと笑って、アリシアが作業している部屋に入る。

そこには相変わらずカリカリしているのはと何故か笑ってるアリシアがいる。

まあアリシアに関してはいつもの事なので、置いておこう。

「ん？んく……なるほど、なるほどお？」

「アリシア？」

「あ、フェイト、他にもちゃんとみんないるね」

アリシアは立ち上がって肩をトントンと叩いて周りを見直す。

「アリシアちゃん!!早く結界を解いて!!」

「まあ落ち着きなさいな。今からその説明をするんだから」

「だって!!」

「黙りなさい。私が今から喋るのよ。口を閉じて、座って、動かずに聞いてなさい」

「……」

凄い…あのなのはを座らせた…。

アリシアは溜め息を吐いて、大きなディスプレイに映像を出す。

映し出されたのは朱い文字の羅列。それが流れて、そしてグニヤリと変形する。

「まあ、見て分かるように文章を作ったから解り易いんだけど、こんな感じに一定周期で結界の形式が変わってるわ」

「……解けるのか？」

「理論上、無理ね」

「アリシアちゃん!？」

「理論の話よ。一定期間が短かすぎるのよ……」

「それじゃあ」

「まあ重ねて言うけど、理論上、アレを破るんだったら術者の魔力が尽きるまで放置するしかない」

「……」

なのはが愕然として、下を向く。そんな姿にアリシアは溜め息を吐いて言葉を続ける。

「私達の目的はなによ。この結界を壊すこと？この結界を流用すること？この結界を解析すること？違うわ。私達はあのバカとユウちゃんとの場所に行くことが目的、違う？」

「出来るの!？」

「ふふーふ。私は不可能を可能には出来ないけれど、可能を手繰り寄せることは出来るみたいよ。」

先に言うけど一発勝負。更には人数制限あり、加えて危険性を伴う。それでもする?」

「やる…私は、やるよ!!」

なのはが声を出すと同時にはやてちゃんも立ち上がる。

「私も行く。行って確かめなあかん事があるんや」

「……私も」

「いや、フェイトは元々行かせるつもりだから大丈夫よ」

「……」

いやらしく唾うアリシアとクスクスと笑いの漏れる艦内。

アリシアはそんな空気を作つて無理やりみんなの緊張を和らげる。

「さて、リンディ艦長。時空管理局技術部魔法技術、及び魔法式解析室
アリシア・テストロッサからの報告、及び提案は以上です」

「……承認しました。本当にその方法しかないのね?」

「ユウちゃんならもう少しいい方法でも思いつくんだらうけど、私にはみんなを危険に晒してしまう方法しか思いつきません。これ以上時間をかけてしまう意味もありません」

「そう……」

「リンディさん!」

「……分かりました。何かあれば私が責任を取ります」

リンディさんの声になのは喜び、アリシアは少しだけ辛い顔をす
る。

「アリシア……」

「うん。大丈夫。万全にするわ……絶対に、ユウちゃんをアツと言わ
せてやる」

「うん、そうだね。大丈夫だよ」

「さて、説明するわ。」

先も言ったけど、危険アリ、時間ナシ、機会ナシの最悪な状況よ。結

界へ一時的干渉は可能ということはわかった。時間にして九秒間。予め開く場所は指定しておくから、そこへ転移させる。

以上」

「それだけ?」

「あんまり実感わかないかもしれないけど、転移に掛かる時間は最低八秒程度。少しでも遅れたら結界が発動して座標不定になるわ。良ければ転移されないでしょうけど、悪ければ結界に両断される」

「……」

「わざわざ新たに決意なんて求めない。みんなに求めるのは少しの勇氣だけ。」

私に、数秒間を、命をください」

アリシアは私達に頭を下げる。

私達の答えは決まっている。既に決意しているのだ。

「大丈夫だよ、アリシア」

「そうやね、帰ってきたら命の代わりに美味しい物でも奢ってもらお
か」

「翠屋で新しいケーキ出すんだ」

「じゃあ、ソレにしよか。頼むで、アリシアちゃん」

全員がポンとアリシアの頭を叩いて歩き出す。

なるべくアリシアの方を振り向かない。叩いてる時に肩を震わせていたのだから、振り向けるハズなんてない。

—準備はどう?—

—声震えとるでえ

—うっさい、バカはやて!!結界に両断される計算式立てるわよ

—ごめんなさいそれだけは勘弁して

—私は大丈夫

—なのはは?

—私も、大丈夫だよ

―……こんな作戦しか思いつかない私を
―ストーっプ

―それは言わないで
―私なら大丈夫やって

―…心配してるのは翠屋の新作ケーキよ

―アリスア照れてる

―フェイト、帰ってきたら説教が待ってるわよ

―…ぐすん

―じゃあ、秒読みを開始するわ

―はいな

―向こうに着いたら、たぶん戦闘の真つ最中かどちらかが倒れてる
かだから、気を付けて

―ライト君が負ける筈ないよ!!

―うん、でも万が一もあるから

―じゃあ、5、

―4

―3

―2

―1ツ!

私達の視界が光に包まれる。

しっかりと握った手だけが今の状態を教えてくれる。

光が止んだソコは、沢山の武器が刺さった荒野だった。武器に統一
制は無く、刺さってるものもあれば、乱雑に置かれてるだけのモノ
もあった。

「無事…みたいやね」

「…念話も届かないね」

「これ、ライト君の能力だ!!」

なのはが武器を手にとって確認する。どうやら成功したらしい。
あとはライト達を見つけてしまえばいいのだけど。

「あ、あれ…」

「え?」

なのはの激昂とともに桜色の奔流がユウを飲み込んだ。

27 我の名を叫んで喰われる!!

桜色の奔流が止まり土煙が辺りを包む。

「ハアハア……」

レイジング・ハートを強く握りしめていたなのはちゃんの肩が揺れる。

地面に散らばる空葉莢とレイジング・ハートから残留した彼女の魔力が尽きたところでようやく我に返った。

「なのはちゃん何しとんのや!!」

「だって!!アイツが!!アイツがライトくんを!!」

「ホンマに夕君がしたって言うんかい!!」

「アイツ自身が言ってたじゃない!!」

ダメだ。私もだけど、この子も思考を放棄している。

彼はしていない。そう思っているだけで心のどこかでは彼を疑っている。彼を信じているが、彼自身が言ったのだ。

「はやて……まえ……」

「……え?」

土煙が晴れた先に立っていたのは左手を前に突き出している夕君だった。

直立して立つ彼は怪我一つ無く、ソレを信じることを否定する様になのはちゃんがカタカタと震え出した。

そして、その夕君は左手を静かに下ろして溜め息を吐く。

「……まったく、思い通りにはならんな」

そう一言呟いた夕君はコチラを見て、再度溜め息を吐く。

「夕君……」

「……ああ、そうか。そうだよな」

「大丈夫か?大丈夫なんか?」

「大丈夫だ。傷があるように見えるか?」

見えない、見えないけれど。

両腕を広げた夕君がニヒルに笑う。その顔にいつもの気だるさも無く、いつものどこか心配しているような瞳もない。

タロツサ」

「……」

フェイトちゃんはバルディッシュを握りしめて、真っ直ぐに夕君を見ている。ただ、真っ直ぐ夕君を見ている。

「さあ、お前はどうか答える?」

「ユウは……ユウだよ」

「クク、なるほど……なるほど……今しがた、何処かのバカの気持ちが悪かったよ」

また嗤いだす夕君。

そして私達に手を向けて口を開く。

「そこにいる子供二人を殺せ。さすればお前に世界の半分をやろう」

冷たい一言が辺りに響く。たった一言で、背筋が凍った。

ガンガンと鳴り響く警鐘が更に大きく響く。

「なんだ、殺せんのか。ツマランナ、見世物にでもなれば人形でも楽しめたというのに」

「お前……誰や……?」

「先もいったらどう? 我は御影夕だと。お前も肯定したではないか」

「違う!! 夕君はそんな事言わん!!」

「言わない? 実際に言ってるではないか、現実逃避か? 相変わらず殻に籠る事は上手いじゃないか」

「違う!! お前なんか、夕君であるわけがない!!」

私は叫ぶ。必死で叫び自分の頭の中にある迷いを消し飛ばす。

消し飛ばした迷いを肯定するように、夕君の声が響く。

「クク、ケケケ、クキヤキヤキヤキヤキヤキヤキヤキヤ!! これでは宿主も浮かばれんなあ!! 信じていたモノにも否定され!! 間違われ!! ククク、滑稽だ、滑稽すぎる!!」

「ユウ……」

「その名で呼ぶな、いや、呼んでも構わんのだぞ? それにより貴様らが勝手に喰われるだけなのだから、ほら、もう一度呼んでみるがいい」

「夕君の声で喋んな!!」

「我に指図するか!! 夜天の王よ!! 若輩の貴様が!! 永遠ともとれる時間

を生きた我に指図するとは!!コレは面白い!!」

「やど…主…」

「そうさ!!さあ!!思考しろ!!我の存在を!我を誰かを!!我の名を叫んで喰われる!!クキャキャキャ!!」

こいつは、夕君ではない。夕君を宿主として存在していた、そういうモノだ。

ソレの名を私達は知っている。知ろうとしていた存在の名前。

「アン……ヘル……」

「貴様がそういうならばそう言う存在なのだろう!!我の呼び名など幾千に及び、我が存在は零へと帰着する!!」

ズルリとアレの左腕から赤黒いナニかが生える。ソレは夕君の体を包み込み、そして赤黒いマントを形成した。

未だにグジュリ、グジュリと水分の含んだナニカが彼の左手を這う。

「さあ!!我に喰われる!!宿主と同じくして、世界を壊す養分に成り上がれエ!!」

アンヘルが振りかぶり、下ろした左腕は私達の前の地面を大きく削った。

ゾクリとする。もしもこの攻撃が当たってしまった時を考えてしまおう。

—フェイト!はやて!!なのは!!

—アリシアちゃん!?

—良かった。結界が急に解けたんだ

—アリシア、ユウが…

—うん、今こっちで解析してる

—アリシアちゃん!ライト君が怪我してるの!!

—なのは、少し落ち着きなさい。今は目の前に集中して

—でも!?

—アンタも殺される?今なら目の前の存在が世界ごと壊してくれるわよ

なのはちゃんは俯き、ライト君を大事に抱きしめる。

「ふむ、なかなかにしぶとい宿主だ…今までとは違うな」
「え？」

「ユウが…」

—ユウちゃんのリンカーコアは生きてるよ

—じゃあもしかしたら!!

「まあ目の前の餌を喰ろうてからでも遅くはない。じつくりと、宿主を制圧するでしょう」

「…まだ、ユウは助かるんだね」

「宿主を？助ける？クキヤキヤキヤ!!また面白い冗談を言うじゃないか人形!!我を殺すということは宿主を殺すと同義!!既に遅いだよ、人形が」

「…私は、人形じゃないよ」

「聞こえんなあ？誰かの為だけに作られ、誰かの代わりに生きて、誰かの指示に従う。コレを人形と言わず何と言うか？」

「お前!!」

「大丈夫だよ、はやて」

スッと出した手で、私の足は止まる。

フェイトちゃんは相変わらずアンヘルだけを見ていて、そしてバルディッシュをアンヘルに向ける。

「私は、アリシアの為に作られた。アリシアの代わりに生きて。母さんだけ指示に従った。昔は人形以下の存在だったと思う」

「では今はなんと言う？ようやく人形になれたとでも言うのか？」

「…ソレを聞くために、ソレを確かめるために、ソレを認めてもらう為に、私は、あなたを倒します」

「我を倒すと言うのは宿主も一緒に倒れるが？」

「それは…私よりもいい解決方法を知ってる人に頼みます。

私は、今の状況を見てユウが思う事を、きつとユウが望んでる事を…アナタを、倒します」

「ククク、人形風情が随分と人間らしいことを言う。ソコにただ啞然としている人間よりも随分と口が回るじゃないか」

ガジャコ、と重厚な音が響いて、バルディッシュから煙が溢れる。

い方で。
アンヘルは、囁う。

28 戯言にも及ばん!!

「ライト君…ライト君……」

「なのは……」

私が抱えてきたなのは、ギユツとライトを抱きしめてうわ言の様にライトの名前を呟いている。

—アリシア

—うーん、転移障害はされてるからこつちから送れないし、そつちを転移させることも無理ね

—…そっか

つまり増援もなければなのは達を送り返す事もできない。

内心で溜め息を吐きながらライトを確認する。

白い筈のなのはバリアジャケットは赤く染まり、乾いてない事からまだ出血している事がわかる。ライトの身体は見る限り傷だらけで、今出血しているのは腹部だろう。

ともあれ、このままでいる事はよくない事は確かだ。治癒系の魔法はテキトウに掛けてしまうとそれ自体が怪我になってしまう。

それが分かってか……いや、なのははソレも頭になく錯乱している。不幸中の幸いか。

—フェイト、アンヘルを気絶させれるなら…そうしてほしい

—出来る限りはするよ…

—常に最悪を考えろ。最低な先生ね

—最良の先生だったけどね

空を見上げて、少しだけ息を吸う。

断ち切った迷いがチラつき、ソレを消していく。

—ユウは、私を恨むかな？

—私も恨まれるわよ

—……なら、一緒にユウに怒られようか

—その前に私達でアイツを叱ってやろう

—そうだね

クスリと笑い、悩みを切り捨てる。

何度か相棒を握り直して、なのはと視線を合わせるために膝を付く。

「なのは」

「……」

「私、行くね。助けないと」

「なんで……あんなヤツ……」

「うん。もしかしたらライトを傷つけたのはユウかもしれない。アンヘルかもしれない」

「じゃあ……」

「でもね、なのは。私はそれでも、誓ったから」

「誓っ……た？」

「うん。誰かを助ける為の、私の為の誓い。アレから少しだけ強くもなったよ。」

「だから、私は彼を助けたい。助けないといけないんだ。彼が、私にそうしたように」

「そうだ。私を救ってくれた彼を、次は私が助ける。」

「それでようやく同じ場所に立てるような気がする。気がするだけかもしれないけれど。」

「フエイトちゃん……私は……」

「なのはは、ここでライトを看着て。はやてが待ってるから、行くね」
手を伸ばすなのはを背中に感じながら、私はフワリと飛翔する。

「滞空状態から最高速に至る頃にははやての戦っている場所に着くはずだ。」

「フエイト」

「ん？」

「ユウちゃんが手遅れなときは」

「大丈夫、その時は……」

「私が彼を墜とすから。」

「ふむ、ようやつと来たか」

「…なのはちゃんは？」

「転移妨害があるから、遠くに置いてきた」

「そうか…なら大丈夫やろ」

「クク、我にとっては何も変わらんがな。貴様らを喰らい、あいつらを喰らう。それだけなのだから」

ユウの声で囓うアンヘルを少しだけ睨み、再度バルディッシュを強く握る。はやても自身の杖を握り直してアンヘルを正面に捉えた。

しかし、アンヘルだけは何も構えず、自然体でいる。ただ、そこに立っているだけ。唯一動きがあるとすればつり上がった口角とグネグネと動き続ける左手の触手だけだ。

「皮肉だな。宿主が助けた命が宿主に牙を剥くか」

「ちやうよ。私らはアンタを倒して、夕君を助ける為に戦うんや」

「クカカ!!我を倒す事は宿主を倒すことと同義と言ったであろう!!」

「それでも、方法があるかもしれない…私達は、アナタを止めます」

「クキヤキヤキヤキヤ!!痴れ言を吐く人形め!!では子供二人で我を倒してみせろ!!我を止めてみせろ!!」

ジリツ、と足が地面を擦りアンヘルが少しだけ足幅を変える。近接戦闘を主に行っている私は気付いたが、はやてはその微妙な違いに気がついていない。

少し前にいるはやての襟首を掴み後ろに引いて投げ飛ばす。少し上に向けておけば体を起こせる筈だ。

アンヘルが上下にブレる。膝を落としたのか。私は目の前にバルディッシュを構え攻撃を防ぐ準備をする。

ガリツと削れる音が響き、バルディッシュの黒い刃部分と赤黒いナニかがぶつかる。

先の尖った…剣というにはかなり歪な形状のナニか。

「ほう、よく気付いたじゃないか!!」

「これでも、訓練してますから」

「クカツ!!それも今日で無駄になると思うと無残だな!!」

「無駄に、させません!!」

バルディツシユを横に倒して、ナニかを地面にズラす。私自身にナニかが当たる軌道から外れた事を確認してバルディツシユを大きく横に振るう。

「ハアアアアアア!!」

「ケケケ!!当たらんよ!!」

大きく後ろに下がられて回避される。それも頭の中には入っていった。

「穿て!!」

「なんだと!?!」

はやての声が響きアンヘルに向け赤い刃が飛来する。

速く、そして追尾するソレはアンヘルに当たり、そして爆発して煙を出す。

私はその間にバインドの準備をして、アンヘルの動向に備える。

「甘い!!蜂蜜に砂糖をブチ込んで脳髓に掛けたもの程度に甘いなあ夜天!!」

「甘いのはどっちや!!」

「ハアツ」

ライトニング・バインドがアンヘルを幾重にも縛り、私はソレの制御に集中する。

空にいるはやては夜天の書を開き、杖を横に構えた。

「クソツ!!なんだ!コレは!?!」

「クツ:はやて、早く!!」

「彼方より来たれ、ヤドリギの枝」

「近代魔法め!!力づくで引きちぎってやろうではないか!!」

「させない!!」

更に魔力を込めて、力を強める。

はやての足元から白い光が射し、彼女が杖を上に向ける。

「銀月の槍となりて、撃ち貫け」

「いいのか!?!我を殺せば宿主とて死ぬのだぞ!!」

「安心しい、殺すまでの設定やない。ただ、ちよっと石像になってもら
うだけや」

「うわぁ…」

はやてが物凄くいい笑顔でそう言っつて、私は思わず口から声が出て
しまった。

「じゃあ、次起きる時は宿主様が変わつとき。それで、しまいや」

「待て!! そうだ、我と共に世界を壊そうではないか夜天の王よ!!」

「……その誘いが夕君の口から出てれば…いや、夕君の口から出てる
んやつたな」

「はやて…」

「でも、もうええよ。またお眠り、アンヘル。」

石化の槍!! ミストルティン!!」

白く輝く幾本の槍がアンヘルに向かって直進する。刺さる直前に
ミストルティンの影響でか、バインドが解消され、石化の槍はしっか
りアンヘルを貫き、そして地面に刺さった。

アンヘル周辺は煙で包まれわからないが、石化効果で土色の地面が
灰色に変色していく。

「……」

「……」

私の傍に降りてきたはやて。

その目は少しぐらついていて、大切な人を撃ったという事に罪悪感
を感じているのだろう。

私も、そうだ。

無言で、戦闘態勢を崩さずに煙が晴れるのを待つ。

「……ふう」

息を吐いたのは私か、はやてか。まあ両方なのだろう。

しっかりと灰色に染められた彼が立っている。それはまるで私達
の罪を見ているようで、目を少しだけ背けた。

「……あとは、アリシアちゃんがどうにかしてくれるやろ」

「うん…そう、思う」

「さつてと、サクサクと転移してもらって、翠屋のケーキ食べに行こ

か

「そうしよつか」

—はやて!!フェイト!!

頭に響いたアリシアの叫びに私が反応出来て、はやてを抱いて空を駆ける。

地面を穿ち生えて来たのは赤黒い触手群。数えるのも億劫になり
そんな程のソレが地面から空に向く。

「…なんで」

「なんで?なんでだつて!?クケケケケケ!!答えなんて頭の中に浮かんでるんだろう!?ソレを否定してもいいが現実を否定するとはやはり殻に籠るのかア!」

灰色に染まったアンヘル、その隣からテクテク歩いて出てきた無傷のアンヘル。

なぜだ?しつかりと当たった筈だ。

「当たった!?しつかりと!?それは確かか!?クケケケケ!!やはりまだまだ甘いなあ!!我は宿主であり、宿主は我であると何度も言っているだろう人形お!!」

ギリリと歯が軋む。

そうだ。アンヘルが彼であるなら、ライトニング・バインドは無意味だ。既に解析されている。実際にアンヘルは言ったではないか。一度解析していれば完璧に吸収できると。

「直進する攻撃など、避けるに容易い!!クキヤツ!!茶番として付き合ったが戯言にも及ばん!!」

「茶番…」

「わかる攻撃を受け、解ける縄で縛られ、倒せる相手に付き合う。コレを茶番と言わずなんと言う!!遊戯とでも名付けるかア!?クキヤ!!」

灰色のアンヘルが崩れて、地面に赤黒い触手が散らばる。

ダメだ、ダメだダメだダメだダメだダメだダメだダメだダメだダメだダメだダメだ。諦めるな。思考を止めるな。

私は彼を救う為に戦っているのだから。アンヘルに勝てなければ…勝たなくては!!

「まあいい。少し時間を掛け過ぎた。遊びすぎたか。我もまた子供か…ケヒツ」

「え、キヤア!?!」

「フェイトちや、キヤア!!」

足に触手が巻きつけられ地面に叩きつけられる。

咄嗟にはやては投げたが、どうやら無駄だったらしい。

四肢を触手で縛られ、身体に赤黒いソレが這っていく。蛇の様に、ゆっくりと。

ぐじゅり、ぐじゅりと水気を多く含んだ音が耳を刺激して、体を這う。

「さあ、食事をしよう。暴れても構わんぞ。踊り食い、というわけではないが、苦しむ姿を見るのは好ましい」

「あ、アア……」

「はやて!!」

動こうとしても動けない。動きが制限されている。

行動できない。選択肢を全て潰された。私達に、為す術は、ない。

「さあ!!我に喰われる!!そして、宿主と共に消えてしまえ!!」

*

29 ふむ、僥倖

暗い。暗い。暗い。

どっぷりと何かに浸かったように息苦しい。

オレは、何をしていた？

細切れになった感覚を一つ、また一つと紡いでいく。

何を間違えていて、何が合っていたのか。

ソレはオレが決める事なのか？

違う。オレは尽く否定された。行動全てを否定されて、殺され続けた。

撲殺され、刺殺され、窒息し、ぐちゃぐちゃに潰された。その度にオレは無理やり立ち上がらされ、繰り返し殺される。

殺されて、わかった事が幾つかある。

今まで分かっていた、と勝手に思っていたこの力の本質をオレはしつかりと分かっていたいなかった。

故に殺された。

今まで正しいと思っていた行動の全てが、オレの戦い方が、勝ちを基本と考えていた。

故に殺された。

アイツは何度もオレを治療して、何度もオレを殺して、何度もオレを戻した。

何故？

頭の中が必死で答えを導く。それでもわからない。

あの星の住人だったから、オレを殺し続けた？

なら、オレを殺し終わって放置してればよかった筈だ。

オレを殺したりなかった？

なら、何故蘇らす度にオレを励ますように挑発した？

わからない。わからない。わからない。

わからないければ、直接聞けばいい。

アイツから教わる事はまだ沢山ありそうだ。アイツは教えてくれるだろうか？

いや、無理だ。オレは復讐の対象だ。なら、何度も殺してくれて構わない。

このままじゃ、オレはみんなを守ることができない。救うことが出来ない。

だから、オレはアイツに頭を下げてでも、教わらないといけな

『俺を、殺しにこい』

どうしてアイツがあんな事を言ったのかはわからない。

わからない事だらけだ。転生して、何でも知っていると勘違いしていた。

誰もオレを否定しないから、オレは勘違いしていた。全て、オレの思い通りだと。

じんわりと身体が温かくなる。

これは蘇生のソレだ。何度も味わった感覚でオレの意識は浮上していく。

誰かに抱かれてる感覚。微妙な浮遊感。身体だけ、浮いている。

ヤケに重い瞼を開けると、そこには涙をいっぱい溜めた明るい栗色の少女。白いリボンで髪を二つに結わえている少女。

「なの……は？」

声が上手く出ない。喉をやられたのか、はたまた叫びすぎたか。

オレの声を聞くとなのは溜めた涙をボロボロと流しだしてオレの胸に顔をうずめた。

ここは、どこだ？景色は変わっていないから、医務室ではない。

「ライトくん!!よかった!!よかったあ……よかったよお……」

「なの、は……ゲホゲホ」

喉に溜まっていたらしい血を吐き捨てる。前に倒された時を思い出して、腹部に大きく穴を開けられたと記憶にあった。

何度か呼吸を確かめて、異常がない事を確かめる。

「なのは、どうなってるんだ？」

「ライトくんがアイツに倒されてアイツがアンヘルでアイツが全部悪くて」

「悪い、えっと、どういうことだ？」

「だから!!アイツが全部悪いんだ!!」

混乱しているのはを何とかなだめて、念話を行使する。

誰かに繋がるかもしれない。

—アーアー、アースラ?こちらスメラギ

—起きたのね!!

—アリシア?なんでアースラに?無限書庫は

—そんな事どうでもいいから!!早くフェイト達のところに行つて

!!

—:危険なんだな、わかった

アリシアが珍しく叫んでいた。つまり、結構危険なのだろう。正直な話、俺よりも強いアイツがいる場所でフェイトが危険になる意味が分からない。

オレを倒す事によりアイツの復讐は完了した筈だ。尤も、まだ殺されるかもしれないけれど。それでも、アイツの行動を思い出す限り、フェイトに手を出すということは無いはずだ。

ソレを踏まえて、アイツよりも弱いオレが行った所で、数が増える程度にしかならない。いや、行かないよりはマシか。

立ち上がって、土埃を払う所で気がついた。

体を朱い光が覆っている。相変わらず、優しい光でオレを包み込んでるソレ。

つまり、こんなオレでも、アイツに頼られているらしい。それは、嬉しい事だ。

—アリシア、現状の説明をしてくれ

—:…:本当にライトなの?

—んあ?冗談を言う暇があるならゆっくり行くことにするぜ?

—ああ、ライトね。少しオカシイけど

何故か聞こえた溜め息と一緒に言われる情報。

アイツがアンヘルに飲み込まれたと。

アイツを助ける事は現時点で不可能だろ。

今アンヘルは石化状態だけど、何故か反応が消えないと。

アイツが、飲み込まれた?ついさつきまで元気にオレを殺していた

奴が？

ありえない。ありえない：オレはアイツと戦う為に、アイツを倒すために、アイツから教わる為に蘇らされてるというのに。

どうして、どうして？

「ライト君、ダメだよ、殺されちゃう」

なのはに服の端を掴まれる。グツと、皺になる程に。

色々と、考えた。もちろん、今まで考ええなかった事まで、考えれる様になった。忘れていた否定される事を教えられてから、今までの事も考えた。

だからこそ、オレはいつもの様に笑わなければいけない。笑っていた自分をこれ以上壊すことを、オレは許されていない。

「なのは、オレは死なないよ。死ねない」

「え……」

「オレは、アイツを止めてやらないといけないんだ」

もしも、アイツが本当に暴走しているなら、それはオレの責任かもしれない。いや、オレの責任なのだろう。

ならば、清算しなくてはならない。アイツを止めることで清算出来るかはわからないけれど。

「なのはは……少し待っててくれ。すぐに戻るよ……すぐに」

そう、元に戻る。たぶん、なのはを原作のようにはもう出来ないかもしれない。でも、幼い今なら、まだ間に合うかもしれない。

アイツなら協力してくれる筈だ。実際三人程原作と違うキャラがいる訳だし。アイツならできそうさ。

そうしたら、またいつもの様に、アイツも混ぜて、笑える筈だ。

「じゃあ、行くわ」

「待って、待ってよお……置いてかないで……やだよお……嫌だよお……」
力強く握られた服に更に力が入る。

まるでオレを責める様に。オレの罪を見せつけるように。

どうしようもない感情がオレの中でグルグルと回転して、オレを締め付ける。

「なのは」

「え…」

「ごめんな」

頭の中で何度も言った言葉が口から一つだけ漏れた。首元に手刀を打ち込んで、なのはから力が抜ける。まさか士郎さんから教わってた訓練がこんな時に役にたつなんて。

「皮肉だな」

上着をなのはに被せて、オレは宙を翔ける。先に見える赤黒い塊が敵なのだろう。

虚空から一本の剣を取り出す。この距離からの剣射なら相手を射殺せるかもしれないが、フェイト達を巻き込むかもしれない。

剣一本で、フェイトとはやての救出。

その後、現状の把握と敵の駆逐。

そうすれば、アイツを止めれる。

「行けるさ…オレなら大丈夫だ」

自分に言い聞かせた言葉は、以前なら何でもなしに言えた言葉。今は無理やりひねり出すしか出なかった言葉。

—アリシア、フェイトとはやての位置は？

—詳しくはわからないけど、そこから真っ直ぐ

—了解!!

翔ぶスピードを速めて、オレは剣を振りかぶる。

視界の奥に金色を確認できた。そのした辺りに向けて更に速度を上げて振りかぶっていた剣を振るう。

「うおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

「なに!!?」

何の抵抗も無く斬れた触手。フェイトを抱き上げて空に逃げる。

「ラ、ライト!?!」

「おう! はやては?」

「あそこに!!」

「よっしゃあ!!」

フェイトを空に残してオレはまた触手に突っ込む。

次はこちらに触手が迫ってくるが、速度はそれほどない。手数もア

イツの魔法弾程ない。避けれる。

「はやてええええええええええ!!」

また触手を切り落とし、はやてを抱きかかえて空に逃げる。

朦朧としているらしいはやてをフェイトに渡してオレは触手を生やした御影を見る。

「死にぞこないが…」

「ハッ!!その死に損ないに色々されてんのはどっちだよ!!」

「ライト!!その光…」

「…ああ」

少しだけ薄くなったが、オレにはまだイツの魔法が残っている。イツが力を貸してくれている。

「クソがあ!!我に吸収される宿主如きが!!我に歯向かうというのか!!」

「アイツがそんな簡単にくたばるかよ!!」

「よかろう、ようわかったわ!!ならば最初に喰ろうてやろう!!宿主から最初に!!」

アンヘルが触手に覆われて実体が見えなくなる。

ウネウネと触手が動いているということは、実際生きているのだろう。

—あーあー、テステス。聞こえてるメンバーはいるかね

「御影!」

「ユウ!」

—おー居たか。うむ僥倖

「オマエ!!生きてたのか!!」

—まあ、今は辛うじてな…今もアレの阻害を躲しながら念話を飛ばしてる

「よかった…」

—よかった…いや、よくないのかもな

「どういふことだよ」

—良かれ、悪かれ、俺の身体の九割方はアレに乗っ取られてる「え?」

「どうにかなんねえのかよ!!」

— 結構思考したが、無理だ

「……どうすればいい?」

— 簡単だ……俺を、殺してくれ

30 罪を背負う

「ふざけんな!!」

—ふざけて言える内容ではないさ

「……夕…君?」

—おはよう、はやて

「夕君、やっぱり、夕君やねんな?」

—俺以外に聞こえるのか?耳鼻科に行くことを薦めよう。花粉症は気をつけろよ

「うん、ユウだね」

何かを納得するようにフェイトは溜め息を吐いて。はやては息を飲む。

「そんなん…夕君を殺せやなんて」

—俺にお前たちを殺させないでくれ

「そんなん…そんなんないわ」

「ユウ…他に…他に方法はないの?」

—うん。無理だな

きつぱりとアイツはそう言った。

まるで自分の中では全て解決しているように。自分だけ犠牲にして。

—まあ俺の命一つで世界が守れるなら、いいだろ

「よくない!!私は!!私は…」

—はやて、それ以上言ってくれるな。せつかく断ち切った事が無駄になるだろう?

「やっぱり…やっぱり、夕君はアホや…アホオ……」

「御影。オレはどうすればいい?」

—黙って殺されてた訳じゃないか…ふむ

「煽るなよ」

—すまん。正直、その二人は戦力にならないと思ってくれ。ア
ンヘルにリンカーコアを吸収されすぎてる

チラリとフェイトを見れば、コクリと頷いた。

—後はどうにか俺がコイツの動きを止めるから

「宿主ガアアアッアアアアアアアアアアアアアアアア!!」
途端の怒号。

触手が膨れ上がり、そして破裂する。

肩で息をするように揺れた影。立っていたのは赤黒い長髪を揺らし、同色のマントを羽織った褐色の男。

「クハッ!!喰った!!これで我が我だ!!もう既に邪魔をする者は居らん!!」

「わかったよ…」

オレは空に武器を顕す。

コレが、アイツの願いだというなら、オレが叶えよう。叶えてやろう。

「ククク、クキヤキヤ、クキヤキヤキヤキヤキヤキヤキヤキヤキヤキヤキヤキヤキヤ!!それでどうするとかね!!」

「こうするのんだよ」

腕を振るい、幾つかの武器をアンヘルに降らす。

止めどなく、休むことなく、降り注ぐ。

「フェイト、安全な所においてくれ」

「……大丈夫なの?」

「正直な話、微妙だと思う」

「なら私らもおった方が!!」

「もしも、オレが負けたりしたら、お前らが次に狙われるんだ……アイツにお前たちを殺させてやらないでくれ」

その一言に驚いたのか、二人はオレを凝視する。

「ホンマに、ライト君なんか?」

「お前らもか」

「だって、なんか、違うよ?」

「まあ何回も殺されてれば、こうなるよ」

我ながら酷い言い方だ。しかし、事実でもある。思わず苦笑してしまふ。

フェイト達がなのはの方に向かったと同時に剣射をやめる。

「どうせ、生きてるんだろ」

「キシッ!!どうやら貴様は我がどうかわかつているようだな!!」

「いや、まったくもって、わからん」

当然だ。オレはそこまで高度な解析魔法を所持してないし、コイツに関する知識もない。

でもわかる。コイツは今ココで、オレが殺さなくてはいけない。

オレが……殺す……?」

「今更、上の空とは余裕じゃないか!!」

「ッ!?!」

咄嗟に腕を上げて防御する。

しかし魔法で作ったモノは壊されて腕に直接衝撃が加わる。

そのまま地面に一直線に落とされて、叩きつけられる。

「ふむ、地面と自身の間に防御陣か……」

「生憎と、咄嗟の出来事には対応出来るように調教されててな」

腕の状態を確認する。手は動く。指も問題なし。大丈夫だ。

コイツを倒す事は、おそらく可能だ。アイツが力を貸してくれる。

それは、まあいい。

「また考え事か!!我を相手にしているというのに!!余裕じゃないか!!」

「クッ」

剣を取り出して、アンヘルの腕を防ぐ。防いだ直後に弾き、大きく横に移動する。

ダメだ、アイツの腕は触手なんだからマトモに受けたら飲み込まれる。

あの移動方法は御影の技だ。

「ほう……ならば!!これならどうだ!!」

銀色のナイフの中に幾つかの赤黒いナイフが見える。剣を振るい、全て墜とす。

コレもアイツの攻撃方法だ。

全部、今しがた受け流した攻撃も全てアイツの攻撃だったモノだ。

アイツがオレに教えてくれた、攻撃だ。

何にせよ、オレがアイツを殺してしまう事には変わりはない。
オレがアイツをコロス？あの日のように？

違う、あの日の様な事は出来ない。出来ないからこそ、オレの手で、
直接殺さなくてはいけない。

「また考え事かあ!!」

「……いや、そうだな」

そうだ。難しい事は、後で考えよう。それでいい。そうしないとい
けない。

オレの精神がどうにかなろうが、知ったことか。オレはアイツの願
いを叶えてやらないといけない。何度も殺して、何度も教えてくれ
た、アイツの願いを……。

「行くぞ……夕」

—ああ、来い阿呆

頭の中にそんな声が聞こえた気がした。

気がただけで気のせいかもしれない。しれないけれど、オレの背
中を押すには十分な幻聴だった。

剣を滞空させて、一本だけ抜きとる。

幾千とも言える武器達を召喚して、アイツに向けて乱雑に飛ばす。

「ハッハッハッハッハッハッ!!甘い!!この程度で我は殺せんぞ!!」

「わかってるよ……」

グツと足に力を込めて、武器の嵐の中に突っ込む。

同じ進行方向ながら、斧がオレの肩を裂き、槍が顔の横を通過する。

「なんだと!?!」

「お前が……夕を騙るなああああああああああ

!!」

「その程度のこうげ、クツ!?!動けない!?!」

アイツの動きが固まる。

更に足に力を込めて更に速度を上げる。

構えた剣がアイツの胸に向く。

31 ああ神様、お願いします

「……」

転移して戻ってきたアースラ。転移した直後にライトは視線を下に向けて、自分の部屋に逃げるように走っていった。

気絶していたなのは医務室にいるし。

ユウと仲が良かった、といっている私達は心の何処かにぽっかりと……いや、かなり大きな穴があいていた。

「お疲れ様、フエイト」

「アリシア……」

「うん、とりあえずは、お疲れ様」

何か言おうとした私の口を塞ぎ、アリシアはそう言っただけで私を迎えた。

「はやても、お疲れ様」

「……うん」

はやては元気も何もなく、心が何処かに飛んで言ったように答えた。

他の管理局の人が、ユウを持ってきてくれるらしくて、先ほどまで私達が乗っていた場所をジッと見つめているはやて。

「アリシア……」

「ん？」

「私やアリシアと同じ様に、ユウを蘇らせる事とか」

「出来ない事はないけど」

「ホンマか!?!」

「犯罪よ。しかもギリギリアウトどころの話じゃなくて、真っ黒ね」

「それでも、そうしたら夕君が」

「あのね、はやて。アイツがそんな事をさせるためにはやて達を逃がしたっていうの?」

「アリシアちゃんにはわからへんやろ!!」

「分かりたくないわね!!ユウちゃんの気持ちを一切考えない自分勝手な夜天の王様の気持ちなんか分かりたくもない!!」

「あ、アリシア」

「これやから研究者如きは!!」

「あら、その研究者の研究を頼りにする夜天の王様はなんだって言うの!?!」

「言うたな!!」

「何回だって言ってるわよ!!夜天の王様は二度も命を救ってくれた人間を自分の為の人形にしたいド外道だって!!」

「ッ…」

はやては息を飲んで、走り去る。

たぶん、今日はココに泊まるだろう…地球との距離も遠い。

「アリシア…どうして…」

「私が蘇った時、色々話を聞いたわ。ユウちゃんのした事も、今になってあの研究資料を見返す事もある…」。

アレは人間が二日三日で出来る作業じゃないのよ。それこそ母さんでさえ、何年も掛かって出来たのは私じゃなくて、フェイトよ?」

「……」

「…ごめん」

「いいよ、大丈夫だから」

平静だと想っていたアリシアも、今はかなり混乱している。

彼を蘇らせれない、そう言ったのは、たぶん私達の不足だ。できるのなら、アリシアは自分を犠牲にしている筈だ。それこそ、ユウが死んですぐに思考実験を繰り返してしまうほどに彼を想っていた。

だからこそ、彼を救えない事を誰よりも知っている。

「んーおんやあ、アリシアさん。わざわざ出迎えとは…ついにうちの子になることを決心してくれましたか」

「黙れ。お母さんに言うわよ」

「プレシアさんには、ちよつと…」

そういつて言い淀むのは白衣を着た男性。

その手には少し大きめの瓶が握られている。

中には朱い光が内包されていて、よく見れば幾重にも魔法陣が重なっている。

「それは…」

『名も知らぬ』のお土産です。本局のクズに渡すよりも、アリシアさんに」

「よこしなさい」

ひつたくる様に瓶を奪い、アリシアはソレを色んな角度から見ると

「開かない…また解析から始めないといけないの？」

「そのようです。本局に渡したところで、開けないので」

「そう…ありがとうございます」

「いえいえ。では私は帰ります。まだ少し残業が残っているので」

クスクスと笑って白衣の男性はまた転移陣に乗り、光に包まれ、消えた。

「フエイト…明日までには、これ、解くから」

「う、うん」

そういつてアリシアは研究室に向かって歩き出した。

私は、まだココに立っている。たった独りで、ユウを待ち続けている。

数分程して、ユウを抱えたクロノが帰ってきた。

クロノは私に触れる事を許さず、無表情で…いや、少しだけ悲しい顔をしてツカツカ歩き、ベッドしかない部屋に彼を寝かせた。

「彼の…親御さんは？」

「いないよ…そうユウが言ってた」

「そうか…」

そして言葉が止まる。

ダメだ、まだ実感が湧かない。本当に彼は死んだのだろうか。

本当に？本当に彼はいなくなってしまったの？

「クロノ…触って、いいかな？」

「…少し席を外そう」

「…ありがとう」

クロノが立ち去り、私はようやくユウに触れる。

冷たい肌をさすつて、もしかしたら、と一抹の希望に掛けてしまう。もしかしたら、瞼を上げて、また気だるそうに、私を叱ってくれるかもしれない。

私の存在を確かめさせてくれるかもしれない。私を私と最初に認めてくれた存在が、私が、私が。

「……少し、泣いても……怒らないよね?」

ユウは応えない。きつと、ソレは肯定なんだろう。

私は、ようやく、彼を受け止めることが出来た。

「おはよう、アリシア」

「おはよう、フェイト」

翌日となり、私達はアリシアに呼び出された。

もちろん、彼を殺したライトもこの場にいるし、気絶していたなのはもココにいる。

「ああ……アリシアちゃん、昨日は」

「いいわよ。私もはやてを焚き付けたし……まあ一通り感情を出したら元気も出たでしょ」

申し訳なさそうに喋るはやてに、気にしてないように喋るアリシア。

そんなアリシアの手には昨日の瓶が握られている。

「アリシア……それ」

「うん。昨日の、だね」

「……一応、僕は忙しいんだが?」

「硬いこと言わないでよクロリン。ユーノンなんて何も言わずに連れてきたっていうのに文句の一つもないのよ?」

「…それは、彼が撃沈しているからじゃないのか？」

「…さて、話を進めるわ」

「ユーノは犠牲となったのか…」

「縁起でもない事いわないでよ!? ボクは犠牲になんてなってないよ!!」

飛び起きたユーノにみんなが少しだけ苦笑して、アリシアの方を向く。

「さて、じゃあまずは説明するわね。コレの中身は映像記録ね」

「映像？」

「そう。映像記録以外にも色々入ってるんだけど、大体は映像ね」

「以外ってのは？」

「知らないわよ。私も開いてないし」

アリシアがキーを叩いて、瓶の蓋が一人でに開く。

カランと床に蓋が落ちて、朱色の光が部屋を照らして壁に当たる。

「……夕君」

「夕…」

その壁に映ったのは、何故かかしこまった様に座るユウの姿だった。

『あー……撮れてるだろうか。まあこういった魔法の行使は初めてな訳だ。音声も録れてなければ……笑い事だな』

そういつって画面の彼は苦笑する。

『さて、こうして顔を合わせるのは幾年振りになるだろうか。もしくは昨日振りになるのだろうか。もつとも、俺には明日以降の出来事になるわけだが……まあその辺りはどうでもいいさ。』

俺自身の身体はよく理解しているからこそ、こうして映像を残す。

俺は、近い内に死ぬ事になる。どうやって死ぬかはわからんが……おそらく、アンヘルに取り込まれて死んでしまうだろう。

故に、遺言……というか、まあ謝罪だな。後は少しのお願いの為にこの映像を記録する。

もしも、俺が死んでなけりや今すぐに映像を消してくれ。恥ずかし

くて死ぬ。絶対死ぬから今すぐ映像を消してええええ!!

……まあ消してないということは、死んでるんだろう。ちなみに、例に及ばず、この映像を一度みたら再度見ることはできないので注意な。

もちろん、ダビング等もできない筈だ。やったね!

さて、まずは謝罪からか。

おそらく、結構な人に迷惑を掛けて死んでると思う。まあそれは別段どうでもいいんだけど。

切り捨ててしまった友人達には謝りきれない。が、言葉だけ送らさせてもらおう。

すまない。

目の前で友達が死んでしまう事と、友達だった存在が死んでしまう事を天秤に掛けた結果だ。まあお前さん方なら乗り越えれると思う。というか、乗り越えてくれ。

おそらく、この映像を見ている人間は魔法関係者だけだと思うから：すずかやバニングスさんにはテキトウに言い訳してくれ。遠い世界に旅立った、とでも言えばすずか辺りなら感づいてくれるさ。追求もしないはずだ。

そこまで好かれている人間だとは思ってないけれど、もしも、俺を殺した人間を殺してやるー、だとか思ってる奴がいたら、という前提で話す。

やめてくれ。ソレを俺は望んでない。

というか、俺は殺してくれた奴に感謝すらしてるよ。化け物になっただけど、俺であることは変わらんし。

変に俺が世界を壊すだなんて想像もしたくない。

と、まあ、そんな感じで、お前らに願う事は一つだけ。

俺を殺した人間を恨むな。

以上。

まあ遺言らしい遺言はそれだけかな。

この映像に同梱している技術関連は、結構オーバーテクノロジーっ

ぼいのもあるから、その辺はアリシアが上手く操作してくれてるとありがたい。

ムツツリとは：まあアッチの世界でチェスでも指そう。次も俺が勝つけどな。

ユーノは胃に気を付けて。その若さで胃に痛みを覚える事が問題だけど：まあ大丈夫だろう。

スメラギ君は、高町さんとお幸せに。

高町さんに関しては、あのバカをしつかりと見ていてほしい。間違えたら間違いつていつてあげてくれ。

フェイト、結構助けられたよ。たぶん、お前とあつてなけりやここまで生きれなかったと思う。ありがとう

はやて：：：ごめんな。色々と言っちゃったが、はやてならどうにか乗り越えてると思う。俺を恨んでくれて構わない。で、十年間もしてお前の振った女はこんないい女になったぞ!!とでも俺の墓に言ってくれ。それだけで満足だわさ

さて、最期になるんだが、三人娘はきつといい女になるだろうから、しつかりとな。いい男でも捕まえてくれ。悪い男に捕まんよ、とでも吠えておこう。

男ども？テメエらは悪い女に捕まって絞られてろ。

んー、他に言い残した事は

すつかり忘れてたわ。これでホントに最後な。これ言つとかないと締まらないし。

では、皆の衆、よく聞きたまえ。

ああ神様、お願いします。

我が友人達の人生にささやかなる幸福を。

では、死んだ時にでも会おう。酒もってこいよー』

そこで映像は切れた。

切れてから、全員がポカンとしている。色々言われすぎて脳がついていかない。

「は、ハハ……」

はやてが笑いだす。

目から涙を流して、でも顔を無理に笑顔に変えて。

「わかった、わかった……言わせたる、ぎゃふんつて言わせたるで……ア
ホお……あほお……」

そんなはやての声が部屋に静かに響いて、この事件は幕を閉じた。

後に、『英雄誕生事件』と言われる御伽噺のような、優しすぎる化け物
と、何も知らない英雄の卵の事件が。

幕を、閉じた。

32 裏ローク

「……」

少しだけソファに凭れる。

僕のいる場所は彼の部屋であり、今日は休日でもある。

シン、と静まった主の消えた部屋は夏だというのに少しだけ寒く感じた。

どうして、彼はあんな事をしたのだろう。

別段、遺言にまでムツツリとか言われて躍起になってるわけでも、あの後に全員にむっとり疑惑を掛けられてイライラしてる訳でもない。

いや、イライラはしている。

何にせよ、アイツが事を起こすなら、それこそ管理局を内側から瓦解させる事も可能だったはずだ。ソレをこんなにも回りくどい方法でしたのは…なぜだ？

一向に出ない答え、部屋を見渡せば相変わらず何もない部屋だ。

あるのは…今座っているソファ、テーブル。小さな棚、そしてその横にある小さな一本足の机……ん？

「チェス盤？」

なんだ。こんなモノがあったなら、あの日に脳内チェスなんて事をしなくて良かったじゃないか。

そう思つて、思い返す。

あの場に…コレはあつたか？否だ。

チェス盤に触れて、少しだけ盛り上がった所がある事がわかる。

カリカリと爪で引っ掛けば、そこだけがポロリと取れ、中には小さな紙が入っていた。

綺麗に畳まれた紙を少し息を飲みながら広げる。

『はずれ』

そう三文字書かれた後に、舌をだして『あつかんべー』をしている

デフォルメされたナニか。

ほほう、ふむふむ。なるほど。

「ウガアアッアアッアア!!ちくしょおおおおお!!」

アイツは絶対僕で遊んでる!絶対だ!!

チエス盤を思いつきり叩き、怒りで叫ぶ。

『ほお…よく見つけたな…』

「は?」

チエス盤の上の空間に彼が映る。

『なんて、言うわけねーだろ。プークスクス、どうせイラついてチエス盤叩いたに決まってる』

「ああ、クソが!!そういうえばキミはそんなヤツだったんだな!!」

いい話をしていたコイツのせいですっかり忘れていた。どちらかと言えばアリシアよりの人間だ。人をおちよくって遊ぶタイプだった。

『まあ落ち着け、落ち着いて深呼吸だ。吸って吸って吐いてー、そうヒツヒツフーの要領だ』

「それは落ち着くのか!」

『まあ今はそれほど重要視されてないらしい』

「そんな情報はいらん!!」

思わず声を出して突っ込んでしまうが、この場には僕しかないのだ。

誰かが見ていたら、と思うと中々に恥ずかしい。

『まあ冗談もある程度で終わらそう』

「そうしてくれ」

『彩りましょう、食卓をーみんなで防ごうつまみ食い!!常温保存で愛を包み込む!カレーなる化け物!!それが俺だ!!』

うん、もう突っ込まない。

彼は平常運転だった。

『まあいい。』

さてさて、おそらくムツツリは俺の「チエス」という単語でここに来たと思う。

えーチェス関係なく来たのー？俺男色の趣味ねーよ？」

「うるさい!!君はまたそうやって話を脱線させて!!」

『真剣な話するよー。いい子も悪い子もギエピー見たいな行動は慎むように!』

「ギエ?」

『さてさて、どこから話そうか。と言ってもクロノには選択権がない訳だが。』

まあテキトウにソファにでも座ってゆっくり聞いてくれ。

例に及ばず、コレも見たら消えるからな。

それと、これで話すのは……まああれだ、俺の罪を露呈して、少しだけ俺の気持ち軽くする為のモノだ。聞きたくなけりや、チェス盤ぶっ潰して帰ってくれ』

「簡単にチェス盤を潰せと……」

『えーできないのー?ひ弱だなあ』

「わかった、潰してやろう」

『落ち着け、やめてクロノ!チェス盤のライフはもう零よ!!』

いい加減にイライラせずに聞ける内容がほしい。

ソファに深く座って、息を吐く。

『まああれだ。多分見てると思うけど、遺言についてはマジだ。これはその一分後ぐらいにとってるから』

「また短いな……」

『実際はすぐに撮ろうと思ったんだけど、来客が来てな。胸ぐら掴まれたお』

「ぎまあみろ」

『まあいいがね。さて、遺言でも言った通り、アンヘルの侵食が進みすぎている。コレはお前もしってるだろう?』

「…ああ」

『何もしなくて、そうだな、大体四年。これが俺の寿命だ。しかし、俺はソレを捨てた。』

まあ普通に考えりやア不思議な感覚なんだろうけど。ここだけの

話、俺は星一つ。故郷を壊してる。

尤も、村の破壊は別の奴がしたんだけど…俺の大切な人もそれで死んだ。

まあそこはいいんだわ。最初はコロシテヤルーとか思ってたけど、あの人こそ望んでるわけじゃないし。結果的に満足するのは俺自身だけだからな』

クスクスと笑う彼。言ってる事は完全に狂っている。

もしも、と考えると、やはり、僕は彼のように考えられないだろう。

『で、問題はここからなんだ。俺がアンヘルを手に入れたのはこの直後なんだ。で、アンヘルはお前も知ってる通り、暴食を繰り返したりする困ったさんなんだわさ。はい、ここから導き出されることは？』

「…星を…他の人間を喰らったのか？」

『ブー残念。誰も触手で自分を巻いてオナニーとかしてません！』

「なぜその発想に至った!!」

『まあ、致命傷の人もいたけど、ほとんどが生きてる人だったよ。俺の大切な人は死んでたけど。』

まあそんな事があってだな。ここからが少し問題なんだ。アンヘルってのは最期の想いとその魔力を蓄積してるみたいなんだわ。

じゃあ、アンヘルに喰われた人間の感情って？得体もしれないナニかに喰われた感想は？

4割は死にたくない。6割が殺してやる。が正解かな。4割の方も解析してたら殺してやる、ってのが殆んどだったし。

で、俺の中には俺の殺した人間…俺の食べてしまった人間の感情があるわけだ。この7年ほどずーっとコロシテヤルー、コロシテヤルーって言われ続けてたら、そりゃ俺も限界だわさ』

想像を絶した。これだけ軽い口調でペラペラと喋る彼は何も感じていないようだが。彼の性格からして、全部背負ってるのか？星一つ全ての恨み事を。

「狂ってるな…」

『それで、なんで俺が自殺しないかっていうのも教えとくと、アレだ。』

大切な人が最期に生きてくれ、とか言った所為なんだが…まあコレはいいか

とまあ7年間の俺のいきさつは終了。

この文、じゃなかった、魔法にも尺があるから淡々と進めよう。

色々あつて、今から事件を起こすワケなんだけど。俺の村を襲った犯人が管理局にいるらしい。

まあ正直な話、それがどうした？って話なんだけども。

一応ソイツ殺して、スメラギ辺りに俺を殺してもらえるように立ち回るつもりだ。

アイツの性格矯正にも役立ちそうだし。

生きてくれ、つてのは殺される事に関してはノーカンって事で。実際殺されることは俺の意志には関係ないし。アイツが俺を殺さなかつたら、ソレはそれでいいわ。

さて、俺は上手く立ち回ってるかな？

アンヘルをフル活用しても二年は俺の意識が持つわけだが…

まあ殺されてるならそれでいいさ

さつてと。ここままで俺の経緯だ。

あとはお前が頑張つてスメラギを英雄様に押し上げて、上手く教育してくれ。高町さんもついでに頼むわ

後顧の憂いは…まあこんなモノかな。はやてたちはどうにかするだろうし。

んじや、親友。テキトウな年月開けてからでいいけどコツチに来たらしい店紹介してやつから、奥さんによろしく』

そして映像が終わる。

相変わらず、面倒事を押し付けるのが上手な親友だことで。

僕は一度だけ溜め息を吐いて、力の限り、チェス盤を叩き潰した。

*** 私と彼とアレ

少し前までは珍しくなく、今では珍しい事に私は一人の帰り道を歩いている。

学校にて、はやてちゃんから聞いた言葉を否定している。

『夕君は……遠い世界に行ったよ』

そう、一言。とても辛い顔で言われた一言に、私は追求なんて出来なくて、何処かで納得してしまっている。

彼が私達を切り離れた時点で、なんとなく予想がついていた。

私としては、彼に誘われて、一緒に……なんて思った。思っ、彼が誘ってくれるのを待っていた、だからこそ切り離された時に何も言わなかった。

ため息が、こぼれた。

アチラ……悲痛な顔をしていた人間関係を思い出せば、魔法関係の人だけだったから、おそらく彼はその為に「遠い世界」に行くことを望んだ。

ソレも、早急に動かなくてはいけない程……いや、違うな。違う。

私が彼ならば、早急に動かなくてはいけない事になる前に、解決している。彼なら出来た筈だ。

なら、どうして彼は急に私達を切り離れたのか。

考えても答えは出ない。出たとしても、それが当たりとは思えない。

彼が急に遠くの世界に逝った理由は、もう、私が知ることはない。

「そう……思うんだ。ねえ、皇君」

「……」

ずっと私の少し後ろを着いてきた彼に、ようやく振り返れる。私の中で、一つの過程が、ソレを禁止していたのだけれど。

はやてちゃん達よりも悲痛な顔をしていた彼。彼はどうしてそんな顔になる？私の知っている関係では、絶対と言って言いほどありえない。

つまり、仲を取り持つ何か、或いは「遠い世界」に逝った理由の一

端を彼が持っている。

「…すまねえ」

「どうして謝るの？理由を言わないとわからないよ」

「……夕は死んだ。オレが、殺したんだ」

ほら。

やっぱりそうだ。

私の中のナニかがぞわりと背中を撫でる。

小さく、でも確実に私の脳に語りかける。

コロセ、コロセ、コロセ。

大きく息を吸って、ゆっくりと吐き出す。

彼を想え。彼に成りきれ。彼の思考に近くなれ。

「謝っても…謝っても許してもらえないかもしれない。でも、ゴメン
!!」

「……………頭をあげて」

「……………」

皇君の息を飲む音が聞こえた。

ああ、それほど怖い顔になっていたか。溜め息を吐いて、顔に笑顔を貼り付ける。

「それで、アナタはどうされたいの？」

「どう……………つて？」

「私は彼が死んだ事をはやてちゃんから聞いています。その場にアナタはいました。もちろん、濁して、というか、彼が濁して言うように言っただと思う。」

でも、アナタは今、ココで私に告白しました。彼を殺したと。アナタは何を思って、言っただんですか？」

「何を……………」

「アナタの思考を当てましょう。」

一つ、私に許して欲しかった。

一つ、申し訳ない気持ちがあった。

一つ、誰かに怒られたかった。

一つ、誰かに許してもらいたかった」

「ッ……」

「仕方なかったよ。」

アナタは正しい事をしたわ。

化け物退治だから仕方ないじゃない。

さすが、皇君だね。」

そんな言葉が、欲しかったんでしょ？あげるよ？今なら、全部言うてあげるよ？」

「やめてくれ……やめてくれ……」

「……もしくは、殺されたかったのかな？彼のように、誰かに殺される事で許されたかったの？」

私は皇君に近づいて、目の前で止まる。

腕を振り上げて、力を込める。

「応えてよ。皇君。アナタはどうされたいの？」

「オレは……オレは……」

死にたい」

私はその一言を聞いて、腕を振り下ろした。

振り下ろして、彼の肩に手を置いた。

「私はアナタを殺さない。絶対に」

置いた手に少しだけ力が入る。すぐに手をどけて大きく息を吐き出した。

「どうして……」

「どうして許したか……？許されてると思ってるの？」

「……いや、ごめん」

「……私はずっとアナタを許さない。許さないけど、手を出すこともない」

コレに殺された彼がソレを望む筈がない。

彼がどうしてコンナモノを遺して逝ったかは理解出来ないけれど。

それが彼なのだろう。

「……もし、もしもアイツが生き返れるってわかったら」

「どうもしないよ……」

「でも!!」

「ソレは、確実にゆう君なのかな? ゆう君がもし生き返ったとして、それで、どうしたいの?」

「どうって……アイツが生き返ったら、」

「また、殺すの?」

「殺さない!! 絶対に」

「どうして彼を殺したか、詳しく私が知ることはない。でも、ゆう君の気持ちはある程度わかってるつもり」

「……」

「ねえ、皇君。安心していいよ。皆が忘れても、皆が許しても、私がずっと恨んであげるから」

その一言を聞いて、皇君は暗い顔をして帰っていった。

背中が見えなくなつてから、溜め息を吐く。

「これで……いいのかな?」

おそらく彼がいるであろう所を見上げて、私は呟く。彼なら、こうする。彼なら、こうしてほしい筈だ。

すぐに逝くと怒られそうだし、綺麗になつてから、自分に自信がつかいたら、彼を落とすにしよう。

そして目一杯、甘えて、怒って、甘えさせてあげよう。

「こうでも考えないと、すぐに怒られそうだなあ」

誰もいない筈の空に呟いて、私は苦笑した。

*** 罪人二人と三味線一個

他称英雄の罪人様

名前：スメラギ皇光

性別：男

容姿：銀髪でオツドアイないケメン

能力：ニコポナデポ

宝具【王の財宝】ゲイト・オブ・パビロン

魔導士ランク：SSS

願い：1. 魔導士ランクSSSの実力

2. 第五聖杯戦争時のギルガメッシュが所有する【王の財宝】

3. —————

備考：

殺し合いをした事で親友を得て、その親友を殺す事で現実を直視してしまう。

英雄と言われる立場に行き着いているが、自分はそんな立場ではない、と今更何度も言っていたりする。

恋人であった高町なのはとは一時期距離を置いて、彼女を原作通りの性格に矯正。

高町なのはは自身、元から根はしっかりとしたい子なので、自分で立ち上がりしっかりと成長した。

その後、成人前、17歳の時に改めて告白して、後にJS事件と呼ばれる事件を解決した後に結婚。養子であるヴィヴィオと楽しい生活をするようになる。

そんな彼は、時折自分のした事で眠れなくなり、度々目を覚ましては書類整理に精を出していたりする。

夏になると【彼】の墓に出向き報告をしている辺り変わったと言えるだろう。

三つ目の願い：

最初はライト自身、彼を蘇らせる事で消費を考えたが、さすがの一

言で考えを改める。

彼を考えて行動するならば、この一つは最期まで残し、どうしようも無い時に備えておくべきだと判断した。

〜裏事情

考える限り、ライト君が耐えれなくなつて願いを消費して蘇り、も考えたのですが。やっぱりユウが死にに歩くので却下。

もう一つとして、ライト君をループの世界に入れようともしましたが、話がややこしくなるのでやめました。



他称自称罪人の化け物

名前：御影^{ミカゲ}夕^{ユウ}

性別：男

享年：10歳

容姿：眼鏡で人間全体の平均の顔

能力：アンヘルを使った蒐集

高度解析魔法

分割思考

願い：1. 大切なモノを守りたい

2. 友人達の人生にささやかなる幸福を

3. _____

備考：

この物語の主人公。今は草場の影からスカートの中を覗く作業に勤しんでいる。

死んで尚、皆の心のどこかで友人に尽くしている愚か者。

星一つを自ら喰らい、沢山の人を巻き込んだ事を嫌悪して、自らを罪人だと称する。

蒐集した当初は自己を保てずに、分割思考を喰らった人間に置き換えることで無理やり自己保持する事になる。しかし、それを消す事はできず、事件後7年という月日を彼は自分で殺した、自分を恨む人間

達と生きる結果となり、死に至る。

事件後からフェイトが来るまでは、学校でのすずかとの出会いや、はやてとの出会いにより自らすべきことを課して生きながらえていたが、全ての事件が終わり【幸せ】になる事で彼らを裏切る結果を恐れた為に死に至る。

心が耐え切れなくなった、というのは彼の中の彼らが【リア充爆発しろ!!】などと言っていたからだと思像してもらえれば容易く想像できる。

分割思考：

彼が殺した人間達の置き換わり。

優しすぎる彼が殺してしまった彼らを生かせる為にとつた緊急処置。故に彼は死んでしまう。

アンヘル（）：

彼の演技であり、アンヘル本体ではない。

アンヘルの本体に関しては、私の文章中にチラツと出てるのでそれ参照。

願い【友人達の人生にささやかなる幸福を】：

大きな幸福を求めなかったのは、ソレを願ってしまうと人間的にダメになることを知っていたから。

山あり谷ありが人生だが、少しぐらい幸福であれ。というのが彼の願い。更に言ってしまうえば自殺防止の願いでもある。

三つ目の願い：

無理に叶える事もなく、誰にも使われる事はないので、持って逝きました。

＼裏事情

忘れてた、とかでは無くて。ラストバトルの時にでも使おうかなあ、とか思ってた結果がコレだよ!!まあ、ほら、強すぎる願いの力なので、持って逝く方が彼らしいということ。



将来の夢は三味線の毛皮

名前：猫毛^{ネコゲ}布^{ヌメ}

悩み：何故か、猫か毛布のどちらかで呼ばれる事。が、既に慣れたので大して気にしてはいない

備考：

この小説の作者。DM。

この小説を書いている時に職質にあつた程度に挙動不審。警官が言っていた不審者と自分の夜の散歩に出始めた時期が重なつていてビクビクしてしまう小心者。

投げた筆にゴムが付いていたらしく、思いっきり顎に打ち付けたドジっ子でもある。

実際は夜天事件で彼を犠牲にして終わろうと思つていたが、感想で「彼に救いを!!」ということとで救う為に二つ程種を蒔いている。

ゴールしたと思つたら、ゴールの足にスキー板がついていたのは、二分の一の話です。

もう暫く、書き続ける事になるので、読者様達にお付き合いいただける事を切に願っている。

空白期く夕編#ユウ編19話から分岐

01 ボケを善処しよう

最悪だ。

―思考朦朧

―カット

―自己解析開始

―エラー

―体温上昇

寒気がする。頭が痛い。ついでに身体を起こすだけで億劫だし、足が覚束無い。

―不養生か？

―ずぶ濡れで風呂にも入れずだったからな

―原因判明してた

カット。しかしながら、どうするか。

幸い、シヤマルからもらっていた咳止めはある。あるが……コレは風邪薬では無い。解熱剤ですら、ない。

ズビツ。

「これは、本格的に、まずいかもしれん……」

頭痛のする頭を必死で回転させながらどうにか手を考える。

―死ぬに一票

―死ぬよもう

カット。それには大いに賛成だ。しかしながら、彼女たちを悲しませる、というのはかなり嫌だ。

―つまりバレなければいい

―なるほど、取り繕え

―よかろう、やってみろ

―魔法式構築

強化魔法を行使して、グラつく身体を無理やりに補強する。

平衡感覚はなんとか取り戻したが…。

― 痛覚カッター
― 温感カッター

……これで、正常か。

何度か手を握ったりを繰り返して感覚を確かめる。

― 動作正常

― 意識も正常

― オールグリーン

― 体調？なにそれ美味しいの？

まったくくだ。まったく……、

「アホらしい」

さて、行こう。

― 自己解析してたら色々エラーデルナー

― フシギダナー

― フシギダワー

― フシギダネー

― ダネフツシ!!

◆◆
「……あれ？」

なぜだろうか。いつもの様に本を読んでいる彼が少しだけオカシイと思ってしまった。

どこか集中していない、というか顔が少しだけ赤いような気がする。

「うーん……」

「すずか、どうしたの？」

「いや、ゆう君が」

「はいはい、ノロケは勘弁して」

「違うよ!？」

「ふーん…で、アイツがどうかしたの？」

「なんか、おかしい様な…?？」

「アイツがオカシイのはいつものことでしょ？」

「そう、なんだけど」

「どうだろうか。彼がオカシイ事は大して変わらないのだけど、なんというか、彼が彼らしくないのだ。」

「なあ、すずかちゃん。私の気のせいかもしれんねんけど、夕君オカシない？」

「はやてもソレを言うのね」

「ね?？」

かと言つて、彼に問いただしてみてもどうせはぐらかされるに決まっている。

アリサちゃんは大きく溜め息を吐いて、席を立つ。

私達はソレを啞然としながら見て、抑える事もできずにアリサちゃんを見送ってしまった。

「ねえアンタ」

「……ん?なんだ、バーニングさんか」

「ぶつわよ?？」

「いや、スマン…」

そんな言葉から始まる会話。当然のようにそれほど離れていない教室内の出来事だから、聞き耳を立てれば聞こえる声だ。

「アンタ…どこか調子悪いとかないの?？」

「……調子?？」

「ほら、なんか……」

「そうか…ふむ、悪かった。もう少しボケを善処することにしよう」

そう言つて、もう話は聞きませんよ。とでも言うように本を閉じて教室から出ていく彼。

アリサちゃんは顔に思いっきり疑問を浮かべて戻ってきた。

「確かに、オカシイ」

「うーん、何がおかしいか分からないから追求も出来ないし…」

「どうしたもんかなあ」

「ん？何悩んでるんだよ？オレが聞いてやるぜ？」

「……この悩んでる時に、タイミングが壊滅的に悪いわね、アンタつて」

笑顔でこちらに來た皇君に溜め息を吐いて、やや放置気味で話を進める。

「どうしようか」

「直接問い詰めるのが一番なんやけどなあ」

「躲されたじゃない」

「ですよー」

「何の話をしてんだよ!!オレも混ぜろって」

「……アンタは夕君と友達なのに何も気付かんの？」

「ユウ：？ああバ・御影の事か。アイツがどうかしたのか？」

「どうかって……様子がおかしいやろ？」

「様子？」

顎に手を置いて少しだけ考える素振りを見せる彼。

そんな彼を見ながら、やはり後ろめたい気持ちが出てくる。

既に踏ん切りのついた気持ちだけれど、化け物として、偽って生きている私にとって彼は非常に危うい存在だ。それこそ、自己の存在を軽く全否定する存在である。

そんな彼と一緒に居続ける事は、騙し続けなくてはいけないということ、後ろめたい気持ちが出て出る。現在進行形で騙しているアリサちゃんやはやてちゃんとは比べる事すら些細な感情だけれど、やはり意識してしまうのは彼が異性であるからか……。いや、天敵だからだろう。

そう結論づけてから、そんな天敵とも呼べる存在と軽々と冗談を言う彼は、やはり凄い。というか、化け物と知られてなお普通の精神で居れる事が凄い。

「別に、普通なんじゃねえの？」

「なんやろ、あんたに聞いた私がアホやったわ」

「はやてはアホじゃないだろ」

「そういう事や無いんよ……」
「？」

そんな感情の整理に必死になってる間に、彼の結論は出たようで。まあわかりきってた結論が彼の口から飛び出たのは言うまでもない。

ゆう君は彼を見ているのに、彼は一切周りを見ない。その辺を考えると、やはり彼の友達であることが勿体ない。いや、否定すればするほど何故だかゆう君が可哀想に思えてきたから思考をココで止める。

「おやあ、珍しい組み合わせだねー」

「アリシアちゃん。夕君、ちよつとおかしくない？」

「ユウちゃん？……うーん、確かに普段より反応が早すぎたり、ボケのキレが悪かったり、ツツコンでくれなかったりだけど、普通じゃないの？」

「なんやろ、夕君の存在がわからんようになってくるな、ソレ」

「私にとってのユウちゃんはそんな存在だよ。損な存在と言ってもいいけど」

「一緒じゃねえの？」

「ライトはアレだ。アレな存在だ。レアな存在」

「オレはオレだからな」

「そうだねー。すつごくレアだ。ウエルダンになればいいのにー」

そんなアリシアちゃんの呟きは誰も触れなかった。笑顔で言った彼女が決して触れさせてくれなかった。

ともかく、彼がオカシイ事は確定したのだけれど、ソレの原因がさっぱり分からない。

「あ、戻ってきた」

「ん？なんだその……人の顔にメガネが付いてる!?みたいな顔は」

「いや、眼鏡着けてるやん」

「まあそうだな。正解どうも」

「確かにオカシイね」

「お菓子なんざ持ってないぞ？」

「オイ、御影。お前おかしいぞ」

……。

いや、言ってくれるのはありがたい。ありがたいのだけれど、それほど直球で、それも聞き間違いが起きそうな言葉で言うのはいかなものか。

ゆう君も止まっっていて、数秒固まったあとに溜め息を吐いた。

「お前って、偶に鋭いよな」

「ああ!? オレは常に鋭いつての!!」

「外角が鋭いんだな、わかります」

「また意味のわからない事言いやがって」

「意味は、わかるだろ…外角の逆に内角があつてだな。つまり外角が鋭くなると逆に内角が」

「そういう事じゃねえよ!? ふぎけんな!!」

そう言つて彼はゆう君に腕を振りかぶり、勢いがついた腕が彼の顔に迫る。

咄嗟の出来事で誰も反応出来なかった。いや、殴られようとしている本人だけは違った。

パシンツ、と乾いた皮膚の音がして彼の拳がゆう君に掴まれていた。

「いきなり殴るなよ、怖いな」

「えっ?」

彼はまるで信じられないモノを見るように啞然とする。まるで、自分の拳が受け止められた事がおかしいように。

そんな彼を溜め息を吐きながら見て、そして拳を解放した彼は悠々と彼の隣を通り過ぎようとする。

「ふぎけんなよ!!」

彼がゆう君の腕を掴み引つ張る。

その行動に制止を掛けたのは私の隣にいるはやてちゃんだった。

「いや、ふぎけてんのはアンタやろ!! 急に殴りかかつて」

「なんでお前、こんなに熱いんだよ!!」

「普通考えられ…ええ?」

彼の言葉にはやてちゃんが止まった。

熱い? 誰が? この流れで言うならばゆう君なのだろう。ならゆう

君のどこが熱い？

「ん？俺はさっぱり暑くないが？」

「ふぎけんな!!ちよつと来い!!」

「引っ張るな、歩きにくい」

「お前の足が覚束無いだけだろ!!」

「いや、これでもマトモに歩けてる方なんだが」

そう言つて消える彼らを私達は見送るしかないのだけれど…。

引っ張られてヨボヨボと歩く彼と引っ張つて歩く彼。そんな二人を見送つて、私達は啞然とするしかなかつたのだから。

02 心配してやってるのに!!

「失礼しまーす」

ガラリと保健室の扉を開き、中に入る。

開けた音に気がついたのか、保険の先生がコチラを向き、溜め息。

「またサボり? ダメよ、皇君」

「いや、今日はサボりじゃない。コイツが風邪っぽいんで連れてきました」

また、と言われる程ここを利用してる訳じゃない。小学生の勉強なんてやる気が起きないからココで寝てるだけだ。

まあ今日はサボる理由でココに来たワケでもない。

腕を引けば、アイツが無表情…いや、少しだけ眉間を寄せて溜め息を吐いた。

「……大丈夫だと言ってるだろう」

「お前な、人の好意ぐらい素直に受け取れよ!!」

「お節介とも言うがな……まったく」

「人のお節介も素直に受け取っとくべきよ?」

「……そうですか」

またアイツは溜め息を吐いてチラリとオレを見る。

「なんだ?」

「腕、」

「腕?」

「離せ」

「なんだよ!! 人が心配してやってんのに!!」

掴んでいた左腕を離すと、摩りながら保健室に入ったアイツ。そこまで強く握ってないし、握ってたら痛いつて言うだろ。

「体温計を差し込んで」

「……」

無言で体温計を受け取り、溜め息を吐き出す。どうして体温を計るのにあれほど時間がかかるんだ。

とにかく、連れてきたオレとしては、コイツの容態が気になる訳だ。

本当に風邪ならば移されては困る。というか、風邪なら休めよ。

あれか、同情が欲しいのか？

少しだけ時間が経ち、保健室の中に電子音が響く。

体温計を取り出して、自分で確認したアイツは溜め息を吐いた。

「計り終わったわね。貸して」

「……」

「え……ちよつとごめんなさいね？」

体温計を見た先生はアイツの額に手を当てて、顔を顰める。

「今、布団は空いてたわね。すぐに横になりなさい」

「いえ、大丈夫なんですけど」

「言うことを聞きなさい!! 40℃を越える熱なのに大丈夫な訳がないでしょ!!」

「は？」

普通は意識がグラグラしてるぐらいの体温じゃねえか。ふざけんな。

家でジツとしてればいいだろ？そんな熱があるんなら。

「親御さんは？今すぐ迎えに来てもらいます」

「あー…親は家にはいないんですけど」

「携帯電話の番号は？」

「…えつと、その、……海外に赴任中にして」

「こんな子供残して仕事ですって!？」

海外に赴任とか、コイツって金持ちだったのか。

御影は少しだけ困った様に、溜め息を吐く。

「ああ、えつと、……親戚の姉さんが近くに住んでて、ちよつとその人に連絡をとります」

先生から電話を受け取り、番号を押していく。

受話器を耳に当てて、数秒、どうやら相手が出たようでアイツが口を開く。

「あ、御影です。いや、まあ学校にいるわけだけど

…それは違う。ともかく、ソコに姉さんいる？」

……そう、姉さん。あのおっかなくて頼りになるまるで刀剣みたい

に鋭い姉さん。
ん、頼みます。

あ、俺です。御影です。えっと、迎えに来ていただけると非常にありがたいです。

……はい、そうです。

ありがとうございます。じゃ、待ってます」

そこで会話が終わったのか受話器を電話に置いて、溜め息を吐く。

「来てくれるそうです」

「じゃあアナタは寝てなさい。皇君、君はもう戻っていいわよ」

「ういっす。じゃあな」

「さっさと行け」

相変わらずの憎まれ口に見送られてオレは保健室をあとにする。

アイツって、親は海外で働いてて親戚の姉が近くに住んでるのか。

ソレナンテエロゲ？

「ただいまーっ」と

「ゆう君は？」

「熱で寝てるよ。迎えが来るらしいぞ」

「熱って……また無茶しとったんか……」

「ライト、迎えって？」

「親戚の人が来るってさ」

「親戚……？」

「詳しくは知らねえけど」

はやてとフエイトが考えるように顎に手を当てて唸る。

「夕君に親戚……？」

「居たかな……？」

「アイツって、親も海外暮らしらしいし、保護者の一人ぐらいはいるん

じゃねえの？」

「海外？」

「……ああ、なるほど」

「ブツ、げほげほ…もう、すずか急に變な事言うのやめてよね」

「え？私何も言っていないよ!?アリシアちゃんが急に吹き出したただけだよね!」

「ふふーふ。わからないならいいんだけどねえ。そのまま是非とも成長して欲しい」

クツクツクツ、と含み笑いをするアリシアにそれに慌てるすずか。

ともかく、アイツは金持ちでエロゲ的な展開を持ち合わせたヤツで、すずかとかはやて達と仲が良すぎるのか。

「うぎ…」

「ライト君、どうかしたの?」

「なのは、よく考えてくれ。海外に親が住んでるって事は結構な金持ちなんだ。そして子供一人で生活出来る程の金もある。オレとは大違いだ」

「あー、他人の家庭事情を勝手に言うのもなんやけど…確かに大違いやな」

「だろ!?!それなのに付き合いは悪いわ、奢ってくれないわ」

「ライト。ユウはそれほどお金を持つてる訳じゃないよ」

「はア?海外に親がいるのに!?!」

「そこから間違ってるんやけど……」

間違ってる?!

アイツ自身がそう言ったんだぞ?

「……ゆう君のご両親は、もう亡くなってるよ」

「亡くな……って何かあったのか?」

「…何かって…ソレをアンタが言うんか?」

「え?」

「はやて」

「……ごめん。ともかく、や。夕君の両親はこの世に居らん。詳しくは自分で確かめ」

オレが言っちゃいけない?なんでだよ。

アイツの親とオレの接点なんて一切無いはずだろ。オレの親と知

り合いとか？

もしくは、転生主人公であるオレと、バグであるアイツだからこそ
の接点があるのか？

03 兎は餅でも搗いてろよ

トスン、トスン、トスン。

一定のタイミングで身体が揺れる。

まるで鉛が溶接されたように重い瞼をどうにか開けると、ボンヤリと、しかし、確実に9割方の視界を埋める桃色。

どうやら眠っていたらしい。どうりで身体が重い訳だ。

「ん？起きたか」

「……シグ、なむ？」

「ああ、私だ」

未だに思考がうまく纏まらない頭を必死で動かして、なにが あつたかを思い出す。

スメラギの御蔭で面倒な事になって、保険医に俺の状況がバレそうになった。そして、俺は今背負われてる。誰に？シグナムに。

「しかし、私を呼ぶとはな」

「……お前なら、気を使わない」

「親戚とは、似ても似つかないさ」

「似てるなら姉として召喚したさ」

「そうか。なら眼鏡でも付けて黒髪にしてこればよかったか？」

「眼鏡で巨乳とはわかってるな」

「落とすぞ？」

「忘れてくれ」

思考が纏まらない。

どうも、ダメだ。分割されている思考が殆んど落ちている。正常に起動している思考も、俺に向かって呪詛の言葉を吐き出すだけの彼らだ。

「これで貸し1だ」

「……貸し借り無しだろう」

「助けられて借り1。今で貸し1」

「ゼロじゃないか」

「保険医から怒られた、誰の所為だと思ってる」

「ざまあ」

「レヴァンティン」

「借り1で」

怒りっぽいのもどうかと思う。

溜め息を吐かれて、態勢を立て直される為に身体を大きく揺すられる。

「ああ、俺の部屋に向かってくれ。くれぐれも八神家に連れて行くなよ?」

「む? どうしてだ?」

「はやてに心配を掛けるだろう」

「……お前はつくづく、阿呆だな」

「お前は脳に向かう栄養が、いや、なんでもない」

「このままお前を投げ出す事も辞さない」

「やめてくれ」

少しだけ彼女の首辺りに回している手を締める。当然、シグナムが苦しむような事のない強さで。

「む?」

「スマン、苦しかったか?」

「いや、ふむ……」

「?」

何故か歩く足を少しだけ遅くしたシグナムを訝しげに思ったが、まあどうでもいい。今はこの微妙に両腕に当たる弾力を楽しむ事に意識を注ごう。

「少し、寝る……」

「ああ、そうしろ」

もちろん、俺が落とす事はない。そんな勿体ない事、俺には出来ない。

下に少し力を込めれば、抵抗する弾力。もうコレは流石と言わざるを得ない。もう全てを救う為に存在してるんじゃないか? もうコレさえあれば世界壊せるんじゃないか? 世界はおっぱいでできてるんだ。いな おっぱいは世界なんだ。つまりだ、巨乳はおっぱいで、おっぱいは世

界な訳で、巨乳は世界だ。うつひやいこれ最強な理論じゃね？俺って今最高に頭回転してね？ヤツベーは、チヨーヤツベエーわー。

……寝よう。うん。

いくらか時間が経ち、意識が薄らと残ったまま瞼を閉じていた。

「…眠っているか」

「いや……起きた」

「そうか。着いたぞ」

目の前にはいつもの扉。

当然の事ながら閉じられている扉にシグナムは手を伸ばして、当たり前の様に開く。

……あれ？鍵締めたよな？

「おかえりなさい」

「ああ、布団は…」

「あの部屋にあるわ」

ぼんやりと開いた瞼から見える金色。

声からしてシヤマルなのだろう……。空間解析は情報を得すぎるから、今の状態で使用したら、たぶん死ぬる。

「また、無理をしてるのね」

「……グー」

「寝たな」

「起きなさい。説教は始まったばかりよ」

「スイマセン、ごめんなさい。個人的には大丈夫だと思ってたんです」

「落ち着け、シヤマル」

「リインフォース、ダメよ。この子、言わないと止まらないもの」
「言っても止まらないだろう?」

「……はあ、そうだったわ…」

「病人に対して理不尽な話だな」

「病人なら病人らしく寝ておけ、という話だ。ツキビト」

「残念、かぐや姫でも無いさ。兎は餅でも搗ツいてろよ」

「ほう、死にたいんだな?」

「リインフォース?」

「……すまない」

「ハツハツ、ざまあ」

「ユウ君?」

「シグナム、布団の前に行ってくれ。俺が逝く前に頼む」

溜め息を吐き出され、シグナムが襖を開き、更に大きく息を吐かれた。
た。

「本はどうか出来ないのか?」

「これでも選別して置いてるんだがな」

「……つまり?」

「隣の部屋は見ない方がいい」

「わかった、開けないでおこう」

再度、溜め息を大きく吐かれて布団に横にされる。

シヤマルに呼ばれて部屋を出たシグナムに変わり、『夜天の』が入ってくる。

「……ツキビトよ」

「なんだ、『夜天の』」

「……お前は、どこまで触れている?」

「………侵食の事か」

「私の中に入って来た時、主の大切な人という理由でお前の異常を伝えなかったが……」

「……もって六年程だ」

「……」

スつと、左手を触られる。

当然の事ながら、擬態魔法を行使しているので、そこにアンヘルは無い。触れられた所で、分かりはしない。

「お前は、まだ知らないのだな」

「……何をだ？」

「ソレは自身で知ることだ」

「……そうかい」

少しだけ悲しそうな瞳を向けられたが、すぐにいつもの無表情に戻った『夜天の』。

「これの事を知らない？一応は知っているつもりだ。外部から得た知識だが…。」

コレ自身が魔力を吸収する御蔭で深い解析は出来ない。精々表層にある魔力やアレらの気持ちだけだ。

否定する。俺はアンヘルの事を深く知ることをしていない。性能や、歴史は知っている、と思っただけだ。

いや、考えすぎだろうか？ともあれ、分割思考がほぼ落ちている中、思考するのは億劫だ……。

「少しだけ、寝る」

「ああ、そうしろ。主が心配する」

「それは、嫌だな」

「では、眠っている」

『夜天の』が手を伸ばし俺の脛にかぶせる。

暗くなる視界。体から力が抜ける。

徐々に思考が遠のき、瞼からひんやりと冷たい感覚が伝わり、同時に身体がふんわりと軽く、しかし重くなる。

重くなり、意識が落ち着き、スー、っと何か引いていく。



辺りは暗闇……いや、まるで子供の落書きの様に鉛筆でグチャグチャと塗りつぶされていた。

そんな中立っている俺は人型の白い布の塊だった。立っている事が不安で。まるで全てを否定されているような場所。

顔を塗りつぶされたツギハギの人間がこちらを指差す。

地面から這い出て来た黒く、グチャグチャに塗りつぶされた人型がコチラに手らしきモノを向ける。

グチャグチャに塗りつぶされた地面から、一つ、また一つと人型が増えて、片手で数えられた人型は既に両手でも数えれなくなり、グチャグチャに塗りつぶされていた場所が全て人型だと理解した時には自身も塗り潰されそうになっていた。

左手は既にグチャグチャと黒く

右手もグチャグチャと黒く

左脚も、右足も

下半身が全て塗りつぶされて、

腹部から黒い塊が華を咲かすように、白い布で出来た腹を突き破り胸に向かう様に黒い線が昇る

俺は抵抗しなかった。

抵抗する意味がないのだ。抵抗する権利が俺にはない。

俺は彼らに否定されるべきだ。

俺は彼女に否定されるだろう。

俺は彼らに肯定されてはいけない。

俺は彼女に肯定されないだろう。

黒い線が顔を包みこんでいく。

視界には黒い空間。

これで、全てが終わる。

そんな空間の中、ポツカリと小さく白い穴が見えた。

黒い線達に混ざること無く、ただソコに在る白い存在。

誰でもない。誰かわからない。そんな白い存在は、口らしきモノを

開く。

真つ赤に開いた逆三角の口。何かを言っている。

わからない。

わからない。

わからない。

でも、どうしてだろうか。

俺はその白い空間に、黒く塗りつぶされた左手を伸ばした。

04 滑稽だな、まったく

「……ッ」

目を覚ました。

正確には、誰かが俺の手を掴んだから起きたのかもしれないが、ともかくとして、俺は目を覚ました。

ヤケに重い瞼をゆっくりと上げて、ぼんやりとした視界に明かりが差し込む。

—コレが世界か

—目がア!!目がア!!

—バルス

ワロス。

思考は絶好調だった。どの意味であっても、絶好調だった。最悪である。

「…大丈夫?」

「……アー、そうだな、左手が少し冷たい程度で、他はポカポカと温かいよ」

「……私は、両手が少し熱いかな」

「ソレはいけない。自分の耳たぶでも触ってなさいな」

「そこも、少し熱いんだ」

「そうかい……アー、質問しても?」

「答えは知ってるでしょ?」

「ヤー、知ってると思ってる。思ってるさ。でも質問させてくれ。どうしてさすががココに?」

「夜這い」

「ああ、知ってた、知ってたさ。知って……聞き間違いか?」

「聞き間違いです」

「それも知ってたさ」

夜這いと見舞いを聞き間違えるだなんて、我ながらハッピーな頭をしている。

—おっぱい魔人の事を言えんな

—ノ、おっぱい魔人の頭の中には首塚が並んでるんだ
—自身の中には花畑か？

—クソ喰らえ

—墓でも数えてな

カット。薙刀の数なんてゼロさ。刺さっても無い。

「やっぱり、無理してたんだ」

「そう見えたか？無理なんてしてなかったさ」

「シヤマルさんに言えばいいのかな？」

「ア、ソレはやめてくれ。それこそ無理になる」

どうやら完全に意識が落ちていたようで、彼女が手にとっている左手に肌色が見えない。

—擬態魔法行使

—空間解析行使

—見舞い客の確認

—いつものメンバーか

左手が肌色が変わって、少しだけ満足する。

同時に溜め息が聞こえた。

「……魔法で、隠してたんだね」

「便利だろう？今なら希代の魔術師にでも成れそうだ」

「モノクルでも付けて？」

「白いタキシードにシルクハットも忘れずにな」

「探偵役は誰になるんだろ？皇君かなあ？」

「おや、怪盗側の勝ちが決まってるじゃないか」

「じゃあ探偵はアリサちゃんで」

「なら、タキシードの上着を振ることにするよ」

お互い少しだけ笑う。当然の事ながら、未だにボンヤリとしている思考の御蔭で空間解析が正しく行使されていない。精々自宅だけだ。

どうしようもなく、身体が重い。いつの間にリアルな世界でも鉛を付けられる様になったのか。

—順当

—順当

—当然の結果だ

—ロリコンは不治の病

カット。

「じゃあ、私はみんなに知らせてくるね？」

「アー、頼む。ついでに静かに頼む」

「手話はまだ覚えてないんだ」

「なら針と糸を頼む」

「どうして？」

「わかるだろ？」

「ならわかつてるよね？」

「ああ、騒がしいのがくる事はな」

また少し苦笑されて引き戸を彼女は開けて、そのまま出て行った。

—アレは誰だった？

—白い存在は？

—黒い世界は？

—子供特有の心象世界か？

俺も、子供と言える年齢か？いや、年齢は子供だったな。

とにかく、意味が分からない夢の話は後で考えよう。今は意味の分からない彼らに関して考えよう。

怠い身体を無理やり起こして、本の塔を杖に立ち上がる。立ち上がって、少しでも寒気を覚えて、溜め息。

そのまま引き戸に手を掛けて、なるべく素早く開いた。開いて、カラフルな頭が沢山並んだ周りを少し見てから、小さく息を吸った。

「デメエら。うるさくするんだったら、今すぐソコの窓から飛び降りろ。俺じゃなくて閻魔様にその言葉を聞いてもらえ。ユーコピー？」

当然、返事はなかった。

返事をしたらこの部屋から追い出してたね。ああ、当然だ。当然さ。

数度頷かれて、満足した俺は本の塔が立つ世界に戻る。塔達の間には祭壇があつて、ソコで主が眠るのだ。

—生贄の間違いだな

―細断されるんだろ？

密室のロジックは組めねえよ。

少しだけ溜め息を吐いてから、布団に倒れこむ。どうやら結構限界だったらしい。何もかもが億劫で、面倒だ。

特に引き戸から覗く沢山の視線に構う事とか、最悪に最高だ。

「……あー、なんだ？」

「いや、辛いんやったら寝てもええんよ？」

「あれか、人の寝顔を観察するそんな趣味でも持ってるのか？変態め」
「失礼なやつちやな……すずかちやんと一緒にせんといて」

「え？」

「えッ」

「おい」

ソコは黙っておくのが美徳だろう。いや、まあ怖いモノに触れたくないだけだが。

「ユウ、大丈夫なの？」

「大丈夫だ、問題か？」

「ユウちやんだから、問題だね」

「何か欲しいモノとか無い？」

「ないね。今は全部揃ってるよ」

「フフー、意味のわかる人間がいないと思うてか!!」

「本はいっぱいあるもんね」

「お前の妹がわかってない側だ」

「おう、シット」

「え？」

「確かにお前って本好きだもんな」

「俺としてはお前がココに居る事を小一時間問い詰めたいところなんだが？」

「お前、親が居ないってホントの事か？」

わああい。このタイミングで聞かれるんですね。

―さっすがスメラギ!!

―俺たちに出来ない事をやってのける!!

—ズキユウウウン

カット。

「お前に関係はないだろう?」

「あるだろ!!嘘なんてつくんじゃねえよ!!親戚の姉が居る癖に!!」

「…いや、まあ、色々ツツコミどころが満載な訳だが、とりあえず、喚くな。一応コレでも病人だ」

「……わかったよ」

「でも、私達もちゃんと説明してほしいな」

高町さんがコチラを見ている。それはもう、こっちが目を逸らしたくなるような真っ直ぐな瞳で。

本当に、高町家は苦手だ。こうやって人の心に土足でバタバタバタバタと。

—欧米か?

—ピーチパイでも食べるかい?

—クレアアアアア!!

カット。

「……アー、簡単な説明とクソ面倒な程長ったらしく、それこそ映画を三部作も出来る程度に俺の過去を長く語る説明とどっちがいい?」

「簡単な方で頼む」

「親が死んで、今に至る。以上」

「短すぎるだろ!!」

「お前が短い方がいいって言ったんだろ?文句を言うなよ」

「なら、長いほうだ!!長い事語ってみろよ!!」

「そうだな、アレは我らの父デウス様がご降臨された時代の話だった」

「ちよい待たんかい!!アンタは何処から語る気や!!」

「最初から騙る気だったが?」

「ああ!!なんやこの歯車の噛み合っていない感じは!!」

「まあ落ち着けよ『はや助』。コロッケでも食べるか?」

「いらぬナリよ!!」

「冗談はやめろよ……こっちは本気なんだ」

本気、本気だったのしても、何に本気なのか。

まあ至極どうでもいいことだ。それこそ、どうでもいい。

「バニングスさんも聞きたいのか？」

「私はどっちでもいいわよ。どうせアンタの口から聞けるんだし」

「まあ、尤もだ。なら今から語ろうとするかね」

少しだけ溜め息を吐いて、先ほどまで倒れていた身体を起こす。コレでも病人だというのに。

—それでも言うのだろうか？

—当然だ

ともあれ、この部屋では少し小さい。というか座るスペースがない。

俺が立ち上がったのを見て、理解してくれたのか、全員がリビングに移動する。

ふと、このまま引き戸を閉めて眠れば幸せになれるかもしれない。と邪推な思いが湧いて出たが、箱にしまっておこう。

リビング、というには物が少ない部屋に出て、手近の椅子に座る。ソファは当然の様に彼が占拠していた。

ふと、後ろから毛布が掛けられた。紫色の彼女に軽く視線を合わせながら全体を見渡す。

「ふむ、カラフルだ」

「オイ」

「いや、スマン。思ったことが口にでる人間でね」

桃色に金色が四つ、銀色二つに栗色二人、そして隣には紫があつて、上を見ればチラホラと黒い線が見える。

ともあれ、黒い瞳が二つほどこちらに向いている。ソレも結構黒い何かがこもった感じで。全くもって意味を理解してくれない。

「さて、相変わらずの始まりになるんだが、何処から話そうか」

「親がないって……本当か？」

「イエス。実親はいない……というか、捨てられてるから、俺」

「捨て……ッ!？」

「まあ、落ち着け。その辺の詳しい説明は至極面倒なのだよ。子供が捨てられた、それだけだ」

「それだけって…アンタ、どこに住んできたのよ…」

「どこって言われると…：うーん、どう説明すれば…。それが一般的に、日常的に起こる世界と言えれば言いんだろうか？」

「どこのスラム街よ」

「まあよく言えば、ゴミ捨て場だ。悪く言えば結婚、とか？」

「人生の墓場みたいに言わないでくれるかしら？」

「オーライ、ここにはまだ夢を見れる少女が居たようだ」

「少女達よ。バカ」

「コレは失礼、レデイ」

軽く頭を下げて、話を頭の中で纏める。

「まあともかく、捨てられた俺が今ココに居るわけだ。あれ？話が終わったな」

「待てよ。親戚ってのは何なんだよ!!そんな場所で生まれてるお前が親戚なんて」

「親戚なら、ソコにいるだろ」

「…：シグナム？」

「今回ご協力いただきました、烈火の騎士でございます」

「ノラんぞ？」

「そうかい」

「ちよつと待てよ!!どうしてシグナムとお前が親戚なんだよ!!」

「こんなの絶対おかしいよ!!」

「いや、ちゃんと説明してあげなさいよ」

「つまり、俺が嘘を吐いた訳だ」

「？」

「…：ヘルプ!!高町さん!!」

「え？えーつと、つまり、御影君にはご両親がいなくて、シグナムさんとの親戚関係はないって事でいいのかな？」

「…：なんでそんな嘘をつくんだよ」

「世間体の問題だ。俺を保健室に連れて行かなければそう言う問題にはならなかった訳だ」

「…：…：海外に親がいるってのは？」

「当然、嘘だ。というか、そんな子供を置いて海外に行く親ってどうよ？どこの資本家の子供ですか…」

「ソレは私に対するあてつけかしら？」

「コレは失礼、レディ」

ココに居たようだ。

というか、本当にお嬢様なんですネ、バニングスさん。

「まあバニングスさんがお嬢様だと気付いた所で話は終わりか？」

「というか、お前が学校に来なければそんな問題にはならなかったんだろ？」

「…まあそうだな」

「どうして来たんだよ」

「変な心配をかけるだろ？」

「ふざけんな!!」

「至極まともな意見だと思ってるんだが…まあいいさ」

俺は立ち上がって、毛布をズルズルと引き摺りながら歩く。

少しだけ意識が落ちてきた。

「少し寝るよ。見舞いには感謝を。親が心配するからサクサクおかわりなさいな」

ワーギヤー騒ぐ、一人を無視して俺は引き戸を閉めて、その閉めた引き戸にもたれ掛かる。

—ふむ、限界だったか

身体が重い。どうにか騙し騙しで喋れたが…。限界だ。まったく、心配をかけたくないのに、心配させるだなんて。

「…滑稽だな、まったく」

少しだけ笑って、布団までズルズルと這って行くでしょう。

05 女兒三日会わざれば

「……ア」

目が覚めた。目が覚めたらしい。眠っていたのか。いや、意識はあった、しかし眠っていた。

ぼやけた視界に映ったのは、深い色の人型。

本を読みながら、俺の様子を確認している事はわかる。が、誰かは分からない。

「……ア……さん？」

彼女がこつちを向いた。

ぼやけていた視界が一気にクリアに変わり、本を置いた女性を認識する。

「……なんだ、プレシアか」

「なんだ、とは随分な挨拶ね」

「イイ挨拶だろ？」

「易い挨拶ね」

「悪くなけりや、重畳」

—ボヤけていた

—もういないと言うのに

—間違うなど

本当に、昔にでも戻ったつもりか？

—全部置き去りにして

—全てを忘れて

—総じて消え去るように

カット。

「体調はどう？」

「悪いと思うか？」

「悪いでしょう？」

「なら聞くなよ。実際、喋るのも億劫だ」

「なら口は閉じてなさい」

「閉じてたら喋れないだろ？」

「口を閉じてても喋れるわ」

「残念、声は遅れて聞こえてこない」

本の隙間から見える窓は暗く、時間にすればもう夜と言っている程の時間か。

—生命反応四つ

—双子もいるのか

—出来ることなら添い寝とかだな

カット。

ふと、額に手を当てられる。

「熱は……下がってるわね」

「寝れば直る」

「寝ても治らなかつたでしょう?」

「ならもう少し寝るさ」

「なら何か食べてからにしないさ」

「料理は、科学だ……てか?」

「アナタに特殊な反応が起きる料理を作ってもいいのよ?」

それは、確実に死ぬるな。

「まあ少し待ってなさい。持ってくるわ」

「いや、リビングには行くよ」

「そう……まあ無理そうなら寝てなさい」

「無理ではないさ」

少しだけ重く感じる身体を無理やり起こして立ち上がる。

寒気がする。

—症状の確認

—体に異常はなし

—あれか生理現象か

至極、どうでもいい。

「あ、起きたんだ」

「おはよう、ユウ」

「ああ……」

机に乗せられたサラダやら香り立つ夕食。

—この二人が作ったのか…

チラリとプレシアを確認しようとしたが、やめた。舌打ちが思いつきり聞こえたからだ。

—それだけ悔しかったら自分で作れと

—そのクセ、食べないと怒るんだろうなあ

—無理がある

全くだ。

「これは…お前らが？」

「うん」

「ほとんどフェイトが作ったんだけどねー」

「ほお……」

「ユウはこつち」

そう言つてフェイトが持つてきたのは、少し前…と言つても一年程前にフェイトに食べさせたようなお粥。

それこそ、使われている鍋も同じだ。

—女の子の成長は早いな

—女兒、三日会わざれば

—おっぱいを見よ

カット。

「魯肃も何も言えんだろうに」

「ろしゆ？」

「いや、なんでもないさ」

レンゲを手に取ろうと手を伸ばす。

が、そのレンゲが誰かに持たれた。腕を辿れば、ルビーの瞳がコチラを見ている。

「……」

「た、食べさせてあげヨウカ？」

「声が裏返るぐらいなら、遠慮するさ」

そういうと、白い頬を膨らませて「ぶんすか」と怒るフェイト。

意趣返しとしてはいいだろうが、そこまで弱つてはいない。

「そうやって何でも自分でしようとするから」

「何でもはできてないさ。それこそ無理なことの方が多し筈さ」

「…例えば？」

「そうだな…自分の体調管理とか」

「違うわね」

そう言つてフェイトからレンゲを奪ったプレシアがお粥を掬いこちらに近づけてくる。

彼女に威圧を感じたのは俺だけでいい。

「なんで母さんからは食べるのかな…」

「妹みたいな存在には少しでも気丈に振る舞いたい年頃なんだよ」

「妹…ねえ」

「ん？どうかしたか、アリシア」

「べつつにい」

そう言つてそっぽ向くアリシアに首を傾げる。

前からはプレシアのため息が聞こえてきて、後ろからは「妹、妹…ふへへ」と何故か呪文を唱えているフェイトがいる。

—最悪だな

—最高に、最悪だ

—最低で、最悪だ

—どうしようもない。本当に。最低だ。

「あ、」

と声を出したのは呪文を唱え終わったらしいフェイトだった。

「えっと…聞き辛いんだけど」

「このお粥攻撃を終わらせてくれたら、答えよう」

「お粥で溺れなさい」

「えっと、母さん、ストップ」

そしてお粥攻撃が終わってしまい、彼女は質問する権利を得る。

—まともに応えるなんて言つてないよ

—当然はぐらかそう

「ユウって妹さんとかいたの？」

「妹？」

「うん。妹」

……はぐらかそうにも、はぐらかせない内容だった。

「それは、なぜに？」

「いや、えつと、闇の、じゃなかった夜天の書さんの中に入った時の話
なんだけど」

「ああ、俺の昔話をした時な」

「うん。あの場所に一人だけ女の子が居たんだ」

「……ほう」

「御影夕お兄ちゃんをよろしく、って」

「………そんな可愛い妹が居たらお兄ちゃんシスコンになっちゃう
なあ」

「あら、私達は可愛くないのかしら？」

「お前さんらは別枠だよ。妹分って言った方がいいのか」

「ふーん、まあそれでもいいかな」

「何を妥協した」

「妥協を妥協かな」

まあどうでもいいのだけれど。

—妹、ねえ

—あんな劣悪な環境で子供が育つかね

—俺は子供であって子供ではないし

ふむ……面倒だな。

「まあ、ともあれ俺に妹はいないよ」

「え、いないの？」

「居たとしても、ってことかな」

「……ごめんなさい」

「いいよ。もう終わってる事さ」

今もしも、この場にあの災害の犯人がいたならば……変わらないか。

—殺しもしない

—そんな次元ではない

—またつまらぬ物を斬ってしまった

—次元ではない

カット。

「さて、それじゃあアナタはもう少し寝なさい」

「えー、お母さんやだよー」

「……」

「すいません、そんなジト目で見ないでください」

「熱がまだあるのね…早く寝る事をオススメするわ」

「酷い言い草だけど…そうするさ」

戸締りとかはプレシアに任せればいいだろう。

イソイソと移動しながら、布団に倒れる。

ごろりと身体を回して、天井に左手を掲げる。

擬態魔法を解き、左手の甲に顕れる赤い石。

「……………ふむ」

とにかく、風邪を治そう。

06 人間の俺、道具の彼女

「よお、『夜天の』」

「体の調子は？」

「生憎に十全。今までとなんら変わりはないさ」

「そうか…そのくせ学校は休んだのだな」

「気持ちが悪くてな」

「鏡でも見たのか？」

「それほど酷い顔はしていないさ」

尤も、鏡を見たら殺したくなるのだけれど。

—尤も今はセネターの背格好だが

—補導は勘弁願いたい

—不備はない

—不義もない

カット。不義だらけさ。

「して、私に用事とは？」

「まあ落ち着けよ。珈琲でも頼もうじゃないか」

「…あまり、長い話は好みではないのだがな」

「そういうなよ」

近くにいたウェイターに珈琲を頼み、銀髪の彼女に目を向ける。

—兎みたいだな

—銀兔か？

—バニースーツでも着せるべきか

—術式構成

—カット

カット。やめろ。

「話は他でもない。俺の左手に関してだ」

「…いいか、ツキビト。私に答えられることは少ない」

「それでもお前は知っているのだろうか？」

「知っている。が、教える気にはならない」

「…その理由は？」

「お前を殺したくない」

「今更何を言うんだ、この道具は」

「道具だからこそだ」

「道具なら修理した人間のいう事を聞かないか」

「優先順位は主の方が先だ」

「どうしてソコにはやてが出てきた」

「……」

「まあ構わんがね」

タイミングよく珈琲が出てきたので、ソレを一口飲む。

対して銀髪の彼女も、カップを傾けて眉を少しだけ寄せてから角砂糖を二つ程カップに投入した。

「よく、こんなモノが飲めるな」

「ちよつとした中毒なのさ」

「それは、非常に残念な事だ」

「残念ながら、残念でもないんだがね」

残念であるわけがない。

—前は好んで飲まなかったがね

—いつの間にか

—これこそが彼女である。彼女だからこそ。

「……どうでもいいか」

「どうかしたか？」

「いや、どうでもいい事を考えていた」

「このタイミングでか？」

「このタイミングだからこそ、どうでもいいのさ」

「私は帰らせてもらうぞ」

「まあ待てよ。珈琲も冷めちやいない」

「冷めたモノまで飲ませる気か」

「お前次第さ」

寄せた眉をもう少しだけ寄せて、彼女は座り直す。

—椅子になりたい

—地面もいいな

―靴になりたい

―カッツプはもらった

カッツ。

「先にも言ったが、ソレに関して私は何も教えないぞ」

「他のことなら教えてくれるのか？」

「……主の私生活以外はな」

―ならスリーサイズから聞こうか

―いやいや、落ち着け自慰の回数からだ

―おいおい、まずはショーツの色から聞くべきだ

―履いてるのか？

―履いて、ない…だと!?

カッツ。履いてるだろう。そういう事じゃない。

「感応系の魔法を教えてください」

「感応?…私の魔法は対象の意識に潜り込む類のものだぞ？」

「それもかなり強力なヤツだろ?知ってるさ。一度喰らってる」

「……何をするつもりだ？」

「知識として欲しいだけだ。他人や友人達に使いはしない」

「……本当だな？」

「信用がないな。別に構いやせんがね」

「信じていない訳ではない」

「なら、何を戸惑う？」

「……私は性質上、沢山の人間を触れた」

「おいおい、珈琲が冷めるぜ？」

「冷ましても構わんさ…お前の為だ」

「猫舌じゃないんだがな」

「……話を続けよう。私は人間の本質を知っている。それこそ汚い部分までしつかりとな」

「願望を叶える道具だからな」

「そうだ…。そして、私の蒐集、お前が知っている感応術式はその対象の記憶を漁り、私の中に留める術式だ」

「……」

「私は、お前を知っている。知っている筈なんだ」

「ログは消した筈だろ？」

「違うッ!!」

『夜天の』は声を荒げて、机を叩き、身を乗り出す。

—もう少しで唇が!!

「私の管理しているログは、私でしか消せない。それこそ主だけにしか触れないんだッ!!ソレに、お前が無いのはどういう事だ!!」

「…俺は存在してませんでした、てか？」

「違うッ!!確かにお前は私の中に入った!その形跡はしっかりの残っている!!だがな、お前の記録だけが、お前の過去だけがオカシイんだッ!!」

「……次にお前の言う言葉を当ててやろうか？」

「やめろ、言うな。それこそお前にとっては受け入れがたい筈だ」

「いんや。俺はその事について知っているし、理解も了解も、了承も決意もしているさ」

彼女は歯を食いしばって、力無く椅子に腰を下ろした。

「俺は、生きていない」

「……違う、お前は生きている。生きているんだ」

「違わないね。生命活動しているが、俺は生きていない。死んでもいないがね」

少しだけ冷めた珈琲を飲む。苦い。

「………七年か」

「短いだろ?お前と比べ様もないさ」

「私と、比べてくれるな」

「そいつは失礼」

肩を竦めて珈琲を飲み干す。

—苦い

—ああ、苦い

「………もしも、もしもだ。あの瞬間に」

「やめろ。その話はしたくない」

「……すまない」

「いや、いいさ」

「……お前はいつもそうあらんとしている」

「……そうだな。当たり前だ。当たり前前に決まってる」

「当然の事じゃない」

「お前にだけは言われたくないさ」

「人間のお前と、道具の私では差がありすぎる」

「似たようなモノさ」

「……お前は、途方も無く、愚か者だ」

「ソレも知ってた事さ」

『夜天の』は肩を落として、瞼を下ろす。

「愚か者め」

「愚かしいよ……なんせ、まだ諦めれてないからな」

「そこではない……お前は、生きている人間なんだぞ？」

「わかってるさ。わかってるからこそ、俺は生きてはいけけないんだ」

「……ッ」

真つ直ぐに彼女を見れば、息を飲む音が聞こえる。

—だからこそ、俺は死ななくてはいけない

—死ぬべきなのだ

—早々に死ねばいい

「……わかった、教えよう」

「ふむ、意外だな」

「私ではどうにもならないからな……」

「おっと、主への進言はやめてくれよ」

「言えるわけがない。言った結果など、お前の口から偽りが出る程度だ」

「よくご存知で」

術式の描かれた方陣が彼女の手のひらから出てくる。

—解析魔法行使

—解析完了

—そのままスリーサイズをだな
カット。

「いやあ、助かったわ」

「……ツキビト」

「あ？」

「呑まれるなよ？」

「…知ってたなら、さっさと教えればいいものを…」

「私とて、疑問がない訳ではない……確認したいこともある」

「そうかい…まあ精々頑張るさ」

「お前の無事を願うよ」

「願望増幅器に願われるとは……なかなか滑稽だな」

「人間に無事を願うとは…滑稽だ」

お互いにニヤリと笑って、俺は席を立つ。

—方法は得た

—あとは情報だけだ

—ああまったく

後ろから先ほどまで話していた声が聞こえた。

冷めた珈琲はやはり苦かったのだろう。

「まったく……締まらないな」

次は一人だけで口角を上げて、俺は扉を開けた。



真っ黒い空間に、俺は立っていた。

少しだけ朱い何かが俺を包んでいるところを確認すると、夢の影響

ではなくて感応魔法によって入った事がわかる。

あの時と同じように、ザワザワと黒い何か、俺を侵食していく。

左手を飲み込み、

左足を這い、

右手に伸び、

右足を包みこんだ。

黒い線達は俺を見て、そして俺を飲み込んでいく。

俺はコレ達を知っている。

知っているからこそ、俺は口を開く。

いつもの様に。

いつも唱えている様に。

少しだけ、謝りながら。

「カット」

ぶわり、と霧散した黒の線達。

溜め息を吐いて目的の人物を見つける。

真っ白い世界に、真っ白いワンピース、真っ白い髪を少し揺らして

少女はコツチを向く。

輪郭がはつきりして、ようやく彼女が白い肌をしている事に気付

く。そして彼女は白い瞳をこちらに向けて真っ赤な口を開く。

「はじめまして、お兄ちゃん」

「はじめまして…というのは些かおかしいけどな」

「そう言わないでよ。私に話す事はあっても、私と話した事は無いで

しょっ。」

「そうか、そうだな」

「そうよ」

彼女はニッコリと笑って、俺にずっと向いている。

一方的に話す事しかなかった彼女を目の前にして、俺はようやく会

話というモノが出来たらしい。

ならば、挨拶は大切だ。

「なら、はじめまして。アンヘル」
「うん、はじめまして。御影夕」

07 失礼な。俺は変態だ

「意外に、愛らしいモノなんだな」

「そう言われたのは、久しぶりかな」

「七年ぶりか？」

「違うよ、えーつと…」

彼女は虚空を見つめて指折りに数を数える。

ソレが両手に差し掛かってから、少し止まる。そしてニヘラと力無く笑って

「にへへ、忘れちゃった」

「……」

「そ、そんな目で見ないでよ、ちよつと待ってね、えーつと、えつと」
もう一度彼女は虚空を見つめて、何度かコクリ、コクリと頷きながら数を数えていく。

大体、四十六回程頷いたあたりで、彼女はニッコリと、次はかなり満面な笑みを浮かべて。

「とつても昔だよー！」

そう言った。それはもう、キリツと効果音がつきそうなぐらい自信たっぷりに。

コロンビア。

「まあどうでもいいか」

「お兄ちゃんが聞いたことなのに!？」

「ソレは、それだ」

「そうなのか？」

「そうなのだよ」

「そうなのか！」

また彼女はコロコロと表情を変えて、笑いながらクルクルと回っている。

もう少し回るスピードが早ければ、スカートの中身が見えるだろう。もしくは俺がしゃがめばいいのか。

ピタッと彼女が止まって、少しだけ頬を膨らませてコチラを睨む。

「なんだ？」

「オトメの秘密を覗かないでくれるかな？」

「はて、何の事かさっぱり」

「お兄ちゃんの思考は、こっちに流れてくるんだよ？」

「オトコの秘密を覗かないでくれるかな？」

「にへへ、嫌だよーっだ」

「アツカンベー」をしてから、また彼女はカラカラ笑う。

その笑いがゆっくりと終わり、彼女はコチラを向く。

「ワタシを使う人っていうのは、どことなく、壊れてる人が多いんだよね」

「そうなのか？」

「うん。今までも、たぶん、これからもなんだけど」

「人間だから、仕方ないさ」

「そうだね。ワタシ……この場合、どう言えばいいんだろ」

「大きな力とかでいいんじゃないか？」

「力、か。うん、兵器って言われたこともあるからそれでいいか」

可愛い兵器。

「にへへ、考えてることはわかるんだよ？」

「知ってるよ」

「……………く、口説かれてる!？」

「黙れ妖女め」

「酷い言い方だなあ、まったく」

また彼女は力無く微笑む。

にへへ、と笑ってから話を続けようとする。

「えーっと、どこまで喋ったんだっけ？」

「ショーツを見せてくれるか否か、だろ？」

「そうだった。えっと、兵器を得た人だから、壊れてるかもしれないんだけどね」

覚えてるじゃないか。チクショーめ。

「にへへ……………ワタシを得たから壊れた人。壊れたからワタシを得た人。だいたい、二通りしかワタシと適合しないんだけどね」

「そうなのか？」

「そうなんです」

「そうなのか。で、俺は？」

「それだよ。そこなんだよね」

何が、ソコなのか分からないが、人を指差すんじゃないやありません。

触手でも、ダメだぞ。

「コレではしないよ……チツ」

「おい」

「にへへ。お兄ちゃんは違うんだよね」

「違うって、何が？」

「正確には、ワタシとの適合の順番かな」

「……」

「普通はワタシを得て壊れちゃうか、もしくは壊れて安定してる人ぐらしいにしか適合できないんだ」

「研究資料にはなかったぞ？」

「当たり前じゃん。壊れて安定してる人はワタシを当然の様に受け入れたんだから、壊れるかどうかなんて分からないよ」

「前者は書く暇もないのか」

「にへへ、ゴチソウサマデシタ」

「お粗末様」

溜め息を吐いてから、ニンマリと笑う彼女を少しだけ警戒する。

「大丈夫だよ。宿主を強制的に食べる趣味はないから」

「そうか」

警戒をゆつくり解く。

「そうだよ。内から、じつくりと、少しずつ、味わって、食べないと」

「訂正、警戒は怠らない様にする」

「にへへ、そうしてね。誰かも言ってたでしょ？警戒を常にし続けろ、って」

「俺の言葉だ」

「そうだったけ？まあいいや」

いいのか。いや、いいか。

「で、なんだっけ？」

「今日のショーツの色の話だ」

「そうだった。えっと、白だっけ」

「白なのか」

「黒の方がよかった？」

「いや、なんか、予想通りで反応しづらい」

「じゃあ、履いてない事にしよう」

「履いてないのか？」

「見せようか？」

「……いや、やめとこう」

是非見せてください。

「思考と言葉が一致してないよ」

「いつもの事さ」

「そうだね。いつも通りだ、にへへ」

少しだけたくし上げられたワンピースの裾はギリギリのラインで止められて、パツと離される。ふわりと裾は元の位置に戻ってしまふ。

別に見たかった訳じゃない。覗きたかったただけだ。

「どう違うの？」

「背徳感」

「納得しちゃった…」

「おめでどう。君も変態だ」

「失礼な。ワタシは淑女だよッ」

「例え淑女だとしても、冠には変態と書かせてもらえ」

「戴冠式には呼んであげるね？」

「全裸ネクタイ、白ソックスで参加させてもらおう」

「ずらっとそういう人間が並んでると、何が普通かわからなくなっちゃうね」

「そこでは、ソレが普通なんだから、大丈夫さ」

「大丈夫だね、にへへ」

背徳感や羞恥心のない世界なんて、ツマらん世界だろうがな。

「お兄ちゃんは、どっちでもなかったんだよね」

「壊れてもなかったし、壊れなかった」

「ううん。壊れてる途中だった」

「……そうか」

「うん。だからオカシイんだ」

「壊れてる途中の人間に適合した事か？」

「壊れてる途中の人間にワタシが導かれる事。あの時までは一切無かったから」

「そういう時もあるんじゃないのか？」

「残念な事に、ワタシを作ったアノ人はワタシがすぐに意識を取り戻せるように、そういった人間へ入り込める様に作ったんだ。本当に、残念だけど」

「随分な自信だな」

「アナタが彼女を崇拜してるのと、同じ理由よ」

「納得してしまった…」

「おめでどう。君も変人ね」

「失礼な。俺は変態だ」

「……」

「……いや、えっと、で、何の話だっけか」

「ネクタイは何をつけるべきかの話じゃなかったけ？」

「普通のネクタイだな」

「蝶ネクタイは？」

「シルクハットでも準備しとけ」

「脱線しすぎかな」

「奪戦はしてないけどな」

「まあどうでもいいけど」

「至極、どうでもいいな」

にへへ、と彼女は笑い、俺は溜め息を吐き捨てた。

「別に、どうでもいい話なんだけどさ」

「あ？」

「御影夕はまだ、彼を許してあげれないの？」

「当たり前だろ。アイツは絶対に殺す」

「うん。ワタシと適合した理由なんだろうなあ」

「壊れてないさ。当然、壊れてない」

「そうだね。壊れてるのは彼だけでいいや」

「アイツは必死なんだよ。それこそ、出口のない迷路でずっと迷ってる」

「自分で出口を閉じちゃったのにね」

「それでも、アイツはソコに居続けるしかないんだよ」

「どうしようもないのかな？」

「さてね。俺は知らんよ。助ける気はない」

「大切じゃないから？」

「大切であるわけが無い。あんなヤツ」

「まあどうでもいいけどさ」

「そうさ、どうでもいい」

俺は肩を竦めて、彼女は珍しく溜め息を吐いた。

そんな彼女の後ろから、ソロソロと黒い線達が迫っているのが見えた。

「時間切れか」

「そうみたい」

「じゃあ、戻るとしよう」

「うん。ああそうだ。夜天の子……えっと、リインフォースだっけ？」

「なんだ、知り合いだったのか？」

「長年生きてると巡り合わせってのが在ってね。ワタシの方が年上なんだけど」

「……ああ、見た目で見てた」

「し、失礼なんだぞ!!」

彼女は両手をパタパタと上下して怒る。

つまり、こういう所も年上だから……いや、彼女の睨みがキツくなつた。考えるのはやめよう。

「時間がないんだが？」

「あ、うん。リインフォースに伝えてほしいんだ。『いいご主人様ですよ』

「かったね』って」

「……お互い、つてのが抜けてるぞ」

「イイご主人様だと思つてたんだ」

「もちろんじゃないか」

「なら、自分をもっと大切にすべきだよ」

「お互い、とは付けないでおこう」

「にへへ」

ゆつくりと視界が白んでいく。

彼女の輪郭が、世界と一緒にぼやけてくる。

「ねえ、お兄ちゃん。約束、守つてくれる？」

「……なるべくは、な」

「にへへ。じゃあさ」

ぼやけた彼女が、ゆつくりと真つ赤な口を開く。

戸惑つた様もなく、淡々と言葉を告げる。

「ワタシを殺してくれないかな？」

そして、俺の意識は浮上する。

「……………」

見慣れた天井に、床から伸びる本の塔達。

―自宅

―自室

息を思いつきり吸い込む。ゆつくりと吐き出して、眩く。

「それは…卑怯だろ……」

俺はようやくやく溜め息を吐いた。

08 オレは悪くないッ!

白い空間を見上げる。

どうしようも無く遠い世界。どうしようもなく、遠い理想。

一息、それこそゆっくりと息が吐き捨てられる。

誰かが言う。

もうやめろ

そんな言葉を幾年聴き続け、幾度も無視し続けた。

また床に顔を向けて手を動かし始める。

まるで河原で石を積むように。

まるで意思を摘むように。

遺志を紡ぐように。

決して届かない理想へと、進んでいく。



「ちよつと、ええかな?」

「あん?」

珍しく、と言つてもここ最近ではコチラから話す事も中々増えてしまったのだけれど。それでも珍しく私から光君ライトに声を掛けた。

間抜けた声を出して、光君はコチラを向いて笑顔になる。

「デートの誘いか?」

「……なんや、ゲンコツが好みやったんか」

「ジョーダンだろ?」

「コツチのセリフなんやけど……いや、まあええわ」

相変わらず軽い、と思つてしまう。

けれども、それでも、彼に僅かながら惹かれている自身もいる。

瞼を閉じて深呼吸をして、心の中を落ち着ける。うん、大丈夫だ。

何が大丈夫かはわからないけれど、うん。

持っている紙束を丸め直して、もう一度口を開く。

「ちよつと話したいんよ」

「……わかった、屋上で告白だな」

「はあ…素敵な脳内やなあ」

「素敵だろ？」

「ホント、ハッピーやわ」

頭の中の話である。私の手を引いて、歩き出す。

学校での行動なので、当然、なのはちゃんも立ち上がり、着いて来ようとする。

が、

「ゴメン、なのはちゃん。二人きりにさせて」

「え？どうして？」

「……大事な話なんよ」

彼女には話せない。それこそ、光君を好いているなのはちゃんだから、話せない。

せつかく、彼が居ない今日を選んだのだ。リインフォースからの念話で呼び出された事は聞いたが……、まあこちらとしても都合はいい。

彼に聞かれると、都合が悪くなる。

「なんで？はやてちゃんと二人きりなの？」

「なのはちゃん、ちよつとだけやから」

「嘘、」

「嘘やないよ。それこそ休み時間が終わる前には私は戻ってくるよ」

「ホント？ホントに何も無いの？」

「ソレはホンマや」

「なら私も着いて行って大丈夫だよね？」

「……はあ」

少しだけ、ホンの少しだけ、ざわついた心を落ち着ける。

コレは、私が彼に抱いている気持ちと違う。一方的な依存……いや、私も彼には一方的に依存していたか。依存させてくれなかった、

思っていたが、前を考えると結構依存させてくれていた。

気付かなかった…というよりも、気付かせてくれなかった、というのが正しいのだろう。

「なのは、」

「フェイトちゃんもはやてちゃんの味方なの？」

「なのは、落ち着きなさいよ」

「アリサちゃんも…みんな、私の」

「わかった。私も言い方が悪かったわ」

なのはちゃんの言葉を遮って、言葉を出す。あの先の言葉は、きつと言ってはいけない言葉だったと思う。

なのはちゃんを鎮めようとしていたアリサちゃんとフェイトちゃんに一度だけ視線を向けて、なのはちゃんをジッと見る。

少しだけ涙目で、コチラを睨めつける彼女。

なんだ、心を落ち着けて見れば、ただの怯えた子供じゃないか。親を取られそうな、そんな迷子の子供。

色々考えると、この事実を彼女に知らせるべきではない。いや知らせたところで意味はない。

それでも、彼女が知りたい、と思うのならば。いや、彼女が彼と離れないのならば、知らせた方がいいのだろうか。

もしも…：夕君なら。と考えてしまった。

私も彼女の事を言えないらしい。思わず苦笑してから口を開く。

「なのはちゃんがそんなに聞きたい、言うならええよ。放課後に私の家に集合してもらってええかな？」

「いいよ…ソレで」

「うん、なら、そうしよ」

ずっと掴んでいた光君の腕を離して、なのはちゃんに微笑んでみる。睨まれた。まあ仕方ないか。

思わず苦笑してしまい、そのまま席に戻る。

フェイトちゃんのはなのはちゃんの方に行き、アリシアちゃんは机に突っ伏している。対極的やなあ…。

こちらに近づいてきたアリサちゃんとすずかちゃんに向く。

「で、集合って事は私らも行つた方がいいのかしら?」

「参加は自由やね。先に言うけど愉快的漫才が聞けると思わんといena」

「……はやてちゃん。その話って、昨日と今日じゃなきや、出来ない話?」

「……たぶん、そうやろね」

「なら、私に行くよ」

本当に、この子は偶に同じ学年か不思議に思つてしまふ。

私も、たぶん人の事は言えないけれど。まあ他人を評価できる程偉くもないか。

「なんか、嫌な予感しかしないんだけど?」

「危険は……ないよ……?」

「なんで言い淀んで、更に疑問形?」

「いやあ、私も大丈夫やとは思つてるんやけど、さっきのでわからんよ
うになつてなあ」

「なのは?」

「イエス。うーん、大丈夫やろか」

「……暴れるとか?」

「そういう事やなくて、うーん、何て言うか、難と言うか……」

「アンタ、偶によく分からない言い回しするわよね」

「アリサちゃんやったらわかるやん」

「わかるけど……」

「難といえば、易ければ、と答えたほうがいいのか?安くもない内容
だろうけど」

「アンタもね」

「わかるよね?」

「わかるけどさ……なんだろう、チクショーと叫びたい」

「ジト目で見下して、豚野郎、やね」

「なんでそんな断定的なのよ」

「いや、覚えといたほうがエエで。たぶん、きっと、役にたつと思つわ」

「……豚野郎」

今しがた、目に見える範囲で二人ほどびくんと震えた男子が見えた。もちろん、藪をつつく様な事はしない。蛇ではなく、亀が出てきそうだが。

「いやはや、愚問やなあ」



はやてがオレに告白するであろう放課後。

恥ずかしがっているはやては、自分の家にオレを呼ぶという大胆な行動に出た。

なるほど、コレはいつの間にかフラグが建設されていたんだろう。

しかし、告白ならば、どうしてなのはを呼んだのだろう。

なるほど、わかった。オレにハーレムを築けというのだろう。うむ、最高だ。

「ライト君…?」

「ん?どうかしたか?」

「本当にはやてちゃんの家に行くの?」

「当然だろ!?!何言ってるんだよ」

「…:うん、だよね」

何故か落ち込んでいるなのはに微笑み、そして頭を撫でてやる。これで彼女は元気になる。

ニコポナデポってスゲーわ。うん。

はやてを落して、そこから闇の書のメンバーも落して。

思わず笑いが出そうになるのを抑える。抑えても、口はどうやら変わっていたらしい。まあそれでもいい。

八神家に到着して、チャイムを押せば金髪のお姉さんが出てくる。

「よっ」

「…:待ってましたよ、ライト君、なのはちゃん」

「こんにちは、シャマルさん」

どうやら主賓を待っていたらしい。

軽く手をあげてオレは笑って挨拶を交わす。

「どうぞ、みんな待ってます」

「おうー」

部屋に入ると、そこにはフェイトとアリシア、すずかとアリサ、そして

「……みんな、揃ったな。ほな、話をしよか」

家の主である、はやて。もちろん、闇の書のメンバーもそろい踏みだ。

本当に、最高だ。

「みんな、テキトウに掛けてな。長くなるか、短くなるかは、わからんから」

つまり、オレへの気持ちを言ってから告白か、直接好きですみたいな？そんな感じか！

やばい、これはやばい。オレにも遂に幸福が来たか。

「さて、話……の前に確認したい事があるんよ」

「ん？」

「ライト君さ……そのレアスキルって何時から持ってたん？」

「あ？なんでスキルの話なんて」

「ええから、答えて？」

コレはオレが七年程前に願いで手に入れたモノだ。

しかし、公にしている内容は少しだけ違う。

「コレは生まれた時から持ってたぞ？」

そういう事に成っている。もちろん、事実を知っている人間なんている筈がない。

「そっか……そうやんな」

「ん？なんだ」

「今から七年前……言うても私らが三歳の時、一つの世界が壊れた」

「七年前？」

「そう、七年前。……管理局の中枢近くにあった情報やねんけどな。罪人が収容されとった世界らしいんよ」

「ぎい…人…」

あの時の…星だろうか。

オレが掃除をしたあの世界の事だろうか。ならば、ソレは誇ることだろう。きつとみんなソレを知って、オレを褒めてくれるだろう。

「ああ、あの星ならオレが掃除したよ」

「……」

全員が沈黙する。

口を閉ざしている、というよりは、ポカンとしている。

そうか、オレがそれほど凄いのか。

「……はあ、アホらし」

はやては持っていた紙束を投げた。バラバラと落ちる紙に沢山の文字が書かれている。

ソレを追っていると、紙の壁の中から腕が伸びてきた。

「ツゲ!？」

少しだけ白い腕がオレの首を捉えて、座っていたソファに押し付けられる。

紙が落ちる頃に、腕の元を確認すれば僅かに白い光を纏ったはやてが居た。

「な、なんのつもっ」

「喋んな、ええか、友達やから、今、ココで、止まってるんや」

はやては下唇を噛み締めている。

なにがそれ程思う事があるんだ？

オレは正しい事をしたんだぞ？

「なんでや、なんで、あんな事」

「はやてちゃん、離してよ」

「なのは!？」

隣を見ると、桜色の光が数個浮いている。

いつの間にか、白いバリアジャケットを着ているなのは。

そんなのはを見ることもせず、はやてはオレをにらみ続ける。

「…はやてちゃん」

「……ゴメン」

「なのはも」

「……」

さすがはやての後ろから現れ、なのはの隣にはアリサが居た。

オレの首は解放されて、ようやく自由になった空気が身体に入ってくる。

「ホンマに…最高に、最低やな」

「ちよつとはやて、説明しなさいよ。何がなんだかわからないわ」

「……」

「なのはも、その槍？杖？どつちかわからないけど、降ろしなさい」

「……うん……」

ようやくバリアジャケットを解除したなのはが座り、ピリピリとした空気が少しだけ緩和された様な気がした。

「……さつきも言うたけど、とある罪人達が収容されてた世界があった。掃除、という名目でその世界に武器の雨を降らせたんが、そのバカや」

「……」

「……おい、よく考えろよ！オレは当然のことをしたんだぜ？」

「人殺しが？正しいやて？」

「オレは悪を殺したんだ、正しいことだろ!!」

「そ、そうだよ!!ライト君は何も悪くないじゃない！」

「じゃあ、聞こか。あの場所に住んでいた人は、何なん？人？それとも、ゴミニ？」

そう言ったはやての目は、とても冷たくて、とても、真っ直ぐだった。

「で、でも、悪人なんだぜ？」

「もう一つ。悪人と呼ばれる存在は殺すべきなん？」

「そりやあ……死ぬべきだろ」

「じゃあ、今すぐ私を殺しいや」

「なんでだよ!!」

「夜天の書とかいう危険物を所持、及び管理局勤めの魔導士を損傷、原生物への蒐集活動、こっやって上げてくと、結構罪深い罪人なんよ

「? 私って」

「そ、それでも、はやては殺せねえよ」

「なら、掃除したら?」

「そういうことじゃねえ!!」

「じゃあどういいうことやねん!!」

はやての叫びに、少しだけ後ずさる。

叫んだはやては溜め息を吐いて、また口を開く。

「……悪人の子は、悪人なんか?」

「そう……なんじゃないのか?」

「なら、私達も殺されて然るべきだね」

「母さんは元、と言っても次元犯罪者だし」

「お前らは違うだろ!!」

「ライトの言った事は、そういう事だよ」

「ツ!」

違う、違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う!!

オレは悪くない、悪くないに決まってる。

「もしも、親が誰かに殺された、としよか」

「……なんだよ」

「もし誰かに親が殺されたら、どうする?」

「そんな事……あるわけないだろ」

「なら考え。考えて、物を言うてみ」

親が、殺されたら。

もしも、あの平凡で平素な親が、殺されたら。

「……犯人を見つける」

「見つけて?」

「見つけて……」

殺す。

絶対に、殺してやる。

「……許す」

「……嘘はええよ。顔がそう言うてない」

「……なら、どうしろっていうんだよ」

「思ったこと、言うたらええだけやん。私もたぶんそう思うし」
「……殺す」

「うん。やるね。私もそうする」

「それが、何なんだよ……」

「うん。で、今なんやけど、夕君の親の仇が目の前に居るわけや」
「……え？」

背筋がゾクリとした。

頭の中がグチャグチャになって、視界がグラつく。

耳になのはの叫びが聞こえる。

ぼんやりと見えるなのは、みんなに喚き散らしている。喚いて、
オレを抱きしめている。

違う、違う。

オレは、オレは悪くないんだ。

オレは……

悪いのか？

09 君に価値は無いがね

彼を見続けて、約七年。

彼の辿った道は乱雑に黒く塗りつぶされている。

この広い空間で、ワタシと彼と、ソレだけが認識出来る。

彼自身、無理だとわかっている。

ワタシ自身、無益だと知っている。

カレ自身、無償だと言っていた。

けれども彼は無駄でも、ただ無骨に、求め続ける。

七年間。それだけを彼は見続けて。

そんな彼をワタシは無下にすることは出来なかった。

彼は今も未だ、守れなかったモノを守ろうとしている。



「…御影」

「あ？…なんだ、珍しいなお前から俺に話しかけるなんて」

「……」

朝、教室でのんびりと本を読んでいた時の話だ。

サボりがバレて、リンデイ・ハラオウンからの呼び出しとも思った

が、コイツの顔を見る限り違うようだ。

—何がそんなに辛いかね

—悔やんでる？

「…なんだ、また本をダメにしたのか？」

「違う…」

「ふむ……他にお前に何か言われるような事はしてないつもりだが」

「……」

「むう、まあ、なんだ。悩みなら聞かし、俺が何かしたなら謝ろう、ス

マンな。さっぱり理由はわからんのが悪いとは思うが」

「ツ、なんでもない!!」

そう言つて踵を返して走り出すスメラギ。

—オイ、男からの告白なんざいらんぞ？

―男色の趣味はない

―イケメンシヨタだぞツ!?

…カット。

どうしようもない。

「……なんだったんだ?」

「どうかしたのゆう君」

「んー…変な奴が余計に変に成ったと言うか、シャイな男を見る感じが、どうもな」

「ああ…うん。少しだけ待ってあげたらどうかかな」

「待って改善するものか?」

「改善される…んじやないかな」

「曖昧だな」

「アイ、でもマイでも、私の話じやないもの」

「ご尤もだ」

まあのおんびりと待つことにしよう。幸いにして、待つことには慣れすぎている。

―色々と考える事もあるしな

―色々と考えなくてはいけない

本当に、どうしたものか。

「…そういうゆう君も悩んでるよね?」

「当然悩んでるさ。最近身長がさっぱり伸びて無くてな……牛乳をもう少し飲んだほうがいいのだろうか」

「うーん…シヤマルさんに聞いたら?」

「彼女に聞くと入院させられる」

「どういう事なの?」

「そういう事さ」

恐らく、というか、ほぼ確実に。彼女に俺の体の事を相談すれば要入院を言い渡される。

―妥当です

―妥当すぎる判断だ

―打倒しなければ

―打破すべきか

―まずはおっぱいをどうするかだな

―妥当です

―妥当だ

カット。打倒して叱るべきか。いや、愚問だな。

「ねえ、御影君……少し、いいかな？」

「高町さん？」

「いいかな？」

「……まあ構わないけど」

「じゃあ、ついてきて」

「なのはちゃん」

「大丈夫だよ、大丈夫」

「大丈夫か否かを問答してる時点で俺の不安がやばいんだけど？」

「行く」

「……はあ、」

席を立ち、高町さんの後ろに着いて行く。

少しだけこちらに伸ばされたすずかの手は敢えて無視する。

―さてきて、何がそんなに怖いのか

―なにが不安なんだか

―何故必死なのか

他人に回す思考は、まだ持ってたか。中々に、滑稽だ。

夏だというのに、朝の風は少しだけ冷たい。

一般の学校にしては珍しく屋上が解禁されているこの学校の屋上。

高町さんは扉を背にしている、その目の前に俺はいる。

「で、何用かな？」

「どうして、ライト君なの？」

「……は？」

落ち着け、落ち着いて文脈を探すんだ。

— 声目だ

— ムリポ

終わってるな。

「どうせ、御影君が情報の操作でもしてるんでしょ!？」

「……あー、スマン。何がなんだか分からないわけだけど」

「とぼけないで!!」

トボけたつもりは一切ないんだけどな。

— アイツが悩んでた原因か？

— アレと俺の関連？

カット。考えるな。

「フェイトちゃんやアリスアちゃんも騙して!!次はライト君が邪魔だからって!!」

「……」

「私は、騙されない!!絶対に、アナタに踊らされたりしない!!」

ああ、なんとなく予想できてしまった。

予想できたからこそ、ソコから先はきつと彼女の口からは言わせてはいけない。

— どうする？

— ノってやれ

— 解決はしないけどな

— 彼女もソレを望んでるさ

— 改善はせんがね

「クヒツ……」

「何がオカシイ!!」

「いやはや、クヒツ、なるほど、なるほど。気付いたのが高町さんだけだとは、中々に滑稽だな!」

「や、やっぱり」

「だがね、高町さん!!君に何が出来る!!全ては俺の思想で動いている!!それこそ微細の誤差もないツ!!」

「ッ!!」

「俺を殺すかね? ソレもいいだろう。君は犯罪者として肩書きを横に付けるがね!! フェイトやはやてに言うかね? ソレもいいだろう。君と俺、単なる友人と命を救った人間、さあどちらを信じるだろうね!! ずずかやバニングスさんに言うかね? ソレもいいだろう。だがしかし彼女らに何が出来る!! 他人を巻き込むかね? ソレもいいだろう。魔法少女としてこの世界に名を馳せるか、管理局との鬼ごっこを楽しむがいい!!」

「ッ…!? 最低だね…!!」

「最高の褒め言葉をどうも!! 感謝のしすぎでどうにかかなりそうだよ!!」

「…:…ライト君は…助けてほしいの」

「クヒツ、君は何を差し出す? まあ、君自身を含め、君の持ち物に価値は一切ないがね」

「どうしたら…」

「君は何も出来ない、その歯痒さを持ち、もう一度考えたまえ。俺と交渉したいのなら、それ相応の準備をしたまえ。考えたまえ、思考を張り巡らせて、自分で考えたまえ、高町なのは」

ニヤリと嗤う俺と、下唇を噛み締める彼女。

彼女は悔しそうに扉に手を掛ける。

「ああ、コレをスメラギ君に言うんじゃないよ。彼を消す計画が早くなってしまうからね」

「…最低」

そう言つて彼女は屋上のドアを力いっぱい閉めた。

バンツと大きい音が鳴る扉に苦笑して、我ながらバカだなあと思う。

—思考停止しているのは、誰だったか

—高町さんだったか?

—それとも、

カット。

「はあ、馬鹿らしい」

色々と思いを張り巡らした所で、彼女はアイツを正当化してしまうだろう。

アリシア達が得た情報が何かは……まあうん、ワカラナイが。

先の事を考えても、彼女が考えないでいる事はダメだ。ソレは絶対にいけない事だ。

彼に言われたから人を殺しました。なんて未来、大切な友人に負わしたくはない。

「ゆう君」

「はぴよ!？」

「すごい声出たよ?」

クスクス笑うすがいつの間にか目の前に居た。

—はぴよ?

—ハッピーよ

—さてどうだろうか

「あー……もしかして聞いてた?」

「うん。バツチリ。ゆう君が演技を始める前ぐらいから」

「……ストーカーは犯罪です」

「ゆう君だけしか追っかけないから、大丈夫だよ」

「個人的には後ろを追っかけられるより、隣に居てほしいけどな」

「友達として?」

「友人として」

何故か少しだけ不満そうな彼女は放置して、フェンスに背中を預ける。

—実は切れ込みが入ってて

—殺すのは最後にしてやるといったが、アレは嘘だ

—こいよ!銃なんて捨てて掛かってこいよ!!

「なのはちゃん、どうするんだろうね」

「さてね。俺は誰も救う気はないから知ったことじゃないさ」

「…救わないの?」

「救えないんだよ。守る事は出来てもな」

「他人を救った、なんて精神的な救済は自己満足だもんね」

「辛辣だなあ」

「化け物ですから」

ふふふ、と笑う彼女に苦笑して、少しだけ空を見上げる。
本当に、どうしようもなく、救えない。

守る為に生きながらえさせようとした、が…。

「カット」

「え？」

「で、化け物さんは何をしに来たのかな？」

「うん。ゆう君って猫好きかな？」

「嫌いではないよ」

「よかったあ。えっと、私の家に猫がいっぱいいる訳ですよ」

「猫が一杯か。鍋猫ならぬ茶碗猫」

「よかったら見に来ないかな？というか触りにきませんか？」

「どうして敬語…いや、まあいいけどさ」

猫か…。いや、前に出向いた時は一匹もいなかった訳だが…隠して
た？隠れてた？

まあ、何にせよ、少しだけ思考を別の方向に向けておこう。

10 相手の心を想う

また斜線を引く。

違う、違う違う違う違う。

求めていたのはこんな結果じゃない。

求めているのはこんな過程じゃない。

どこで間違えた？

いつから違っていた？

何を勘違いしていた？

否定、否定、否定否定否定否定。

真っ白の頭の中、自分は否定しか出来ない。

否定したからこそその結末。

いや、違う。

最初に肯定したのが問題だったんだ。

その肯定はもう、取り戻せない。

故に違うモノを用意した。用意して、ソレを全て否定してしまう。

ああ、愚かだ。



「にー」

「おお……」

思わず声が出てしまった。

ニャーではなく、にー。魚を奪って裸足で追いかけられた野良猫ではなく、目の前にいる小さな命。

そんな命が、必死で絨毯を歩き、飼い主でもあるすずかの元にテフテフ歩いてくるのだ。

可愛い、否。可愛いではない。『くあいい』。これはもう、きつと、『くあいい』と思わず声に出して、それこそ声を大にして言える。くあいいい。

「ただいま」

ひよいと子猫を抱き上げて、すずかは帰宅の挨拶をする。

当然ながら子猫は突然上がった視界に少しだけ戸惑い、いつもの飼い主の顔を見て安心したのか、にー、とまた高い声で鳴く。

「どうかしたのかにゃ？」

「にー」

もしかしたら、俺はココで死ぬのかもしれない。

—安心しろ、傷はまだ浅い

—まだ、まだだ、まだ大丈夫だ!!

—いや、もう、いいじゃないか

—にー

頭の何処かで必死にフィボナッチ数列の公式を演算しながら落ちて着く。

「…あ」

「ん？」

「……………こ、紅茶を淹れてくるね!!」

何かに気付いたように顔を真っ赤にして、しかし落ち着いて子猫を絨毯に下ろした猫娘は慌てた様子でパタパタと部屋から出て行った。

……これはダメかもわからんね。

「にー？」

そんな俺の方を向いて、不安そうに鳴く子猫を見て溜め息を吐いて苦笑する。

「まあ、ソレもいいか」

「にー」

しっかりと足に擦り寄って自身の匂いを付着させてくる不届き者を片手で持ち上げ、近くのソファに座る。

—持ち上げてる時はおとなしいよな

—暴れられてもどうにかなるが

太もものにゆっくりと下ろして、首をくすぐってやると気持ちよさそうに目を細める不届き者。

手を止めると、少しだけ間を置いて目を開きコチラを見上げる。

「にー」

なんで撫でないの？なでてくれないの？

というよりは、オイ、撫でろよ。と言われている様な気がする。

—おい、デユエルしろよ

—蟹は…猫は無理だっけか

—ネギ類は完全にアウトだったはずだが

「にー」

「……まあどうでもいいか」

とりあえず、すずかが来るまでこの『くあいい』生物を撫で続ける
としよう。

ああ、落ち着く。



やってしまった。

もう、どうしようもなく、恥ずかしい事を見せてしまった。

お湯を沸かせながら猛省する。

もうダメかもしれない。何が、と言われればわからないが。とにかく、私の中で何かが崩れていく音が聞こえる。

ついでにゆう君が今頃クスクスと思いき出し笑いをしている姿を思い浮かぶ。

いや、よく考えるんだ、月村すずか。彼はそんな事をする人間か？

答えは否だ。私を目の前にして笑う、そんな人物だ。最悪だった…。

「なんで言っちゃうかなあ……」

「にやー」

「ごめんね、今日はおやつもないんだよ」

「にやー？」

「にやー、ごめんね」

あれだ、もう開き直ればいいんだ。コレは私の生活の一部であつて、そういう事なんだ。

別に普段から、特に人に会ってる時とかに「にやー」とは言わない

訳だから問題なんてないんだ。

「人と会ってる時にしちやってるんだよお……」

いつそ泣いてしまいたい。いや、泣いたら泣いたでゆう君が心配してくれるから問題なんだけど。

ゆう君は心配……してくれるんだろうなあ。

そういつた悩みは私の中で吹き飛んでる。少し前、それこそあの雨の日より以前なら悩んでた事なのに……今はどうしてか悩むまでもない。

「少しは、成長したのかな？」

「にゃー？」

下を見れば、すっかり足まで見えてしまう身体は思考の端に投棄してしまい、何故が増えている家族たちが目に入る。

「お、おやつは無いんだよ？」

「にゃー」

「にゃー」

「にゃー」

ポットにお湯を注ぎ、カップにもある程度お湯を淹れていく。

そういえば、フアリンがクッキーを作っていた筈なのだけ。

「にゃー」

「にゃー」

「ニャー」

「これ狙いか……」

思わず溜め息を吐く。

ある程度はコチラの意図を汲み取ってくれる姉妹と家族二人。今足元でクルクルと回りながら陣取ってる家族数匹はそう上手くいく訳もなく、自分達にも何かくれるよね？といった風にコチラを向いている。

頑張ってる頭の中にある知識を呼び起こしてクッキーの材料と猫に対する影響を考える。

「にゃー」

「にゃー」

そうしてる間にも早くよこせよ、食べたいよ、と言う声が聞こえる様な気がする。

ノエル達の事だからある程度は考えてくれてると思う。思うのだけど、危ないモノは上げないに限る。

「にゃー…」

「にゃあ…」

「……」

そう、しょんぼりされると悪い事をしたような気がするんですけど…。これも君たちを思った結果なんだよ？

悩んで、仕方なく戸棚を漁る。漁って出てくるのはお馴染み、鯉節。ソレを見た瞬間の彼ら、彼女らの反応は、もうなんというか、狂喜乱舞というか、あのすごい落ち込み具合はいつたいどこへ行ったんだろう…と思う程だった。

幸いな事に、茶葉をポットにいれて持ち運ぶまでは彼らは邪魔をしないでくれた。

しないでくれたのだけ…。

「う、うーん…」

「にゃー!」

「にゃー」

「にゃー?」

「大名行列みたい…はあ」

後ろから列を成して私に着いてくる家族たち。それはもうすごい光景だった。ふと現れたお姉ちゃんが何かを吹き出した程すごかったらしい。いや、コレはもしかしたら気のせいかもしれない。

微妙にお姉ちゃんの笑い声がまだ聞こえる。これは絶対気のせいじゃない。稀に、お姉ちゃんと血が繋がってる事を凄く否定したくなる。

いや、まあいいかもしれない。私の「にゃー」発言を消すにはいい衝撃かもしれない。

思い出すと恥ずかしくなかって落ち込むので、思考の棚の上に置いておこう。もう忘れた、今、忘れた。

「お待た…：…せ？」
「にー」

私に返事をしたのは、私を出迎えてくれた子猫だった。

ソファで横になっていた彼の手を抜けて、私に近づいてくる。彼に動きはない。

机にトレイを置き、彼の顔を覗いてみる。

「寝て…：…る？」

「にー？」

「にゃー？」

どうやら眠ってしまったらしい。

また無理をしていたのだろうか…、いや、予想では無理をしているんだろう。

それこそ、私は彼ではないし、彼の気持ちは一切分からない。

でも、悩んで…：…と思っただから、招待したのだ。別にやましい気持ちは一切ない。一切、微塵も、ない。

でも、なんとなく。会った時と同じ印象に戻ったのだ。ただ希薄で…：…まるで消えそうな程透明で、綺麗すぎる印象に。

なのはちゃんにも、あんな事を言うし…：…。演技だからって、勘違いされちゃうよ？

なんて…：…私には絶対に言えない。

彼は止めた所で、たぶん無視する。それも、聴いてるフリをして、私の気付かない所で実行に移してしまう…：…気がする。

「相手の心を想う…：…難しいなあ」

「にー？」

「でも、頑張るにゃー」

「にー」

たぶん、応援されてるのだろう。そう思える。思っておこう。
とにかく起こさない様に、毛布とかをとってこないといけない。

「にゃー!!」

「にゃー!!」

「にゃあ!?!」

「ふあ!?!ガツ、な、なに!?!」

思わず出てしまった猫語はもう、途方の彼方へ放棄した、今、放棄した!

猫たちはゆう君の腹部にダイブしていく。大名行列が、我先にと。そんな城門役になってしまったゆう君は驚き、ソファから落ちたり、猫に乗られたり、メガネが外れたり。色々と大変そうだった。

大変そうだったけど、それが少しだけおかしくて。

「ふふ…あはは…、ツク、ふふ」

「……」

我慢しようとした笑いが、口の端から漏れてしまう。

ジトー、としたゆう君の視線も、それも面白くて、

「ご、ごめふふ、ふひっ、ごめ」

「アー、もういい。笑いたければ笑えよ」

「ごめ、ふふふふあはは、ふふふふふふふふ」

「お前らのせいで笑われたぞ、どうしてくれる」

「にゃー」

「ふふふふふふ、ごめんなさい、だってふふふふ」

「まあ構わないさ…笑いすぎじゃね?」

「ごめ、ふふふふふふ、ふひ、ふふふふ」

「むう…」

少しだけ面白くなさそうにしているゆう君。その頭の上にあの子猫がまるで陣地を守る武将のように陣取ってる事は…恐らく彼はまだ知らない。

どうやら、私はしっかりとお姉ちゃんと血が繋がってるようです。

11 いい夜を

やはり、彼は馬鹿だ。

少しながらも大切に想ってる人間に、嫌われようとしている。

普通は嫌われた後で、自身の考えを改めて、その人間を嫌うというのに。

それでもカレは、彼女を心配して、自分を犠牲にする。

犠牲にして、カレが得るものは何もないのに。

もしかしたら嫌われたままかもしれないのに。

そんな問を彼にすれば、相変わらず真っ直ぐ床を見ながら溜め息を吐かれた。

必要だから、行動する。

それだけを言っつて、彼はまた地面を見つめて手を動かす。

やはり、という言葉はおかしいのだけれど。

やはりワタシの宿主はオカシイ人間ばかりだ。



「……お集まり頂き、感謝感激」

「こんな夜中に呼び出しなんて、いい度胸ね」

「今更肌の調子を気にする年齢でもないだろ」

「この年齢だからこそよ。ぶち殺すわよ？」

「まあ望むところだけど、少し待ってくれ」

「……あなた、少し変ね」

失礼な。俺はいつも通りだ。

——全くだ

「ツキビト、私達まで呼んだ理由はあるのか？」

「そうですよ。はやてちゃんにも黙ってだなんて」

「はやてにはバレたくない事だからな」

「……真剣な話か？」

「木刀や竹刀の話をする気はないな」

そう言う『夜天の』は溜め息を吐いて壁に凭れる。

―いやはや、冷たいねえ

―夜だからだろ

―タイトスカートだから冷えてるんじゃない？

―ふむ、触手でセーター的な

―おいおい、ふざけるんじゃないよ

―既に理論は完成しているさ

カット。

「……………いいかしら？」

「ん？」

「彼女たちは？」

「ロストロギア」

「そんなアバウトな表現で…いえ、まあどうでもいいわ

「手間が省けた」

「えっと、」

「ああ、この人は……………ふむ、どう言えばいいんだろう」

「コレのプロテクト者よ」

「保護されるような人間でもないがね」

「保健所に送るわよ、駄犬」

「ウー、ワン。まあどうでもいい」

「夕くんのお母様…でいいのかしら？」

「よくはないさ。フエイトの母親だ」

変な勘違いのまま話を進められると困る。

―特にシヤマルさんが勘違いすると説教が

―色々バレる

―ああソレは嫌すぎる

―癒しすぎる？

カット。癒しにもなりはしない。

「で、三人に集まってももらった理由を話そうと思う」

「さっさと話さない。大事な睡眠時間が削られてるのよ」

「ん、じゃあ、本題。俺、そろそろ死ぬから」

「……………もう一度言ってくれるかしら？聞き間違いかしら？」

「年だもんな、仕方ないね。俺は死ぬよ。たぶん、一ヶ月内に。はやけりや…明日にでも?」

「ちよ、ちよつと待つててください!」

声を荒げて制止させたのは、湖の騎士。

―話せと言ったり、待てと言ったり

―面倒だな

―ああ、面倒だ

「私が上げたのは咳止めですし、あの時のチェックでは異常なかったじゃないですか!!」

「うん、そりゃあ隠蔽したもの。それこそいつもよりも健康体だったと思うよ、データ上」

「そんな……」

「アナタは私を助けて、自分は死ぬ気なの?」

「アンタを助けた気はねえよ。勝手に助けられたつもりなんだろう? 虚数空間のデータ欲しかっただけだし、フェイトとの約束だし」

「酷いツンデレね」

「ツンドラかもよ」

「は、はやてちゃんに言います! 絶対に言い、」

「まあ落ち着けよ、湖の騎士。まだ本題を喋っただけだろう?」

左手を伸ばし、シャマルの身体を縛る。

―むう、なるほどなるほど

―女体とは一人一人違うものなんだなあ

―三人目になってくると、中々

―このままぐにゅぐにゅしても、よかですか?」

カット、ダメです。

「オーケー、落ち着いた所で前フリを話そう。アンヘルの侵食が思ったよりも早い」

「ッ、」

隠蔽魔法を解いて、首元まで忍び寄っている黒い線を見せる。

服の下は、もう言わずもがなだ。

「ツキビト、」

「ああ、ようやくその『憑き人』ってのがわかったよ。アイツとも少しだけ話した」

「アイツ？」

「アンヘル」

「ロストログアに意思が…ってすぐ後ろにも居たわ」

「まあ、アイツ…アンヘルと少しだけ話して、約束した訳だよ」

「……彼女はなんと？」

『ワタシを殺して』、だとき。滑稽すぎる約束だよ、ホント」

「……ちよつと待って、いいかしら？」

「はい、どうぞ、プレシア様」

「彼女つてのがアンヘルなのは、わかったわ。で、その彼女が死にたがってるのに、アナタが死ぬ意味は無いんじゃないの？」

「アンヘルを殺すのに必要な術式は俺が殺される事で成り立つんだから仕方ないね」

「それで、アナタはいいの？」

「いいも悪いも、そうなつてんだから仕方ないさ」

「す、すいません、いいでしょうか」

「ああ、悪い。解放するわ」

「助かります……」

シヤマル先生を解放して、触手をしまう。

—もう少しだな

—もう暫くは堪能できたのでは？

—落ち着け、落ち着いてゆつくりと忍ばせるんだ

カット。

「で、お三方には俺が殺された後の処理を色々任せようかなあ、とか」
「……遺産なんてあったの？」

「知的財産なら少し。まあその辺りは全部譲るよ。ついでにシ体も持っていてくれるとありがたい」

「ソレは嫌よ」

「まあ……テキトウに頼むわ。で、処理つてのはコレだ」

「……コレは」

「感応系術式。まあ自分が対象に入るとか、対象を自分に入れるとか、そんな高度な物じゃなくて対象の夢の世界に別の対象を入れるっていうモノな」

「…で、これでどうしろって言うのよ」

「眠り姫を助けるのに必要になるだろうから、譲つとく」

「眠り姫？」

「悪い魔法使いに悪夢に落とされるだろう、眠り姫さ」

きつと、そうなる。いや…そうする。

—当然だ

—万全に、万端に

—備えあれば

—嬉しいな？

カット。どうでもいいさ。

「…やりそうな事は理解したわ。最低だけどね」

「察しがよくて、幸いです」

「知ってる？全部救おうとするのも、全部自分の責任にするのも、傲慢な人間なのよ？」

「残念ながら、よく知ってるよ」

だって、傲慢だから。

—だからこそ、死ぬべきだ

—だからこそ、殺されるべきだ

—だから、殺すべきだ

カット。

「…あのー」

「ん？シャマルさんなにか？」

「どうして私が呼ばれたんですか？はやてちゃんに言っちゃう可能性を考えるといなかったほうが」

「ああ、うん、もしも…まあ出来る限りは無事に済ませるんだが、もしもの話」

「はい」

「悪い魔法使いが王子様を両断し続ける事があってもくつつけるから

いいんだが、そんな王子様が眠り姫を助けるのに邪魔をしないでほしい訳だ」

「両断してくつつけるって……粘土じゃないんですから」

「そうだな。まあ、念の為。備えあればって言うだろ？」

「そうですけど……」

「保険だよ、保険」

そう、コレは単なる保険。出来ることならば、全てを俺で終わらせたい。

それが一番なのだ。たぶん。

「……わかったわ」

「ん、よかったよ。これで思い残すことは、ってな」

「私は許さないわよ。勝手に死んでみなさい、蘇らせて、絶対に説教してやる」

「閻魔様の元にダツシユするでしょう」

「そこまでなのか？」

「雷様を怒らせると閻魔様なんて目じゃないんだ。きつと裸足で逃げ出すね」

「逃がさないわよ」

「ほら」

「ふむ……」

どことなく納得したらしい『夜天の』が頷く。どうしようもなく、納得出来てしまうのだから仕方ない。

そんな閻魔様も裸足で逃げ出す雷様事、プレシア様がブツブツ言いながら俺の部屋から出ていき、それに続くようにシヤマルさんが溜め息を吐きながら出ていく。

壁に凭れる事をやめて、歩き出す『夜天の』がふとその足を止める。

「私も、お前が勝手に死ぬ事は許さんぞ」

「…それは怖いな」

そう言って彼女はもう一度足を動かし始める。

「ああ、すっかり忘れてた」

「なんだ？」

「アンヘルから、伝言だ。『いい主を持ったね』だとさ」

「……お互い、とは付けられないのだな」

「自分を大切にしない主はお気に召さないらしい」

「…そうか、彼女らしい」

銀髪の夜はクスリと笑って扉を開く。

「ではな」

「ああ。いい夜を、リインフォース」

「……いい夜を、夕」

ボタン、と扉が閉められて、部屋の中が静かになった。

そんな中俺の吐いた息の音がイヤに耳に入る。

「……………はあ、さて、殺される準備でもするか」

ゆつくりと、しかし、しつかりと。

俺を殺す足音は……たぶんスキップか何かをしながら寄ってくる。

というか、歩いてくるより幼女としてはスキップしてくれる方が殺さ

れてもいいんじゃないかなあ、とかなんとか。

12 中々にカナカナ

既に『答え』の出ている式を繰り返す。

それこそ、まるでプログラムで設定された『答え』がずっと出てくる空白の式。

どれほど難しい公式を当てはめたところで

どれほど簡単な足し算を当てはめた所で

ずっと『答え』は変わらない。

『答え』を変える事は出来ない。

自身で決めた筈の『答え』が気に食わなくて

また式に斜線を引く。

愚かにも、『答え』はずっと決まってる筈なのに

肯定から生まれた『答え』。

その『答え』を否定し続ける式。

それでも自分は否定する事しか出来ないのだから。



「あれ？ユウちゃんが私達の家に住るなんて珍しいね」

読んでいた資料から少し目を離して声の主をチラリと見る。

鏡合わせの様に手を繋いだ二人に少しだけ苦笑して肩を竦める。

「読みたい資料があつてな。迷惑か？」

「ううん。大丈夫だよ」

「夕御飯作ってくれたら許したげる」

「アリシアあ…」

「ふむ、では腕に縊りをかけよう」

「やった！」

両手を上げて喜ぶアリシアとその手と一緒に片手が上がってしまつたフェイトを見て、次は隠さずに苦笑する。

—可愛いな

—愛でたい

—もうロリコンでいいや

—ロリータコンテスト

—お巡りさんと呼ぼう

カット。思考が何処かへ飛びすぎた。

「で、何を読んでるの？」

「ん？アー……とある計画の原本、正確にはその写本とでも言うべきか」

「ふーん……だつてさ、フェイト」

「なんで私に振つたの!？」

「ふふーふ、そういうことだよ。ねえユウちゃん」

「……まあ、そういう事だ。諦めろ、フェイト」

「ユウまで!？」

「なんなら、今はいないアルフとプレシアの了解もとつてみるか？」

「そこまでしなくていいよ!!」

プンスカ、と怒るフェイトを見ながらクスクス笑う俺とアリシア。

読んでいる内容は『F A T E』の作成方法。正確に言うなれば、『フェイト』の出来上がり方を読んでいたのだ。フェイトには、あんまり言いたくない。

そういう事を珍しくも察してくれたアリシアの機転により、プンスカ怒っていたフェイトは自室へと移動した。

「…なんで今更そんなモノを引っ張りだしてるの?」

「必要だからに決まってるだろ」

「……誰かを蘇らせるつもり?」

「蘇らせる……なんて考えてないさ。出来るのなら既にしてる」

「そうだよ。私を蘇生させたのはユウちゃんだし」

「俺じゃないさ。アレはプレシアの御蔭だよ」

「お母さんも、ユウちゃんも、すごいよ……本当に」

少しだけ下に視線を向けて溜め息を吐き捨てられる。

—落ち込む内容なんざないぞ？

—泣かせたか

—やーい!!なーかしたー!!

「ナーガしたー!!」

「神様が下敷きに

カット。蛇皮の下敷きなんざ使えもしない。精霊を殺すのも気が引ける。」

「同じ世界を見て、ようやくどれだけ遠いかわかったよ」

「手を伸ばせば届く距離だろ」

「そっちからは簡単に伸ばせるよ。こっちから伸ばすのは、ちよつとね」

「……そんなモノか?」

「ユウちゃんにもそう言う時期があつたと思うんだけど……?」

「アー……まあわからんでもない。というか俺でも届かない存在はいたな」

「ね?」

「確かに、追いつけないな」

「ずっと近くに居たはずなのにカット。」

「ずっと師事できる筈だったのに

カット。」

「ずっと先にいる筈だったのに

「カット」

「え?」

「いや。まあ、なんだ、目標があつていいことじゃないか。それこそ目に見える目標で」

「そういうモノなの?」

「知らん。目標が先にありすぎて、学んでも学んでも足りない俺に聞くな」

「それは……途方もないね」

「途方に暮れたいね」

途方に暮れる事が出来たなら……いや、途方に暮れる事など許されない。

「思考を停止させるな」

— 考えろ

— 考えろ

— 考えろ

— ソレが彼女の教えだろう

ああ、そうだ。途方に暮れるならば、ソレは死ぬ一瞬前だけでいい。「とは言っても、その目に見える目標が同じ年なんだけど……」

「近くて、遠いよ。ふむ、亜空間に目標を設置だなんて、中々にカナカナ」

「ヒグラシの鳴き声は関係ないよ」

「語呂はいいだろ」

「そういう問題？」

「そういう問題」

「あつそ」

そうしてアリシアはクスリと笑って、息を吐く。

— 吹っ切れたか

— どうだろうか

— 偽りかもしれんぞ

まあそれならばソレで構わんさ。

ふとアリシアの視線が俺の少し上で止まる。その視線を辿れば恐らくフェイトとの部屋があるのだけど。

体ごと捻り、後ろを向けばフェイトが扉からコツチを覗いていた。

「……」

「……」

「……」

沈黙。

いや、暗い感じではない。どちらかと言えば三人全員が呆然としているというか。

そんな中、フェイトがひよっこりと顔だけを出す。

「……えっと、難しい話は、終わった？」

「……」

「……ッアツハハハハハハ!! フヒヒヒヒヒヒヒ!!」

「アリシア!!笑わないでよ!!」

「ムリッヒヒヒヒヒ!!」

「笑いすぎだろ……ふひ、」

「ユウ!!」

またプンスカと怒り出すフェイト。

数分話していた俺達とは違い、フェイトは一人だった訳で。その数分でさえ寂しくて、でも怒った手前出ようにも出れなくて。

結果的に難しい話を終わるまで待っていたのだろうけど。その姿を思い浮かべると、なかなかどうしてシニールに写ってしまった。

—一人で悩むフェイトたそペロペロ

—出ように出れないフェイトたそカワユス

—もうロリコンでいいな

—もうロリコンだ

「随分と賑やかね」

「おかえり、お母さん」

「母さん!!聞いてよ!!」

「ええ、アナタの言葉なら一から全までは聞いてあげるわ」

「プレシア、荷物どこに置けばいいのさ」

「部屋にでも置いておいて」

「荷物持ちとはご苦労だな、アルフ」

「正確には研究の手伝いなんだけど……やってる事は間違ってる分言い返せない!!」

「アリシアとユウが虐めてくるの」

「アリシア、可愛いフェイトを虐めなくなるのは分かるけど加減を覚えなさい」

「はーい」

「ガキ、焼き殺すわよ」

「あれ?なんだろうか、この扱いの違いは……」

「ダメだよ!お母さん!夕飯が無くなる!」

「なんだい、今日はユウが料理するのかい?」

「そういう事になってる」

「安心しなさい。コイツが亡くなっても、私が夕飯を作るから、無くなるわい」

「じゃあ大丈夫だね！」

「なんだい、ユウが料理されるのかい」

「そういう事になりそうだ」

これは、笑ってる場合ではないかもしれない。

「で、研究つてのは？」

「アナタが出した魔法の解析よ。殆どは」

頬を上気させながら、一口ワインを飲み込んだプレシア。数分前になるが、双子は布団で眠っている。

—よし、添い寝しよう

—残念、番犬がいる

—省エネ状態だろ

—なんだ問題ないな

カット。目の前に問題がある。

「そいつはご苦労なこって」

「死ぬなんて、嘘なんですよ？」

「さてね。どうだか」

肩を竦めて、睨みつけてくるプレシアをはぐらかす。

「どうしても、アナタがそこまで死にたがるか分からないの……」

「……似たようなモノだよ、アンタと」

「……なら似たような結果に出来るんじゃないの？」

「プレシアはアリシアを試験管の中へ、俺は自身の中に入れてしまった。違いはそれだけさ」

「それだけで、そこまで違うのね」

「まあ違いを言っただけ色々出てくるんだけどな。コレが全ての原因で誤じゃないし」

「少しだけ不貞腐れてみる。」

「どうしようもない、どうする事も出来ない。」

「……原因の一部に、ソレは？」

「アンヘルは関係ないさ。いや、どうだろうか？」

「どうなのよ」

「関係ない、とは言い切らないが、関係はある、とも言えない」

「煮え切らないわね」

「煮え切ったら鍋に穴が空くだろ」

「そうね。新しく水を入れるのは面倒ね」

「そうして、また一口。」

「ねえ、一つだけお願いしていいかしら？」

「残念、今はやめてくれ。コレが終わったら何でも聞いてやるさ」

「ソレが終わったら、アナタは死んでるんでしょ？」

「俺は死んでるだろうな」

「……まあ死なせないからいいわ。全部終わってから」

「怖いな、まったく。まあ死んでなかったら聞くさ」

「絶対よ？それこそ、逃げるのは許せないから」

「はいはい、酔っ払いの戯言程度に聞いてやるよ」

「酔って無いわよ」

「寄ってきてるから言ってるんだ」

「アナタが寄ってるんでしょ？」

「年齢を、いや、ホントすいません何でもないです」

「先程の睨みではなく、笑顔に変わったプレシアから視線を外す。」

「今、目を合わせたら死ぬ。確実に、死ぬ。」

「まあいいわ。お酒もこれだけにしましょ」

「あんまり飲み過ぎるなよ」

「呑まれない程度なら構わないでしょ？」

「健康体になったのに……」

「健康体になったからこそよ」

「そうですか。」

「諦めろよ」

「諦めろ」

諦めてしまおう。まあ付き合わされない限りは、諦めたい。

13 愛の告白は勘弁な

沢山の人を見てきた。ソレと同時に沢山の人を見捨てた。ワタシという存在が永遠という生を得てから、全てを受動してきた。受動せざるを得なかった、と言う方が正しい。

ワタシという存在を知らずに見捨てた人も存在を知っていて見捨てた人も、全て覚えている。

もちろん、その人が殺した全ても。正しく、正確に、確かに。

だからワタシは今の宿主に願ってしまった。

どうせ叶えられないと思って。

この呪われた運命を終わらせてほしいと。

永遠とも言えるワタシを殺してほしいと。

所詮は、出来ない事。

ワタシを殺すなんて事は出来ない。

殺した所で、ワタシが暴発して全てを飲み込む。

そんな事を知っている頭のイイ宿主。

知っている筈の馬鹿な宿主。

底抜けのお人好しな宿主。

優しすぎるから、背負いすぎて壊れてしまったご主人様。

彼は、ワタシを殺すつもりだ。



「……ッ……ハア……ハア……」

目が覚めた。窓から見える景色はまだ暗い。

時計を確認しても、午前二時を過ぎた所だ。

「……クソッ」

背中を這う嫌な汗と、舌が口に張り付き、身体が水を求めている。

どうしても寝付きが悪い。いや、寝れない。寝たとしてもすぐに起きてしまう。

「……オレが、殺した……」

わかっている、ようやく自覚出来てしまった事実を口から出す。

唾も出ない口の中の何かを必死に喉の奥に押し込む。

部屋から出て、キッチンに向かう。

冷たい床にペタリ、ペタリと足が着き、ギシギシと床板が鳴る。

ボロい、という訳じゃないけど、それでも暗い廊下にはよく響く。

キッチンに到着して、グラスの中に水を注ぐ。そのまま何も考えずに喉の中に水を通す。

グラスを置いて、ようやく息を吐く。どうにか落ち着いた……と思
う。

「光……大丈夫？」

「……大丈夫だよ、母さん」

「そう……最近寝れてないようだけど……悩み事があるなら、」

「大丈夫……大丈夫だから、気にしないで」

「……もう遅いわ。すぐに寝るのよっ」

「うん……」

この世界の母に心配させてしまった。

思えば、この世界に来て一番迷惑を掛けてるんじゃないか？でも、それでもオレの母ではなく、光の母だ。

それはオレの母という事であり……。

「ダメだ。なんでだよ……」

オレはオレで、オレは光で、光はオレで。それが現実だと、今更に理解した。

ここがオレにとっての現実で。光にとっての現実でもある。

そんな現実で、オレは沢山の罪人を殺した。無差別に、無作法に、無感情で。ただ武器を射出させた。

その中に、アイツの……憎たらしいアイツの親が入っていた……らしい。

はやて達から聞いた話で。オレしか無い力だから、事実だろう。

唐突の事で、頭が白黒していた。理解したくないと拒んだ頭の中で、オレはどうしていいかわからなかった。

当然の行動も、当然だと想っていた行動も、オレには分からない。
わからない。

だからこそ、だから、はやて達の言う通りにすぐに謝ろうとした。
お前の母を殺したのは、オレだ。

そうアイツに言うだけだった。

ニコポやナデポを使ってしまえば、ただ言うだけの行為な筈なのに、オレは戸惑って逃げ出した。

その日から、夢の中でアイツがオレをずっと責めてくる。

お前が殺したんだ！

お前の両親を殺してやろうか!?

お前が!!お前が!!

ヘラリとしたいつもの笑いじゃなくて、まるで憎しみに顔を支配されたようなアイツが容易く想像出来て、オレは何度も起きてしまう。

もしも……もしも、自分の両親が殺されたら?その犯人が目の前に居たら?

はやての質問が頭の中に蘇る。

当然、その場で殴り殺してしまうだろう。絶対に。

それだけの罪を、オレは犯した。

オレが、オレが、オレが……。

なら、オレは殺されるべきなんだろう。

ソレで許されるかはわからない。ソレでも、オレは、

アイツに謝ろう。

許されるなんて思っていない。アイツがオレを殺すんだったら、ソレも受け入れてやる。

ニコポもナデポも、使わない。それこそ、オレが許せない。許されても、許せない。

オレは、決めた。

母さんが起きる前に学校へ向かう。
少しだけ寒い道路、そんな中、独りだけ歩く。
ジャリジャリと靴とアスファルトが何度も鳴る。
いつもなら、隣になのはが居る筈なのに、今日はいない。
なのはの隣には、今日から誰もいない。
ゾクリとした。

オレのいない世界に、オレという存在がいなくても回る世界に。
思わずその場に座り込んで、出てくる涙を必死で拭う。

死にたくない。死にたくない。死にたくない。

でも、オレはアイツに殺されなくちやいけない。

死にたくない。

死にたくない。

死にたくない!!

決意が揺らぐ。

グラグラと意識が揺れる。

どうしようも無い現実がどうにかした理想をガラガラと壊してい
く。

前まで生きていた理想の世界が、今から生きる現実の世界に。

誰が、誰が原因だ？

アイツが、アイツに殺されなければ。

「違う!!」

ブロック塀を殴る。

右手に痛みがじんわりと響き、喉が裂けるように痛い。

違う、違う違う。オレが、オレが一番悪いんだ。

オレが、オレが。

ようやく着いた学校には、アイツとすずかが居た。

これだけ早く来たのに、すずか達はそれよりも早い。

「ん、スメラギか。珍しいな」

「おはよう、ライト君」

「あ、…ああ」

まるで当然の様に挨拶をして、それを返すオレ。

そんな資格、オレには無い。目の前にいるコイツに挨拶をする資格

すら、オレには。

「ちよつといいか…」

「別に構わんよ」

「一緒に来てほしい」

「…ここじゃダメか？」

「人のいない所の方がいい」

オレが死ねる場所なら。コイツが殺せる場所なら。

どこでもいい。

「…愛の告白なら勘弁してくれよ？」

「そんなのじゃねえ…そんなんじゃ…」

「ふむ……」

「ゆう君、いつてらっしゃい」

「ああ…ふむ、このままだと再来年辺りに薄い本が厚くなるかもしれんな」

訳の分からない事を言ってる後ろの人間をどうにか連れ出して、オレは屋上に向かう。

「で、また屋上か」

「また？」

「いや、こつちの話だ。で、本当に愛の告白は勘弁してほしいんだが」

「罪の告白なら……いいか？」

「教会にでも行つてこい。残念ながら贖罪は請け負つてない」

「お前じゃねえと!!意味がねえんだよ!!」

思わず叫んでしまった。

そんな叫びに少しびつくりしたのか、きよんとしたアイツの顔が見える。

「そんな泣きそうな顔をするなよ。聞いてやる。聞くだけだぞ？」

「それでもいい。それでも……それだけでも」

「では聞こうか。迷える子羊よ。汝の罪を告白しなさい……なんてな」

「……オレは、」

息が詰まる。

舌が乾いて、うまく言葉が出ない。

何度も空気を飲み込んで、必死に声を出す。

目の前でずっと待っているコイツに罰せられる為に。

「お前の……お前の住んでいた、住んでた世界を攻撃したのは、オレだ……!!」

言つた!

言えた。これでいい。全てが終わる。これでオレは許される。

頭を下げて、どうしても言いたかったソレの後は言葉が、罪が、謝罪が、溢れて口から出る。

「謝つて許される事じゃないのはわかつてる!!それでも、謝らないといけないと思つて!!オレの行動が、お前の人生を狂わせたんだと思う……!!」

「……」

「ソレに、ソレにあそこには、お前以外にも」

「……はあ」

小さな衝撃が頭を襲う。

ソレはまるで誰かが叩いた様な、小さな衝撃。

思わず頭を上げると、どうしようもなく複雑そうな顔をしたアイツが目に入る。

「まあ、落ち着けよ」

「でも!!」

「落ち着け。少しは被害者側の要求も聞いたらどうだ？」
「ッ、」

オレは息を飲み込む。

どうしようもない、罪。コイツが許してくれるかは分からない。わからなくても、それを受け入れないといけない。

「落ち着いたか？」

「…ああ」

「ならいい。話は終わりか？」

「…ああ、ああ」

「ふむ、なら教室に戻ろう。夏とはいえ朝はまだ寒い」

「え？ちよ、ちよつと待てよ!!」

「ん？どうした？罪の次は愛の告白か？コレも聞くだけには構わんが」

「違エよ!!どうしてそうなるんだよ!!他にあるだろ!!、こう…お前を殺すだとか!!」

「ないな」

「ねえのかよ!!あるだろ!!」

「…何か勘違いをしているようだな」

「勘違い？」

オレがコイツの住んでいた世界を攻撃した以外に勘違いする内容なんてないだろ。事実なんだから。

「お前が俺に謝るべきは、本を台無しにしたアレだろ、普通に考えて。まずそこからだ」

「…ごめんなさい」

「うむ。別の本を進呈しろ。それで許す。さて、話は終わったな」

「終わってねえって!!」

「なんだ、また何かしてたのか？流石にそこまでお前の贖罪に付き合う気は無いぞ？」

「もう罪なんて…」

「あるのか」

「ねえよ!!」

たぶん。

今思い出すと、罪ばかりを積み重ねている。ような気がする。

「オレはお前の故郷を潰したんだぞ!？」

「あーうん、スゴイネー」

「真面目に聞けよ!!」

「ムキになるなよ。ソレに俺に謝るなよ」

「……なんでだよ」

「殺した人間に謝るならわかるさ。生きてる俺に謝っても、ソレはお前の自己満足だろ?」

「……でも」

「だから、俺はお前を許すことも、お前に罰を与える資格なんて持っていない」

「それじゃあ!!オレはどうしたらいいんだよ!!」

「抱えて、悩んでろ、ずっと」

アイツはそう言う。

まるで、ずっと自分がしているように、当然の事のように。ソレがどれだけ難しいか知っている様に。

どれだけ、苦しいか知ってるみたいだ。

「……ふむ、もうそろそろか」

「何がだ……」

「いや、こつちの話だ」

アイツはニヤリと笑って、口を開く。

「まあお前の気が済む、と言ってはオカシイが俺の気が済む、と言ってもおかしいな……」

「なんだよ……」

「一度お前と全力で戦いたいと思ってたんだが……アーいや、違うな」

「ホントにどうしたんだよ」

「そうだな、こうだな。」

勝てば正しいんだ!!全て!!」

「おい、どうしたんだよ」

「まあ気にするな……気付いたお前にはチャンスをやろう!!俺に勝てば俺が全てを告白してやる!!騙っていた事も!!全て!!」

「……」

途端に演説を始める目の前の奇人を見てしまう。

どうしてこうなった……。

「……ふむ、まあこんなモノか」

「何がだよ」

「そういえば、お前に言わなくてはいけない事があった」

「なんだよ……」

「俺の母を瀕死に追いやったのはお前だ」

「知ってるよ!!」

「知ってたのか……まあいい。ソレに関しては償ってもらおう」

「……ああ、殺せよ」

「ただ殺すだけではツマらん。お前と殺し合いをしたい」

「は?お前に得がないだろ」

「お前に勝てば管理局を潰すのに必要な力量がわかるだろう?」

ニヤリとふてぶてしく笑ったコイツの考えは、やはりオレにはわからなかった。

14 殺しアイ

殺されたい。

なんて思い始めたのはいつのことだっけか。

この白い空間を埋め尽くす程度に式を書いたが失敗し。

この白い空間には小さい文字の答えには行き着かない。

不甲斐ない。

意味がない。

意図もない。

たった一度の肯定が、那由多も越える否定に到達した。

全て、肯定した結果に繋がってしまう。

全て、肯定したくなかった結果に繋がってしまう。

誰か達の想いをずっと聴いていた。

ソレも無視して式を書き続けていた。

その想い達を全部抱えて、

その重い死体を全て抱えて、

その思いを叶える為に。

俺は彼女を殺す為の一手を投じなければならない。



「なんだ、場所の指定もさせてもらえらるとは思わなんだ」

「こんな辺鄙な場所でもいいのか？」

「こんな辺鄙な場所の方がいいのさ」

草一本生えることのない荒野。

地平線まではずきりと見えている。

—ああ、懐かしい

—懐かしいと思える程度に口惜しい

—本当に

「七年…いや、八年ぶりか」

「ん？」

「いや、なんでもないさ」

頭を横に振って思考を戻す。

―帰ってきた、なんて思うな

―ココを壊したのは誰だ？

―お前に資格などない

―権利などない

―そうだ。当然だ。

「ではルールの確認をしよう。と言ってもルールらしいルールなんて物はない」

「どういうことだよ」

「死ぬば、終わる。もしくは邪魔が入れば終わるさ」

「邪魔？」

「管理局にはわかるように、この場所に転移したんだ。どうせ見てるんだらう？」

少しだけ上を向いて、解析でエラーが出ている所を向く。

そこには見えないし、解析も出来ないが、何かはある。

―そこだけエラーってのは

―まあどうでもいいさ

―見られている方が都合がいい

カット。

「先に言うが、手加減などするなよ。したら消し飛ばすからな」

「わかってる……と、思う」

「なんだ、自信がないのか？」

「お前を殺したら……って思うと」

「なんだ、そんな心配か」

全く、目の前の馬鹿は何を思っているんだか。

―馬鹿らしい

―ああ本当に思考が足りていない

―思考しているのか？

―さて、常に考えている俺にはさっぱりだ。

「殺したなら殺したで構わんさ。生憎、殺されてやる、なんて自殺紛いの事は出来ないんでな」

「？」

「まあいい。ではスタートを決めよう」

手にコインを持ち、それをスメラギに放り投げる。

片手で綺麗にキャッチしたそれをマジマジと見るスメラギに少しだけ苦笑してやる。

「なんだ、五百円玉がそれ程珍しいか？俺に勝てればやるよ」

「いらねえよ……」

「そうか……古典的だが、そのコインを弾いて、地面に付けば攻撃可能、と在り来たりな始まりにしよう」

「ホント、在り来たりだな」

「ちなみに、何度も言うようだが、模擬戦ではなく、コレは殺し合いだからな」

一応、釘を刺しておく。

—当然だ

—さあ、戦闘に思考を向けよう

—空間解析開始

—肉体強化開始

「じゃあ、行くぞ」

「ああ、いつでもどうぞ」

スメラギがコインを弾く。

高い音が耳に響き、目の前のアイツは緩やかに構えていく。

コインがクルクルと回る。

一回転

二回転

三回転

四回転

山なりに弾かれたコインが山頂に到達して、あとは地面に向けて落ちるだけとなった。

落ちる速度は重力に従い、加速度を増す。

—さあ、仕掛けよう

俺はコインが地面に着く前、それこそ山頂に到達した時点で一歩目

を踏み出す。

ちようどアイツとの距離を移動の二歩程度に収めていたのはこの為。

「え?」

アイツの間抜けた声が聞こえる。

当然だ、どうせ、コインが地面に着いたら開始、というのを読み違えたのだろう。

しっかりと浮いているコインを下に叩きつけて、更に一步踏み込む。

コインが俺の手によって加速し、スメラギの目の前、それこそ懐に入る頃に地面と接触した。

「――ガッ」
鳩尾に深く突き刺さった肘。アイツの肺から酸素が意図せずに出ていく。

グルリと腰を回転させて、片手を地面に着く。そのままの勢いを保ち、踵をスメラギの頬に直撃させた。

「――ガッ」

勢いに負けて、スメラギが地面を二転三転して転がっていく。

―どうやら死んでないようだ

―惜しい惜しい

―さてきて、どうするかね

―どうもしない。それこそ、立ち上がるのはわかっている事だ。

「どうした、スメラギ。まさかコレで終わり、なんて事はないんだろう?」

答えはない。

―動作はしているが

―肋骨が刺さったか?

―否、それ程強く打ち込んではいない

「げほ、げほ、卑怯だぞ!!」

「卑怯? 殺し合いと言ったはずだ。油断したヤツから死ぬ。当然の事だろ」

「ルールはどうしたんだよ!!」

「ちゃんと守っただろう? コインが地面に着いてから、お前に攻撃した。コインを叩きつけるのは禁止、とは言っていないだろ」

「ッ!!」

「まあソレも終わった事だ。俺はお前を殺すよ、スメラギ」

—キヤー!!ユウクンカツコイー!!

—サイコー!!

—こちらユウ、目標を駆逐する

—お前を、破壊する……!!

畜生め。解析魔法を解くワケにはいかないから思考が纏まらない。

「本気で、オレを殺す気か……!?!」

「……今更か?…いや、今からか?」

「だって!!お前は、オレを許したんだろ!?!」

「許す、なんて俺には出来ない、と言ったはずだが?」

ゆっくり一歩踏み出す。

倒れていたスメラギは少しだけ後ずさる。

—まるで屠殺される豚だな

—家畜の方がまだいいさ

—喋る人間なんざ、食料にすらなりはしない

—全くだ。本当に、面倒だ。

「第一、お前は俺に殺されるつもりだったんだろ? 丁度いいじゃないか」

「オレは……だって、」

「ツマラナイ戦いだったよ。目標攻略の目算にも成りはしない」

「死ぬ……オレが……?」

「ああ、死ぬよ、お前は。さようなら、スメラギ」

赤黒い剣を編み込む。見た目だけなら切れそうだが、残念な事に、そこまで刃先は鋭くないし、鈍器としても二流のハリボテだ。

—さあハツタリはここまでだ

—さあそろそろ自覚しろ

—ここが現実だ

「う、うわあああああ」

ようやく、と言つていい程に鈍い理解に内心溜め息を吐きながら、口だけはニヤリと嗤つてやる。

目の前には彼の英雄王と同じ能力を持ちながら、無様に逃げる庶民。

― 恥辱の極みだ

― ああいつそ殺してしまおうか

― 否、それでは間に合わない

― 応、間に合わせよう

「逃げるか。ソレもいい。さあ逃げろ、追いつかれるなよ？追いつけばその出来のいい身体を出来の悪いプラモデルみてえに解体してやつからよおおおおおおおお!!」

剣を下に向けて突進する。

ソレと同じ様に、スメラギの逃げる速度も増す。まあ追いつく気がないのだけど。

― ショタと追いかけてっか

― オジサンと追いかけてっか？ハアハア

― ショタコンはお帰りください

追いついた所で解体出来るような刃物は持ち合わせてない。

「逃げるだけかあ?!ソレでお前は俺の星を壊したのか?!容易いな!!容易すぎるぞ!!スメラギイイイイイイイ!!」

― 声帯に炎症

― 治癒

― 叫びすぎだ

― 危機感を煽ろう

振り向いて攻撃を始められれば、あとはどうにでもなれ。

「クソツ!!来るなあああアアアアアアアア!!」

宙を歪ませ、武器たちが射出される。

狙いは乱雑。散漫。呆れてモノも言えない。

― 前の方が戦力になったのでは？

― それではコイツは管理局の駒に成り下がるだろ

―大切な友人を守る

―至極、面倒な願いだよ

全くだ。バレない様にクスリと笑う。

立ち止まって、迫り来る剣を体で受け止める。

痛覚は遮断しているから、痛みは感じないが貫かれた感触があるのは、なんとも不思議な感覚だ。

「え……う？」

「ふむ、まあ、もう少しだな」

「な、なんで避けなかつたんだよ!!」

「アレだけの攻撃を避けれるのは余りいなさ」

ズルリと銀色の刀身を体から抜く。

抜いた剣は赤い液体を滴らせ、太陽の光を反射させれば液体を少し透かせている。

―中々に綺麗だ

ふむ。全くだな。

「ああ止血を忘れていた」

剣を捨てて、貫かれた腹部に左手を当てる。

グジュルと傷口に溢れる赤黒いソレ。それらは何度も蠢き、傷を編み込んでいく。

「な、なんだよ、ソレ!!」

「大切な、俺の力さ」

「ちか……ら？」

「さあ、ようやく気持ちを決めたな？殺されるのは嫌だろう？ならば抵抗しろ。それこそ、必死にな……いや、必死に死を抵抗とはオカシナ表現だな」

一人、笑ってしまう。

そんな俺を見て、相変わらず緊張したままのスメラギ。どうしようもなく、警戒している。

それでいい。まだ終わっていない。終わりはしない。

「さあ、仕切り直しだ。スメラギ……いや、ライト。殺し合いを再開しよう」

俺は左手から触手を溢れさせて、ライトへの一歩を踏み込んだ。

15 殺す為の一手

やっぱり、ワタシの宿主は馬鹿だ。

彼女を瀕死にした犯人が目の前に居たのに。

容易く、本当に、まるで本を請求するように許してしまった。
意味が分からない。

いや、意味はわかる。

彼は彼を恨んでなんかなかった。

彼をずっと見ていたが、普通は恨んでもいい筈なのに。

彼は恨まなかった。

いや、恨んでいた、が正しいんだろう。

恨んでいて、いつの間にか、犯人がすり替わったのだ。

ソレは彼らしく、彼だからこそ、自身に敵しすぎる彼だから。

ワタシは一緒に抱えよう。

彼がワタシを殺すというのなら。

ワタシが彼を殺してあげよう。

◆◆

やった!! やった!!

コレでライト君の罪が嘘だって思ってくれる!!

「なんや、なのはちゃん：アースラになんか呼んで」

「というか、ソツチの関係者じゃない私達まで来てイイわけ?」

「リンデイさんには許可をもらってるから大丈夫だよ!!」

大丈夫。コレでみんなもわかってくれる!!

全部嘘だと言う事が。

アイツは言ったんだ、ライト君に向かって「ようやく気づいたな!!」

とか「騙してた事」とか!!

私が何を言った所でソレはアイツにとって都合がよくなるだけだ。

なら、アイツが自白すればいい!!

アハハ!! 最高だ!! 最高の気分だ!!

ブリッジに入ると重苦しい空気が漂っていた。

どうしたの? もしかして、もう終わってしまったの?

ライト君の圧勝で、もう終わっちゃったのかな？

でも、あんなヤツ死んで当然だよな？だって皆を騙して、ライト君を悪者にして。最低だ。

「……あ、ああなのはか……」

「ん？どうしたの、クロノ君」

「……君は見ないほうがいいかもしれないな」

「え？」

思わずその言葉に画面を見てしまう。

頭から血を流して、肩で息をしているライト君。そしてそれに相対している無傷と言っていい化け物。

「夕……君？」

沈黙したブリッジに響くはやてちゃんの声。

ソレはまるで信じたくないモノを見るように。当然だよな。あんな化け物がクラスに居たんだよ？悪者なんだよ？

「……なんや、触手なんてエロい能力あったんかあ」

「え？」

次に響いたのは、なんでもない、まるで落胆というよりも驚きの方が強い反応。

でも画面に映ってるのは、赤黒いソレ。正直、この世界のモノとは思いたくない。

「で、クロリン？なんでユウちゃんとライトが闘ってるの？」

「詳しいことは知らないが……殺し合い、だそうだ」

「ふーん……」

「話を聞いてれば、ミカゲから言ったらしいが」

「ゆう君が……？」

そうだ!!アイツがバレた事に対してライト君を殺そうとしてるんだ!!

「……うーん……アレ？」

「どうかしたの？すずか」

「ううん。……なんでだろ、ゆう君が笑ってるみたいに見える」

「アレが？」

「うん、アレが」

「……ああ、なんだ惚気か」

「惚気じゃないよ!？」

顔を真っ赤にして両手を上げるすずかちゃんと、溜め息を吐いて肩を竦めているアリサちゃん。

—うおおおおおおお!!

—まだまだ甘いな!! ライトオ!!

画面の中で戦う二人。

触手の化け物と戦うライト君。

なんでだろうか、ライト君の顔に笑みが見えるのは。

いや、ありえない。有り得るわけがない。

あんなヤツと笑い合うなんて。そんな事。

「ああ、そっか……」

私は一人、踵を返す。

そうだ、きつとそうなんだ。

彼は私の助けを求めているに違いない。そうじゃなければ、あんなヤツに負けるわけがない。

きつと、負けているフリをしているのだ。

私と二人で、アイツを退治したいんだ。

きつとそうに決まってる。

あんなヤツに負けるワケがないんだ。

「待っててね、ライト君……」

何もない、荒野。

遠くの方で金属の弾ける音と、魔力弾による爆発が聞こえる。

「レイジング・ハート」

私はバリアジャケットを着込む。

魔法の杖を構え、アイツに向ける。

魔力を収縮して、地面に魔法陣が描かれる。

何重にも、沢山、沢山沢山タク山タクサンタクサンタクサンタクサンタクサン!!

ガシヤンガシヤンとリロードが開始され、空になった薬莢が宙に捨てられて、弾倉が空になってもリロードを続ける。

「全力、全開……!!」

コレが、彼を助ける為の砲撃になる事は確かだ。

これだけの魔力を込めれば、アイツはきつと!!

「フッフ、アハハハ……アハハハハハハハハハハ!!」

私はトリガーを引く。

桜色の光が一度消え、目の前を覆い尽くす。

狙いはアイツ、あの化け物!!

アア!!褒めて!!褒めてよ!!ライト君!!

「アア、まったく……ヤリすぎ、だろう。まったく」

桜色の壁の中から赤黒い手がニョキリと出てきて、私の顔を掴んだ。

そのまま私の体は浮いて、後頭部から衝撃が走った。

「え……?」

ありえない、ありえない、ありえない!!

「少し、眠ってもらおうぞ、眠り姫」

そう言つて、彼はもう一度私の頭を地面へと打ち付けた。



「ああ、まったく……少しは加減をして欲しい」

触手を服の様にして桜色の光の中を突破したが。いやはや、どれだけ圧縮すれば解析不能な程の魔力の塊になるんだか。

—さあ準備を開始しよう

—悪夢を見せてやろう

ああ、当然だ。

—感応系術式展開

—心的外傷を作成

—なんだろうか、ライトでも目の前で惨殺させようか

—それともライトに殺されとくか？

—いや、ソレも意味がなさそうだ

—ならライトを殺す方向で設定しよう

—術式行使

「なのはああああああああああああああああああ!!!」
「む、」

ライトがコチラに接近して、俺の腕を飛ばす。

右腕、というのが幸いしたか。

「お前は、お前は!!」

「まあ落ち着け。そいつはまだ生きてるさ」

「え？」

アイツが抱く『眠り姫』を見つめる。

—さて、予定通り邪魔をしに来てくれた

—当然コイツだけだろう

—まったく、世話を焼かせる

—これでいい。全て順調だ。

地面に落ちている右腕を拾って、肩に付ける。グジュリと触手が蠢き、接合が完了する。

「安っぽいフィギュアか、俺は」

「おい、なのはが生きてるってのは!?!」

「本当だ。アースラに戻ればたぶん助かるさ」

「本当か!?!」

「お前次第だよ」

「……」

相変わらず警戒を解かないコイツに思わず肩を竦める。右腕が落ちそうになった。

「邪魔が入ったら終わる、と言ったろ?」

「……そうだったな」

ようやく警戒を解くライト。剣を消して、高町さんを抱く力を少し

強くする。

「はあ……これでいい。あとは勝手にしてくれ」

「おい、どうしたんだよ……お前も戻るんだろ？」

「当然だ。が、少し状況が悪い」

「え？」

俺の左手が異様に輝く。

恐らく、使いすぎ、というか治療にアンヘルを使うという荒療治をしたからだろう。

—さあ計画を始めよう

—これでいい

—さあ終わろう

—殺す為の、一手だ



「おい!!何してるんだよ!!」

アイツの手から触手が溢れ出す。

地面を覆い尽くして、ソレでも尚、アイツの左手から溢れ出す。

「逃げる!!できるだけ遠くに!!」

「お前は!!お前は どうするんだよ!!」

「俺は……俺の事はいい!!さっさとしろ!!」

オレはユウの言葉に従い、宙に浮く。

どうやら触手は空まで伸びて来ない様だ。

なのはを抱えて、オレは触手の塊を見つめる。

—ライト君!!

「リンディさん!!アイツは?」

—わからないわ……反応はあるんだけど

クソツ……。

アイツの姿が触手に飲み込まれる。

まるでちよつとした蕾の様に、触手の塊が揺れる。

「今攻撃をしたら……」

—馬鹿なことはやめるんだ!アレはそんな代物じゃない!!

「でも!!そうじゃないとユウが!!」

—魔力反応…変化してます!!

蕾が、徐々に開いていく。

朱色の光を漏らして、完全に開く。

赤黒い触手の中、朱色の淡いベールに包まれた存在。

「女……の子?」

思わず呟いてしまう。

それは確かに、女の子だった。

髪は黒く、肌は白く、周りの光景には似つかわしくない、少女。

女の子は、ムクリと起き上がり、両手を見つめる。

ありえない物を見るかの様に。

「どう……して……」

彼女は声を出して、自分の喉を抑えた。

まるで声が出ることが不思議な様に。

そして空を見上げて、涙を流した。

まるで空が憎いかのように。

「こんなの……ワタシを殺すって言ったじゃない!!殺してくれるって
言ったじゃない!!嘘吐き!!嘘吐き!!嘘吐き!!」

彼女は叫ぶ。

ここにはいない誰かに向けて叫んでいる。それがオレには分からない。わからないが、彼女は叫び続ける。

「お兄ちゃんの!!バカアアアアアアアアアアアア!!」

16 オレがオレになる為に

『式』を書く事しか出来ない手を止める。

『床』しか向いていなかった顔を上げる。

『式』と『床』しか見えていない目に違う何かが入る。

ようやく来た。

そう思う。

ようやく来れた。

そう思っている。

憎くて、殺したくて、認めたくない存在。

面倒で、殺せなくて、認めてはいけない存在。

許せない。

許すことなんか出来ない。

自身と彼は同時に口を開く。

声、という概念はここに適応されるか分からない。

でも二人で、同時に喉を震わせる。

「おはよう、こんにちは、さようなら、殺されるよ」

「おはよう、こんにちは、さようなら、壊しにきたよ」

俺は苦笑することもなく、

俺は苦笑するしかなく。

俺は俺を壊す為に手を伸ばした。



「……………」

啞然。というのが正しいのだろうか。

私達は息をすることも忘れて、言葉を出すことが出来ない。ソレは、なのはちゃんが突然乱入した事ではなく、彼が容易くも消えてしまったからだ。

「……………夕……………くん」

はやてちゃんの声が聞こえた。

震える声で出た言葉は彼の名前。私は、声も出せずに、何かが抜かれたように、冷たい床に座り込んでいる。

どうしようも出来ない。

私には、どうしようもない。

どうにかしたい。

どうして、どうして私にはこんな時に力になれない。

どうして、好きな人を助ける事も出来ない？

どうして、化け物なのに好きな人を連れ去る事も出来ない？

イラナイ、イラナイ、イラナイ、イラナイイラナイイラナイイラナイ
イラナイイラナイイラナイイラナイイラナイイラナイイラナイイラナイ
イラナイ

好きな人さえ助けられないなら、こんな体、こんな心、こんな生、いらない。

私の目の前は、真っ暗になる。

アリサちゃんの声が遠くなる。

遠く、遠く。

「気がついた？」

「アリ…サちゃん？」

「うん……」

私は目を開く。

もしかして、夢だった、そんな事を思ったけど…残念なことに現実らしい。最悪だ。

「ここは…」

「ここはアースラの医務室よ、すずかちゃん」

「シヤマル…:…さん」

「シヤマル!!こいつを抑えろ!!」

「どけ!!ヴィータ!!オレは、オレが助けないといけないんだ!!」

隣のベッドを見れば、横たわる白い女の子と、更に隣にはなのは

ちゃんが居る。

どうしようもない現実。

たぶん、ゆう君はこの女の子に代わってしまったんだろう。存在その物も。全部、彼女に渡してしまった。

彼女がナニかは知らない。けれど、彼ならそうする……と思う。

「ライト君!!アナタはリンカーコアにまで損傷があるんですよ!!」

「うるせえ!!それでも……オレは、オレが……」

彼はペタリと脚を崩して、俯く。

ああ、コイツがゆう君を殺したのか……。ああ、そうだ、殺そう。そうしよう。そうしないといけない。そうしないと。

私はゆっくりと立ち上がり、腕に力を込める。

耳障りにもしゃくり上げる目の前の存在の首がイイ位置にある。

ああ、これ程にも容易いのに。これ程に軽いのに。

「やめなさい」

「ッ」

私の腕を掴んだのは、アリサちゃんだった。

思わず睨んでしまったからだろう、掴んでいた力が少しだけ緩んだ。

それでも、彼女はしっかりと私の腕を掴んでいた。

悲しい顔をして。

「……ごめん」

「仕方ないわよ。でも、少し落ち着きなさい」

「……うん」

「アンタも!!ちよつとは黙りなさい!!」

「黙れって……!!お前はなのはが心配じゃ、」

「心配よ!!もちろん、あのバカも心配よ。ソレでも、アンタは今万全!? それでなのはやバカを助けるつもり!?巫山戯るんじゃないわよ!!」

アリサちゃんが叫ぶ。

叫んで、息を荒げて、彼を叱る。

そんな中、医務室の扉が開いた。出てきたのは、長い黒髪とキツチリと着込まれたシャツ、そして白衣の美人。瞳はキツく、私達を見下

ろしている。

そんな彼女は溜め息を吐いた。

「まったく……こういう事……」

「プレシアさん……」

「本当に……バカね」

手を額に当てて、また溜め息が吐かれた。

溜め息を吐いた彼女はツカツカと歩いて、光君の前で立ち止まり、彼を叩いた。

ソレもかなり力が入っていたのだろう、乾いた音が大きく響いた。

「……」

「反応無し？食ってかかったらどうなの？」

「……ツてえな!!何しやがる!!」

「その反応でいいわ。王子様は準備ができるまで回復してなさい。尤も、準備と言っても眠り姫の準備ではないけれど」

「た、助かるのか!？」

「……なんなの？あの子、眠り姫を助ける為、とか言ったのに説明もしないで女の子に代わったの？」

「そうみたいです」

「本当に、バカね……世話の焼ける。とにかく、アナタは少しでも休んでなさい。乗り気ではないけれど、助けてあげるわ」

本当に乗り気ではないのだろう。彼を叩いたあとはずっと眠っている女の子に触れているプレシアさんと呼ばれていた美女。

「……なるほど、ね」

「ゆう君は助かりますか……?」

「…アナタはコレの、何?」

「何って……」

「友達よ!!」

「そう…生死で言えば、生きてるわ。この体は」

「……体?」

「そう身体。簡単にしか解析出来ないけれど、ソレでも、わかるわ。この体は生きている」

「恐らく、彼は死んでしまいましたか」

「そう言う声は扉から聞こえた。」

声を出していたのは、銀色の綺麗な髪と真つ赤な瞳をした女性。何処かに感情を置いてきた様に、表情は冷たい。

「遅くなりました」

「構わないわ。事態は既に後手よ…」

「ユウ相手に先手に回る、という事自体少し無茶があります」

「そうね…」

「リイン、後ろからスマンな。ちよいと状況説明してもらってええかな？」

「ハツ、主はやて。申し訳ございません」

「いや、そんな畏まらんでええねんけど…」

銀髪の女性の後ろから出てきたはやてちゃんは私達を見てニハラと笑う。

「うん、よかった。起きたんやね」

「残念な事に、夢じゃなかったけどね」

「うん、でも最悪、ではないっばいよ」

「らしいね」

「じゃあ、リインフォース、頼むな」

「ハイ。まず、謝ります。私達は彼の計画について、知っていました」

「ええよ、そんなん。もう終わった事や」

「感謝を。…今、高町なのは恐らく夢の中に閉じ込められています」

「…夢？」

「ハイ、夢です。自身のトラウマを植え付ける様に延々と繰り返される、悪夢です」

「なにそれ、タチ悪すぎない？」

「ネコがよければ…スマン、冗談やって、すずかちゃん睨まんといて」

「冗談を言ってる場合ではないと言うのに。」

「話を続けます。結論から言えば、彼女を助ける事は可能です」

「本当か!？」

「私とプレシアは扉を開ける鍵を渡されましたから…但し」

「適応する人間に限られてるわ」

「適応？」

「見て分かると思うけど、私は学者よ。彼に渡された鍵を解析すれば、本当に、其れだけに作られた物なの」

「彼の様に言えば、眠り姫を助ける王子様だけの鍵、なのでしょね」
「という事よ、王子様。アナタだけにしか彼女は助けられない。アナタが失敗すれば彼女は永遠の悪夢に取り憑かれる。もしくは覆せないトラウマで精神崩壊してしまうかしら」

「ッ……」

「それでも、アナタはやるわ。いえ、例え拒否した所で私達がやらせるわ。いつその事、今すぐに殺してしまいたいもの……彼の遺志を無駄には出来ないからしないけれど」

鼻で軽く笑った彼女はようやく彼を睨む。

彼は、その瞳をジツと見つめて、立ち上がる。

「行くよ。行かせてほしい……」

「拒否しても一緒よ」

「わかってるよ。それでも、オレだけなんだろう？アイツが選んだのは「そうね」

「なら、……いや、違うな。どう言ったらいいんだろ…」

彼は少し悩んで、迷い迷いに言葉を選ぶ。

「選ばれてなくても、オレが行くしかないと思う。助けたい…助けないといけない。オレだけしか出来ない、じゃなくて、オレがそうしたいから、オレがオレに、なのはがなのはになる為に」

「……意味がわからないわ」

「オレもさっぱりわからないよ」

「まあ、少しはいい顔になった……と言っておきましょう」

「シヤマル、彼の調子は？」

「……精々、五割程度ですよ？」

「ということだが？」

「十分だよ」

彼は少しだけ肩を竦めて応える。

シヤマルさんは少しだけ申し訳なさそうに、溜め息を吐いた。

「無謀です…とは言っておくわ」

「いいよ。無謀でも、無茶でも、無理でも」

「さあ、準備はいいかしら？」

「悪くても、だろ？」

「当然よ」

「ならいいさ。コレがアイツの予想した事なら、うまくいくさ…いや、違うな」

ライト君は少しだけ笑って、なのはちゃんの手を握る。

「救う為、なんて大きな事は言えない。でも、救いたいんだ…英雄としてじゃなくて、光として、オレとして、助けるよ。絶対に」

そして彼を淡い紫色の円が包みこんだ。

17 白と銀と魔導士と英雄と

目の前に扉がある。

真っ白い、洋風の扉。金色の細い飾りを装飾された、一つの扉。ドアノブと、鍵穴。

いったい何の事か分からない。わからないが、目の前の扉は、ただただ、怖かった。

オレは意識を覚醒させる。

目を開き、前にはいつもの風景。風景、というか、オレの部屋の天井。

どうしてだか、身体が重い。それでも精一杯身体を起こして気付く、下がった視点。

いや、これ程だっけか。部屋を見ればいつもの：というよりは幼児じみた部屋。確か、父が好き勝手に買ってきて飾り付けたんだ。

あれ？確かって、昨日の事だろ？どうしたんだよ。

オレは首を傾げる。何かを忘れている。何か、が分からないから、きつと大切なことではないのだろう。

もしかしたら前の事かもしれない。それは大切だ。日記帳に書いておこう。

オレはベッドから出て、小さな机に向かう。昔から使っている日記帳を開いて、ペンを握る。昔から？使い始めたのは半年程前だ。

日記には今までの出来事と、今からの出来事が書かれている。

今日は公園に居ても誰もいなかった。明日には誰かいそうな気がする。

そんな事を思いながら、オレは日記帳にペンを走らせる。

『何かを思い出しそうだった、が何か分からない。思い出せたら、書く』

それだけを書いて、オレはもう一度布団の中に入った。

公園に居た。

目の前には栗色の髪をした少女。俯いていて、何かを我慢していて、それでもソレを表に出さないで。

確か、オレは彼女を知っていて、オレは彼女に手を伸ばしたんだ。

「なあ、どうしたんだ？」

「え？」

今なら分かるが、キョトンとした顔で何かを耐えるのを隠していた。今？今は今だろう。

オレはようやく、というべきか、見つけた彼女に微笑んで話しかける。

ただ一言、遊ぼう、とだけ。それだけでいいのだ。オレならば、オレだから。

学校に居た。

彼女はオレの隣を歩いていて、オレは彼女の頭を撫でたり、微笑んだり。

彼女の心の中にオレは居る。いや、違う。違う。

寂しかった、訳じゃない。違う。違うんだ。

オレは微笑んでいる。

オレは、笑っている。

オレは、オレは。

何処かの家に居た。

目の前には壊れた彼女が居た。いや、彼女だった物があつた。

カタカタと震えているオレは相変わらず笑みを顔に貼り付けている。何年も続けていた事だから、もう笑い以外を忘れてしまったのかもしれない。

オレは剣を翻し、自分の胸を貫く。

バッドエンド。

オレは目を覚ます。

目の前にはいつもの天井だ。

何かを思い出しそうので、思い出せない。頭が痛くなり、息を吐きながら身体を起こす。

幼い子供の部屋を見渡して、溜め息。オレはこんな年齢じゃない。オレは転生者だから。

忘れない内に日記帳に起こりそうな事を書いていく。

日記帳を開いて、内容を書いていく。

『今日は何も無かった。明日は何かがあるかもしれない』

そしてオレは日記を閉じて、布団の中に入った。

思ったよりもすぐに寝れそうだ。

公園に居た。

オレは栗色の髪の少女を見つけて話しかける。

ただ一言、遊ぼうぜ、とこれだけ。

オレは笑んでいて、彼女はビツクリしたようにオレに手を引かれて
いる。

どうしてオレは彼女に話しかけたんだろう？

学校に居た。

オレは彼女の隣にいた。

当然の事だが、彼女もオレの隣を歩いて笑っている。

オレは少しだけ笑っていて、彼女の頭を撫でる。

彼女はオレに依存している。

なら、オレは……？

何処かの倉庫にいた。

目の前には彼女の体がある。首から上はない。

ビクンビクンと動く彼女のカラダと、ソコにあるべき頭を持っている人物が嗤う。

銀色の髪で、剣を虚空から出している。

彼女の髪を掴んで、首から滴り落ちる赤い液体を飲んでいる。

オレは絶望していた。そんな絶望しているオレをよそに目の前のアイツは剣を翻して、自身の胸に刺した。

バッドエンド。

目を開いた。

目の前にはいつもの光景があり、オレは当然のように布団から出て、日記帳を取り出した。

『今日は何も起こらなかった。明日はきっと何かわかるかもしれない』

オレはそれだけ書いて、布団の中に入った。

今日は寝れないかもしれない。

公園に居た。

目の前には栗色の彼女が居て、オレは声をかけるのを戸惑う。

本当に、掛けてしまった方がいいのだろうか？

どうしてこんな事を考えるか分からない。分からない。分からない。
い。

どうしてオレは彼女に声を掛ける？

それは、彼女が高町なのは、だからなのだろうか。

ソレは、彼女が主人公だから、なのだろうか。

オレは声を掛ける。理由なんてなく、オレは。

学校に居た。

オレは彼女の後ろに居た。

彼女はオレに依存している。いや、違う。

彼女にオレは依存している。

ああ、そうか。コレが正しいんだ。オレは依存させていて、オレは彼女に依存していた。

どこをどう見ても、一方通行だ。

空の下に居た。

銀髪の男が自身の恋人を殺し、そして自分を貫いた。

その目の前で銀髪の男が絶望して、叫んでいる。

オレは一本の剣で彼の首を飛ばして、彼の命を終わらせた。

オレは、彼らの恋人だったモノの頭を大切に持ち上げる。

死んだ、というのに笑っている彼女の顔。

どこにも絶望などなくて、どこまでも慈愛に満ちている、笑み。

オレは、彼女に恋をさせていた、のだけど。

オレは、彼女に恋をしていた、のだろう。

そもそも、歪んでいるのだけど。

それでもオレは、彼女の事が好きだ。

最初は、ただの好奇心。ソレもアニメの主人公だから、という好奇心。

自分に依存させて、自分から離れさせないようにして、独占欲の塊みたいなになっていて。

でも、彼女もソレを拒絶しなくて、いや、違う。オレが拒絶させるという選択肢を消したんだ。

オレはなのはの首を抱きしめる。

大切に、笑う事も、撫でる事もせずに。

ゴメン、ごめん、ごめん。

何度呟いても許してくれない。許す事などしなくていい。それこそ一生恨んでくれてもいい。殺してくれてもいい。無視してくれてもいい。

ソレでも、オレは謝り続ける。

自分が殺した彼女を。自分が殺した、高町なのはを、抱きしめ続ける。

目を覚ました。

目の前にはいつもの天井。オレはゆっくりと布団から出て、日記帳を開く。

『今日は何も無かった。明日には、日記帳を埋めれそうだ』

そう書いてから、オレは数ページ前のページを開く。

『何か思い出しそうだった、』

「思い出したよ、思い出した」

そう呟いて、オレはそのページにペンを走らせる。

『何かを思い出しそうだった、が何か分からない。思い出せたら、書く

思い出した。扉を開けて、彼女に謝る事だ』

さあ、部屋から出よう。

目を覚ました。

目の前には真っ白い、洋風の扉。金色の細い飾りを裝飾された、一つの扉。

他には何もない。あるのかもしれないけど、オレには関係のない事だ。

ドアノブに鍵穴。オレはドアノブに手を掛ける。

鍵穴に現れた、銀色の鍵。それはひとりでに回り、ガチャリと金属的な音を鳴らした。

オレはドアノブを回し、扉を開く。

扉の向こうの空間は、オレが彼女にした事がカラカラと、まるで映画の様に流れていた。

こうして、客観的に見ていると、本当にバカ、というか取り返しのつかない事をした。

だから、こそ。今ここに居る。今ここに居る事が出来る。

彼女が座り込んで泣いている。

その近くには、何かの肉塊。座り込んで泣いているというのに、彼女は何度も、何度もその肉塊に何かを突き立てている。

まるで、ソレが強いられている様に。

「——なのは」

「ッ……」

彼女がオレの声に反応して振り向く。

泣いていた。涙が顔を汚して、可愛らしい顔が台無しになるぐらい顔を歪めていた。

銀色の毛を赤く染めた肉塊に何かを突き刺し、彼女はこつちを向いて、無理に笑う。

「ライトく……ん？」

「……ああ」

「ほん、ホントにライト君だよね!？」

「……ああ」

どうしようななく、彼女は、笑って、ようやくこの地獄から助けられるだろう人間を見つけたみたい。

ソレは、そうなんだろう。オレだって、助けてくれるなら縋りたい。縋って、助けられたい。

「ライト君!!」

「ごめん、なのは」

「……え？」

「オレさ……、お前に酷いことしてた」

「酷い事？」

「うん……。取り返しもつかないぐらい、本当に、酷い事」

「いいよ、ライト君になら、なにをされたって」

「違う!!そうじゃないんだ!!なのは!!オレは……お前の気持ちを勝手に操って!!勝手にオレを好きにさせて!!」

「嘘だツ!!」

なのはは絶叫する。信じない様に。

そしてオレを睨みつける。まるで仇を睨むように。

「ライト君が……ライト君がそんな事を言うわけない!!お前は、お前

は!!ライト君じゃない!!」

「オレは、ライトだよ」

「嘘、嘘!!嘘を言うな!!」

「もう嘘は言わないよ。オレは皇 光で、お前を壊した人間だ」

「嘘だ、嘘だ!!嘘だ嘘だウソだウソだウソだ!!」

「嘘じゃねえよ!!」

「違う、違う違う違う!!私のライト君は私の頭を撫でてくれて、笑ってくれて!!私の、私だけの!!」

肉塊から鈍色の刃物を抜き出し、彼女はオレに突進する。まっすぐと、オレを突き刺して、彼女は止まる。

腹部から鋭い痛みが走り、ジクジクと痛みが寄ってくる。

「あ、」

「……」

「また、また…私が、私が!!」

「…なのは」

オレは彼女の顔を見ないように、彼女に顔を見せないように抱きしめる。

腹に刺さった何かが更に奥に入ったが、そんな事はどうでもいい。

「ごめん、ごめん、ごめんなさい……」

「――」

「何も言わなくていい、許さなくてもいい、一生恨んでくれてもいい、謝らせてくれ、ただ、それだけで、いいんだ」

いつの間にか声が震えていて、オレは泣いてて、頭の中にはごめん、しかなくて、口からもそれだけしか出てこなくて。

「ライト、君」

「……」

「私も、色々見たの。人形みたいにライト君のいいなりになってる私。ライト君の事だけしか見てなかった私。それから、ライト君を恨んで、恨んで、恨み続けて…殺しちゃった」

「殺してもいいよ」

「うん…自分でも、馬鹿らしくて、今になってはやてちゃんやアリサ

「ちゃんが私に叱ってた理由もわかった…：ような気がするの」

「なのはは苦笑している。」

「顔は見えないけれど、それでも、分かる。」

「私はライト君に依存しすぎたの」

「それは、オレが」

「いいから、聞いてほしい…：依存したのがライト君の所為でも、依存し続けたのは、私の責任だよ…」

「ソレも、オレが」

「それだと、全部ライト君が持つて行っちゃうよ」

「それだけの事をしたんだよ、オレは」

「相変わらず苦笑しているなのは。そんなのはがオレの背中に腕を回してくる。」

「二人共、あの日で止まってたんだよ。あの公園で始めて会った日で」
「だから、」

「だからさ。歩こうよ、二人で」

「二人でつて…：またオレが、お前を」

「一生恨んでもいいんでしょ？」

「…ああ」

「ならば、一生恨むよ。だから、恨む人の顔を一生見たいんだ、ずっと、忘れないように」

「…」

「だから、ライト君が前に歩いて私が後ろに隠れてた、そんな今みたいな事じゃなくて。手をつないで、歩こうよ」

「オレをゆつくりと離れた彼女の顔は微笑んでいて、オレは、それに微笑み返す事も出来なくて、ただただ哑然としてて。」

「許して、くれるのか？」

「許さない。一生私に償ってください」

「…：ありがとう…：ありがとう!!」

「たぶん、次から間違ってると思ったら叩いても修正するから」

「…：頼むわ」

「頼まれたの！…：ライト君からの頼みって、初めてかもしれないの、

ふふ」

「どうしようもなく笑っていた彼女を見て、ようやくオレも本当に笑う事が出来るらしい。」

「やっぱり、オレは彼女に依存している。彼女はオレに依存させられていた。」

「オレは彼女に恋をしている。」

18 殺す為に生かし、生きる為に壊れる

彼に魔法、という物を掛けたらしいプレシアさんは溜め息を吐く。まるで、どうして私がこんな事を、と言いたげに。

「さて、コツチに話を戻しましょう」

「そうですね…」

ラインフオースさんとプレシアさんは互いに目を合わせてから、ゆう君…だった彼女を睨みつける。

状況は悪い、が恐らく最悪ではない…:…:…と思いたい。

「で、コレの状況は？」

「最低ですが、最高の状態です」

「最低ね」

「いえ、最悪かもしれません」

「ああ、二人で話せんといってくれる？」

「スイマセン、我が君。私としては、一刻も早くあなたをこの場から遠ざけたいのですが…:…:…」

「ソレは、出来んなあ」

「知っています。ですが、それ以上に我俣を許す気はありませんよ？」

「…:…:…わかった、と言つとくわ。で、簡単に説明して？」

「彼女の体の状態は最高に良好です。同時に彼の生存が危険です」

その言葉に私とはやてちゃんは眉間を寄せる。

当然である。最高の状態なのに、最低な状況だった。ただそれだけなのだ。

「うーん…:…:…もうちよつと簡単に言うて？」

「私アナタに夢を見せていた状態に限りなく近しいです」

「わかった、最悪な事を理解した」

「ご理解いただき感謝を」

「問題は、コレに一切私達の魔法が効かない事もあるわ…:…:…」

沈黙。為す術がない。

改善もできなければ改悪も出来ない。それこそ、いや、考えてはい

けない。

ふと、溜め息が聞こえた。聞こえた方を見ればリインフォースさんが眉間にシワを寄せていた。

「……いい加減に、寝たふりはやめたらどうですか？」

「……寝たふり……って訳じやなかったんだけど」

ムクリと白い肌の少女が起きる。開いた瞳は、色の混ざりすぎた黒で塗りつぶされている。

彼女は肩を竦めて、息を吐いた。

「はじめまして、と言える人間が多いからそう挨拶させていただくわ」

「アナタ、誰？」

「御影夕に見える？残念。彼はワタシの中に居るわ」

「誰、と聞いているのよ、小娘……!!」

声を低くしたプレシアさんは少女に杖を向けて睨みつける。

その声に萎縮してしまった私達に比べ、杖を向けられた彼女は平然としている。

「ワタシに……小娘？上等ね、ガキが……」

「なっ!？」

彼女から溢れ出した赤黒い何か。ソレが杖を伝い、プレシアさんの腕を這い、グルリと彼女を拘束した。

一瞬で、本当に、瞬く間、と言っている程に速かった攻守の逆転。

「永遠を生きるワタシを小娘？上等じゃない、常套手段ではないけれど、殺してあげるわ。娘さんにはどう説明してあげようかしら？」

「アンヘル、やめてください。一刻を争うのは知っていますんでしよう」

「あら、夜天の書。お互い、とは言いづらいけれど、お互いいいご主人様にあつたらしいわね」

「そのようです……」

アンヘルと呼ばれた少女はまた肩を竦めて、溜め息を吐いた。

シユルシユルと赤黒いソレを体の何処かへと戻して、彼女は改めて口を開いた。

「ごめんなさい、気が立ってた、と過去形ながら言わせていただくわ」
「……で、アナタは……」

「わかつてる…と言つてもアナタとリインフォースだけのようね。ワタシの名前…というべきか、名称はアンヘル。宿主を喰らい、生きる事を続ける物体よ」

「宿主を…」

喰らう。

その宿主は彼であり、そして彼女は彼を喰らい続けたのである。

どうして? どうして彼が? どうして彼じゃないとダメなの?

頭の中がループする。

どうして? どうして? もしも、もしも。

大きく息を吸って、ゆっくりと吐く。

今はそんな事を考えている時ではない。そんな事、彼が死んでからでも、彼を助けてからでも、彼に応えてもらつても、どれでもいいんだ。今考える時ではない。

私は真っ直ぐに少女を見つめる。

そんな私を見て、彼女は面食らった様にキョトンとして、ニヤリと笑った。

「え?」

「で、アンヘル。彼の状態は?」

思わず出た声がりインフォースさんの言葉にかき消され、ニヤリと笑った彼女の顔は呆れた顔に変わっていた。

「言った通り、最低だったわ。暴走が発動するタイミングでワタシと入れ替わって、システムを掌握。同時に侵食システムの対象をアンヘルの本体に設定。暴発に伴い、アンヘルは壊れて、兵器は壊れました、と」

「待って、待ってえや! アンヘルは、アンタの事やねんやろ!」

「アンヘル自体は夜天の書と一緒に。違うのが、アンヘルという人物をベースに生まれたのがワタシで、夜天の書というシステムが生み出したのがリインフォースというだけの話」

「……今、アレはアンヘル本体なのね?」

「ご明察。最低な事にご主人様は道具に死を与える為に生かして、自分分は生きる為に壊れる。ホント、矛盾もいいところよ」

「つて事は、夕君は……もう……」

「まだ生きてるんだよね？」

思わず口が開いた。

少女は私を見ながら、ニンマリとして口を開いた。

「そうね。ご主人様は生きてるわ」

「ほ、ホンマか!？」

「ただ、ワタシが彼を生き返らせると思う?？」

「ツ……!!や、やったら力づくでも……!!」

「夜天の王よ、少しは分を弁えろ。貴様の前にいるのは幾多の世界を喰らった化け物だぞ?それに、我が主はこの結果を望んでしまったんだ」

「夕君が……?？」

「ワタシの為に。ワタシを殺す為に、ワタシと代わった。自分は壊れて消える為に。リインフォース、貴女にならわかるでしょう?？」

「……はい」

「それに、せつかく得た生よ?ソレも死ぬことを許された人生!!最高じゃない!!ようやく、ワタシは死ぬる!!死ぬことを許された!!」

「でも、ソレを貴女は望んでないんでしょ?？」

「あら?生きていたいと思うのは普通でしょ?死にたいと思える事は普通でしょ?死ぬことを許されなかったワタシが死にたいと思うのは」

「それでも、貴女はソレを望まない」

コレは、確定している事だ。

だって、彼女が本当に望んでいるなら、寝たふりを続けていればそれだけで終わったのだ。説明も何もなく、彼は消えてしまった、と言えば、それだけで終わる。

でも彼女はそうしなかった。

「彼が望んだ事よ?？」

「そう……なんだろうね」

「だったら、道具として叶えてあげるのが本望でしょ?？」

「アナタが真つ当な道具だなんて、私は始めて聞きましたよ?？」

「リインフォース!!うるさい!!」

「失礼、レディ」

先程までのコチラに対しての攻撃的な雰囲気を一変させて、少女は空気を柔らかくした。

なんとというか、可愛らしくなってしまった。今もリインフォースさんに向けて「ぶんすか」という風に頬を膨らませて両手を上げている。

そんな彼女をリインフォースさんはクスクスと笑って謝っている。コレが彼女達の正しい関係らしい。

「ごほん。敢えて態度は崩さないようにしてたのに……むう」「えっと、」

「ああ、ごめんなさい。色々ワタシにも思ってる事があってね」

「コレが彼女の素です」

「リイン、ちよつと性格が悪くなった？」

「おや、アナタと最期に会ったのは一世紀も前のことです。変わるには十分ですよ」

「最高な変わり方ね。もつと早くに変わってもよかったのに……」

「今の主だから、と言ってもいいかもしれません」

「ああ……腹黒そうだもんね」

「ちよい待たんかい!!なんで私に矛先向いとるんや!?!」

「あら、夜天の王様がお怒りよ?怖い怖い……ふふ」

「恐ろしや、恐ろしや……ふふ」

「リイン?」

「失礼、我が君。空気は和らいだでしょう?」

「そうよ、少しぐらいはいいじゃない夜天の王。真面目な話は『ひよーじょーきん』が固まりそうでダメね」

「おや、筋肉は赤黒いんでしょう?」

「触手で全部代用できるから、表情も自由自在でね」

彼女ら二人は楽しく笑っているが、こっちは笑えない。ブラックジョークすぎる。

「で、アレは助けられるの?」

「彼の計画では、ワタシと代わって、最低限の遮断……魔法関係者達とこ

ここに居るであろう人物達を遮断して、後は自壊するっていう計画で終わってた」

「ここに？」

「ソコにいるクソ野郎……あー、失礼、家畜以下の生物を助ける為の計画に携わってる人物……プレシア・テスタロッサ、リインフォース、シヤマル……だっけ？は当然遮断」

「私は含まれてないんか？」

「リインフォースがここに居る可能性から夜天の王様も遮断」

「……じゃあ、私？」

「そう、アナタよ。月村すずか」

彼女は本当に嬉しそうに笑みを作る。

私は……彼の予想ではここにいなかった……なのはちゃんに呼ばれた、私は。

「その畜生は一人だと思っていた、だって、もしもなんて可能性を考えると友達を連れてこない筈だ。ソレが彼の考え。まあ現実はその上手くないかみたいだったけど？」

「あの時……私がなのはちゃんを止めに行ってたら」

「夜天の王様を確認して、彼は誰かを連れてきてる可能性を考える。ソレで手詰まり」

「……なんや、結果的によかった、つてこのことか」

「そう、状態は相変わらず最低。でも事情は最高に転機したわ!!」

「ちよつと待ちなさい。アナタには魔法も効かないのよ？どうやって彼の所に辿り着くの？」

「……あ」

「なんや……ぬか喜び？」

「ちよ、ちよつと待ってよ!!行く方法がない訳じゃないんだよ!?うん、ただ、えつと、何て言うか、うん、えー……死ぬかもしれない?というか」

「……」

死ぬかもしれない。

死ぬかもしれない。

死ぬ？誰が？私が？彼が？

答えは既に決まってるんだ。彼が死んだ世界なんて、考えたくない。

そんなツマラナイ世界、私は望まない。

「……わかった、うん、もういいや。ワタシが悩んでも、どうせ変わらないし」

「えっと、ありがとう？」

「感謝は最後！……まあ最期の感謝かもしれないけど？」

「アンヘル……」

「失礼、夜天の書。確認するわ。ワタシは助ける事が出来ない。お兄ちゃんに会った所で解決するか分からない。というか、お兄ちゃんの所に行けないかもしれないんだけど……」

「大丈夫。絶対に会って連れ帰ってくる」

「うーん、遠回しにワタシは殺されてるんだけど……まあいいや。そんな事、何度もあった事だし」

「ごめんなさい」

「最期の謝罪は受け取らないよ。でも、最期じゃないから受け取ってあげよう。にへへ」

「すずかちゃん」

「はやてちゃん、私、行くよ」

「うん：無理したあかんよ？」

「もし逆の立場だったら？」

「無理しても連れて帰ってきて。んで、一緒に夕君を殴ろ」

「そうだね」

私とはやてちゃんは二人して笑う。

恐らく、彼が帰ってきたら、二人で抱きついてワンワン泣きそうなんだけど、今はそう言っておこう。

「準備は、なんて聞かないよ？出来てても出来てなくても、一緒なんだし」

「大丈夫だよ」

「じゃあ、手を貸して？」

私はベッドで上半身を上げていた彼女に手を伸ばす。

その手を掴んだ少女はニヤリと笑って私をベッドへと引きずり込んだ。

目が白黒しながら、次に見たのは、いたずらが成功したみたいになへへ、と笑っている少女の顔。

まだ手はしっかりと握られている。

「ここから先は貴女一人」

「ゆう君が先にいるよ」

「わかっていると思うけど、全部上手くいっても」

「助けられるよ…絶対に」

「…お兄ちゃんを、よろしくね？」

「大丈夫」

「あの人、嘘つきだから…」

「わかってるよ。特に自分の事に対しては偽ってばかりだったから」

「うん、助けてあげて。あの子を」

「うん」

「貴女を導きましょう。愛おしい、我が主の元へ」

そうして私の意識は引っ張られるように落ちていく。

暗い。暗い。

暗い。

待っててね。ゆう君

19 クマズきん

どうしてだろうか。

私は目を覚まして、そして瞼を上げて、首を傾げる。

鼓膜を振動させる軽い曲調の音楽。

幾つものバルーンが空へと上がり、パンパンと小さな破裂音が聞こえる。

「…………ふう」

どうにか目の前の事を理解した。

確か、彼の中に入れて箬だ。もちろん、ソレは実際どうか分からないけれど、恐らく、そうなんだろう。

まるで私を歓迎するかの様に、マスコットキャラだろう茶色の…クマ?とにかく、縫い目が杜撰すぎるのか、それともソレがこのキャラなのか。そんな事はどうでもいい。

そんなマスコットキャラの着ぐるみを着用した、小さなゆう君達が私を歓迎しているのだ。

ああ、なんだコレは夢か。幻か、はたまた私の妄想なのか。

抱きつきたい衝動をどうにか押さえ込んで、私はもう一度息を吐く。

「だいいじよーぶう?」

「ふあい!」

背中を思いつきり揺らして、私は思わず声に反応してしまった。

声の主を見ると、私よりも背の低い、白い髪で白い肌の、女の子が居た。

私はその女の子を知っていて、つい先ほど喋ってた箬の彼女だ。

「アンヘル、ちゃんかあ……」

「もう!ワタシで悪かったわね!!」

両手を上げて、プンスカと怒る彼女をどうにか宥めて、私はもう一度、テーマパークを見る。

相変わらず、私を歓迎しているテーマパークを見て、気分が落ち込む。

「歓迎されていないなあ……」

「とーぜんだよね。お兄ちゃんは助けてほしくないんだし」

「……それでも、だよ」

「そっか！最悪、ワタシがアナタを助ける事は出来るから、無理そうなら言っつてね」

「…無理してでも、助けるよ」

「望んでないのに？」

「望まれなくても……かな」

私は気落ちした気分を何処かに捨てて、テーマパークを見据える。

……今なら、マスコットキャラに抱きついて怒られないかもしれない。いや、元々誰に怒られると言うんだ。逆に考えるんだ、抱きついていてもいいじゃないか。いいに決まっている、抱きつくことを強いられているんだ。

「よし、抱きつこう」

「どうしてそんな考えになってるの!？」

「え？あ、ほ、ほら、あれだよ、うん、えっと、捜査の為だよ」

そう言っつて私はテーマパークへと歩き出す。

一匹…という表現が当てはまるかは分からないが、小さな愛らしいマスコットキャラが一体、こちらにテクテク、というか“てふてふ”というか“ちよこちよこ”というか“てこてこ”と言うべきか。ともかく小さな足で寄ってくる。

「ぐまっー」

「……」

私は今死んだのかもしれない。いや、落ち着け、落ち着くん、月村すずか。まだだ、まだ大丈夫だ。まだテーマパークにすら入っていないのだ。

そして考えるんだ、きつとテーマパークの中にはもつと素晴らしい空間が広がっているのだと。

目の前で元気よく片手を上げて挨拶？をしていたマスコットキャラは今は訝しげにコチラを見ている。

私は中腰になって、彼との視点を合わせる。

「こんにちは?」

「…ぐまつー…ま〜 まぐまぐ まっ。」

「…うーん、何言ってるのかわからないんだけど…ぐま?」

「ぐまつー!」

私が応えると、嬉しそうに顔を綻ばせて私の周りをクルクルと歩き出すマスコットキャラ。その様子を見たのか、遠巻きで見っていた、他のマスコットキャラもこちらに寄ってきて、*“ぐまぐま”*と何かを喋っている。

「えっと、アンヘルちゃん?何を言ってるか、わかる?」

「こんな奇天烈な生物の言葉なんて、わかるわけないぐま」

「ぐま?」

「わかるわけ無いじゃない」

少しだけ恥ずかしそうに肩を竦めているアンヘルちゃんに苦笑してから、私はマスコットキャラ達の方を向く。

「えっと、通らせてくれないかな?」

「ぐまー」

「ぐまー」

テーマパークへの道が何処かの海のように割れて出来る。

内心、おお…と感動しながら、私は近くに居たマスコットキャラの頭を撫でる。少しだけざらついた布の感触が心地いい。

「ありがとう!」

「ぐまー! ま〜 めままー!」

「ぐまま めままままー!」

「ま〜 めまま まっ。」

「えっと…ま、?」

そう一言だけ漏らしてみると、全員がこつちを向いて真顔になる。

まるで私が間違った事を言ったように。そして全員が同時に口を開いて、声を出す。

「ぐげ」

そしてマスコットキャラが全て、まるで糸が切れた人形のように地に伏せていく。

バタバタと音を立てて。まるで、

「死体みたい」

「ッ、」

「早く行こっか。助けたいんでしょ？御影夕を」

そう言っただけ彼女は私の脇を通り過ぎてテーマパークへと入園する。

私は少しだけ下唇を噛んで、踵を返し、テーマパークへと向かった。

残念、と言えることなのか、テーマパークは私を歓迎してくれてる
ようで、入園料という物は無かった。

代わりに、先ほどの恐らくクマであろうマスコットキャラの丸みを
帯びた耳の付いた緑色の帽子を被ることを義務付けられた。

「似合ってるよ」

「それはソレで、少し複雑なんだけど…」

先ほどの惨状を見たあとだと尚更だ。

ともあれ、相変わらず軽快の音楽を何処からともなく垂れ流されて
るココに彼は居るらしい。いるのだろうか……。

「いるよ、絶対にココにいる」

「……どうしてわかるの？」

「うーん、ある意味、ワタシの中って言ってもいいからかな。アレとワ
タシの丁度狭間にあるんだよ。ココは」

「なるほど……」

さっぱり分からない。魔法、という現象に関しては童話や架空小説
の中だけだと思っていた私だ。理解する、というのも少し無理があ
る。

どうせ、意味がわかったところで、彼を助ける事が出来ないと思う
…ので、少し保留。

「どこに居るかとかは……」

「それは分からないかな……居るにはいるんだけど、という感じ」

「そっか……」

遠くから見て、結構広いこの中から、人を一人探す。考えるだけで

億劫になつてきたけれど、ソレでもしなくてはいけない。

「おや、お嬢さん。もしや、ココは始めてですか？」

「え……………」

「ふむ、はじめまして。お嬢さん。ワタクシ、このテーマパークを案内しております、ケウド、と申します」

ケウド、と名乗った男はシルクハットを脱いで、仰々しく頭を下げた。片手にはステッキ、そして今外したばかりのシルクハット。胸には蝶ネクタイ。真っ赤な丸い鼻が特徴的な長身の男。直視出来ない。何故か？彼を見れば肌色が見えるからだ。

「ケウド、服を忘れてるよ？」

「おっと失礼、お嬢様。紳士として出迎えた故、ご容赦を」

どこが紳士だ。と声を上げて言いたい。いつその事、彼のステッキを拝借してゴルフクラブの様に彼をヤード単位で飛ばしてはどうだろうか？きつと真っ赤な軌跡で五十ヤード程飛ばすことが出来るだろう。

どこからともなく取り出した黒いタキシードを着た彼をようやく直視出来た。上半身だけ、しか直視出来ないのが残念だ。

「あの……………下は……………」

「お嬢さん……………あなたは、ワタクシに死ぬ、とおっしゃるのですか？」

そこまで重要なのか…いや、きつと彼には重要なのだろう。きつと、こう、下半身を隠すところの世界では生きれない、とかそう言う問題に決まっている。私の帽子と一緒に。きつとそうだ。そうだと信じた。もう他の理由なんてイラナイ。

私が彼の下半身を見なければいい話だ。そうだ、そうに違いない。「下半身裸の紳士に、化け物のワタクシ、そして頭巾の少女だなんて、ドロシーも真っ青な配役ね」

「確かに魔法使いに会いにいくけれど、その表現はやめて」

「なら、豪華客船でも乗るかしら？」

「泥の船に乗るのはちよつと…」

「おや、ワタクシにもわかるようにご説明頂けるとありがたいのですが？」

「寄らないで、変態」

「変態とは失礼な。紳士、と読んでくだされ、お嬢様」

「ズボンを忘れたカカシさんは早くワタクシ達を案内すればいいのよ」
「では臆病な化け物さんの為にご案内いたしましょう」

まるで懲りた様子もなく、ケウドはゆつくりと後ろ歩きを始める。どうやら真面目に案内はしてくれるらしい。そう思っておこう。決して彼自身が前面を見せたいから、という理由で後ろ歩きを開始した、だなんて私にはさっぱり分からない事だ。

「さて、まずはどこから案内いたしましょうか……」

「ゆう君が居る場所は…わかりますか？」

「ふうむ、残念ですな、ドロシー。ワタクシが案内出来るのはこの設備だけでして、彼が今どこで何をしているかはワタクシにはさっぱりわからないのです」

「ドロシーはやめてください」

「では『緑ずきん』いえ、これでは語呂が悪いですね……『クマずきん』でいいでしょうか？」

「……もう何でもいいです」

「では『クマずきん』。ワタクシには設備の案内をお任せ下さい。右手をご覧下さい」

彼の右手が指す方向を見る。

そこには絢爛な建物が有り、まるで何かの売り場の様だ……。

「綺麗……」

そう思わず口に出る程に、綺麗、という単語を押し込めた建物だった。

「そうでしょう。ワタクシ、毎日手の手入れをキチンとしております故」

「……」

台無しだった。

「クマズキン」何を、そんなに怒っているのですか？まるでハートの国のお姫様のようです」

「……」

「ケウド、あなたは自分の説明を一度文面に書いて客観的に見るべきよ」

「ふうむ、参考にさせていただきます」

怒っている、というよりも、疲れた。ただひたすらに、疲れた。

どうしようもなく、設備の説明が長いわけではなく、一切と言っていい程に設備の説明がされていなかったから、非常に疲れたわけだけど。どうして毎回彼の体の説明になるのか。どうして髪の手先から爪先まで自分を褒められるのだろうか。その前向きな感情を少しは分けて欲しい。

いや、彼の変態部分など分けられても私が困る。ゆう君にどう説明すればいいのだ。

「さて、粗方の設備の説明は終わりましたが、何か、ご質問などは？」

「……」

「ワタクシの出自に関しては、残念ながら、トップシークレットというものでして。応える事は出来ません。ええ、誠に残念なことです。ワタクシがこのテーマパークの案内役だと言う事は決して漏らしてはいけない秘密なのです!!ああ、しまった、ワタクシとした事があ!!」

この調子をおおよそ数時間…いや、数時間と感じているだけで、もしかしたら五分と経っていないかもしれない。むしろ、数時間だったら聴けた私を褒めてやりたい。

「じゃあ、質問」

「はい、クマズキン」。なんなりと」

「ゆう君の居る場所は？」

「わかりかねます」

ニッコリ。

ずっとこの調子だ。仕方がない事だろう。彼は助けられたくないのだから、こうして邪魔をしているのだろう……。

手詰まり、というべきか。しかし諦める事は出来ない。はやてちゃんの為……そして何よりも私自身の為に。

そういえば、ココは彼の作り出した世界である。ここまで絢爛な世界を心の中に持っているのに、死にたがる彼。

私は彼の事をまったく理解出来ない。理解……いや、それ以前に彼の事をまったく知らないのかもしれない。

「ケウド……さん」

「ケウド、と敬称はいりませんよ」

「じゃあ、ケウド。ここでゆう君の過去を知りたいんだ」

「彼の、過去……ですか？」

「うん」

「やめといた方がいいよ？」

アンヘルちゃんがひよこりと顔を出して言う。

それは本当にやめて置いた方がいいのだろう。それでも、それも、だ。

「私は、彼を助きたい……でも、彼が助かりたくない理由も知りたい」

「貪欲だなあ……ま、いいけど」

「では、ご案内いたしましょう!!彼の過去へ!!」

ケウドは大きく声を出して両手を広げる。

その瞬間に彼は光、光が止むと、大きな扉が目の前に鎮座していた。

設備の案内をしていた彼が自分の説明しかしていない理由をようやく把握する事が出来た。

彼はずっと設備の説明をしていたのだから、当然の事だった。

「さあ、行こうか。ここからはアナタが見て、感じて、そして、彼を見つけるの」

「アンヘルちゃんは？」

「ワタシ？ワタシはほら、こう、遅れてくるヒーローみたいになりたいんだ。にへへ」

「……わかった」

「はつきり言うど、あんまり見せたくないんだよね」

「それでも……彼を知りたいんだ」

「うん、そっか。まあいいけどさ。精神崩壊とか起こさないようにね？」

そう言って笑う彼女に唾然とする間もなく、私は扉に吸い込まれた。

「はてさて、彼女は知って何を言うか……まあいざとなったら帰らせるべきなんだろうけどさあ……まったく、ままならないなあ。にへへ」

20 大嫌い

目の前には山があった。

ソレは、まるで普通の山ではなくて。何かが腐った匂いを撒き散らし、地面に血を染み込ませて、ソコに積まれていた、ただそれだけの山。

そんな中にボロボロになって、息が浅い子供が横たわっていた。私よりも、幼い、子供なのに。

その子供に対して行われる暴行。

ある者は角材を使い。

ある者はその鍛えられた右足で蹴り上げ。

ある者は子供を人間だった物の山へ投げつけた。

「クソが…ガキがツマンネエ事してんじゃねえよ」

「商品がダメになっちゃったじゃねえか!!」

少年がしたことは、窃盗。

彼を見ている私は、彼が生きる為にした事を理解している。そして、目の前にいる大人達も生きる為に、目の前の少年を殺そうとしている。

「ふむ…アー、いいか？」

突然現れたのは緑の髪を地面スレスレまで伸ばして、煙管を加えた女性だった。

「ツ……なんだよ、エンプテイか。なんか用かよ？」

「オレ達にやらせてくれんのか？」

「おいおい、それならこんな所よりもアツチに行こうぜ」

「ふむ…ソレは面白そうだが、生憎これから予定があつてな」

「ならなんだつてんだ」

「そのガキを貰おうと思つてな」

煙管を口から離してニヤリと嗤う女性、そして女性が笑った途端に男達から笑みが消える。

「アンタ、こいつが何をしたか知ってるんだろ？」

「窃盗、傷害、強盗、別段その程度だろう？」

「ああ、ソレをココで侵したんだ。そういう事だ」

「ふむ……別に窃盗やら傷害程度で何を躍起になってるんだか……私にはサラサラわからんね」

「確かに、ココはハミ出しもの、ソレも最低の中のゴミが集まる世界ではある。だがな、ゴミの中でもルールってのがある」

「ああ、はいはい。わかったわかった。その中にルールを持ってきてやったんだ」

女性はポケットの中からジャラリと鳴る袋を出して男達に放る。

男はソレを掴んで、中を確認してからニヤリと笑って後ろにいた男達に目配せする。

「わかった、仕方ない。あんたがそこまで言うんだ。俺だって男だ。ココは引かせてもらう」

「面倒な男だこと。アツチでは確か少女ばかり狙う、おっと失礼」

「おい、勝手な嘘を言うなよ」

「ああ、失礼。つつい嘘を言ってしまったよ。シカタナイナー」

「チツ……」

舌打ちをして足早に消える男と、その男を追っていく他の男達。

女性は溜息を吐いて、横たわっている子供の髪を掴む。

「ガキ、お前の命はつい先ほど、私に買われた。だから、助けてやろう。お前を利用する為に、助けてやる。だから、お前は私を利用してみる」

「そこまで彼女は言っつて、少年の意識が落ちたことを確認した。確認してから、もう一度溜息を吐いて、頭を搔く。

「はあ、……私とした事が、貯金を叩いて人助けなんざ……まったく、人は変わらんモノだな……畜生め」

散々な事を言いながら、彼を持ち上げて、ユラユラと歩いていった。

「私が、何をしたか？」

「……アンタだって、その、」

「犯罪者、ではあるな」

「……どう考えても、アンタみたいな人間が犯罪を犯すだなんて考えられないんだ」

「ふうむ、ソレは、褒められているのだろうか？」

「たぶん……」

「確かに、いや、微かに、私はいい人ではある。ユウ、お前を買った事からの結果論だ」

場面は飛んで、私の目の前には先ほどの緑髪の女性と少しだけ小奇麗になった少年がいた。

少年は朱色の帯を一本だけ本に接触させて、緑髪の彼女の方に向いていた。

「そう、結果論で語ってしまおうなら、私は犯罪者だ」

「……冤罪、とか？」

「残念、思慮が足らんな、ユウ。私は犯罪者だよ。コレでもな」

「でも町にいる奴らと違うじゃないか」

「当然だろう？ 私とアレらを一緒にするんじゃないよ。コレでもアレらよりは真つ当な人生を送っているつもりだ」

「じゃあ、なんでだよ」

「……まだ難しいかもしれないが、私はいい人ではなくて、人が良かったんだ。ソレも壊滅的にイイらしい」

グシャリと少年の頭を撫でた彼女は少しだけ笑んでいて、少年は鬱陶しそうにその手を払い除けた。

「アレか、革命か何かしたのか？」

「ほう、中々に鋭いな。今日の晩飯は鍋にしよう」

「残念。作るのはボクなんだ」

「鍋だろ？ 鍋だよな？ 鍋って言ってくれよ、嘘でもいい。いや、嘘は吐くな」

「忙しいな」

「忙しいさ。さて、その本の解析は終わったな？ 次の本を渡そう」

「ワイ、休憩モナインダー、ヤッター」

「ふうむ、では多重解析というか」

「神様!! ああ!! 神様お願いします!! 俺に、俺に大切なモノを守れるだけの、大切なモノを守る事の出来る力を!! いま、今すぐにください!!」
彼は剣が迫っている事も理解して、また絶叫する。

ソレは、一つの願い事。何でも無い、今もまだ剣に貫かれ、斧により断絶され、槍によって抉られた目の前の大切な人を守りたいという、ただそれだけの願い。

そして、彼の左手が輝き、赤い何かが宿った。

それは、綺麗な石だった。が、瞬きをすれば、赤黒いナニかに視界は覆い尽くされて、全てを飲み込んでいく。

ー×ね!!

ー×ね!!

ー×してやる!!

ー×してやる!!

幾つもの声が頭に直接殴りかかってくるように響き、思わず耳を塞ぎたくなる。

ソレが、四つだったものが八つに、八つから十六に、そして気がつけば、どこからでも聞こえるようになった。

「……………」

いつしか、声は止んで、視界に曇った空が見えた。

少年は、一人だった。確かに抱いていた筈の女性も居らず、家に居たはずなのに、彼は地面にチョココンと座っていた。

「なんで……なんでだよ!! なんで、どうしてなんだよ!!」

ようやく声を出した少年は地面を何度も殴って、拳を土で汚す。土も彼の血液によって汚れていく。

ー助ける方法は!?

ー全てを思い出せ

ー人体蘇生の方法は!?

―プランA、失敗

―B、失敗

―失敗

―失敗

―失敗!!

「クソ：クソ、クソ、クソが!!」

また声が響いて来て、彼の考えを否定する。

守れないと思っってしまった彼女を蘇生しようと、彼はずっと考えている。考えて、考えて、考えて、失敗する。それでも彼は何度も何度も思考して、そして無理だと悟らずに、また失敗し続ける。

「これに、コレに全部入ってるんだろ!!俺が望んだモノは!!全部!!」

―左手の石を解析

「ぐ、うえおお……」

彼は吐いた。今まで食べていた何かを全部地面に吐いて、胃の中が空っぽになっただけでも、吐くことをやめなかった。

「殺した…俺が、俺が…俺が全部、!!」

ようやく彼が視界を上げた時に、見えた物は、何も無かった。

家も、人も、犬も、猫も、木も、草でさえも、一切が目の前にはなかった。

「……ああ、ああ、ああああああ!!」

また彼は絶叫して、受け入れられない絶望を痛みで忘れようとする。

「ああ……俺の中に、俺の中で生かしてやるよ…クソどもめ……そうやって、殺してやるって、ずっと言っただけ。殺した人間の遺志なんざ守ってやるよ」

幾つかの夜を叫びと痛みで越えた彼は呆然と、そう呟いた。

彼は、壊れていて、壊れたまま、受け入れて。

「だがな、全部終わらせてからだ……全部終わって、俺が諦めたら…殺

「されてやるよ」

「そうして彼は彼女を貫いていた剣を掴む。

― 解析開始

― 魔力反応

― 転移ルート解析

― 解析完了

「さあ、誰かの復讐をしよう。終わったら、みんなの復讐を受けてやるよ」

「人の記憶を見るなんて、関心しないな」

「ビクリと肩を震わせて反応してしまった」

「声の方を見れば、緑髪を地面スレスレまで垂らした女性が煙管を吹かしながら歩いている。」

「あ、アナタは…」

「ふうむ…私、という存在は消えている訳だ。まあ遺ってしまったているが、正しく私、という訳ではない。アレだ、遺志AでもBでもCでもXでも構わないさ」

「……」

「アレは随分と好かれてるようだ……まあ嬉しいという気持ちと残念、という気持ちで半々、いや一対九辺りか」

「残念…なんですね」

「あんな愚か者を好いている時点で残念だろう？」

「そうかも…しれません」

「まあ愚か者だ。自分で勝手に遺志を人格化させて、私も、アイツも、ドイツもコイツも作りやがって。挙句の果てに『俺が死ねばいい？』だとか」

「遺志Aさんが溜め息を吐く。」

「吐いた事で、煙がフワリと上がっていく。」

「まあ、人のいい愚か者だ」

「人が良すぎますよ」

「ふうむ……誰に似たんだか」

きつと、今日の前で少しだけ嬉しそうに笑っているアナタに似たんだろう。

少しだけ、本当に、少しだけ彼の事がわかったかもしれない。

一番許せないのは、彼自身なんだろう。

自分の事を許すことが出来ない彼は、どうしようもなく、でもそれだから、彼は自分以外を助ける事が大切で。

大切なモノを守りたくて。自分は大切なんかじゃなくて。でも彼女の事は大切だから遺志をずっと守って。

ふと、お姉ちゃんか、私達と似ている。と言っていたのを思い出した。

自分が嫌いで、誰かに認めて欲しくて。でもそれは絶対に無理で、だから意地を張って。

「なんだ……一緒なんだね」

そうして、私の目の前には緑色の彼女は消えていて、扉が一つだけあった。

入ってきた時の扉と一緒に。

ドアノブを掴み、捻れば簡単に開く扉。

目の前には真っ白い空間。

そして、まるで落書きの様な黒い模様。

その黒い模様を辿れば、黒い髪の彼がいて、まだ地面を見ながらペンを握っていた。

「こんにちは、ゆう君」

「……ああ、こんにちは、すずか」

彼はこっちを向いて、一言だけ挨拶をしてまた床に目を向け始めた。

「俺を殺しに来てくれたのか？」

「残念、その逆なんだ」

「そうかい。ソレは残念だ」

ゆう君は溜め息を吐いて、書いていた文字を睨みつけてペンを横に

振る。どうやらまた失敗した様だ。

「何度となく、幾度も、幾千も、数えることも億劫になってしまっただ、計算した……計算して、計算して、計算して……でも結局答えはずっと遠いままだ」

「……」

「彼女は誰が殺した？殺したのは誰だ？あの時に俺が彼女を守れていたら？あの剣群から守っていたら？」

「違う、違うよゆう君」

「違わないさ。剣群が降ってきたのは過程でしかない。俺はその力があつた筈なのに、彼女を守れなかった。」

彼女を殺したのは、俺だろう」

どうしようもなく、お人好しな彼だから、壊れてしまった。全部自分だけで背負って、そのまま償いもせずに、自分を許せないから。

「クソ共の命を喰らった俺が生きていて、彼女を殺した俺が生きていて、あいつらも、彼女も、この世界にはいない……誰が悪い？殺したのは？剣群を降らした人間か？否だ。否、断じて否。守れた筈なのにソレをしなかった、俺が悪い」

「もう、やめようよ」

「やめる？何をだよ。もう遅いさ」

「遅くないよ……」

「彼女を殺した時点で遅いんだよ!!」

ゆう君は今まで見せる事のなかった顔で叫ぶ。泣きそうな顔で、怒った顔で、不安な顔で。

「お前にも言っただろう!?親の仇だ!!許せる訳が無い!!」

「……」

「お兄ちゃん、そろそろいいでしょ?」

「アンヘルちゃん……」

突然私の後ろから出てきた白い彼女の方を向く。

どうせ、そろそろ来ると思っていた。そうに決まっている。次の言葉も予想できる。

「すずか、お兄ちゃんはもうダメみたい……元々壊れてたから」

「壊れてた!? 違うね!! 今から壊すんだ!!」

「だから、せめてアナタの手で……壊して上げて? 帰りはワタシがちゃんと頑張るから」

白い彼女がそう言つて、踵を鳴らす。その音に反応した様に白い床から赤黒い剣が生えてきた。

「ゆう君は……」

「コレを壊したところで彼は二つも三つも生まれるよ、どうせ、もうダメなんだし」

「これで、彼を壊せば……ゆう君は助かるの?」

「助かる……と思う。半々といったところかな」

「そっか……」

この剣を握れば、きっと私は目の前の彼を壊す選択肢しなくなる。

やっぱり、違和感が拭えない。もちろん、ソレは彼を壊すという行為ではなくて、別の事に違和感をずっと感じていた。

「ねえ、ゆう君」

「なんだよ!! 壊すんだろ!? さっさと壊せよ!! ソレが俺の望みでもあるんだぞ!!」

「私がここに来る事は予想外の出来事だったんだよね?」

「……そうだよ、高町さんがお前を連れて来るなんて思ってもなかったさ」

「そう、全部予想外の事から出来上がってる事なんだ。私も色々驚く事ばかりだもん」

「…テーマパークはお前を追い返す為のモノなんだけどな」

「ソレはそれ程驚いてないよ。だって、ゆう君が私達に甘い事は知ってるし」

「耳が痛い」

「それ以上に驚いた事があるんだ」

「俺の過去だろ。あんな事をして、あんな世界で生きて」

「でも、私はそれでもいいよ。私も一緒に背負う、なんて言ってもゆう

君は譲ってくれないからのも知ってるよ」

「なら、」

「支える事もしちゃいけないのかな？」

「……はあ、降参、降参だよ。すずか」

彼は両手を上げて溜め息を吐く。

当然の様にあっさり、彼は負けを認めた。ソレも、当然の事である。

「もう大丈夫みたいだね、さあすずか。ワタシが道を開くから」

「ゆう君は？」

「俺は後で行くさ」

「……私の勝ちはゆう君を説得する事」

「だから勝つただろ？」

「ねえゆう君。私はゆう君を負かしたい訳じゃないんだよ？助けたいの」

「だからお前が戻ったら、」

「嘘」

私は彼の言葉を遮って口を開いた。

だって、この世界は最初から嘘ばかり並べられてるんだ。

歓迎されないテーマパークも、全部だ。だって、おかしいじゃない。

「嘘なんかじゃないよ」

「いいよ、もう。よくよく考えたらバカみたいになっちゃった」

「馬鹿って……」

「すずか、どうしたの？帰ろうよ」

「うん、アンヘルちゃん。そう、アンヘルちゃん」

私はアンヘルちゃんの腕を掴む。力いっぱい。

だっておかしいじゃないか。彼女は少し喋っただけだけど、自分の得になる相手には嘘を吐かない。嘘だったとしてもすぐに訂正する筈だ。

だから、私は口に出さなかった。

「ようやく、アンヘルちゃんの考えてた事がわかったよ」

「え？」

「そうだね、私を案内するのは彼の中に入れる事の出来るアンヘルちゃんだけだもんね」

「何を言ってるの?」

「ねえゆう君。アンヘルちゃんの髪色が黒に成ってる事は知らなかったんだね」

「ワタシの元々の髪はこっちなんだよ?」

「うん、後は喋り方かな。アツチだと尊大な喋り方だった」

「元々がこっちなのだ!!」

「助けられないんじゃないかな?」

「助けられる様になったのだ!!」

「ずっと、ずっと守ってくれてたんだよね?ありがとう、ゆう君」

後ろに居た彼がガラスの様に散って、目の前にいた彼女が、彼に変わる。

助けられない彼女の代わりに、私を誘って。でも帰りたいからテキストウにあしらって帰そうとして。何度も諦めさせようと提案して。

こんなに彼は優しい。やっぱり彼は、自分をずっと偽っている。

「……はあ……なんでバレるかなあ」

「だって、ゆう君だもん」

「答えになってないんだけど?あと、抱きつくな」

そんな言葉も無視して彼に抱きつく。精一杯、離さないように。

「ちなみにどこからバレてたんだ?」

「最初に違和感を感じて、ここにアンヘルちゃんが出てきてから」

「はあ……ご慧眼には感服致しました」

「えへへ……」

どうしようもなく、彼はお人好しだ。

だから、バレて尚、私をここから帰そうとする。どうしても私を絶望させて、再起不能にまでする事を彼は辞さないだろう。私がこの場にいる事は彼と一緒に壊れてしまう可能性があるのだから。

「なあ、すずか」

「うん」

「俺さ、お前の事が嫌いだ」

「うん」

ほら、こうやって嘘をつく。

「嫌いだ、大っ嫌いだ」

「うん、うん……」

「……嫌いなんだから……」

抱きついた私は絶対に離さない。だって、離したら彼は何処かに行ってしまふから。

それに、嘘だと知っているから。だって、ここはゆう君の中だから。

「嫌いだ」

—好きだ

「さっさと消えろよ」

—危ないから早く帰ってきてくれ

「ウザいんだよ!!」

—危険なんだよ

彼の言葉と同時に響く声に、彼は気づいてない。

思わずニヤニヤと笑ってしまう。どうしようもなく、彼はお人好しだ。

「頼むから……」

「ゆう君」

「帰ってく、」

「私も、ゆう君が大好きだよ」

「ああ、もう、最悪だ。最高に最悪だ」

ぐしやぐしやと彼は自分の頭を搔いて吐き捨てる。

ちらりと横を見れば、溜め息を吐いて嬉しそうにしている彼が居た。

「まったく、こんな男のどこがいいのかね？」

「えつとね」

「おっと、言ってくれるなよ。恥ずかしい」

「そういうところかな」

「趣味が悪いことで」

「いい趣味なんだけどなあ」

また溜め息を吐かれて、彼はようやく落ち着いたように喋りだす。

「わかってた事なんだよ：アイツらも、あの人も、俺が作ったモノで、
実際のアイツらじゃない事ぐらい」

「うん……」

「許されない、許される事は、俺が死んだとしてもない事だ」

「……」

「……はあ、あのバカに説教した筈なのに、まったく不甲斐ない」

「不甲斐なくても、いいよ」

「まったく、本当に、趣味が悪い」

「そうかな？」

「そうさ……なあ、すすか」

「ん？」

「俺は、生きてていいのかな？」

「生きててほしいな。私は」

「……いつかの勘違いをしそうだ」

「これで勘違いって思うんだったら、相当だね」

「ああ、そうに決まってる」

「ゆう君がいないと、私が暴走した時に困るでしょ？」

「ああ、そっちなんですね。ちよつと落ち込むわ」

「だからさ、ずっと一緒に居てよ」

「……勘違いするぞ？いいのか？」

「いいよ。勘違いじゃないもん」



目が覚めた。

目を開けば少し暗い、という事はある程度時間が経過してしまっただろう。

ふと、アンヘルが握っていた私の手が目に入る。

辿っていけば、彼女ではなくなつた、彼が目の前にいる。

どうしようもなく、お人好しの、大好きな人。

自分の事を許せなくて、全部背負い込んだ人。

「……」

「……」

「……」

「……アー、そこまで見られてると、目が覚ましにくいんだけど？」

「えへへ、何なら眠り姫を起こすためにキスでもしようか？」

「結構、既に起きてるし、生憎性別は男でな」

「それは、残念」

「……」

「……ふふ」

「……ヒヒ」

少しの間があつて二人で笑つてしまう。

相変わらずのやり取り、変わらないやり取り。

「ねえ、ゆう君」

「ん？」

「大好き」

「生憎ながら、と言っておくよ」

「言ってくれないの？」

「さて、もう一眠りといきますか」

「えー」

彼はグルリと私に背中を向けて顔を向けてはくれない。

でも、残念ながら真つ赤な耳が見えてしまつてるので、台無しだ。

そんな彼がどうしようもなく可愛くて、思わず抱きついてしまう。

「……ああ、そういえばさ」

「どうしたの？」

「なんですかはアナグマ帽子をしてたんだ？」

「さあもう一眠りしようかな」

顔を隠すために、私は彼の背中に顔を埋めて眠ることにした。いや、うん、忘れた。彼の中の事なんて全部、今、忘れました。

「……ありがとう、なんてガラじゃないか」

そんな彼の一言は、私の耳にしつかりと入ってきた。うん、これだけ覚えておこう、そうしよう。

21 許された言葉はイエスカハイ

「ごめんなさい!!」

「悪かった…!!」

目の前で栗色の頭が下げられる。その隣で銀色の頭も下がっている。

なんとなく内容も分かることなのだけど、こちらとしては溜め息しか出てこない。

「一体、何を謝られてるのかさっぱりな訳だ」

「その…迷惑、と言いますか…我が身を振り返って散々な事をしていたと思ひまして…」

「で…」

「許してもらえとは思ってないの。コレが自己満足だって事もわかってるの」

「ん、ならいいさ」

「でも、ソレでも謝ら…え？」

どうしてか、許した筈なのにキョトンとした顔をしている高町さんを見て、もう一度溜め息を吐く。

俺の隣に座っているはずかは苦笑してるし、はやて達も先ほどまでのトゲトゲした空気を一変させて溜め息を吐いている。

「前から思ってたんだけど、アンタって本っ当にバカよね」

「バニングスさん。ソレは本人を目の前に言う事か？」

「本人の目の前だから言うのよ」

「自覚している事を言われても、改善出来ない訳だが」

「ど、どうして許してくれるの？」

「どうしても何も、なんで許さない、って結論に至るんだ？」

「だって、私は…御影君を疑って、ライト君が絶対正しいって思ってた」

「今は？」

「…自分で考えて、御影君には謝らないと、って思って」

「ん、ならいいさ。俺はアナタを許しましょう」

「オレも…悪かった」

「ほら、高町さん。コイツが全部悪いんだとさ」

「ち、違うよ!!私、私が自分で考えるのをやめてたから…全部ライト君に任せていたから」

「はいはい、二人とも、それ以上は無限ループになるからやめや」

「はやてが二人の謝り合い、というべきか、誤り合いを止めて溜め息を吐く。」

—どうしようもないな

—まあ皆で止めれば大丈夫だろ

皆?と自分の思考に疑問を感じて思わず苦笑してしまう。

「と、いう事だ。バニングスさん頼んだ」

「なんで私になるのか聞いていいかしら?」

「適材適所って言葉があつてだな」

「臨機応変、という言葉もあるのよ?」

「じゃあ一番接触率の高いフェイトに任せよう」

「フェイト、頑張りなさい」

「ふえ!?なんで私に話が飛んできてるの!?!」

「まあフェイトだからだろうね。頑張ってるね!!」

「アリシア!?!」

「とまあ、こんな感じに高町さんとライトが間違つてたら俺達がフォローするし。迷ってる事があれば相談すればいいさ」

「みんな…ありがとう!!」

花が咲いたように彼女が笑い、思わず「ほう…」と納得というか可愛く思ってしまう。

背中から鋭い痛みさえなければきつと気の利いたジョークでも出たと思うが、残念な事に出たのは痛みからくる涙だけだった。

「あ、あの?…すずかさん?」

「んー?」

「抓るのはやめてください。背中のお肉が引きちぎれてしまいます」

「……じゅるり」

「誰か、誰か助けて!!今すぐにこの子をどうにかして!?!」

「仲がイイ事で」

「バーニング!!止めろよ!!」

「言ったわね、言いやがったわね、その言葉で私を呼びやがりましたわね」

「ひゅいまへんひゅいまへん!ほっへほ、ほっへほひっほらないへ!!」

「おお：伸びる伸びる」

「何それ楽しそう。私も参加する!!」

「ア、アロシアだめダヨー」

「フェイホまへはんはひゅんあー!!」

「ぷっ……あはははははははははは!!御影君、酷い顔してるふふふふふ」

ようやく笑い出した高町さんの御蔭で俺の頬はどうやらまだ顔に付いているようだ。

— 吹っ切れたな

— うんうん、これで懸念は軽くなる

「御影君、ありがとう」

「はてさて、いつかも言っただろう?俺は何もしてないよ。高町さんが勝手に助かっただけさ」

「うん、だから、私も勝手に言う事にするんだ。ありがとうって」

「……そうかい」

どこことなくバツが悪くなり顔を背けてしまった。

— まったく、真っ直ぐなのは元々かよ

— 苦手な人間な事は変わらないな

— ヤメテ!!そんな目で俺を見ないで!!

カット。

「ああ、そうだ。ライト」

「あん?」

「少しだけ話がある」

「なんだよ……」

「……まあ別に聞かれても構わないか」

「なんだよ、勿体ぶって」

「神様への願いは幾つ残ってる?」

「……ツ：そういう事かよ」

「そういう事だ」

「なんの話?」

「男同士の秘密の話。背景にはバラの花でも飾ってくれ」

「ならフェイト、私と話しましょ!百合の花を咲き誇らせましょ!!」

「アリシア、ごめん。さっぱり分からないんだけど」

女性グループが話し込んでるのを確認して、ライトがこっちに顔を寄せてくる。

「なんで知ってるんだよ」

「スマン、お前が壊滅的に察しが悪い事を思い出した」

「ウツセエよ!!」

「耳元で叫ぶな……」

溜め息を吐いてライトを押しつける。

—もう少しだった、ああもう少しだったのに!!

—シヨタでもイケメンだからな!!

—ホモオ

カットカットカット。

「まあ男同士で秘密の話をするから少しここから出るわ」

「夕君、絶対安静ってシヤマルに言われてなかった?」

「治った」

「嘘やる!!ちよい待たんかい!!」

「ほれ、急げや急げ」

ライトの腕を掴んで医務室からダッシュで逃げる事になるとは思わなんだ。

はやてこそ絶対安静の言葉の意味を調べればいいと思う。

「すまん、えっと、どういう事だ?」

「……いいか、三度目だ。こうして態々アースラから離れて監視の目

を掻い潜ったからもう回りくどくなく言ってる。俺も転生者だ」

「……なんだって!？」

「遅えよ!!もう察しが悪いとかそういうことじゃねえぞ!!」

「なんだよ、それならそうと言ってくれれば」

「あのな…言ったところで何か変わるか?お前が」

「……スマン」

「いや、イイ。それこそ過ぎた事だ」

思わず溜め息を吐いてしまう。こういう時に煙管がほしいと思っ
てしまうのは俺の中の彼女が色濃く遺っているからなのだろうか。

—どうでもいいさ

—いやどうでもいいんじゃないか?

はてさて、どうでもいいのだろうか。

「つてか、なんでまたこの荒野なんだよ」

「それは、アレか、アースラから出た理由を言及してるのか、それとも
ココである理由の説明を求めているのか?」

「……」

「アースラから出た理由は俺達の『願う』力が大きすぎるから。誰かに
聞かれるのはよくない。二つ目、墓ぐらい立ててやろうと思ってるな」

「……そうか」

「そうさ」

ようやく合点がいったのか、ライトは荒野に視線を向けて息をゆっ
くり吸い込んで目を閉じる。

そんな様子を少しだけ苦笑して俺もソレに習う。

「……」

「……」

「……許してくれるのか?」

「……さてね、死者の言葉なんて死んでから聞けばいいさ。それまで
は醜く、死から逃げて、捕まったら死者共に自慢してやるさ」

「…強いな、お前は」

「弱いからこそ、強く振舞ってるんだよ」

—エリマキトカゲのようにな!!

カット。アンヘルまで用いて襟を作る気にはならない。

「さて……そろそろか」

「何がだよ」

「ん？俺の計画はまだ終わってないんだよな……残念な事ながら」

「は？」

俺の足元に魔法陣が描かれ、魔力光が俺を縛る。

―簡易バインド

―術式解析

―解析完了

―解除なんてしないけどな

「ユウ・エンプティだな？」

そう声を出したのは、管理局員らしい男。

当然の事ながらさっぱり知らない人物。知りたくもない。

「さてね、どうだろう」

「本部まで来てもらおう」

「お、おい!!待てよ!!コイツが何をしたって言うんだ!?!」

「彼は何もしていないかもしれない。が、彼は何かをするかもしれない

「い

「ッ!?!」

「敢えて理由を言うとするれば、革命家エンプティ。彼女の息子だからだよ」

本当に、何をしたんだか……結局最後まで自分の事を語らないし。公的な書類を漁ったところで一切彼女の記録は残っていなかった。

エンプティ、とはよくいったものだ。

「管理局員共の話に付き合うつもりはねえよ。さっさと連れてってくれ」

「待てよ!!お前は、お前はソレでいいのかよ!!」

「いいも何も、仕方ねえだろ」

「……わかった、オイ!」

男は別の管理局員に声を掛けて転移魔法を起動させるように言う。ライトはコチラを向いて泣きそうな顔をしている。こちらとして

は、悪い気しかしない訳だが。

「さあ行こうか」

「ああ、じゃあな。ライト」

「待てよ、待ってくれよ!!」

そして俺は転移陣の上に乗った。

下から光が溢れて来て俺を本局に転移していく。

「ユウ、ユウウウウウ!!」

そんなアイツの絶叫がフェードアウトして、俺は管理局に捕まる事になる。

数年後。

俺は管理局本部の暗い部屋で一生を迎える事となる。

なんて安っぽい小説の終わりならば、どれほどよかつたのだろうか。俺としては、それでも良かったのだけれど。俺の立ち位置は残念な事にアンヘルがいるべき場所なのだ。

数年どころか、数時間程、俺は暗いどころか、普通に居心地のいい空間のソファで本を読んでいた。

本は日記。届けてくれた人はヤケに護衛を付けた年老いた女性。名前は生憎聞けなかった。いや、聞かなくてもよかつたと言うべきか。

日記の内容は管理局のあり方について長々と書かれている。そして、自分を犠牲にして管理局を正しく導こうとした女性の日記だった。

どうしようもなくお人好しだ。まったく、まるで死にかけの子供を

貯金を叩いて買う程、お人好しだ。

迎えがそろそろ来る頃だろうと、本を閉じて伸びをする。

この部屋に一つしかない扉が開いて、黒髪を振り乱した彼女が息を荒げてコチヲを睨んでいる。

「随分お急ぎじゃないか、プレシア。まるで罪人の処刑を止めたみたい」

「みたい、じゃなくて、そうしたのよ!!」

「それはぐっ苦労さま」

「いい加減にしなさい!!」

「ソレは無理な相談かもしれない」

「ほんと……本当に……」

ツカツカとこつちに歩いてきた彼女は荒かった息をようやく落ち着けて、溜め息を吐いた。

「どこまでがアナタの計画なのよ……」

「実際は捕まったアンヘルの身辺調査が始まって、親を発見。そして連絡される、みたいな予定だったんだけど……いやはや、どうして上手くいかないもんだ」

「なんで、私に押し付けようとするのよ」

「言つたる？^{シグアイ}肢体はやるって」

思わずニヤリと笑ってしまう。

結果的に言えば、死体でもなくなってしまったんだが。それはもうどうしようもない。

「本当に……もう心配させないで」

膝を折り曲げた彼女が俺を抱きしめる。

大事そうに。先程まで自分が想像していたであろう予想を現実から引き離すために。

—おほおほおほお!!

—おっぱいが!!おっぱいが当たってるよオオオ!!

—うひよおほお

カット。コレがなければ最高にいい場面だと言うのに。

「まあ、死体ではないから受け取らなくてもいいさ」

「そうね……そういえばこれで計画は終わったのでしょうか？」

「ああ、これで終わり。本当に終わりさ」

「じゃあ約束してた、私の願いを聞いてくれるわね？」

「……いや、まだ計画は終わってない」

「逃げることは許さない、と言ったはずよ？」

「……無理なものは無理って言うからな」

「大丈夫よ。正式にアナタを私の家族に加えるだけだから」

「……ちよつと、待ってくれ。えつと、は？え？うん、えつと、つまり、ん？」

「どれだけ混乱してるのよ」

「いや、まあ、だって、俺、化け物だし」

「科学者だし、ロストログア持つてるし、ソレがどうしたのよ。知ったことじゃないわ。アナタに許された言葉はイエスカハイよ」

「お兄ちゃん、そろそろ起きないと遅刻するよ」

「……ん、ああ」

金髪の妹が起こしに来てあくびをして眠気を飛ばす。

そういえば昨日は論文を書いている途中で寝てしまったのだったか。

メガネを探し当てて、着用する。

「おはよう、ユウ」

「ああ、おはよう、フェイト。今ならキス付きでも構わんぞ」

「ハイハイ、またすずかに怒られるよ？」

「すまん、言わないでくれ。本気で殴られる」

「だったら早く起きる！」

慌ただしく俺を起こしたフェイトをジツと見ながら思わず苦笑してしまう。

—夢の内容はなんだったか

—とても懐かしい夢だったかもしれない

—はてさて、

「どうしたの？」

フェイトがコチヲを訝しげに見つめている。

—もう少しかがんでくれればいい感じにおっぱいが見えるんだが

—いや、アレだ、俺の視線を下げれば

カット。

「懐かしい夢を見た…と思う」

「懐かしい？」

「ふえいとお……にいさん起こす前に私を起こすとかなかったのお

…」

「あ、ゴメンネ。アリシア」

「おはよう、アリシア」

「おはよお、兄さん」

「論文の進み具合は？」

「おおお……二日、二日待ってくだされえ」

「一日な」

「おおおお、おにい」

「おにい、と呼ばれてもいいかもしれないな」

なんて冗談を言いながら、俺のいつもの朝は変わらずに迎える。

もう少しで、アンヘルの素体を作る事が出来るので、彼女を救うの

も一年以内に出来る事だ。

「次の計画は漏れなく行くぞ、アンヘル。次はちゃんと俺が殺してやるよ」

俺はニヤリと左手に収まる赤い石に笑った。

22 元英雄と元犠牲と元毛布

正義の味方をやめた元英雄

名前：スメラギ皇光

性別：男

容姿：銀髪でオツドアイないケメン

能力：ニコポナデポ

宝具【ゲート・オブ・パビロン王の財宝】

魔導士ランク：SSS

願い：1. 魔導士ランクSSSの実力

2. 第五聖杯戦争時のギルガメッシュが所有する【王の財宝】

3. —————

備考：

自身が殺した人間の事をようやく知ることによって現実を直視できた。

相変わらず、空回りをする事が多いが、後述の親友がソレを窘めたり、咎めたりするので事なきを得ている。

色々と思い悩む事もあり、一切高町なのはには手を出さずにいたが、後述の親友がコッソリと高町なのはを唆して後にJS事件と呼ばれる事件が終了と同時に結婚。ちなみに親友はその後やけに羽振りが良くなったとか。

養子であるヴィヴィオと妻を守る為に忙しくも楽しい毎日を送る事になる。

年に一回程、親友と一緒にとある世界に出向き、ソコで黙祷している。



犠牲になる事をやめた元罪人

名前：ユウ・Eエンブテイ・テスタロッサ

性別：男

容姿：フレームの無いメガネで人間全体の平均の顔

尚、アンヘルとの同化の影響により瞳がやや赤に染まった

能力：アンヘルを使った蒐集

高度多重解析魔法

分割思考（エロ）

分割思考

願い：1. 大切なモノを守りたい

2.

3.

備考：

この物語の犠牲になりそうだった主人公。読者の声により何処かの毛皮が頑張った。

毛嫌いしている管理局に勤めているが、エンプティとしての危険性が無い事を証明し終わったら早々に辞める事を師匠の元上司に伝えられている。

テスタロッツサ家に養子に入ったと同時に名前をエンプティという旧姓を含んだ名前にしたが、地球上、日本の海鳴市に居る時は以前と同じ『御影夕』として学校に通ったりもしている。

尚、残念な事に恋人である月村すずかとは仲睦まじい様子。畜生め。

上記の親友のフォローをして色々と奢らせたりしている張本人。ちなみにちゃんと彼の仕事関係の輪を広げているのでやはりお人好し。

六課設立の一年ほど前に管理局をやめ、孤児院を設立。別世界という事もあり恋人である月村すずかに改めてプロポーズ。簡素なシルバリングを渡し、めでたく結婚。身内だけで祝われる結婚となった。

孤児院を設立したあとも、フリーの傭兵としてちよくちよく管理局に呼び出されたりする。

『チキチキ☆高町なのはの結婚予想レース』を企画して、管理局員の八割程を巻き込む事件を起こした張本人。なお、当事者二人は知らない様子。

自分が得をするように、秘密裏に高町なのはを唆したりした。もち

ろん、得たお金の七割は二人の結婚式資金に宛てがわれた。残りの三割は恋人に徴収され、関係のない貯金は義母に徴収された。尚、終わったあとに真面目な方の妹に叱られた様子。チクったのは陽気な方の妹だとか。ちなみに陽気な妹はチキチキレース参加者。



猫である事をやめた元毛布

名前：猫毛布ネコゲス布

悩み：私に変態と思われる事。その通りなので気にしてはいない。

備考：

この物語の最大の加害者。

シリアスな場面を書いている時にケタケタ笑っている奇特な存在。

コレを書いている時は一人な筈なのに、何故か隣に誰かいるような気がしてならない。フェイトたそだと信じている。

StS編に関しては、一切筆を付ける気は無い、と主張している嘘吐き。